九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— 46 —

甘木市所在宮原遺跡の調査　III
（AII・D地区）

1997

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— 46 —

甘木市所在宮原遺跡の調査　III
（AII・D地区）

1997

福岡県教育委員会

序

福岡県教育委員会は、日本道路公団から委託を受けて、1979(昭和54)年度から九州横断自動車道建設に先立ち、埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

本書は、1981（昭和56）～1983（昭和58）年度に調査を行った甘木市に所在する宮原遺跡の3冊目のものであります。

本遺跡は古墳時代から奈良時代にかけての集落跡で、墨書土器や硯が発見されており、奈良時代以降においては、大宰府や小郡官衙等との関係が深い村落であったと思われます。報告書として十分に満足できるものではありませんが、地域史の研究や文化財愛護思想普及の一助となれば幸甚に存じます。

発掘調査及び整理報告にあたり、御協力いただいた方々や諸機関に深く感謝いたします。

平成9年3月31日

福岡県教育委員会

教育長　**光安　常喜**

例　言

1．本書は、九州横断自動車道建設路線内に位置する遺跡について、福岡県教育委員会が日本道路公団から委託されて発掘調査を実施した甘木市宮原遺跡の3冊目の報告書である。本書には、今回報告するＡII・Ｄ区に甘木市が市道の建設を計画し、その事前調査分も含めた。ＡII市道（161～168号住居）・Ｄ市道（179～184号住居）である。

2．本書は九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告の46冊目にあたる。

3．この報告は、宮原遺跡Ａ地区西半部（ＡII区）・Ｄ区を対象とする。

4．遺構の写真撮影及び実測図の作成は、調査担当者、調査補助員が行った。

5．出土遺物の整理は、福岡県文化課整理指導員岩瀬正信の指導のもとに、九州歴史資料館復元室及び福岡県文化課甘木発掘調査事務所において行った。

6．鉄製品等の保存処理は九州歴史資料館学芸第二課横田義章氏に依頼した。

7．出土遺物の写真撮影は、九州歴史資料館学芸第一課石丸洋氏及び福岡県文化課整理指導員北岡伸一に依頼した。

8．出土遺物の実測は、福岡県甘木事務所の渡辺輝子、高瀬照美、大野愛里、西田美代子、岡泰子、辻啓子、原富子の各氏に、製図は江上佳子氏による。

9．遺構の製図は、一部を執筆者が行ったが、大半は福岡県文化課整理補助員塩足里美氏、及び秋吉邦子、江上佳子氏による。

10．本文及び表の面積は、プラニメーターによる計測値である。計測は井上久美子氏による。

11．表の作成は大野愛里氏による

12．本書の執筆は、伊崎俊秋（第2章第2節－3・4・5、第3節－3・4）・武田光正（第2章第2節－1：169～213号竪穴住居跡）、その他は児玉が分担した。

13．竪穴住居竪穴部の呼称名等は、第201図（257頁）に説明している。

14．報告した出土品は、福岡県文化課甘木事務所において保管している。

15．本書の編集は、伊崎及び武田氏の協力を得て児玉が担当した。

本 文 目 次

第１章　はじめに……1
　第１節　調査の経過……1
　　(1)はじめに……1
　　(2)調査の経過……1
　第２節　位置と環境……2
第２章　調査の内容……5
　第１節　調査の概要……5
　第２節　遺構と遺物……5
　　1　竪穴住居跡……5
　　2　掘立柱建物跡……101
　　3　井　戸……128
　　4　おとし穴……128
　　5　土　坑……130
　　6　方形溝状遺構……141
　　7　溝……142
　　8　土壙墓……143
　第３節　遺物各説……147
　　1　墨書土器……147
　　2　転用硯……147
　　3　刻印土器……149
　　4　焼塩土器……151
　　5　土　錘……153
　　6　瓦……155
　　7　臼　玉……158
　　8　紡錘車……158
　　9　砥　石……159
　　10　石製支脚……159
　　11　鉄製品……162
　第４節　おわりに……166
　　宮原遺跡竪穴住居跡竪穴部及び竪穴住居跡一覧表についての説明
　　……257

図 版 目 次

図版 1　立野・宮原遺跡全体空中写真（北上空から）
図版 2　上：AII区・D区（調査前）空中写真（南上空から）
下：D区（調査後）空中写真（南上空から）
図版 3　上：188～212号竪穴住居跡空中写真（東上空から）
下：188～211号竪穴住居跡空中写真（南上空から）
図版 4　上：AII区市道全景（南西上空から）
中：AII区市道中央部（北東上空から）
下：AII区市道東部（北東上空から）
図版 5　上：113・114号竪穴住居跡床面の遺構出土状態
中：115号竪穴住居跡床面の遺構出土状態
下：114号竪穴住居跡カマド
図版 6　上：117～122号竪穴住居跡床面の遺構出土状態
下：117号竪穴住居跡カマド
図版 7　上：120～122号竪穴住居跡床面の遺構出土状態
下：120～122号竪穴住居跡カマド
図版 8　上：133号竪穴住居跡カマド
下：133号竪穴住居跡カマド（調査後）
図版 9　上：135号竪穴住居跡カマド
下：135号竪穴住居跡粘土及び土器出土状態
図版 10　上：135・136号竪穴住居跡床面の遺構出土状態と24号土坑
中：136号竪穴住居跡床面の遺構出土状態
下：136号竪穴住居跡カマド
図版 11　上：137・138号竪穴住居跡床面の遺構出土状態
下：137・138号竪穴住居跡床面下層遺構検出中の状況
図版 12　上：137・138号竪穴住居跡床面下層の遺構出土状態
下：139～143号竪穴住居跡床面の遺構出土状態
図版 13　上：139～143号竪穴住居跡床面下層の遺構出土状態
中：144～146号竪穴住居跡床面の遺構出土状態
下：144～146号竪穴住居跡床面下層の遺構出土状態
図版 14　上：147号竪穴住居跡床面の遺構出土状態
中：148号竪穴住居跡床面の遺構出土状態

下：149号竪穴住居跡床面の遺構出土状態
図版 15 上：161号竪穴住居跡床面の遺構出土状態
中：161号竪穴住居跡床面下層遺構検出中の状況
下：同上
図版 16 上：161号竪穴住居跡屋内土坑検出状態
中：161号竪穴住居跡屋内土坑
下：162号竪穴住居跡床面の遺構出土状態
図版 17 上：163～168号竪穴住居跡床面の遺構出土状態
下：163～168号竪穴住居跡床面下層の遺構出土状態
図版 18 上：178号竪穴住居跡床面の遺構出土状態と35・36・39～42号土坑
下：179号竪穴住居跡と73号建物
図版 19 上：181・182号竪穴住居跡床面の遺構出土状態と43号土坑
下：181・182号竪穴住居跡床面下層の遺構出土状態
図版 20 上：185号竪穴住居跡床面の遺構出土状態
中：187・191～194号竪穴住居跡床面の遺構出土状態と37号土坑
下：187・191～194号竪穴住居跡床面の遺構出土状態
図版 21 上：190号カマド
中：191号カマド
下：199号カマド
図版 22 上：207号竪穴住居跡床面の遺構出土状態
中：208号竪穴住居跡床面の遺構出土状態
下：209号竪穴住居跡床面の遺構出土状態
図版 23 上：208～212号竪穴住居跡
下：212号竪穴住居跡床面の遺構出土状態
図版 24 上：213号竪穴住居跡床面の遺構出土状態
下：213号竪穴住居跡床面下層の遺構出土状態
図版 25 上：213号竪穴住居跡カマド
下：213号竪穴住居跡カマド
図版 26 上：62～65掘立柱建物跡と123～132号竪穴住居跡
下：68号掘立柱建物跡
図版 27 113～117号竪穴住居跡出土土器
図版 28 115・118・122・128・129・133・135号竪穴住居跡出土土器
図版 29 135～138・144・145号竪穴住居跡出土土器
図版 30 145・148・149・161号竪穴住居跡出土土器

図版 31 161・168・179・187・188・206・207号竪穴住居跡出土土器
図版 32 208・209・212・213号竪穴住居跡出土土器
図版 33 1号井戸出土土器
図版 34 24・27・34・35・40号土坑出土土器
図版 35 37・39・40号土坑出土土器及び墨書土器
図版 36 墨書土器
図版 37 刻印等土器
図版 38 焼塩土器
図版 39 土製品・土錘
図版 40 瓦・臼玉・紡錘車・砥石
図版 41 砥石・石製支脚
図版 42 鉄製品
図版 43 鉄製品

挿 図 目 次

第 1 図 九州横断自動車道路線図 (1/842,000) …… 3
第 2 図 宮原遺跡と周辺遺跡分布図 (1/50,000) …… 4
第 3 図 113・114号竪穴住居跡実測図 (1/60) …… 6
第 4 図 113号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30) …… 7
第 5 図 114号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30) …… 8
第 6 図 115号竪穴住居跡実測図 (1/60) …… 9
第 7 図 115号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30) ……10
第 8 図 116号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……11
第 9 図 116号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30) ……11
第 10 図 117・118号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……12
第 11 図 117号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30) ……13
第 12 図 119号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……14
第 13 図 119号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30) ……15
第 14 図 120～122号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……16
第 15 図 120号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30) ……17
第 16 図 121号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30) ……17

第17図　122号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……18
第18図　123～132号竪穴住居跡実測図（1/60）……折込
第19図　133号竪穴住居跡実測図（1/60）……22
第20図　133号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……23
第21図　134号竪穴住居跡（1/60）・カマド（1/30）実測図……25
第22図　135号竪穴住居跡実測図（1/60）……26
第23図　135号竪穴住居跡カマド・粘土及び土器出土状態実測図（1/30）……27
第24図　136号竪穴住居跡実測図（1/60）……28
第25図　136号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……29
第26図　137号竪穴住居跡実測図（1/60）……30
第27図　138号竪穴住居跡実測図（1/60）……32
第28図　139～143号竪穴住居跡実測図（1/60）……折込
第29図　140号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……33
第30図　144～146号竪穴住居跡実測図（1/60）……35
第31図　147号竪穴住居跡（1/60）・カマド（1/30）実測図……37
第32図　148号竪穴住居跡（1/60）・カマド（1/30）実測図……39
第33図　149号竪穴住居跡（1/60）・カマド（1/30）実測図……40
第34図　150号竪穴住居跡（1/60）・カマド（1/30）実測図……41
第35図　151～155号竪穴住居跡実測図（1/60）……折込
第36図　156・157号竪穴住居跡実測図（1/60）……44
第37図　158号竪穴住居跡実測図（1/60）……45
第38図　159号竪穴住居跡実測図（1/60）……46
第39図　160号竪穴住居跡実測図（1/60）……47
第40図　161号竪穴住居跡（1/60）・屋内土坑A（1/40）実測図……49
第41図　162号竪穴住居跡実測図（1/60）……50
第42図　162号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……51
第43図　163・164号竪穴住居跡実測図（1/60）……52
第44図　165～167号竪穴住居跡実測図（1/60）……53
第45図　165号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……54
第46図　168号竪穴住居跡実測図（1/60）……55
第47図　168号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……56
第48図　169号竪穴住居跡実測図（1/60）……57
第49図　170・171号竪穴住居跡実測図（1/60）……58
第50図　172号竪穴住居跡実測図（1/60）……59

第51図　173号竪穴住居跡実測図（1/60）……60
第52図　174・175号竪穴住居跡実測図（1/60）……62
第53図　176・177号竪穴住居跡実測図（1/60）……63
第54図　178号竪穴住居跡実測図（1/60）……64
第55図　179号竪穴住居跡実測図（1/60）……65
第56図　180号竪穴住居跡実測図（1/60）……65
第57図　181・183号竪穴住居跡実測図（1/60）……67
第58図　182・184号竪穴住居跡実測図（1/60）……68
第59図　182・183号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……69
第60図　185・186号竪穴住居跡実測図（1/60）……71
第61図　187・192～194号竪穴住居跡実測図（1/60）……73
第62図　188・189号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……75
第63図　188・189号竪穴住居跡実測図（1/60）……76
第64図　190・200・201号竪穴住居跡実測図（1/60）……78
第65図　190号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……79
第66図　190号竪穴住居跡内遺物出土状態実測図（1/30）……79
第67図　190号竪穴住居跡中央土坑実測図（1/30）……79
第68図　191・195・196号竪穴住居跡実測図（1/60）……80
第69図　197・198号竪穴住居跡実測図（1/60）……83
第70図　197号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……84
第71図　199号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……85
第72図　199号竪穴住居跡（1/60）・中央土坑（1/30）実測図……86
第73図　201号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……87
第74図　202～205号竪穴住居跡実測図（1/60）……88
第75図　206号竪穴住居跡実測図（1/60）……90
第76図　207号竪穴住居跡（1/60）・カマド（1/30）実測図……91
第77図　208・210号竪穴住居跡実測図（1/60）……92
第78図　208号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……93
第79図　209号竪穴住居跡実測図（1/60）……94
第80図　209号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……95
第81図　210号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……96
第82図　211号竪穴住居跡実測図（1/60）……97
第83図　211号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……97
第84図　212号竪穴住居跡実測図（1/60）……98

第 85 図　212号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……99
第 86 図　213号竪穴住居跡（1/60）・カマド（1/30）実測図……100
第 87 図　60・61号掘立柱建物跡実測図（1/80）……102
第 88 図　62～64号掘立柱建物跡実測図（1/80）……103
第 89 図　65～67・72号掘立柱建物跡実測図（1/80）……105
第 90 図　68号掘立柱建物跡実測図（1/80）……107
第 91 図　69～71号掘立柱建物跡実測図（1/80）……折込
第 92 図　73～76号掘立柱建物跡実測図（1/80）……109
第 93 図　77～79号掘立柱建物跡実測図（1/80）……110
第 94 図　80～82号掘立柱建物跡実測図（1/80）……111
第 95 図　83～85・87号掘立柱建物跡実測図（1/80）……113
第 96 図　86・88号掘立柱建物跡実測図（1/80）……115
第 97 図　89～91号掘立柱建物跡実測図（1/80）……116
第 98 図　92・93号掘立柱建物跡実測図（1/80）……118
第 99 図　94・99 号掘立柱建物跡実測図（1/80）……119
第100図　95～98号掘立柱建物跡実測図（1/80）……折込
第101図　100～102号掘立柱建物跡実測図（1/80）……121
第102図　103号掘立柱建物跡実測図（1/80）……123
第103図　104～106・111号掘立柱建物跡実測図（1/80）……124
第104図　107～109号掘立柱建物跡実測図（1/80）……126
第105図　110号掘立柱建物跡実測図（1/80）……127
第106図　井戸（1/60）・おとし穴（1/40）実測図……129
第107図　23～29号土坑実測図（1/60）……131
第108図　31・34・36・38・39・43号土坑実測図（1/60、34号は1/15）……133
第109図　32・35号土坑実測図（1/120）……135
第110図　30・33・37・40～41号土坑実測図（1/80）……137
第111図　44～47号土坑実測図（1/60）……139
第112図　方形溝状遺構実測図（1/80）……141
第113図　1～3号土壙墓実測図（1/30）……144
第114図　4～7号土壙墓実測図（1/30）……145
第115図　8・9号土壙墓実測図（1/30）……146
第116図　墨書土器実測図（1/3）……148
第117図　転用硯実測図（1/3）……149
第118図　刻印土器等実測図（1/3）……150

第119図　焼塩土器及び土製品実測図（1/3）……152
第120図　土錘実測図（1/3）……154
第121図　瓦実測図①（1/3）……156
第122図　瓦実測図②（1/3）……157
第123図　白玉実測図（2/3）……158
第124図　紡錘車実測図（1/2）……158
第125図　砥石実測図（1/3-1～5・7・9・15、1/4-6・8・10・11・13・14、1/6-12）……160
第126図　石製支脚実測図(1/4)……161
第127図　鉄製品実測図①(1/2)……163
第128図　鉄製品実測図②(1/2)……164
第129図　鉄製品実測図③(1/2)……165
第130図　113・114号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……167
第131図　114・115号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……168
第132図　116～119号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……169
第133図　119～122号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……170
第134図　124号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……171
第135図　125～127号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……172
第136図　128・129号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……173
第137図　130・132、126～130・132 号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……174
第138図　133号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……175
第139図　133～135号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……176
第140図　135号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……177
第141図　135・136号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……178
第142図　137号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……179
第143図　138号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……180
第144図　138～140号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……181
第145図　143・144号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……182
第146図　145号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……183
第147図　144～146・147号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……184
第148図　148・149号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……185
第149図　151・152・154 156・158・161号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……186
第150図　161号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……187
第151図　161号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……188
第152図　161～166号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……189

第153図　165・168号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……190
第154図　168・176・178号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……191
第155図　179・181～183号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……192
第156図　182号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……193
第157図　185号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……194
第158図　187号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……195
第159図　188・189号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……196
第160図　190・191号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……197
第161図　191～194号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……198
第162図　195・197号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……199
第163図　199・201・202・204・206・207号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……200
第164図　207～209号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……201
第165図　209号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……202
第166図　209～211号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……203
第167図　211・212号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)……204
第168図　213号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/4)……205
第169図　213号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/4)……206
第170図　62～65号掘立柱建物跡出土土器実測図(1/4)……207
第171図　69・71・73・75・76・79・83・86・87号掘立柱建物跡出土土器実測図(1/4)……208
第172図　90～93・95～99号掘立柱建物跡出土土器実測図(1/4)……209
第173図　99～103号掘立柱建物跡出土土器実測図(1/4)……210
第174図　103・107・108号掘立柱建物跡出土土器実測図(1/4)……211
第175図　1号井戸出土土器実測図(1/4)……212
第176図　23・24号土坑出土土器実測図(1/4)……213
第177図　25～28・30B号土坑出土土器実測図(1/4)……214
第178図　30B・30A号土坑出土土器実測図(1/4)……215
第179図　30A・31号土坑出土土器実測図(1/4)……216
第180図　31～34号土坑出土土器実測図(1/4)……217
第181図　35号土坑出土土器実測図①(1/4)……218
第182図　35号土坑出土土器実測図②(1/4)……219
第183図　35号土坑出土土器実測図③(1/4)……220
第184図　35号土坑出土土器実測図④(1/4)……221
第185図　35号土坑出土土器実測図⑤(1/4)……222
第186図　35・36号土坑出土土器実測図(1/4)……223

第187図　36号土坑出土土器実測図(1/4) ……224
第188図　37号土坑出土土器実測図①(1/4) ……225
第189図　37号土坑出土土器実測図②(1/4) ……226
第190図　37号土坑出土土器実測図③(1/4) ……227
第191図　37号土坑出土土器実測図④(1/4) ……228
第192図　38・39号土坑出土土器実測図(1/4) ……229
第193図　39・40号土坑出土土器実測図(1/4) ……230
第194図　40号土坑出土土器実測図①(1/4) ……231
第195図　40号土坑出土土器実測図②(1/4) ……232
第196図　40号土坑出土土器実測図③(1/4) ……233
第197図　42～44号土坑出土土器実測図(1/4) ……234
第198図　45号土坑出土土器実測図(1/4) ……235
第199図　1号溝出土土器実測図(1/4) ……236
第200図　1・7・8号溝出土土器実測図(1/4) ……237
第201図　竪穴住居跡竪穴部模式図と各部の名称 ……257

表　目　次

第1表　宮原遺跡出土土器法量表①～㊲ ……238～256
第2表　宮原遺跡竪穴住居跡一覧表……折込

付　図　目　次

付図1　宮原遺跡遺構配置図（上：1/1,250)、立野・宮原遺跡付近路線図（下：1/2,000)
付図2　宮原遺跡AII・D地区遺構全体図（1/200)

第１章　はじめに

第１節　調査の経過

(1)　はじめに

九州横断自動車道の第11地点は、すでに報告済みの立野(たての)遺跡（註１）と宮原(みやばる)遺跡の二つの遺跡が存在し、宮原遺跡はこれまでに２冊の報告書（註２）を刊行している。

両遺跡は間に小規模な谷をはさみ、約100mほどの距離をおいて、東に宮原遺跡が西に立野遺跡が営まれている。ともに、日常の生活遺構が主体を占めるが、立野遺跡の東及び西部分においては方形周溝墓等の埋葬遺構も検出した。日常の生活遺構は、立野遺跡の方が総体的に古い遺構が多く、宮原遺跡の主体は７～８世紀代の遺構である。

今回報告する宮原遺跡は、ＡII地区及びＤ地区の一部である。宮原遺跡は遺跡内を走る農道により、東からＣ・Ｂ・ＡＩ・AII・Ｄ・Ｅ地区に分割し、先述のようにＣ・Ｂ・ＡＩ地区は報告済で、Ｅ地区には遺構は存在しなかった。

また、AII・Ｄ地区では、本線を横切る市道の建設が予定され、その調査結果も掲載している。両地区の遺構は以下のとおりである。

ＡII区市道：179～184号竪穴住居跡、73～84号掘立柱建物跡、43～46号土壙、１号土壙墓

Ｄ区市道：161～168号竪穴住居跡、72号掘立柱建物跡、１・２号おとし穴状遺構

(2)　調査の経過

調査の経過については、註２文献において報告したので、以下簡単に記すことにする。

宮原遺跡の調査は、まずＡＩ地区について1981（昭和56）年５月18日から開始し、立野遺跡及び他の調査区の工事優先順に従って間断的に調査を実施しながら、最終的にはＤ地区が残り、全ての調査が終了したのは、青葉の香る1984（昭和59）年４月30日であった。

11地点の上記２遺跡の調査は約３年にわたって実施し、立野遺跡を先行して報告してきた。調査終了から13年、２冊目の報告書刊行から７年の歳月が経過した。宮原遺跡の報告書はやっと本書で３冊目であり、来年度に残りの遺構について報告する予定である。７年振りに報告するにあたり、平成８年度の関係者を以下に載せておくこととする。

【平成８年度関係者】

福岡県教育委員会

［総　括］	教育長	光安　常喜
	教育次長	松枝　　功
	指導第二部長	竹若　幸二
	指導第二部文化課長	松尾　正俊（前任）
	〃　文化課長	石松　好雄
	指導第二部文化課長補佐	元永　浩士
	〃　文化課長技術補佐	井上　裕弘
	〃　参事兼文化財保護室長	柳田　康雄
	〃　参事補佐兼調査班総括	橋口　達也
［報　告］	〃　文化財保護係参事補佐	児玉　真一
	甘木歴史資料館副館長	伊崎　俊秋
	遠賀町教育委員会社会教育課社会教育係	武田　光正

第２節　位置と環境

宮原（みやばる）遺跡は福岡県甘木（あまぎ）市大字下浦（しもうら）字宮原（みやばる）に所在する主に７～８世紀代の村落遺跡である。眼下には比高差１m程の筑後川にまで広がる広大な平野を有し、後背部には標高130mの城山を頂点とする低台地が控える。

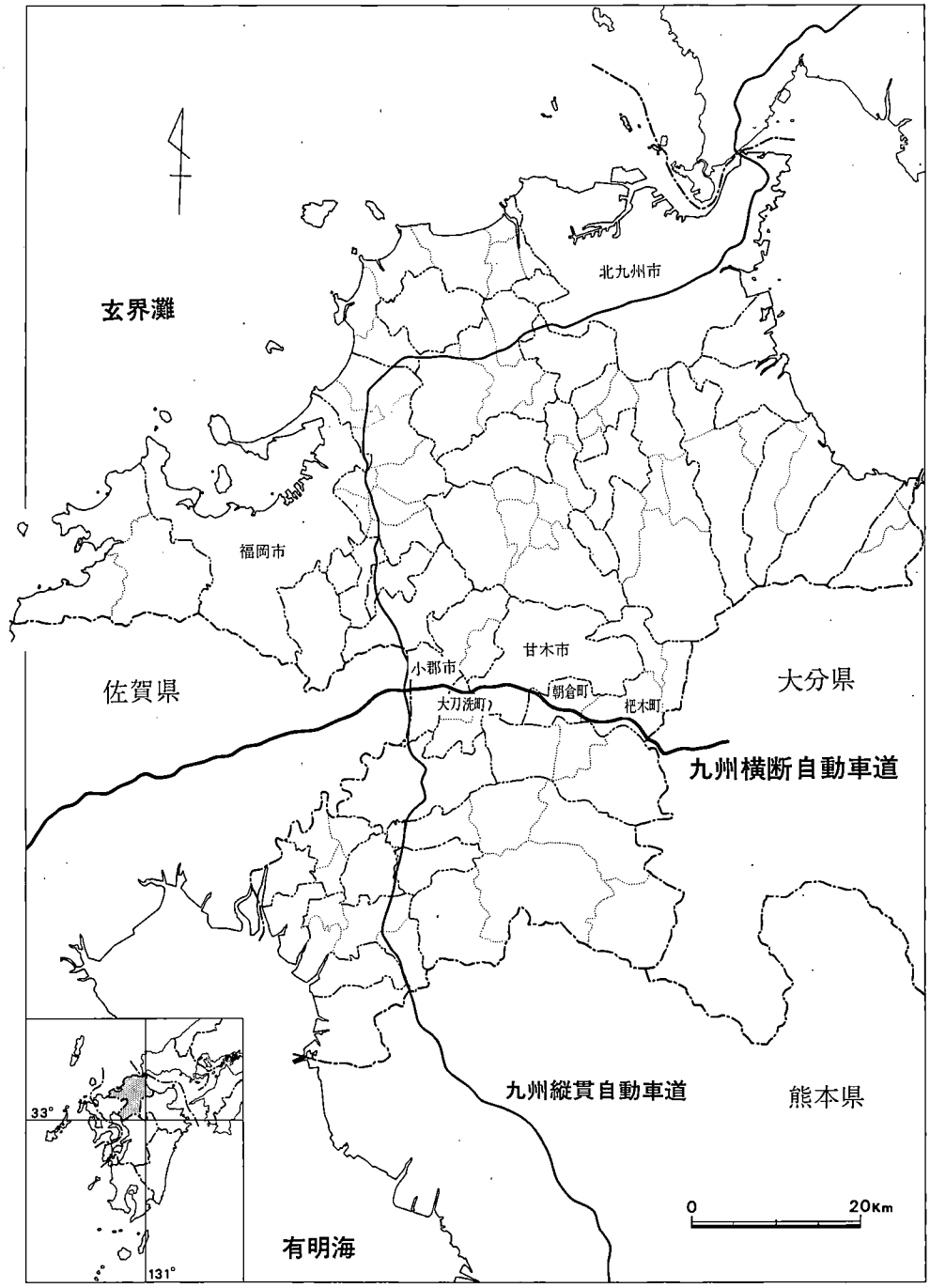
城山周辺は初期須恵器の窯跡が所在し、また、焼ノ峠古墳（前方後方墳）・小隈古墳（前方後円墳）が構築されている。初期須恵器の小隈窯跡の周辺には小規模円墳からなる群集墳が存在する。

宮原遺跡に南接し、内容的に近い関係にある下浦宮原遺跡については、その後、甘木市が調査を行っており、本年度報告される予定である。

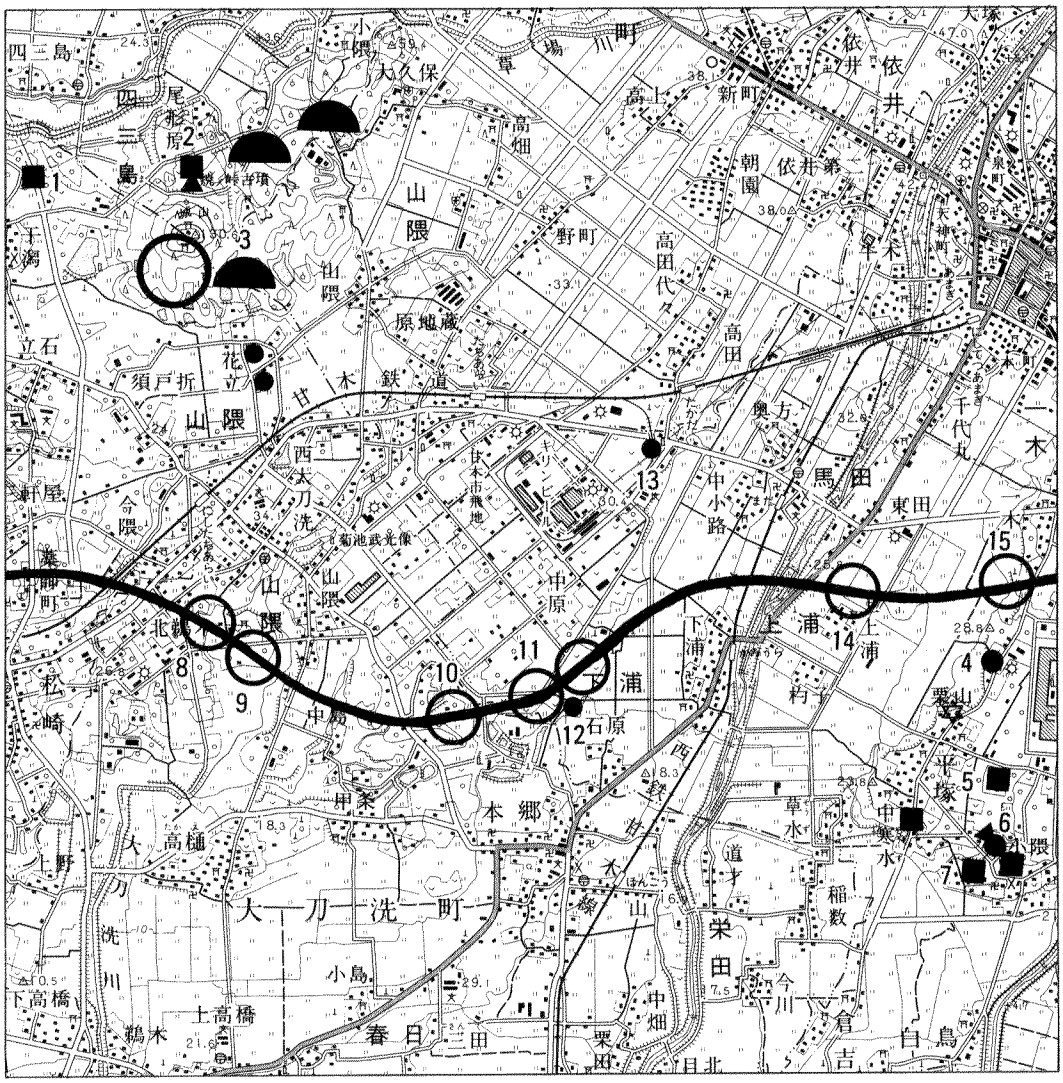
なお、宮原遺跡及び立野遺跡の周辺の関係遺跡については、従前の報告書に依られたい。

註１　福岡県教育委員会　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』　第２・５・８集　1983・1984・1986

２　福岡県教育委員会　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』　第14・17集　1988・1990



第1図　九州横断自動車道路線図（1/842,000）



1．干潟遺跡
2．焼ノ峠古墳
3．花立南麓窯址群
4．大願寺遺跡
5．小田道遺跡
6．神蔵古墳
7．小隈出口遺跡
8．宮巡遺跡
9．春園遺跡
10．10地点
11．(西) 立野遺跡
　(東) 宮原遺跡
12．宮原古墳
13．馬田りんりん石古墳
14．上々浦遺跡
15．下原遺跡

第2図　宮原遺跡と周辺遺跡分布図 (1/50,000)

第２章　調査の内容

第１節　調査の概要

今回報告する宮原遺跡ＡII及びＤ地区の遺構は次のとおりである。なお、遺構番号はさきに報告した宮原ＡＩ・Ｂ及びＣ地区からの続き番号である。

［遺　構］

・竪穴住居跡　　111軒（113～213号）
・掘立柱建物跡　　52棟（60～111号）
・土坑　　25基（23～47号）
・おとし穴　　３基（１～３号）
・井戸　　１基
・溝　　数条（現代溝が多い）
・土壙墓　　９基（１～９号）
・ピット　　多数

［出土品］

須恵器（転用硯・墨書土器を含む。）、土師器（墨書土器・刻印土器を含む。）、焼塩土器、瓦、土製品、石製品、鉄製品等が出土している。遺物の多くは６世紀後半～８世紀代に含まれるが、一部に平安時代のものがある。

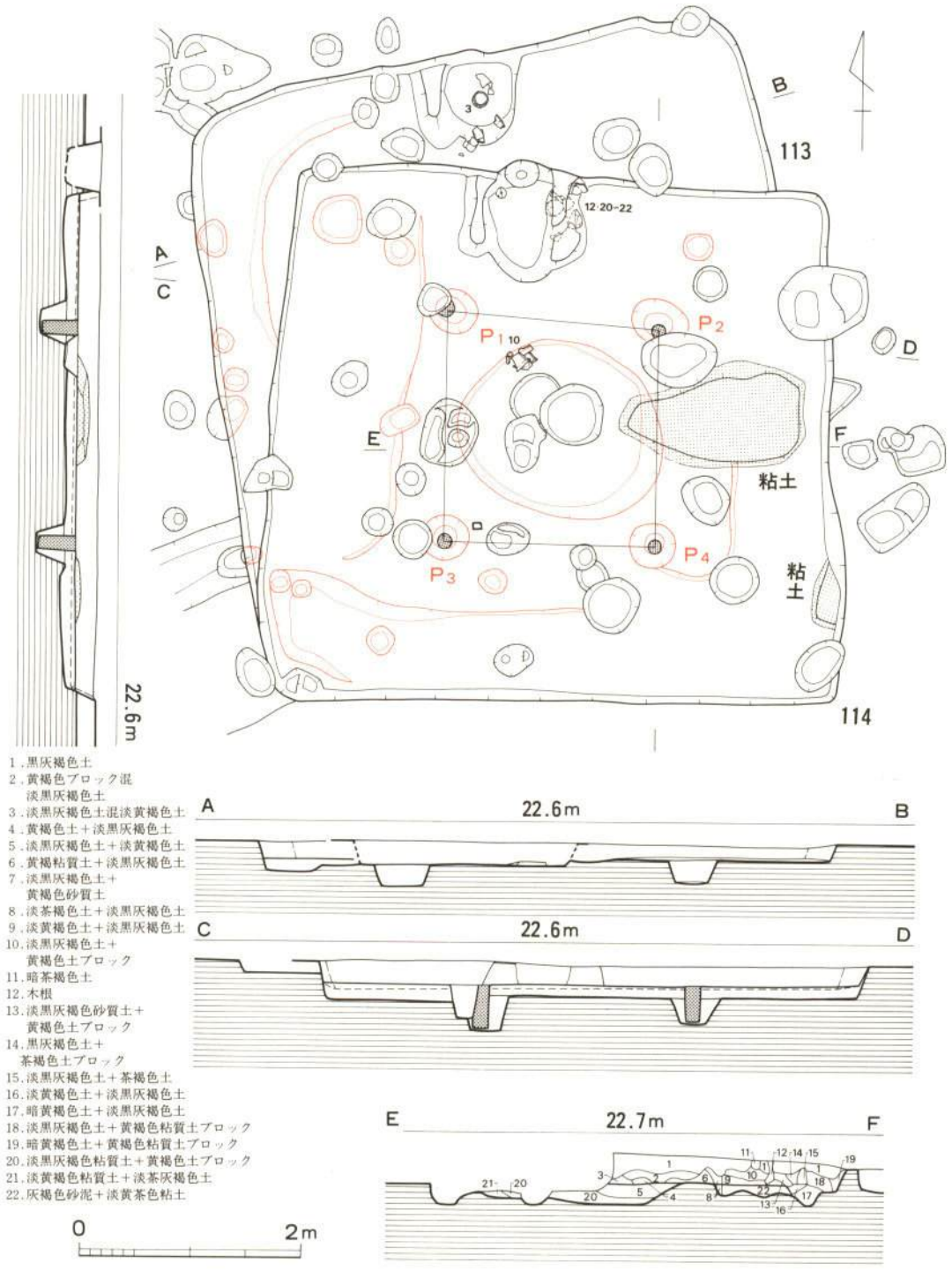
第２節　遺構と遺物

１　竪穴住居跡

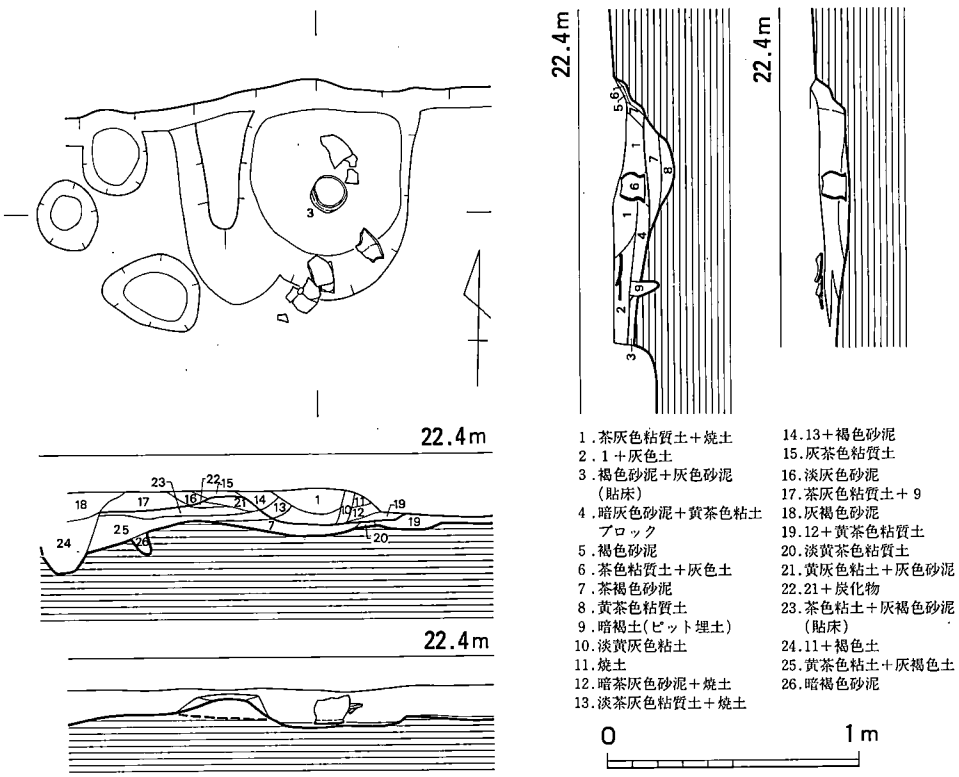
113号竪穴住居跡　（図版３、第３図）

農道下に位置し、113～115号住居の３軒が重複する。114号住居に大きく切られるが、カマドが付設された北壁が残り、西壁の遺存具合から判断して竪穴部の一辺はほぼ５mほどである。壁高は10cmほどが遺存する。主柱穴は、P_1とP_2を検出したが、P_3とP_4は114号住居に削平されたためか検出できなかった。なお、P_1とP_2の心々距離は2.65mである。

貼床面は、ほぼ平坦に造られているが、114号住居に大きく切られているため不明な部分が多く残る。床面下の中央土坑は検出されなかったが、貼床下層の溝状の掘り込みをカマドから西側において部分的に確認した。



第3図　113・114号竪穴住居跡実測図（1/60）



第4図　113号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

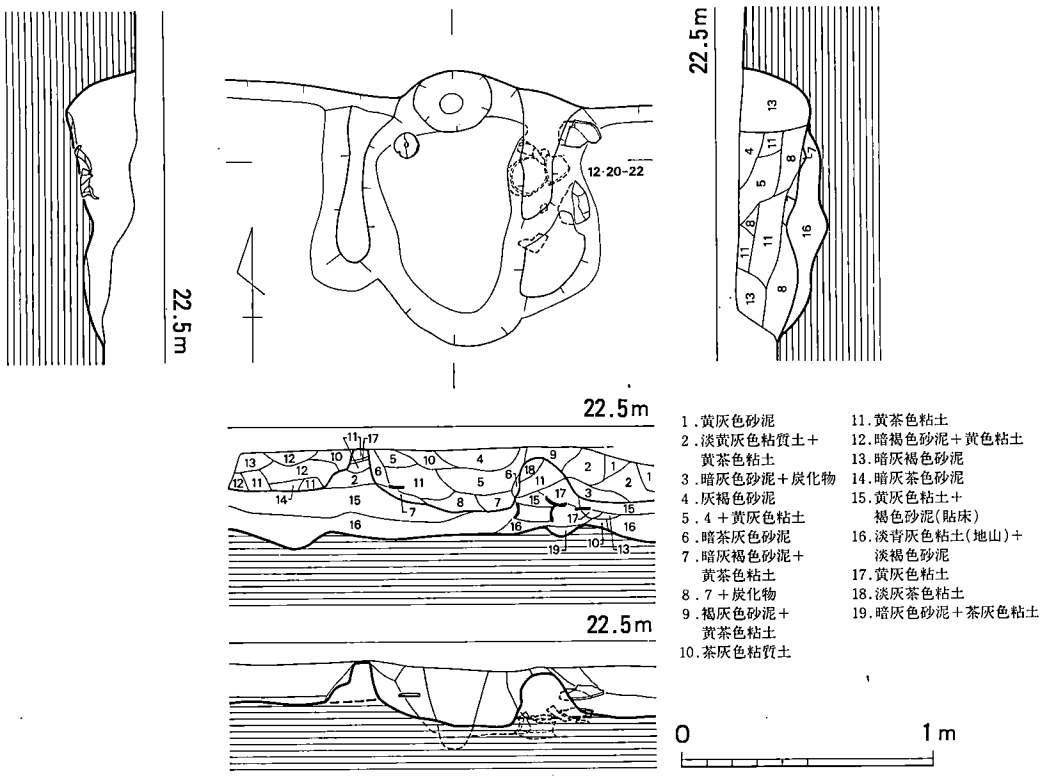
カマド　（第4図）　北壁のほぼ中央に付設されている。削平され、遺存状態が悪く右側袖部は114号住居の煙道部分にあたり確認できなかった。支脚は小型の甕を使用し、火床中央に倒立して設置している。火床面の下は、長軸長50cm、深さ20cmほど掘りくぼめ、土砂を充填した後に粘土を貼って火床としている。

出土遺物　（図版27、第130図）

1・2の高坏はカマド周辺から、4の小型甕は覆土から出土し、3は口径・現存高とも13cmを測るカマドの支脚である。

114号竪穴住居跡　（図版5、第3図）

主軸をほぼ真南北に置く住居で、113・115号住居を切っている。北・南壁長約5m、東・西の壁長約4.6mを測り、東西方向に広い隅円方形を呈する。遺存する壁高は20～25cmほどで、113・115号住居の床面より一段深く掘り込んでいる。貼床面はほぼ平坦で、4本の主柱痕を検出した。貼床直上の二か所で粘土を検出した。ひとつは、東壁寄りのP_2とP_4の間の東西1.7m、南北1mの範囲で厚さ13cm、ふたつめは、東壁南側に東西30cm、南北65cmの範囲で厚さ5cmほどで



第5図　114号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

ある。このように、ある程度まとまった状態で検出した粘土の性格については、①家屋の廃棄直後に住居内に捨てられたのか、②カマドや貼床面の修復等のために屋内に何らかの状態で保管されていたのか、③家屋の構造と何らかの関係があり、家屋の廃棄時に落下あるいは流入したのか、等いくつかの可能性が考えられるが判然としない。191・203号住居等においても貼床直上で粘土が検出されているが、本住居例と同様に判然としないものがある。

貼床面下で、P_1～P_4の主柱穴、中央土坑、掘り込みを検出した。中央土坑は径1.6～1.9mの不正円形で深さは15cmほどである。

カマド　（図版5、第5図）　北壁に、中央より西にずれて付設されている。右袖部内に土師器の甕を検出した。213号住居のカマドでも同様に甕が検出されており、袖部を造る時に芯として使用したものだろう。また、壁際にピットがあり、煙道に付随するものであろうか。

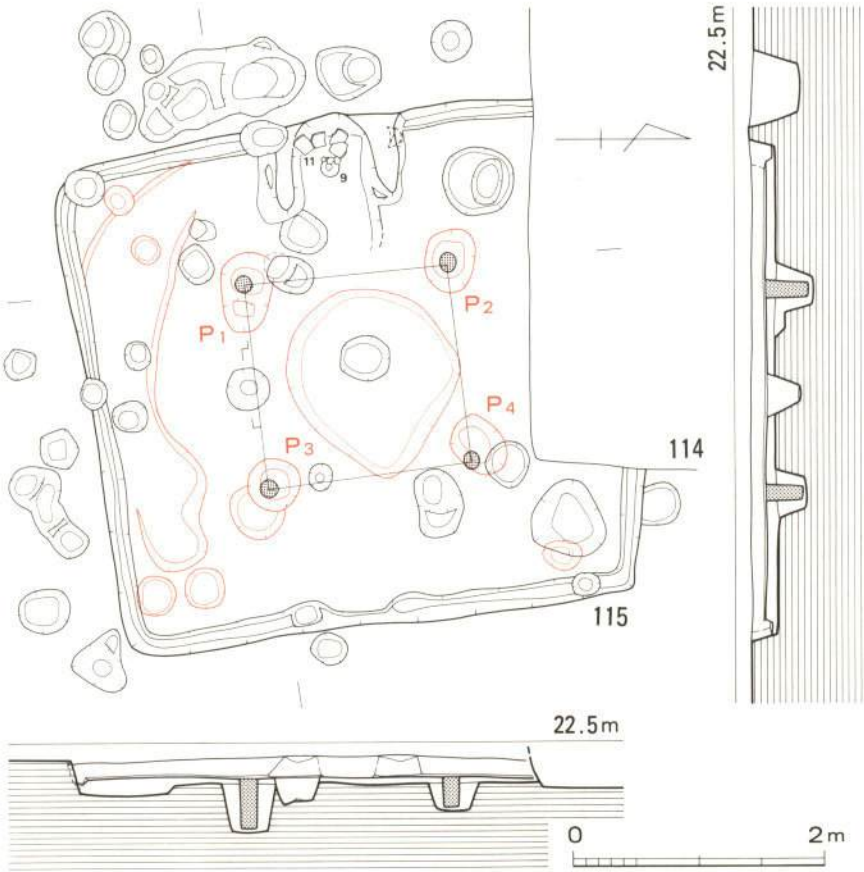
出土遺物　（図版27、第130・131図）

須恵器・土師器のほか、鎌・刀子・鉄鏃の鉄製品が出土している。

出土した土器の器種は、須恵器の坏身、土師器では高坏・甕（大・小）・鉢・甑等バラエティに富む。1・5・6・22がカマド内及び周辺、12・20及び21の破片がカマド右袖内、10・11・

15が貼床面上、21の破片が主柱穴内、４・13・18が貼床下層、そのほかは覆土中から出土した。21甕はカマド右袖内及び主柱穴内出土の破片が接合しており、本住居の上限を示す資料である。

鉄製品　（図版42、第127・128図）刀子の尖先(2)、鎌の破片及び鉄鏃の茎あるいは釘と思われる破片の二点が錆着したもの(40)が、貼床下層から出土した。113・115号住居に伴う可能性がある。

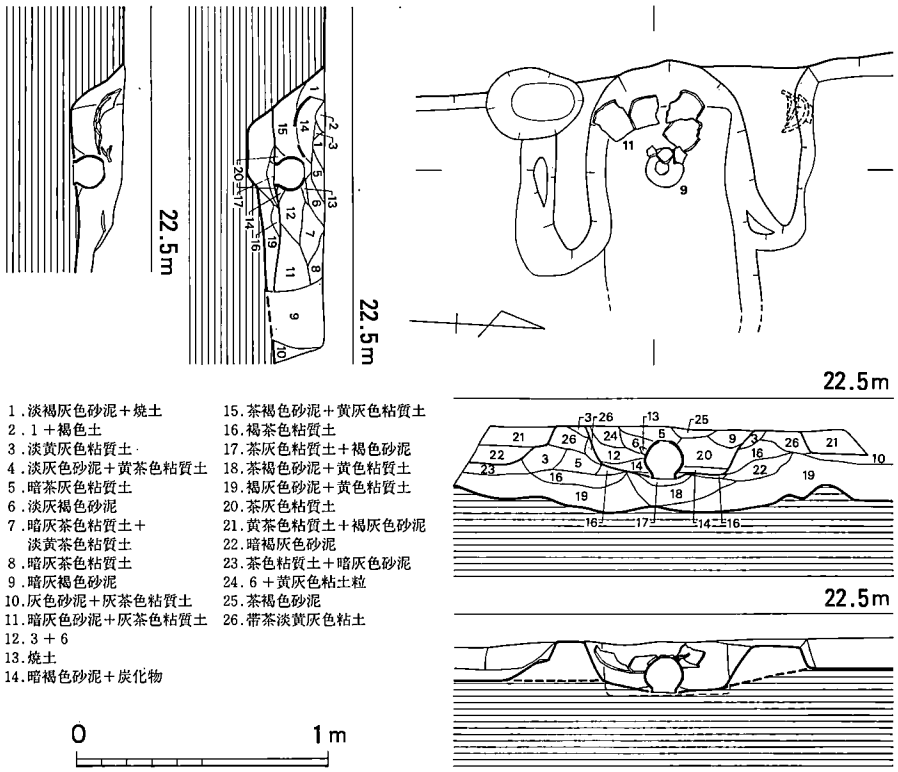


第６図　115号竪穴住居跡実測図（1/60）

115号竪穴住居跡　（図版５、第６図）

北側の一部を114号住居に切られるが、竪穴部の概略を窺い知ることはできる。平面プランはカマドが付設された西壁が長く、その対辺の東壁が短い、南北に幅広な略台形を呈する。113号住居と本住居の竪穴部は切り合い関係にないが、同時併存することはなかろうと思われる。貼床面はほぼ平坦で、床面上に４本の主柱痕を、壁際には壁小溝を検出した。壁小溝はカマドのほぼ正対面で幅を狭めて内側プランは矩形を呈しており、この部分に竪穴部への昇降施設があ

ったのかも知れない。貼床下層で、主柱穴・中央土坑・掘り込み等を検出した。中央土坑は長軸長1.5m、短軸長1.3m強の不正円形で深さは10cm前後である。



第7図　115号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

カマド　（第7図）

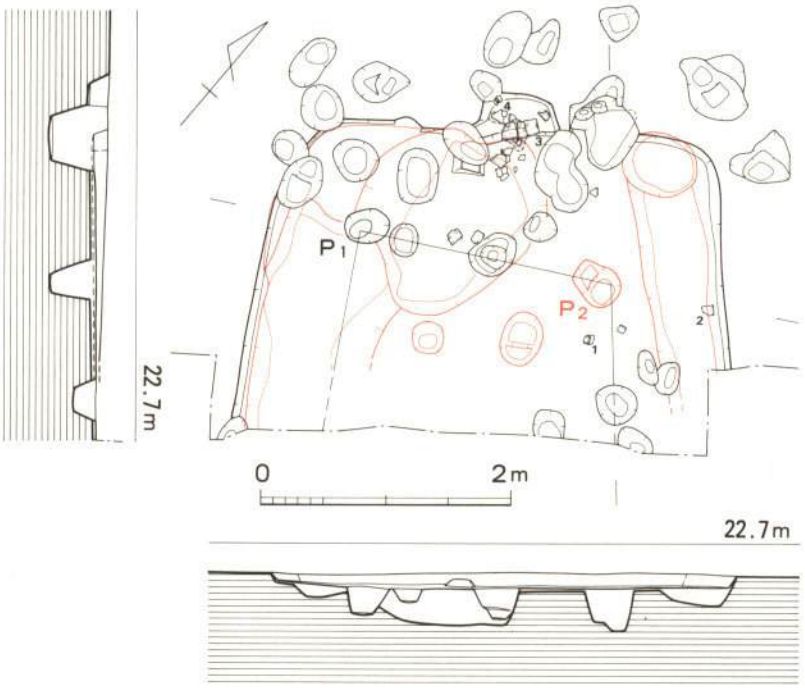
竪穴部全体を復元すれば、西壁中央ではなく、やや南に偏して付設されている。支脚は小型甕(9)を倒立させて用い、火床の中央でなく奥側に設置する。支脚の奥側には甕(11)が破片として検出された。また、右袖内には土師器甕を埋め込み袖部の芯とする。

出土遺物　（図版27、第116・131図）

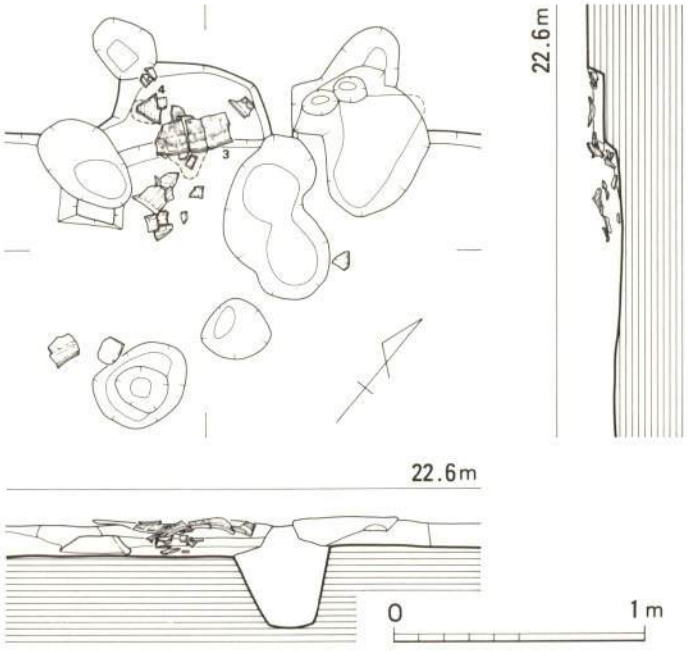
出土品は土器に限られるが、墨書土器が1点出土している。墨書土器以外では、9～11がカマド内（9・10は支脚）、3は床面、2・5が貼床面下層、そのほかの土器は覆土中から出土した。墨書土器（116図－4）は、覆土中からの出土品である。

116号竪穴住居跡　（第8図）

本報告地区の最も東に位置し、ほぼ半分が調査区外に延びる。北西壁長は3.2mで、竪穴部は小型である。壁高は残りの良い北西隅で、高さ16cmである。主柱穴は図示したP_1・P_2でよかろ



第8図　116号竪穴住居跡実測図（1/60）



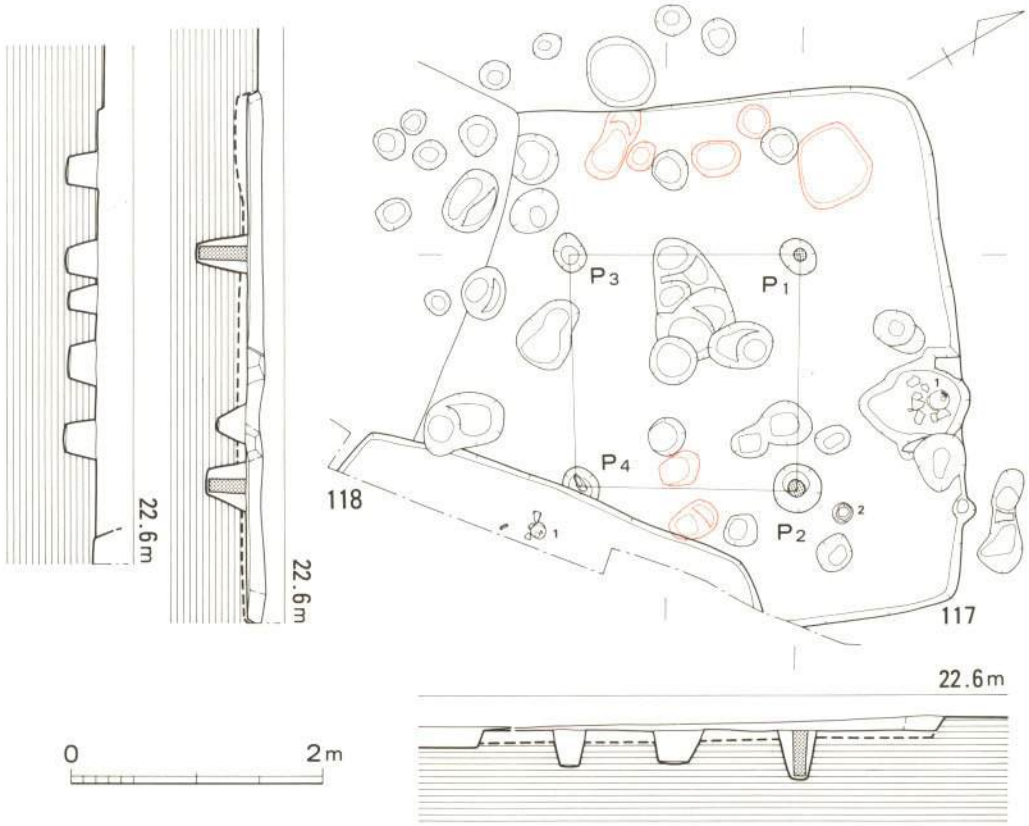
第9図　116号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

うと思う。貼床面がしっかりとしていなかったため、やや掘りすぎた。カマド周辺は後世のピットで大きく攪乱されている。貼床下層に壁隅土坑及び掘り込みを検出した。

カマド　（第９図）　北西壁のほぼ中央に付設され、竪穴部外に50cmほど突出する。袖部は後世のピットで大きく破壊され、左袖部の一部が遺存するに過ぎない。カマド内に甑や甕の破片を検出した。支脚は取りはずされたためか遺存しない。

出土遺物　（図版27、第132図）

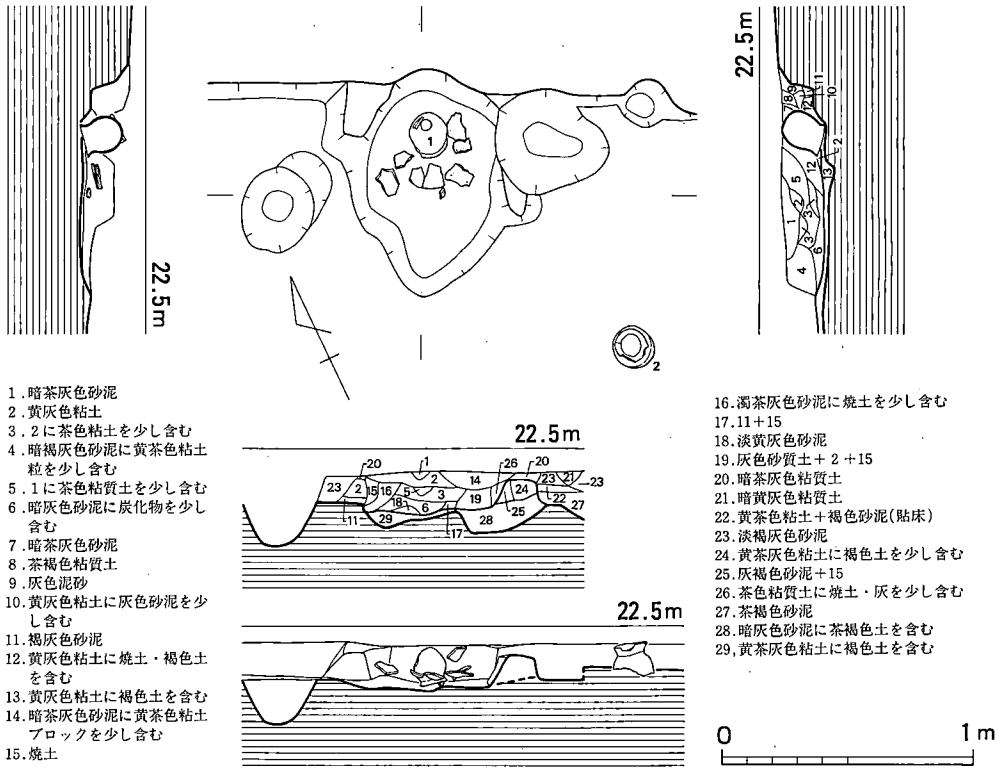
図示できたのは土師器４点である。１・２は床面から、３・４はカマドから出土した。



第10図　117・118号竪穴住居跡実測図（1/60）

117号竪穴住居跡　（図版６、第10図）

116号住居の南西側に位置する。117～122号住居の計６軒が切り合い、切合関係から６軒のうち最も古い。南東壁を118号に、南西壁を119号住居に切られる。プラン的に完存する北東壁は長さ４mを測り、主柱穴配置（P_1～P_4）から判断して、竪穴部は一辺４m強の隅円方形を呈すと考えられる。壁高は残りの良い部分で14cmである。P_4を除いて主柱痕を検出した。



第11図　117号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

カマド　（図版６、第11図）　北東壁の東に偏した部分に付設されている。袖部の遺存状態は良くない。支脚に小型甕を倒立させて用い、火床中央より奥にセットしている。

出土遺物　（図版27、第132図）

１は支脚で、口縁部の半分を欠く。２は胴部下半を欠く小型の甕でカマド右前面の床面に検出した。支脚として使用できる甕である。

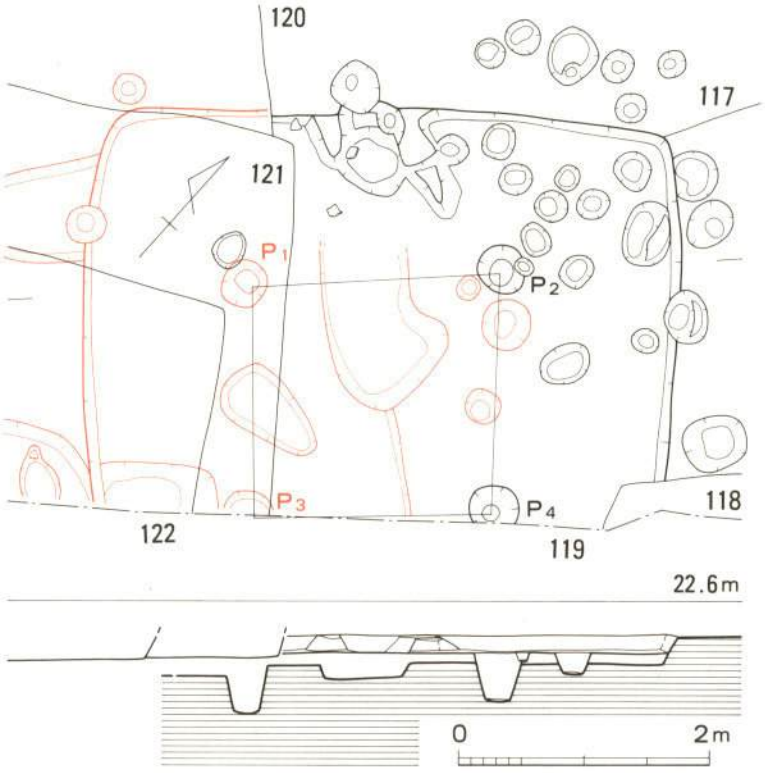
鉄滓　カマド内から１点出土した。軽いものである。

118号竪穴住居跡　（図版６、第10図）

117号住居の南東壁と119号住居の北東壁を切る。竪穴部のほとんどが調査区外に延びる。検出した北西壁の長さは3.3mで、竪穴部は小型である。検出範囲が狭く117号住居との切りあいを適切に把握できずに調査をしたので、カマドの袖部を壊してしまった。調査区を拡張した部分に焼土と倒立した小型の甕を検出した。この部分がカマドであろう。

出土遺物　（図版27、第132図）

１は上述のカマドの支脚である。小型の甕で器高10.5cmを測るにすぎない。



第12図　119号竪穴住居跡実測図（1/60）

119号竪穴住居跡　（図版６、第12図）

南西壁を120～122号住居に、北東壁を118号に住居に切られ、北東の117号住居を切る。西側の壁が120～122号住居の下層に残っており、北西壁の長さは4.4mを測る。残りの良い部分で壁高は13cmである。カマド前面の貼床下層に、浅い落ち込みを検出した。

カマド　（第13図）　北西壁のほぼ中央に付設されている。後世のピットで攪乱されており、少し壊してしまった。カマドは竪穴部から10cmほど突出する。袖部は掘り過ぎたため、本来の形状を図化できなかった。内部及び周辺から、甕の破片が出土した。

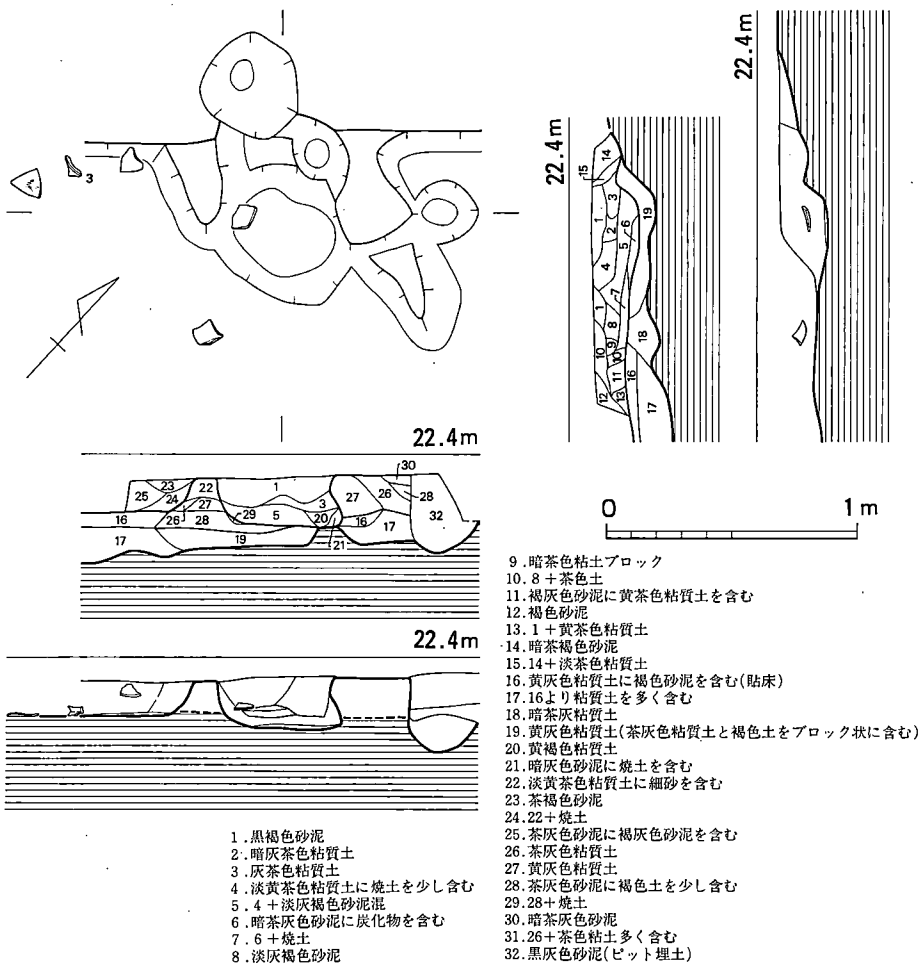
出土遺物　（図版27、第132・133図）

２はカマド内から、３・８はカマド左袖部の左から、７はカマド前面から、４・５は覆土から、その他は貼床下層から出土した。本住居に直接伴うものとは考えられない。

120号竪穴住居跡　（図版７、第14図）

119号住居を切り、南側を121・122号住居に深く切られており、主柱穴のうちP_3・P_4を確認できなかった。幸いに、北西の壁とそれに付設されたカマドだけは遺存していた。北西壁の長さは3.4mで、竪穴部の規模は小型である。壁高は14cmを測り、比較的しっかりと残っている。

床面は貼床がやや不安定ながらもほぼ平坦である。

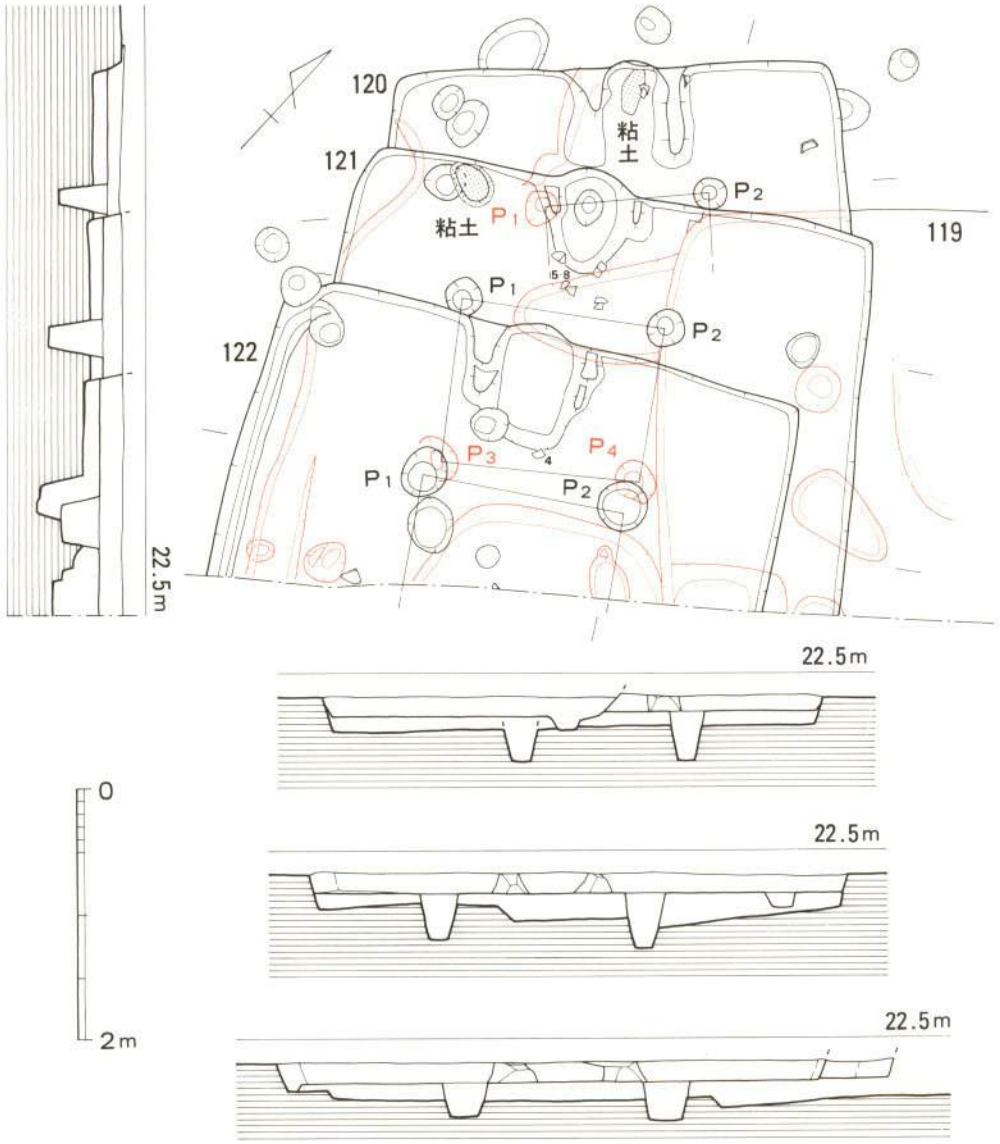


第13図　119号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

カマド　（図版７、第15図）　住居の壁からわずかに突出するカマドである。左袖は土層図でも分かるように、すでに少し壊されていた。火床の奥に粘土が帯状に検出されており、あるいはこの部分に支脚をセットしたと思われる。

出土遺物　（図版27、第133図）

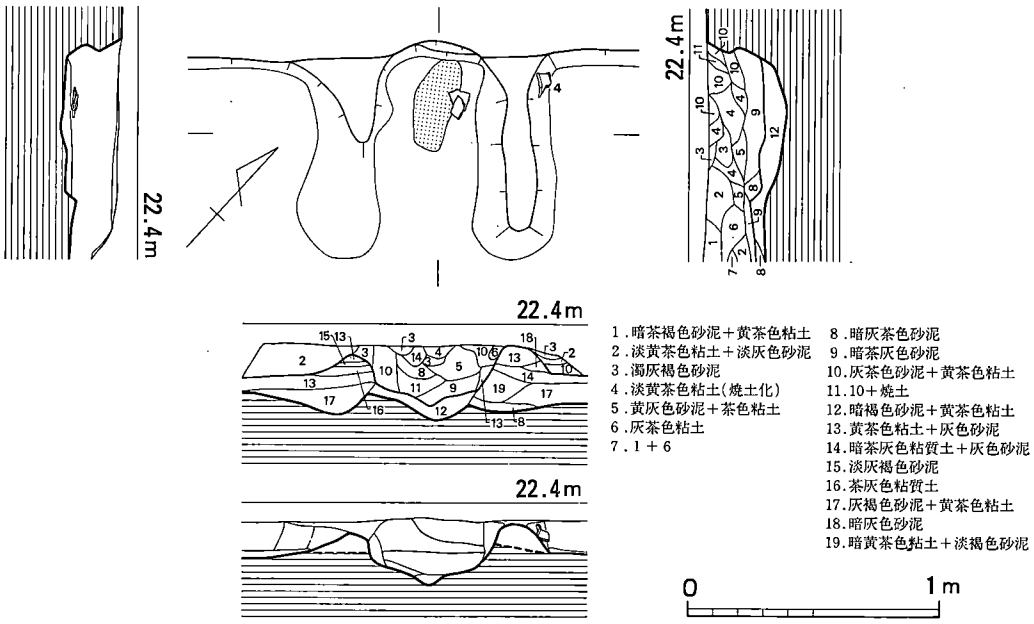
図示できるのは４点で、１～３は覆土中、４は貼床下層から出土した。３・４の壺形土器は本遺跡では比較的出土例が少ない。



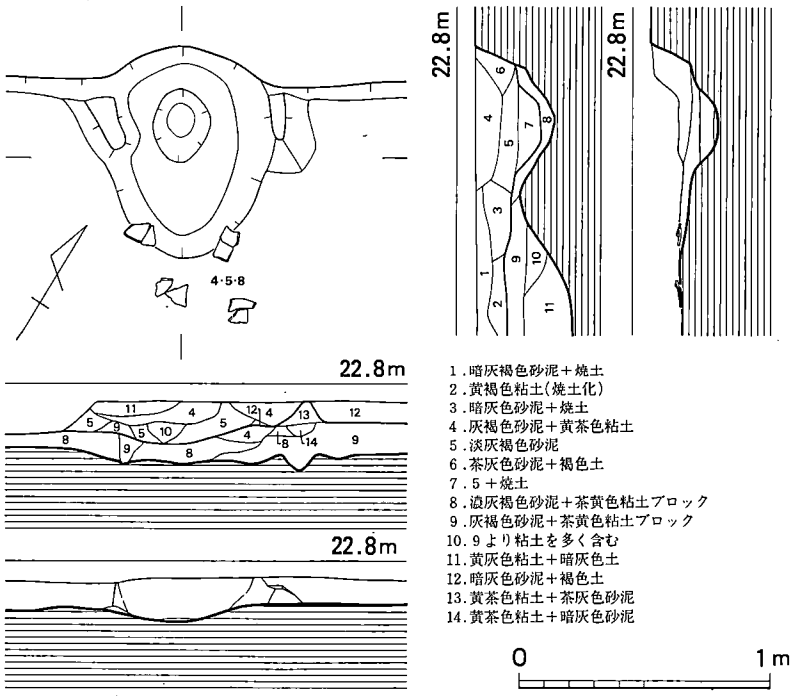
第14図　120～122号竪穴住居跡実測図（1/60）

121号竪穴住居跡　（図版７、第14図）

119･120号住居を切り、南側を122号住居に切られる。北西壁の長さは3.9mであり、竪穴部の規模としてはやや小型の部類に入る。床面のレベルは120号住居の床面よりも３㎝ほど低くなるように貼られている。壁高は残りの良い部分で14㎝ほどである。主柱穴は４本とも検出したが、P_3及びP_4はそれぞれ122号住居のP_1及びP_2に切られていた。貼床下層に深さ10㎝ほどの浅い



第15図　120号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第16図　121号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

落ち込みと119号住居の壁を検出した。この浅い落ち込みは、120・121号住居のいずれに伴うものかは明確にできなかった。

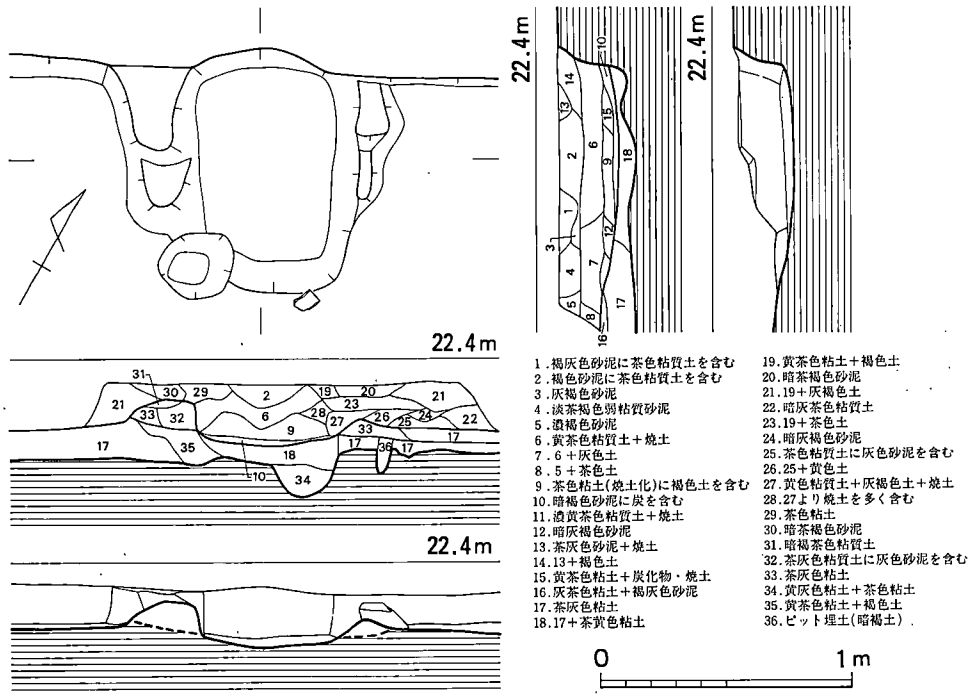
カマド　（図版７、第16図）　北西壁のやや西寄りに偏して付設され、壁から15cmほど突出する。火床の中央に、使用時には隠れていたと思われる深さ８cmほどのピットがある。両袖部は掘り過ぎたため、長さ20cmほどしか図化できなかった。

出土遺物　（図版27、第133図）

５・８はカマド周辺から、その他は覆土中から出土した。５は小片のため径は不正確である。

122号竪穴住居跡　（図版７、第14図）

119～121号住居を切る。同じく119号住居を切る118号とは３mの距離にあり、同時併存は考えられないが、両者の新旧関係は不明である。北西壁の長さは4.2mを測る。120～122号住居を同系譜の住人が順次建て替えたとすれば、次第に竪穴部の規模を拡大しているようである。床面のレベルは、122号住居の先に存在した121号住居よりも6cmほど深く貼っている。このように、新しい住居の床面を、切合関係にある古い住居より低く造る状況は本遺跡では一般的に見られる。南西壁に沿って壁小溝を検出したが他の壁際には検出できなかった。貼床下層で、中央土坑を検出した。



第17図　122号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

カマド　（図版７、第17図）　北西壁のほぼ中央に壁から10cmほど突出した状態で検出した。やや掘り過ぎたため、両袖部を十分に図化できなかった。火床に焼土と炭を少量検出した。

出土遺物　（図版27、第133図）

１は竪穴部のほぼ中央の床面から、４はカマド周辺から、５・６は貼床下層から、その他は覆土中から出土した。

123号竪穴住居跡　（第18図）

ＡⅡ区北東隅に検出した。この部分は、123～132号の10軒の住居が切り合っている。この一群の住居の東側は生ゴミを投棄した大規模なゴミ穴であるため、調査対象からはずした。したがって、この部分の住居のうち、東に延びる住居はその一部分しか検出できなかった。

本住居は、125号住居を切り、124号住居と接している。竪穴部の大半が調査区外に延びるため詳細は不明である。

出土遺物　（図版27、第134図）

竪穴部の大半が調査区外に延びるにもかかわらず、多量の土器が出土している。須恵器の出土量が多く、図示した32個体のうち、9個体が須恵器である。2･16･20･32が貼床下層から、その他は覆土中から出土した。ただし、本住居付近は地山がない部分での切合関係にあるため、竪穴部の範囲確定が不正確な時点で取り上げたものがある。それは、６･11･12･14･17･18である。

鉄製品　（図版42、第127図）　刀子⑽かと思われる鉄製品が一点出土している。錆ぶくれがひどいため、形状・断面は正確にしがたい。

土　錘　（図版39、第120図）　20は覆土中から出土した破片資料である。現存部分での最大径は19㎜、孔径は５㎜ほどである。

調査風景

124号竪穴住居跡　(第18図)

竪穴部の東壁が123号住居と接近し、南壁は125・128住居を切る。大半が路線外に延びるため詳細は不明である。

出土遺物

図示できる土器はないが、123号住居出土土器の一部は先述の理由により、本住居から出土した可能性も残す。

土　錘　(図版39、第120図)　土錘19は一部欠損するがほぼ原状を保つ。今回報告する土錘の中では最大のもので、長さ74㎜、径17㎜、孔径５㎜ほどである。

125号竪穴住居跡　(第18図)

123・124・126～128住居等から切られ、竪穴部の壁さえ検出できず、詳細は不明である。

出土遺物　(図版27、第135図)

住居については詳細不明ながら、図示できる土器は19点あり、8点が須恵器である。２～６・８・15は貼床下層から、他は覆土中から出土した。

鉄製品　(図版42、第127図)　刀子⑿と思われるものである。

126号竪穴住居跡　(第18図)

127・128号住居に切られ、125・129・130号住居を切る。竪穴部の北東隅、南西隅及び南壁の一部を確認した。主要な部分を128号住居に切られているため、不詳な部分を多く残している。

出土遺物　(図版27、第135図)

図示した13点のうち、２・３・７・13は覆土中から、その他は貼床下層から出土した。

焼塩土器　(図版38、第119図)　極小片が２点(７・８)出土している。

丸　瓦　(図版40、第121図)　極小片が１点⑷出土している。

鉄製品　(図版43、第129図)　外径８～10㎜の鉄鐶状に径２㎜強の棒状のものが接続し、２㎜ほどを残して欠損している。用途は不明である。

127号竪穴住居跡　(第18図)

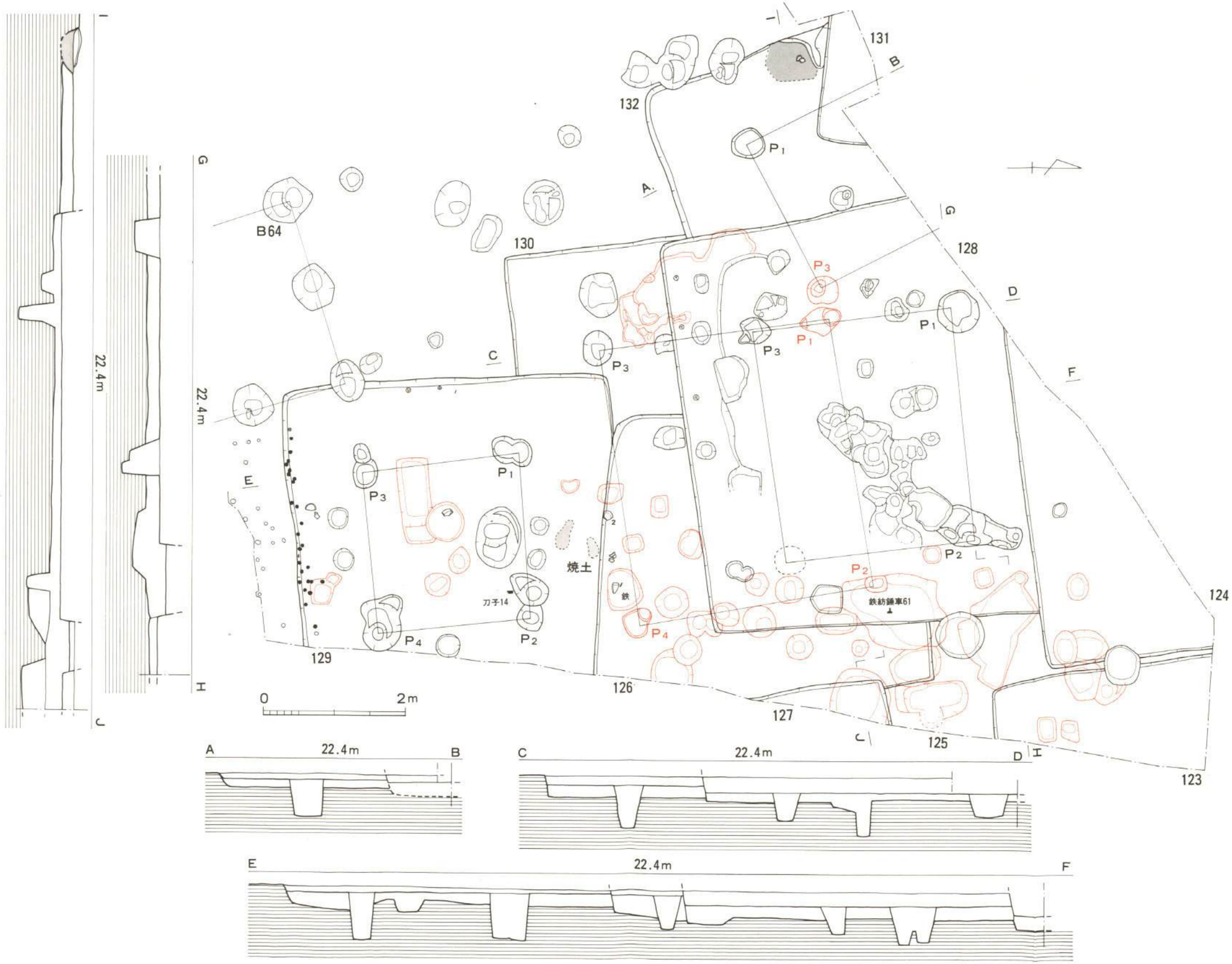
126号住居の東壁を切る。竪穴部の北西隅のごく一部を検出したのみで詳細は不明である。

出土遺物　(図版27、第135図)

３は貼床下層から、その他は覆土中から出土した。

128号竪穴住居跡　(第18図)

125・126・130・132号住居を切り、124号住居に北壁を切られる。主柱穴はP_1～P_3であろう



第18図　123～132号竪穴住居跡実測図（1/60）

と思われるがP_4に相当する主柱穴は検出していない。

出土遺物　(図版27、第136図)

1・4・6・7・9・10・12は覆土中から、その他は貼床下層から出土した。

鉄製品　(図版43、第129図)　床面に近い覆土中から紡錘車(61)が出土している。軸は片方に12.5cm分だけが遺存する。

129号竪穴住居跡　(第18図)

130号住居を切り、北壁を126号住居に切られ、東壁は調査区外に延びる。また、南西隅付近は64号掘立柱建物跡と重複する。主柱穴はP_1～P_4であるが、主柱痕は検出していない。壁高は残りの良い部分で8cmほどである。西壁は長さ4.6mほどであり、竪穴部は一辺4.5m前後の隅円方形を呈すると考えられる。

カマド　北側の床面に焼土を検出したので、北壁に付設されていたと思われる。

出土遺物　(図版27、第136図)

図示した須恵器・土師器23点のうち、5・7・8・15・16は床面で、4・11・12・17～20・22・23は貼床下層から、その他は後世のピット及び覆土中から出土した。22の土師器坏は、口径15cm、器高3.5cmに復原され、内底面に5個の竹管文が残る。竹管文は底部の中心に1個、それを中心にしてほぼ90度に分割した線上に規則的に各1個の竹管文を配しており、遺存状態から判断して他の部分に竹管文は付されてないようである。23の土師器坏は、内底面に4本の縦線と1本の横線からなる細線のヘラ描きが見られる。

鉄製品　(図版42、第127図)　刀子(14)は床面からほぼ10cmほど浮いた状態で出土した。鉄錆がひどく、ふくらんでいるため断面は図示できず、形状も定かではない。

130号竪穴住居跡　(第18図)

126・128・129・132号住居に大きく切られているため、壁が残るのは南西隅のわずかな部分だけである。しかし、主柱穴は4本とも残っていた。主柱穴の配置から、本竪穴部の規模は東西6.5mほど、南北5.8m前後と推定される大型のものである。

出土遺物　(第137図)

図示したのは、覆土中から出土した土師器の坏蓋である。

131号竪穴住居跡　(第18図)

東・南壁の一部を検出し、大半は北側の調査区外に延びるため詳細は不明である。132号住居を切っている。図示できる出土遺物はない。

132号竪穴住居跡　（第18図）

128･131号住居に切られる。主柱穴はP_1及びP_3を確認した。壁高は５cmほどである。柱配置から、竪穴部の規模は一辺５mほどと思われる。

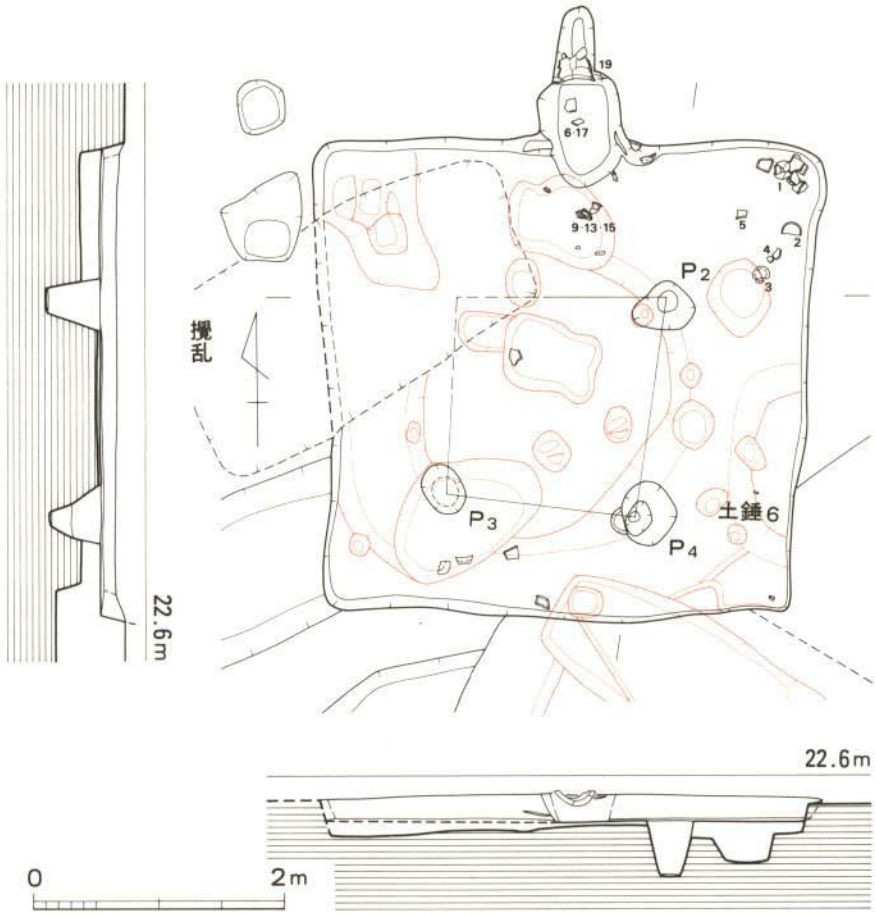
カマド　西壁に付設されている。壁高が５cmほどしか残らないため、カマドの袖部の遺存状態は良くない。

出土遺物　（第137図）

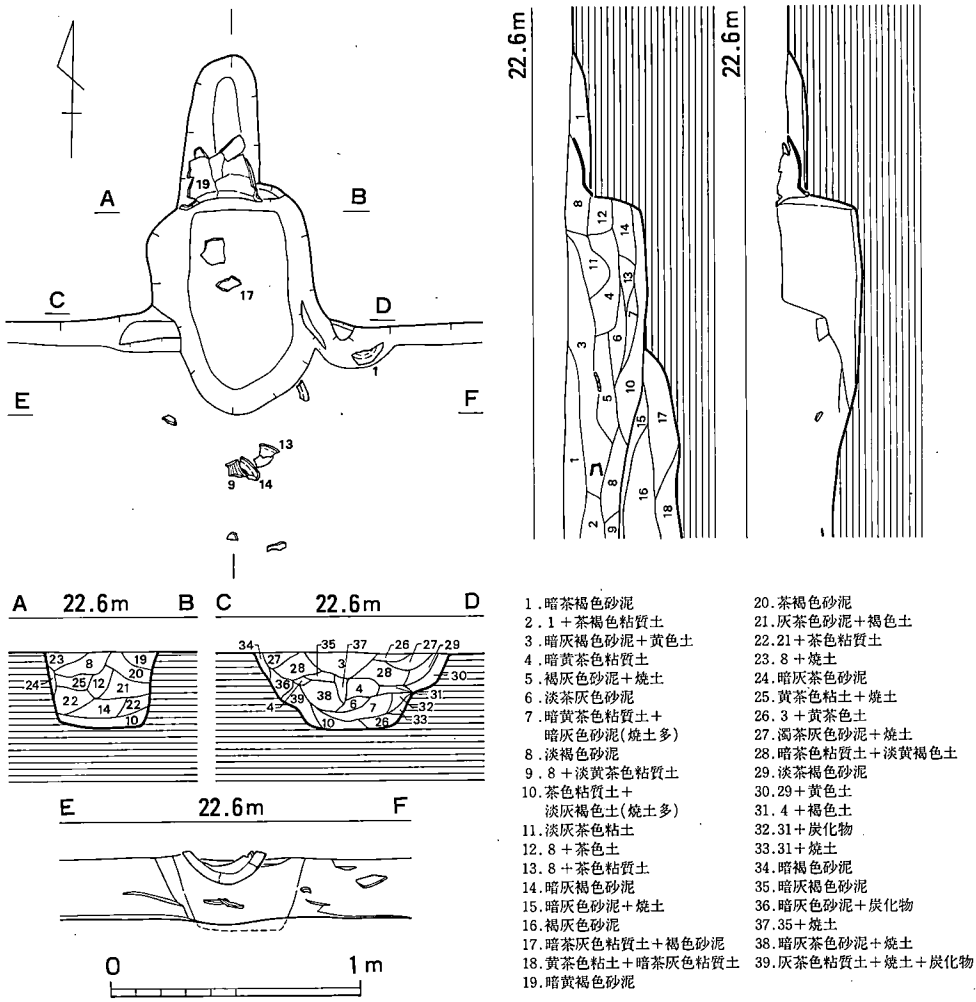
13・14がカマド内から、その他は覆土中から出土した。

126・128～130・132竪穴住居跡出土土器　（図版27、137図）

図示した23個体の土器は、上記５軒のいずれに属するか不明な状態で取り上げたものである。なお、１～10は覆土中から、11～23は貼床下層から出土したものである。



第19図　133号竪穴住居跡実測図（1/60）



第20図　133号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

133号竪穴住居跡　（第19図）

今回報告する地区の東側に位置し、134・135号住居を切っている。竪穴部は北壁長3.9m、他の壁は3.6mを測り、倒立した台形気味の隅円方形を呈する。北西部分は攪乱され、西壁及び貼床の一部は遺存しない。主柱穴は３本検出したが、P_1は確認できなかった。壁高は比較的残りの良いカマド付近で20cmを測る。貼床下層で、35号土坑の一部、36号土坑を検出した。本住居に伴う下層遺構では、掘り込み、東壁南半の地山削り残しによる段状部等がある。

カマド　（図版８、第20図）　北壁の中央からやや東に偏し、55cmほど外に突出して造られている。長さ55cmほどの煙道が遺存し、煙口に甕をセットし一部が遺存する。土層断面Ａ－Ｂの11の粘土は煙道に使われていたものが落下したものであろう。

出土遺物　（図版27、第138・139図）

カマド周辺と床面北東隅にまとまって須恵器・土師器が出土した。床面北東隅の土器は取り上げ時に付した番号を整理時に土器にネーム入れしていないので特定できない。1はカマド右、6・9・13・15・22はカマド前面、14・17はカマド内、19は煙道、3・20は床面北東隅、7・16・18は主柱穴内、2・5・10・11・12は覆土中、その他は貼床下層から出土した。2・4は墨書土器であり、個別に後述する。6～8は内外面を非常に丁寧に磨き上げた土師器の坏・椀で、官衙を除いては、通常の村落遺跡では珍しいものである。

土　錘　（図版39、第120図）両端を欠損する。径1㎝弱の細いタイプのものである。

134号竪穴住居跡　（第21図）

西側を133・135号住居に切られる。竪穴部は、カマドを正面に見て横に広いプランを呈し、南東壁の長さ3.8m、北東壁は3mを測り、各隅の壁の角度から隅円の不等辺方形を呈するようである。壁高は5～10㎝で、残りが悪い。床面で4本の主柱痕を検出し、貼床下層で各々の主柱穴を確認した。また、南東壁の両隅近くのP_5とP_6は本住居に関係する補助柱穴の可能性がある。貼床下層では、中央土坑、壁隅土坑を検出した。

カマド　（第21図）　北東壁の東に偏して造られ、40㎝ほど突出する。短い右袖が遺存するが、左袖は残らない。火床下は火床面より20㎝ほど深く掘られ、ここに粘土を充填し火床を造っている。

出土遺物　（図版27、第139図）

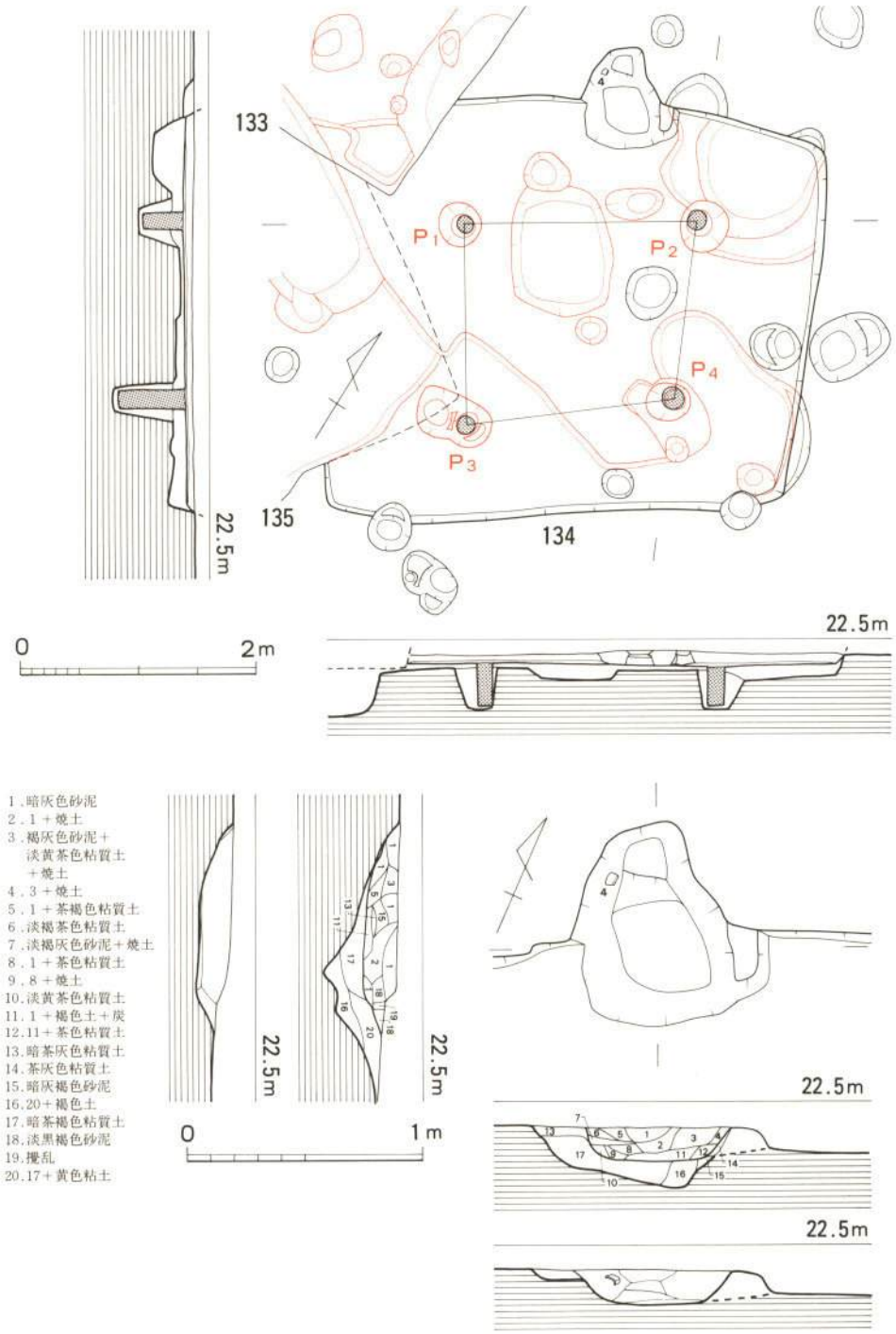
1・2は覆土中、3・4はカマド内、5は主柱穴から出土した。

135号竪穴住居跡　（図版10、第22図）

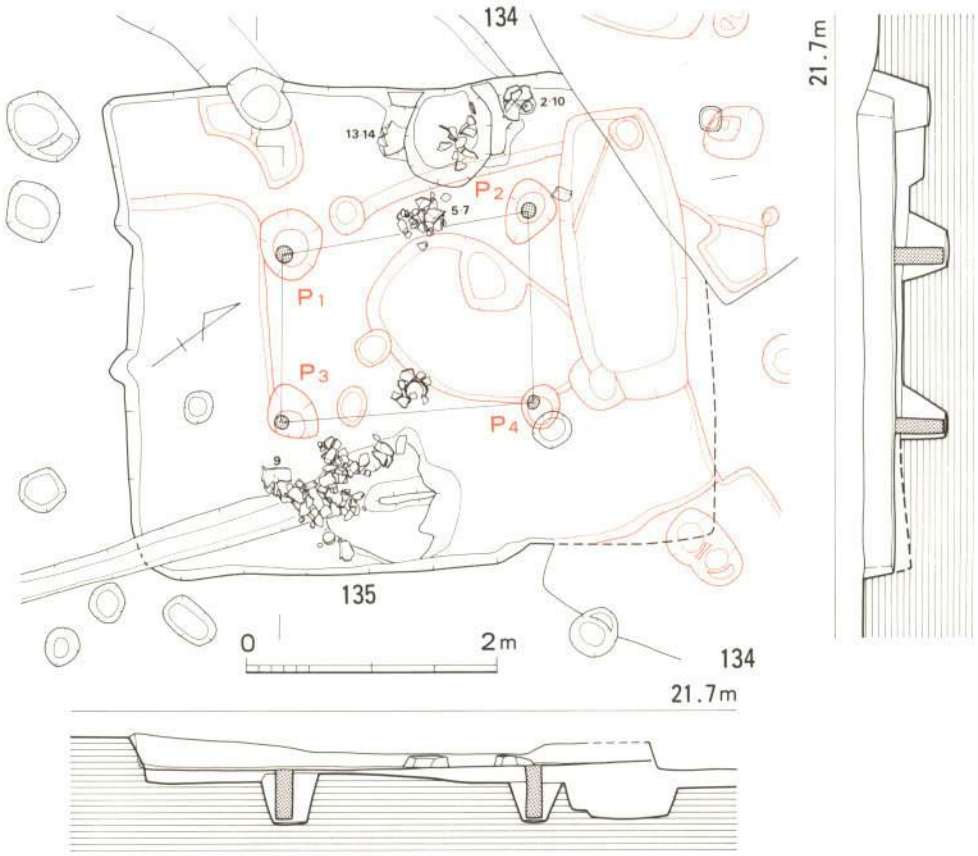
134号住居を切り、北隅を133号住居に切られる。また、南隅に幅30㎝前後の浅い現代溝が走る。調査時に北東壁を復原図よりも内側に考えて遺構検出をしたが、柱配置から判断して不合理なので図のように破線で想定復原した。この部分は134号住居と切り合っているため、竪穴部の掘り込みラインに正確を期し難かったことによる。復原した竪穴部のプランは、カマドに対して横に広く、南西壁の長さ3.8mで、南東壁は4.6mほどに復原される。床面に主柱痕が残り、貼床下層に各々の主柱穴を確認した。壁高は比較的残りの良い南西壁で25㎝を測る。また、南西壁には、ピットと切り合ったかのように見える部分がほぼ等間隔に2ケ所ある。補助柱が立てられていたのかもしれない。

貼床下層で中央土坑、掘り込みの他に35号土坑を検出した。

カマド　（図版9、第23図）　北西壁のやや東に偏した部分に付設されている。両袖部は遺存状態がよくないが、土器をまとまった状態で検出した。

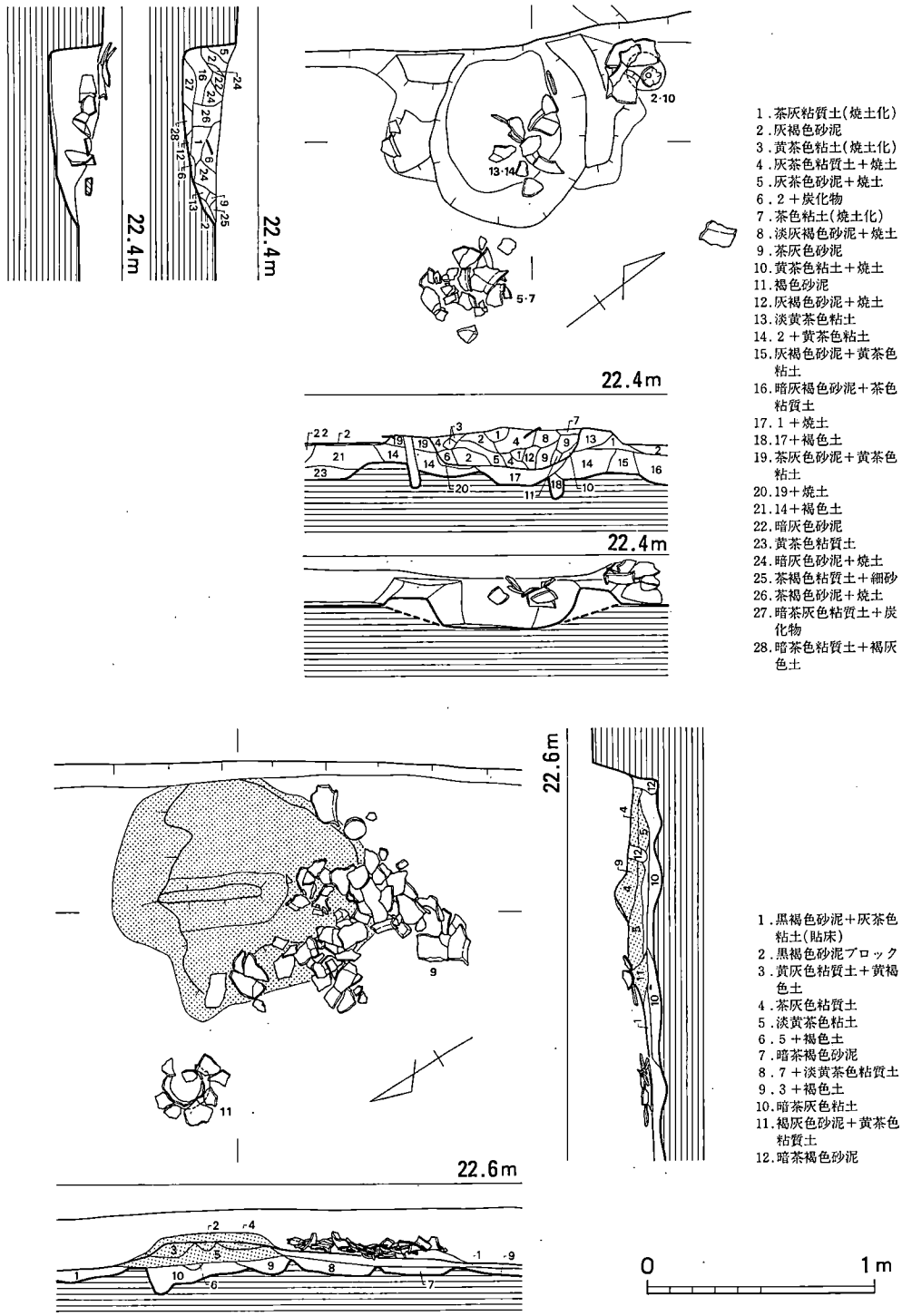


第21図　134号竪穴住居跡（1/60）・カマド（1/30）実測図



第22図　135号竪穴住居跡実測図（1/60）

カマド対面粘土　（図版９、第23図）　南東壁際のほぼ中央に、ほぼ１mの範囲に厚さ最大で25cmほどの粘土を検出した。住居の壁の下端からほぼ１m離れて壁と平行する粘土の帯状の長さ0.9m、高さ５cmほどの高まりがあり、その前後はほぼ平坦である。土層観察では、４層に分層することができる。また、貼床との関係は、①A－B断面では粘土が貼床の上に乗った状況を窺うことができ、②C－D断面では粘土の主要な部分の下には貼床はなく、壁下端から1.8mのところで貼床に乗っている。これらのことを勘案すれば、住居の貼床の行為と同時並行的に造られた住居に伴う何らかの施設に関係するものではないかと推定することができよう。その場合、可能性の問題としては竪穴部の昇降施設を想定することも可能であろう。ただし、今は地面に残る遺構から、それを裏づけることはできない。一方、114号住居では、本例とは出土状態が異なり、本例とは異質な性格を想定した。この住居の粘土の評価は、粘土上に検出した土器群の評価と密接に関わってくる。この粘土が本住居の何らかの施設に伴うならば、粘土上の土器は本住居



1.茶灰粘質土(焼土化)
2.灰褐色砂泥
3.黄茶色粘土(焼土化)
4.灰茶色粘質土＋焼土
5.灰茶色砂泥＋焼土
6.2＋炭化物
7.茶色粘土(焼土化)
8.淡灰褐色砂泥＋焼土
9.茶灰色砂泥
10.黄茶色粘土＋焼土
11.褐色砂泥
12.灰褐色砂泥＋焼土
13.淡黄茶色粘土
14.2＋黄茶色粘土
15.灰褐色砂泥＋黄茶色粘土
16.暗灰褐色砂泥＋茶色粘質土
17.1＋焼土
18.17＋褐色土
19.茶灰色砂泥＋黄茶色粘土
20.19＋焼土
21.14＋褐色土
22.暗灰色砂泥
23.黄茶色粘質土
24.暗灰色砂泥＋焼土
25.茶褐色粘質土＋細砂
26.茶褐色砂泥＋焼土
27.暗茶灰色粘質土＋炭化物
28.暗茶色粘質土＋褐灰色土

1.黒褐色砂泥＋灰茶色粘土(貼床)
2.黒褐色砂泥ブロック
3.黄灰色粘質土＋黄褐色土
4.茶灰色粘質土
5.淡黄茶色粘土
6.5＋褐色土
7.暗茶褐色砂泥
8.7＋淡黄茶色粘質土
9.3＋褐色土
10.暗茶灰色粘土
11.褐灰色砂泥＋黄茶色粘質土
12.暗茶褐色砂泥

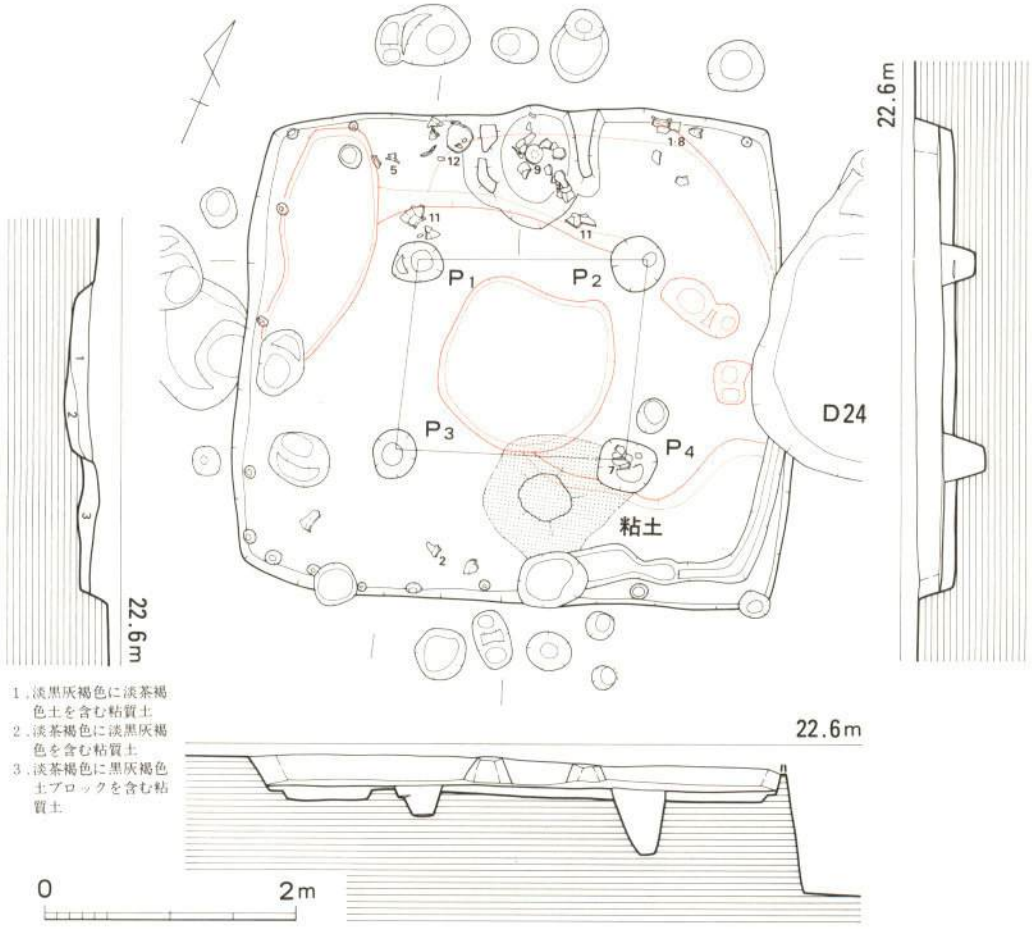
第23図　135号竪穴住居跡カマド・粘土及び土器出土状態実測図（1/30）

に伴うか極めて接近した時期のものであろう。この粘土が本住居の施設に直接的に伴わないものならば、上記の土器は本住居とは無関係のものとなろう。土層観察から、前者の可能性、すなわち、これらの土器は本住居と極めて密接な関係にあると推測する。本粘土の性格は遺構から明確にはし難く、竪穴部の昇降施設に関係するものではなかろうかと推定しておく。

出土遺物　（図版29、第139～141図）

多量の土器が出土しているが、出土状態図を示した土器が本住居に直接伴うか否かは別の問題である。多くの須恵器・土師器が出土したが、床面上ではカマド周辺とカマド対面粘土部分に集中している。2・5・7・9・10・11・13・14は図面で出土位置を示したが、8・12は貼床面下層から、その他は覆土中から出土した。

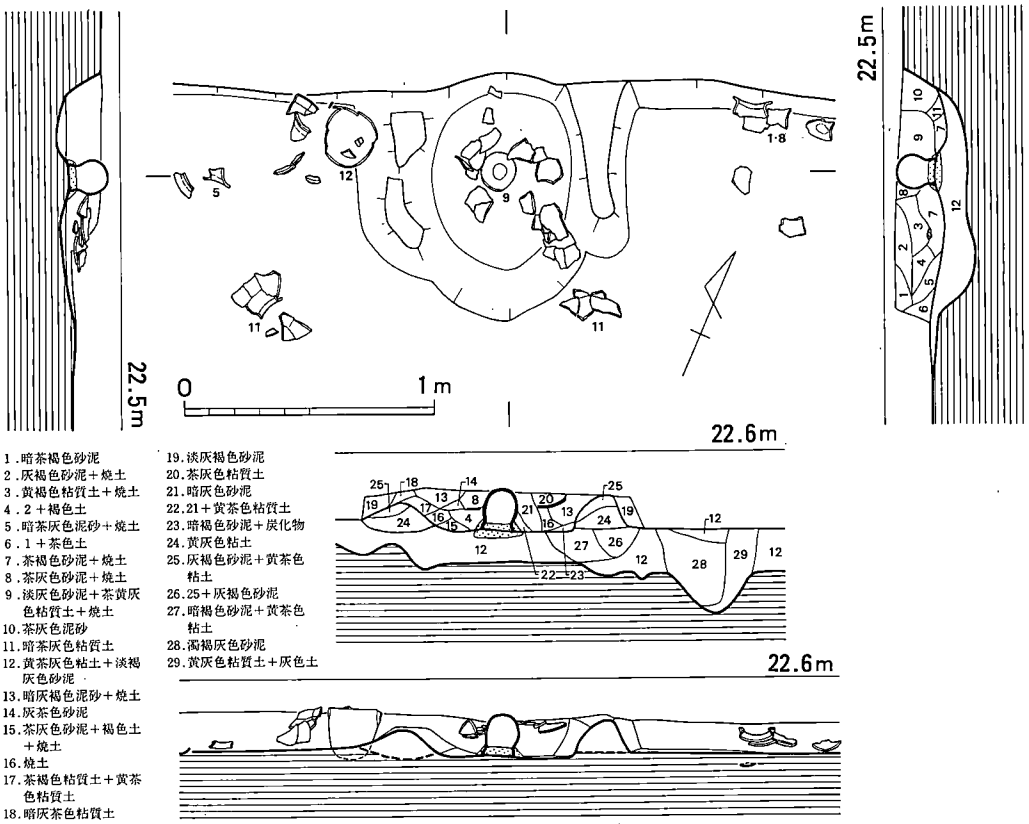
土　錘　（図版39、第120図）　一部を欠損するが全体の形状を窺うことは可能である。



第24図　136号竪穴住居跡実測図（1/60）

136号竪穴住居跡　（図版10、第24図）

135号住居の南に検出し、東壁は24号土坑に切られている。竪穴部のプランはカマドに対して横に広いやや台形気味の隅円方形を呈する。ちなみに、各壁の長さは、北壁；3.9m，東壁；3.8m、南壁；4.2m、西壁；3.5mである。壁高は比較的残りの良い西側で20cmほどを測る。床面はほぼ平坦で主柱穴（P_1～P_4）及び、南西隅において壁小溝を検出した。また、東西1.2m、南北1mの範囲に厚さ10cmほどのカマド対面粘土を検出した。この粘土と南壁の間にある小土坑は粘土を切っており、後世のものであり、カマド対面土坑ではない。貼床の下層では、掘り込み、深さ12cmほどの中央土壙、西壁北半部に10cm前後の壁隅土坑を検出した。



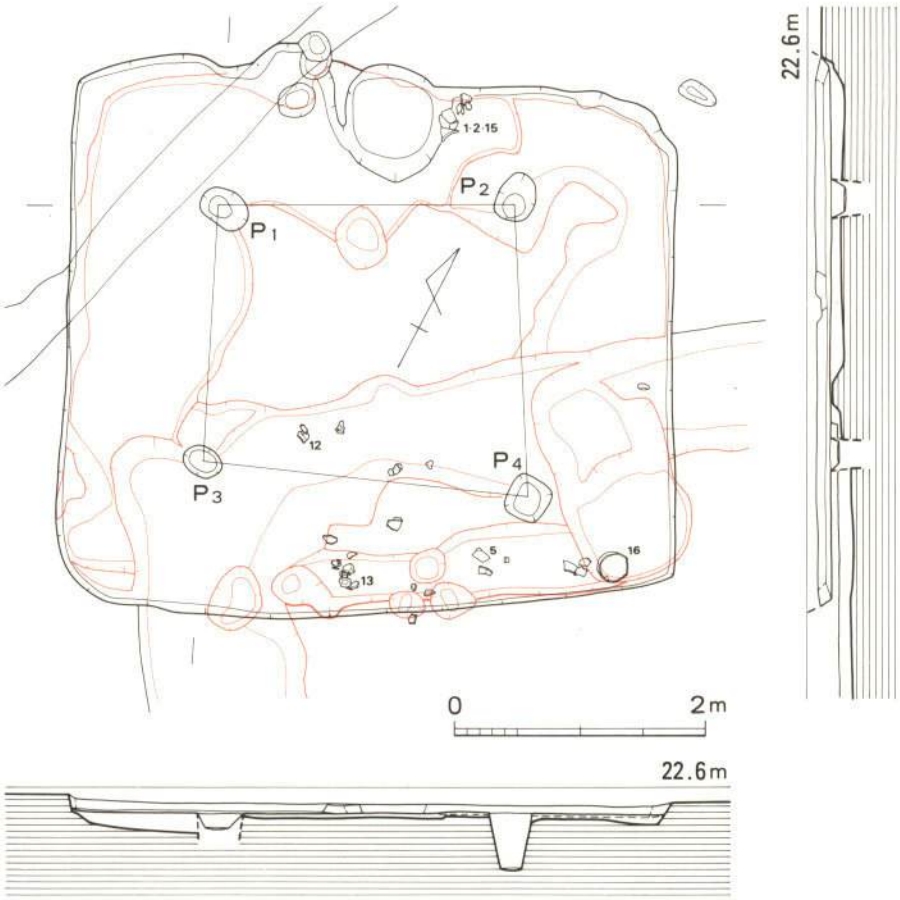
第25図　136号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

カマド　（図版10、第25図）北壁のほぼ中央に付設されている。袖部の残りは良くないが、小型の甕を使った支脚を中心に、周辺から多くの土師器が出土した。支脚は、粘土で台座状のものを造り、それに甕をかぶせるように倒立させてセットし、口縁部の周囲を粘土で補強して

安定させている。

出土遺物　（図版29、第141図）　カマド周辺及び南壁寄りに土師器を中心とした土器を検出した。特に、甕12はカマドの右側に据えられていたようである。竪穴部の上半部が削平された時に口縁部～肩を欠損したものであろう。カマド周辺の他の土器は破片が散乱しているが、相互に接合するものが多く、住居（カマド）廃棄時に壊れて破片が飛び散ったと思われる。1･5･8・9・11・12はカマド内及び周辺の床面から、2・7は住居南側床面から、3・4は覆土中から他は貼床下層から出土した。9・12は本住居に確実に伴い、8・11は伴う可能性が高い。

石製品　（図版41、第136）　覆土中から出土した凝灰岩製の仕上砥である。



第26図　137号竪穴住居跡実測図（1/60）

137号竪穴住居跡　（図版12、第26図）

136号住居の南に検出した。138号住居を切り、北隅付近を現代溝が斜交して浅く切る。竪穴

部は横に広いややいびつな隅円方形を呈する。壁高は5㎝前後で残りが悪い。床面に主柱穴を検出したがP_4を除いて浅い。掘り足らないまま図化しているので図上で破線復原した。貼床下層には掘り込みを検出した。東隅の土壙は一部が竪穴部よりはみだすので、本住居に伴うと考えるよりも、138号の竪穴部内に納まるので138号に伴う下層遺構だと思われる。また、竪穴部の貼床底面は、本住居に先行する138号住居の貼床底面より浅く掘られているので、下層の138号住居のカマドの一部と竪穴部北西壁が削平されずに遺存していた。

カマド　北東壁のほぼ中央に検出した。遺存状態が良くないので個別に図化していない。

出土遺物　（図版29、第142図）

1・2・15がカマド右側の床面で、5・12・13・16が東南壁際付近の床面で、3・4は貼床下層、その他は覆土中から出土した。甕16は深さ20cmほどのピットに据えられており、本住居に伴う。

138号竪穴住居跡　（図版11・12、第27図）

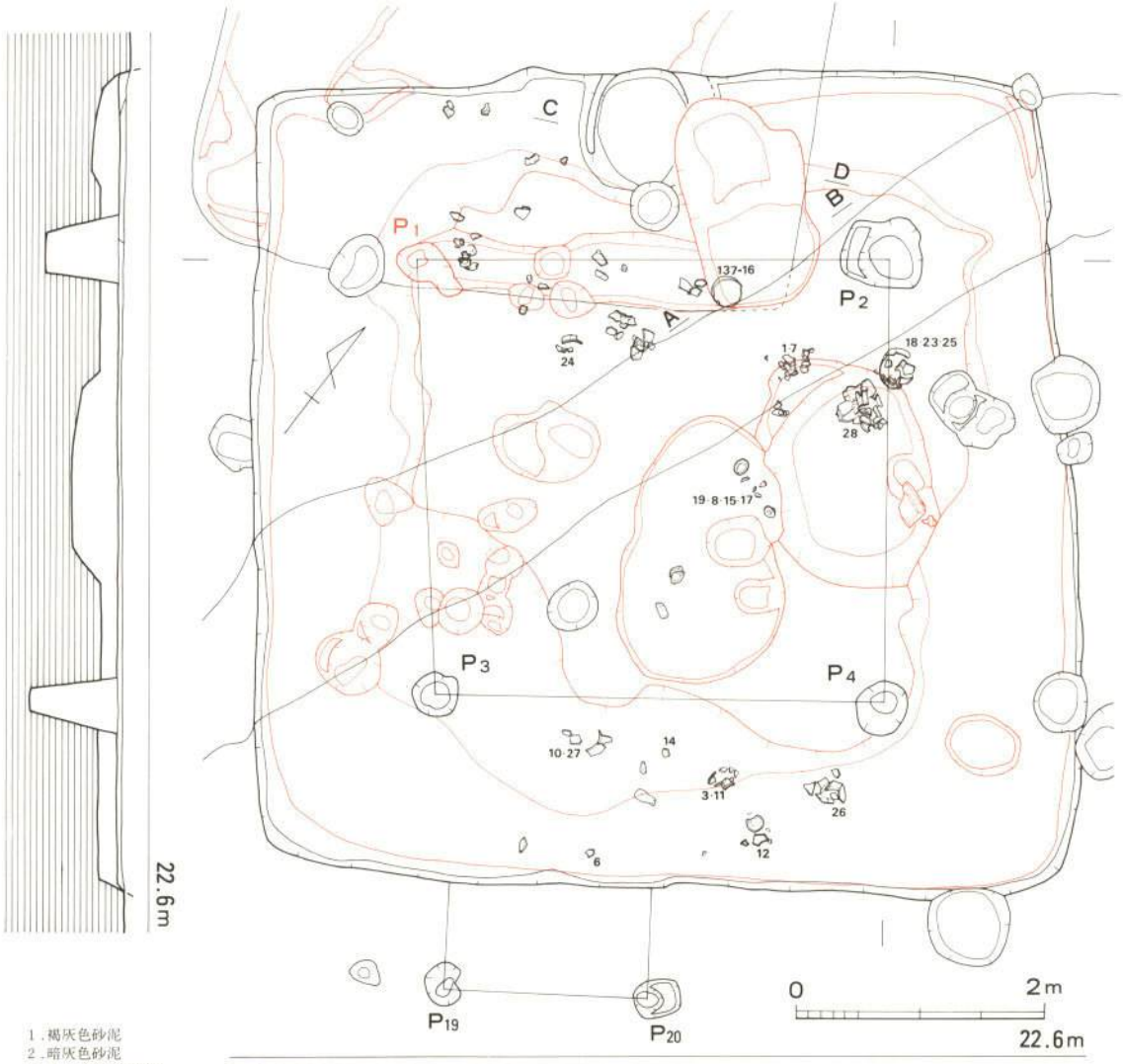
北西側を137号住居に、中央部を現代溝に浅く切られている。竪穴部は一辺6.4m前後を測る大型のものである。壁高は比較的残りの良い部分で10cm前後を測り、137号住居に切られた部分でも貼床面が残っていた。

第27図A－B土層図は137号住居の東隅に検出した甕16を中心に置いた、両住居の土層断面図であるが、甕16は137号住居の貼床下層埋土と、さらにその下の138号住居貼床の下層まで及ぶ深さ22cmのピットに据えられていた。宮原遺跡では複数の住居が切り合う場合、一般的に新しい住居の竪穴部を古い住居の竪穴部よりも深く掘り、貼床面も新しい住居の方が低く造られるが、137号住居と138号住居の場合はこの一般的法則は当てはまらない。したがって、カマドの火床もわずかながら遺存していた。床面に主柱穴を検出したが主柱痕は遺存しなかった。また、主柱穴以外にも後世のピットが多数見られる。貼床下層で、一巡する掘り込み、竪穴部の中央に深さ20cmほどの中央土坑を検出した。中央土坑に接して東側にある深さ30cmほどの土坑、カマドの東の深さ40cmほどの土坑は、一般の廃棄土坑のようには土器の出土量は多くなく、中央土坑と同様な埋土及び土器の出方を示すことから、本住居の下層遺構であろうと推定する。P_{19}・P_{20}は、出入り口に関係するものであろうか。

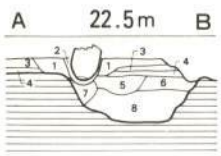
出土遺物　（図版29、第143・144図）

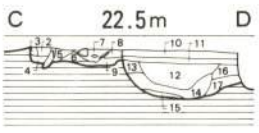
多量の土器を床面に検出した（第27図）。これ以外の土器のうち、2・9・16・20は覆土中、21はカマド、22は中央土坑、4・13は貼床下層から出土した。なお、小型甕21は支脚として使用され、137号住居に削平された際に一部がカマド内に残ったものだろう。その他の床面出土の土器については、壁高の残りが悪いことから、25・28は出土状態と遺存程度から削平されて欠損した可能性があり、この両者は伴う可能性があるが、他は不明である。

土　錘　（図版39、第120図）　中央土坑から出土した完形品で長さ5.1cm、径1.8cmである。



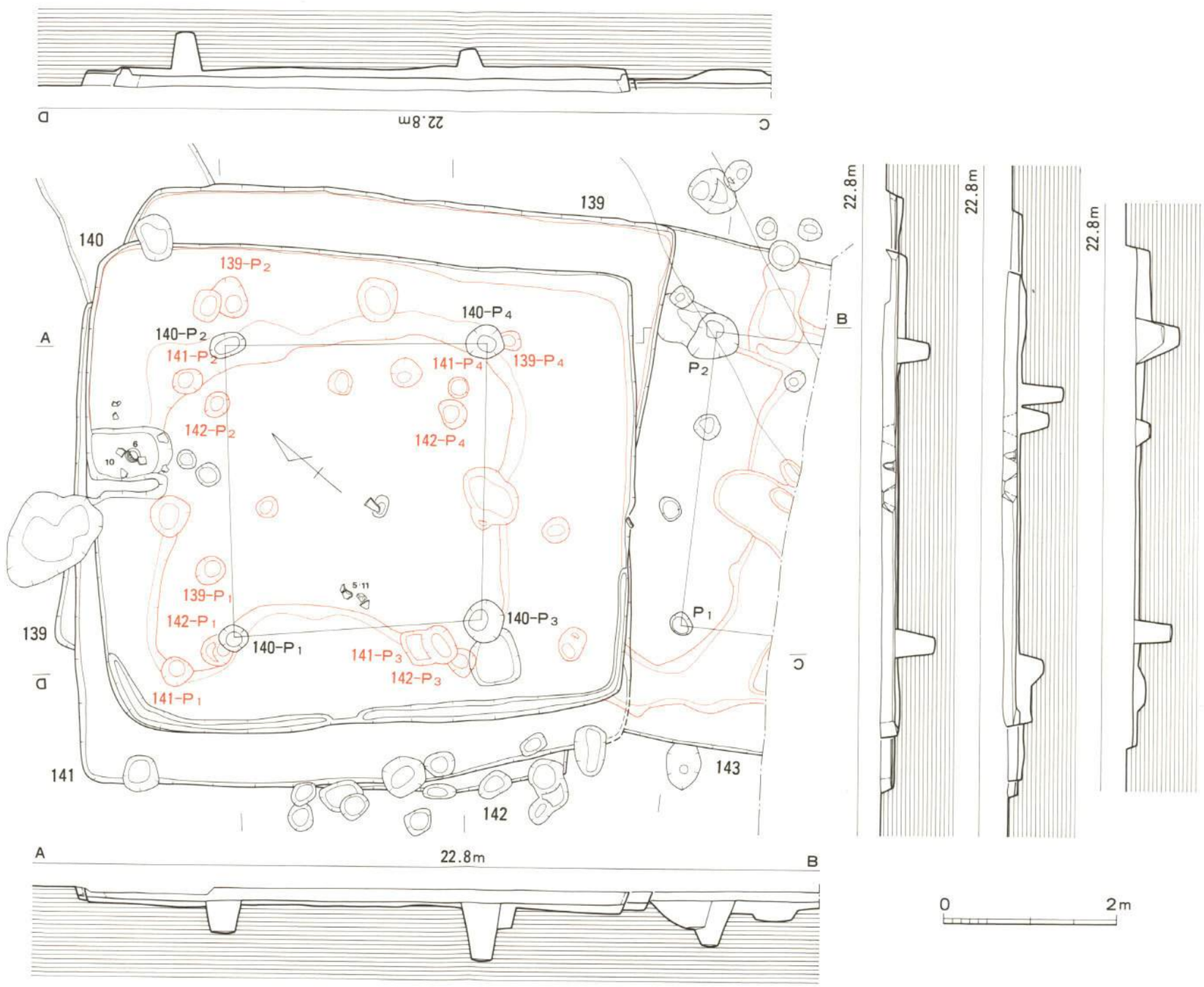
1．褐灰色砂泥
2．暗灰色砂泥
3．1＋黄茶色粘質土
4．黄茶色粘質土＋褐灰色砂泥
5．茶褐灰色砂泥＋茶色粘質土ブロック
6．灰褐色砂泥
7．茶褐色砂泥
8．黒褐色泥砂





1．暗灰色砂泥(木根)
2．茶褐色砂泥＋焼土
3．褐灰色泥砂
4．茶褐色粘質土
5．灰褐色砂泥＋焼土
6．灰褐色砂泥＋黄茶色粘質土
7．茶灰色粘質土＋焼土＋褐色土
8．7に焼土含まず
9．褐茶色粘質土
10．灰褐色砂泥
11．茶褐灰色砂泥＋茶色粘質土
12．暗褐灰色砂泥＋茶灰色粘質土
13．灰茶色粘質土
14．淡茶褐色粘質土
15．暗灰色砂泥＋砂礫
16．11と類似
17．16＋黄茶色粘土ブロック

第27図　138号竪穴住居跡実測図（1/60）



第28図　139～143号竪穴住居跡実測図（1/60）

139号竪穴住居跡　（図版12・13、第128図）

この付近では、139～143号住居の5軒が切り合い、特に139～142号住居の4軒はほとんど重なり合った状態で検出した。本住居は140・141号住居から大きく切られ、竪穴部の北東壁全体、北西隅、南東壁の東部だけを平面的に確認した。竪穴部のプランは、北西壁の長さ5.5m、南東壁6mを測る大型のものである。主柱穴は、P_3を除いて確認した。住居がほとんど重なって切りあっており主柱穴の位置は推定の域をでない。カマドの位置は不明である。壁高は15cm前後である。

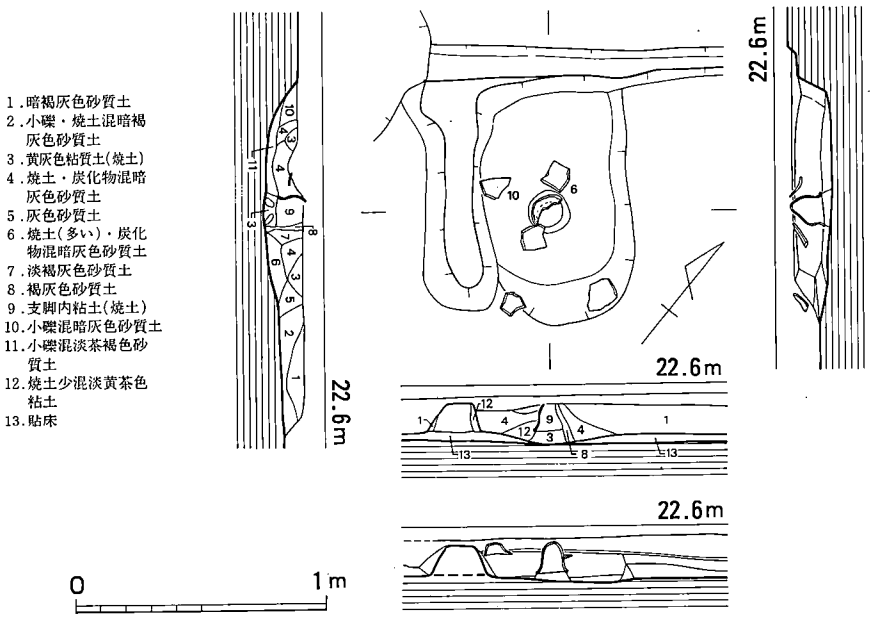
出土遺物　（第144図）

図示できるのは、覆土中から検出した土師器坏の1点である。

140号竪穴住居跡　（図版12、第128図）

139・141～143号住居を大きく切る。竪穴部はカマド対面の壁長が短い逆台形気味の隅円方形を呈し、カマドを付設する北西壁から東回りに長さを示すと、5.8m、6.1m、4.8m、5.8mを測る。壁高は15cm前後である。床面に主柱穴P_1～P_4を、南西側の床面に壁小溝を検出した。貼床下層に掘り込みが巡るが中央土坑及び壁隅土坑は検出していない。

カマド　（第29図）　北西壁のやや東に偏した位置に付設されている。右袖は掘りすぎたため遺存しないが、支脚と左袖が残る。粘土で台座を造り、設置面の周囲をさらに粘土を巻いて支脚の安定を図っている。



第29図　140号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

出土遺物　(第144図)

11個体を図示した。6はカマドの支脚、10はカマド内出土、5・11は床面から出土した。1・2・4・9は覆土中、その他は貼床下層から出土した。小型甕の支脚6 は本住居に伴うが他の土器は本住居に伴うか否かは確証がない。

141号竪穴住居跡　(図版12・13、第28図)

139・142・143号住居を切り、140号住居に大きく切られる。しかし、竪穴部の南東隅以外は確認している。遺存部での計測値は、北西壁の長さ5.5m、南西部6.2mを測り、竪穴部は大型の部類に属する。主柱穴は、140号住居の貼床下層で検出したP_1～P_4であろう。カマド等を含めて詳細は不明である。

142号竪穴住居跡　(図版12・13、第28図)

143号住居を切り、140・141号住居に大きく切られ、詳細は不明であるが主柱穴はP_1～P_4であろう。

143号竪穴住居跡　(図版12・13、第28図)

139～142号住居の南に検出した。柱配置から本住居の主体は南の調査区外に延びると考えられるため、検出した主柱穴はP_1及びP_2とした。だが、貼床下層の掘り込みの状態を見るとやや不安な面も残している。

出土遺物　(第145図)

狭い部分なので、出土品は少ない。図示した土師器は覆土中から出土した。

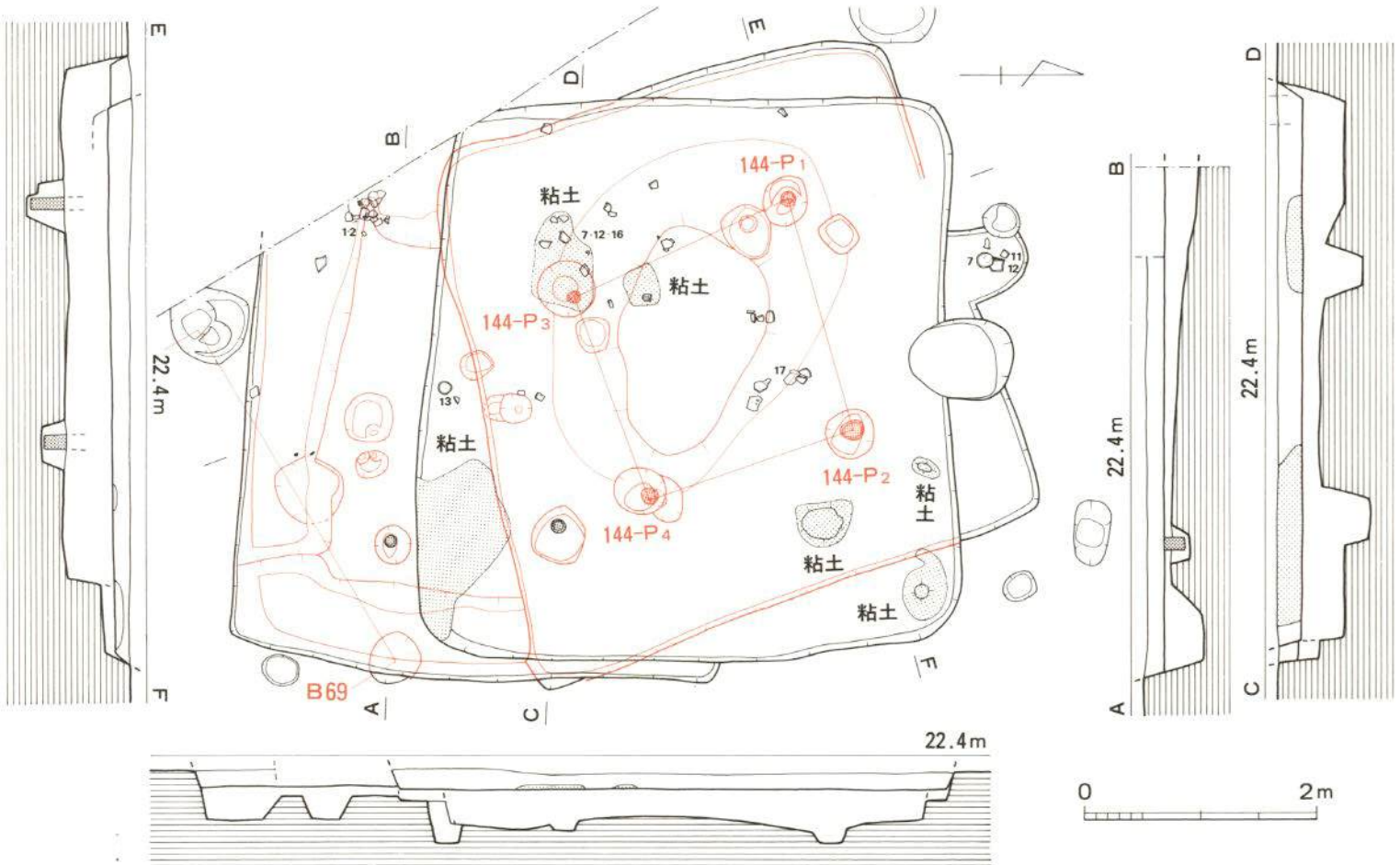
144号竪穴住居跡　(図版13、第30図)

路線内の北側に3軒で切り合う。145号住居が、144・146号住居を切る。本住居は145号住居に大きく切られるが、その下層に竪穴部の掘り方が残っており、およそのプランを知ることができる。主柱穴は図のP_1～P_4で、竪穴部のプランは南壁が長い不整台形気味の隅円方形を呈し、主柱痕が遺存する。145号住居を造る際に柱を切り取ったものであろう。竪穴部の規模は、下層遺構から、東壁長4.2m、南壁長4.6m、西壁長4.8m、北壁長4m強である。壁高は15cm前後である。貼床下層は、中央部を高く掘り残して掘り込みを一巡させる。

カマド　東壁のほぼ中央に、竪穴部から火床が突出して造られている。火床の中央に小型の甕7を倒立させてセットし支脚としている。カマドは66号建物の柱穴を切っている。

出土遺物　(図版29、第145図)

7は支脚で、11・12はカマド内、1・5は覆土中、その他は貼床下層の掘り込みから出土した。



第30図　144～146号竪穴住居跡実測図（1/60）

145号竪穴住居跡　（図版13、第30図）

144・146号住居を切る。竪穴部は、北壁の長さが4.2mほど、他の壁は4.6mほどを測る隅円方形を呈する。床面には6ケ所に粘土が散在し、落下、投棄あるいは流入したものだろう。壁高は20cmを測り、残りが良い。貼床下層の底面は、本住居に先行する144号住居よりも浅い。主柱穴はP_1とP_4だけ確認できた。

カマド　東壁のほぼ中央に、突出して造られている。

出土遺物　（図版30、第146図）

18はカマド内、7・12・13・16・17は床面、その他は覆土中から出土した。カマド内から出土した甑18を除き、他の土器は本住居に伴わない。

土　錘（図版39、第120図）　覆土中から出土した。半分を欠損する。

石製品（図版41、第125図）　カマドの前面の床面に検出した。砂岩製の荒砥の破片である。

146号竪穴住居跡　（図版13、第30図）

144・145号住居に切られ、北の調査区外に延びる。竪穴部の南壁を確認でき、長さは4.2mを測る。また、北壁は調査区内に検出しておらず、南北の幅は4.6m以上を測る。カマドを検出していないが、東壁に造られたと仮定して主柱穴番号を付した。貼床下層に掘り込みが巡る。

出土遺物（第147図）

北側床面に甕1・2を検出した。

鉄滓　貼床下層から1点出土した

石製品（図版40、第124図）　貼床下層で、蛇紋岩製の紡錘車を1点検出した。径44mm、厚さ7mm、孔径5mm強である。

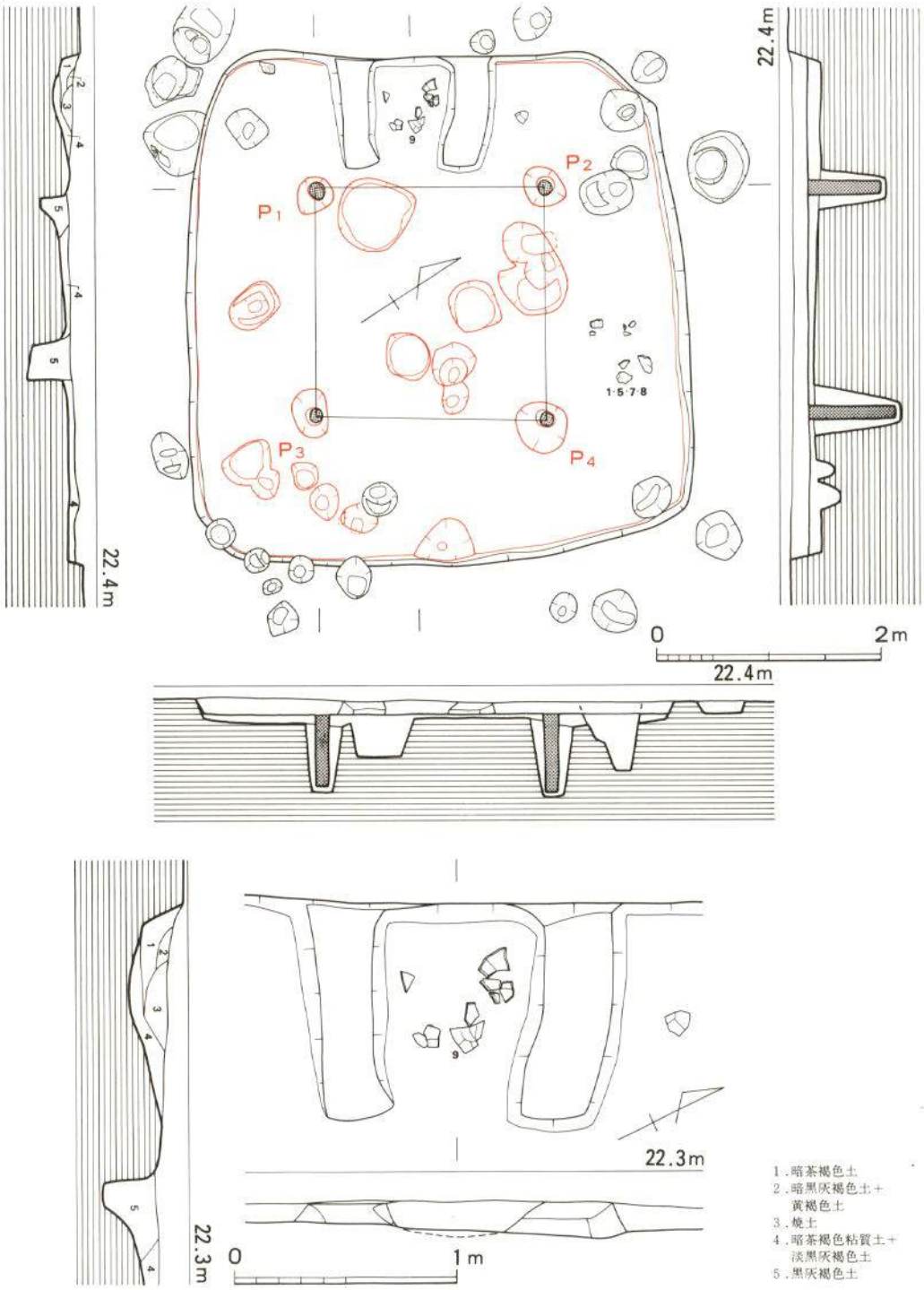
144～146号竪穴住居跡出土土器　（第147図）

この3軒の切り合い関係を確認中に取り上げた破片資料である。所属住居は不明である。

147号竪穴住居跡　（図版14、第31図）

144～146号住居の東に単独で営まれている。竪穴部のプランは台形を呈する。壁高は10cm前後である。床面に4本の主柱痕を検出した。貼床下層に、主柱穴及びカマド対面土坑かと思われるピットを検出した。主柱穴は意外と深く、貼床面からの深さは、最も浅いP_1が68cm、最も深いP_4が82cmである。

カマド（第31図）　竪穴部北西壁のほぼ中央に付設されている。袖部は基底部がしっかりと残っている。



第31図　147号竪穴住居跡（1/60）・カマド（1/30）実測図

出土遺物　(第147図)

9がカマド、1・5・7・8が床面、その他は覆土中から出土した。

148号竪穴住居跡　(図版14、第32図)

147号住居の南西に検出した。西隅部を149号住居に、東隅部を70号建物に切られる。竪穴部はカマドに対して横に広い平行四辺形に近い隅円方形を呈する。壁高は3cm前後で、ほとんど壁は残らない。床面に4本の主柱穴を、貼床下層に掘り込みを検出した。

カマド　(第32図)　北西壁の中央から北側に偏した部分に付設されている。基底部しか遺存しないので袖部が幅広く見える。火床の奥に小型の甕を倒立させて支脚とする。支脚の内部には、口縁部～頸部に粘土を、その上に地山と黒褐色土の混じった土を入れており、この土と内底面との間は3～5cmほどの空洞となっている。

出土遺物　(図版30、第148図)

5はカマドの支脚、4・6～8はカマド内、10は床面、2・11は北東壁際の後世のピット、1・9は覆土中、その他は貼床下層から出土した。カマド出土の小型甕7は同5と同様に支脚としての役割を担っていたものであろう。4・6～8は本住居に伴う。

石製品　(図版41、第125図)　床面で検出した砂岩製の仕上砥である。4面を使用し、欠損部付近に、得物を立てて研いだためについたと思われる細い溝が残る。

149号竪穴住居跡　(図版14、第33図)

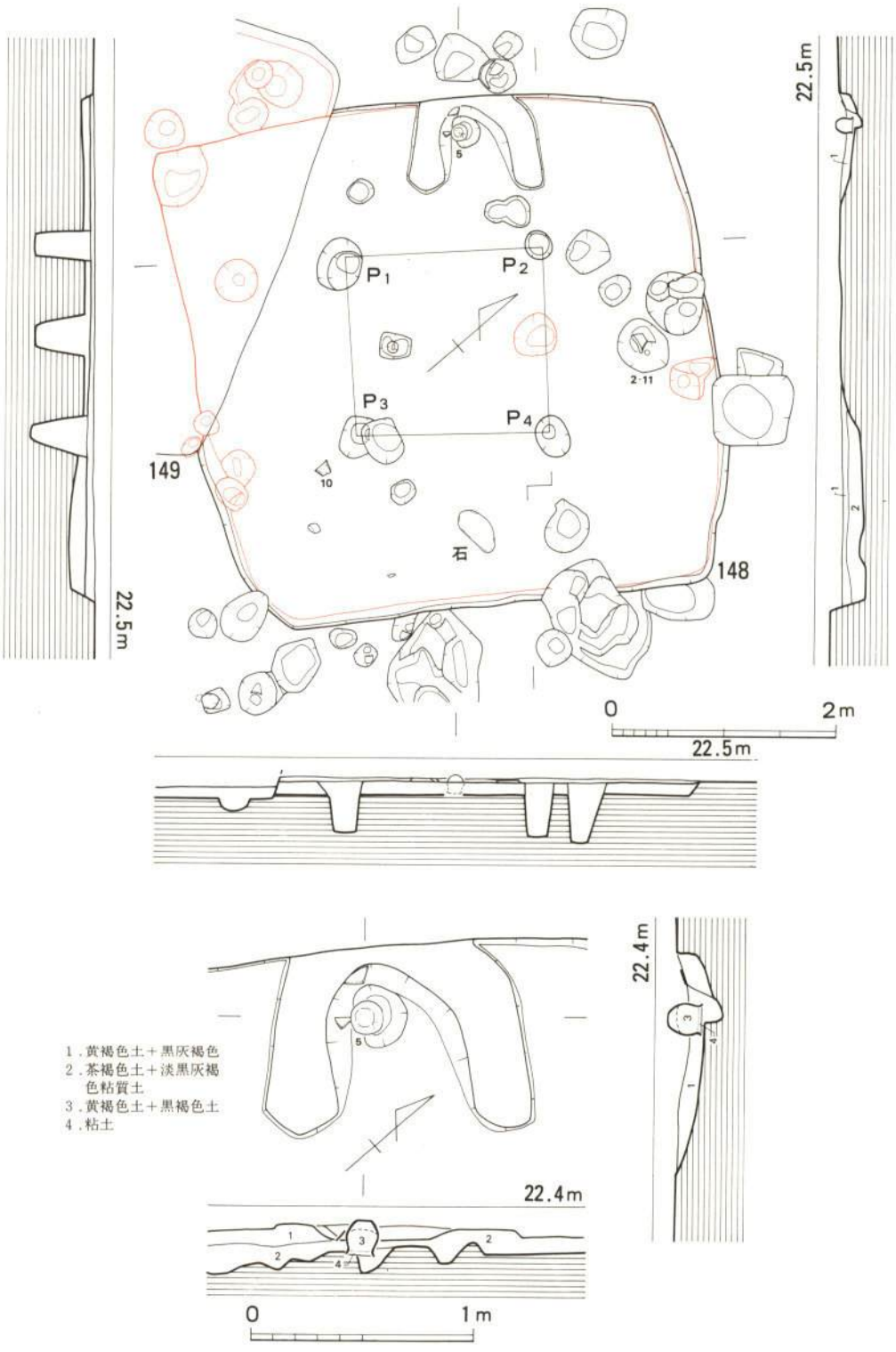
竪穴部の東壁が148号住居を切る。プランは、カマドに対して幅4.2m、主軸長4mの、横に広い隅円方形を呈する。壁高は10～15cmである。床面は中央部が高く、壁に向かって徐々に低くなる。床面に4本の主柱痕を検出した。貼床下層では、主柱穴、中央土坑、掘り込みを検出している。

カマド　(第33図)　北西壁の中央からやや南に偏して付設され、火床の中央に支脚を設置する。カマド内及び周辺から土師器が出土している。

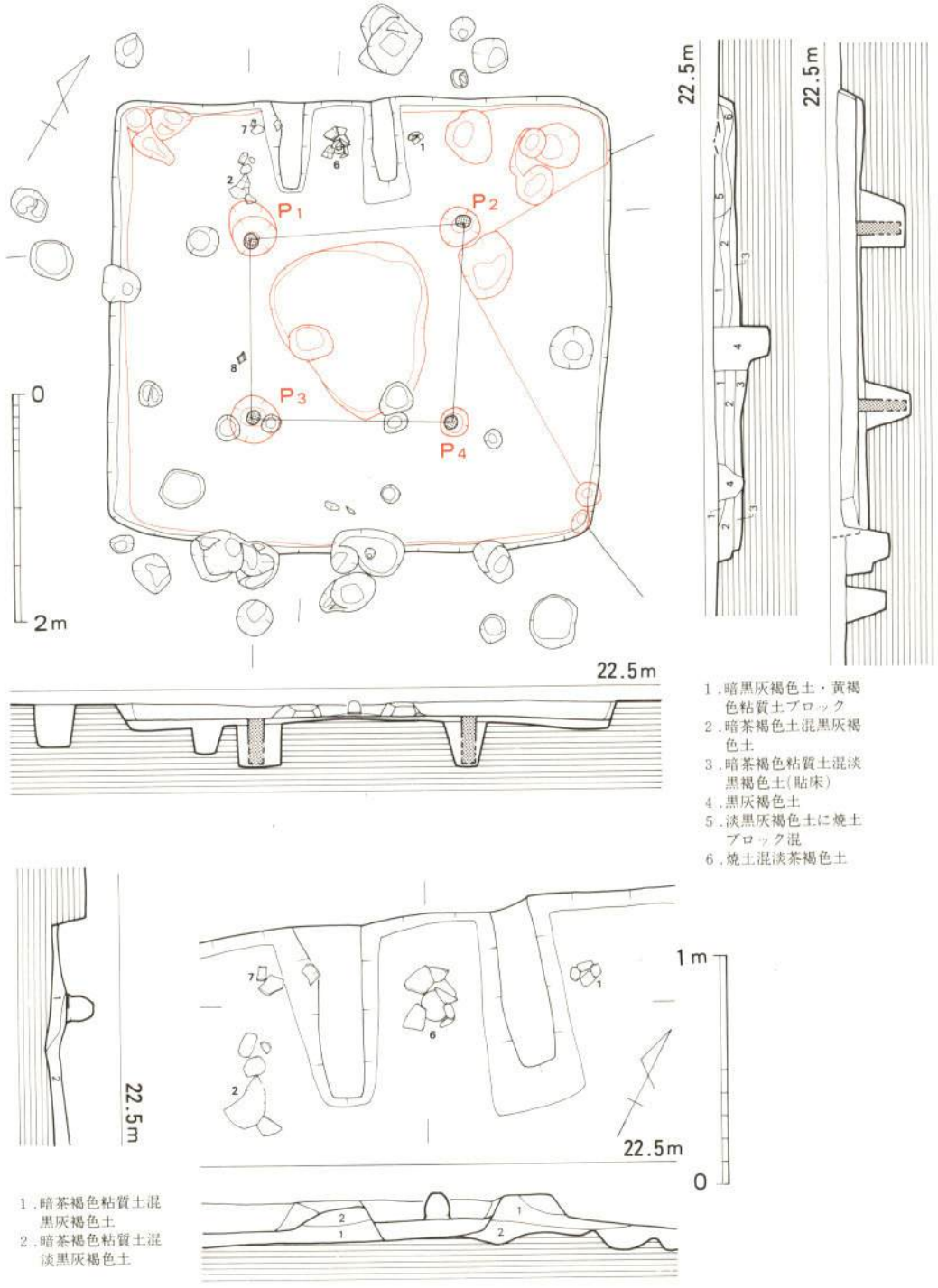
出土遺物　(図版30、第148図)

6はカマドの支脚で、1はカマド右袖横、2・7はカマド左袖横、8は床面で検出した。なお、カマド内で支脚の上に検出した土師器については、口縁部及び底部等を含まない破片であるため図示しなかった。本住居の支脚は他の例に比べて小型である。

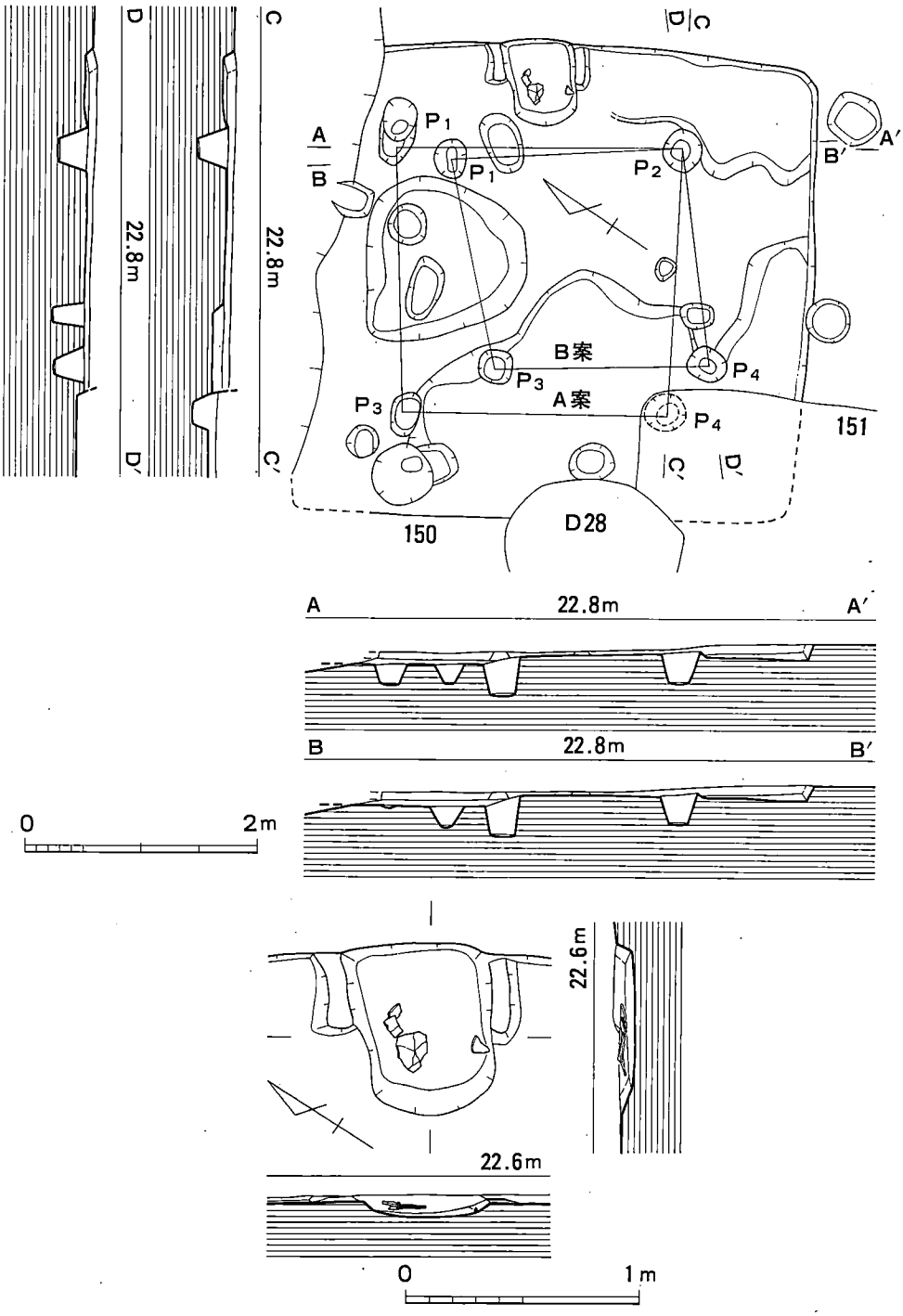
鉄滓　覆土中から2点出土した。



第32図　148号竪穴住居跡（1/60）・カマド（1/30）実測図



第33図　149号竪穴住居跡（1/60）・カマド（1/30）実測図



第34図　150号竪穴住居跡（1/60）・カマド（1/30）実測図

150号竪穴住居跡　(第34図)

150～160号住居の11軒は、本遺跡内においては微高地に立地するためか、現畑地を造る際に大きく削平を受けており、遺構検出の時点で、貼床面はもちろん、竪穴部はほとんど検出できない状況であった。この11軒の住居群は、東半部の150～154号住居の一群の主軸と、西半部の155～160号住居の一群の主軸は、各々のグループでほぼ統一されており、2グループの存在を想定できそうである。

本住居は135号住居の南西に位置する。南西隅を151号住居に切られ、東半部は60号建物と重複している。また、北西壁は現農道に伴う溝等により破壊されている。貼床面は遺存せず、図は貼床下層を含めて示している。柱配置についてはA・Bの二案がある。A案は主柱穴が4本とも揃うが、B案はP_4が検出できていない弱点がある。両案とも捨て難いので図示したが、住居一覧表の計測にはB案によった。

貼床下層では掘り込みを検出したが、中央土坑的な土坑をカマドの西側に検出した。

カマド　(第34図)　竪穴部北東壁に付設される。両袖部は火床の半分まで検出した。その前面部は掘りすぎたため図化できなかった。

出土遺物　(図版38、第119図)

焼塩土器が出土している。詳細は後述される。

151号竪穴住居跡　(第35図)

150・152住居を切り、153・154住居に切られ、61号建物と重複する。貼床面は残っておらず、カマドの位置も不明であるが、主柱穴番号は北壁にカマドがあると想定して付した(P_1～P_4)。中央土坑は存在しない。竪穴部の規模は、一辺4.2m前後であろう。

出土遺物　(第149図)

土師器破片を貼床下層底面に検出した。

152号竪穴住居跡　(第35図)

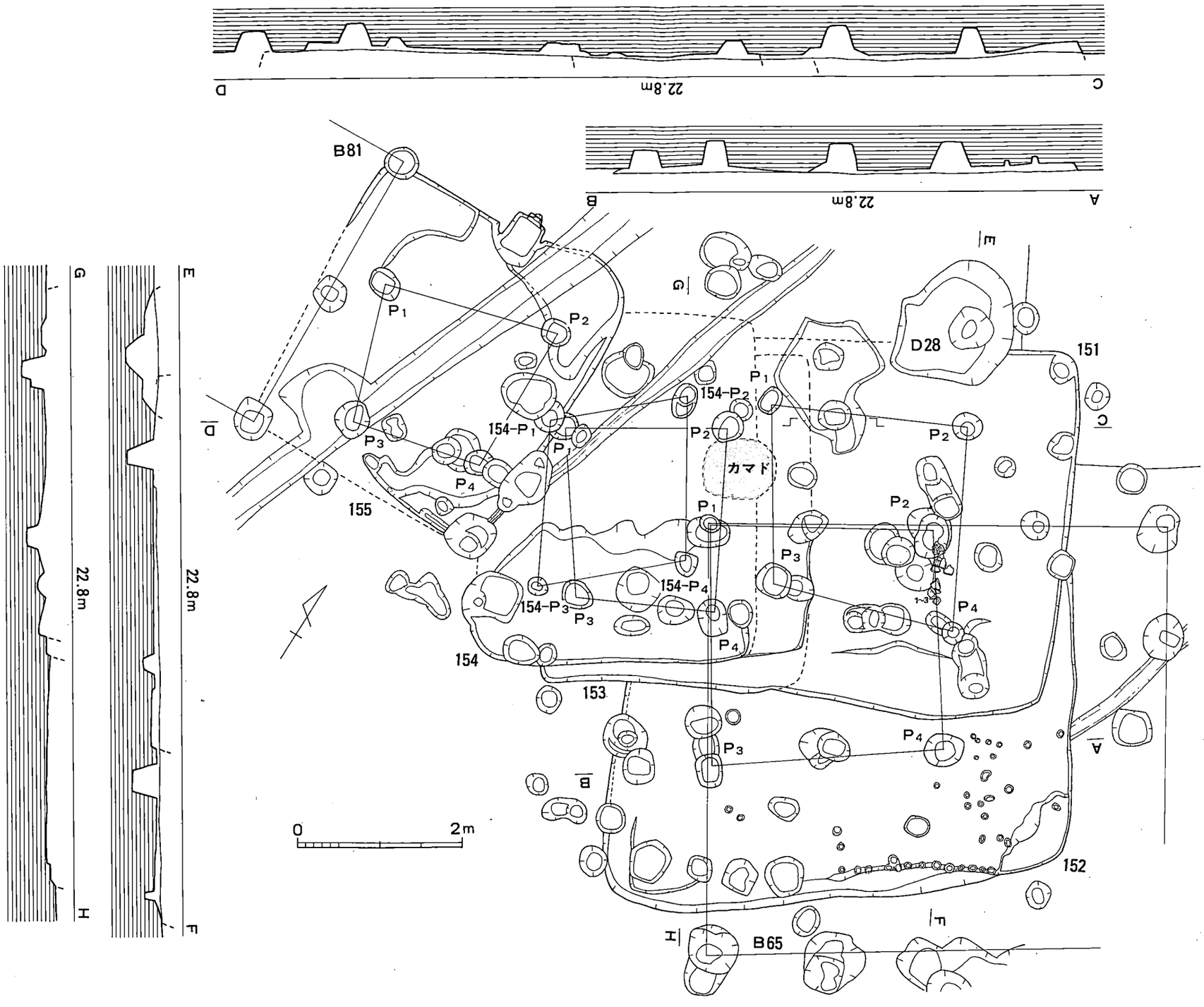
151・153・154号住居に切られ、61号建物と重複する。貼床面は残っておらず、カマドの位置も不明であるが、主柱穴番号は北壁にカマドがあると想定して付した(P_1～P_4)。中央土坑は存在しない。竪穴部は大型で、一辺5.5m前後であろう。南東側に小ピット群を検出した。

出土遺物　(第149図)

土師器破片を検出した。

153号竪穴住居跡　(第35図)

151・152住居を切り、154・155号住居に切られ、61号建物と重複する。貼床面は残っておら



第35図　151～155号竪穴住居跡実測図（1/60）

ず、カマドの位置も不明であるが、主柱穴番号は北壁にカマドがあると想定して付した（P_1～P_4）。中央土坑は存在しない。竪穴部の規模は、長辺4m前後、短辺3m前後であろう。図示できる土器は検出してない

154号竪穴住居跡　（第35図）

151～153 住居を切り、155号住居に切られ、61号建物と重複する。貼床面は残っていない。北東壁際に焼土を検出し、カマド火床の痕跡と推測する。中央土坑は存在しない。竪穴部の規模は、長辺4m前後、短辺3.2m前後であろう。

出土遺物　（第149図）

土師器破片を検出した。

155号竪穴住居跡　（第35図）

153・154住居を切り、西壁は85号建物の東柱列と重なる。貼床面は残っていない。カマドの位置も不明であるが、主柱穴番号は北壁にカマドがあると想定して付した（P_1～P_4）。中央土坑は存在しない。竪穴部の規模は、一辺4m前後である。

出土遺物　（第149図）

土師器破片を検出した。

156号竪穴住居跡　（第36図）

157・159号住居を切り、85号建物と重複する。貼床面は残っていない。カマドの位置も不明であるが、主柱穴番号は北壁にカマドがあると想定して付した（P_1～P_4）。掘り込みが巡るが、中央土坑は検出していない。竪穴部は大型で、長辺5.6m前後、短辺5.2m前後である。

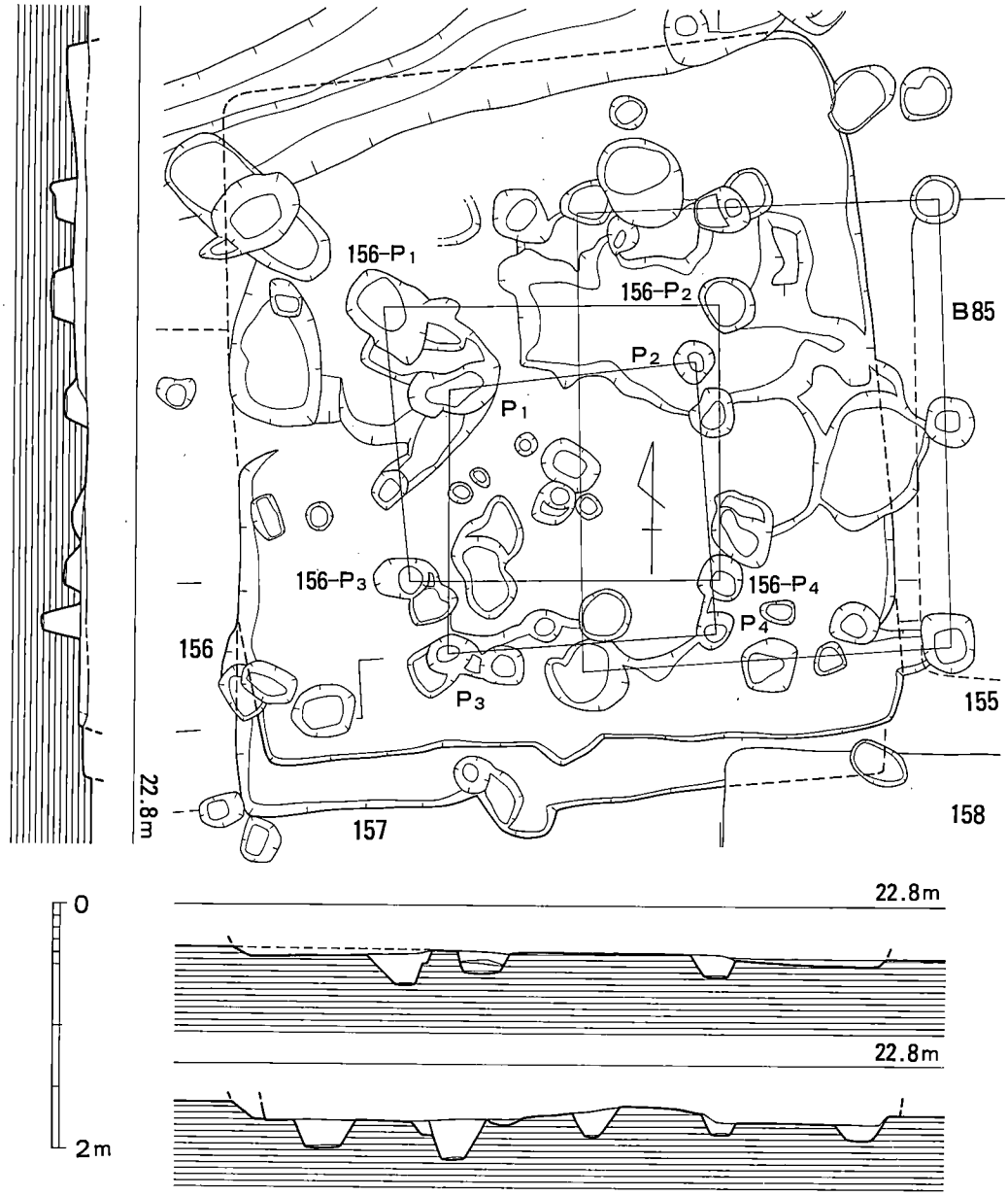
出土遺物　（第149図）

須恵器、土師器の破片を検出した。

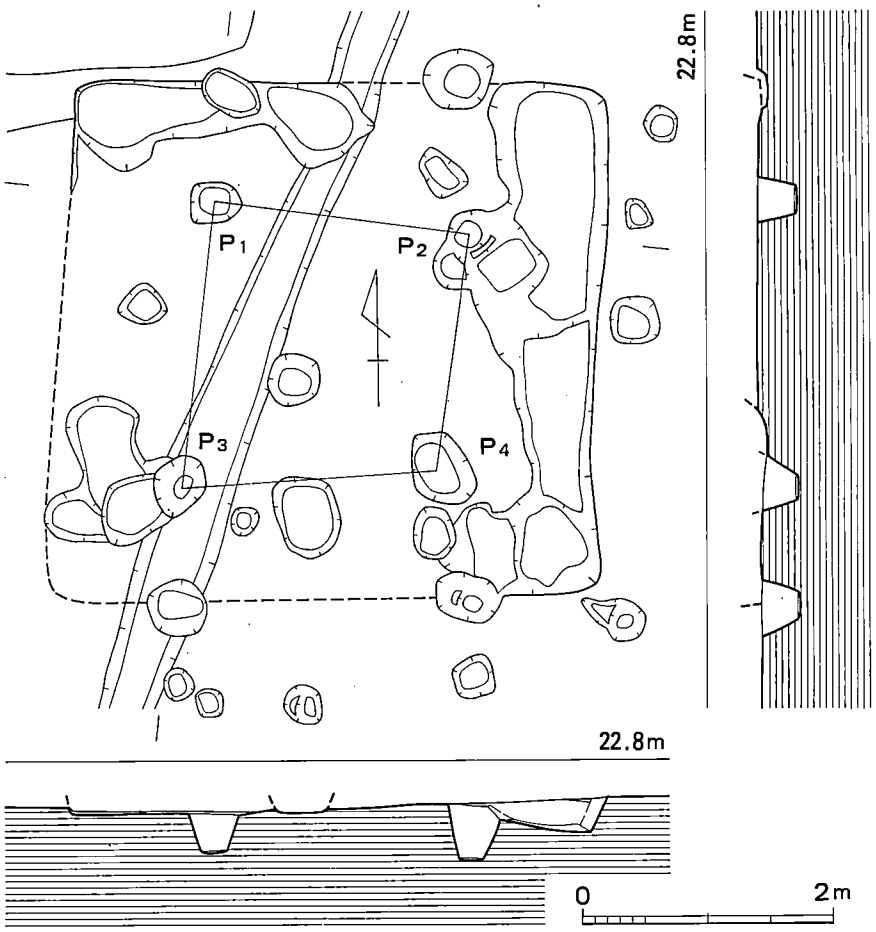
刻印土器　（図版37、第118図）　土師器坏の内底面に「封」を刻印している。破片資料であり、文字の下半を欠損している。

157号竪穴住居跡　（第36図）

156住居に大きく切られ、85号建物と重複する。貼床面は残っていない。カマドの位置も不明であるが、主柱穴番号は北壁にカマドがあると想定して付した（P_1～P_4）。貼床下層遺構は不明な部分を多く残すが、中央土坑がないことだけは確かである。



第36図　156・157号竪穴住居跡実測図（1/60）



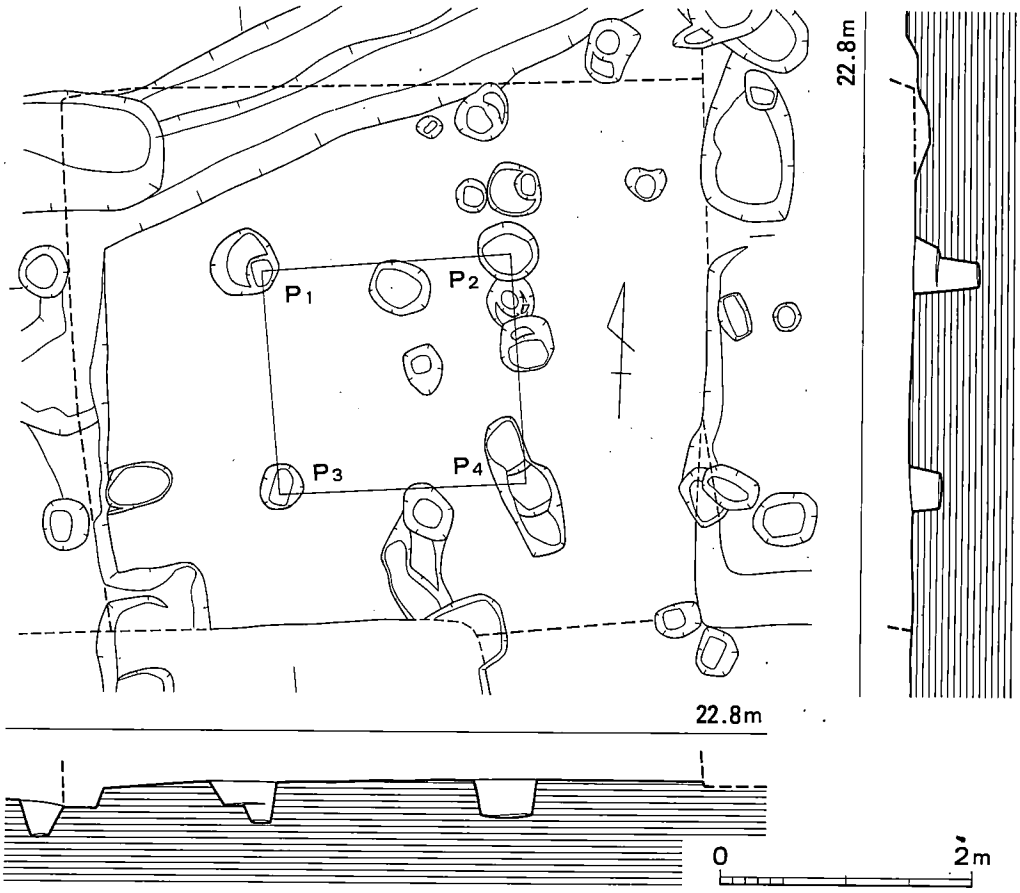
第37図　158号竪穴住居跡実測図（1/60）

158号竪穴住居跡　（第37図）

157号住居を切り、西側を幅50～60cmの浅い現代溝が南北に走る。貼床はもちろん、竪穴部の掘方も過半が削平されている。よって、プランは南西部を除いて遺存する隅角部と柱配置から、一辺が4.2～4.4mほどの竪穴部に復原される。カマドは北壁に付設されていたものと推定して主柱穴番号を付した。また、南壁にかかる二つのピットはP_3・P_4に相対した部分に位置し、深さも40cm以上でしっかりとしていることから、本住居の支柱穴と推測する。東壁際、北壁際西半部に明確な掘り込みを検出したが、中央土坑は存在しない。

出土遺物　（第149図）

土師器の破片ばかりが出土している。



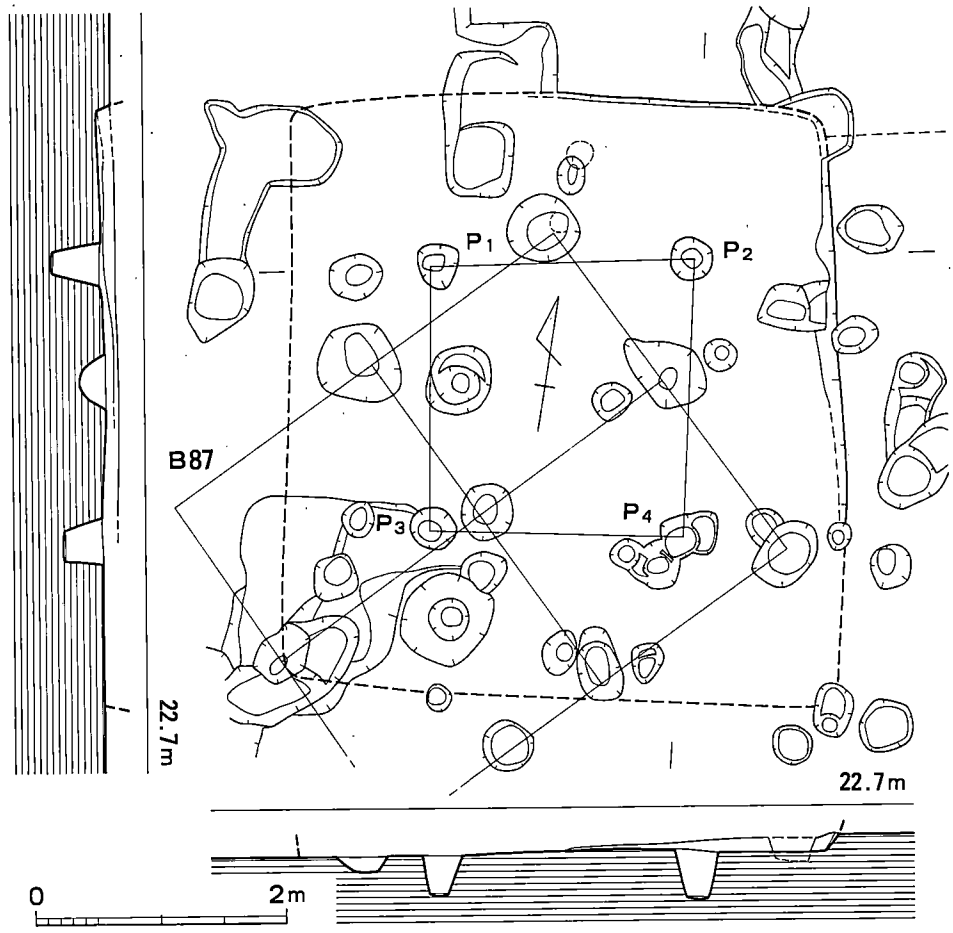
第38図　159号竪穴住居跡実測図（1/60）

159号竪穴住居跡　（第38図）

竪穴部は遺存しないが、P_1～P_4を主柱穴とした住居の存在を推測し、破線で示した。詳細は不明である。

160号竪穴住居跡　（第39図）

推定復原した159号住居の南に位置し、87号建物と重複する。竪穴部の掘方は北壁の東半、東壁の北半を除いて遺存しない。プランは柱配置と遺存する竪穴部の掘方から推定復原した。カマドは遺存しないが、北側に存在したと想定して主柱穴番号（P_1～P_4）を付した。削平が深く及んでいるため、貼床下層の遺構の存在については不明である。



第39図　160号竪穴住居跡実測図（1/60）

【161～168号竪穴住居跡：D区市道分】

以下、報告する8軒(161～168号住居)は、甘木市が計画した市道建設に係るもので、横断道の調査と並行して調査を実施した。確認調査の結果、調査対象地は最大幅8m、長さ100mの約600㎡とし、農道ははずした。

今回の報告分の隣接地であるので、ここに併せて、報告することとした。

なお、AII区市道分(179～184号住居）については、後述される。

161号竪穴住居跡　(図版15・16、第40図)

D区市道の東側に検出した古墳時代前期の住居である。この時期の遺構は、『宮原遺跡Ⅰ・Ⅱ』(『九州横断自動車道埋蔵文化財調査報告-14・17- 』1988・1990)において、B・C区の1～3号住居、AⅠ区の溝を報告している。この溝は、本市道の西部でも検出している。

さて、本住居は竪穴部の大半が調査区外に延びる。西から細い現代溝が走り来たって本住居を一部破壊する。竪穴部の南壁は平面的には完存し、長さ8.3mを測る大型住居で、B区3号住居と同規模である。床面には、壁小溝を巡らし、南壁際のほぼ中央に屋内土坑A(B区3号住居参照；上記報告－14－)を検出した。調査区内には屋内土坑Bは検出していない。炉跡は調査区外であろう。主柱穴は、B区3号住居ほどにはしっかりしたものではないが、P_3を検出した。床面には多くのピットが存在するが主柱穴の位置にあるのはP_3しか考えられない。

屋内土坑Aは二段掘になっており、一段目は上端で長径1.3m、短径0.96mで深さは7cmほどである。蓋をかぶせるためのものであろうと思われる。二段目の本体は上端で径0.7m程の円形に近い形状を示し、深さは0.55mほどである。2層目の灰と焼土を含む層から小型甕11が出土した。

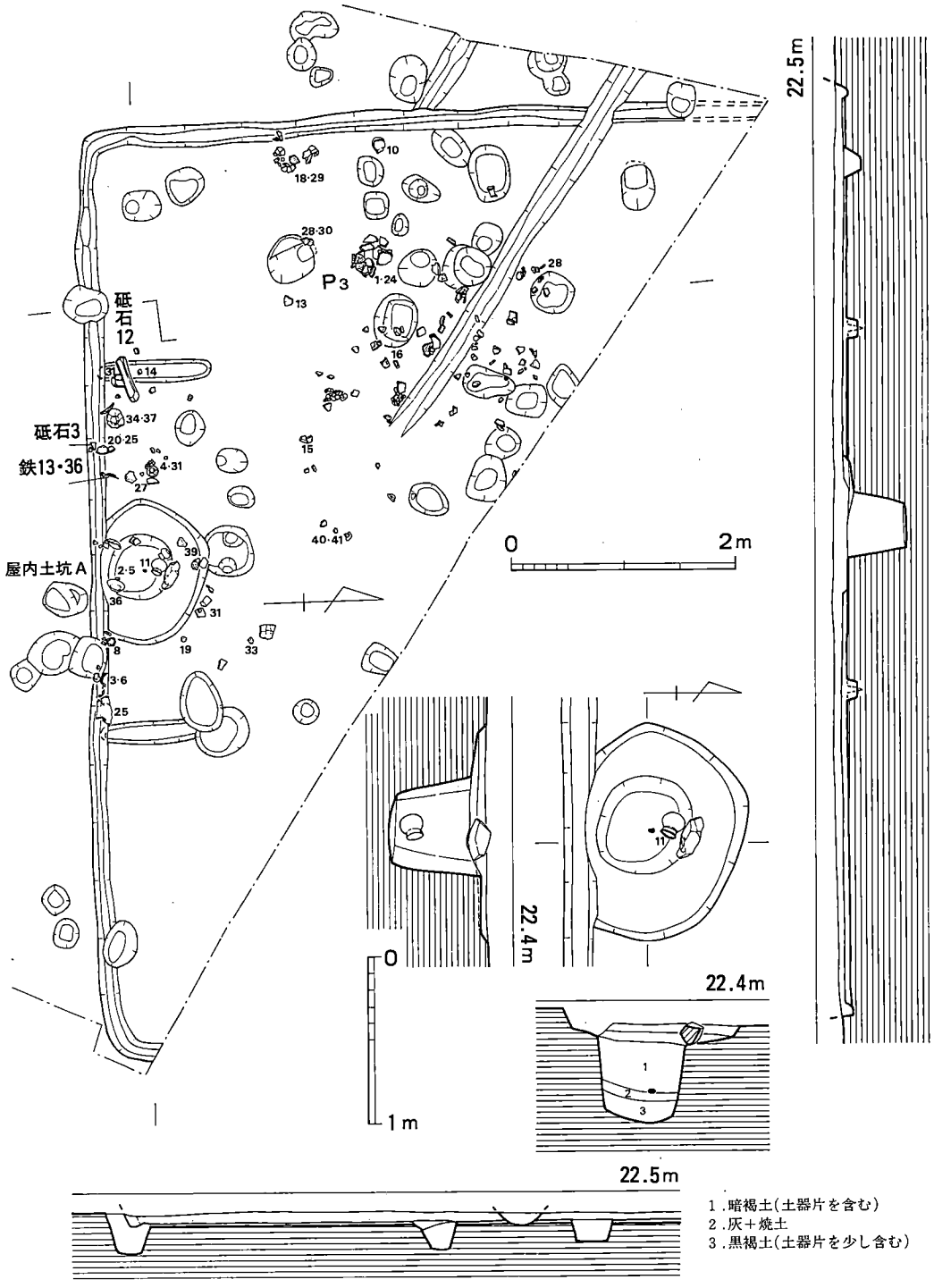
屋内土坑Aの両側に、壁に直交して小溝を各々1条検出した。掘りすぎて幅広くなっているが、この溝は、B区3号住居の例から、板材を床面に打ち込んで区画した遺構であろうと推測する。場合によれば、この部分に竪穴部への昇降施設があった可能性がある。

出土遺物　(図版30・31、第149～152図)

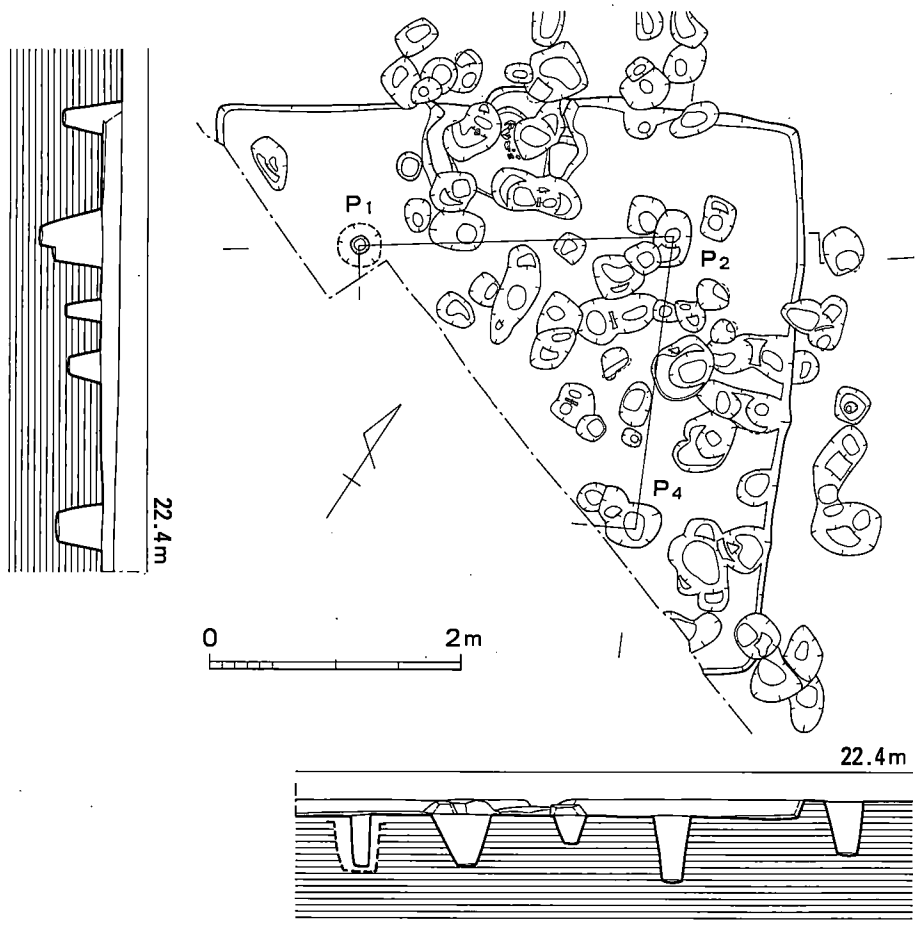
B・C地区の同時期の1～3号住居と同様に、床面に多量の土器を検出した。図示できるのは43個体で坩・甕・高坏が主体を占める。西・南側の壁際に検出したものが多く、なかでも、屋内土坑Aの周辺に集中している。また、屋内土坑Aの2層目に小型甕11を検出した。図示したもののうち、9・12・17・21・22・26・32・38・42・43は覆土中から検出した。壁際から離れた床面に検出した土器は割れて小片化し、図化できないものが多い。壁際付近の土器も置かれていた状態を示して割れているものはなく、先述の小型甕11が本住居の廃絶期を示す唯一のものである。

鉄製品(図版42、第127・128図)　屋内土坑Aの西の壁際に刀子(13)、鉄鏃の茎か針と思われるもの(36)を検出した。ともに破片で、投棄されたものであろう。また、屋内土坑Aの2層目の灰・焼土層の上面に鉄滓を1点検出した。

石製品　(図版40・41、第125図)　屋内土坑Aの西の壁際に砥石を2点検出した。3は凝灰岩製の仕上砥の破片である。12は砂岩製の大型の砥石で6面を使用している。



第40図　161号竪穴住居跡（1/60）・屋内土坑A（1/40）実測図



第41図　162号竪穴住居跡実測図（1/60）

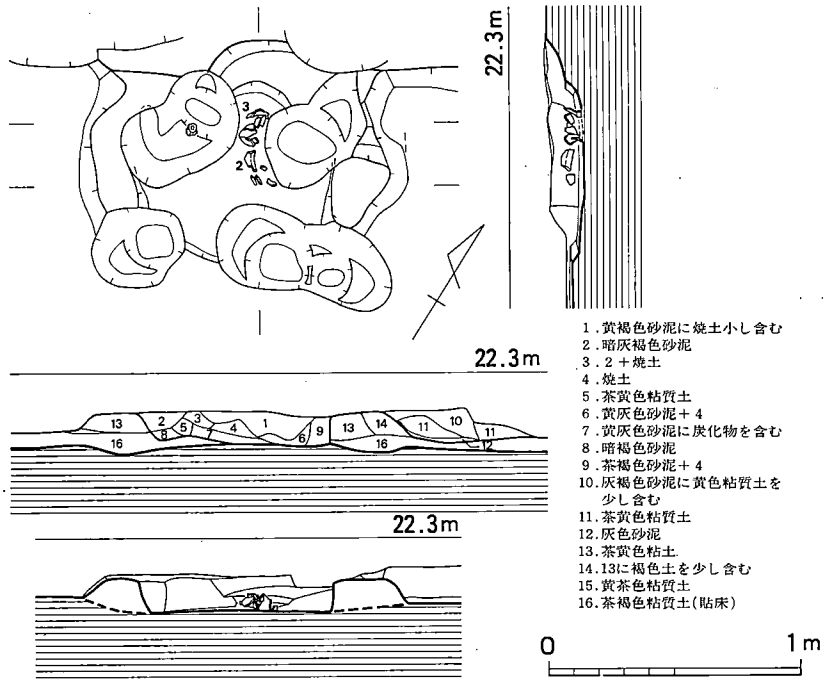
162号竪穴住居跡　（図版16、第41図）

農道をはさみ、161号住居の西に検出した。竪穴部のほぼ半分は調査区外に広がる。竪穴部は北西壁長4.6m、南東壁長4.3mを測る。床面は後世のピットで大きく攪乱されている。よって、調査中に床面を掘りすぎたため、北隅の一部を除き貼床は検出していない。主柱穴はP_3を除き3本分を検出した。なお、貼床を検出した北隅のP_1では主柱痕を確認できた。中央土坑及び掘り込みは検出していない。

カマド　（第42図）　北西壁のほぼ中央に付設されている。後世のピットで大規模に破壊されているが、幸いにも火床に小型甕の支脚が割れながらも遺存していた。

出土遺物　（第152図）

3は支脚で、2はカマドから出土した。



第42図　162号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

163号竪穴住居跡　（図版17、第43図）

162号住居の15mほど西に位置し、この部分は6軒の住居が切り合っている。本住居は、164～166号住居に大きく切られ、北側の調査区外に延びる。165号住居の貼床下層に本住居の南西隅を検出した。よって、竪穴部の南壁の長さがわかり、5.2mほどを測る。カマドの位置は不明だが、北壁に付設されていると想定して主柱穴番号（P_1・P_3）を付した。貼床下層に、きれいに一巡する掘り込みを検出したが、中央土坑等は検出していない。

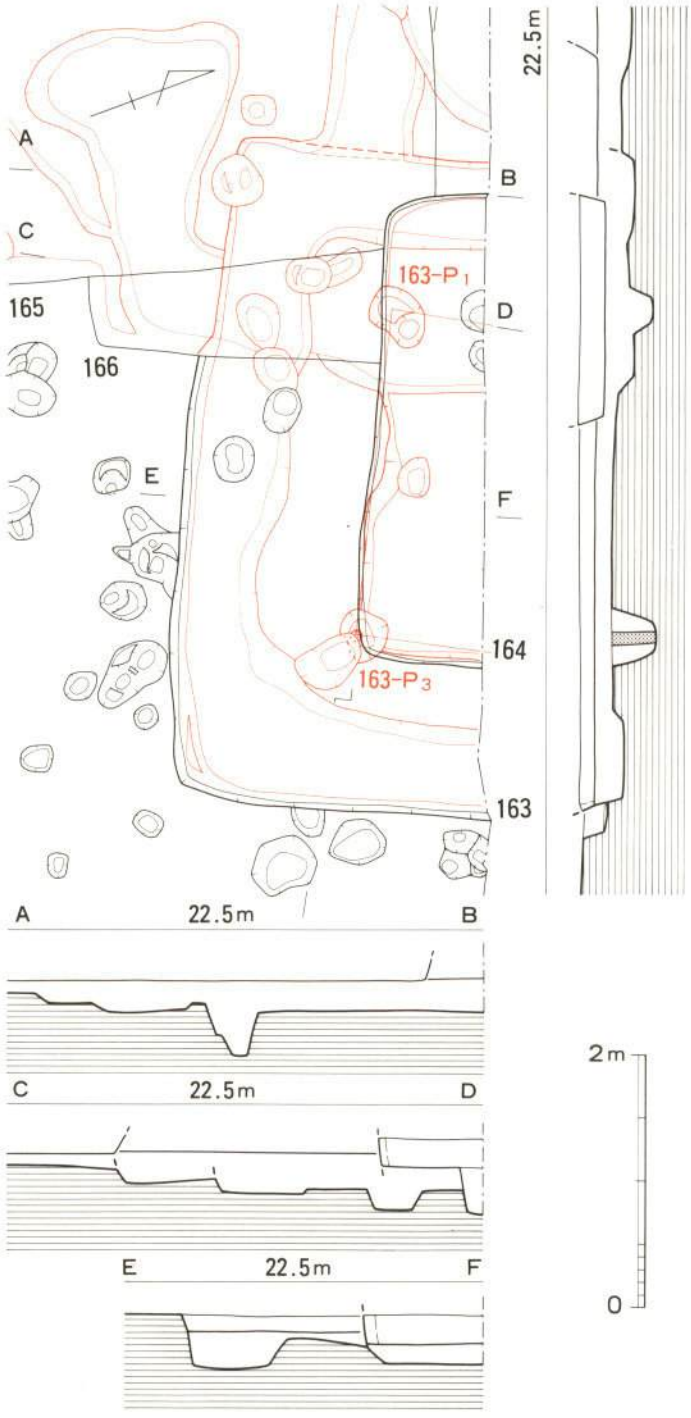
出土遺物　（第152図）

貼床下層から出土した須恵器甕片1点図示した。

鉄製品　（図版42、第128図）　東壁際の床面に鉄鏃の茎2本(33・35）を検出した。

164号竪穴住居跡　（図版17、第43図）

163・165・166号住居を切り、過半は北側の調査区外に延びる。検出した竪穴部の南壁の長さは、3.5mほどで、竪穴部の規模は小型である。主柱穴、カマドとも調査区外ににあるため不明である。貼床下層の遺構は確認できなかった。



第43図　163・164号竪穴住居跡実測図（1/60）

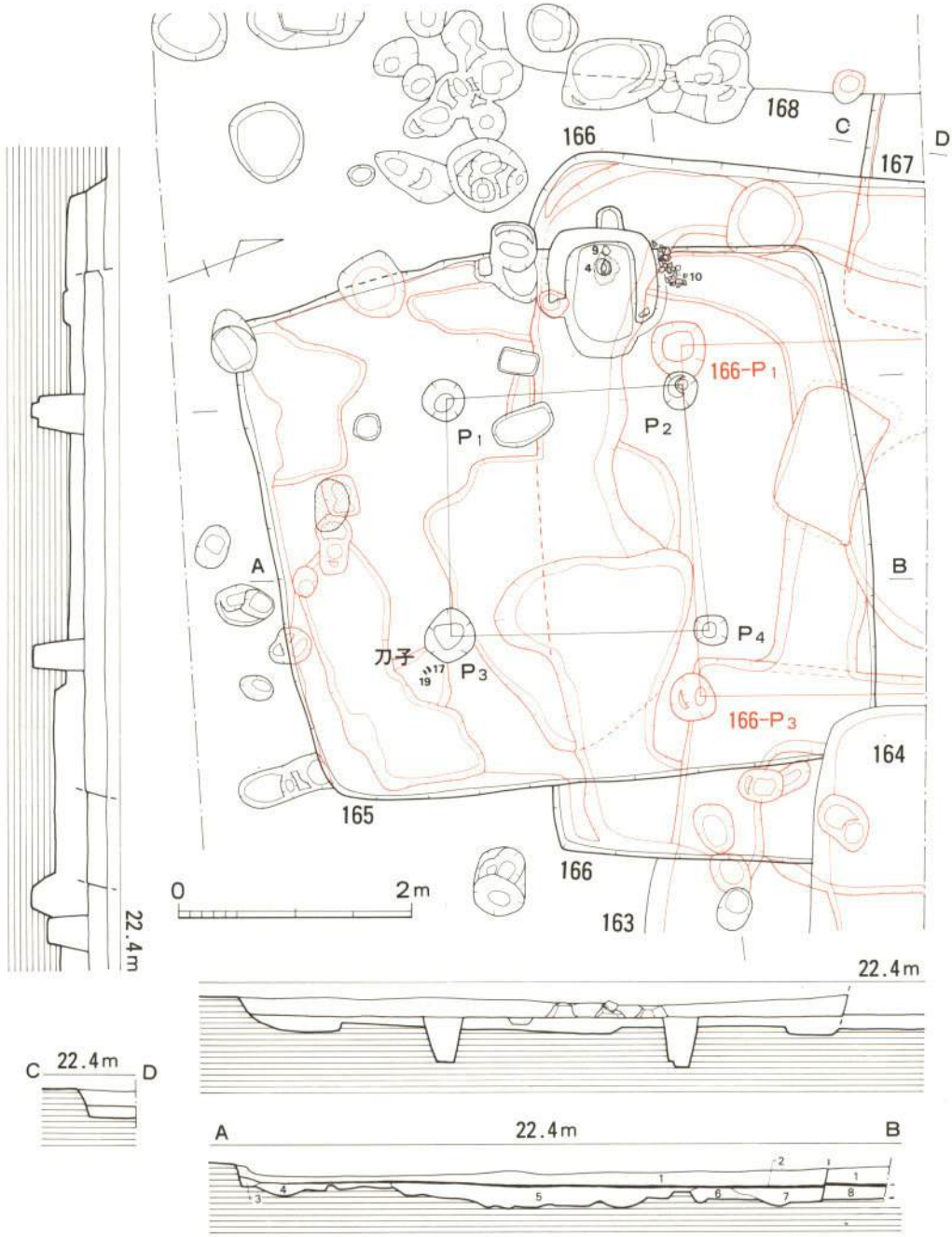
165号竪穴住居跡

（図版17、第44図）

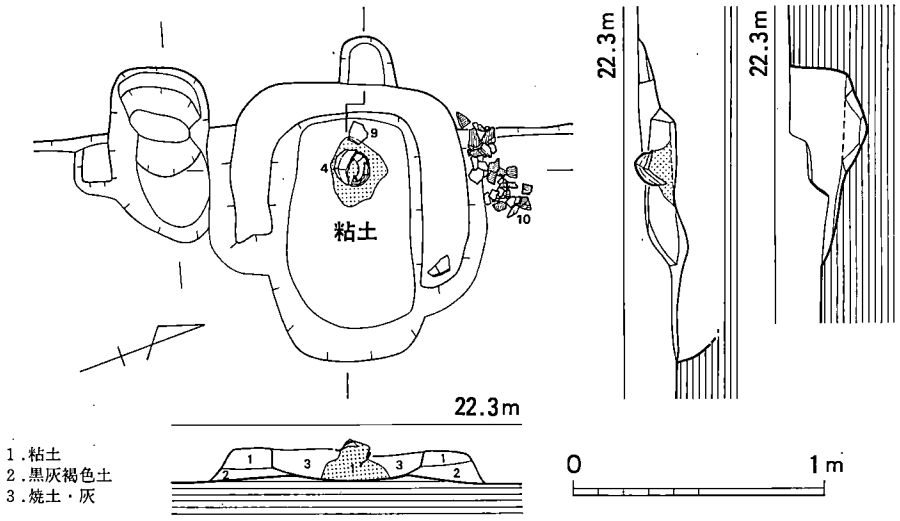
北東部の隅を164号住居に切られ、163・166号住居を切る。地山にプランを検出した際に焼土を２ケ所確認したので、2軒の住居が重複していると考えて調査を進めた。床面には１軒分の主柱穴を検出したが、貼床下層には更に１軒分の主柱穴を確認することはできなかった。また、図示したプランの貼床面に乱れはなく、貼床の下層遺構も１軒分のものと判断された。

さて、本住居は南北に広い隅円方形を呈し、各壁の長さはまちまちである。各壁の長さは西壁から時計回りに示すと、5m、4.1m、4.7m、4.15mである。床面に４本の主柱穴（P_1～P_4）を検出した。これらの主柱穴の配置は、ほぼ方形を呈し、壁からの距離はまちまちである。また、南壁寄りに粘土を検出した。貼床下層には掘り込みを巡らし、中央土坑を検出した。

なお、北壁下に１号おとし穴を検出した。



第44図　165～167号竪穴住居跡実測図（1/60）



第45図　165号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

カマド　（第45図）　西壁の中央より北に偏した位置に検出した。竪穴部から15cmほど突出し、煙道が一部残る。支脚は火床の奥に、粘土で台座状のものを造り、その上にセットされている。本カマドの左（南）に検出した焼土を除去したところ、左に袖部と思われる粘土が一部遺存する。竪穴部から20～25cm突出し、その部分の底面は一段深く掘り下げられたピットが存在する。この遺構は、ピットを隠すように粘土を貼って火床となしたカマドであろう。何らかの理由により、右側の大型のカマドが必要になり、並列して造ったものであろう。両者から焼土が検出されており、並用された可能性がある。右側カマドの左袖は、位置的に左側の小型のカマドの右袖の位置に相当し、両カマドの袖部として併用された可能性がある。

出土遺物　（第152・153図）　4はカマドの支脚、9はカマド内、10はカマド右袖横、3・8は床面、7は貼床下層の中央土坑、その他は覆土中から出土した。

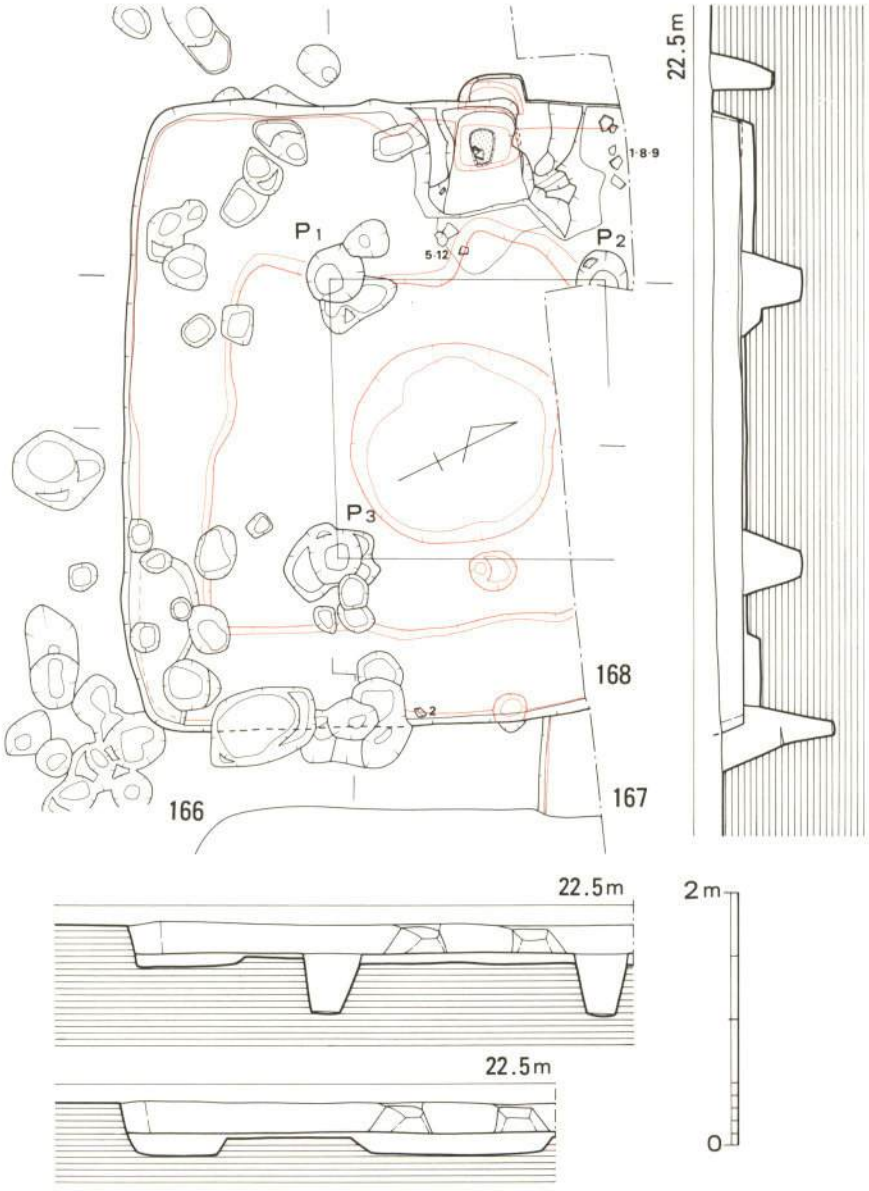
鉄製品　（図版42、第127図）　主柱穴P_3の横の床面に2点の鉄製品（刀子）を検出した。17は破片で、19は茎の破片である。

166号竪穴住居跡　（図版17、第44図）

163・167号住居を切り、164・165号住居に切られ、過半は調査区外に広がる。南壁の東西の隅部から、南壁の長さは5.9mを測り、竪穴部の規模は大型である。カマドは北壁に付設されたとして主柱穴（P_1・P_3）番号を付した。貼床下層に掘り込み、中央土坑、おとし穴を検出した。

焼塩土器　（図版38、第119図）　図上で完形に復原できる、鉢形の尖底のものである。

鞴羽口　（図版39、第119図）　覆土中に検出した極小片である。



第46図　168号竪穴住居跡実測図（1/60）

167号竪穴住居跡　（図版17、第44図）

166・168号住居に切られ、過半が調査区外に延びるため詳細は不明である。

石製品　（図版41、第125図）　砂岩製の仕上砥の破片である。鉄器を立てて砥いだと思われる細い溝が残る。

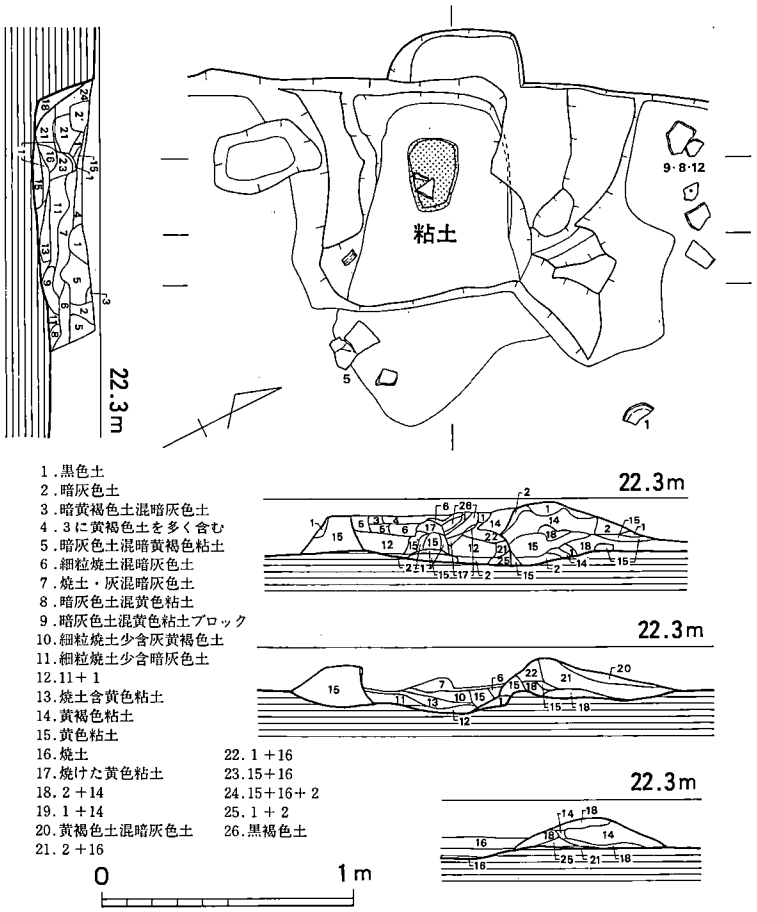
168号竪穴住居跡　（図版17、第46図）

138号住居の南東に検出し、167号住居を切る。竪穴部のほぼ1/3は調査区外に延びる。全体を検出できた壁は南壁だけで、その壁長は5mほどである。主柱穴はP_4を除き３本を検出した。貼床下層に、掘り込み・中央土坑を検出した。

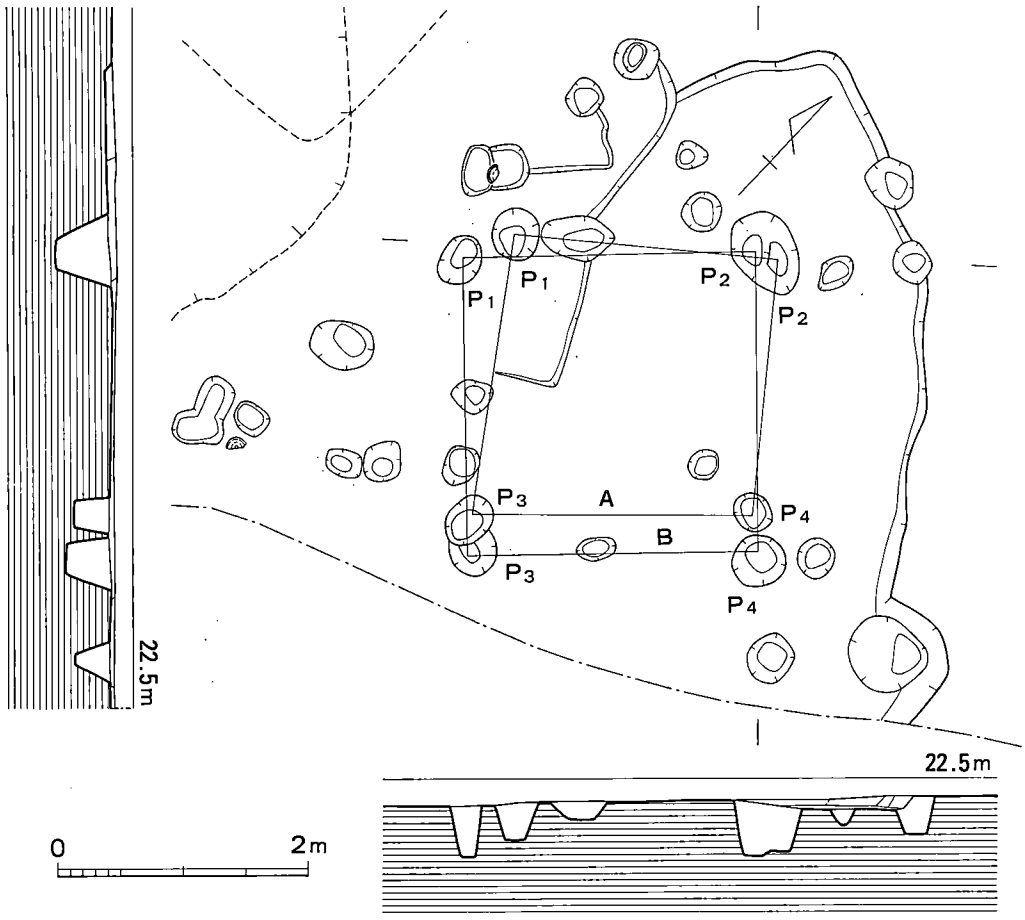
カマド　（第47図）　西壁に造られ、20cmほど突出する。支脚ははずされている。

出土遺物　（図版31、第153・154図）

1・5・8・9・12はカマド周辺、2～4・6・7・10は覆土中、11は床面から出土した。



第47図　168号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第48図　169号竪穴住居跡実測図（1/60）

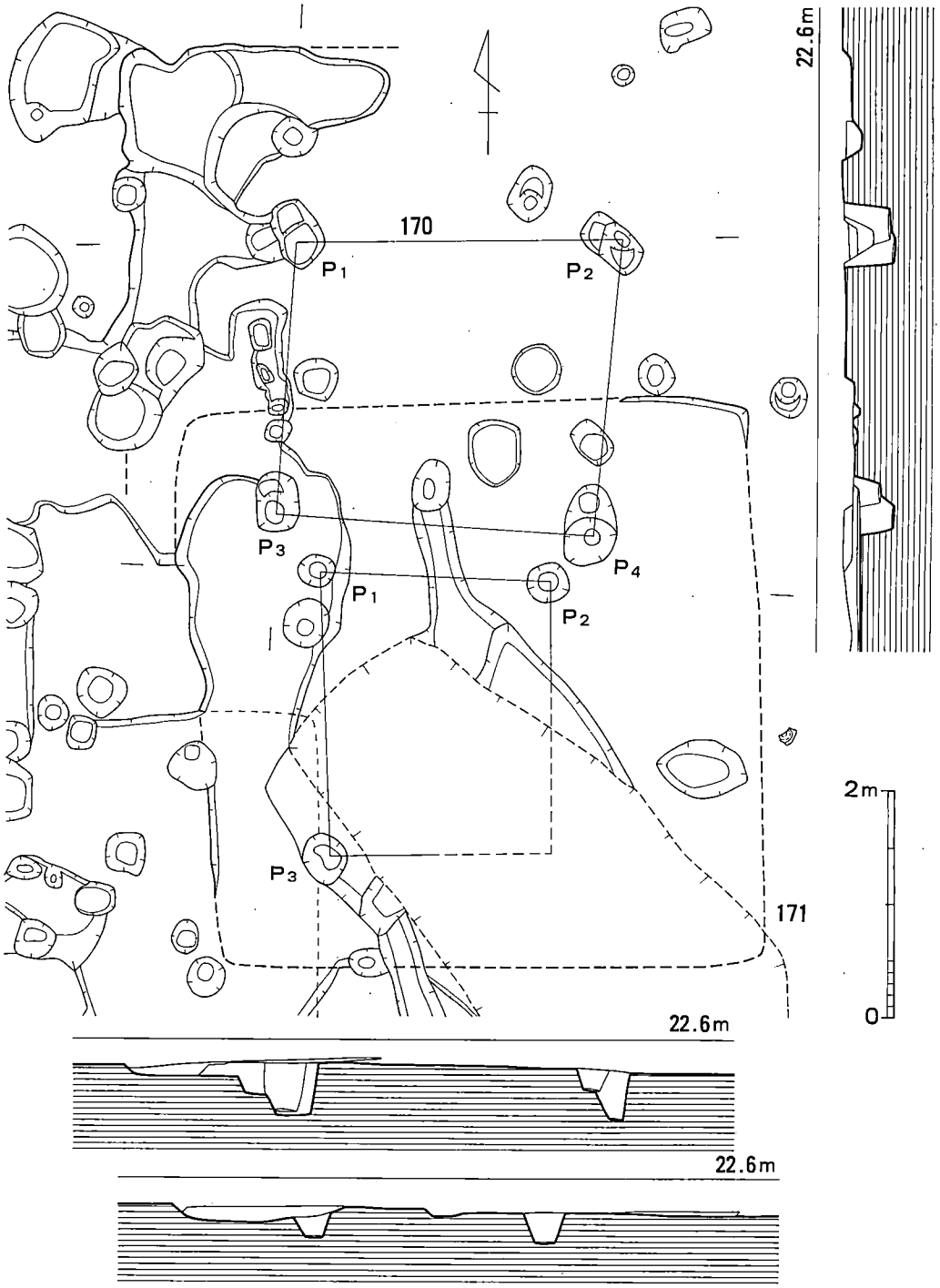
169号竪穴住居跡　（第48図）

調査区内の南壁際に位置し、床面も削平されている遺存状況の不良な住居跡である。僅かに遺存していた北東側の下層掘り込みと主柱穴とで住居跡と確認された。

床面下層の掘り込みは北東側のみが該当すると考えられ、この地の窪みについては撹乱等の所産であろう。掘り込みは主柱穴周辺部より壁際が５cm～10cm程深くなり、溝状に近い形状である。この掘り込みに則して主柱穴を配置しているが、AとB２通りの主柱穴配置が考えられる。これは柱間隔と深さを考慮したものであり、立て替えか重複した２軒の住居跡かもしれない。主柱穴配置から中型規模の住居跡と推測される。遺物は出土していない。

170号竪穴住居跡　（第49図）

169号住居の北西側に隣接して、主柱穴と北西部の床面下層遺構のみが遺存する住居跡であ



第49図　170・171号竪穴住居跡実測図（1/60）

る。図面上で復原したものだが、当遺跡では一般的な竪穴住居跡の形態をなしているので、ここでも竪穴住居として採用した。

主柱穴は方形に配置しており、柱穴間の間隔が2.3m～2.9mとやや広い。住居に付随するもう一つの遺構は北西部の掘り込みが該当し、隅部で最も深くなって鋭角に曲がり、60cm～80cmの幅の溝状を呈している。深さが7cm～8cm程しかないことから、貼床や生活面は完全に削平されていた。この様な遺存状況から、171号住居との新旧関係は不明である。

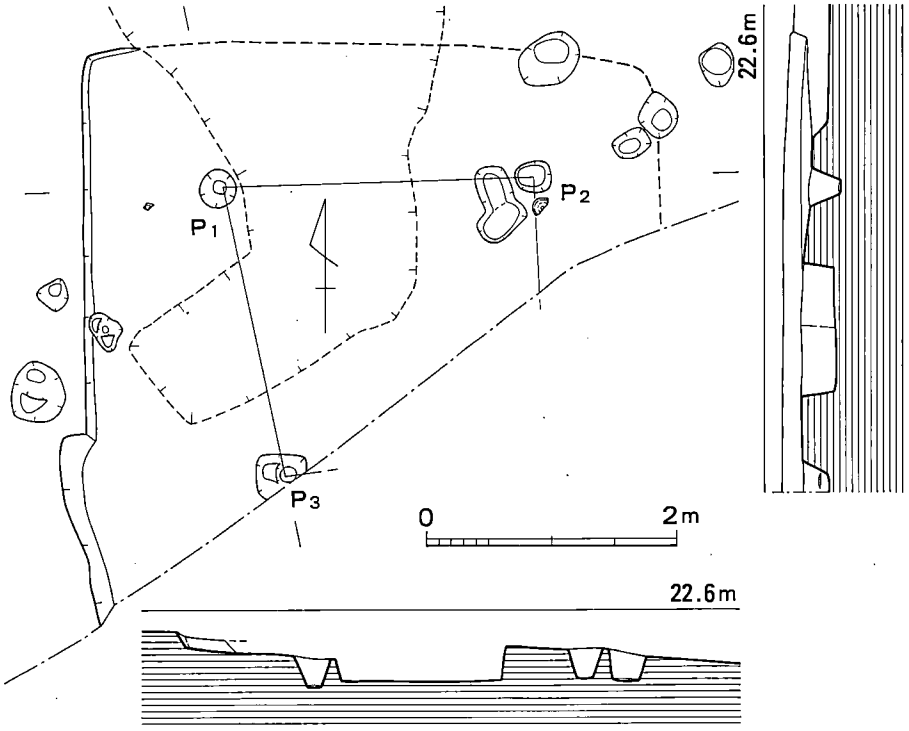
出土遺物もなく時期不詳な住居跡だが、主柱穴と掘り込みから辺長が5mを越える大型の住居跡に復原される。

171号竪穴住居跡　（第49図）

170号住居の南側に位置して、当住居も主柱穴と床面下層の掘り込みしか遺存しない住居跡であり、170号住居とは重複するものの新旧関係は不明である。また、169・173号住居とも一部で重複するが、新旧関係を解明するまでには至らなかった。

主柱間エリア内から南西隅にかけて撹乱されているので、P_4に相当すると考えられる柱穴は遺存していない。他の柱穴では2.1m～2.5mの柱間距離となり、柱穴配置も遺存する掘り込みと略平行で、方形の平面形になると推測される。床面下層の掘り込みは西壁と北東部隅及び南壁の一部が残っており、復原してみると5m前後の規模になる。

東壁際の土師器は復原住居の外方に位置している。共伴する遺物は出土していない。



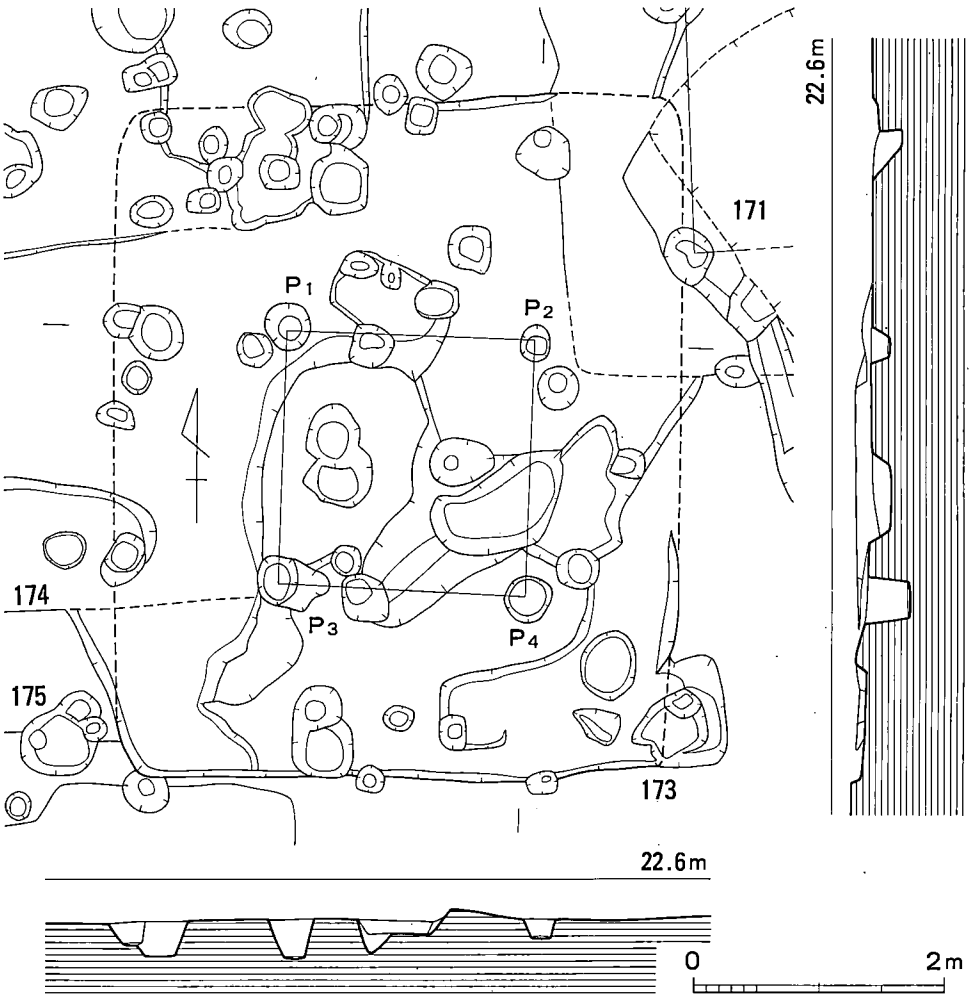
第50図　172号竪穴住居跡実測図（1/60）

172号竪穴住居跡　（第50図）

169号住居と一部で重複すると考えられるが、当住居も床面下層遺構と主柱穴で復原した住居跡であり、新旧関係については不明となる。約1/3が調査区外に伸展するばかりか、171号住居内より伸びる撹乱坑が中央部まで達しており、遺存状態の不良な住居跡である。

主柱穴は2.3m～2.5mの間隔で配置しているが、P_4に相当する柱穴は調査区外となる。床面下層の掘り込みは西壁側が比較的残りが良く、壁際で10cm～20cmの深さとなる。住居の規模については辺長が4.5m程に復原されよう。

床面下層から須恵器坏の身と蓋が出土している。しかし、調査時には住居跡との認識がなく、包含層の遺物として採り上げたため、今回は図化をしていない。次報告に掲載する次第です。



第51図　173号竪穴住居跡実測図（1/60）

173号竪穴住居跡　(第51図)

隣接している171・174・175号住居と部分的に重複しているが、多数の撹乱坑と柱穴が存在しているだけではなく、当住居跡も主柱穴と床面下層の掘り込みの一部から復原しており、各住居間との新旧関係は確認していない。

南壁側と北壁側の一部で掘り込みが遺存しており、南壁で4.5mの辺長となるが、南北の辺長は中央部で5.4mを測りやや長くなる。主柱穴は各柱穴間が2mとなり、平面形態が正方形の柱穴配置をとっている。以上より、大型に近い中型規模の住居跡に復原される。

遺存状態の不良な住居跡であり、遺物は出土していない。

174号竪穴住居跡　(第52図)

175号住居と大半以上が重複しているものの、両住居とも遺存状況が極めて不良であり、新旧関係は確認していない。周辺部の住居跡と同様、一部の床面下層の掘り込みと主柱穴とで復原した住居跡で、主柱穴については図示した配置が妥当と考えている。

掘り込みは、西半部が「L」字状に遺存し、東半部では北東隅が僅かに残っている。西半部では、南壁側が溝状の形態となっており、西壁側は重複しているので旧態を止めていないが、溝状の形態の場所も一部で見られる。検出面では、幅が1m～1.2m、深さが10cm～15cmを測る。この掘り込みから、東西の辺長が5.4cm程に、南北の辺長が5m程に復原される。主柱穴は少し歪んだ方形の形状に配置されているが、1.85m～2mの間隔となる。主柱間エリア内に土坑状の落ち込みを検出したが、8cm程の深さしかないものの中央土坑とも考えられる。

175号竪穴住居跡　(第52図)

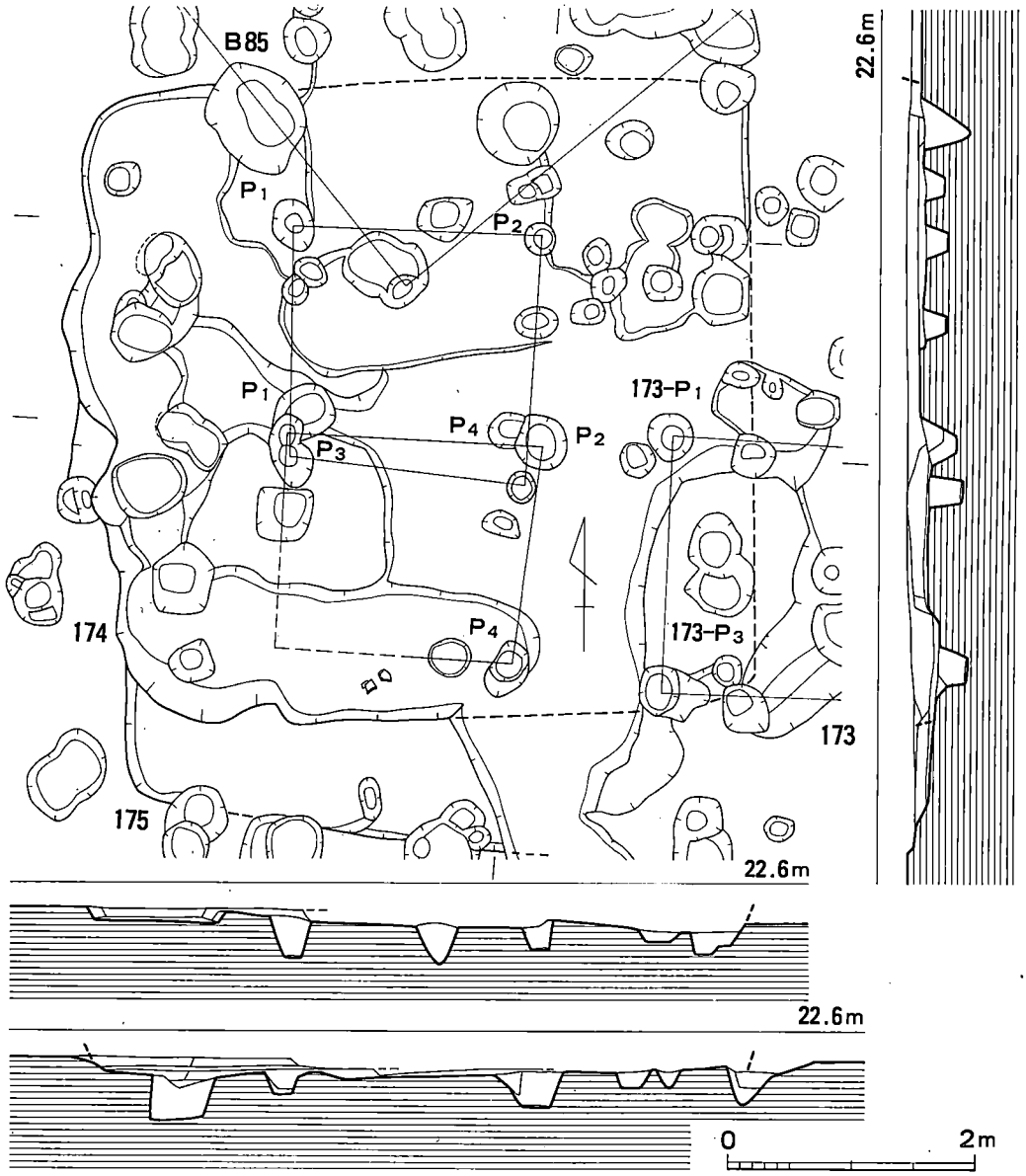
174号住居の少し南側に位置する。周辺の住居よりも不明瞭な掘り込みではあるが、図示している主柱間エリアの外側1m～1.5mが相当すると考えられ、主柱穴も3本しか遺存しないものの、住居跡の可能性は高いと考えている。

床面下層の掘り込みは、南壁際で5cm程、東壁際で10cm程の深さを測る。南壁で4.3mの辺長となるが、南北の辺長は4m程と推測されて、中型の住居に復原される。主柱穴のP_3を検出していないが、他の柱穴は1.8mと2mの間隔となり、方形に近い配置である。

住居に伴う遺物は出土しなかった。

176号竪穴住居跡　(第53図)

175号住居の南方2mに位置するが、177号住居と方形溝状遺構に重複しており、南西部では床面下層の遺構も残っていない。南東部を拡幅したものの壁面まで達しなかったが、北東側の辺長は4.4m以上となり、主柱穴の配置も考慮すると中型規模の住居跡になろう。



第52図　174・175号竪穴住居跡実測図（1/60）

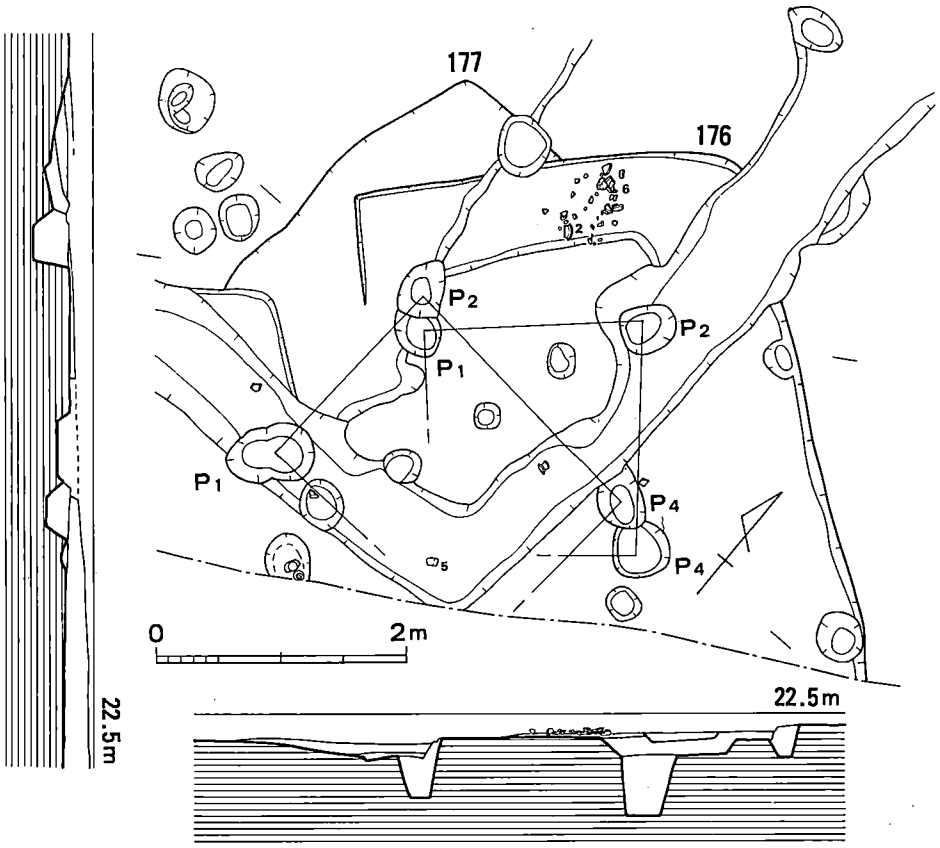
明確な床面を検出していないが、北西壁際の遺物出土状況は床面上に散乱していたとも考えられ、部分的に床面が残っていたのかもしれない。南西側の主柱穴を確認していないが、他の主柱穴は1.8m前後の間隔である。掘り込みは北西部が溝状の形状で巡っている。

出土遺物　(第154図)

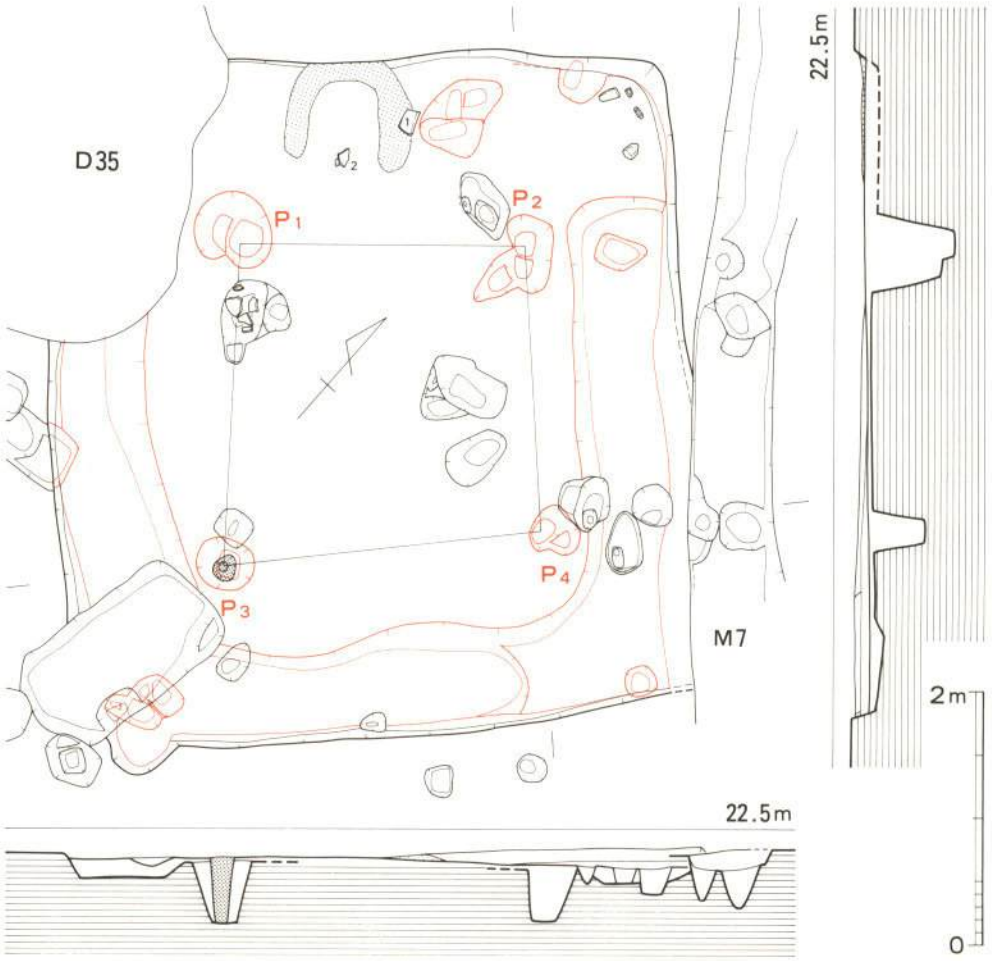
4の高坏は主柱間エリアより出土している。甑と考えられる5も主柱間エリアから出土しているが、溝状遺構内にも相当する。1～3は北西壁際で一括して出土した。

177号竪穴住居跡　(第53図)

176号住居とほぼ重複すると考えられ、西壁側の掘り込みが僅かに遺存する住居跡である。溝状遺構との新旧関係は不明だが、176号住居の北壁際における遺物出土状況から、当住居が古いと考えられる。南東側の主柱穴は調査区外となるが、長方形に配置され1.8mと2.3mの柱間隔となっている。主柱穴の外方1.2m～1.5mで検出したラインは、主柱穴の平面形態と相似形であり、当住居の掘り方と考えられる。当住居に伴う遺物は出土していない。



第53図　176・177号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第54図　178号竪穴住居跡実測図（1/60）

178号竪穴住居跡　（図版18，第54図）

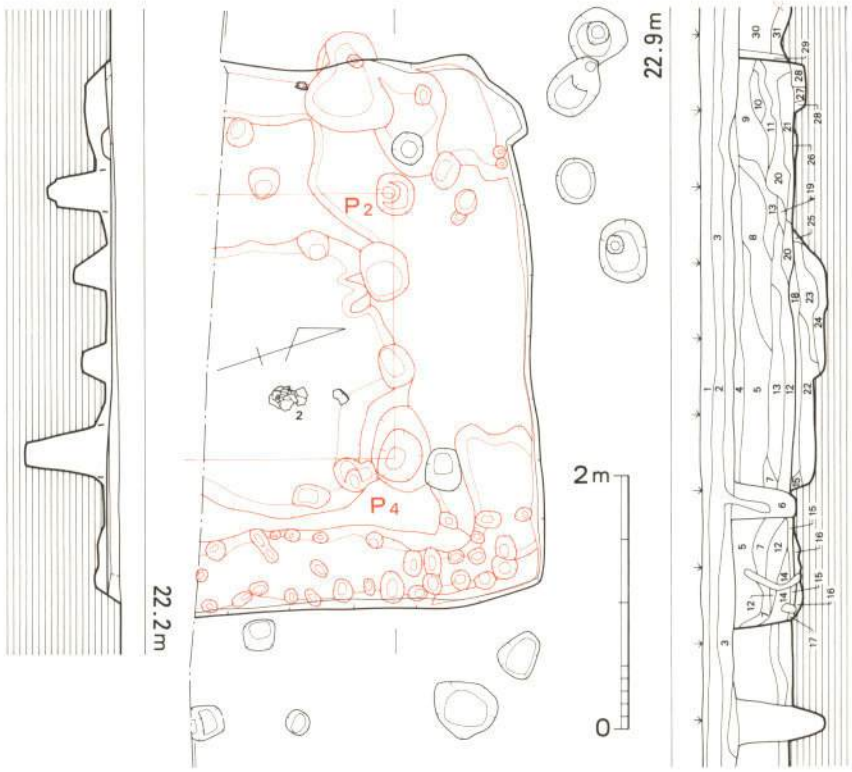
住居跡とは重複しないが、北東隅を７号溝に切られ、北西隅部を35号土坑に、切られている。辺の中程で5.1m～5.4mの辺長を測り、大型規模の住居跡である。壁面は急勾配な立ち上がりで、良好な所で14cm程の壁高を測るが、壁小溝を付設していない。

床面は北西側が僅かに高くて、南東側に向かって順次低くなり、６cm程の高低差となっている。主柱穴は台形状の配置となり、柱間隔が2.25m～2.55mを測る。北西壁の中央部にカマドを付設しているが、両袖の基底部のみ遺存する。造り付け型カマドで、袖の長さは0.75m～0.85mを測る。火床面の形状は長方形で、0.55mの幅となる。

貼床３㎝の下方で掘り込みを検出したが、カマドのある北西壁を除いて巡っている。溝状の形態となるが、坑底は若干凹凸があり、0.7m～0.9mの幅を測る。

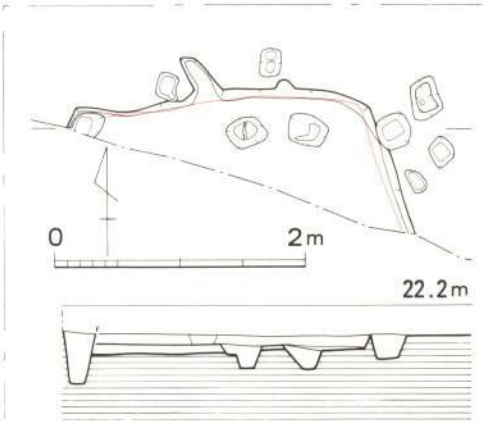
出土遺物　（第154図）

１はカマド右袖付近より出土した鉢。２はカマド内より出土した甑の把手部であろう。



1.暗灰色砂泥
2.淡茶灰色砂質土
3.灰色砂泥
4.淡褐灰色砂泥＋小礫
5.4＋茶色土
6.暗茶褐色泥砂
7.暗褐色砂泥
8.暗茶褐色砂泥
9.6＋茶黄色粘土粒
10.茶褐色粘質土＋黄灰色粘土粒
11.茶褐色砂泥＋黄茶色粘土粒
12.黒褐色砂泥＋黄茶色粘土
13.11＋茶色粘質土
14.暗灰褐色砂泥＋黄色粘質土粒
15.茶色粘質土＋1
16.13＋褐色砂泥
17.褐色砂泥＋黄色土(壁小溝か)
18.茶色粘質土＋褐色砂泥＋黄灰色粘土
19.茶色粘土＋灰褐色砂泥＋焼土
20.淡茶黄色粘土
21.19＋焼土＋1
22.淡黒褐色砂泥＋茶色粘質土
23.茶色粘質土＋黄灰色粘土粒
24.1＋22
25.黄色粘質土＋暗灰色砂泥
26.黄茶色粘土
27.茶色粘質土
28.褐色砂泥＋27
29.灰褐色砂泥＋茶黄灰色粘土粒
30.黒褐色砂泥
31.淡茶褐色粘質土

第55図　179号竪穴住居跡実測図（1/60）



第56図　180号竪穴住居跡実測図（1/60）

179号竪穴住居跡　（図版18，第55図）

AII区市道の北西端に位置する住居跡で、カマドを含めた南半部が調査区外となり、73号掘立柱建物に切られている。壁面観察によると、遺物包含層の黒褐色土上面から掘り込まれており、貼床面まで50cm程の深さとなる。竪穴部の壁面は直立気味な立ち上がりであり、北西側で壁面と平行な土層図の29が壁体に関連する痕跡かもしれない。

竪穴部の規模は辺長が4.4m程の中型である。主柱穴は竪穴部の平面形と略相似して配置し、柱間隔が2.1mを測る。床面下層で中央土坑と掘り込みを検出した。中央土坑は長軸が2.2mとやや広大であり、床面から坑底までが25cmの深さとなり、地山の土に黒色土が若干混入した埋土である。掘り込みは幅が50cm程となり、北壁側で途切れており巡ってはいない。掘り込み内の地山面に小穴を検出したが、壁体に関連する跡なのか、掘削痕であるのかを断定するまでには至らなかった。

出土遺物　（図版31，第155図）

2点とも主柱間エリアの床面上より出土した土師器の甕である。

180号竪穴住居跡　（第56図）

AII区の中程に位置して、大半以上が調査区外に伸展する住居跡である。北東隅部を確認しただけで、主柱穴やカマド等も検出していない。壁面は急勾配に立ち上がり、10cm程の壁高を測る。壁面下で壁小溝を検出していない。略水平な床面で、下層の掘り込みは4cm～7cmの深さである。遺物は出土していない。

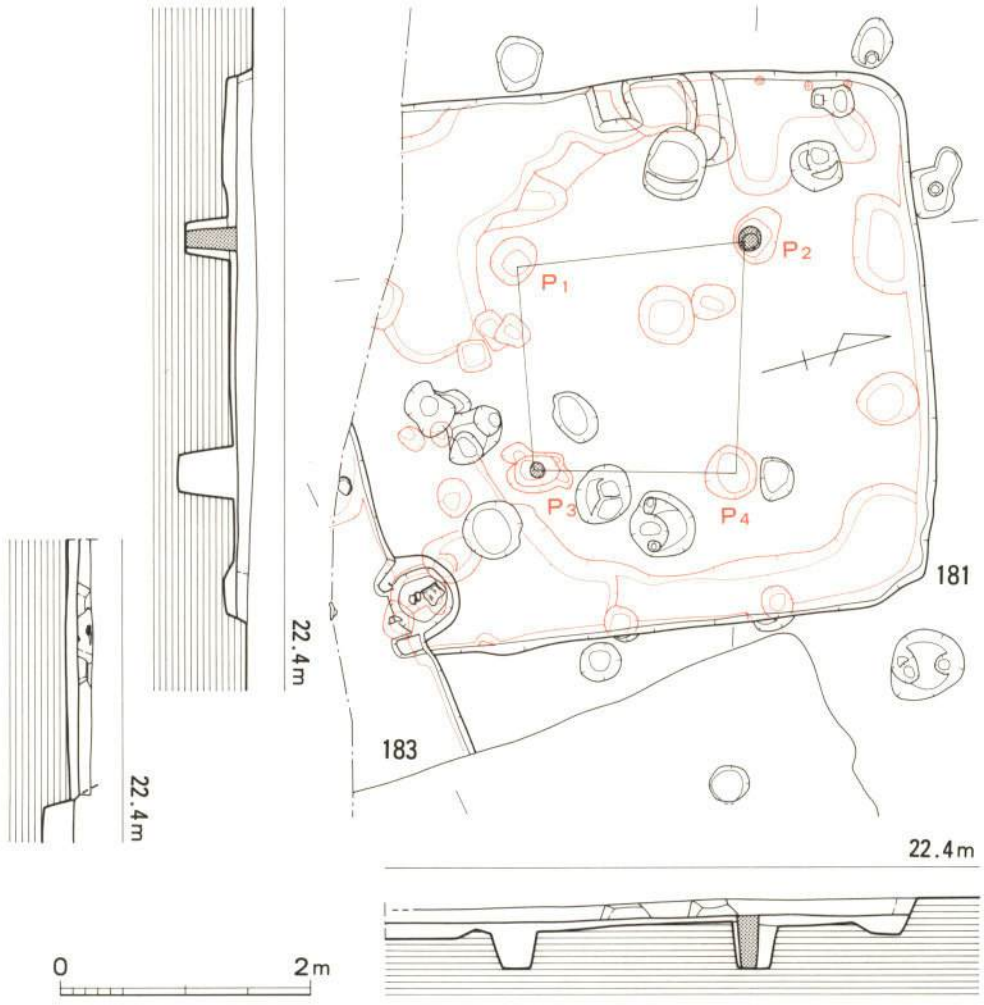
181号竪穴住居跡　（図版19，第57図）

AII区市道の東端に位置する住居跡で、南壁際を183号住居に切られており、西南隅部も調査区外に伸展しているが、住居の全容は略判明する。北壁の辺長が4.2m、南北の辺長が約4.6mを測る。急勾配の立ち上がりの壁面で、10cm～15cmの壁高を測るが、壁面下に壁小溝は巡っていない。床面は略水平な貼床で、主柱穴のP_2とP_3で柱痕を検出した。主柱穴の配置は竪穴部の平面形と略相似形になり、1.6m～1.85mの柱間隔となる。カマドは西壁の略中央に付設しており、造付け型である。両袖とも基底部が残っており、右袖の端部は柱穴で崩されているが、0.75mの長さを測る。火床面も柱穴で壊されて不詳となり、支脚も残っていなかった。

床面下層には、北壁側以外で掘り込みがなされており、不整な形状を呈するが溝状に巡り、床面より10cm～15cmの深さである。当住居に伴う遺物は出土していない。

182号竪穴住居跡　（図版19，第58図）

181号住居と隣接しており、183・184号住居を切るが、184号住居とは略重複している。検出

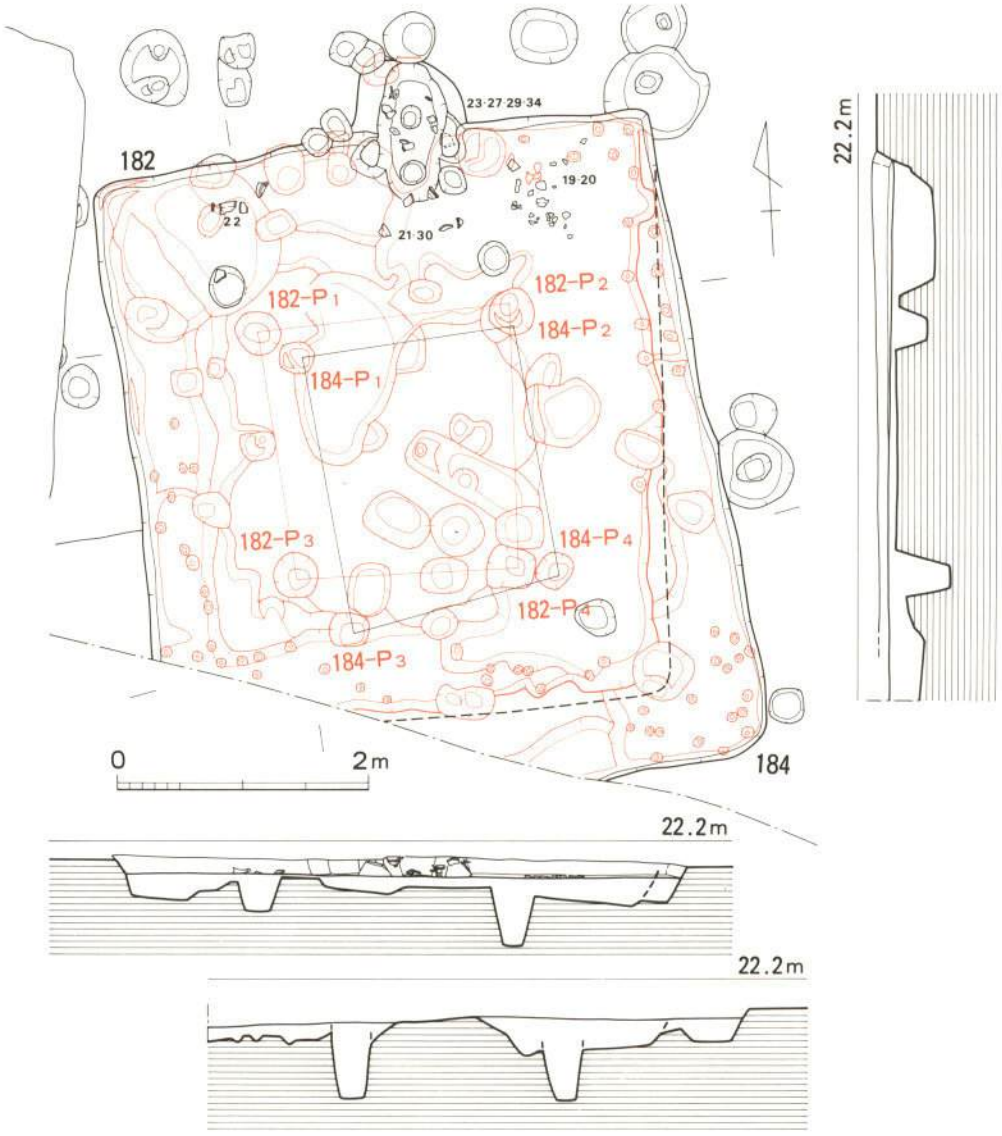


第57図　181・183号竪穴住居跡実測図（1/60）

時は１軒の住居と考えていたが、主柱穴と下層の掘り込みの有り様から２軒と判明した。東壁については破線で図示する結果となった。

北壁で4.5mの辺長となり、南北の辺長が4.65m程に復原され、竪穴部の平面は略正方形と考えられる。壁面はやや急勾配な立ち上がりとなり、10cm前後の壁高を測るが、壁面下に壁小溝は巡っていない。床面は略水平な貼床で、３cm～５cmの厚みである。主柱穴の配置は竪穴部と相似して略正方形の平面形となり、柱間隔が２m程となる。

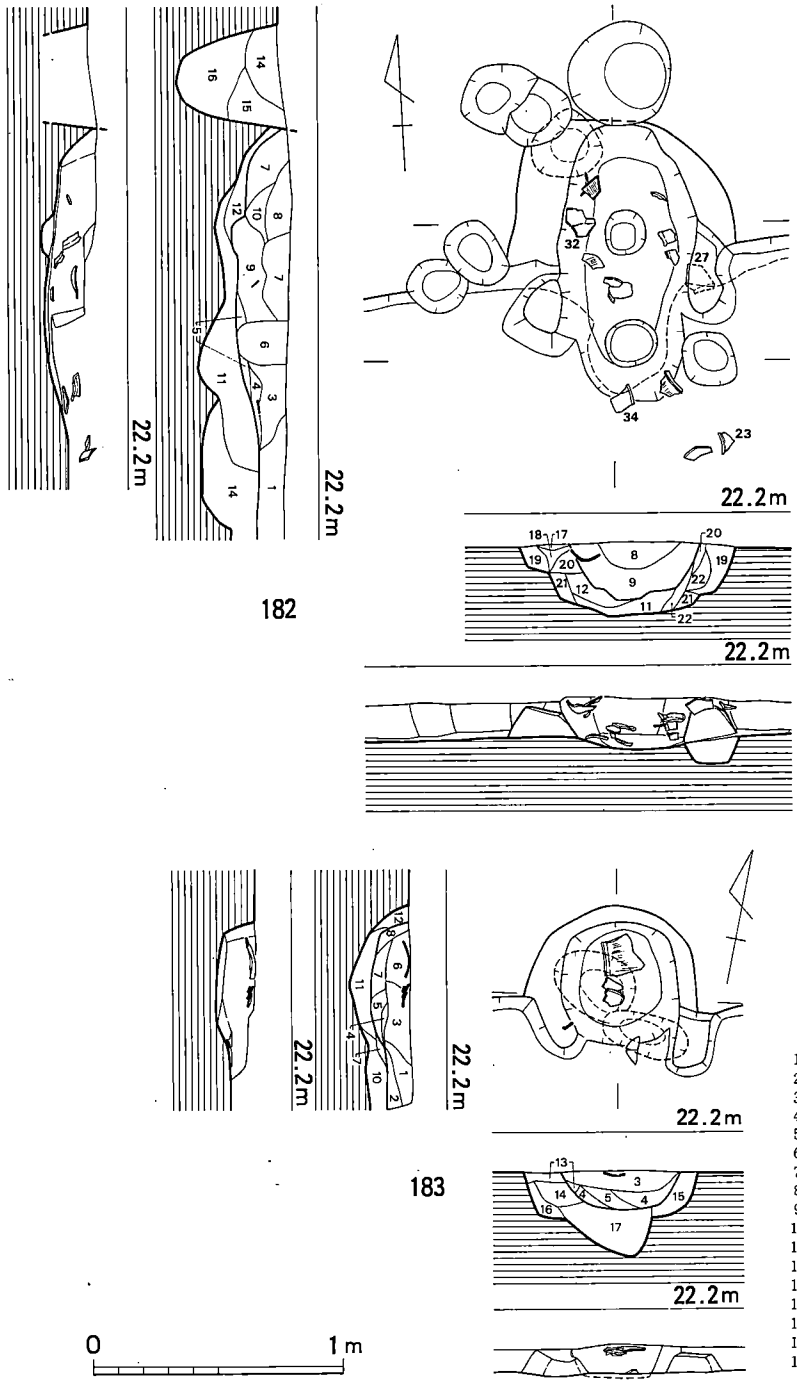
床面下層の掘り込みは、若干の凹凸をなしてはいるが全周する。北西隅に壁隅土坑を検出したが、二段落ちの坑底となり、最深部では床面上より38cmの深さを測る。主柱間エリア内の土坑は、少し不整な長楕円の平面形であり、床面上より20cm程の深さである。当住居に伴う中央



第58図　182・184号竪穴住居跡実測図（1/60）

土坑の可能性が高いものの、184号住居に伴う土坑かもしれない。

カマド　（第59図）　北壁の略中央部に付設した突出型カマドである。掘り方は55cm程竪穴部より突出するが、楕円形に近い平面形である。床面上より粘土等を積み上げて壁体としているが、突出部では貼り付けつつ積み上げたと言えよう。竪穴部内にも両袖が30cm程伸展しているが、焚口部に向かってすぼまる形状ではない。火床面は柱穴で撹乱されているものの、長軸が80cm、短軸が35cmを測り、長楕円形の平面形になる。支脚は残っていないが、竪穴部より10



第59図　182・183号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

cm外の火床面中央部で抜き取り跡を検出した。

出土遺物　(155・156図)

1～7は、埋土上層から床面下層までの間に検出した坏蓋である。3・6・7・は床面と思われる面から出土している。8～12の坏身も蓋と同様の出土状況である。13は壁隅土坑から出土した。15と16は床面下層から出土した精良品である。18も壁隅土坑の出土品。21・23・29と32がカマド内と周辺部の出土品で、同じくカマド内より出土した34の鉢は体部が直線状に内傾する。高坏の25と26は埋土中の品である。

183号竪穴住居跡　(第57図)

カマド周辺以外が調査外となる住居跡で、181号住居を切ってはいるが、東壁側を182号住居に切られており、住居の規模は不詳である。壁面は急勾配の立ち上がりで、10cmの壁高を測る。下層の掘り込みは床面より10cm程の深さである。

カマド　(第59図)　北壁に付設した突出型のカマドである、掘り方が竪穴部より40cm程外方となり、半月状に近い平面形である。掘り方に貼り付けながら積み上げて壁体としているが、竪穴部内にも両袖が25cm程伸び、焚口側が若干狭くなる形状となる。火床面は床面より少し窪み、長軸が38cm、短軸が33cmと比較的狭い。支脚は残っていなかった。

出土遺物　(第155図)

カマド内の甑片？は図化していない。1はカマド前面より出土した甕である。

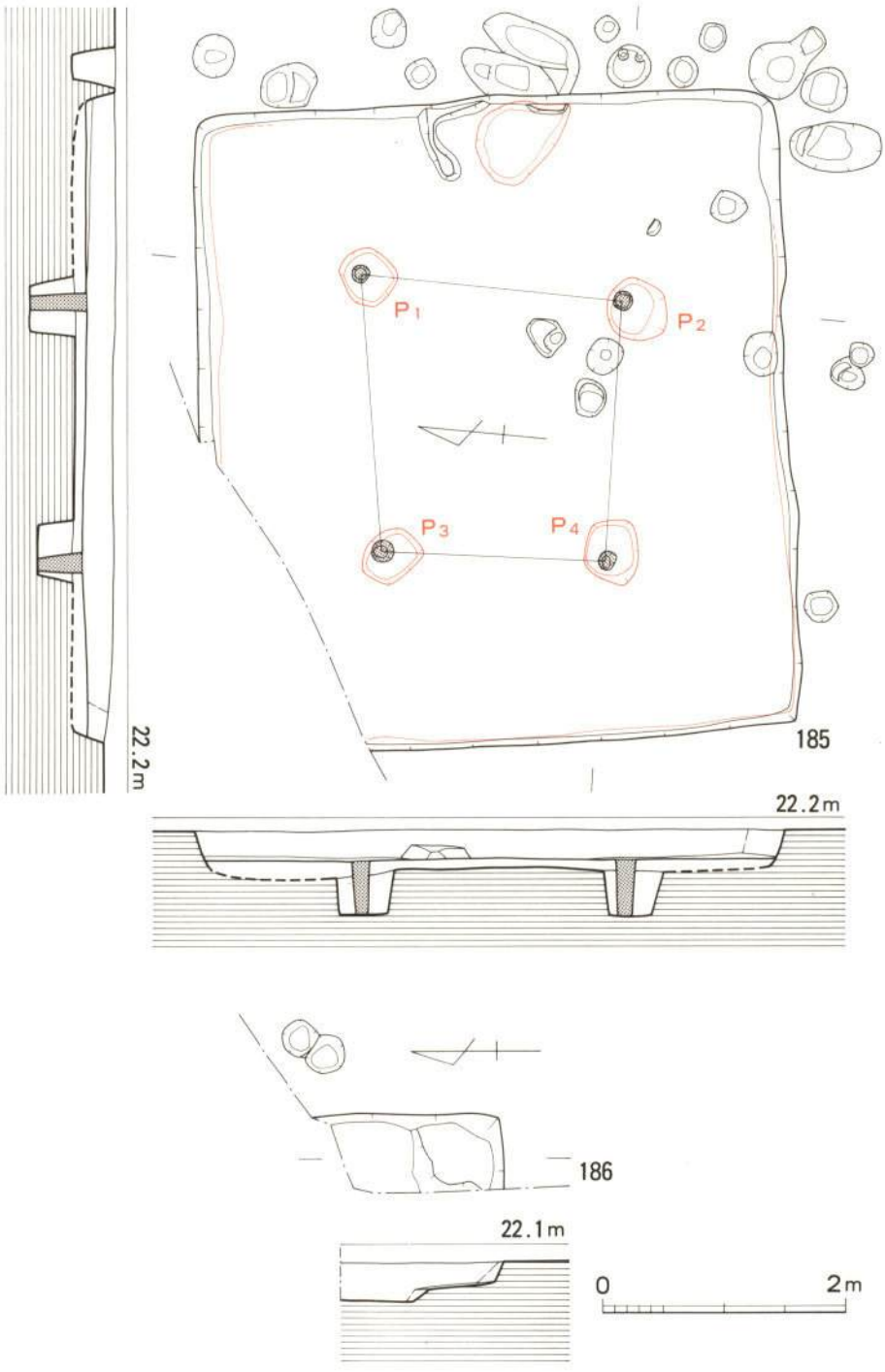
184号竪穴住居跡　(第58図)

182号住居と略重複している住居跡で、東壁と南壁の一部が僅かにはみ出ている。182号住居の主柱穴配置と略同じ配置となるが、竪穴部の形状と同じく若干東南に偏向している。柱間隔は1.7m～2.2mを測る。床面下層の掘り込みは大半が喪失しているものの、遺存する部分では溝状を呈して巡っている。地山面で小穴を検出しているが、壁際に並ぶ小穴は壁体に付随する痕跡かもしれない。182号住居内の小穴についても同様であろう。遺物は出土していない。

185号竪穴住居跡　(図版20，第60図)

AII区市道184号住居の10m程南に位置する住居跡で、北西隅が調査区外である。南北が4.8m、東西が5.25mの辺長を測り、やや大型の住居である。壁面は急勾配な立ち上がりで、25cm程の壁高を測り、壁面下に壁小溝を付設していない。床面は東壁側が僅かに高くなっているものの、略水平に近い。床面上で主柱穴の痕跡を検出したが、柱痕の径は15cm程であった。主柱穴は竪穴部の平面形と略相似した配置となり、柱間が1.9m～2.3mの距離を測る。

カマドは東壁の中央に付設している。左袖の基底部が僅かに遺存するのみで、造付け型と分



第60図　185・186号竪穴住居跡実測図（1/60）

かる程度であり、支脚も残っていない。袖の長さは60cmを測る。床面下層の調査は主柱穴の掘り方を確認したのと、掘り込みの一部を図化しただけである。

出土遺物　(第156図)

1～6の須恵器は埋土より出土。その他は全て土師器であり、8も土師器の坏身である。17がカマド周辺の床面から、9も床面上から出土した。22と23が床面下層より出土した品で、その他は埋土より出土した。

186号竪穴住居跡　(第60図)

185号住居の西方3mに位置して、南東隅部のみ検出した住居跡である。当初は土坑と考えていたが、形状と坑底の状況を考慮した結果、住居として取り扱う。深い場所が床面下層の掘り込みに当たると考えられるが、全く不詳な住居である。図化しうる遺物は出土していない。

187～206号住居群の概要　(図版3)

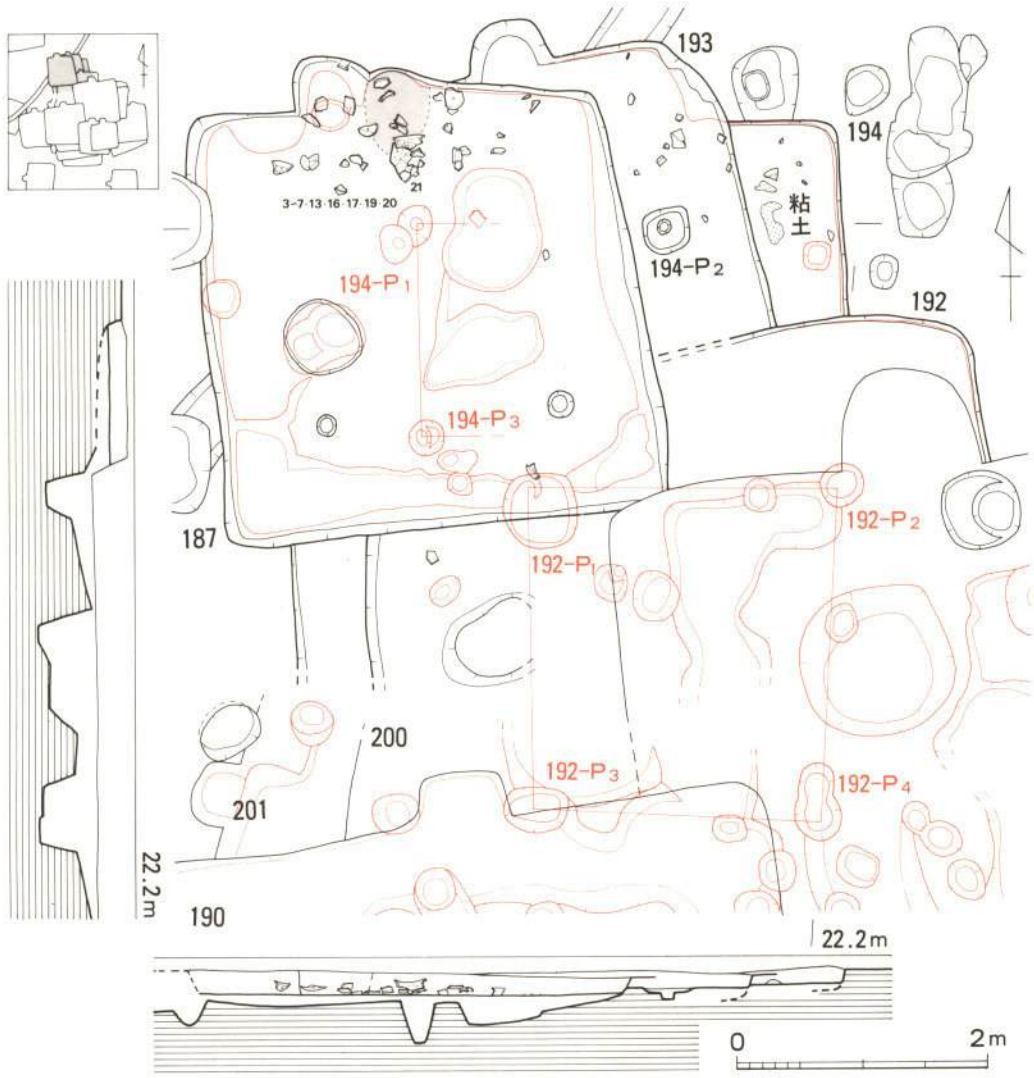
約150m²の場所に20軒の住居が重複していた。複雑な切り合い関係であるばかりか、掘立柱建物等の柱穴も数多く掘られていた。この他にも、大半以上の住居跡は遺存状態が不良でもあり、住居群の全容を解明する上で支障をきたした。悪条件は更に重なった。該当地の中程を農道が走っていたので、農道より北側をAII区として最初に調査を行い、農道より南側をD区として次に調査を実施した。最後が農道部の調査となり、D区の部分と併せて調査した。これらの悪条件が重なった結果、一部で切り合い関係が不詳となった。けれども、調査時の床面下層遺構を詳細に検討して、住居間の切り合い関係と各住居の主柱穴や掘り込み等を解明した。先後関係は次の通りである。

(古)　201→200　(新)
204→203→202→205→199→190→189→188
206
196→195→191
198→197
194→193→192→187

だが、AII区の調査時は床面下層遺構に対する認識が希薄であり、一部で主柱穴を確認しない住居も含まれている。出土遺物の一部が混乱したのも上記の理由からである。

187号竪穴住居跡　(図版20, 第61図)

住居群の中では北西端に位置する住居跡で、191号住居に南東隅部を切られるが、192～194号



第61図　187・192～194号竪穴住居跡実測図（1/60）

住居よりも新しい。竪穴部の辺長が3.5m～3.65mを測り、やや小振りな中型規模となる。壁面は急勾配な立ち上がりで、10cm～20cmの壁高を測り、壁面下には壁小溝を設けていない。

床面は水平に近い貼床であり、床面上でP_3とP_4の主柱穴痕を検出したが、P_1とP_2については未確認で、その原因は前述した理由からである。床面下層の遺構についても同様であり、南半部で掘り込みを図化している。P_4の北西の土坑が当住居の中央土坑と考えられ、長軸が1m、短軸が0.6mを測り、不整形な楕円形の平面形態で、床面上より20cm程の深さとなる。当土坑の北側に存する土坑は193号住居の中央土坑と考えられる。

カマドは北壁中央部に付設されているが、壁体が何ら遺存しておらず、火床面と支脚の一部が僅かに旧態を止めていた。残りの不良なカマドであるが、支脚位置が竪穴部のライン上になる突出型と推測され、奥壁より30cm内側に支脚を設けている。火床面は長軸が70cm、短軸が50cmを測り、焚口部が狭くなる楕円形に近い平面形態である。カマド左側にも突出部を検出したが、掘り方が方形の柱穴と考えられる。

出土遺物　(図版31，第158図)

1～8は須恵器の坏で、2と7が埋土より出土し、時期の異なる1は床面下層からの出土品である。他はカマド周辺の床面上より出土した。9は精良な土師器の坏で、南壁際の床面上より出土した。18はP_3北側の柱穴で出土し、12が床面下層、11と14が埋土よりの出土品であり、その他はすべてカマド周辺の床面から出土した。

鉄製品　(図版42，第128図)　34は西壁際で出土した鉄鏃の基部であろうか、現存長5.6cmを測る。49は錆のための不明で、現存長4.1cmほどを測る。床面下層より出土した。

188号竪穴住居跡　(図版3，第63図)

住居群の中では南側に位置して、最も新しくなる住居跡である。辺長が3.3m～3.4mを測り、住居の規模は小型に属す。壁面はやや急勾配に立ち上がり、5cm～15cmの壁高を測る。床面は中央部が僅かに低くなるも略水平に近く、壁面下に壁小溝を設けていない。

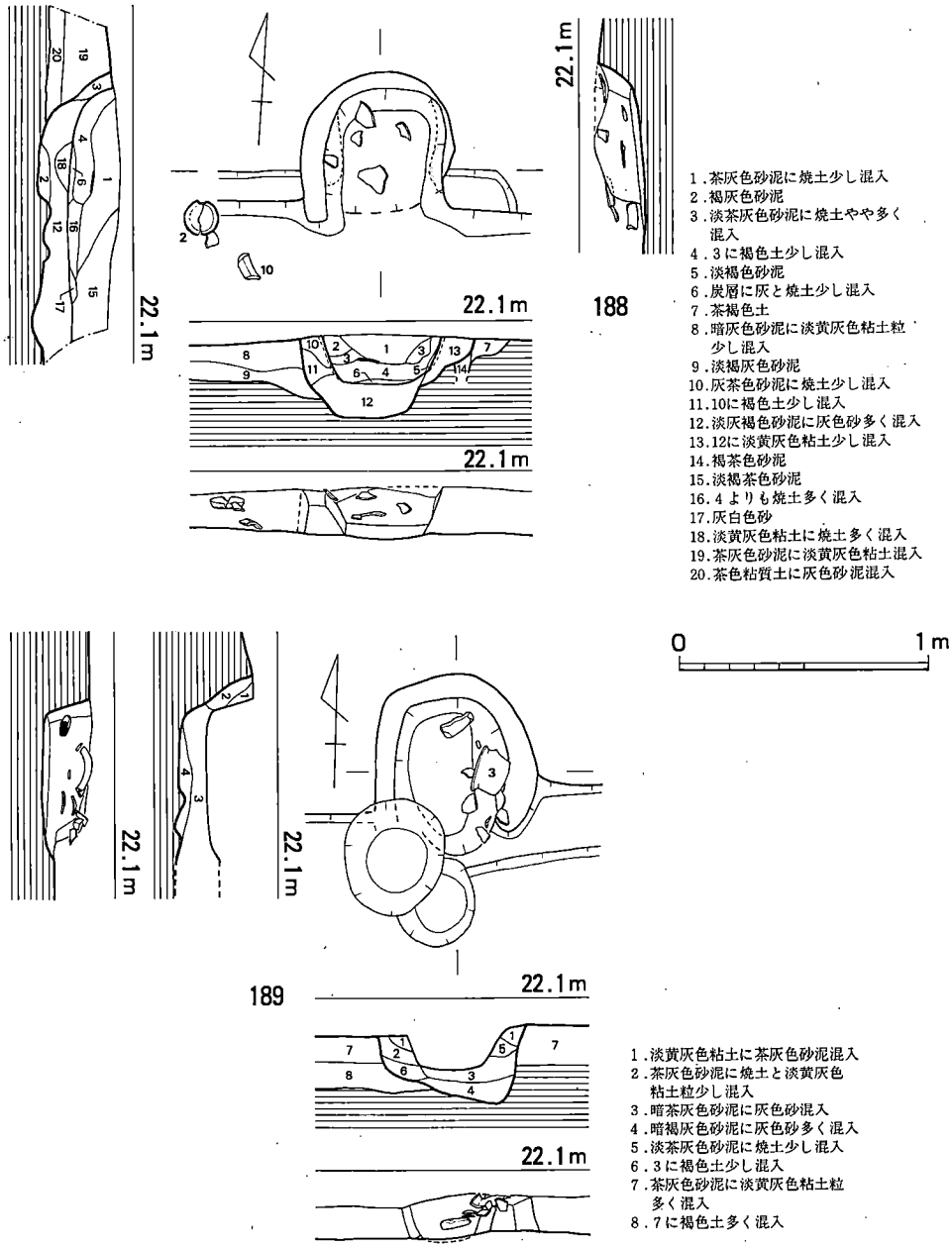
主柱穴は図示したP_2が該当すると考えられる。竪穴部が縮小するのに伴って、主柱穴がより隅部に寄る傾向があり、当住居も207号住居と同様の配置を想定した。けれども、多くの住居が重複して複雑な床面下層となり、P_3とP_4は検出するに至らなかった。

床面下層には掘り込みがなされている。部分的ではあるが、竪穴部に則して50cm幅で掘られており、全周していたと推測される。下層の土坑については不詳である。

カマド　(第62図)　北壁の中央部に付設した突出型のカマドであり、掘り方と先端が竪穴部より55cmも外側となる。掘り方の平面形は先端部が隅円となり、上端で60cmの幅である。下方より粘土等を積み上げて壁体を形成しているが、竪穴部内には左袖が僅かに伸びているだけである。火床面は、長軸が40cm、短軸が33cmを測り、隅円方形の平面形である。支脚は抜き取られており、竪穴部から15cm程外方に位置する。

出土遺物　(図版31，第159図)

土師器の坏・皿類では、2がカマド右側より出土して、4が埋土中品であり、他の3点は床面下層から出土した。甕は6・9と10がカマド周辺部より出土して、8と11が埋土中の品で、7が床面下層から出土した。



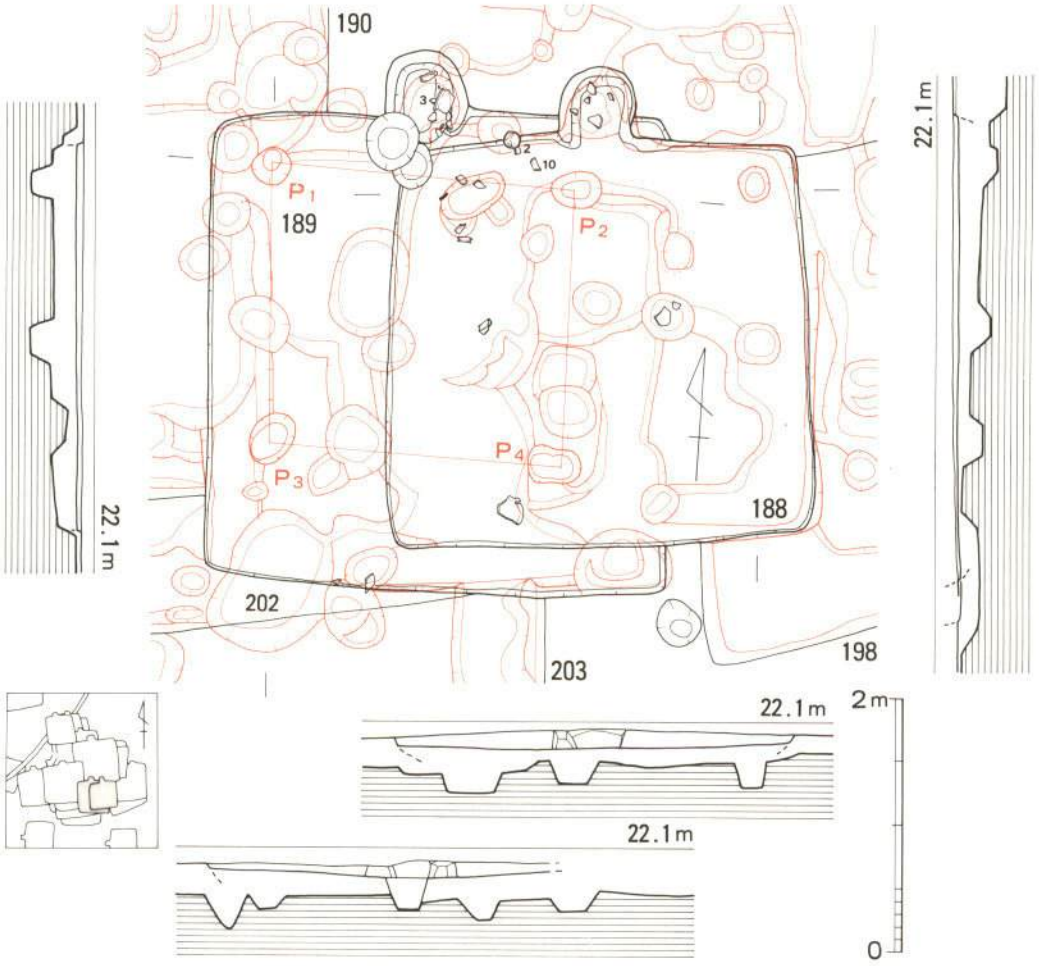
第62図　188・189号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

鉄製品　（図版42，第127図）　カマド周辺より出土した鉄釘と考えられ、錆が著しく形状は不明となるが、頂部を折り曲げている。現存長が6.7cmを測る。

土製品　（図版39，第120図）　5は半分程を欠失した土錘で、長さが3.5cm、外径が最大で1.55cm、孔径が4㎜程を測る。床面下層から出土した。

189号竪穴住居跡　（図版3，第63図）

188号住居に東半分を切られた住居跡で、2番目に新しくなる。188号住居が東に1.5m程平行



第63図　188・189号竪穴住居跡実測図（1/60）

移動して、竪穴部の規模も僅かに縮小したと、そのように考えられる両者の位置関係である。当住居の辺長が3.7m程を測り、竪穴部の規模は小型である。5㎝～10cmの壁高となり、壁面下

に壁小溝を設けていない。カマド前面が僅かに低くなるが、他の場所は略水平となる床面である。

主柱穴は図示した配置を考えているが、カマド側に寄りすぎているものの、竪穴部とは略平行である。柱間隔は2.2m～2.4mを測る。床面下層では、東壁に沿った掘り込みは当住居に伴うと考えられるが、中央土坑等については複雑に切り合っているので歴然としなかった。

カマド　(第62図)　北壁の略中央に付設した突出型カマドである。突出部は先端が楕円形気味となり、竪穴部より50cm程外側となる。壁体は壁面に貼り付けつつ積み上げており、焚口側に向かって右袖が伸展している。火床面は、長軸が50cm程を、短軸が30cmを測り、楕円形に近い平面形で、床面より5cm低くなる。支脚は遺存しておらず、抜き取り跡も確認されなかった。

出土遺物　(第159図)

須恵器坏蓋の10はカマドの掘り方内より出土し、3と7がカマド内より出土した。5はカマド下層より出土した品である。2・4・6が南西隅の床面上で出土して、9が埋土中よりの出土品である。他は床面下層から出土した。

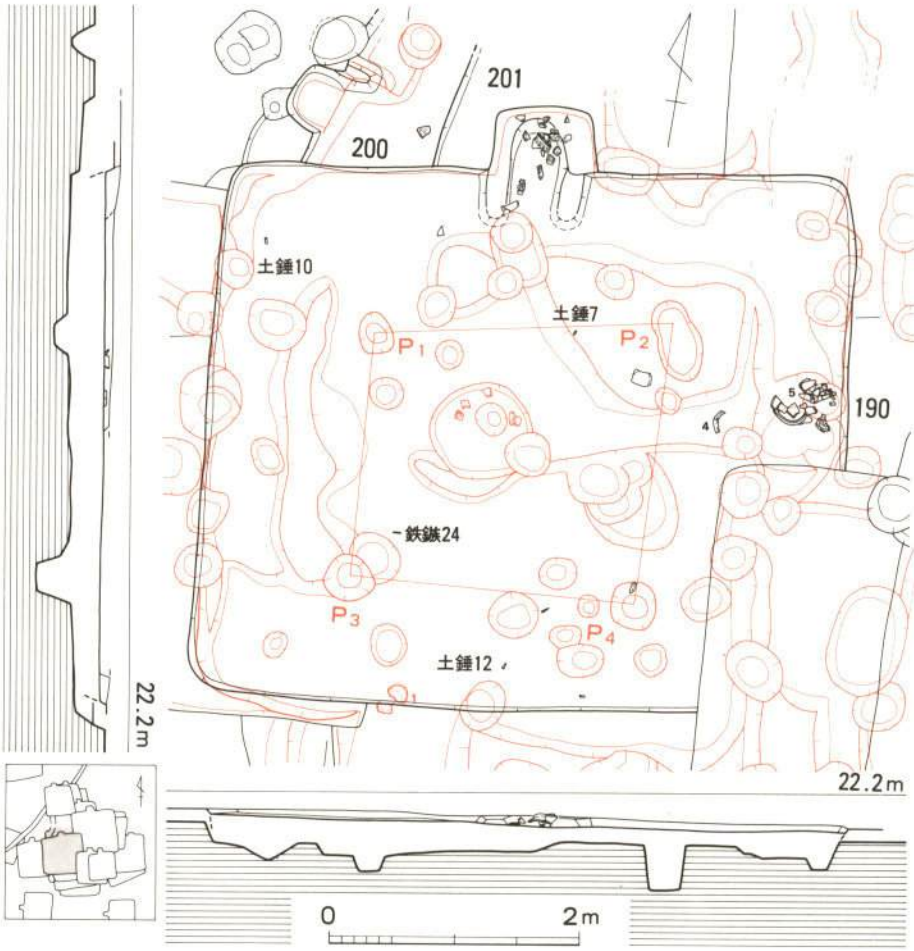
鉄製品　(図版43, 第129図)　57は楕円気味の円環に断面長方形の棒状部が2.8cm付く。現存長が6.1cm。端部を欠損しているので断定されないが、轡の一部であろうか。床面下層より出土。

石製品　(図版40, 第124図)　3は雲母片岩製の紡錘車で、縁辺部の一部が欠損する。直径が4.5cm、孔径が7mm～8mm、厚みが1cmを測る。丸味を持ちながらも断面長方形に近い形状で、床面下層の出土品。

190号竪穴住居跡　(図版3・20, 第64図)

189号住居に西南隅部を切られているが、周辺の住居6軒を切っており、住居群の中で3番目に新しい住居跡である。竪穴部の辺長は、東西が5.1m、南北が4.25m程を測り、隅円長方形の平面形態になろう。壁面は急勾配の立ち上がりとなるが、やや残りの不良な壁高で5cm～10cmを測り、壁小溝を設けていない。床面は北壁側が若干低くなる貼床である。主柱穴は図示した配置と考えているが、やや台形に近い平面形態となる。

床面下層では、主柱穴エリア内の中央土坑と竪穴部に沿って巡ると考えられる掘り込みを検出した。中央土坑は第67図に図示しているが、円形に近い平面形態となり、80cm程の径となる。最深部で14cmとやや浅いが、埋土が粘土を主体として焼土も混入しており、中央土坑の性格を考える上でも示唆的な状況を呈している。性格については、竪穴住居に関する多くの問題点と併せて次報告において述べる予定です。掘り込みは、南壁を除いて60cm～90cmの幅で巡っており、床面から30cm程の深さとなる。



第64図　190・200・201号竪穴住居跡実測図（1/60）

カマド　（図版21，第65図）　北壁の中央部に付設した突出型のカマドである。掘り方は壁穴部から50cm外側に突出して、台形に近い平面形態である。褐色土等を積み上げて壁体としているが、竪穴部内にも45cm程伸びる両袖で、基底部で25cm程の幅を測る。火床面は長楕円形の平面形態で、幅が35cm程を測る。支脚は遺存せず、抜き跡も検出していない。

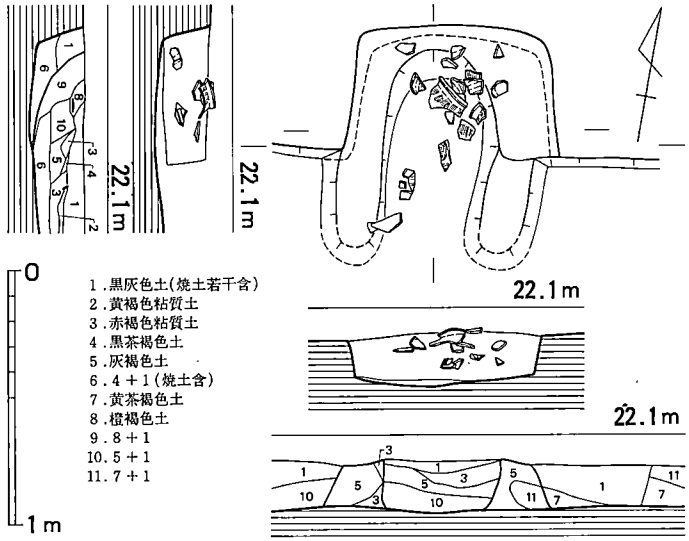
出土遺物　（第160図）

1は須恵器の坏蓋で、南壁際の床面上より出土した。2と3は床面下層の中央土坑より出土して、他は埋土中の品である。

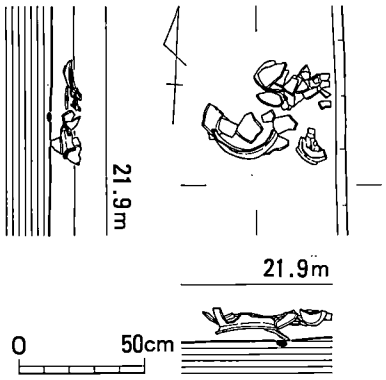
鉄製品　（図版42，第127図）　4は刀子の身で、現存長が7.3cmを測る。主柱間エリアの床面上より出土。24は鉄釘と考えられ、先端部を欠損するが尖り気味となる。中程の断面は長方形となり、現存長が6.4cmを測る。43と48は鏃の茎片である。48は現存長が3.4cmで断面長方形。43は錆が著しく不明となる。現存長が4.7cmを測り、床面下層よりの出土品。

土製品　（図版39，第120図）　略完形の1点を含め6点とも土錘である。10は床面上から出土した品で、全長が5.7cm、径が1.5cm、孔径が3㎜～4㎜を測る。7・9・12が床面上より出土して、8と11が床面下層より出土した。他にも1点出土しているが図化していない。

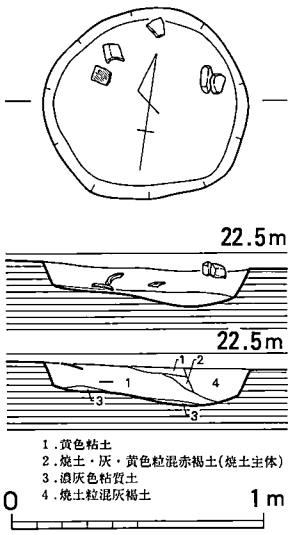
石製品　（図版41，第125図）　10はカマド前面の床面下層から出土した砥石である。良く使い込まれている。



第65図　190号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



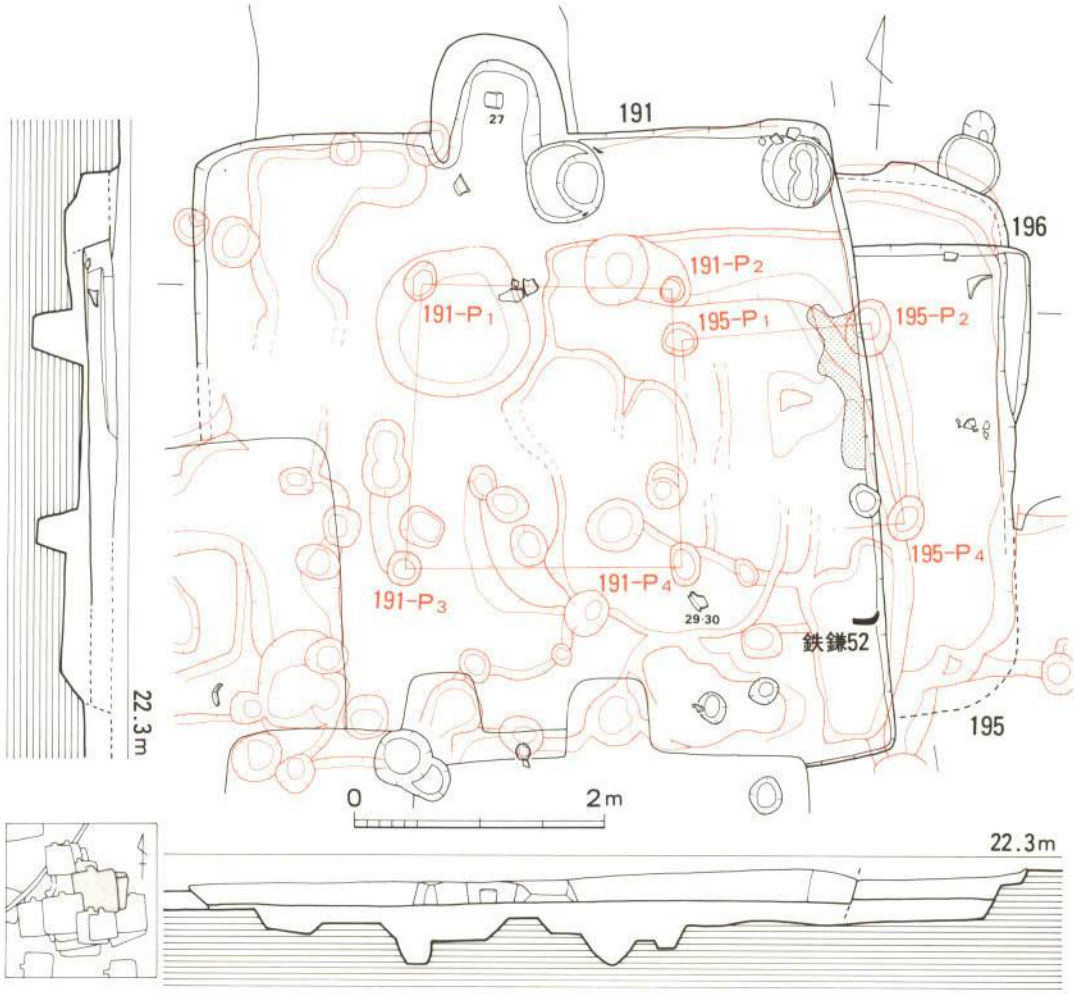
第66図　190号竪穴住居跡内遺物出土状態実測図（1/30）



第67図　190号竪穴住居跡中央土坑実測図（1/30）

191号竪穴住居跡　（図版3・20，第68図）

住居群の中では比較的新しい時期に属するが、住居の規模は群中でも最大となる。西南隅付近を188～190号住居と103号掘立柱建物に切られているが、旧態を知る上で差し支えはない。東



第68図　191・195・196号竪穴住居跡実測図（1/60）

西の辺長が5.35m、南北の辺長が5.1mを測り、住居の規模は大型に属す。壁高は比較的残りが良く最大で25cmを測るが、壁面下に壁小溝を設けていない。主柱穴は図示した配置が妥当と考えられ、竪穴部と相似形となり２m～2.25mの間隔である。東壁中程に粘土の堆積を確認したが、カマド対面粘土と異なる位置となるが同じ性格かもしれない。

床面下層の遺構では、P_1に接して中央土坑を検出したが、少し不整な平面形態となり、径が1.2m前後を、床面から25cm程の深さを測る。掘り込みは、部分的には溝状に巡っているが、重複しているので歴然とした形状ではない。

カマド　（図版21）　北壁中央部に付設した突出型カマドである。竪穴部より80cmも外側に突出した掘り方で、突出する端部で1.1mと幅広い。掘り方に貼り付けつつ積み上げて壁体とし

ているが、竪穴部内にも若干袖が伸びている。右袖は掘立柱建物に切られているが、左袖は内側に25cm程伸展している。火床面は隅円長方形の平面形となり、竪穴部より25cm外側に支脚が遺存する。支脚には自然石を使用しており、13cm程を土中に埋めて固定しているが、火床面から上端面まで19cmの高さとなる。

出土遺物　(第160図)

多量に出土している。坏蓋の1～8は、1と2が床面から、3・5と8が床面下層から、他は埋土から出土した。同じく須恵器の坏類9～18では11・13と17が埋土から、他は床面下層から出土した。土師器の坏類20～28では、27がカマドより、22～24が床面下層から、他は床面近くの埋土より出土した。甕類では、29・30がカマド前面の床面より出土した。

鉄製品　(図版42・43, 第129図)　52は先端部が大きく曲刃する鎌で、良く使い込まれた略完形品。全長が19.8cm、最大幅が3.4cm、背の厚みが2㎜を測る。東壁際の床面より出土した。刀子は5点出土している。6は関部でワラが付着しており、現存長が9.5cmを測る。3は身の部分で、現存長4.4cmを測る。2点とも床面より出土。残り3点は茎部片で、16が現存長4.6cm、18が現存長4.7cmで埋土より出土。20が現存長3cmで床面下層より出土。46は鏃の茎部で、断面長方形である。26は茎部の断面が長方形で箆被の断面が楕円形の鏃片である。現存長4.1cmで、床面下層より出土した。28は現存長が7.1cmの釘で、5㎜程曲折した頂部で、中程の断面は正方形に近い。44も釘と考えられて、現存長が3.3cm。2点とも床面直上より出土した。56は不明鉄器で、中程が楕円形となり、厚みが2cmである。欠損して不明となるが、両側に何かが取り付く。現存長が2.9cmで、床面下層から出土した。鉄滓が出土しているのも付記しておく。

192号竪穴住居跡　(図版3・20, 第61図)

住居群の中では北西端に位置して、187・191号住居に切られるが、193・194号住居を切っている。隅を含めた北東部で壁と床面が僅かに残り、15cmの壁高を測る。急勾配に立ち上がる壁面だが、壁面下に壁小溝を設けていない。西壁については、187号住居の南側に2条のラインを検出しているが、レベルと住居規模に切り合い関係を勘案すると、東側のラインが当住居に伴うと考えられる。該当部は床面下層の掘り込みでもあり、200・201号住居との切り合い関係は不明となる。この西壁で測ると5m程の辺長となる。

主柱穴は図示した配置を考えたが、P_1とP_3が103号建物と重複することになり、再考しなければなるまい。P_2～P_4間が2.5m前後となり、竪穴部の規模に適合し、平面形態も略相似していることを付け加えておく。カマドは北壁に付設していたと考えられるが、不注意で図化していない。

出土遺物（第161図）

1は土師器の皿でカマドより出土したとされている。2の甕は埋土中より出土した。

193号竪穴住居跡　（図版3・20，第61図）

187号住居の東側に位置して、187・192号住居に大半以上が切られる住居跡で、カマドを含めた北東部のみが遺存し、194号住居と8号溝を切っている。壁面は急勾配な立ち上がりで、壁面下に壁小溝を設けていない。主柱穴は図示したP_1とP_3が該当すると考えられ、P_2とP_4は前述した理由等で確認していない。住居の規模については、東壁やカマド位置と主柱穴等から辺長が3m強になろう。187号住居の説明でも述べたが、P_1の東に位置する土壙が当住居の土坑と考えられる。長軸が1m程を、短軸が0.8mを、深さが20cmを測り、楕円形に近い形状である。カマドは北壁に付設しているが、壁面より35cm突出する掘り方である。両袖を含めた壁体や支脚も遺存せず、突出型と分かるだけの不詳なカマドである。

出土遺物　（第161図）

土師器の4と5がカマドより出土した。他は埋土よりの出土品だが時期の異なる須恵器坏身の1は混入品である。

194号竪穴住居跡　（図版3・20，第61図）

住居群の中では北東端に位置して、北東隅部が僅かに残る住居跡である。壁面は直立気味な立ち上がりで、10cm～15cmの壁高を測り、壁小溝を設けていない。主柱穴は187号住居内で検出したP_1とP_3が伴うと考えられるが、図示した様にP_2とP_4を検出していない。この主柱穴配置であるならば、187号住居の南側で検出した西方のラインが伴うと考えられる。この場合には4.5m前後の辺長に復原される。200・201号住居との切り合い関係は192号住居と同様に不明である。遺物は少し出土しているが、図化していない。

195号竪穴住居跡　（図版3，第68図）

191号住居にカマドを含めた西側2/3を切られているが、196・197号住居より新しくなる住居跡である。北東隅が二段落ちとなり不自然な形態をとるが、下段のラインが当住居に伴うと考えられる。壁面は直立気味な立ち上がりとなり、23cm前後の壁高を測るが、壁面下に壁小溝を設けていない。床面は略水平な貼床である。

床面下層の掘り込みは深く掘られていたので、191号住居の下層でも検出され、南壁側が竪穴部に沿っていないものの、略全周していると言える。この掘り込みを確認したことで、辺長が3.9m前後となる住居規模と推測された。主柱穴も掘り込みと相似形の配置を考えているが、図示した様にP_3を検出していない。柱間隔も竪穴部と同様に狭く、1.5m前後を測る。

出土遺物　（第162図）

須恵器蓋の１は床面上より、同じく２は貼床下層から出土した。坏身の３も床面よりの出土品。土師器では、５が床面下層より出土したが、他は床面上から出土した品である。

196号竪穴住居跡　（図版３，第68図）

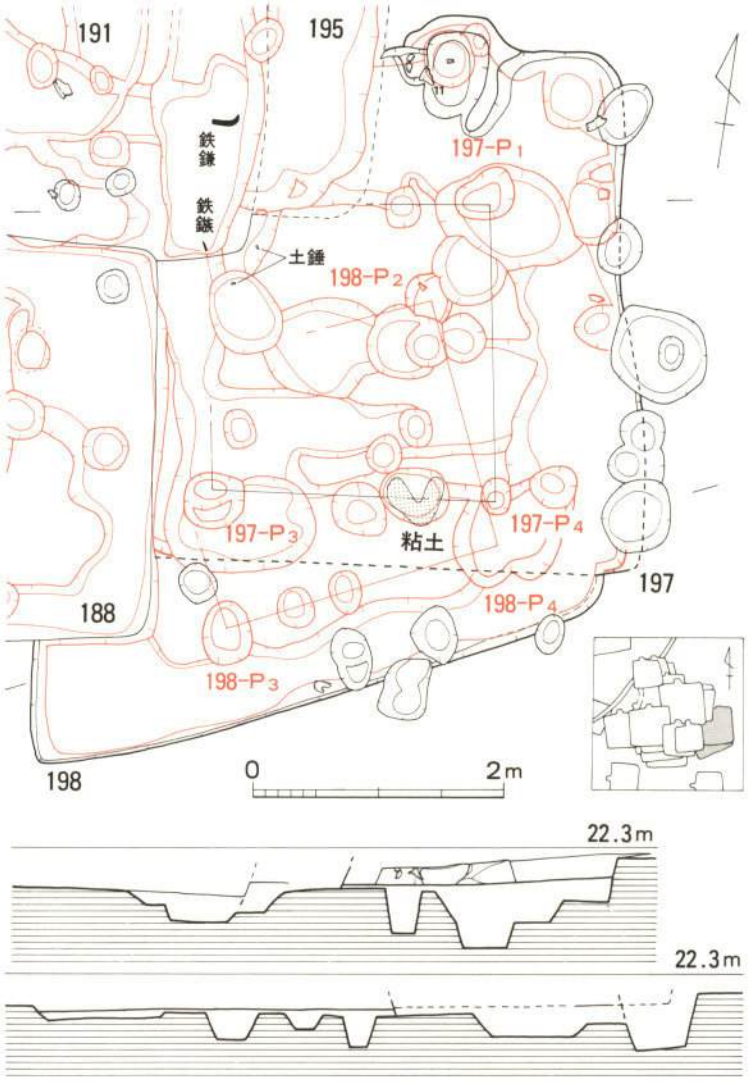
191号住居と195号住居に切られて、北東隅部が僅かに遺存する住居跡である。５㎝程の壁高を測り、遺存する範囲内では壁小溝は見当たらない。191・195号住居の床面下層が深く掘られているので、当住居の主柱穴は検出されなかった。住居の規模も不明で、出土遺物もない全く不詳な住居跡である。

197号竪穴住居跡

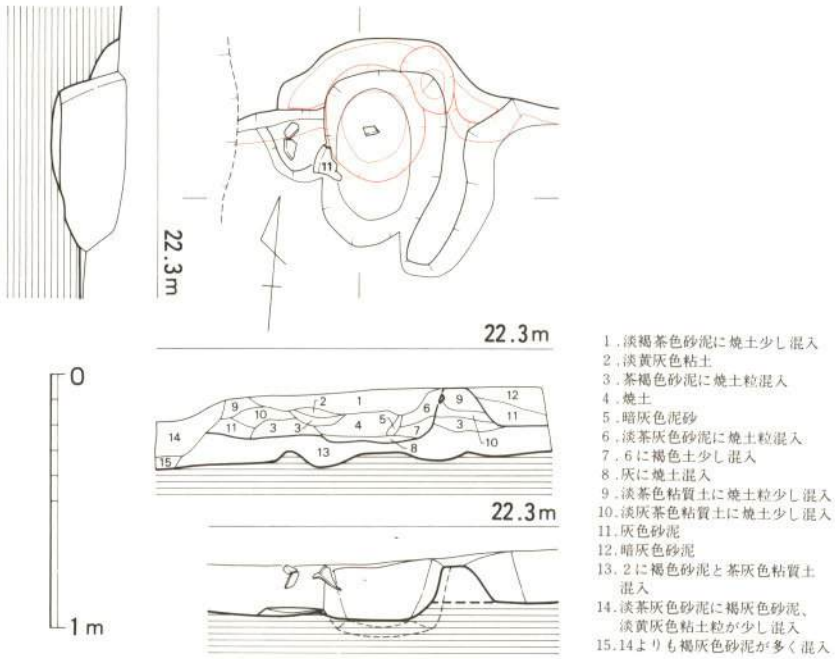
（図版３，第69図）

住居群の中では東端に位置する住居跡で、188・191・195号住居に北西の一部を切られるが、旧態は復原できる。198号住居との切り合いは、検出面で確認出来なかったが、床面下層調査時に当住居が新しいと判断された。壁面は北東側が残りも良く、15㎝～20㎝程の壁高を測り、急勾配に立ち上がっている。壁小溝は設けていなかった。辺長が4.1m前後を測り、中型規模の住居に復原される。

中央部が若干低く



第69図　197・198号竪穴住居跡実測図（1/60）



第70図　197号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

なる床面で、床面上において主柱穴の痕跡は確認していない。主柱穴は図示した配置が考えられ、P_1は191号住居の掘り込みにより喪失したのであろう。

カマド　（第70図）　北壁のやや東寄りに付設した突出型カマドである。突出部は竪穴部より25cm外側であまり出ず、掘り方も二段掘りとなり、上段部に粘土を積み上げて壁体を構成する。袖は竪穴部内に長く伸展して、左袖長が78cmを測り、焚口部が狭くなる形態をとる。左袖は大半以上を喪失しており、基底部が僅かに遺存する。袖長が25cm、袖高も良好な所で6cmを測る。左袖高は良好な所では20cmとなる。

火床面は床面より8cm低くなり、長軸が52cm、短軸が30cmを測り、楕円形の平面形態となる。火床面に支脚は遺存しておらず、抜き取り跡も検出されなかった。

出土遺物　（第162図）

1はカマド内から出土した品で、内面にヘラ記号を付した精良な坏。11もカマド内から出土。2と4がカマド周辺部より出土し、4・5と8が埋土中品、14が床面より出土した。他は床面下層から出土した品である。

鉄製品　（図版43，第129図）　54は着装部周辺が残っている鎌で、現存長が4.9cm、身の幅が2.6cm～3.2cm、背の厚みが2mmを測る。床面下層から出土。32は下半部を欠失した釘で、現存長4.4cmを測り、頂部が5mm屈曲する。中程から湾曲しており、断面長方形である。床面下層から出土。

土製品　(図版39，第120図)　13は端部を僅かに欠失する略完形の土錘である。現存長が5.8cmを、最大外径が1.8cm、孔径が4㎜を測る。床面直上より出土した。14は現存長が3.8cm、最大径が1.7cm、孔径5㎜を測り、床面下層から出土した。15は現存長が2.6cm、最大径が1.1cm、孔径が4.5㎜を測り、埋土より出土した。

198号竪穴住居跡　(図版3，第69図)

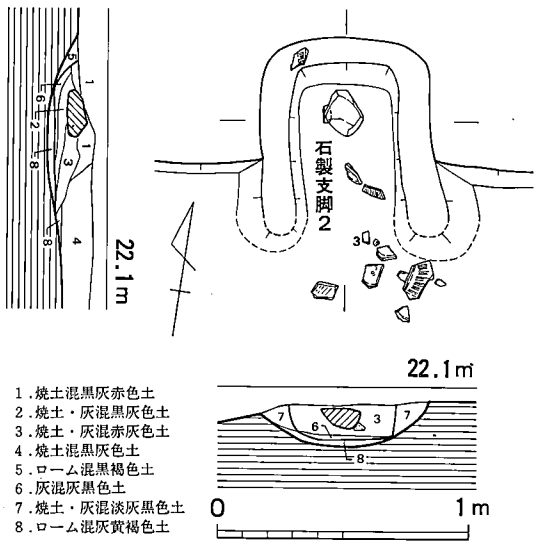
188・197号住居に切られて南壁側が残る住居跡である。南壁で4.7m前後の辺長となり、中型規模の住居になろう。壁面も遺存状態が悪く、5cm程の壁高となり、壁小溝も設けていない。検出部分での床面は略水平である。主柱穴は図示した配置が考えられ、P_1が他の住居の掘り込み等で喪失したものと推測される。床面下層では、南壁に沿った掘り込みが伴い、50cm～1mの幅で巡っているが浅い。土坑は断定出来ないものの、P_3北側の土坑が中央土坑かもしれない。長軸が1.2m、短軸が0.75mを測り、床面から20cmの深さで、楕円形の平面形態である。

遺物は若干出土しているが、図化していない。

199号竪穴住居跡　(図版3，第72図)

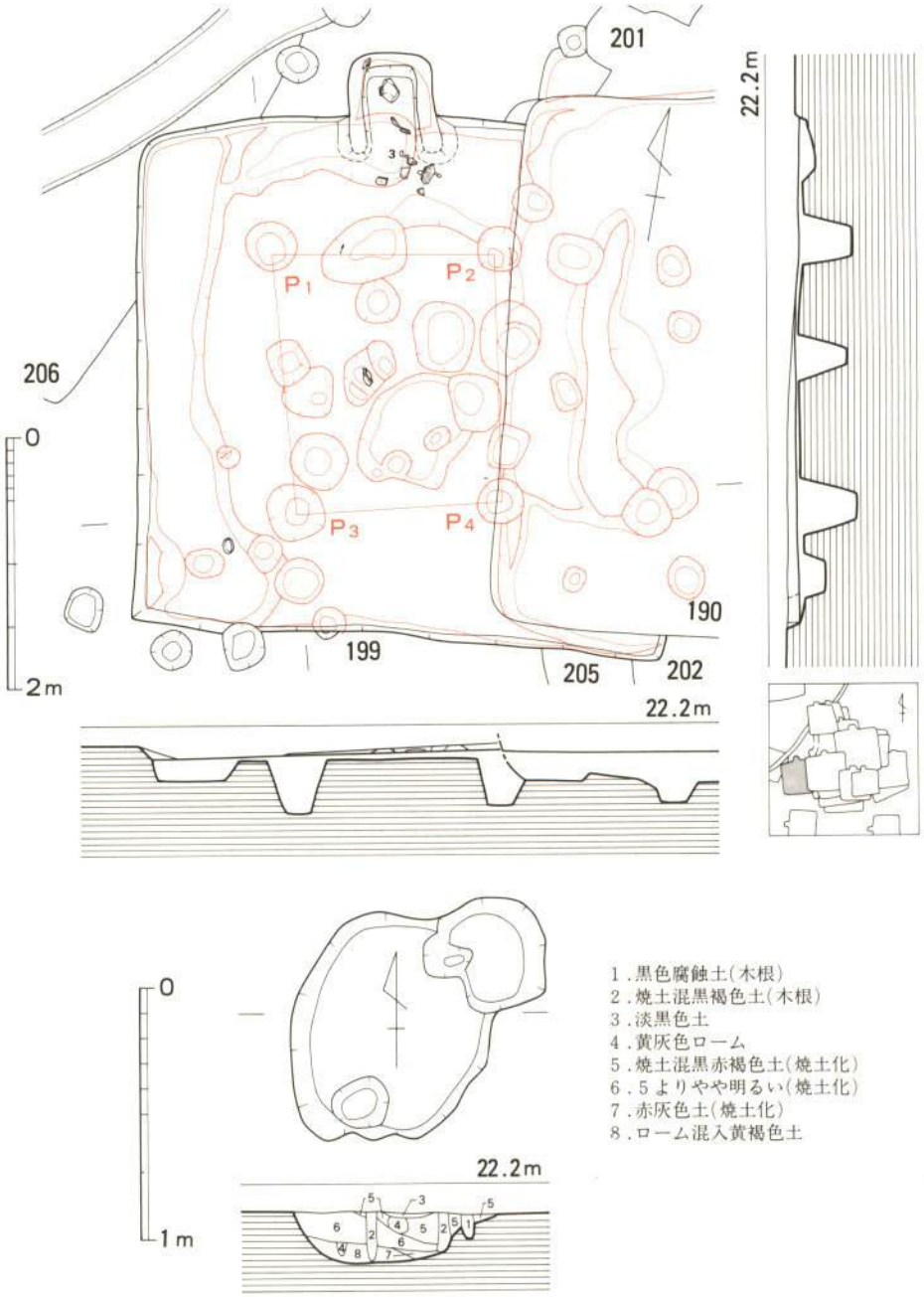
東壁側が幅1.5mに渡って190号住居に切られているが、202・205・206号住居より新しい住居跡である。東西の辺長が4.8m、南北の辺長が3.8m～4.15mを測り、長方形に近い平面形態に復原される。壁面はやや緩やかな立ち上がりで、10cm～15cmの壁高を測り、壁小溝を設けていない。床面は略水平である。主柱穴は南北間が長い長方形の配置となり、竪穴部とは逆の平面形態である。床面下層で中央土坑と掘り込みを検出した。中央土坑は主柱間エリアの南よりに位置して、長軸が0.95m、短軸が0.8m程を測る。床面より20cmの深さで、やや不整な楕円形の平面形態となる。埋土内に焼土が多く混入しており、190号住居の土坑と同様な堆積状況であり、性格を考える上で貴重な資料になろう。掘り込みは西壁と北壁の一部が深く掘られていた。

カマド　(図版21，第71図)　北壁の略中央部に付設した突出型カマドである。突出部は隅円方形の掘り方となり、先端が竪穴部より50cm外側となる。突出部の壁体はあまり遺存しないが、竪穴部内に両袖として伸展しており、直線状に両袖



第71図　199号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

が30cm程伸びていた。火床面は床面より僅かに低くなり、長軸が60cm、短軸が38cmを測り、隅円長方形の形状である。火床面より5cm上方で火熱を受けた自然石を検出した。最長で19cmのやや角張った形状であるが、煙道側を上端にすると支脚としても十分使用可能であり、支脚と

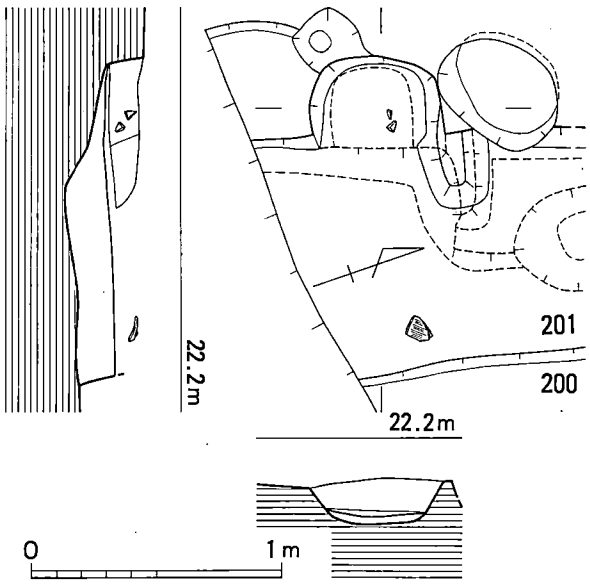


第72図　199号竪穴住居跡（1/60）・中央土坑（1/30）実測図

して使用された後に除去されたと考えられる。カマド祭祀行為の一つと考えている。

出土遺物　(第163図)

須恵器の2・3・5がカマドの内と前面から出土した。1と4は床面下層からの出土品。6は埋土からの出土品だが、7は中央土坑に隣接した柱穴からの出土品で、当住居に共伴しないかもしれない。



第73図　201号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

200号竪穴住居跡　(第64図)

190号住居の北側で、床面下層のみ検出した住居跡である。190・191号住居に切られるが、201号住居より新しくなると考えられ、192・194号住居との切り合い関係は不明となる。遺存するのが掘り込みの一部だけで、住居の規模や主柱穴等が全く不詳となる。

201号竪穴住居跡　(図版3，第64図)

200号住居の西に位置する住居跡で、カマドと周辺部が僅かに遺存する。主柱穴や床面下層遺構等は判然としないが、壁高は10cm程を測る。

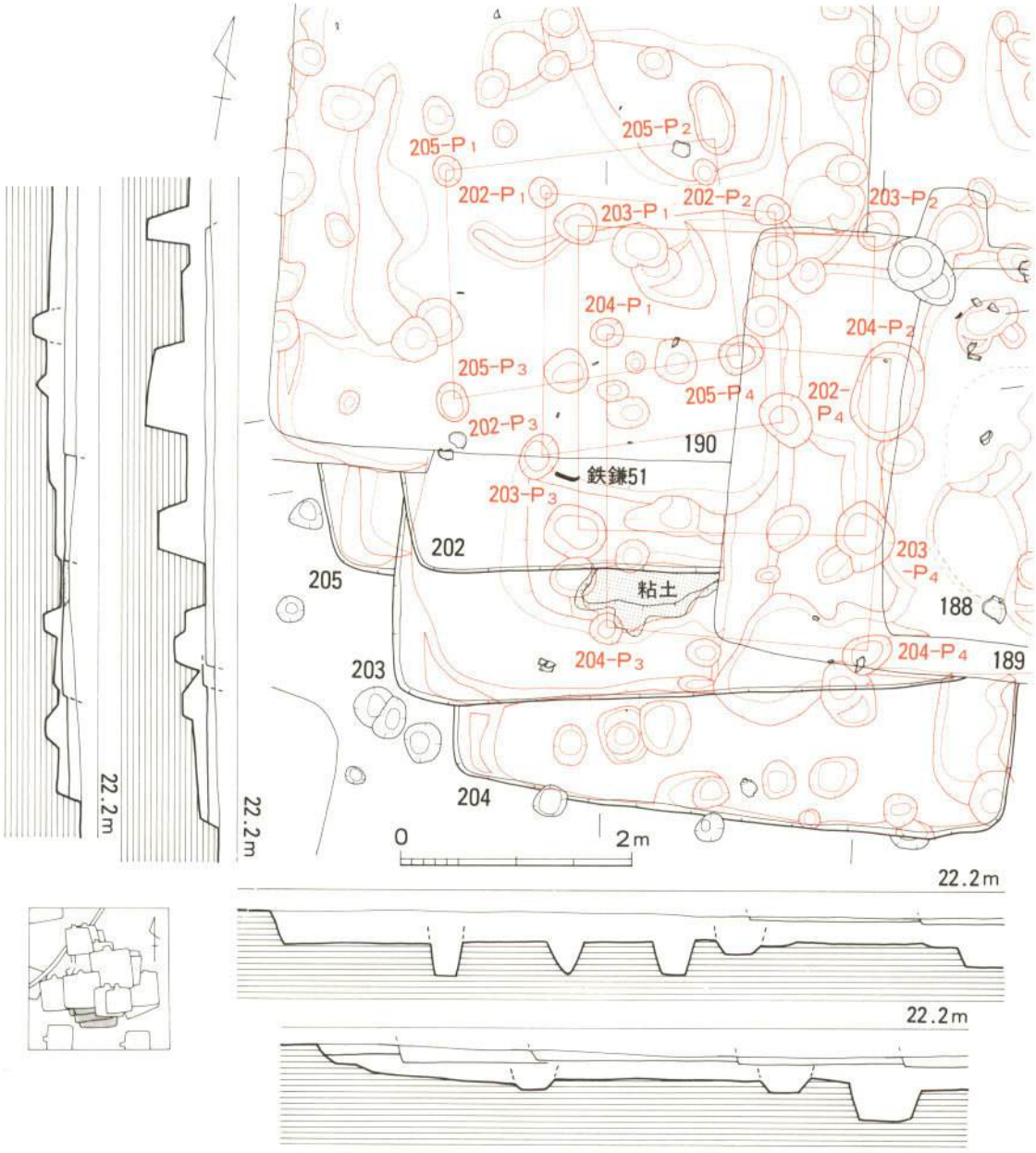
カマド　(第73図)　突出型のカマドで、竪穴部より35cm突出する掘り方となる。突出部に壁体は遺存しないが、竪穴部内に右袖が僅かに残っていた。袖長が32cm、基底部の幅が28cm、高さが10cmを測る。火床面は竪穴部内を掘り過ぎて不明となり、突出部のみ検出した。支脚は遺存しない。

出土遺物　(第163図)

須恵器坏蓋の1はカマド周辺より出土したが、カマド北側の柱穴や190号住居下層から出土した破片と接合する。2はカマドに接した北側の柱穴より出土した品で、当住居と関連しないと考えるべきだが、1の接合関係の資料として本項に納めた。

202号竪穴住居跡　(第74図)

住居群の中では南端に当たり、南西側の竪穴部が一部遺存するだけの住居跡である。切り合い関係を整理すると、189～191号住居に切られるが、203・205号住居より新しくなる。



第74図　202～205号竪穴住居跡実測図（1/60）

主柱穴は図示したP_1～P_4を考えているが、P_1～P_3間が少し広くなる台形状の配置をとる。僅かに遺存する竪穴部と主柱穴配置を考慮すると、辺長が4.5m程となる住居に復原される。床面下層の遺構では、南壁側の掘り込みが壁面に沿っており付随する。

出土遺物　(第163図)

土師器坏の1は埋土中品で、2と3も同じである。4と5は床面下層から出土した。

鉄製品(図版43, 第129図)　51は床面上より出土した略完形品で、先端部が大きく曲刃する鎌である。全長20.4cm、最大幅2.8cm、背の厚み2㎜を測る。

203号竪穴住居跡　(図版3, 第74図)

202号住居の南に位置して、竪穴部が南方に1m程平行移動した住居跡である。周辺部との切り合い関係は、189・190・202号住居に切られ、204・205号を切っている。南西側の竪穴部が少し遺存するだけだが、南壁から60cm程内側でカマド対面粘土を検出した。粘土は長軸で1.2m、短軸で0.6m、厚み5cm程が扁平に存す。

主柱穴はP_1～P_4を考えているが、柱間隔が2.5m程を測る。遺存する竪穴部と併せて考慮すると、辺長が5mを超す規模の住居となろう。床面下層には、壁面に沿って掘り込みが「L」字状に巡り、10cm～20cmの深さを測る。図化可能な遺物は出土しなかった。

204号竪穴住居跡　(図版3, 第74図)

189・203号住居に切られて南壁側が遺存する住居跡である。南壁の辺長が4.9mを測り、大型規模に近い住居に復原される。壁高は10cm～15cmを測り、急勾配な立ち上がりとなる。床面は略水平となっているが、壁面下に壁小溝を設けていない。

主柱穴は図示した配置を考えているが、P_3が105号掘立柱建物と重複したことになり、再考の必要があるのかもしれない。ともあれ、2.3m～2.5mの柱穴間距離となり、南辺と略相似した配置である。床面下層の遺構は、東壁の浅い掘り込みとP_4西方の中央土坑が伴うと考えられる。中央土坑は長軸が1.15m、短軸が0.8mを測り、楕円形の平面形態となる。

出土遺物　(第163図)

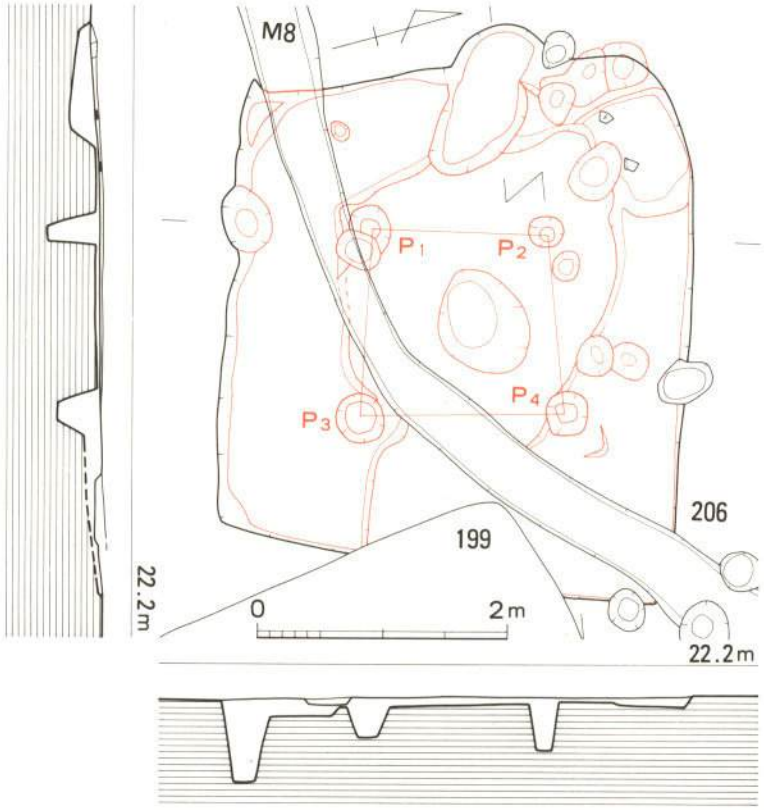
1は須恵器の坏身で、床面下層より出土した。

205号竪穴住居跡　(図版3、第74図)

周辺の住居に切られて南西隅部が残る住居跡で、切り合う住居群の中で最も古くなる。壁面はやや急勾配な立ち上がりで、10cm程の壁高を測るが、壁面下に壁小溝を設けていない。床面下層に掘り込みの一部を検出したが、15cm程の深さになることしか分からない。主柱穴は図示した配置が考えられ、P_1～P_2とP_3～P_4間が広くなる長方形の平面形態である。

図化可能な遺物は出土していない。

206号竪穴住居跡　(図版3, 第75図)



第75図　206号竪穴住居跡実測図（1/60）

住居群の中では西端に位置する住居跡で、東壁の中程を197号住居に切られ、北東隅から南西隅にかけて蛇行した８号溝に切られている。辺長が3.5m～４m前後を測り、小さな中型規模の住居である。北壁側で壁面が僅かに残り、その他の場所は検出面が床面となり、遺存状態不良であった。主柱穴は図示した配置で、やや台形に近い平面形態となる。

床面下層で掘り込みを検出したが、やや不整形となるが全周し、南壁側がやや深く掘られている。北西隅部が一段と深くなっており、この場所が壁隅土坑に相当するのかもしれない。長軸が１m、短軸が0.75mを測り、少し不整な長方形の平面形で、床面より25cmの深さとなる。西壁中央部にも土坑状の掘り込みを検出したが、焼土も散布しておりカマド跡と考えられる。竪穴部より30cm程突出した掘り方でもあり、突出型カマドを付設していた可能性が高い。主柱間エリアの中央にも土坑を検出したが、長軸が90cm、短軸が70cmを測り、規模がやや小さい中央土坑と考えられる。平面形態は楕円形で、床面より30cm程の深さとなる。

出土遺物　（図版31，第163図）

１と２が北西隅の床面上より出土し、３と５が中央土坑から出土した。４は埋土中の品である。１と２はやや精良な品である。

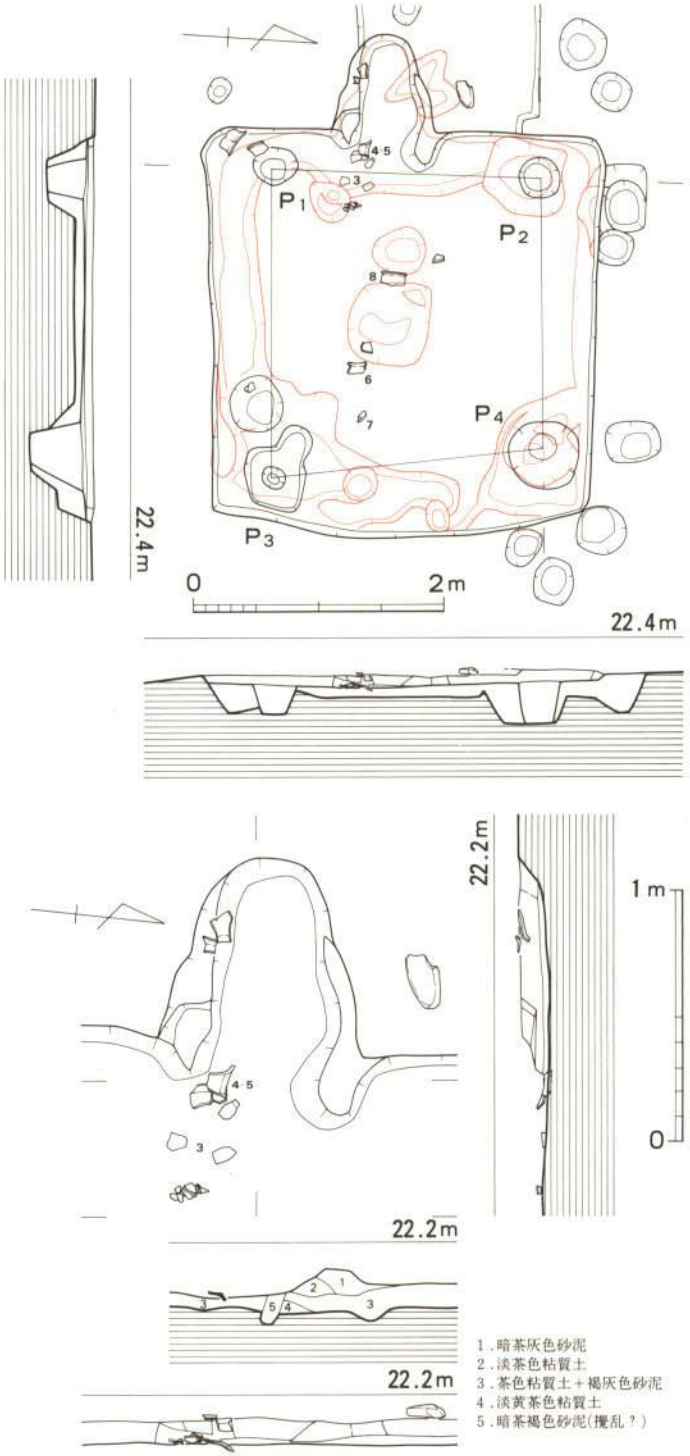
207号竪穴住居跡

（図版３・22，第76図）

住居群の南に位置する住居跡である。辺長が３m～3.2mを測り、竪穴部の規模は小型に属す。壁面はやや急勾配な立ち上がりで、５cm～10cmの壁高を測り、壁面下に壁小溝を設けていない。床面は中央部が僅かに低くなるも略水平である。

主柱穴は竪穴部の縮小に伴い壁際に配置しており、竪穴住居における形態の変遷を考える上でも良好な資料になろう。柱間はP_1～P_3が2.5mと広く、他は2.1m前後を測り、壁際から30cm前後の位置である。この様な配置形態をとると、住居の壁体構造とその位置が問題となるが、当報告では紹介するに止めて、次報告で竪穴住居の変遷も含めて論及する予定である。

床面下層で掘り込みを検出したが、北壁を除き壁面に沿って巡っており、幅が広狭しつつ溝状を呈す。主柱間エリアの中央部で中央土坑も検出したが、辺長が60cm程の隅円方形を呈す。床面より30cmの深さで、土



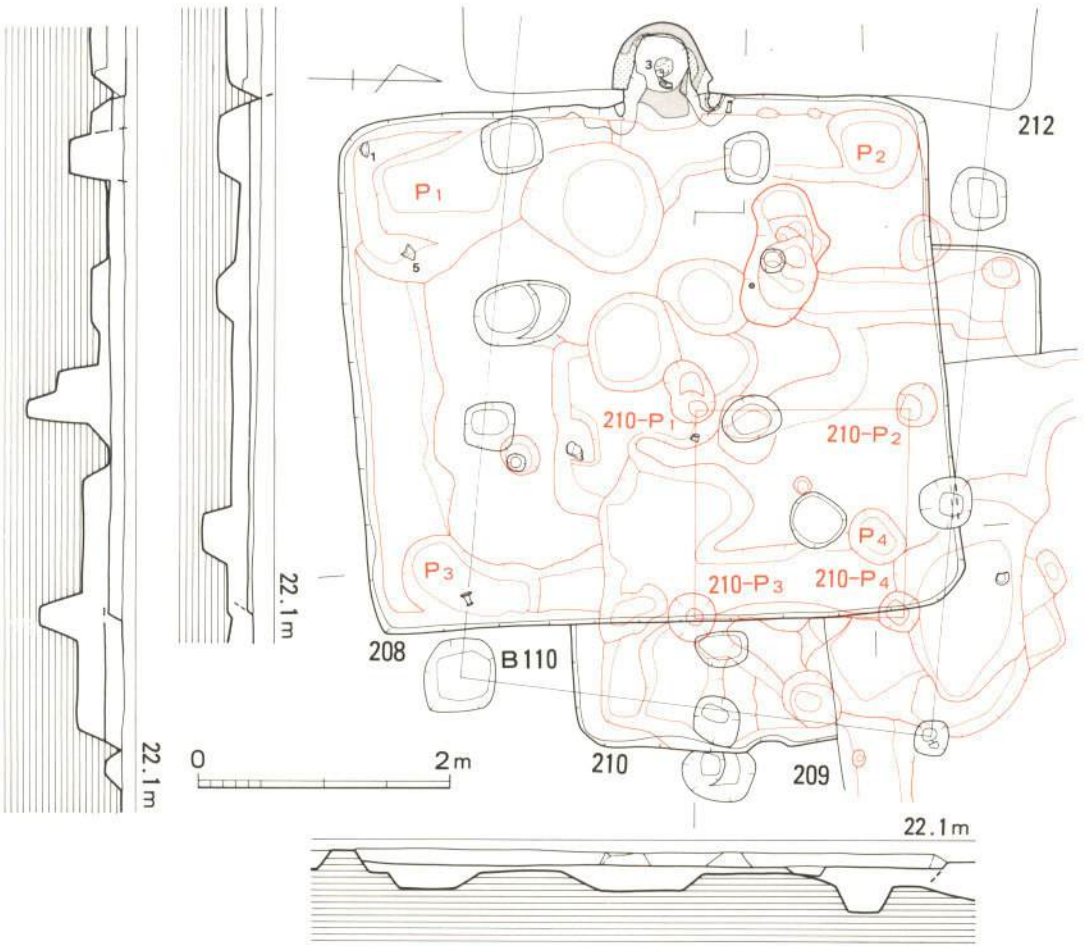
第76図　207号竪穴住居跡（1/60）・カマド（1/30）実測図

坑と表現するよりも柱穴に近い形態である。

カマド（第76図）　西壁の中央部に付設した突出型カマドである。竪穴部より75cm程も突出する掘り方となり、楕円形に近い形状である。突出部は崩れたのであろうか、名残りを止める程しか遺存していないが、袖部では比較的良好に残っていた。特に右袖は竪穴部内に25cm伸展して、焚口部が狭くなる形態である。火床面は床面と略水平となり、突出部で隅円長方形の形状となる。支脚は遺存していないし、抜き取り跡も検出していない。カマドの外側に広がる浅い土坑状の遺構については、当住居に伴うか否かは断定出来なかった。５cm程の深さで、先端部が円味を持つ形状である。

出土遺物　（図版31，第164図）

須恵器坏蓋の１は中央土坑から出土。同坏身の２と３はカマド内及び前面より出土した。土師器の甕では、４と５がカマド内及び前面より、その他は床面上から出土した品である。



第77図　208・210号竪穴住居跡実測図（1/60）

208号竪穴住居跡　（図版３・22・23，第77図）

207号住居の南西で４軒の住居が重複しており、その中で最も新しい住居跡となる。竪穴部は東西の辺長が4.1m、南北が4.7mを測り、隅円長方形の形状となる。壁面はやや急勾配な立ち上がりで、５cm～10cmの壁高を測り、壁小溝は設けていない。床面は水平な貼床である。問題となるのは主柱穴で、207号住居と同様の配置と考えれば、北壁側の両隅に柱穴が存する。一方の南壁両隅では明確な柱穴は見当たらないが、床面下層の掘り込みが二段掘りの形態となっており、該当地に柱穴が存した可能性も考えられる。一般的な配置形態をとったとすると、東半部にP_3とP_4に相当する柱穴は遺存しているが、西半部にP_1とP_2はない。この様な状況から、前述した配置が妥当と考えている。

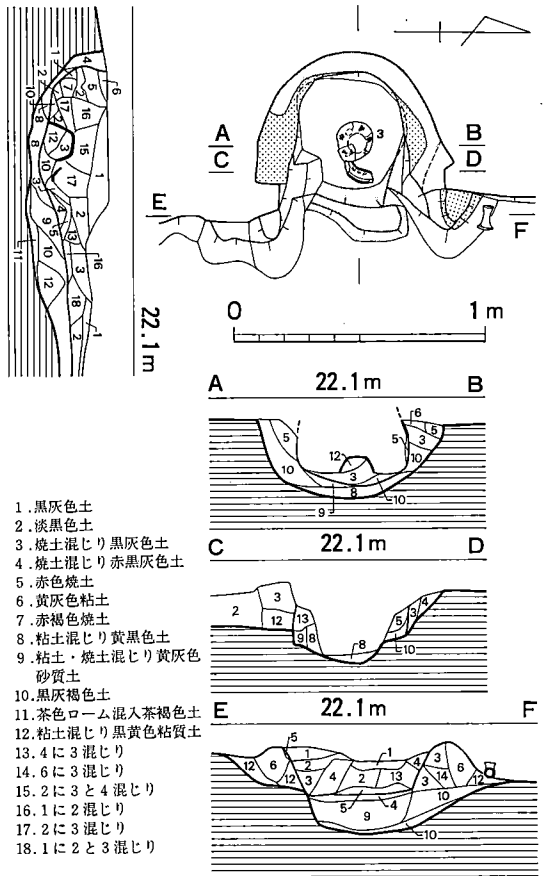
床面下層で掘り込みを検出したが、重複する部分では他の住居が深く掘削されているので確認されなかった。幅が60cm程で溝状に巡り、床面から10cm前後の深さである。中央土坑も遺存すると考えているが、210号住居の掘り込みと重複しており判然とした形状ではない。210号住居の南西隅に相当する場所で、床面より20cm程の深さとなる。

カマド　（第78図）　西壁中央に付設した突出型カマドで、先端部が211号住居内となる。竪穴部より60cm突出する掘り方で、少し不整な形状で先端が丸味を持つ。壁体は上端で10cm～15cmの幅で、粘土を主体に積み上げており、一部が竪穴部内にも伸展して両袖を構成する。両袖は直線状に伸びており、竪穴部内では25cmの長さを測る。火床面は焚口部から低くなり、中程の支脚付近が最も低い。焚口部の粘土は壁体が崩落したものであり、火床面に付着して検出された。

支脚は煙道側から35cmの位置となり、小型の甕を逆位で使用して、甕内に土を充塡して強化をはかっている。器高が7.2cmで低い支脚となる。

出土遺物　（図版32，第164図）

須恵器坏蓋の１と５が南西隅部の床面上より出土し、３はカマドの支脚に転用された品である。２と７が埋土中品で、



第78図　208号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

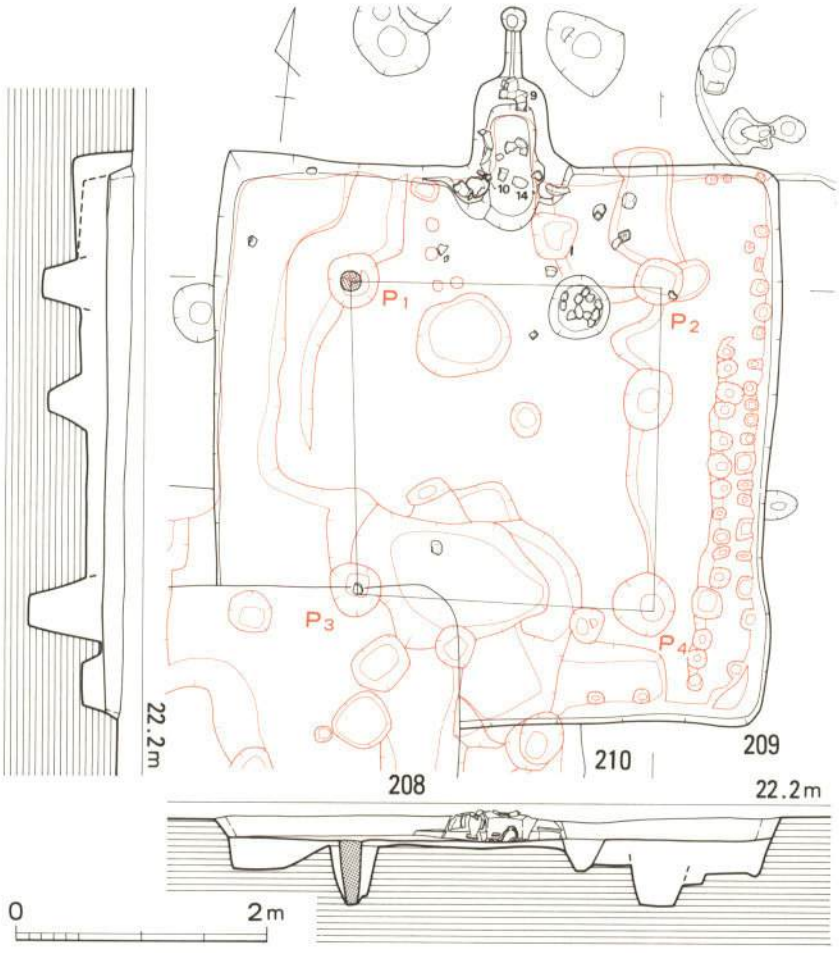
6は床面下層より出土した。残る3点は210号住居のP_1北側の柱穴より出土した品である。

土製品　(図版39，第120図)　22は完形の土錘で、長さが4.9cm、最大径が1.3cm、孔径3.5㎜を測る。23も端部を欠損した土錘で、現存長4.6cm、最大径1.6cm、孔径5㎜を測る。22が埋土から、23が床面上から出土した。

石製品　(図版40，第123図)　埋土から出土した滑石製臼玉である。13点を数え、外径が9㎜～1.05㎜、孔径2㎜程である。厚さは様々で3㎜～7㎜を測る。断面が長方形となるのは少なく、ほとんどが片方が斜交した形状になっている。

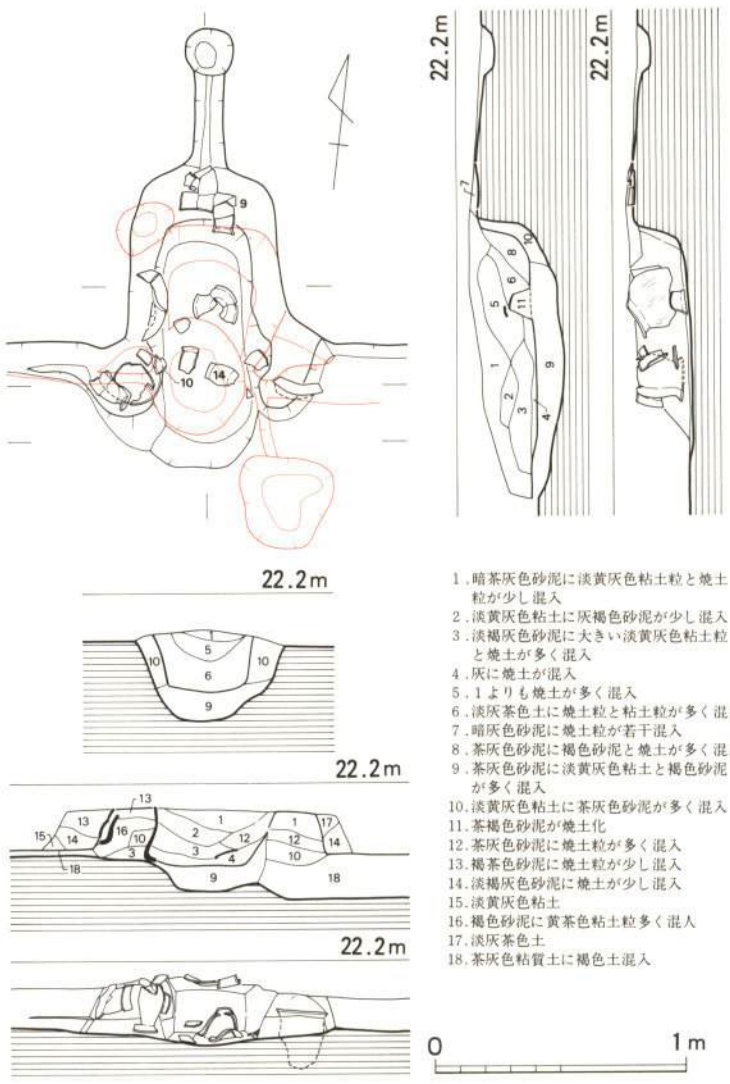
209号竪穴住居跡　(図版3・22・23，第79図)

南西隅部を208号住居に、109・110号掘立柱建物にも切られている。辺長が4.4m前後を測り、中型規模の住居跡である。遺存状況は良好な部類に属し、15cm程の壁高を測る。略水平な貼床



第79図　209号竪穴住居跡実測図(1/60)

であるが、壁面下に壁小溝を設けていない。主柱穴は竪穴部と略相似形に配置しており、柱間隔が2.5m前後となる。床面下層で中央土坑と掘り込みを検出した。中央土坑はP_3～P_4間に位置して、長軸が1.85m、短軸が1mを測り、床面から40cm程の深さで二段掘りである。掘り込みは、カマド周辺部を除いて巡っているが、二段掘りの場所もあり不整な形態となる。東壁際で小穴が二列に整然と並んでおり、壁体に関連する遺構とも考えられるが、深さが浅い点から掘削痕と考えるのが妥当であろう。



第80図　209号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

カマド　（第80図）　北壁中央部に付設した突出型カマドである。竪穴部より70cm外側に突出し、幅が60cmの長方形に近い掘り方となり、先端中央部から更に煙道が35cm伸びる。そして、煙道端部に3cm低い窪みを付設しているが、これは煙突部に入る雨水をカマド内に流入させぬための施設である。壁体の構築法も当遺跡では特異となり、両袖内や左側壁と煙道口に土師器の甕を転用して、粘土を積み上げた壁体の強化を図っている。

両袖とも竪穴部内に40cm程伸展している。左袖には、竪穴部と接した場所に甕を埋め込んでおり、口縁端部が床面より僅かに上方となる。右袖では、竪穴部下端より内側10cmの位置に床面より12cmも深く埋め込んでいる。両袖内の甕が位置する場所は焚口の底部に相当して、壁体

構造上でも重圧がかかる位置でもあり、強固に造るための業と解される。同様な理由で煙道口の土器も理解されるが、旧態は底部を穿孔した甕を設置していたと想定され、上半部を検出時以前に欠失したのであろう。口縁部側をカマド内に向けており、火床面より口縁下端までが17cm程を測る。左側壁の中程にも甕を埋め込んでいるが、掛口部付近で支脚の横に位置して、最も重圧がかかる位置である。左袖部とは逆の正位に近い形態で使用するのに、何らかの意図があるのであろうか。この様に、土師器の甕を壁体内に埋め込む意図は、置かれている位置から壁体の強化を図ったと言えよう。

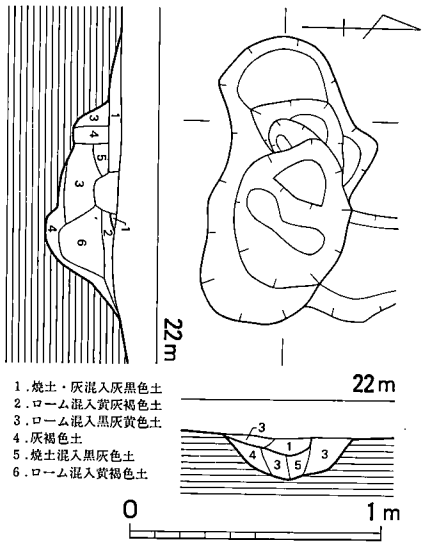
火床面は、焚口部で床面より僅かに低くなるが、煙道口に向かって少しずつ高くなり、支脚位置と床面では略同レベルとなる。長軸が75cm、短軸が36cmを測り、隅円長方形の形態となる。支脚は煙道口の下端より20cmの位置となり、土師器甕を逆位に据えている。甕内に土を充填して強固に設置していた。復原支脚高が12cmとなる。

出土遺物　(図版32, 第164～166図)

カマドの壁体内に転用されていたのが、6～8で、9は煙道口に使用されていた品。14がカマドの支脚に転用されていた品。15は支脚付近よりの出土品である。10もカマド内より出土。1と3と13が床面上の出土品となり、2と5と12が埋土品である。11は110号掘立柱建物の柱穴より出土した。他は床面下層よりの出土品。

210号竪穴住居跡　(図版3・23, 第77図)

208・209号住居に切られて、北西隅部と南東隅部で僅かに旧態を止めるが、床面下層の掘り込みで復原可能となる住居跡である。竪穴部の辺長は3.8m～4m程になろう。壁面下には壁小溝を設けていないと判断され、5cm～10cmの壁高が遺存している。主柱穴は図示した配置となり、正方形に近い平面形である。床面下層の掘り込みは、西壁側で45cmの幅で溝状を呈しているが、南北の両壁では判然としない。



カマド　(第81図)　208号住居の下層で検出したカマドの痕跡であり、カマドの下層に相当すると考えられる。壁体と火床面も遺存しないが、西壁中央部に付設された突出型カマドになろう。

出土遺物　(第166図)

3と6が埋土よりの出土品で、他は床面下層から出土した。

第81図　210号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

211号竪穴住居跡

（図版３・23，第82図）

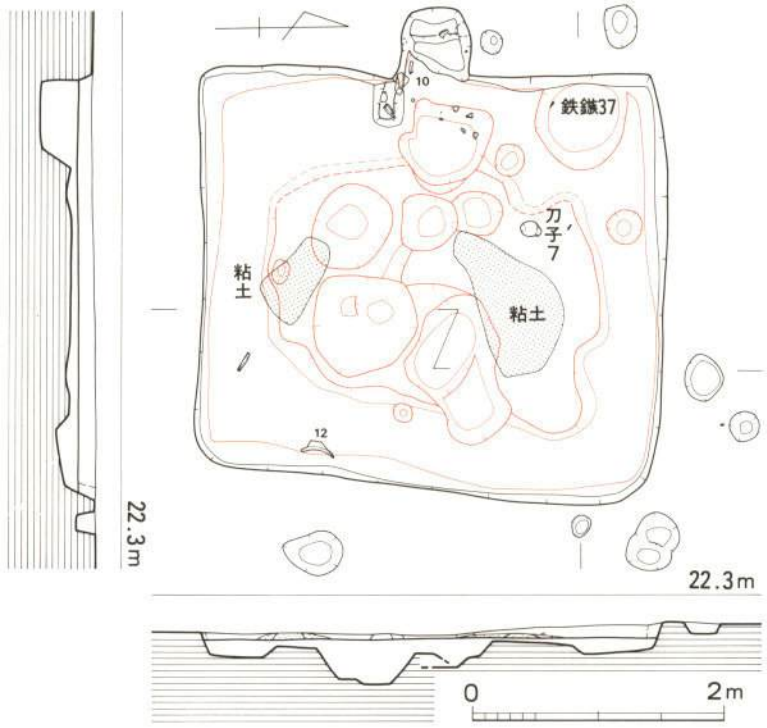
209号住居の北西に位置する住居跡であり、切り合いもなく単独で遺存している。竪穴部は、南北が3.7m程を、東西が3.2m～3.45mを測り、やや不整な隅円長方形を呈す。壁面は急勾配に立ち上がり、６㎝～15㎝の壁高を測るが、壁面下に壁小溝を設けていない。床面は水平。

竪穴部中央で粘土を確認したが、この様な例は珍しく、性格については不詳である。

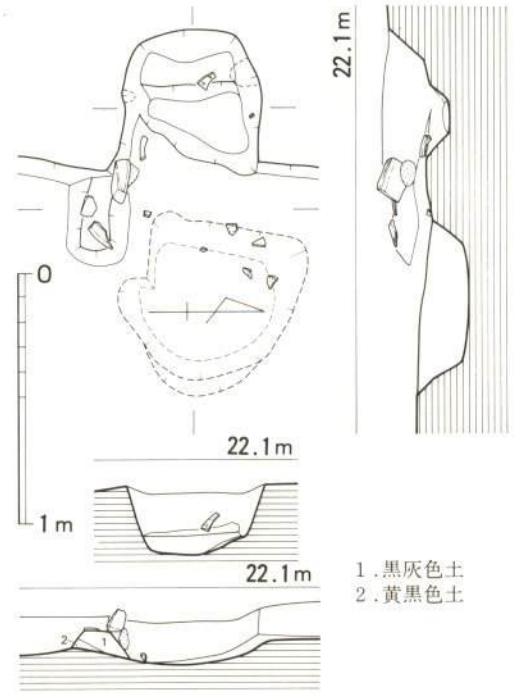
主柱穴は、床面上と床面下層でも確認されなかった。竪穴部の規模も小型の部類に属し、207号住居と同様の隅部に主柱穴を配置したと考えたが、該当地にも明確な柱穴は存在しなかった。竪穴部外にも該当する柱穴が存在しないので、竪穴部内で浅い掘り方の主柱穴を想定している。

床面下層の遺構は、掘り込みが壁に沿って巡っており、幅は50㎝～80㎝を測り、床面より15㎝の深さとなる。

カマド　（第83図）　西壁の中央部に付設した突出型カマドである。突出



第82図　211号竪穴住居跡実測図（1/60）



第83図　211号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

部は隅円長方形を呈して、竪穴部より55cm程突出する。壁体は崩落したのか殆ど遺存しないが、左袖が竪穴部内に35cm伸びている。火床面は煙道側が少し高くなり、突出部中程で大きく窪むが、支脚の抜き跡り跡と判断された。

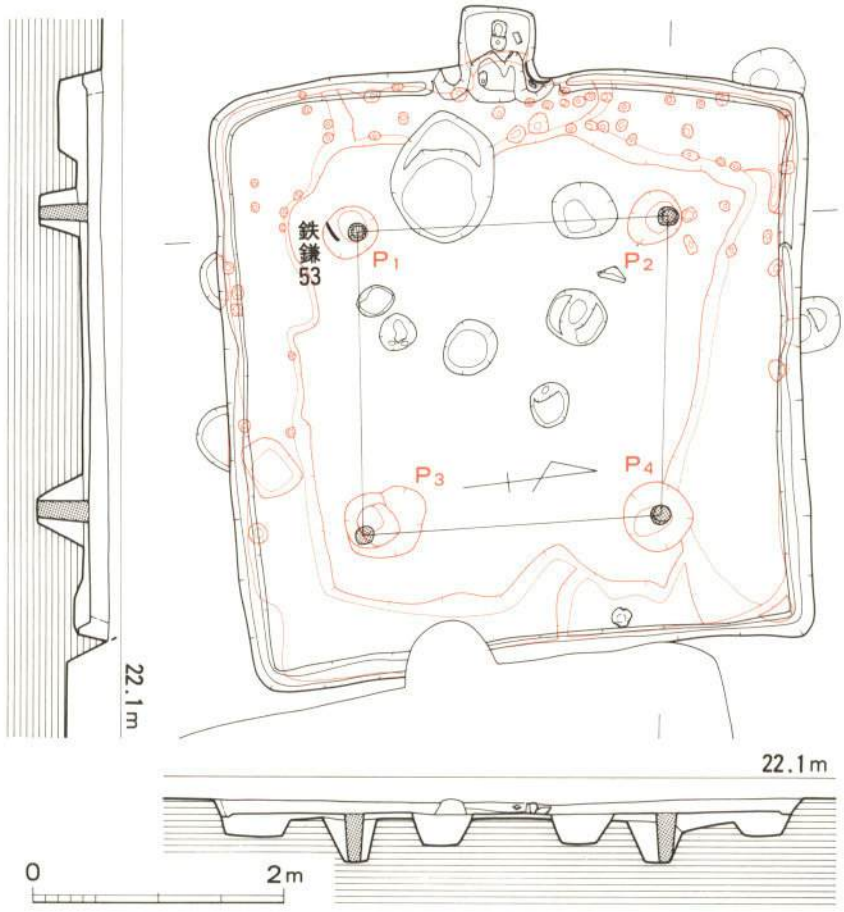
出土遺物　(第166・167図)

須恵器坏蓋の1がカマド内より、10がカマド周辺より出土した。2・3・9・11～15が埋土中品で、その他は床面下層より出土した。

鉄製品　(図版42，第127図)　7は床面上より出土した刀子の茎部片であろう。現存長が7cm、幅が7㎜～9㎜、厚みが3㎜程を測る。

212号竪穴住居跡　(図版3・23，第84図)

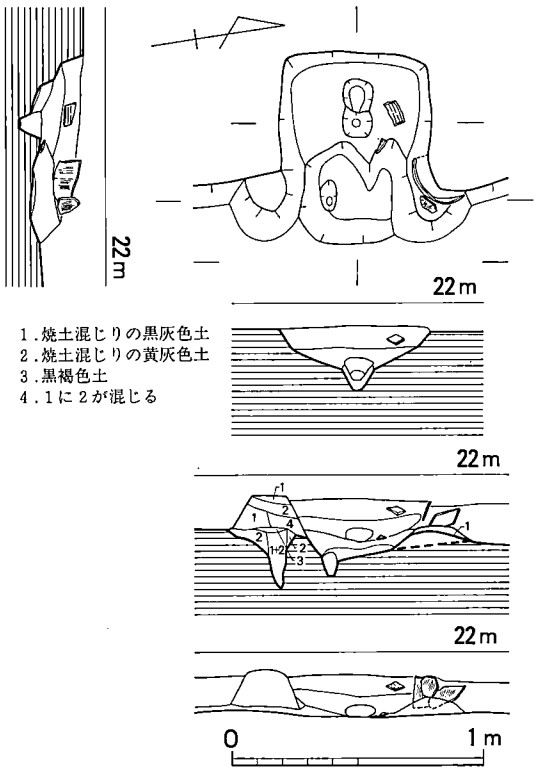
208号住居の西に位置する住居跡で、東壁側で僅かに切り合うが略平行となり、当住居が古くなる。辺長が4.5m～4.8mを測り、中型規模でも大きい部類に属す。壁面は急勾配に立ち上がり、10cm～16cmの壁高を測る。カマド周辺を除いて壁面下に壁小溝が巡り、床面より3cm～8



第84図　212号竪穴住居跡実測図 (1/60)

cmの深さである。床面は略水平な貼床。主柱穴はP_3を除いて、床面上で柱痕を検出した。竪穴部と相似形に配置されており、P_3～P_4間が少し狭くなる台形状に近い平面形である。

床面下層で掘り込みを検出したが、壁面に沿って50cm～１mの幅で巡り、底面は段をなしており12cm～25cmの深さとなる。この掘り込み内で小穴を検出したが、209号住居と同様の配置で性格も同じであろう。



第85図　212号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

カマド　（第85図）　西壁に付設した突出型カマドである。突出部は隅円方形を呈して、竪穴部より50cm程外側となる掘り方である。壁体は崩落したのか殆ど遺存せず、僅かに両袖が竪穴部内に20cm～25cm伸展して残る。右袖内に土師器甕の胴部片を埋め込んでいるが、209号住居カマドと同様に壁体の補強材に使用されたものである。火床面も隅円長方形を呈し、焚口部では床面より僅かに低くなるが、煙道部に向かって順次高くなる。支脚は遺存せず、抜き取り跡も検出していない。

出土遺物　（図版32，第167図）

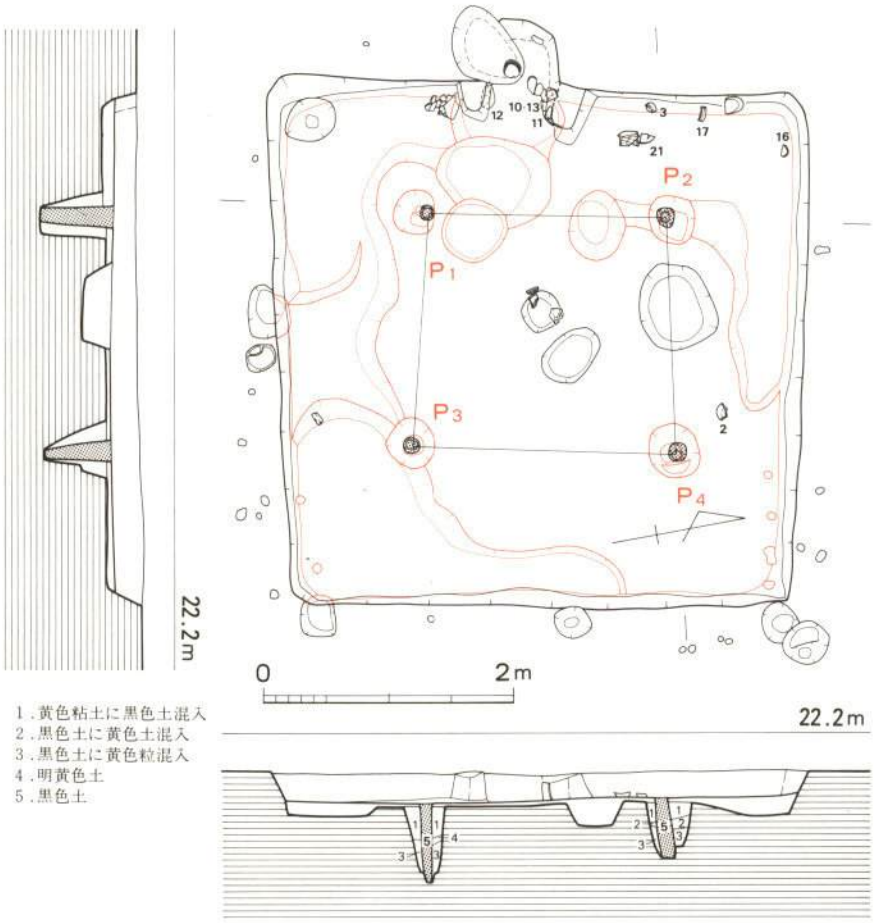
全部埋土より出土した品である。３が東壁際で床面直上で出土し、５は精良品である。

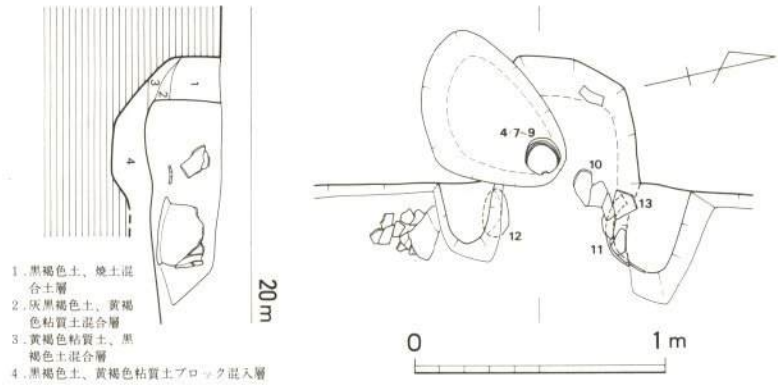
鉄製品　（図版43，第129図）　53は完形の鎌で、全長が17.4cm、中程で2.1cmの幅となり、背の厚みが2.5mmを測る。P_1傍らの床面上で出土した。

213号竪穴住居跡　（図版24，第86図）

206号住居に隣接した住居跡である。辺長が４m～4.3mを測り、隅円方形の平面形となる。壁面は急勾配な立ち上がりで、20cm～25cmの壁高を測り、壁面下に壁小溝を設けていない。床面は主柱間エリアが僅かに低くなるものの略水平である。床面上で主柱穴の柱痕を検出した。主柱穴は南北が広く、カマド側に少し偏った配置となる。

床面下層で掘り込みを検出したが、北東隅付近を除いて巡る。底面は若干凹凸があり、床面より10cm～15cmの深さを測る。





第86図　213号竪穴住居跡（1/60）・カマド（1/30）実測図

カマド　（図版25，第86図）　西壁のやや南寄りに付設した突出型カマドである。竪穴部より50cm外側となる掘り方であるが、南半部を掘立柱建物の柱穴で壊されている。粘土等を積み上げて壁体を構築しているが、竪穴部内に袖部が30cm～45cm伸展している。右袖には土師器の甕を逆位で埋め込んでおり、壁体の補強を図るとともに、カマド壁面としたものである。火床面は略水平で、床面より僅かに低い。支脚は遺存していないが、柱穴で壊されたのではなく、廃絶時に除去されたのであろう。

出土遺物　（図版32，第168・169図）

4と7～9の4点は、カマドを切った柱穴の祭祀に用いられた品であり、当住居には伴わない。2はP_4付近の床面上より出土し、16が南壁際の床面上から出土した。北西壁側では、3・5・17と21が床面ないし床面直上で出土した。19が主柱間エリアの柱穴よりの出土品で当住居に伴わない。6・15・16と20が埋土より出土し、22が床面下層から出土した。その他はカマド内及び周辺部から出土した品である。

鉄製品　（図版43，第129図）　55は着装部周辺の鎌で、現存長が6.5cm、身の幅が2.3cm、同背の厚みが3㎜程を測る。着装部は45°曲折している。床面より出土した。

2　掘立柱建物跡

以下の説明の中で、必要に応じてピット番号を記述することがある。ピット番号は、基本的に北西隅の柱穴から東に向かって付している。なお、記述したピット番号は、挿図に明記している。また、柱痕を検出した建物の一部においては、トランシットで心々距離を計測した。計測値のうち、明朝体の数字で図示したものがそれである。

60号掘立柱建物跡　（第87図）

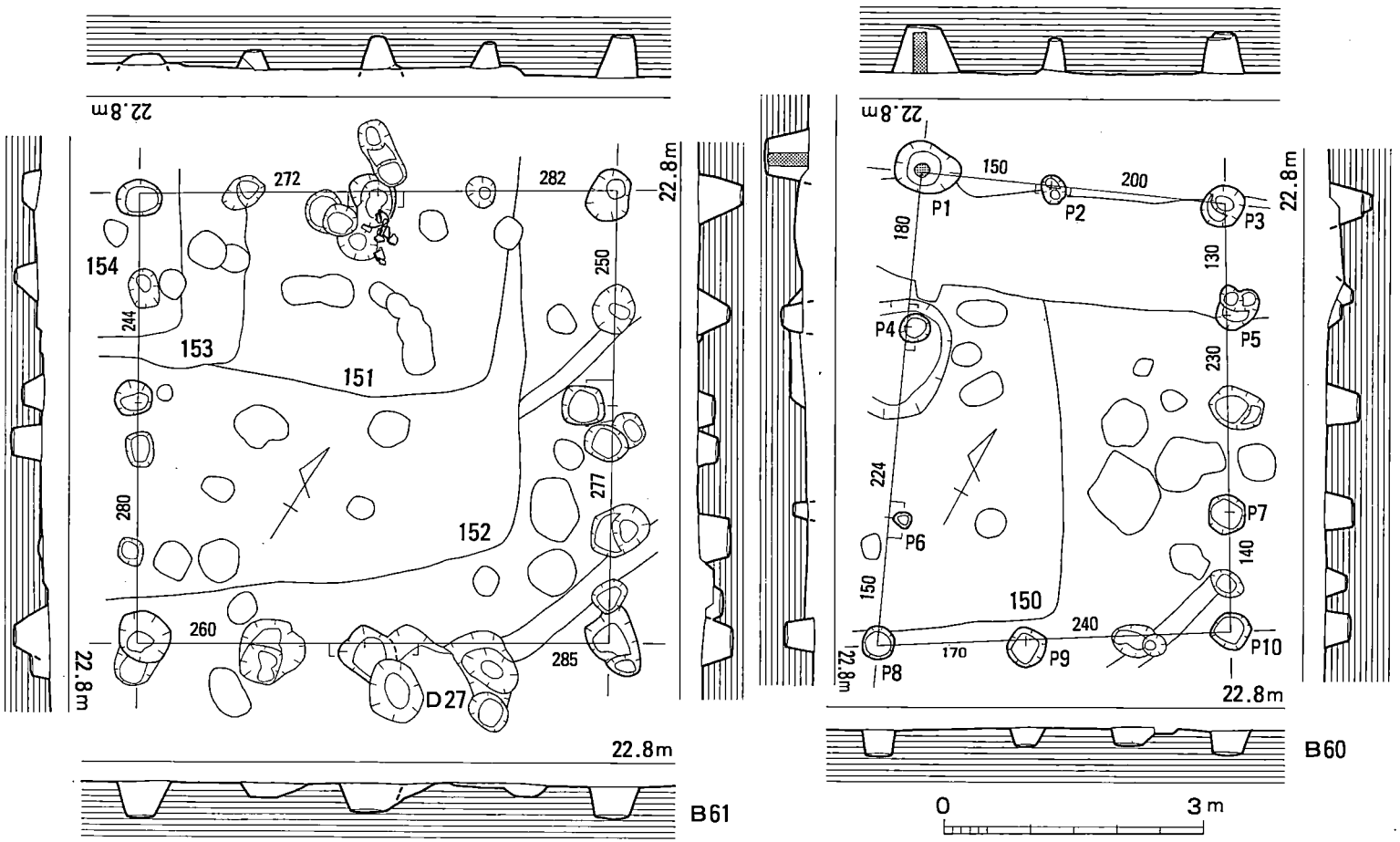
150号住居の東半部と重複する。1×3間の住居棟と考えられる。P2・P9は棟持柱の柱穴だと思われる。N-7°－Wにおく南北棟の建物である。桁行5.4m、梁間3.95m，面積21.33㎡である。

61号掘立柱建物跡　（第87図）

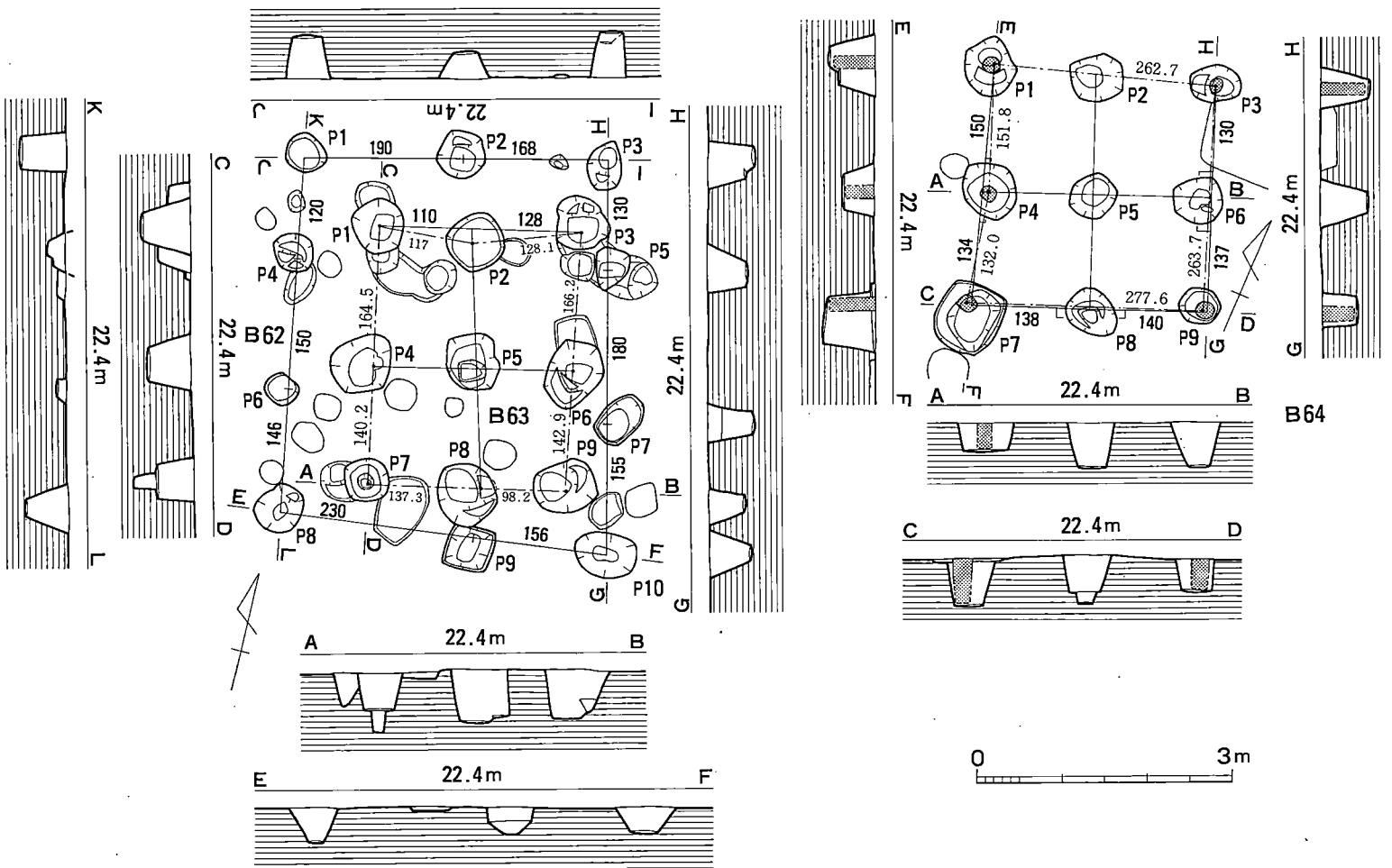
60号住居の南に位置し、151～154 号住居と重複する。2×2間の建物で、主軸をN-31°-Wにおく。規模は、軸線で南北桁行5.24m、東西5.5m、面積29.8㎡である。

62号掘立柱建物跡　（第88図）

調査区の北東隅に位置し、63号建物と重複している。1×3間の住居棟と考えられる。P2・P9



第87図　60・61号掘立柱建物跡実測図（1/80）



第88図　62～64号掘立柱建物跡実測図（1/80）

は棟持柱の柱穴だと考えられる。主軸をN-10°-Wにおく南北棟の建物である。桁行4.42m、梁間3.68m、面積16.27㎡である。

出土遺物　(第170図)

柱穴から、須恵器及び土師器片を検出した。1はP5、2はP8、3はP3、4はP10から出土した。

63号掘立柱建物跡　(第88図)

62号建物と完全に重複しており、62号建物の柱列の内側に検出した。2×2間の倉庫棟と考えられる。主軸をN-10°-Wにおく南北棟の建物である。桁行3.2m、梁間2.35m、面積7.52㎡である。なお、P2・P4・P7・P8で柱痕を検出した。図で、明朝体で示した数値はトランシットによる計測値を示している。四隅の角度のトランシット計測値は、P1部分の角度；91°22,10"同様にP3部分；87°41,、P7部分；91.42,20"、P9部分；89°14,30″ である。

出土遺物　(第170図)

柱穴から、須恵器及び土師器片を検出した。まとめて記せば、P1－12、P2－2・9・13、P6－10、P7－6・8、P8－1、P9－3～5・7・11である。

64号掘立柱建物跡　(第88図)

62・63号建物の南東に位置し、129号住居の西壁を切る。2×2間の倉庫棟と考えられる。主軸をN-20°-Wにおく南北棟の建物である。桁行2.77m、梁間2.71m、面積7.51㎡である。P2・P3・P4・P7・P9で柱痕を検出した。図の寸法はトランシットによる計測値である。

出土遺物　(第170図)

須恵器及び土師器片を検出した。まとめて記せばP2－2・4・5、P6－7、P7－6、P9－1・3である。

65号掘立柱建物跡　(第89図)

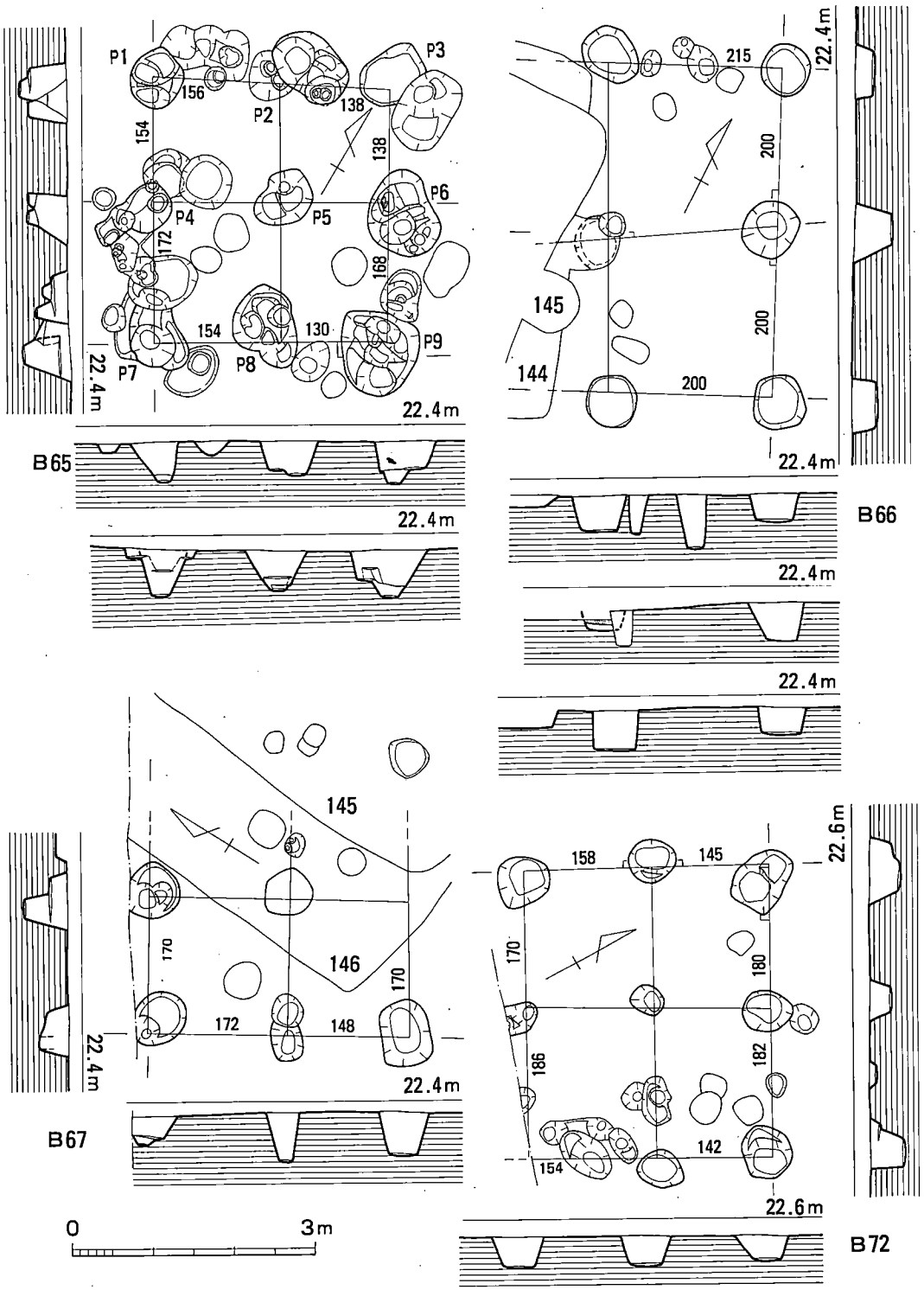
64号建物の南西に位置し。2×2間の倉庫棟と考えられる。主軸をN-30°-Wにおく南北棟の建物である。桁行3.15m、梁間2.87m、面積9.04㎡である。

出土遺物（第170図）

柱穴から、須恵器及び土師器片を検出した。まとめて記せば、P1－12、P6－11、P8－1～5・9・10、8・13はP2を切る東側ピットから、6・7はP3を切る東側ピットから出土した。

66号掘立柱建物跡　(第89図)

144・145号住居の東に位置し、144号住居のカマドが本建物のひとつの柱穴を切っている。本建物柱穴の底面よりも西側の住居の下層底面が深いため、本建物のさらに西側の柱穴は遺存しない。総柱の建物なので、倉庫棟であろう。



第89図　65～67・72号掘立柱建物跡実測図（1/80）

67号掘立柱建物跡　(第89図)

147号住居の西に位置する。倉庫棟であろう。

68号掘立柱建物跡　(第90図)

67号建物の西に位置し、3×3間の倉庫棟と考えられ、主軸をN-56°-Eにおく東西棟の建物である。規模は、軸線で桁行4.72m、梁間4.35m、面積20.1㎡である。柱痕を、P2～P5、P7～P9、P13～P15で確認した。東柱列に平行し、P8・P12に接して布掘の柱穴2本分を検出した。本建物に付随する昇降施設に伴うものかと思われる。なお、P16に接するピットは16を切るので本建物より新しい。

69号掘立柱建物跡　(91図)

65·66号建物の南に位置する南北に長大な建物で、3×5間の住居棟と考える。桁行15.5m、梁間6.45m、面積99.92㎡である。P2・P3中間の北にある小ピットは棟持柱の柱穴と考えられる

出土遺物　(第171図)

柱穴から、須恵器及び土師器片を検出した。まとめて記せば、P4－9・12、P7－8・11、P9－1・4・6、P11-7、P13-2・3・5・10である。

70号掘立柱建物跡　(91図)

69号建物に取り込まれたような位置にある。2×3間の倉庫棟と考えられ、主軸をN-57°-Eにおく東西棟の建物である。桁行4.5m、梁間4.35m、面積15.73㎡である。柱穴は布掘りである。

71号掘立柱建物跡　(91図)

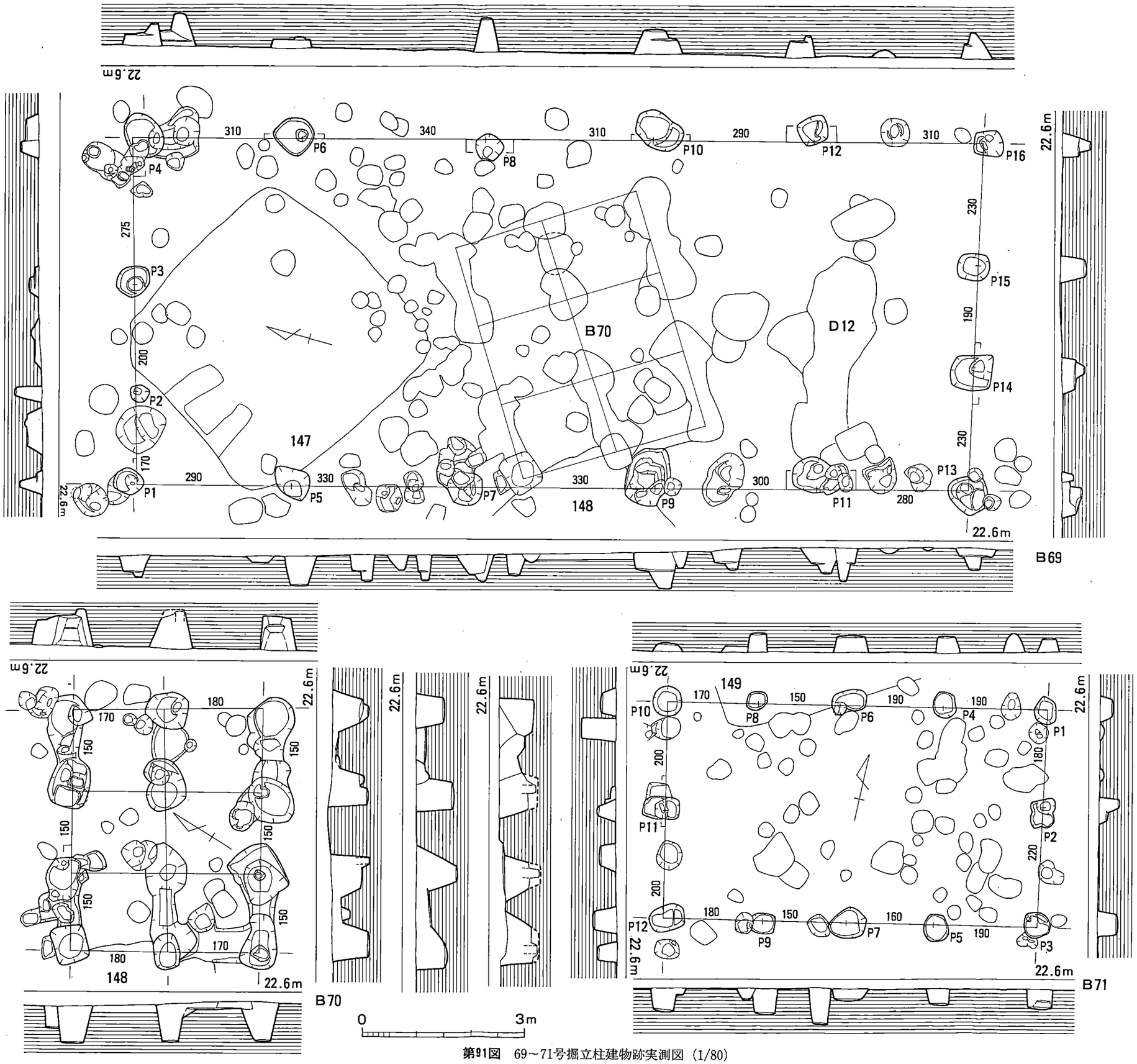
69号建物の西側に位置する東西棟の建物である。69号建物と棟行方向が直交し、双方の南柱列はほぼ一直線上に並ぶ。1×4間の住居棟と考えられ、P2·P11は棟持柱の柱穴と思われる。主軸をN-77°-Eにおく。桁行6.9m、梁間4m、面積27.68㎡である。

出土遺物　(第171図)

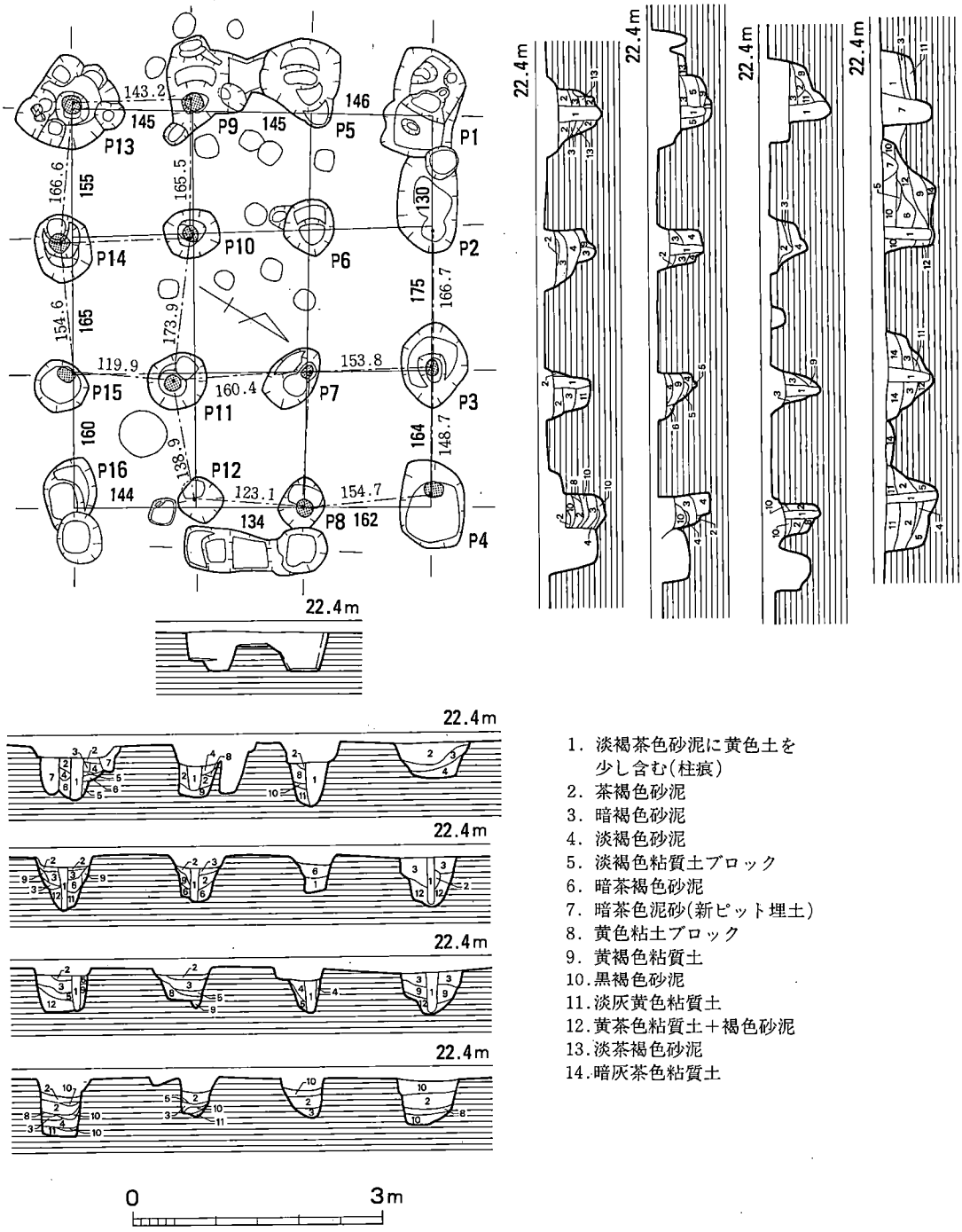
柱穴から、須恵器及び土師器片を検出した。まとめて記せば、P2－9、P3－5・6・11、P4－8、P5－2～4・12、P10－10、P11－7、P12－1である。

72号掘立柱建物跡　(第89図)

D区市道西端、168号住居の南西に位置する。2×2間の倉庫棟と考えられ、主軸をN-62°-Wにおく東西棟の建物である。桁行3.6m、梁間3m、面積10.72㎡である。



第91図　69～71号掘立柱建物跡実測図（1/80）



1. 淡褐茶色砂泥に黄色土を少し含む(柱痕)
2. 茶褐色砂泥
3. 暗褐色砂泥
4. 淡褐色砂泥
5. 淡褐色粘質土ブロック
6. 暗茶褐色砂泥
7. 暗茶色泥砂(新ピット埋土)
8. 黄色粘土ブロック
9. 黄褐色粘質土
10. 黒褐色砂泥
11. 淡灰黄色粘質土
12. 黄茶色粘質土＋褐色砂泥
13. 淡茶褐色砂泥
14. 暗灰茶色粘質土

第90図　68号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

73号掘立柱建物跡　(第92図)

AII区市道西端に位置し、179号住居を切って南の調査区外に延びる。総柱であり、倉庫棟と考えられる。

出土遺物　(第171図)

柱穴から、須恵器及び土師器片を検出した。1はP4、2はP1から出土した。

74号掘立柱建物跡　(第92図)

AII区市道西側で、73号建物の東に位置し、75号建物と重複する。1×3間の住居棟と考えられ、主軸をN-88°-Wにおく東西棟の建物である。P5・P6は棟持柱であろうと思われる。桁行5.75m、梁間3.85m、面積は21.88㎡である。

75号掘立柱建物跡　(第92図)

AII区市道西側で、73号建物の東に位置し、74号建物と柱列が直交して重複する。建物は南側の調査区外に延びるので全容は不明だが、おそらく1×3間の住居棟であろう。P2は棟持柱の柱穴であろう。妻側の寸法が74号建物と変わらないことから、74号建物と同規模であろう。検出した部分から判断して、主軸は真北から2。前後西に振れる程度の南北棟の建物である。

出土遺物　(第171図)

P1から、須恵器の甕片を検出した。

76号掘立柱建物跡　(第92図)

北側の柱列だけを検出し、過半は南側調査区外に延びるため詳細は不明である。

出土遺物　(第171図)

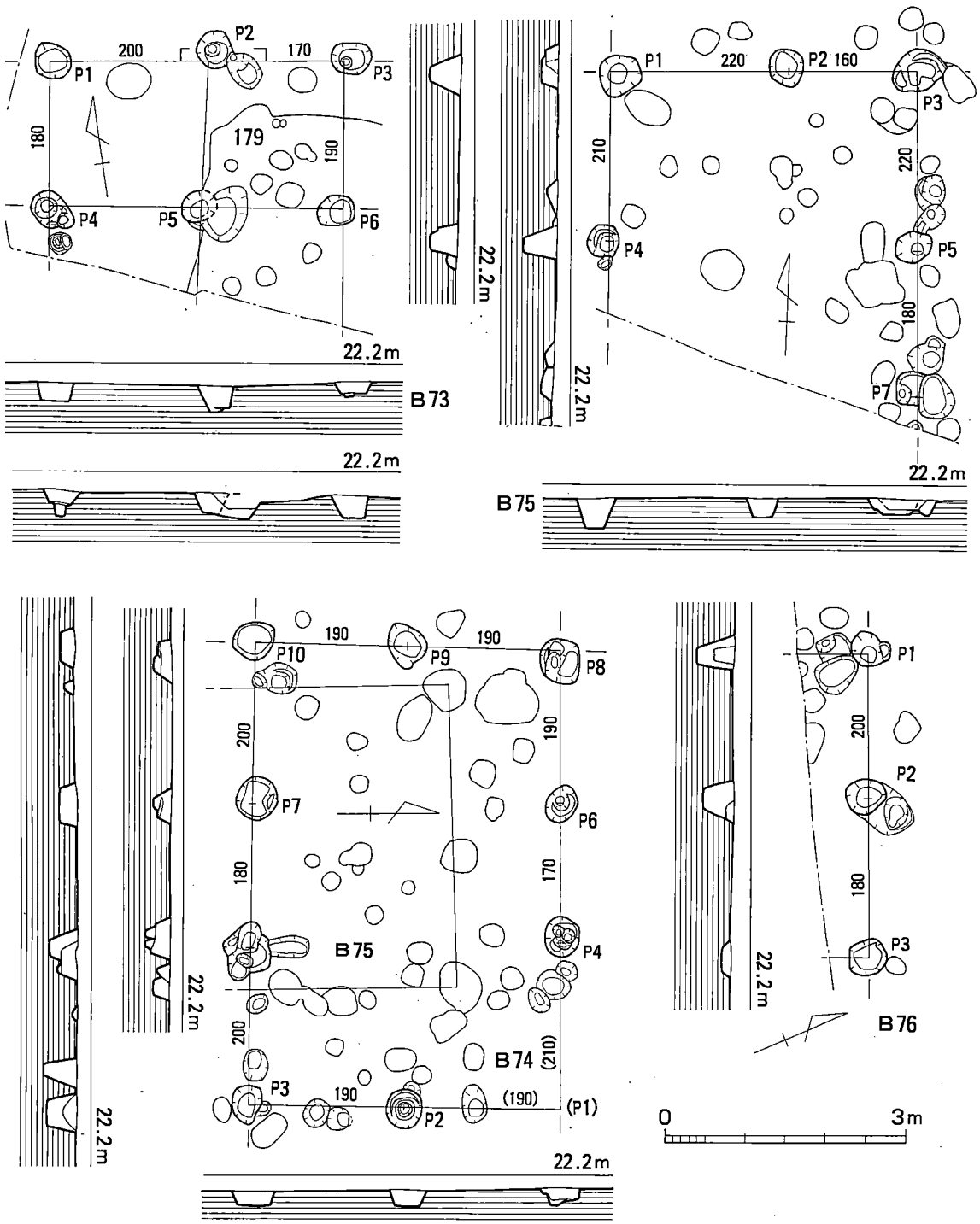
P2から、土師器の甕片を検出した。

77号掘立柱建物跡　(第93図)

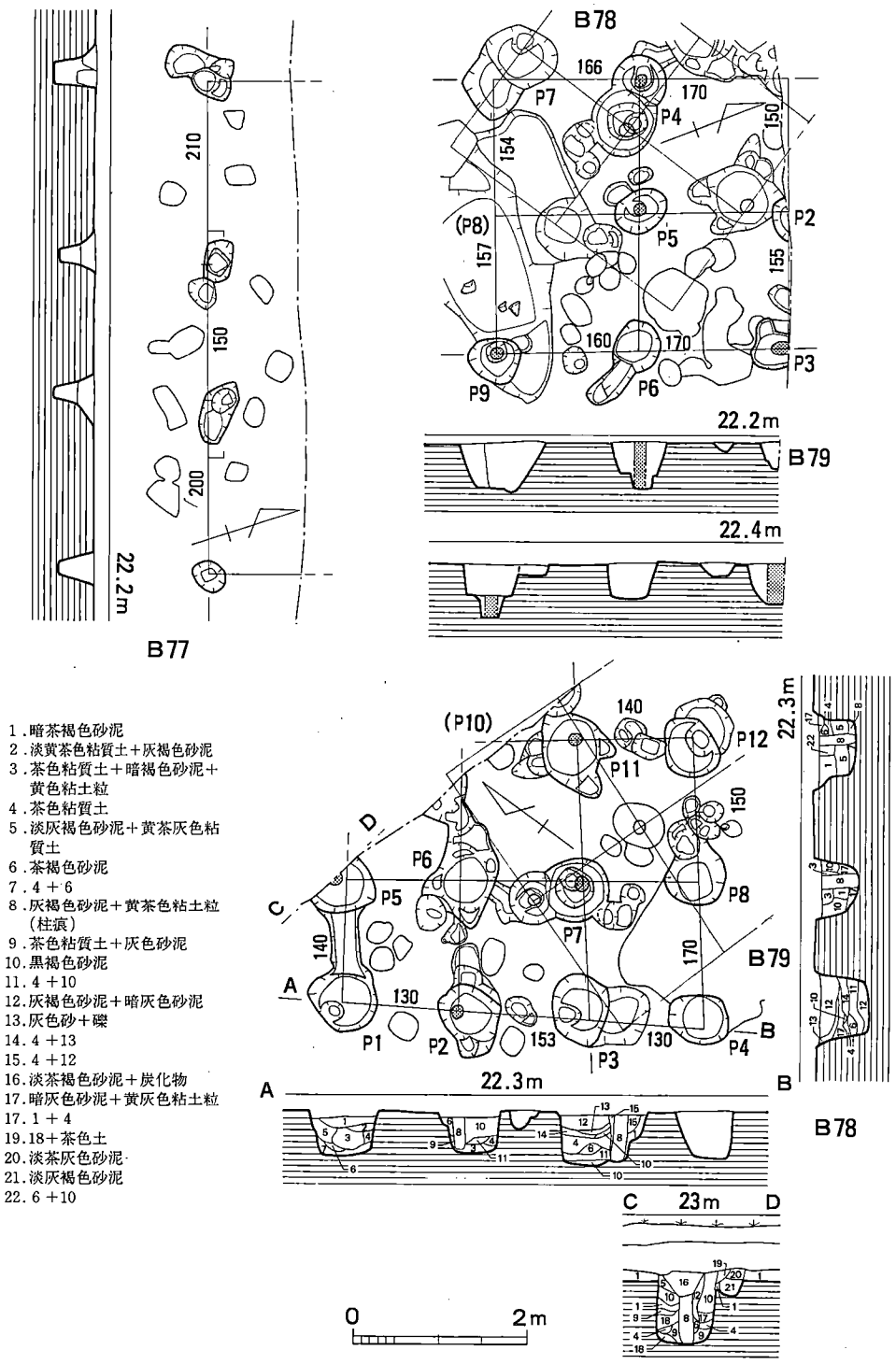
74号建物の10mほど東に、南側の柱列だけを検出した。過半は南側調査区外に延びるため詳細は不明であるが、1×3間の東西棟の住居用建物であろう。平側の寸法が74号建物と変わらないことから、74号建物と同規模であろう。

78号掘立柱建物跡　(第93図)

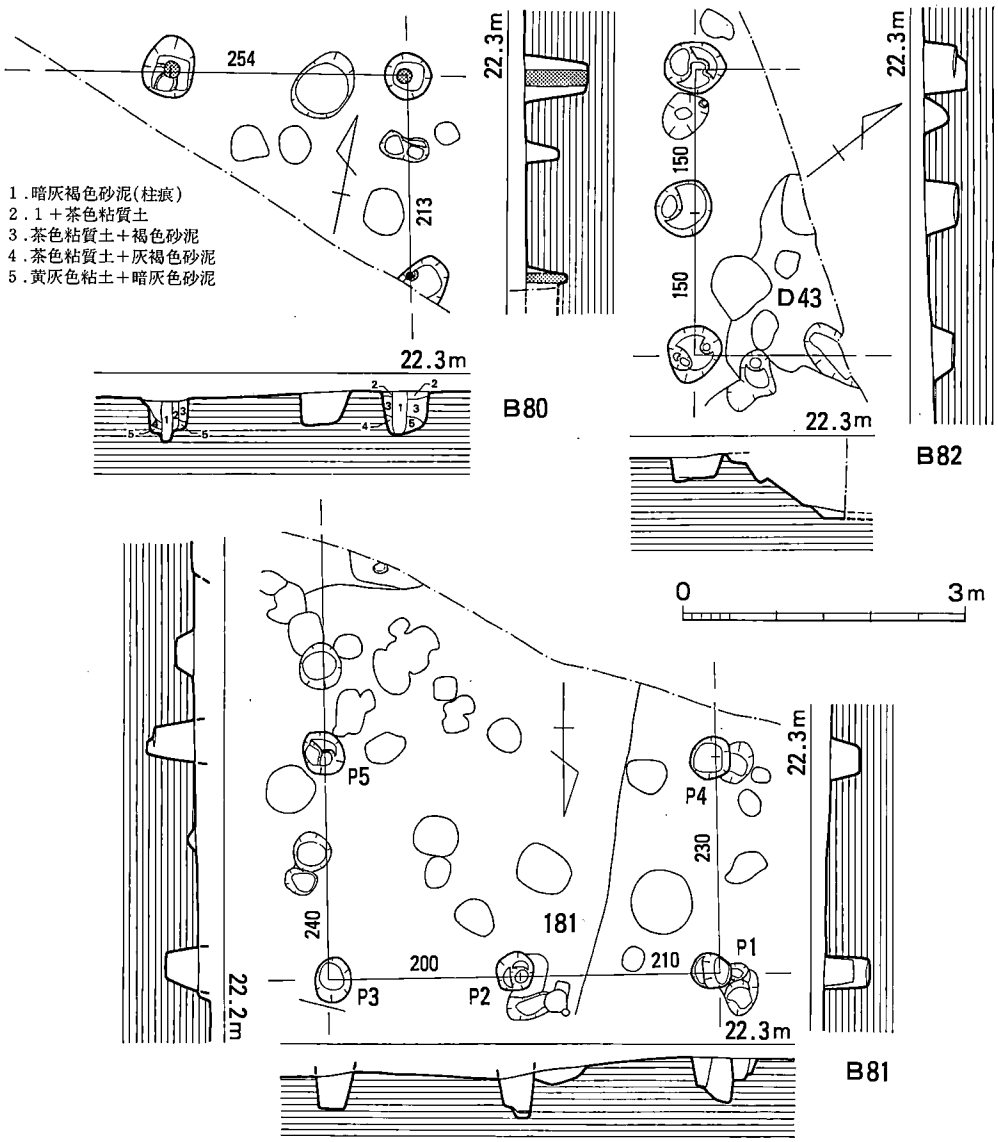
77号建物の10mほど東に、79号建物と重複して検出した。P2・P7・P11に柱痕を検出した。土層図でわかるように、本住居の柱穴P3が79号建物の柱穴P7を切っており、79号建物より新しい。P9・P18にあたる柱穴が調査区外にあるが大要は把握できる。2×3 間の倉庫棟で、主軸を



第92図　73～76号掘立柱建物跡実測図（1/80）



第93図　77～79号掘立柱建物跡実測図（1/80）



第94図　80～82号掘立柱建物跡実測図（1/80）

N-35°-Wにおく東西棟の建物である。桁行4m、梁間3.1m、面積は12.5m²ほどである。

79号掘立柱建物跡　(第93図)

78号建物に切られる。P3～P5・P9で柱痕を検出した。北柱列の一部が調査区外に延びるが大要は把握できる。2×2間の倉庫棟で、主軸をN-19°-Eにおく南北棟の建物である。桁行4m、梁間3.1m、面積は12.5m²ほどである。

出土遺物　(第171図)

柱穴から、須恵器及び土師器片を検出した。1はP6から、2はP3から出土した。

80号掘立柱建物跡　(第94図)

79号建物の南に位置し、建物の過半が南側の調査区外に延びるため詳細は不明であるが、住居棟であろう。

81号掘立柱建物跡　(第94図)

80号建物の東に位置し、181・183号住居を切る。P2は棟持柱の掘り方と思われる。1×3間の住居棟であろうと推測する。

82号掘立柱建物跡　(第94図)

81号建物の北東に位置し、過半は北側の調査区外に延びる。柱穴の掘方から判断して倉庫棟であろうと推測する。本建物の東に遺構番号を付さなかったが、倉庫棟であろうと思われる柱列を検出している。建物の過半は北側調査区外に延びる。

83号掘立柱建物跡　(第95図)

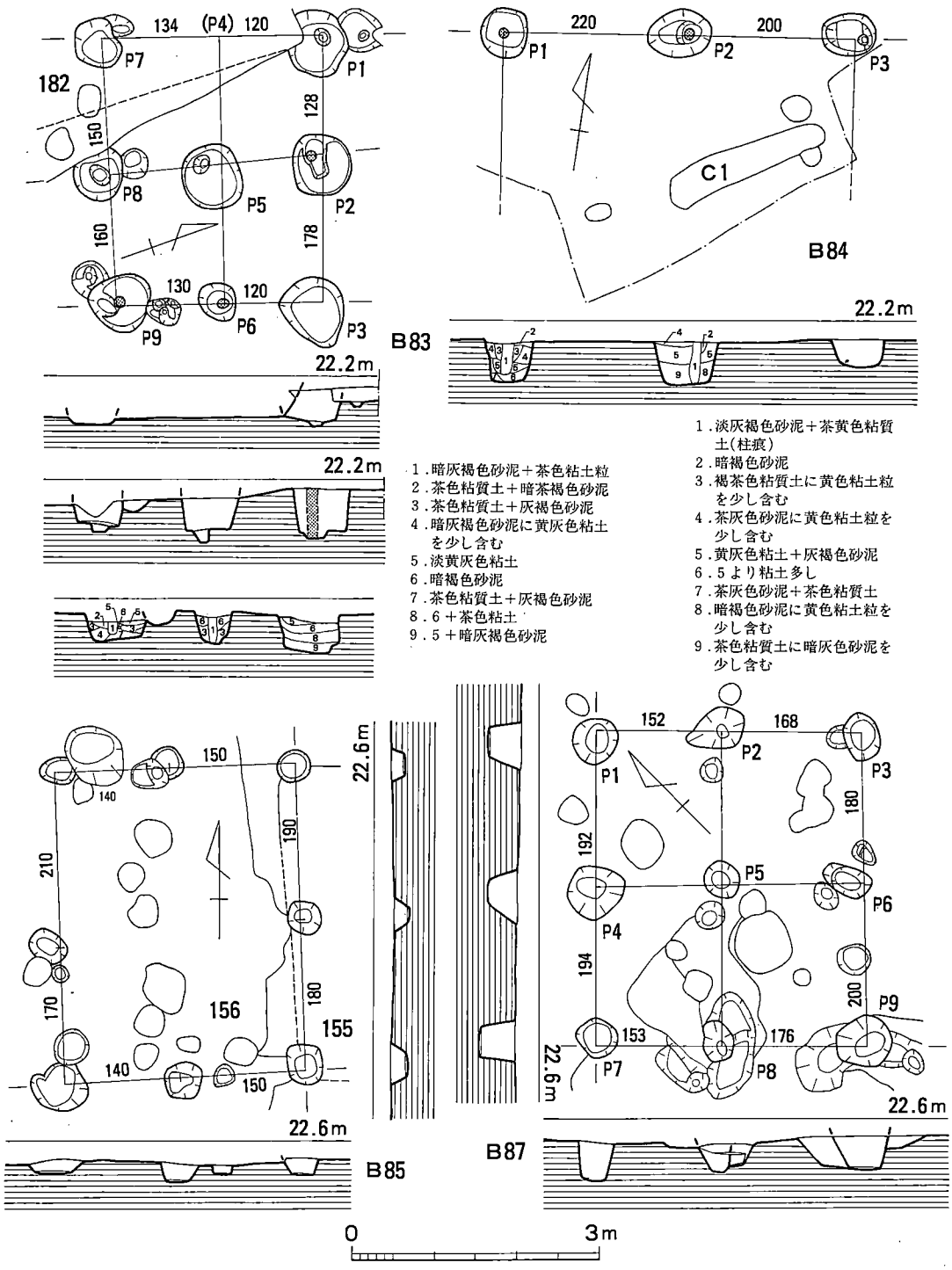
AII区市道の東端に位置し、182号住居と重複し、P1・P4・P7・P8は182号住居に切られる。2×2間の倉庫棟で、主軸をN-72°-Wにおく東西棟の建物である。桁行3.1m、梁間2.45m、面積は7.6m²ほどである。P2・P6・P9で柱痕を検出した。

出土遺物　(第171図)

土師器片が出土している。1・2はP3から出土した。

84号掘立柱建物跡　(第95図)

AII区市道の東端に位置し、北側柱列のみを検出した。P1・P2で柱痕を検出した。過半は南側の調査区外に延びるため詳細は不明である。



第95図　83～85・87号掘立柱建物跡実測図（1/80）

85号掘立柱建物跡　(第95図)

調査区のほぼ中央で、155～157住居と重複する。主軸をN-2°-Wにおく南北棟の建物で、桁行3.33m、梁間2.95m、面積11.23㎡ほどである。総柱ではないので住居棟だと推定する。

86号掘立柱建物跡　(第96図)

85号建物の南に位置し、170・174号住居及び93号建物と重複する。3×3間の倉庫棟で、桁行及び梁間とも7.2m、面積は51.84㎡ほどである。主軸をN-50°-Eにおく東西棟の建物である。P1で柱痕を検出した。柱痕底は、地山から5cm浮いている。

出土遺物　(第171図)

P5から土師器坏(1)、甕(2)の破片が出土している。

87号掘立柱建物跡　(第95図)

86号建物の北西に位置し、160号住居と重複する。主軸をN-45°-Eにおく2×2間の倉庫棟で、桁行3.8m、梁間3.22m、面積は12.24㎡ほどである。

出土遺物　(第171図)

P4から土師器坏(1)、P7から土師器脚台(2)が出土した。

88号掘立柱建物跡　(第96図)

87号建物の2.4mほど南西に位置し、87号建物の北西柱列と88号建物の南東柱列はほぼ直線上に並ぶ。主軸をN-45°-Eにおく2×3間の倉庫棟で、桁行2.4m、梁間3.6m、面積は8.64㎡ほどである。

89号掘立柱建物跡　(第97図)

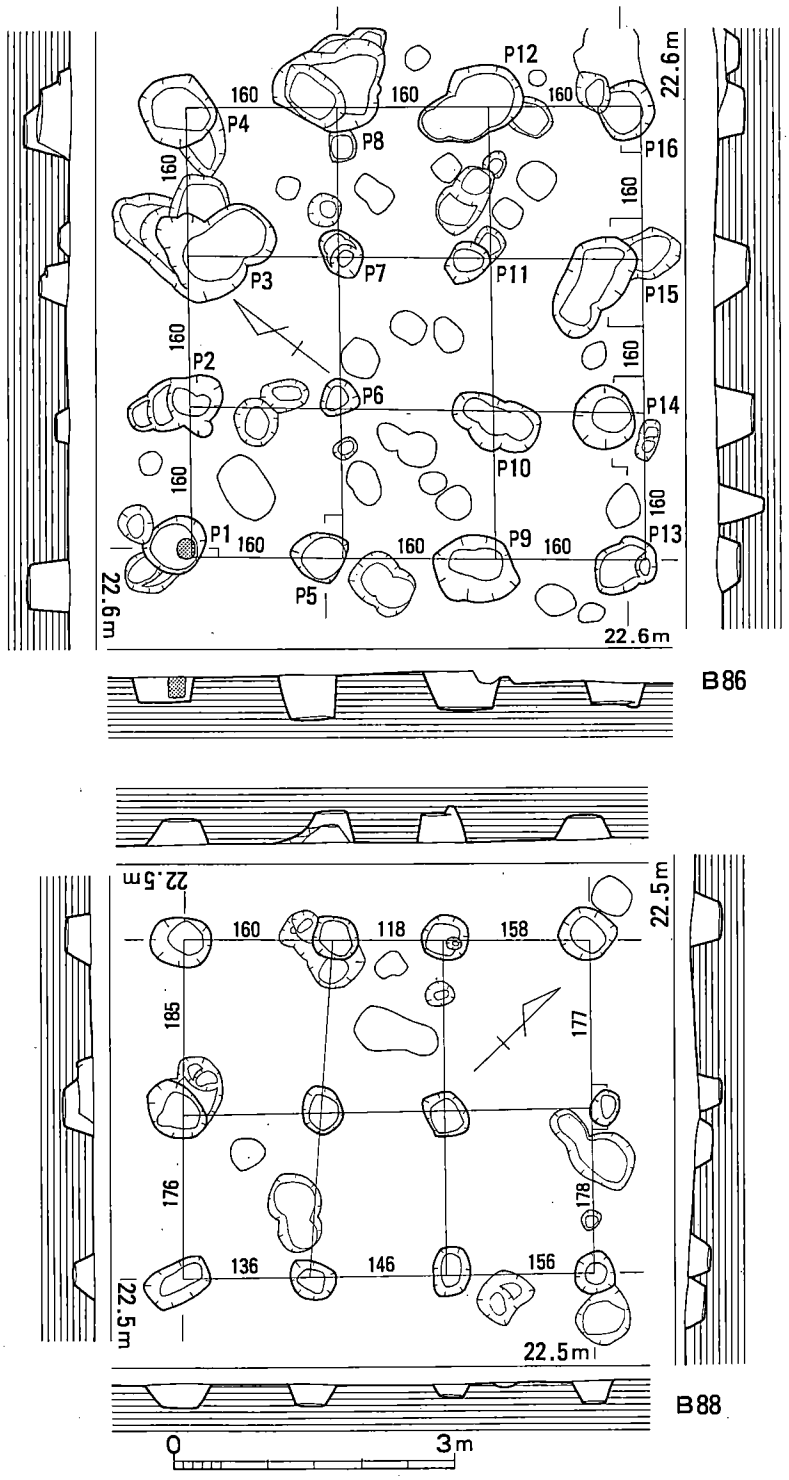
88号建物の2mほど南東に位置し、主軸は近接する87・88号建物と一致する。主軸をN-45°-Eにおく2×2間の倉庫棟で、桁行3.9m、梁間3.6m、面積は14.04㎡ほどである。

90号掘立柱建物跡　(第97図)

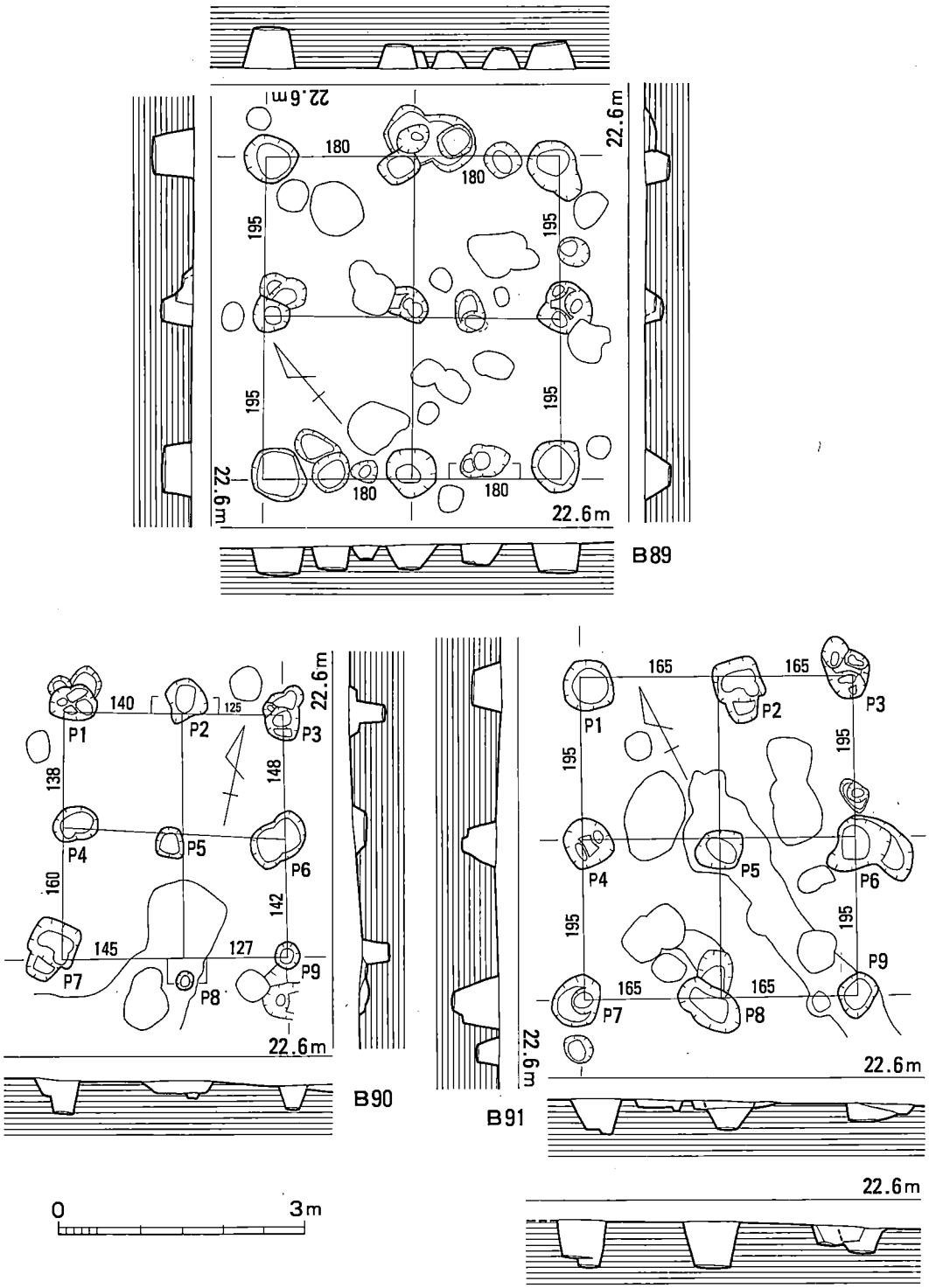
89号建物の南東に位置し、91号建物と重複する。当初、2×2間の倉庫棟と考えたが、1×2間の建物で、P2・P8は棟持柱、P5は束柱掘り方であろうと推測する。主軸をN-13°-Wにおく南北棟の、倉庫棟であろうと推測する。P2・P8の標高はそれぞれ、22.018m・22.117m、P5は22.071mと浅く、四隅の柱穴を深く掘り込んでいる。桁行3m、梁間2.7m、面積は8.1㎡ほどである。

出土遺物　(第172図)

P3から須恵器の坏蓋(1)の破片が出土した。



第96図　86・88号掘立柱建物跡実測図（1/80）



第97図　89～91号掘立柱建物跡実測図（1/80）

91号掘立柱建物跡　(第97図)

90号建物の南西に位置し、90号建物と重複する、2×2間の倉庫棟と考えられる。主軸をN-27°-Eにおく南北棟の建物である。桁行3.9m、梁間3.3m、面積は12.87㎡ほどである。

出土遺物　(第172図)

柱穴から、須恵器及び土師器の破片が出土した。それらを柱穴ごとにまとめて記すと、P1-2、P4-1・4・6・7、P7-5、P8-3・8である。

92号掘立柱建物跡　(第98図)

173～175号住居、86号建物と重複する南北棟の建物である。主軸をN-1°-Wにおく住居棟だと思われる。P1～P12のうち、P2・P9を棟持柱の掘方だと考えれば1×3間の、壁を構成するための柱穴のひとつだと考えれば2×3間の建物になる。両ピットが妻側の柱列の線にぴったりとのること、梁間寸法が4.5mあり支えがなくて梁が持つか否かの問題があること等から、2×3間の建物であろうかと推測する。柱間は等間である。規模は、桁行22尺（一尺＝約30㎝で計算、以下同。)、梁間15尺である。P11・P12についてはその位置が、東西の柱列から7尺5寸、P2～P11、P12～P9間は各々5尺、また、P11～P12間は12尺であり、極めて計画的に配置されており、本建物の棟持柱の掘方であろうと思われる。なお、面積は8.5坪(29.7㎡）ほどである。

出土遺物　(第172図)

柱穴から、須恵器及び土師器の破片が出土した。それらを柱穴ごとにまとめて記すと、P2-5、P6-4、P7,-8・9、P8,-3、P10,-1・2・6・7である。

93号掘立柱建物跡　(第98図)

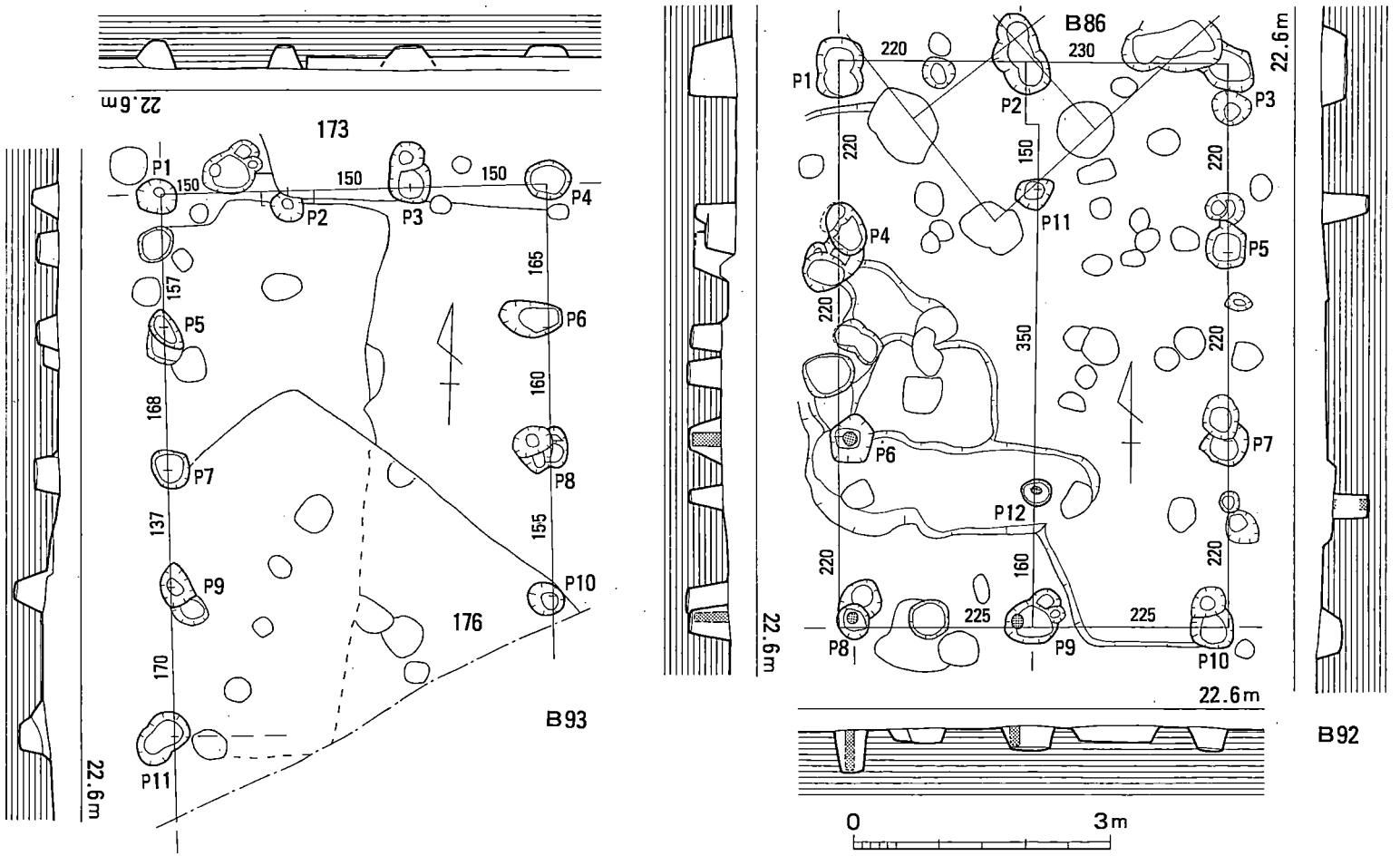
92号建物に南接する状態で検出し、173号住居、方形溝状遺構と重複する。92号建物との同時併存は不可能であり、92号建物のP10、93号建物のP3は同一のピットであり、両建物の先後関係は不明だが接近した時代に建て替えられたと推測する。主軸をN-3°-Wにおく南北棟の住居棟だと思われる。P11の東に北妻側のP2に対応する柱穴がないことから、更に南に延びる可能性は否定できない。この建物の柱間は、妻側及び平側は各々等間である。

出土遺物　(第172図)

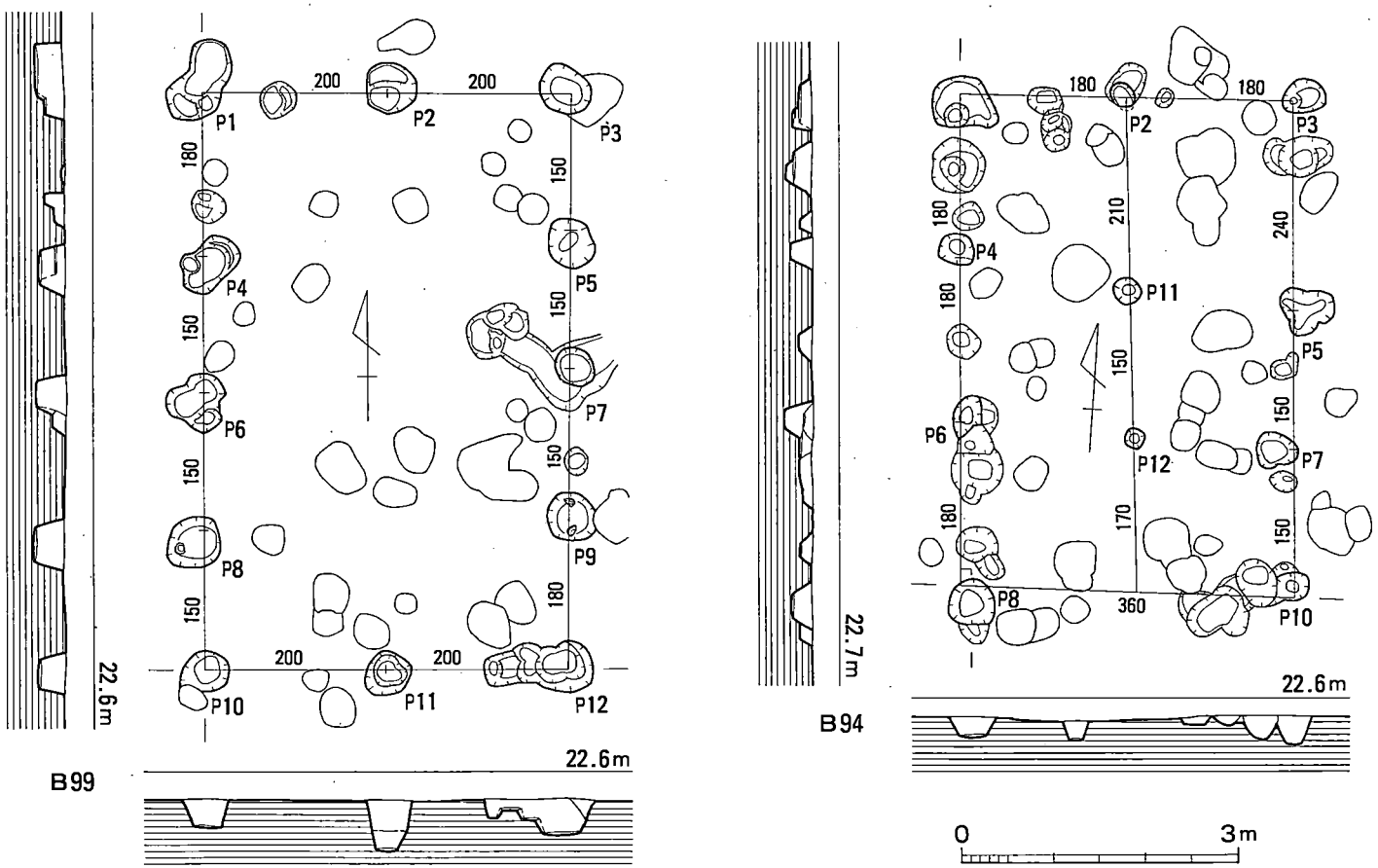
柱穴から、須恵器及び土師器の破片が出土した。1はP6、2はP5、3はP8から出土した。

94号掘立柱建物跡　(第99図)

90・92号建物のすぐ西に位置し、89号建物と重複する。92号建物と類似し、P2に対応するP9がない。P11・P12は92号建物と比較して浅く、P11底面が標高22.331m、P12が同じく22.302m



第98図　92・93号掘立柱建物跡実測図（1/80）



第99図　94・99 号掘立柱建物跡実測図（1/80）

である。主軸をN-3°-Wにおく南北棟の住居棟だと思われる。規模は、桁行18尺、梁間12尺である。面積は19.44㎡ほどである。

95号掘立柱建物跡　(第100図)

この建物の周辺には南北棟の住居棟が集中している。92～100号建物がそれである。特に95～100号建物は狭い範囲に6棟が重複し、頻繁に建て替えられた様相を見ることができる。

95号建物は、91・96～98号建物と重複する。1×3間の住居棟で、P2(底面標高22.107m)・P10(同22.141m)は棟持柱の掘方であろう。主軸を真南北にとる。規模は桁行6.3m、梁間3mで、面積は18.9㎡である

出土遺物　(第172図)

P7から、土師器坏が出土している。

96号掘立柱建物跡　(第100図)

桁行3＋間、梁間3間の、主軸を真南北におく住居棟である。梁行は4.8mであるが、建物の南部が調査区外に延びるため梁間の寸法は不明である。

出土遺物　(第172図)

須恵器及び土師器片が出土している。1・2・5はP5'から、3・4はP2から出土した。

97号掘立柱建物跡　(第100図)

桁行3間、梁間3間の建物で、南に庇がつくと思われる。主軸を真南北におく住居棟である。一部が調査区外に延びる。規模は、桁行、梁間とも5.4mで、1.2mの庇がつく。面積は29.16㎡ほどである。

出土遺物　(第172図)

P7から、土師器坏が出土した。

98号掘立柱建物跡　(第100図)

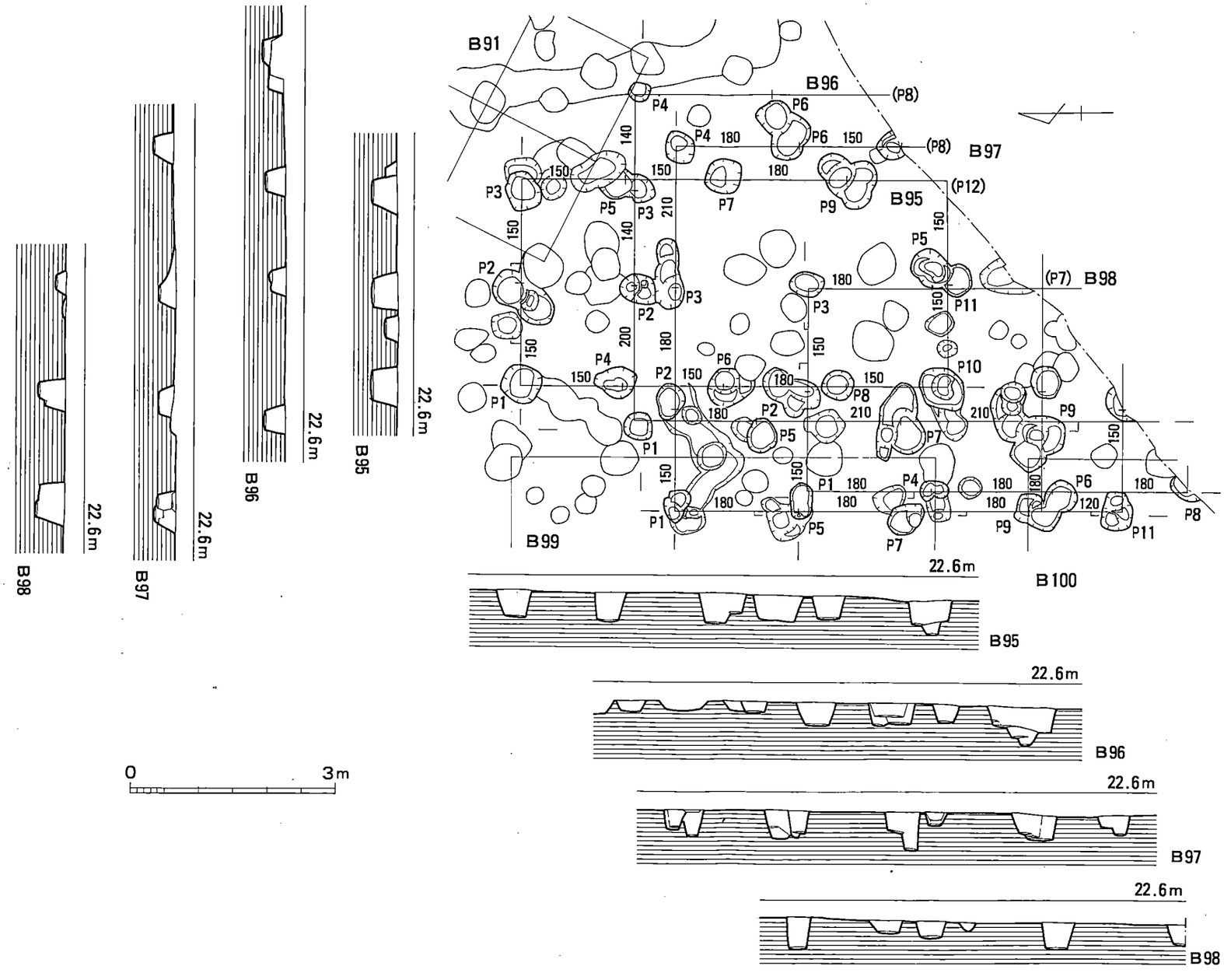
桁行3間分を確認し、P2を棟持柱と考えれば梁間は1間である。主軸を真南北に置く住居棟で、一部が調査区外に延びる。桁行の柱間寸法は1.8mで等間、梁間は3mである。

出土遺物　(第172図)

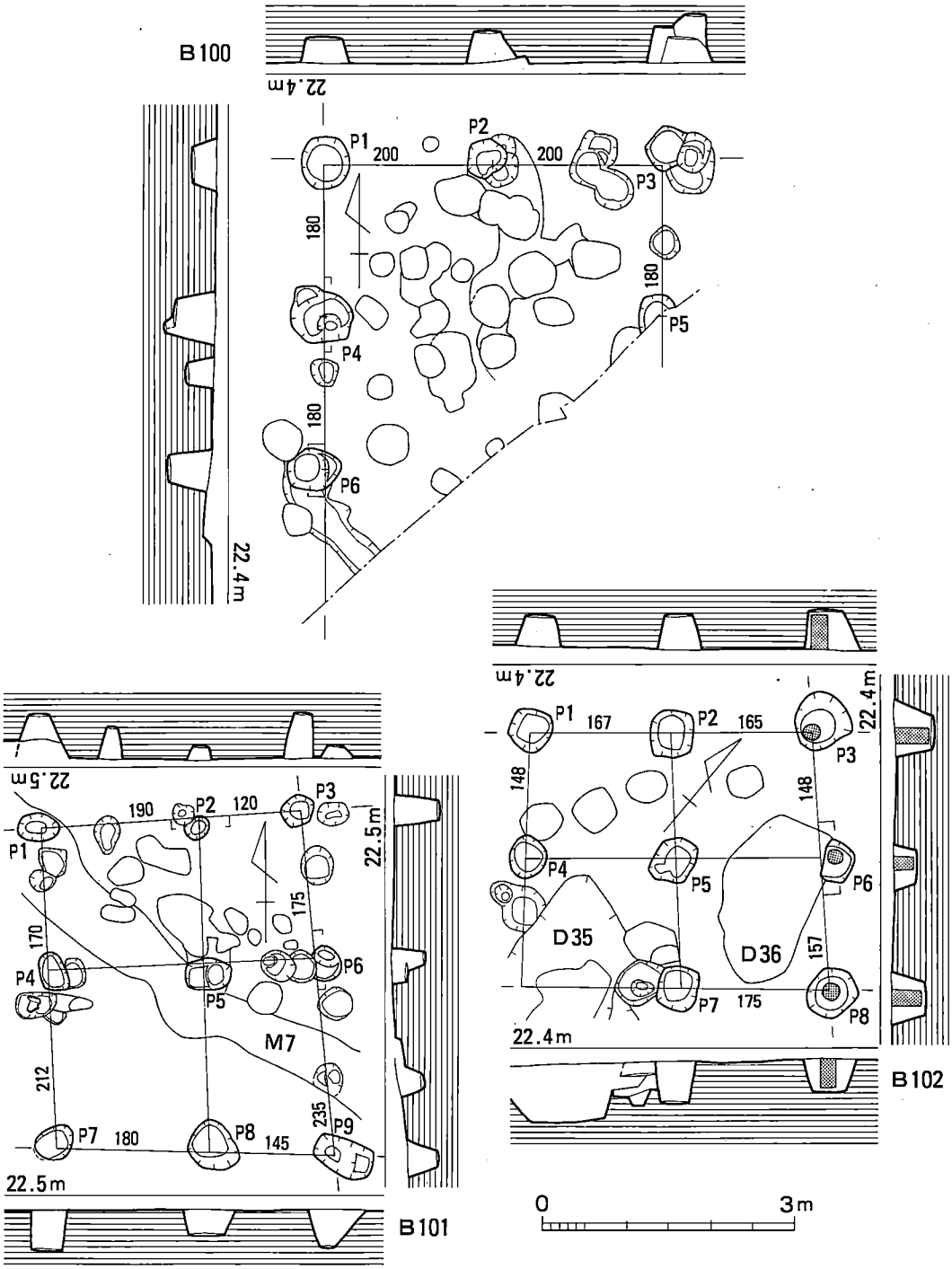
P8から須恵器及び土師器が出土している。

99号掘立柱建物跡　(第99図)

桁行4間、梁間2間の南北棟の建物である。主軸を真南北に置く住居棟で、規模は、桁行3.



第100図　95～98号掘立柱建物跡実測図（1/80）



第101図　100～102号掘立柱建物跡実測図（1/80）

3m、梁間4m、面積は13.2㎡である。

出土遺物　(第172図)

須恵器及び土師器が出土している。まとめて記せば、P1-1・13、P4-8・9・12、P7-6、P8-3・7、P9-2・5、P12-4・10・11・14である。なお、P8から出土した土師器坏7は、柱を撤去した後に埋められたような状態であり、プラン検出時には、P8埋土中に据えられた状態で姿を見せていた。

100号掘立柱建物跡　(第101図)

99号建物の南に検出した南北棟の建物で、本建物の桁行方向の柱列は、99号建物と同一線上に乗る。桁行2＋間、梁間2間の住居棟で、一部が調査区外に延びる。

出土遺物　(第173図)

須恵器及び土師器が出土している。まとめて記せば、P2-1・3、P4-2・4である。

101号掘立柱建物跡　(第101図)

178号住居と近接し、溝7と重複している。柱穴が不揃いであり、建物として建つか自信はない。一応、2×2間の倉庫棟だと推測する。

出土遺物　(第173図)

須恵器及び土師器が出土している。まとめて記せば、P4-1・3・4、P9-2である。

102号掘立柱建物跡　(第101図)

調査区北側に検出し、35・36号土坑と重複するため、P7は確認できなかった。2×2間の総柱の建物で倉庫棟であろう。主軸を、N-50°-Eに置く東西棟の建物である。規模は、桁行3.45m、梁間3mで、面積は10㎡ほどである。

出土遺物　(第173図)

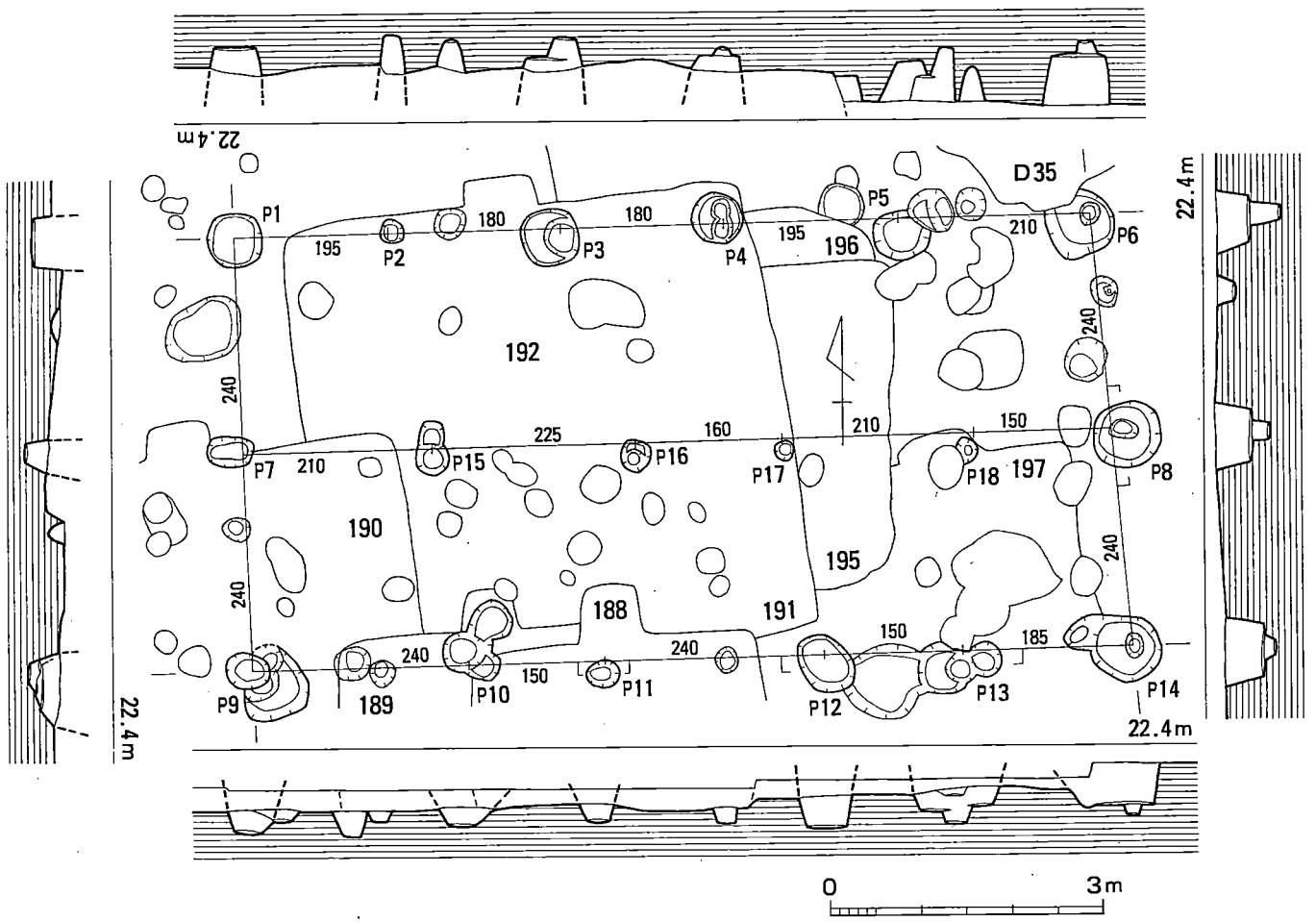
須恵器及び土師器が出土している。まとめて記せば、P2-1・2・4、P3-3・5・6である。

103号掘立柱建物跡　(第102図)

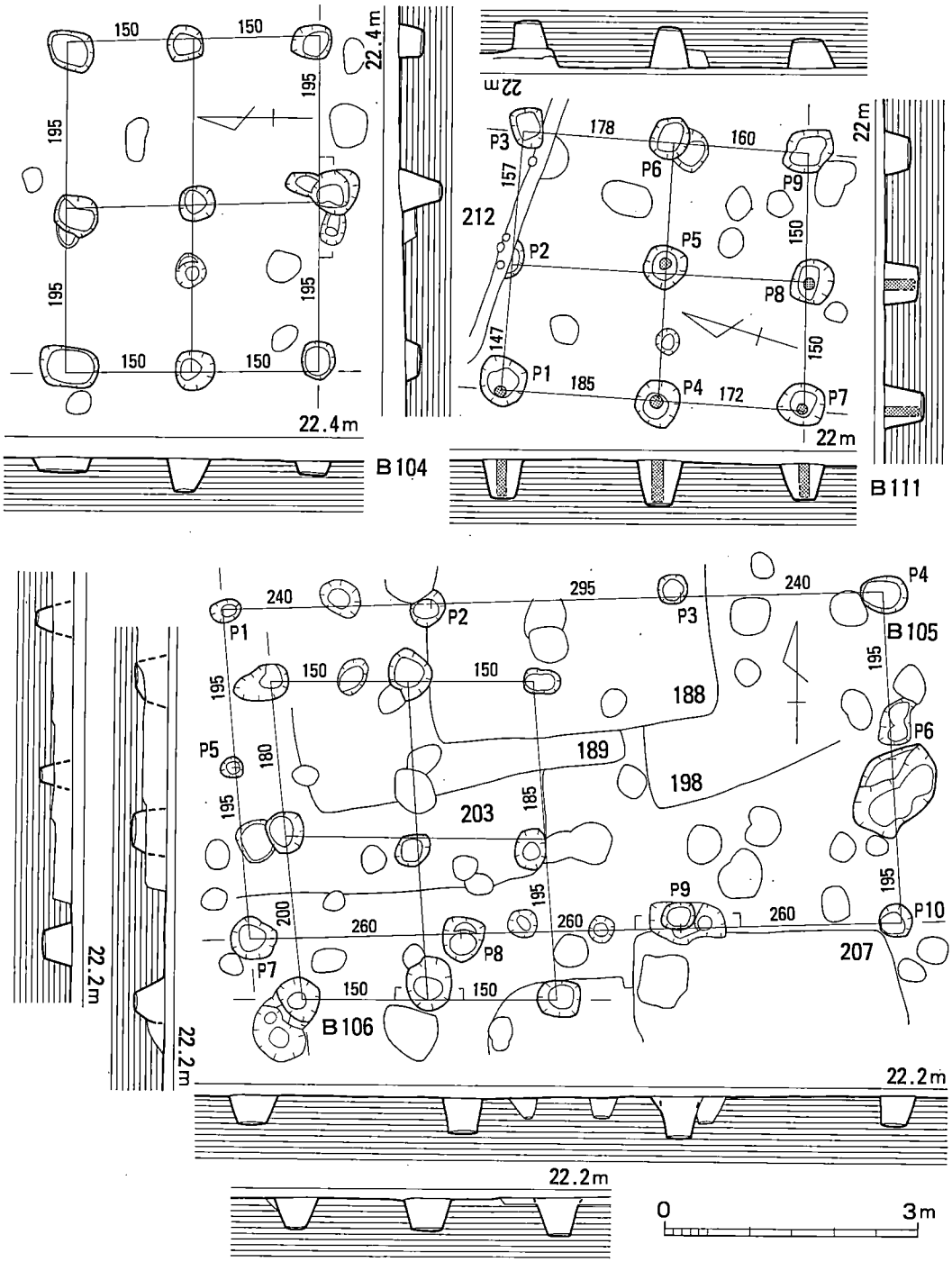
187～197号住居及び35号土坑と重複する。柱穴はP1～P18を考えているが、P7・P8は屋外の棟持柱掘方、また、P15～P18は屋内に位置する棟持柱掘方であろうと推測する。これら掘方底面の標高は各々、P7-21.473m、P8-21.68m、P15-21.466m、P16-21、573m、P17-21,535m、P18-21.795mである。したがって、桁行5間、梁間1間の、主軸をN-2°-Eに置く東西棟の住居棟であろうと推測する。規模は桁行9.6m、梁間4.8m、面積は46㎡ほどである。

出土遺物　(第173・174図)

須恵器及び土師器が出土している。P9から3が、他はP10から出土した。



第102図　103号掘立柱建物跡実測図（1/80）



第103図　104～106・111号掘立柱建物跡実測図（1/80）

104号掘立柱建物跡　(第103図)

103号南東に検出した２×２間の総柱の建物で、倉庫棟であろう。主軸を真南北に置く東西棟の建物である。規模は、桁行3.9m、梁間3m、面積12㎡弱である。

105号掘立柱建物跡　(第103図)

103号建物の南に主軸を同じくして建つ建物である。柱穴は、P1～P10を想定している。P5・P6は、或は棟持柱の掘方になる可能性を残す。そうであるならば、本建物は、桁行３間、梁間１間の東西棟の住居棟であろう。規模は、桁行7.8m、梁間3.9m、面積は30.5㎡ほどである。

106号掘立柱建物跡　(第103図)

105号建物、188～205号住居と重複する。２×２間の総柱の建物で、倉庫棟であろう。主軸を、N-3°-Wに置く南北棟の建物である。規模は、桁行3.6m、梁間3m、面積は10.8㎡ほどである。

107号掘立柱建物跡　(第104図)

104号建物（倉庫棟）の南西に位置、１×２間の建物である。井戸と重複するため、南西部の柱穴は検出していない。南北棟の建物である。

出土遺物　(第174図)

須恵器及び土師器が出土している。まとめて記せば、P3-1・3・5・6・8・11・12であり、他はP5から出土した。

108号掘立柱建物跡　(第104図)

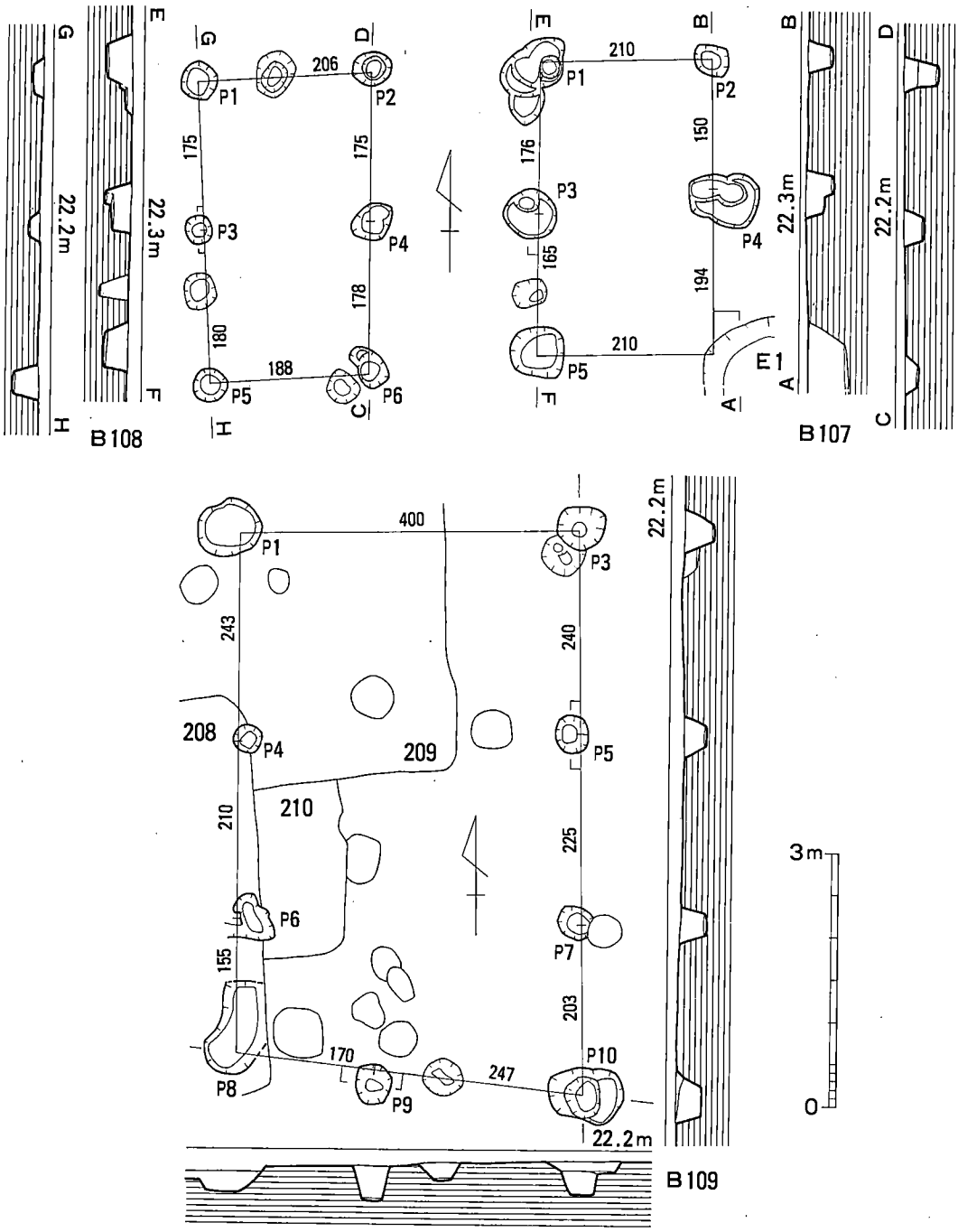
107号建物の西に検出した１×２間の南北棟の建物である。107号建物と並列しているため、一時、両者を一つの建物と想定したが、図示したように妻側の柱列が直線上に乗らないこと、東西に走る南北の柱列の寸法が合わないこと、から 2棟の建物であろうと想定した。

出土遺物　(第174図)

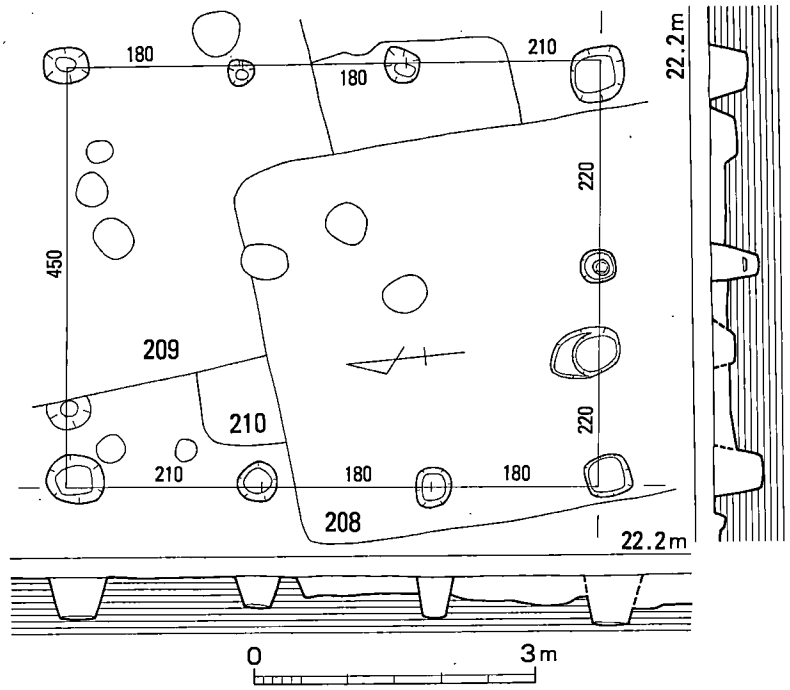
P5から土師器坏(1)が出土している。

109号掘立柱建物跡　(第104図)

208～210号住居を切り、110号建物と重複する。主軸を真南北に置く南北棟の建物である。柱穴はP1～P10と推測する。P9は棟持柱掘方であろうと推測するが、それに対となるP2を検出していない。南の柱列が他の柱列に対して斜交することが気になるが、１×３間の住居棟であろうと思われる。



第104図　107～109号掘立柱建物跡実測図（1/80）



第105図　110号掘立柱建物跡実測図（1/80）

110号掘立柱建物跡　（第105図）

208～210号住居を切り、109号建物と重複する。主軸をN-5°-Eに置く南北棟の建物で、2×3間の住居棟であろう。柱配置は110号建物と同様で、P2を確認していない。規模は桁行5.7m、梁間4.5m、面積は25.65㎡ほどである。平側の柱間寸法は、西柱列が南から、1.8m、1.8m、2.1mであるのに対して、東柱列は逆に北から、1.8m、1.8m、2.1m である。このような、相対する平側柱列の柱間寸法の逆転は他の建物でも時々見られる。

111号掘立柱建物跡　（第103図）

212号住居の南壁と重複して建てられた、2×2間の総柱の建物で、倉庫棟である。遺構検出の際に、212号と本建物の切り合い関係を把握していなかったため、P2が住居に切られたように図示したが、P3は住居の貼床を切っており、本建物は住居より新しい。主軸を、N-1-°-Wに置く南北棟の建物である。規模は桁行3.6m、梁間3m、面積は10.8㎡である。

3　井戸

1号井戸(E1)　(図版　、第106図)

宮原遺跡の広い調査区の中で井戸であろうとしたのはこの一基だけであった。208～210号住居跡の東方にあり、108号掘立柱建物跡の東南隅の一柱穴を切っている。上面は径170～188cmの円形プランをなし、底面も径125～130cmの円形に近い。深さは185cmが残る。壁面は井戸によく見るごとく凹凸のある形状をなす。埋土は自然堆積の様相であった。出土遺物には墨書土器(116図5・6)や土錘(120図22～27)もあったが、これらは別に述べる。

出土遺物(図版33、第175図1～18)

須恵器で図示できるのは1のみであった。2～13の坏は硬質である。外底部から体部下半には回転ヘラケズリが施される。

4　おとし穴

土坑のなかでおとし穴状遺構とすべきものがある。今回報告分では3基しかないが、甘木市教育委員会が平成3年に調査した分では多数が検出されている。

1号おとし穴(A1)　(図版17、第106図)

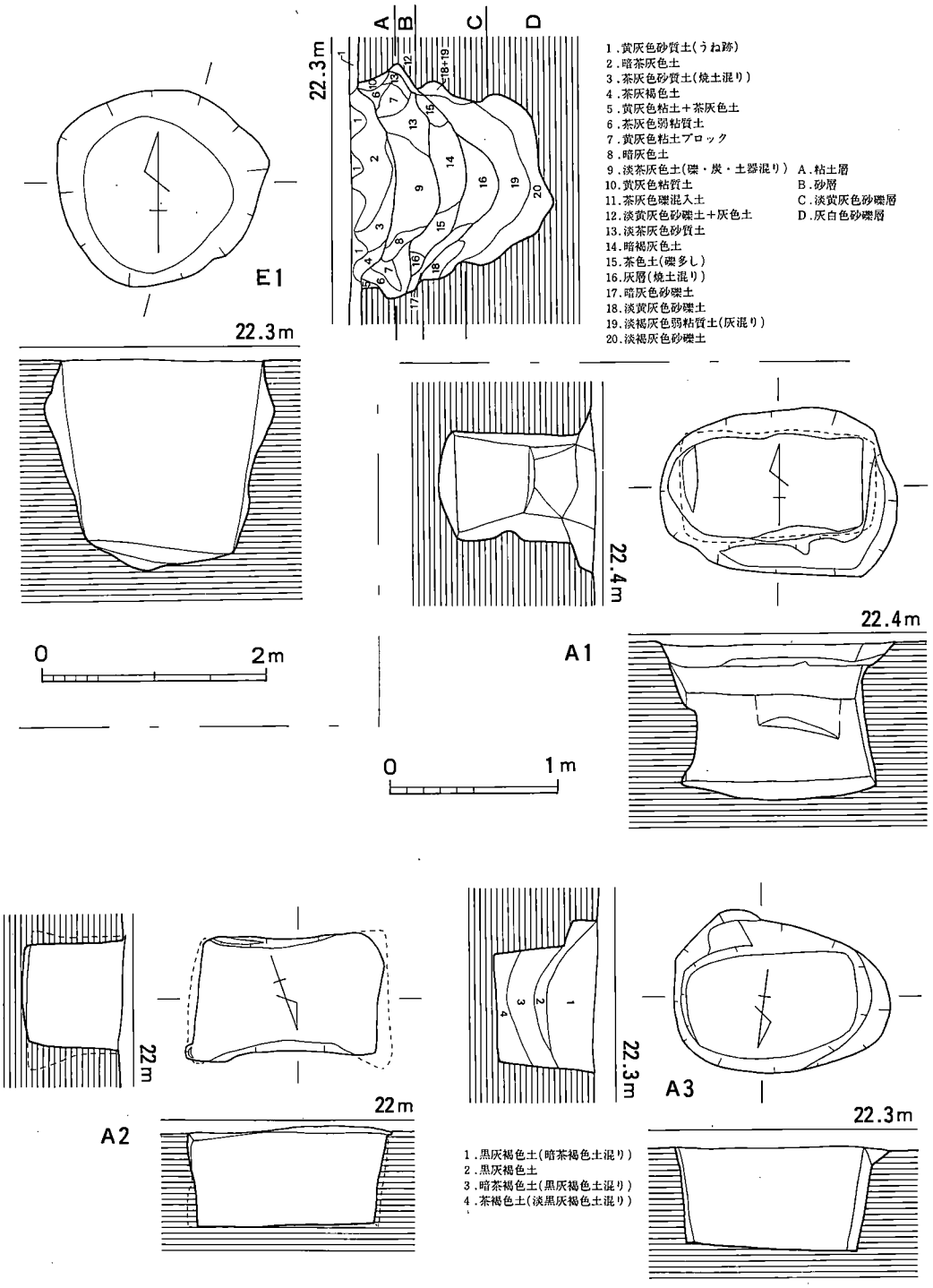
D区市道調査区内にあり、165号住居跡の西、168号住居跡の南に位置する。主軸は真に東西方向を向きN-90°-E。床面で幅55～66cm、長さ117cmを測る。深さは現状で最大92cm。出土遺物はない。

2号おとし穴(A2)　(図版17、第106図)

D区市道調査区内にあり、A1の東北6m、165号住居跡の床下層から検出された。主軸方位はN-71°-W。床面で幅55～83cm、長さ120cmを測り、中央部分が最も幅狭くなる。深さは現状で最大60cm。出土遺物はない。

3号おとし穴(A3)　(第106図)

35号土坑の北半部の西にある。主軸方位はN-83°-E。埋土は自然堆積の様相であり、黒色系の土が埋まっていた。床面で幅50～63cm、長さ101cmを測る。深さは現状で最大62cm。出土遺物はない。



第106図　井戸（1/60）・おとし穴（1/40）実測図

5　土坑

A-Ⅰ・B・C区からの続きで23号から47号までを報告する。今回の報告対象区域内では北西部に35～42号が集中しているほかは、わりとまばらな分布である。43～46号土坑はA-Ⅱ市道調査区内に存した。番号の新旧対照については次年度報告で一括したい。

23号土坑　(図版10、第107図)

115・117号住居跡に挟まれた所にある。床面で45～53×110cmの長方形プランをなし、ほぼ南北方向に主軸を置く浅い土坑である。深さは最大で12cm。遺物はごく少ない。

出土遺物　(第176図1～3)

1・2は甕、3は甑であろう。

24号土坑　(図版10、第107図)

136号住居跡を切ってその東にある。上面で183×210cmのやや歪んだ円形プランをなし、北側では2個のピットを切っている。床面積は3.2m²。断面は袋状になる部分がある。埋土は大きく上下2層に分かれており、深さは最大で110cm。遺物は土師器が多く、須恵器は少ない。

出土遺物　(図版34、第176図1～26)

3の口縁端部はかなり丸い。5・6の体部は内湾度が強い。11・12の皿の内底面にはヘラ先による記号がある。16～21の小型の甕は口縁の外反の仕方に二種類ある。

25号土坑　(第107図)

133～135号住居跡に切られてその下層から検出された。床面で65～88×200cmの長方形プランをなし、主軸は東西方向に近い。床面積は約2m²。深さは最大で35cmしかない。遺物は少ない。

出土遺物　(第177図1)

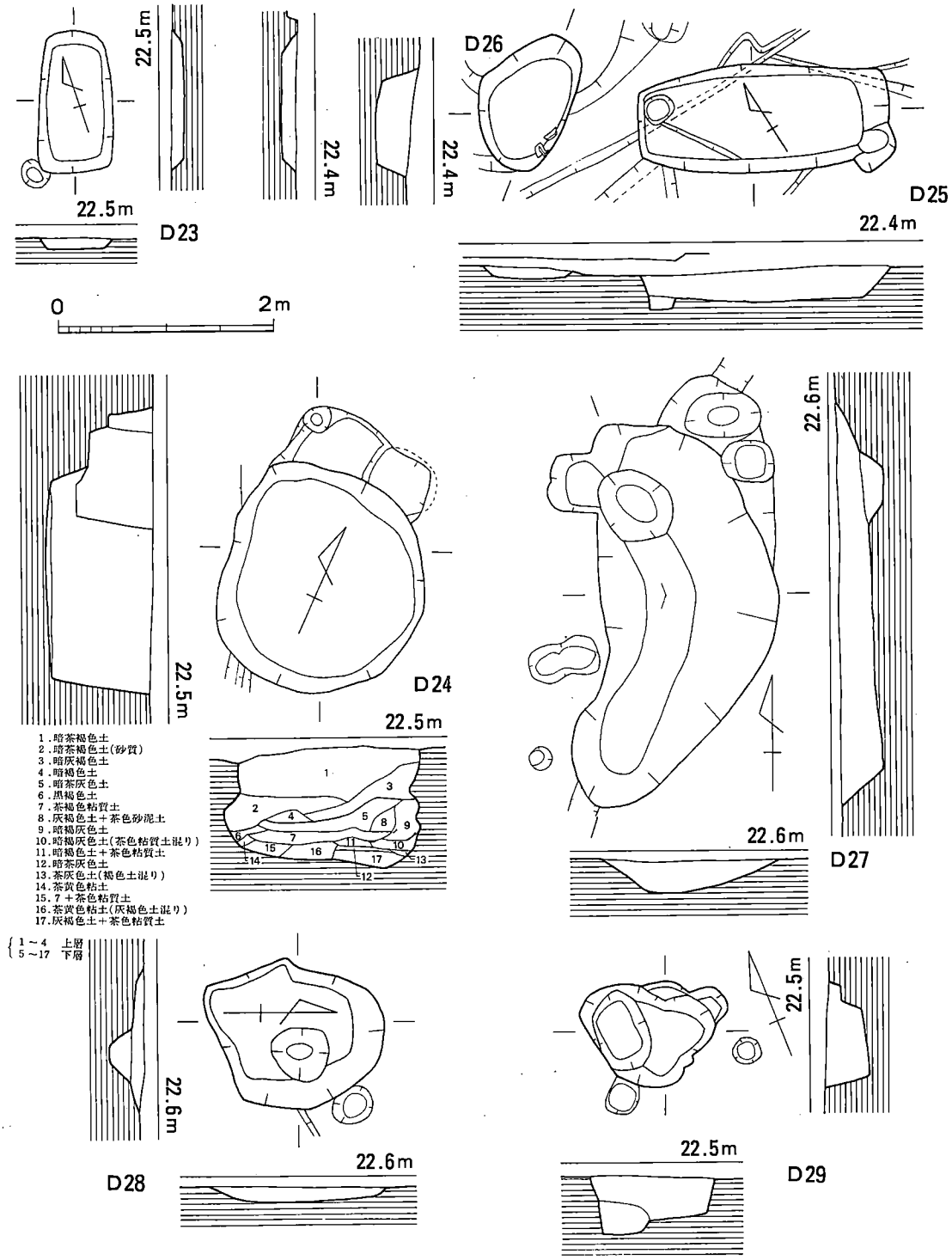
甑であろうか。

26号土坑　(第107図)

133号住居跡に切られてその下層にあり、25号土坑のすぐ西に位置する。床面で68×100cmの丸みをもった三角形状を呈する。深さは最大で14cmと浅い。遺物は少ない。

出土遺物　(第177図1)

口縁周辺には重ね焼きの時の色の変化が見られる。



第107図　23～29号土坑実測図（1/60）

27号土坑　(第107図)

139～143号住居跡と152号住居跡に挟まれた位置にあり、61号掘立柱建物跡の柱穴を切っている。床面プランも上面プランも東に張り出した湾曲した形状をなし、短軸長165cm、長軸長355cmを測る。深さは最大で40cm。

出土遺物　(図版34、第177図1～12)

1は薄手のつくりで身の可能性もある。10は外底面に煤が付着しており、鍋として使用したものである。

28号土坑　(第107図)

151号住居跡の北辺を切っている。上面で140×170cmのやや角張った楕円形プランをなす。深さは最大で15cm。遺物は少ない。

出土遺物　(第177図1・2)

2の外面には煤が付着している。

29号土坑　(第107図)

86号掘立柱建物跡の一柱穴を取り込んだもので、短軸長95cm、長軸長140cmの不整なプランをなす。深さは最大で40cmだが、86号掘立柱建物跡の一柱穴はこれよりまだ深くなる。遺物は少ないが刻印土器が出土している(第118図4・6)。

30号土坑　(第110図)

A区とD区を分けていた農道の下から検出されたもので、159号住居跡の西にある。調査時には西側を11号土坑、東側を13号土坑として別々に扱っていたが、ひとつの掘り方内にあるので前者を30A、後者を30Bとして一土坑として報告する。上面で30Bの短軸長約220cm、30Aのそれは320cmで、合わせた長軸長は420cmを測る。坑内は南側に段が付くとともに東西両側が深くなる。遺物は多く、焼塩土器(119図9)、砥石(125図1)も出土している。

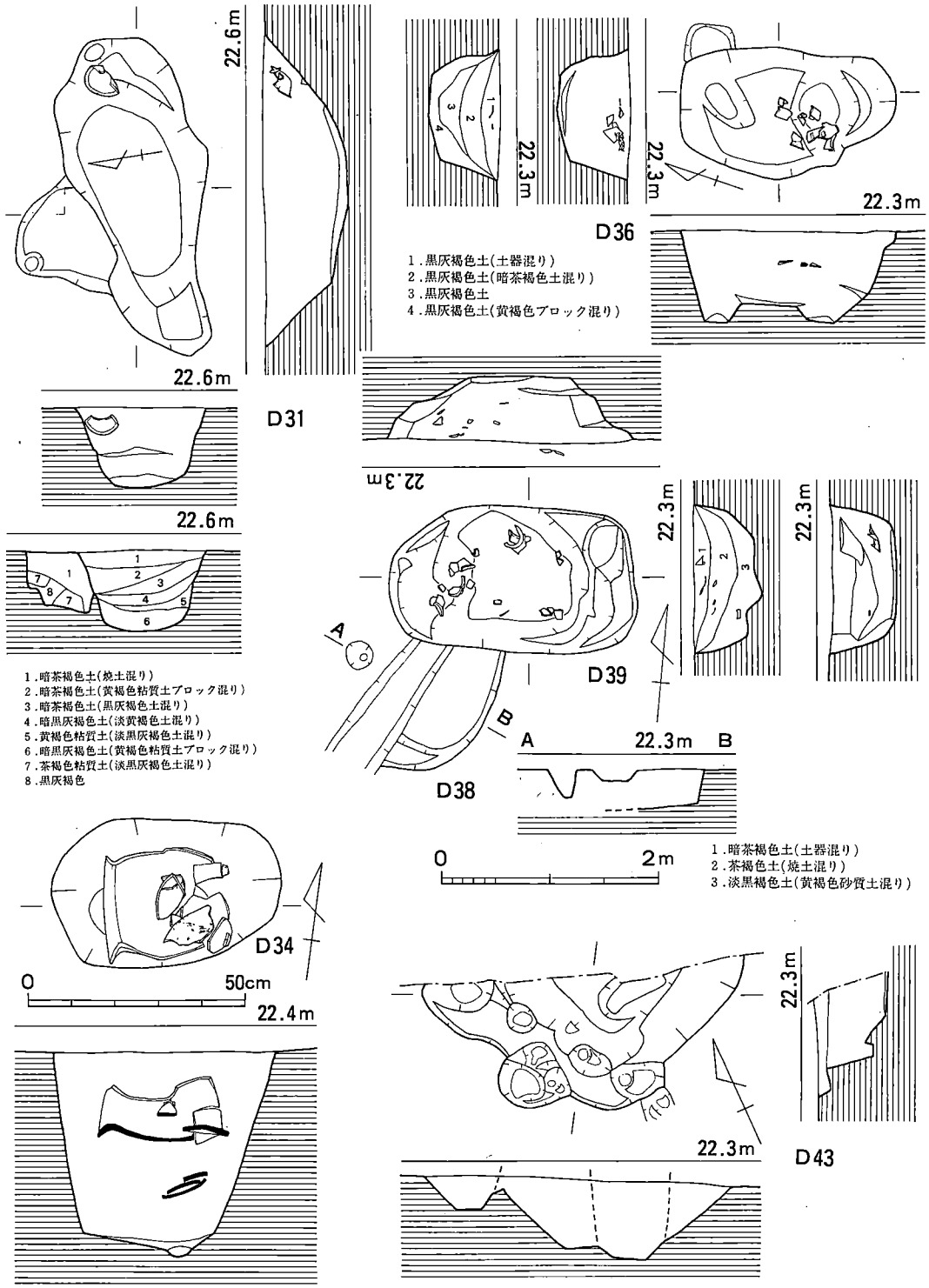
出土遺物　(第177～179図1～39)

1～19は30Bの出土である。1～10の須恵器は3・4・6・7が上層で他は下層の出土。3の内面には同心円の当具痕がある。11～19の土師器は18・19のみ上層で他は下層出土。

20～39は30Aの出土である。20～26の須恵器、27～39の土師器は全て下層の出土。24は体部が丸みを帯びる。26は脚裾かもしれない。32は小型の甑であろうか。

31号土坑　(第108図)

148号住居跡の東南、70号掘立柱建物跡の南にあり、69号掘立柱建物跡内の南側に納まった位



第108図　31・34・36・38・39・43号土坑実測図（1/60、34号は1/15）

置にある。上面プランは短軸長120cm、長軸長300cmと東西に細長く、底面は77×160cmの長楕円形の東西両端にテラスが付く。深さは最大で80cm。埋土は自然堆積の様相を示すが、最上層には焼土が混じっていた。

出土遺物　(第179・180図1～17)

3・11・13は下層の出土である。1の摘みは扁平な釦状をなす。4の口縁部は天井部からそのまま伸びてきたような形状をなす。9は須恵器を模倣した土師器。

32号土坑　(第109図)

145号住居跡の南、148・149号住居跡の北西にあり、6号溝を切っている。北東一南西に長軸をもつ不整形の大きな土坑であり、床面は起伏が激しく、所々で壁面がオーバーハングしている。上面で短軸長270～390cm、長軸長910～990cmを測る。深さは最大で100cm。土器のほかに砥石(125図9)、支脚(126図3)、鉄器(127図27)が出土している。

出土遺物　(図版　、第180図1～6)

6の須恵器大甕は頸部下端が異常に分厚い。4の土師器高台は内湾度が強い。

33号土坑　(第110図)

32号土坑の西にあって6号溝を切っている。やや湾曲しながら南北に長軸をもつ楕円形に近い平面プランで、坑内の南北両側には段がある。上面で短軸長210cm、長軸長406cmを測る。深さは最大で90cm。

出土遺物　(第180図1～3)

2は甑であろう。

34号土坑　(第108図)

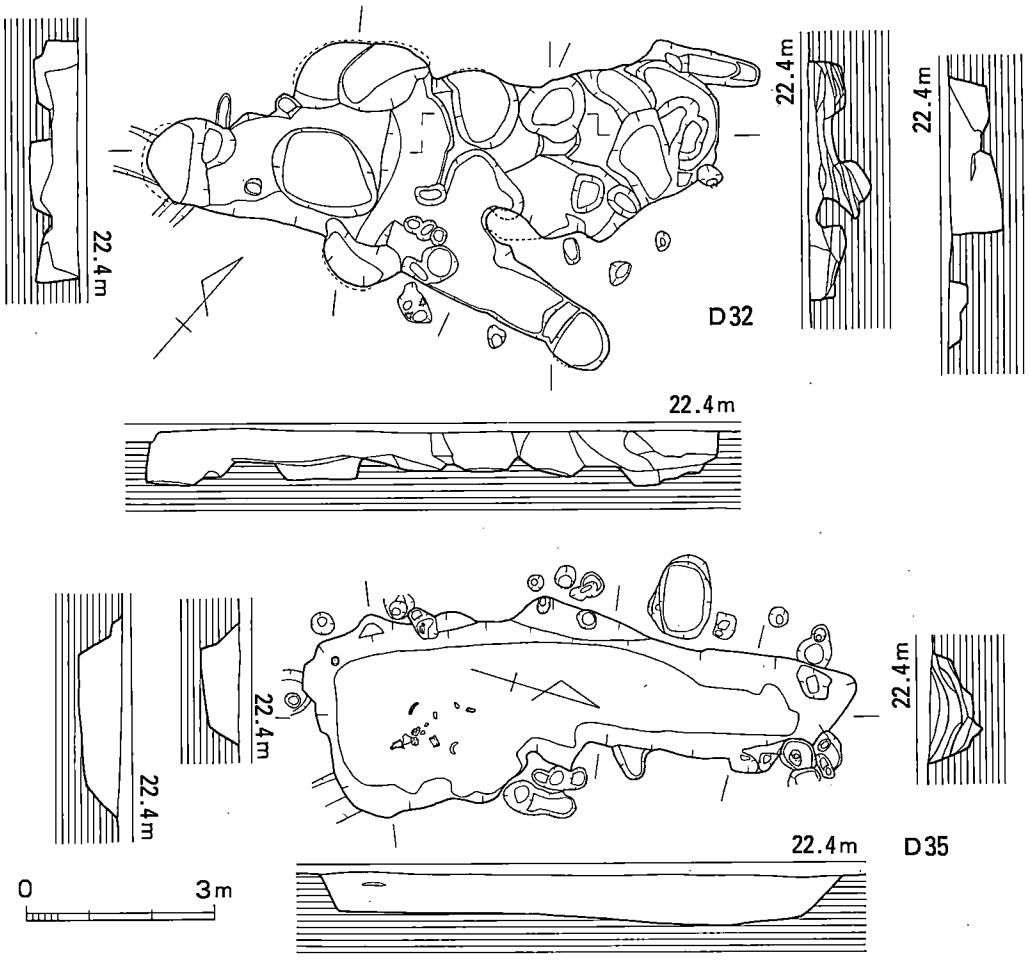
33号土坑の南、149号住居跡の西方にある。34×53cmの東西に長い楕円形プランで、深さ43cmを測り、土坑としたものの柱穴とした方がよい大きさである。実際のところ、西側3分の1ほどには黒色土が柱痕状に入り、残り3分の2は黄色土・黒色土の混ざった埋土であった。底面に密着することなく浮いた状態で土師器甕が横位にて出土しているのは、柱を抜いた後にこの土器を置いたものとも受け取れる。別に丸瓦片(122図5)が出土している。

出土遺物　(図版34、第180図1)

長胴の甕である。胴部径が口縁径を越えない。

35号土坑　(図版18、第109図)

33号土坑の西南方で、187～202号住居跡群の北東にて、80号住居跡を切って存する長大な土



第109図　32・35号土坑実測図（1/120）

坑である。西に3号おとし穴(A3)が隣接する。主軸は南北にかなり長く、幅170～320cm、長さ880cm、深さは最大80cmを測る。埋土は自然堆積の様相であり、中層には焼土を含む層があった。南側のやや広くなった所から土器がまとまって出土した。ほかに刻書土器(118図8)、焼塩土器(119図10・11)、瓦(121図2・3)、砥石(125図5・14)、鉄器(127～129図1・5・8・9・11・22・30・31・39・42・45・59・60)が出土している。

出土遺物　(図版34、第181～186図1～118)

須恵器(1～39)は下層から出土したものが多い。蓋の口縁部で13は球形につくり、16はごく僅かな段があるのみである。17は口唇部に打欠きがある。30は高坏に図示したが蓋かもしれない。土師器(40～118)のうち60・63は須恵器を模倣した椀と高坏である。114の甕と115の鉢は片口になる。

36号土坑　(図版18、第108図)

35号土坑の北にあり、102号掘立柱建物跡の一柱穴を切っている。120×197cmの南北に長い楕円形に近いプランで、坑底の南北両側に一段深くなった部分がある。深さは最大で84cm。埋土は自然堆積の様相であり、上層から土器がまとまって出土している。

出土遺物　(第186・187図1～23)

須恵器(1～7)のうち7の椀は高台が丸みをもつ。土師器(8・10～23)の14の甕は外面に煤が付着する。瓦器(9)の椀は混入であろう。

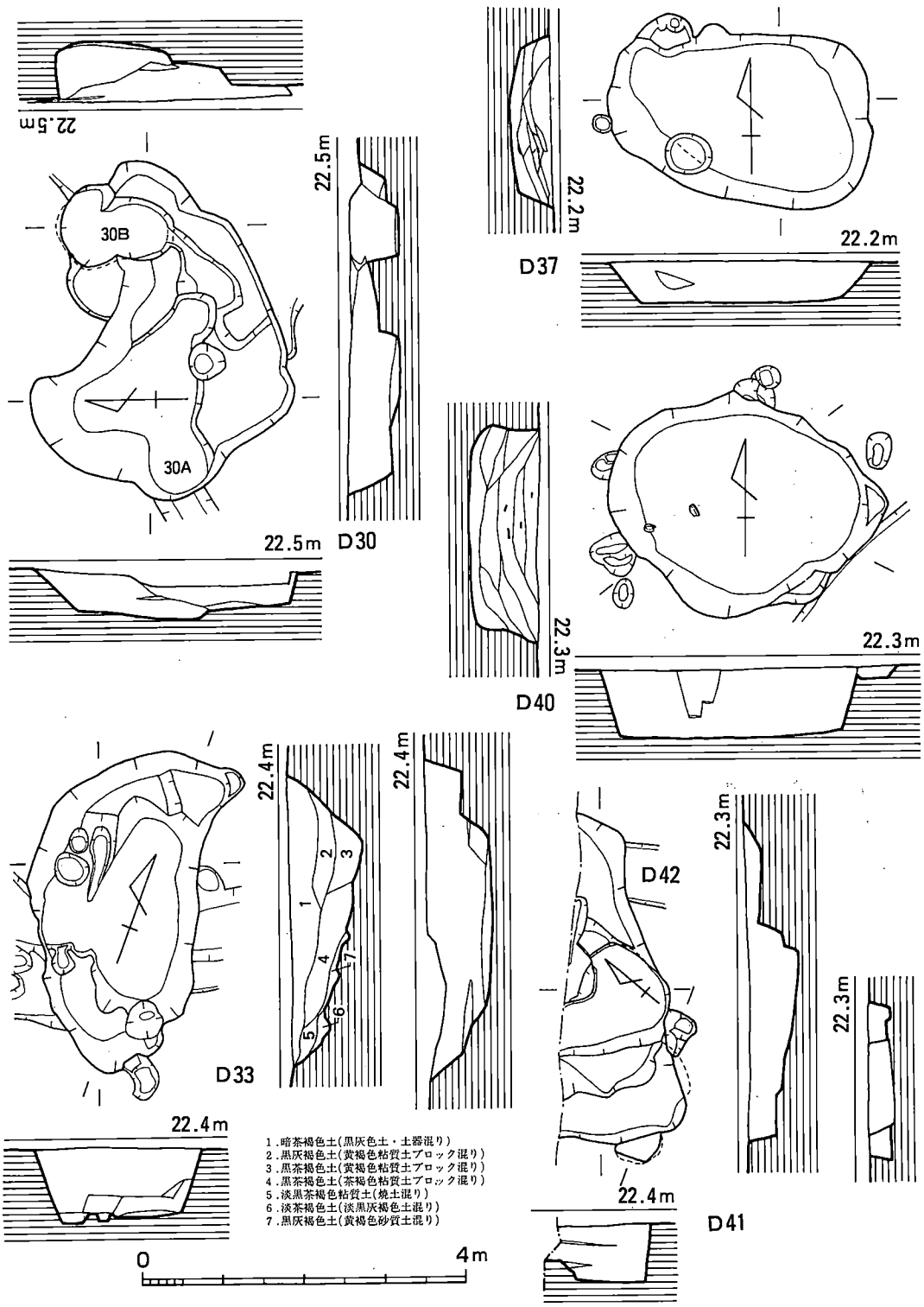
37号土坑　(図版20、第110図)

35号土坑の西方で、187号住居跡の北、185号住居跡の東にある。210×320cmほどの楕円形に近いプランで、深さは最大50cmを測る。埋土は大きく上下2層に分かれ、上層は茶褐色土を基本とするが、下層は上層より黒い土が堆積して焼土をかなり含んでいる。上下層ともに土師器の出土量が多かった。ほかに手捏土器(119図15)、鉄器(128図47)が出土している。

出土遺物　(図版35、第188～191図1～59)

1の高坏底部には刺突による刻みがある。11の口縁内面直下には浅い沈線が入る。13～18は硬質で底部から体部下半は回転ヘラケズリを施す。28・29の甕は口縁内側に明確な稜が入る。50は下膨れの球形胴をなす。58・59は同一個体の可能性がある。

手捏土器　(119図15)　ミニチュアの椀である。内外ともナデが著しい。口径2.5cm、器高1.9cm。



第110図　30・33・37・40～41号土坑実測図（1/80）

38号土坑　(第108図)

35号土坑と37号土坑の中間の北側で、8号溝・39号土坑に切られている。楕円形に近いプランかと思われるが、詳細は不明。

出土遺物　(第192図1～4)

1の須恵器は器壁が厚い。4は甑か。

39号土坑　(図版18、第108図)

38号土坑と8号溝を切り、40号土坑の南にある。上面プランは短軸長133cm、長軸長230cmの隅円長方形に近いプランで、東西に長い。坑内の東西両端にはテラスが付く。深さは最大で60cm。埋土は自然堆積の様相で3層に分けられるが、中層には焼土が混じっていた。須恵器・土師器以外に焼塩土器(119図12・13)、鉄器(127図21・23・41)が出土している。

出土遺物　(図版35、第192・193図1～31)

4の高台は丸みを持つ。6は口縁部に自然釉が掛かる。7は内底面、8は外底面に刻線がある。28は外面に煤が付着する。

40号土坑　(図版18、第110図)

39号土坑のすぐ北にあり、8号溝を切る。上面プランは266×340cmの東西に長い楕円形をなし、深さは最大で85cm。埋土は自然堆積の様相であるが、中・上層には焼土が混じっていた。多くの土器のほか土製品(ふいご羽口か)(119図17)、平瓦(121図1)も出土した。

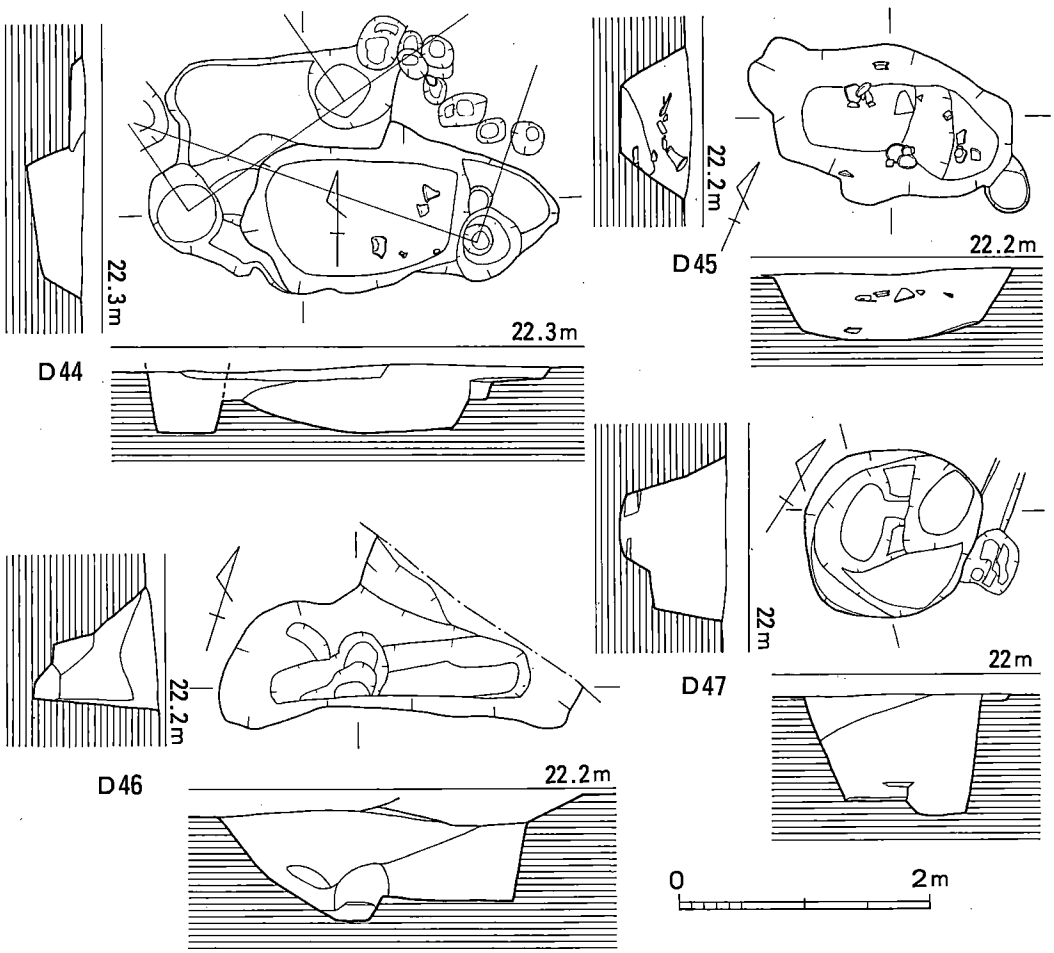
出土遺物　(図版34・35、第193～196図1～53)

17の須恵器小壺は約2分の1の残存でやや歪んでいるがプロポーションはよい。19の胴部内面下半は同心円のみでない当具痕がある。36・41は外面に煤が付着する。42の大型の鉢は類例が少ない。43～49の鉢は鍋として使用したものだろう。

土製品　(119図17)　中膨らみの円柱状土製品で、ふいご羽口の可能性もないではない。最大径9.7cm。

41号土坑　(図版18、第110図)

40号土坑のすぐ北にあり、42号土坑に切られているため不明の部分が多い。主軸を略東西にとり、幅45cm、長さ190cmの長方形プランをなして、深さ24～28cm。形態として木棺墓の可能性があり、西小口部床面に底面の幅が12～15cmの浅い掘り込みがあるのは小口板の名残りかも知れない。A-II市道部分の調査区南東端に1号土壙墓が検出されていること、また出土遺物がないこともこの想定を補強するものともいえる。



第111図　44～47号土坑実測図（1/60）

42号土坑　（図版18、第110図）

40号土坑のすぐ北にあり、39号土坑と7号溝を切っている。大半は調査区外にあり、上面の東西長が400cmであることと、床面にいくつかの段が付くことが知られる程度である。深さは最大70cm。

出土遺物　（第197図1～3）

1の坏身には口縁部に打欠きがある。

43号土坑　(図版19、第108図)

A-II区市道調査区の東寄りにあり、大半は調査区外に延びるものと思われる。82号掘立柱建物跡の一柱穴に切られている。西南辺長の220cmは知られるので、方形もしくは長方形プランであろう。坑内は二段掘り風になるらしい。深さは最大68cm。

出土遺物　(第197図1～11)

8・9は同一個体の可能性がある。

44号土坑　(第111図)

A-II区市道調査区の東寄りで、43号土坑の西方にあり、79号掘立柱建物跡の柱穴に切られている。上面プランは115×255cmの東西に細長い楕円形をなし、坑内東側には段が付く。深さは最大55cm。この土坑の西半分には一辺170cmほどの方形の浅い二段掘りの掘り込みがあるが、付属するものであるかどうか定かでない。

出土遺物　(第197図1～17)

1～5の須恵器蓋は1のみ時期に隔たりがある。また2～5も口縁部の形態には差異がある。

45号土坑　(第111図)

44号土坑の西にあり、44号土坑と平面形はよく似ている。上面プランは120×220cmの東西に長い楕円形もしくは隅円長方形をなす。深さは最大57cm。埋土中より土器が出土した。

出土遺物　(第198図1～15)

1の摘みはかなり扁平である。3の長頸壺は口縁が鋤先状に外反する。5は須恵器を模倣した土師器で、8もその可能性がある。14の鉢は歪んでいる。

46号土坑　(第111図)

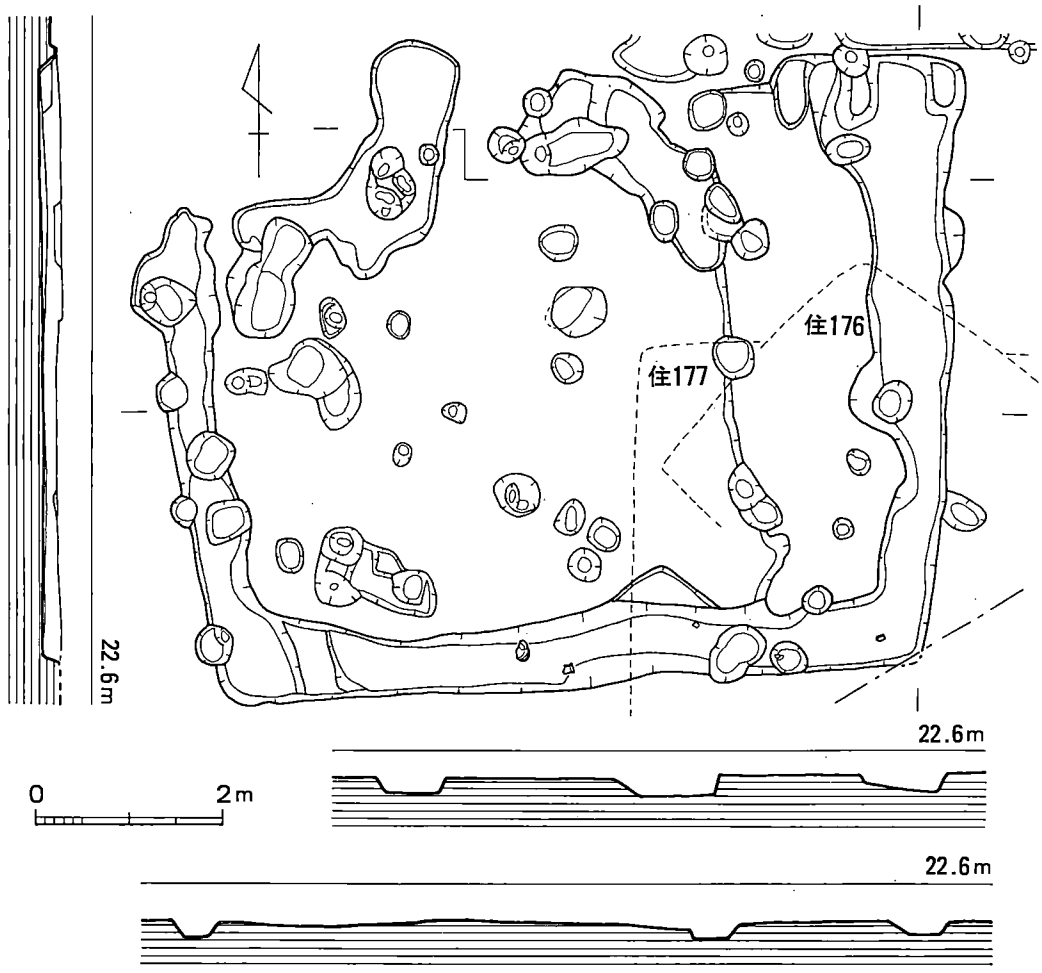
45号土坑の北西方にあり、大半は調査区外に延びるものと思われる。調査区と接する所は東西両辺が幅200cmで平行になっているが、その南辺は西側へ張り出して、平面的には不整形となる。坑内には南辺に沿うように東西方向に溝状の掘り込みがあり、その中にまたピットもある。深さは最大100cm。出土遺物はなかった。

47号土坑　(第111図)

212号住居跡の西方、213号住居跡の南方にある。上面径137～152cmの円形に近いプランで、坑内は4段ほどの段が付く。深さは最大で95cm。これについては平成9年度に再報告する。

6　方形溝状遺構

調査区中央部の南、今回報告する範囲の南西部に位置し、177・178号住居、91～93・96号建物と重複する。「コ」字形と「ハ」字形の、相互に連接しない溝が組み合わさって、方形周溝状の遺構を形成し、北側に開口している。「コ」字形溝は幅0.5～1m、深さは20cm前後である。「ハ」字形溝は、双方とも複数の小土壙状の遺構が重複したような形状を示す。「コ」字形溝とは、あるいは無関係であるかも知れない。「コ」字形溝によって区画される範囲は東西8.4m、南北6.6mである。区画された内部のピットは、まとまりを欠き、本方形溝状遺構に付随する遺構は検出していない。若干の須恵器・土師器片を検出した。奈良時代のものであろう。



第112図　方形溝状遺構実測図（1/80）

7　溝

1号溝　（付図2）

D区市道の西端に検出した。この溝は、すでに報告済のＡＩ・Ｂ地区においても検出しており、両地区からの延長分である。長さ7m分を検出した。幅は2m前後、深さは50～60cmである。

出土遺物　（第199・200図）

下層からは遺物は出土せず、中・上層からかなりの量の土器が出土した。3・4は中層から、他は上層からの出土品である。1・3・4は5世紀代の土器で、他は本集落の主体を占める6世紀後半以降のものである。甕1は反転復原図で口径11cm、残存高4.3cmである。焼成良好で、内外とも暗褐色を呈する。壺3も反転複原図で、口径17.4cm、器高30.5cmほどである。口縁部から底部にかけての外面は煤が付着する。胎土には、雲母や1～5mmほどの石英砂粒を含み、焼成良好で、生地は内外面とも暗黄茶褐色を呈する。壺4も反転複原図で、口径16cm、器高28.5cmほどに復原される。調整・ヘラケズリ等は3と同様である。外面全体に煤が付着する。胎土には、雲母や7mmほどの石英砂粒を含み、焼成良好で、生地は内外面とも赤茶褐色を呈する。

紡錘車　（図版40、第124図）　2は遺構検出の時点で、埋土上面に検出した。蛇紋岩製の完形品で、長径47.5mm、短径44mm、孔径6.5mm、厚さ13mm前後である。

6号溝　（付図2）

ＡII地区に検出した東西に走る溝で、32・33号土坑と重複する。幅1m前後の浅い溝である。

7号溝　（付図2）

ＡII地区に検出した、北西～南東に走る溝で、D区との境である農道下で消える。幅1m前後の浅い溝である。

出土遺物　（第200図）

図示できるのは、土師器2点である。

8号溝　（付図2）

ＡII地区に検出した、南西～北東に走る溝で、7号溝に連結した後は消える。幅50cm前後の細く浅い溝である。

出土遺物（第200図）

須恵器、土師器が出土している。中でも、1・2は同一のヘラ記号が入り、場合によればセットの可能性がある。その他は小破片である。

8　土壙墓

1号土壙墓　(第113図)

AII区市道東端部に検出した。長さ2m、幅0.3m、深さ20cm弱を測る。

2号土壙墓　(第113図)

156号住居の北東隅に検出した。長さ1.55m、幅0.55m、深さ20cmほどを測り、中央部を後世のピットで切られる。

3号土壙墓　(第113図)

156号住居の北に検出した。長さ2.05m、幅0.6m、深さ40cm弱を測る。中央部に深さ20cmほどのピットがある。

4号土壙墓　(第114図)

3のすぐ東に検出した。長さ1.28m、幅0.5～0.7m、深さ50cmほどを測る。底面は平坦ではなく、二つのピットが連接したような状態である。

5号土壙墓　(第114図)

155号住居の北に検出した。長さ2.1m、幅0.6m、深さ50cmほどを測る。底面は平坦ではなく、両短壁側がピット状を呈する。

6号土壙墓　(第114図)

5号のすぐ東に検出した。木根による攪乱がひどい。長さ1.75m、幅0.5～0.6m、深さ20～30cmほどで、南側がピット状を呈し、深さ50cmほどを測る。

7号土壙墓　(第114図)

6号の北側に検出した。長さ1.55m、幅0.7m、深さ20～60cmほどを測る。底面は南に向かって低くなり、ピット状を呈し、深さ60cmほどを測る。

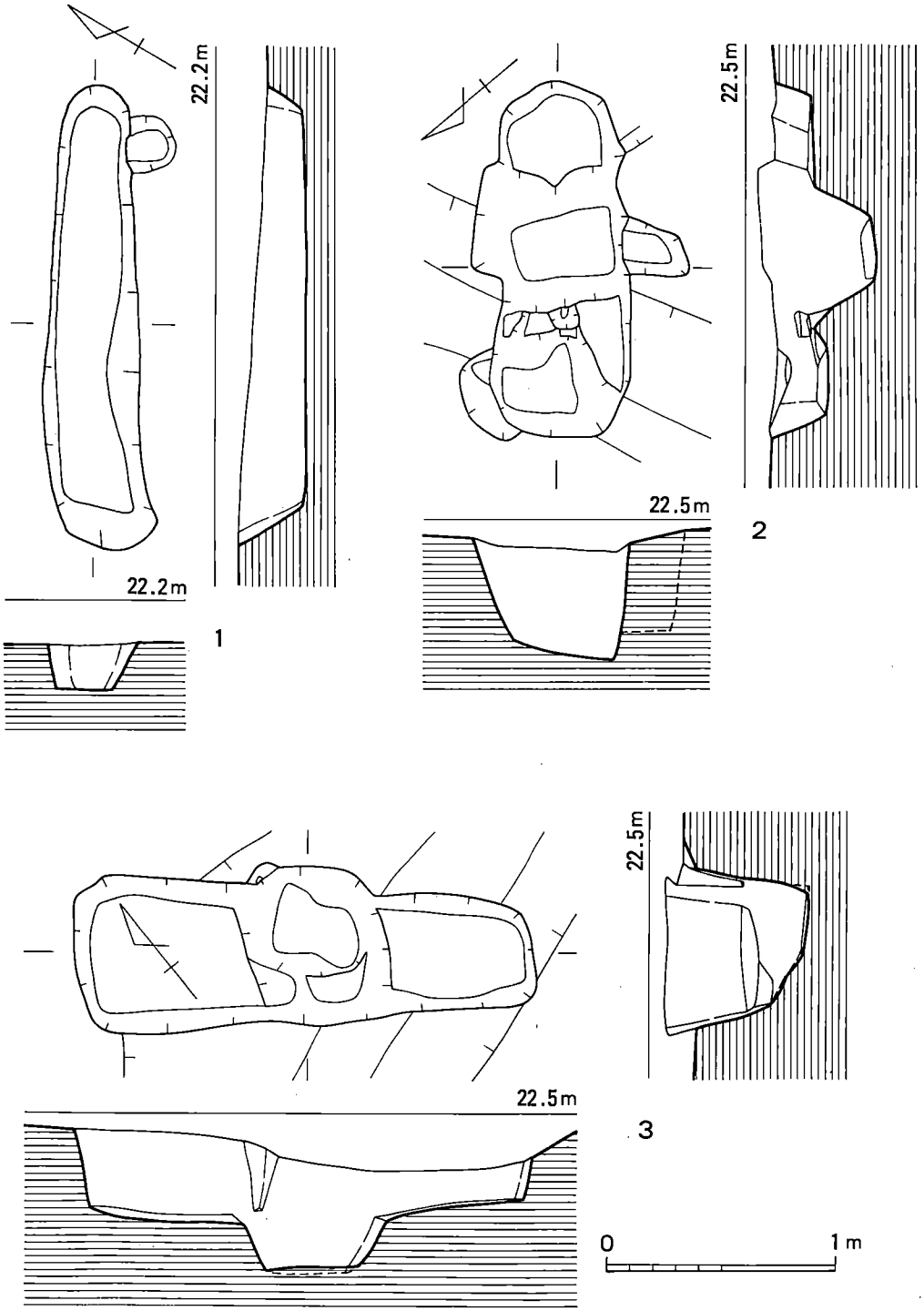
8号土壙墓　(第115図)

7号の東側に検出した。長さ1.63m、幅0.6m、深さ50～60cmほどを測る。底面は平坦ではなく中央がピット状を呈する。

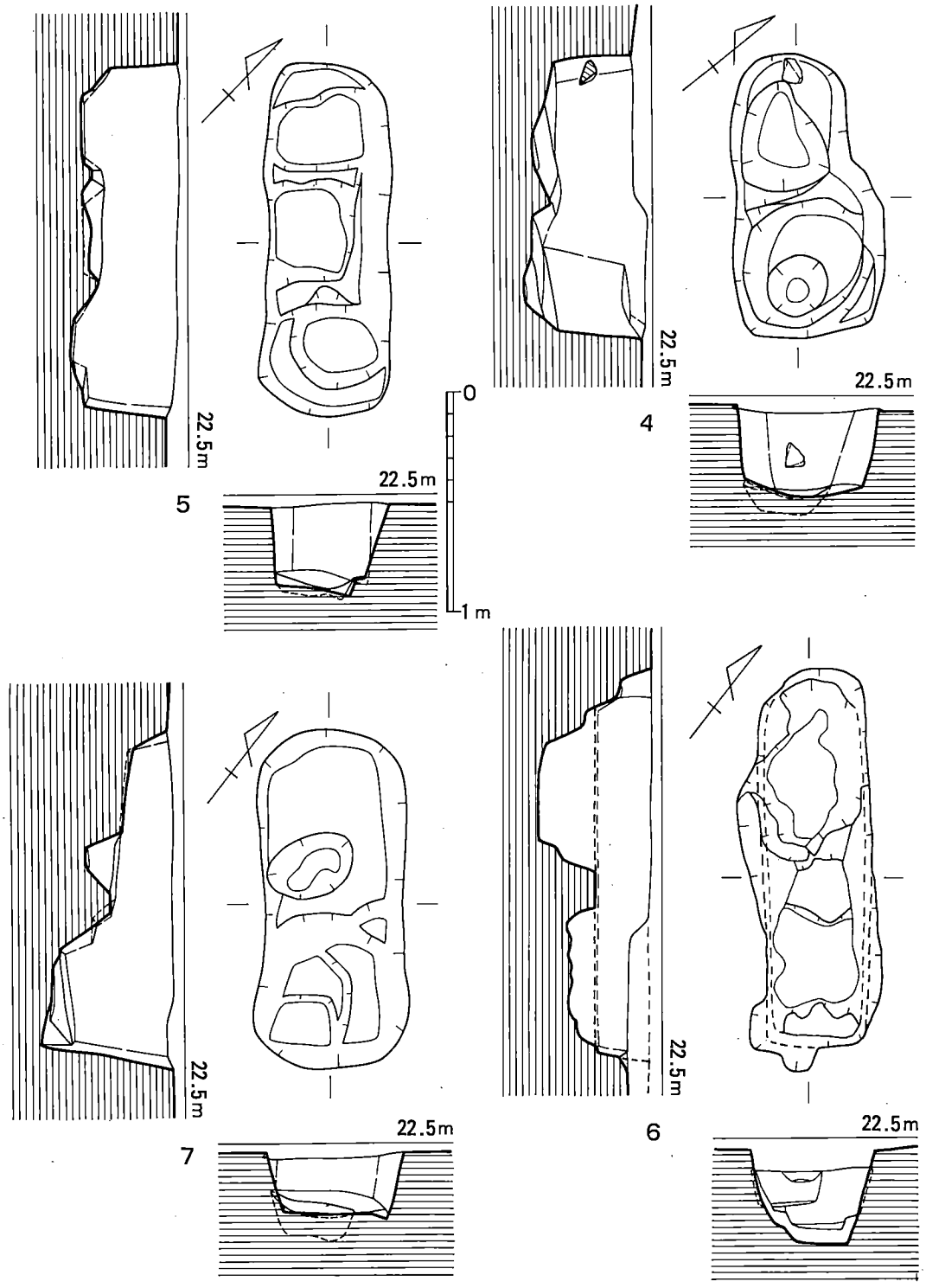
9号土壙墓　(第115図)

調査当時、2基の土壙墓が南北に連接したものだろうか、と推測して図化した。それにしたがって説明する。全長6.7m、幅0.5m前後、深さ50～70cmほどを測る。断面図中央付近を境に2基に別れると推測していた。

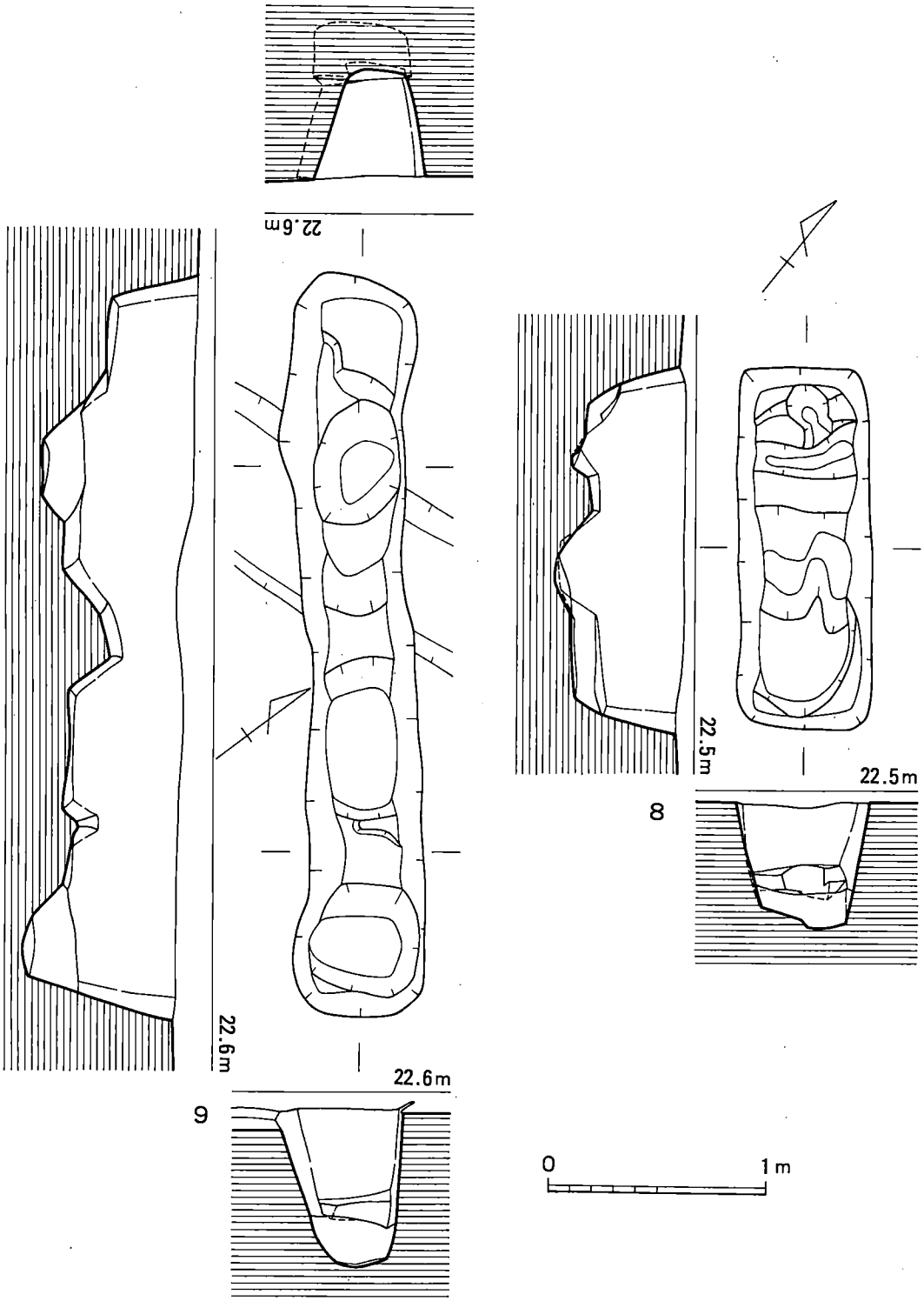
上述した2～9号は、分布状態及び底面の状態から、土壙墓ではない可能性も高く、掘立柱建物跡の柱穴の可能性を残している。来年度報告の際に、再考する予定である。



第113図　1～3号土壙墓実測図（1/30）



第114図　4～7号土壙墓実測図（1/30）



第115図　8・9号土壙墓実測図（1/30）

第３節　遺物各説

１　墨書土器　（図版35・36、第116図）

墨書土器としたが、単に墨痕が残るものも含む。これらの土器が、本村落で墨書されたのか、あるいは持ち込まれたものなのか、で評価が大きく異なる。ただし、本村落では、転用硯や円面硯（来年度報告）が出土しており、墨書土器の大半は本集落の住人の手になるものと推測する。

１は須恵器坏蓋の裏面に書かれている。133号住居埋土中から出土した。転用硯でもあり、文字は薄れてよくは読めない。

２は須恵器坏身の外底面に書かれている。133号住居埋土中から出土した。一部では、「日」と読める。

３は須恵器の坏身で外底面に書れている。191号住居の貼床下層埋土から出土した。「屎麻呂」と読める。

４は土師器坏身で体部外面に書れている。115号住居埋土からの出土品である。文字はどのように読むの分からない。

５は井戸下層から出土した土師器の坏身である。底部外面に書かれた上の文字は「占」かと推測する。その下の文字は一部しか遺存しないので不明である。

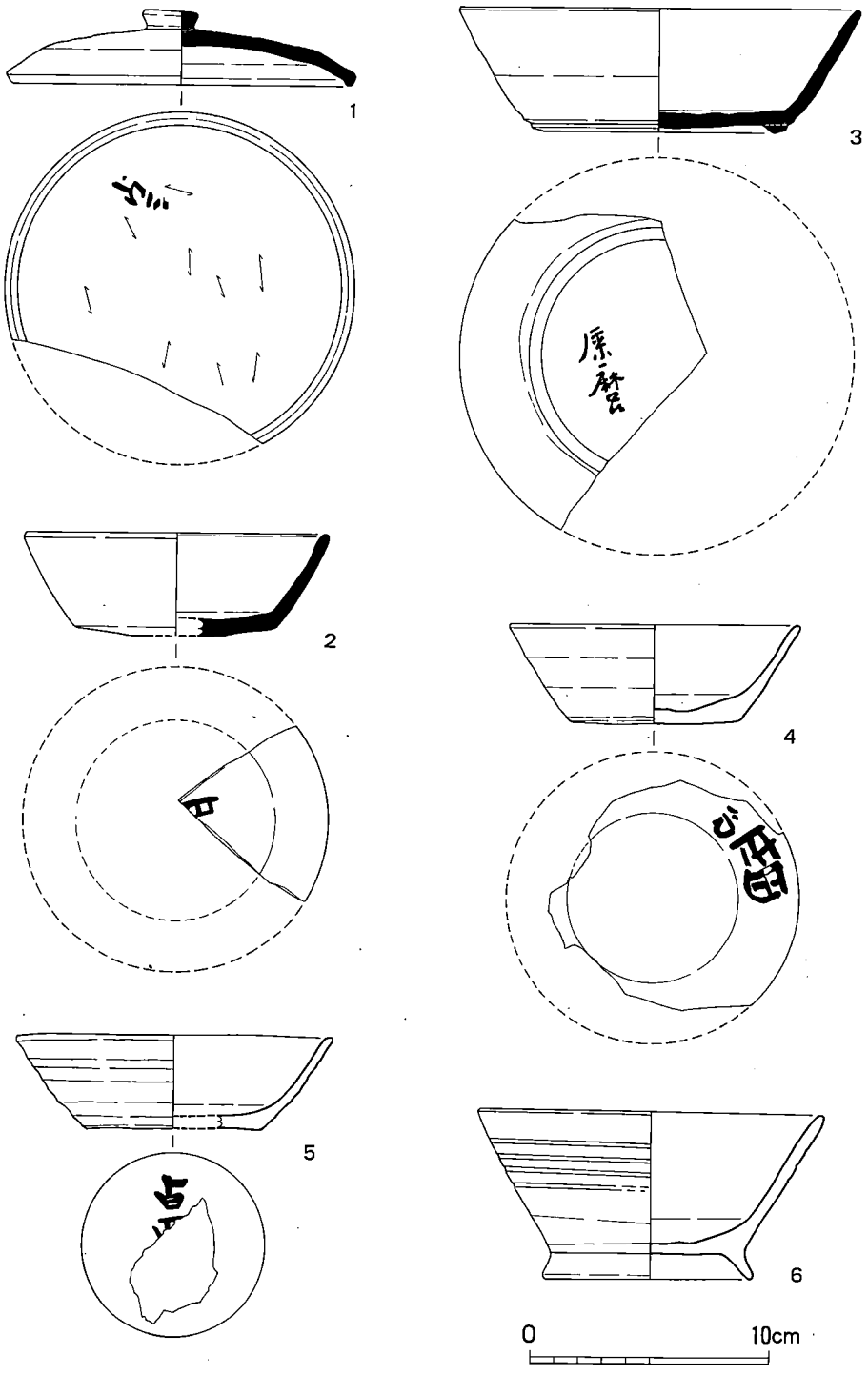
６は井戸下層から出土した土師器の坏身で、外底面に墨痕が残る。墨痕もわずかで図示できるほどのものではない。

２　転用硯　（第116図－1、第117図）

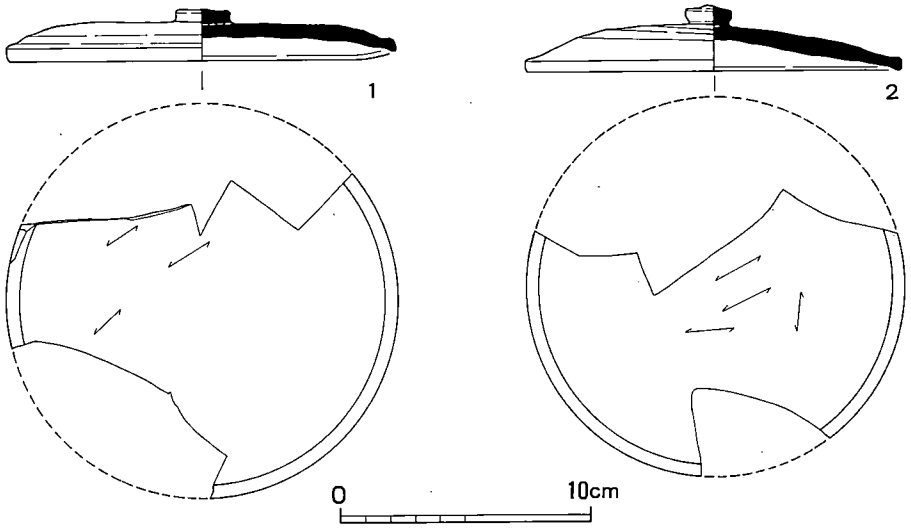
転用硯として図示したのは、墨書土器でもある第116図－１を含む３点である。この３点以外にも図化できなかったが、内面に、通常見られる調整痕とは異なる不定方向の擦過痕があり、器面が平滑で若干の墨痕が残る坏蓋の小破片が出土している。よって、奈良時代の本村落では、かなりの数の転用硯が存在し、使用されていたと推測される。

133号住居から出土した第116図－1は先述のように内面に墨書された坏蓋で、一部を欠失する。口径14.2cm、器高3.1cmを測る。内面の全体に不定方向の擦過痕があり、内面中央部は硯の池として使用したためか黒ずんでいる。

第117図－1・2は190号住居の貼床下層から出土した坏蓋である。1は口径15.5cm、器高2.1cm、



第116図　墨書土器実測図（1/3）



第117図　転用硯実測図（1/3）

2は同じく、14.7cm、2.6cmを測る。内面の全体に不定方向の擦過痕があり、他の坏蓋の内面と異なり、中央部は極めて平滑である。

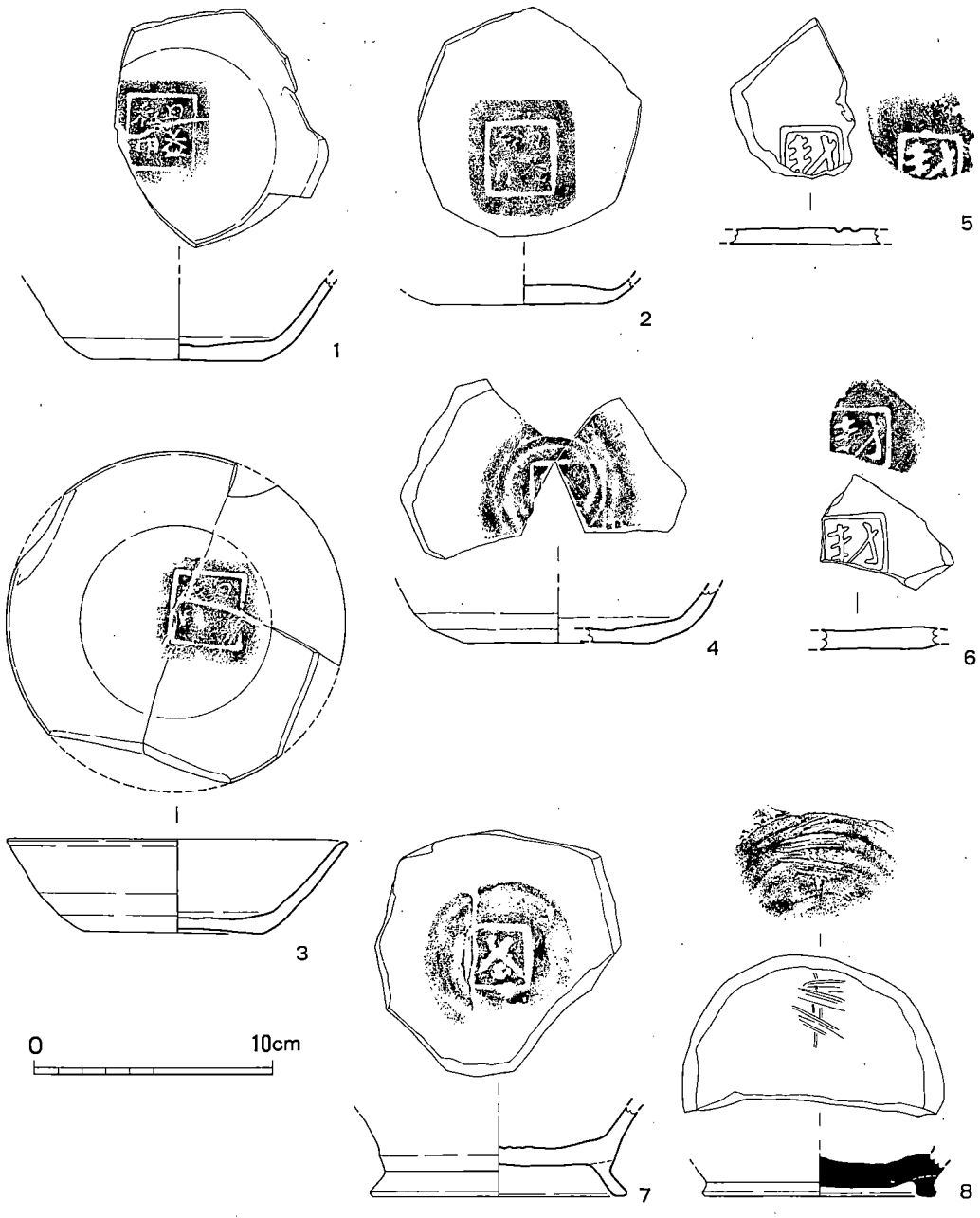
3　刻印土器　（図版37、118図1～7）

156･200号住居跡、29号土坑、1号井戸から押印のある土器が出土している。これらは硬質の土師器の坏か皿もしくは椀の内底面に残っているが、当然のことながら土器を成形したあと生乾きの時に施したものである。もとの印鑑の材質は、印された枠・字体からみて銅、つまり銅印であったと思われる。

なお、字であると断定はできないが、字らしく見えるものについて刻書土器としてこの項で説明しておく（118図8）。

1は200号住居跡出土の坏で、外底部と体部下端は反時計回りの回転ヘラケズリ、体部は回転ナデ、内底部はナデを施している。強い二次熱を受けた痕跡がある。底径7.2cm。刻印は内底面の中心からやや偏った所に印されており、「日益私印」の「益」の字の右下あたりが土器の中心にあたる。印面は一辺30～32mmの方形である。

2も200号住居跡出土で、土器の調整は1に同じ。底径7.5cm。「日益私印」の刻印の上辺の中央部分が土器の中心にあたる。印面は一辺30～32mmの方形である。押印のあとにナデているため文字のよく見えない部分がある。



第118図　刻印土器等実測図（1/3）

3は200号住居跡と50号土坑（次年度報告予定）の出土品が接合している。ほぼ完形に復元できる個体で、口径14.4cm、底径7.5cm、器高4cm。調整は1に同じ。これも刻印は内底面の中心にはなく、「日益私印」の「印」の字の左枠外付近が土器の中心にあたる。印面は同じく一辺30～32㎜の方形。やはり押印のあとにナデており、「日」字以外は読みとりにくい。

4は29号土坑と50号土坑（次年度報告予定）の出土品が接合している。体部下端の回転ヘラケズリが強くなされていて丸みを持った立ち上がりになる。復元底径8cm。破片のため「日益私印」の「私」字はなく、「日・印」もごく一部が見えるのみである。「益」字は残るがナデのためおぼろげである。これも刻印は内底面の中心にはなく、「日」の字の左下隅付近が土器の中心にあたるらしい。印面は右辺の一辺が32㎜である。

5は156号住居跡下層出土の坏か皿の破片で、内底面に「封」の刻印がある。この土器の中心は刻印上辺の右隅枠外付近にあるらしい。印面は残存する上辺が一辺27㎜を測る。

6は29号土坑出土の坏か皿の破片で、5と同じく内底面に「封」の刻印がある。この刻印も土器の中心にではなく偏って印されており、上辺の中央から20㎜の付近が土器の中心らしい。印面は残存する上辺・右辺が27㎜になろう。外底面には化粧土を掛けた痕跡がある。押印のあと印面をナデている。5の字体とは異なるように見えるが、それは5の方が深く残っているためであり、おそらく同一印によるものと思われる。

7は1号井戸1層出土の高台の付く椀で、復元高台径10.8cm。内底面中央に「谷」の字に似た刻印がある。この土器の中心は刻印の中心とほぼ一致している。印面は一辺28㎜の方形である。

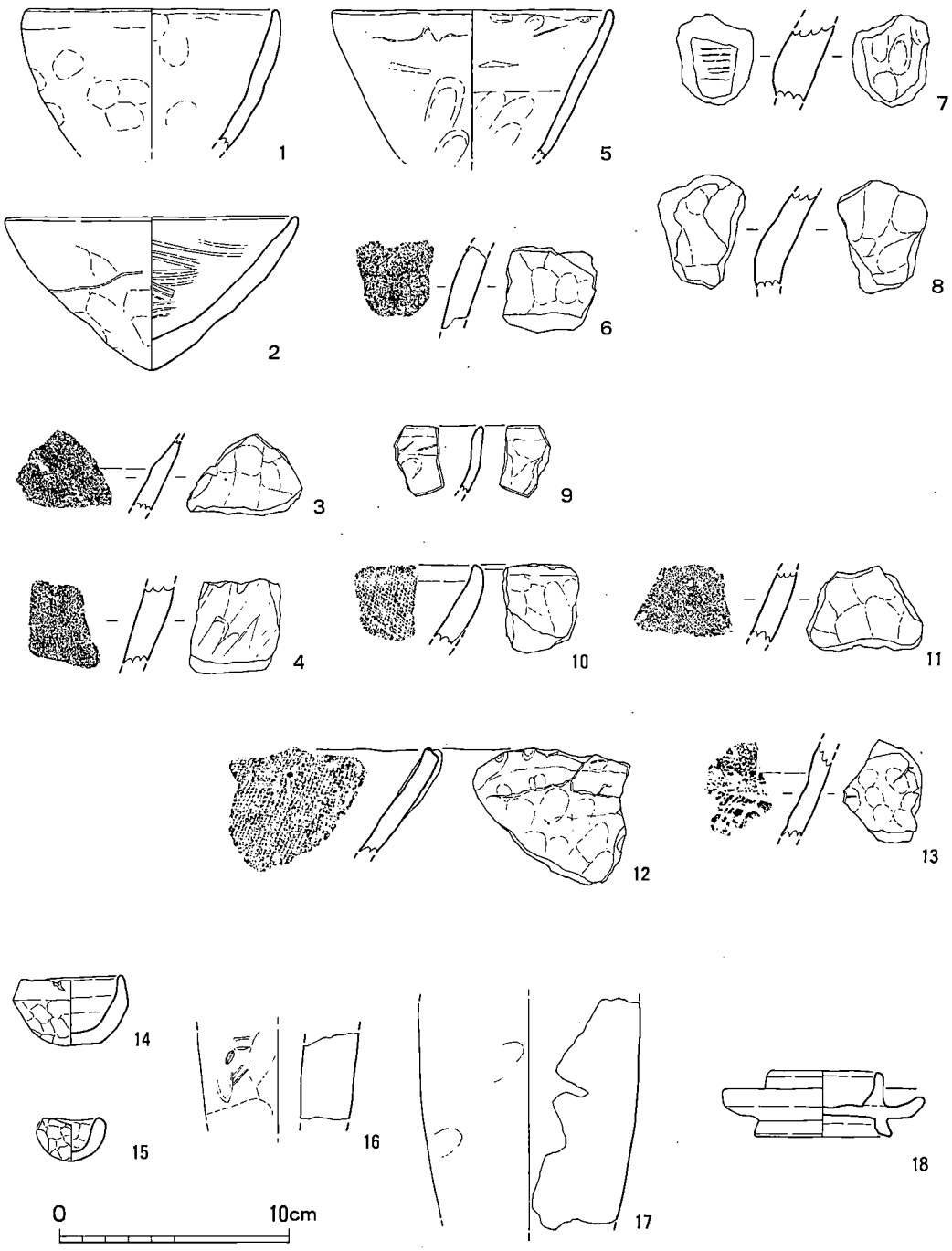
8は35号土坑の北半部下層出土の須恵器椀である。内底面の隅に植物質の原体を用いて文字らしきものを刻んでいる。あるいは単なる記号であるかも知れないが、文字としたら「幸」という字に見えないこともない。高台径9.6cm。

4　焼塩土器　（図版38、119図1～13）

多くの遺構が存したわりには焼塩土器の出土量はあまり多くなかった。全ての遺構の全ての土器についてチェックする余裕がなかったので、あるいはまだ多くの破片が埋もれている可能性もある。今年度報告分は13点であるが、これらは等しく砂粒の多い胎土で、外面は指頭によるナデが施されている。

1は150号住居跡下層出土の鉢形をなすもので、内外ともナデである。二次熱を受けて部分的に赤変している。復元口径11.2cm。残存高6.1cm。

2は166号住居跡床下層の西北際土坑出土の鉢形をなすもので尖底である。内面は二枚貝の腹縁による条痕が見られる。二次熱を受けて部分的に赤変しかつ白色化している。復元口径12.8



第119図　焼塩土器及び土製品実測図（1/3）

cm、器高6.6cm。

3・4は190号住居跡カマド周辺出土の破片で、3は口縁に近い部分であろう。4は器胎が厚い。ともに強い二次熱を受けている。外面は擦過に近いナデを施す。内面は3が二枚貝の腹縁によるものらしい横方向の条痕ののちナデで、4は布目痕の上をナデているらしい。4の断面には胎土に縦方向の縞模様があるので粘土貼り合わせ成形かもしれない。

5は195号住居跡床面出土の鉢形をなすもので、内外ともナデである。口縁外側には指紋がのこる。復元口径12.4cm。残存高6.4cm。

6は200号住居跡カマド出土の小破片で、二次熱を受けている。外面はナデ、内面は布目痕の上をナデているらしい。器胎は厚い。

7・8は126号住居跡出土で、ともに胴部の屈曲部付近の破片である。ともに器胎が厚い。下部は円筒状の器形になるのだろう。8は二次熱を受けた痕跡がある。

9は30号土坑上層出土の椀形の小破片である。二次熱を受けた痕跡がある。

10・11は35号土坑出土の破片で、10は南半上層、11は上層から出土した。10は口縁部破片で内面の布目は1cmあたり8本とやや粗い。11のそれは1cmあたり14本を数える密なものである。

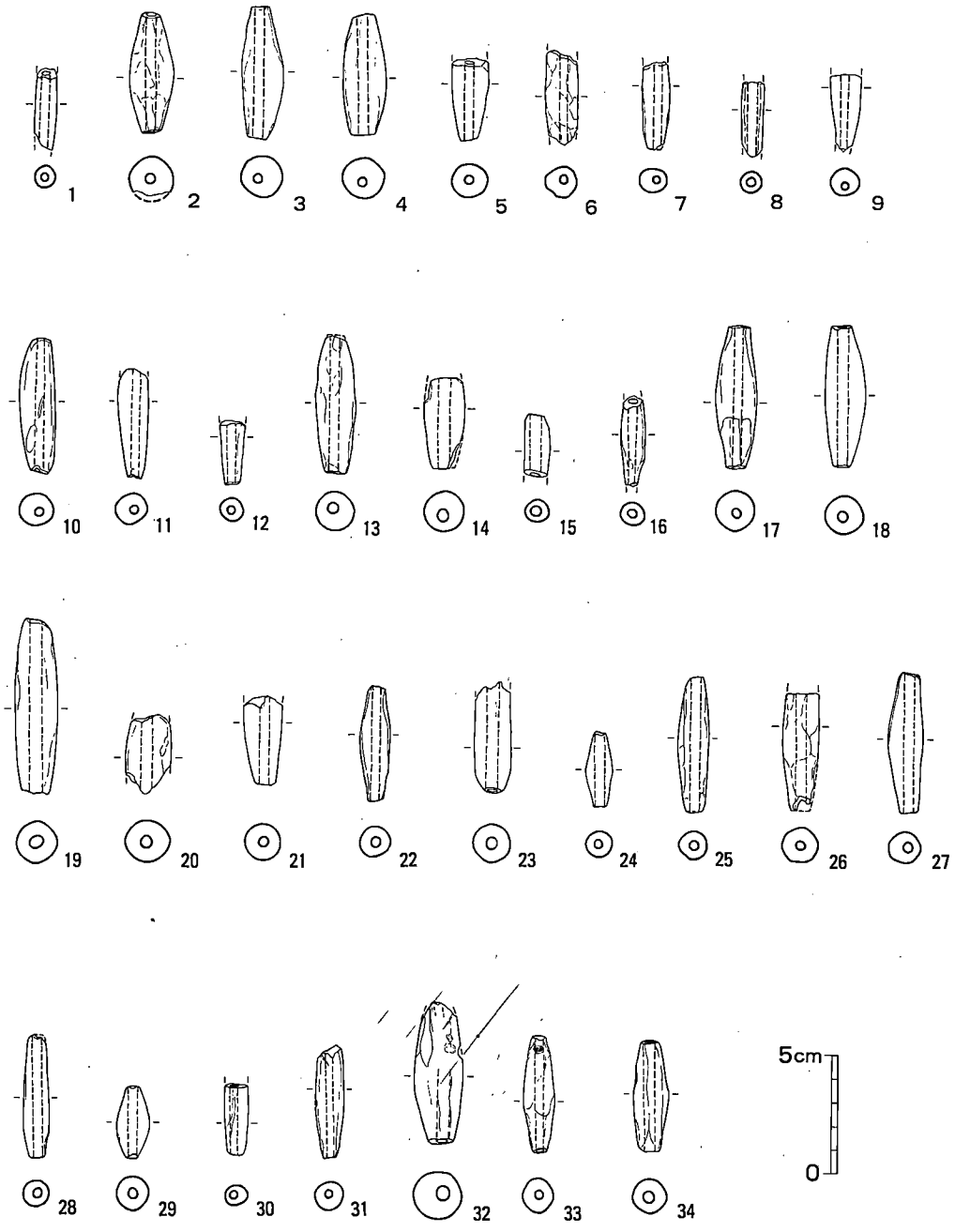
12・13は39号土坑出土の破片。12は口縁が波状になり、内面の布目痕は1cmあたり7～8本を数える。二次熱で灰褐色に変色した所がある。胎は芯の部分が灰色をなす。13は外面はふつうのナデであるけれども内面には布目痕と同心円当具痕がある。この布目と当具痕が併用されて残っているのは珍しい。

5　土　錘　（図版39、第120図）

34個の土錘が出土している。各々出土遺構別に整理すると以下のようである。

①123号住居－20
②124号住居－19
③133号住居－1
④135号住居－2・3
⑤138号住居－4
⑥145号住居－21
⑦188号住居－5
⑧189号住居－6
⑨190号住居－7～12
⑩197号住居－13～15
⑪208号住居－22・23
⑫1号井戸－24～29
⑬25号土坑－17・18
⑭35号土坑－16
⑯ピット－30～34

遺構別にみると、住居11軒(21点)、井戸1基(6点)、土坑2基(3点)、ピット4(4点)で、土坑からの出土数が意外と少ない。



第120図　土錘実測図（1/3）

大きさ、形態はバラエテイに富む。図上で完形品のものを長さでみると、最大が19（長7.5cm、最大径1.8cm）、最小が24（長3.1cm、最大径1.2cm）である。破片を含めた最大径の大小では、15が0.9cm、32が2.05cmである。長さと太さに相関関係は認められないようである。

形態的には、棗形を呈するもの(2～4、24・29)、筒状で上下端の径が最大径とあまり変わらないもの(19・25・28)、両者の中間的なもの(10・13・17・18・22・27・33・34)がある。三つの形態差に含まれるものの中には大小の違いがあり、土錘として使用する（セットする）部位により、形態、大きさ、重さの使い分けをしたものであろう。

これらは総じて、胎土には1mm前後の石英粒を含むものが多い。砂粒をあまり含まないものは、器面の摩耗が著しいものが多く見受けられる。

6　瓦　（図版40、第121・122図）

平瓦1点、丸瓦5点の計6点が出土している。

1は土坑40の埋土上層から出土した平瓦である。厚さは1.5～2cmで薄い。表面は粗い布目と模骨の圧痕が残る。裏面の叩きは肉太の正格子である。端部はヘラで丁寧に面取りをしている。表面の側端部近くに紐の縛り目かと思われる痕跡が残る。1～2mmの石英粒を含み、焼成はやや軟質で灰色～黒灰色を呈する。小郡市井上薬師堂遺跡(『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』－38－1996）出土品に近似するものがある。

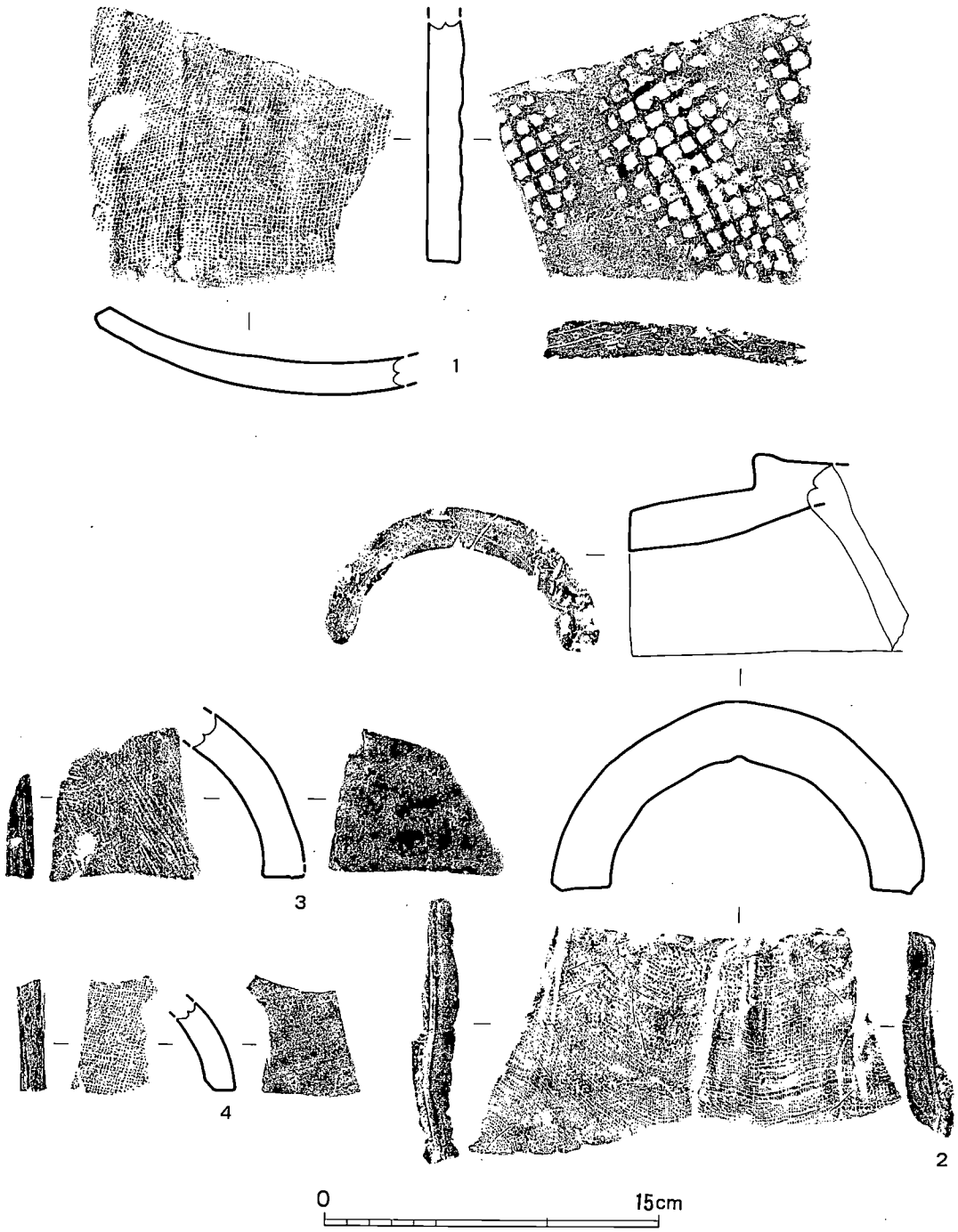
2は35号土坑の底面から25cmほど浮いて出土した。玉縁の残る大振りな丸瓦である。内面に布目が残り、外面はナデ調整を施し、各端部はヘラで面取りをしている。器面には砂粒があまり目立たず、焼成はやや軟質である。色調は、生地と内面は淡茶色、外面は橙色を呈する。

3は2とともに出土した。ともに接合するが、別途図示した。二次加熱を受けて赤変しており、カマドの煙道にでも使用されたものであろう。

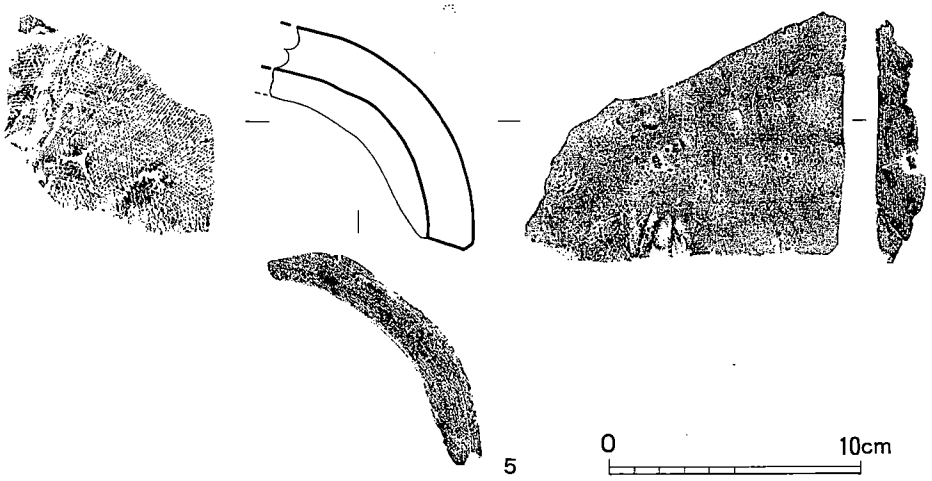
4は126号住居の南壁際の埋土中に検出した、丸瓦の小片である。他の丸瓦に比して厚みが薄く、硬質に焼き上がっている。胎土には砂粒はあまり目立たない。灰色を呈する。

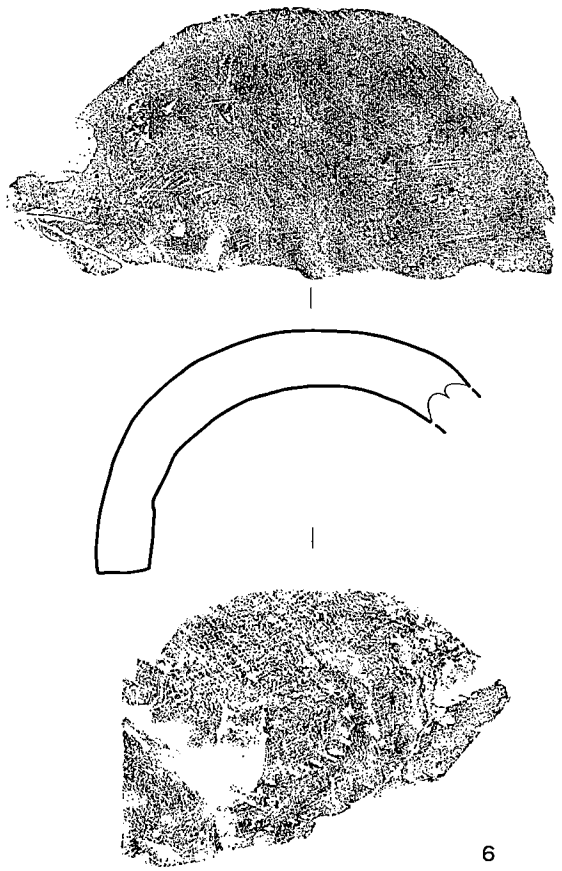
5は34号土坑埋土中から出土した丸瓦の玉縁付近の小片で、玉縁を欠く。内面には精粗二種類の布目及び、それらをつなぎあわせていた紐の圧痕が見られる。側端部は丁寧にヘラで面取りされる。焼成良好で硬質であり、暗灰色を呈する。

6はD区市道の表土から出土した丸瓦の破片である。厚手の大振りなものである。内面の布目は風化している。内外面、割れ面は二次加熱により赤変している。外面には一部に煤が付着する。カマドの煙道にでも使用されたものであろう。側端部は切り離したままである。砂粒はあまり含まず、焼成はやや軟質で、生地は淡い茶灰色を呈する。

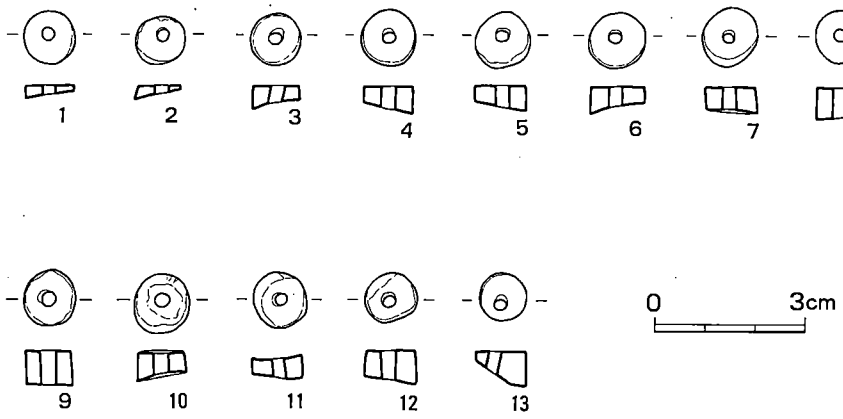


第121図　瓦実測図①（1/3）





第122図　瓦実測図②（1/3）



第123図　臼玉実測図（2/3）

7　臼　玉　（図版40、第123図）

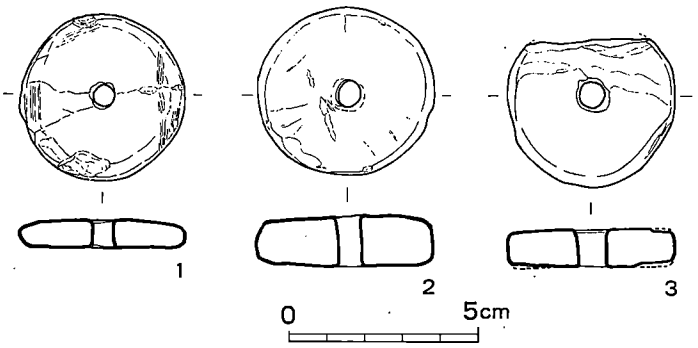
181号住居の覆土中から13個の臼玉が出土している。蛇紋岩製である。外径は10～11㎜、孔径は2㎜前後である。つくりは粗く、石材を切り離したままで研磨の痕跡はない。厚さも一定せず、形状も様々である。

8　紡錘車　（図版40、第124図）

3個出土した。

1は146号住居の貼床下層からの出土品である。割れて出土したが、外径44㎜、孔径5㎜、厚さ7㎜で、周縁部が薄い。蛇紋岩製である。重量は17.2gである。

2は1号溝埋土上面から出土した。



第124図　紡錘車実測図（1/2）

外径44～46㎜、孔径6㎜、厚さ13㎜である。蛇紋岩製である。重量は45.4gである。

3は、189号住居の貼床下層から出土した。1/4ほどを欠失するがおよその形状を知ることができる。外径45㎜、孔径7㎜、厚さ10㎜ほどである。雲母片岩製である。重量は22.4gである。

9　砥　石　（図版40・41、第125図）

仕上砥～粗砥、15点が出土している。遺構別に記せば、以下のようである。

①126号住居－13	⑦179号住居－ 8
②136号住居－ 4	⑧190号住居－10
③145号住居－ 2 ・11	⑨202号住居－ 6
④148号住居－15	⑩30Ｂ号土坑－ 1
⑤161号住居－ 3 ・12	⑪32号土坑－ 9 ・14
⑥167号住居－ 7	⑫35号土坑－ 5

次に仕上砥のうち、凝灰岩製は1～5・7・9、砂岩製は6・15である。粗砥は8・11・13(砂岩製)であり、他は両者の中間的なものである。なお、3・12は5世紀代の住居からの出土品である。

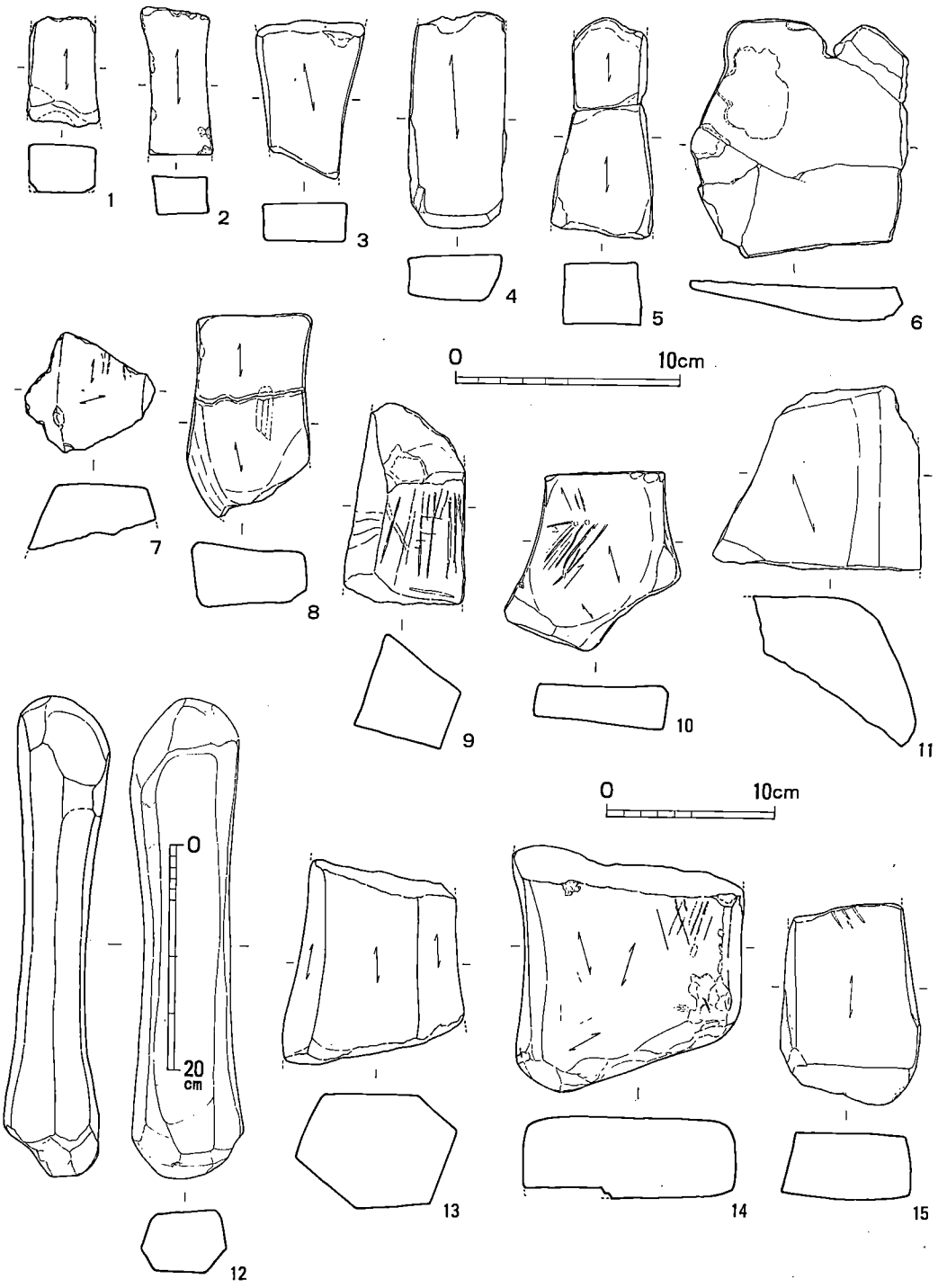
10　石製支脚　（図版41、第126図）

3点出土している。

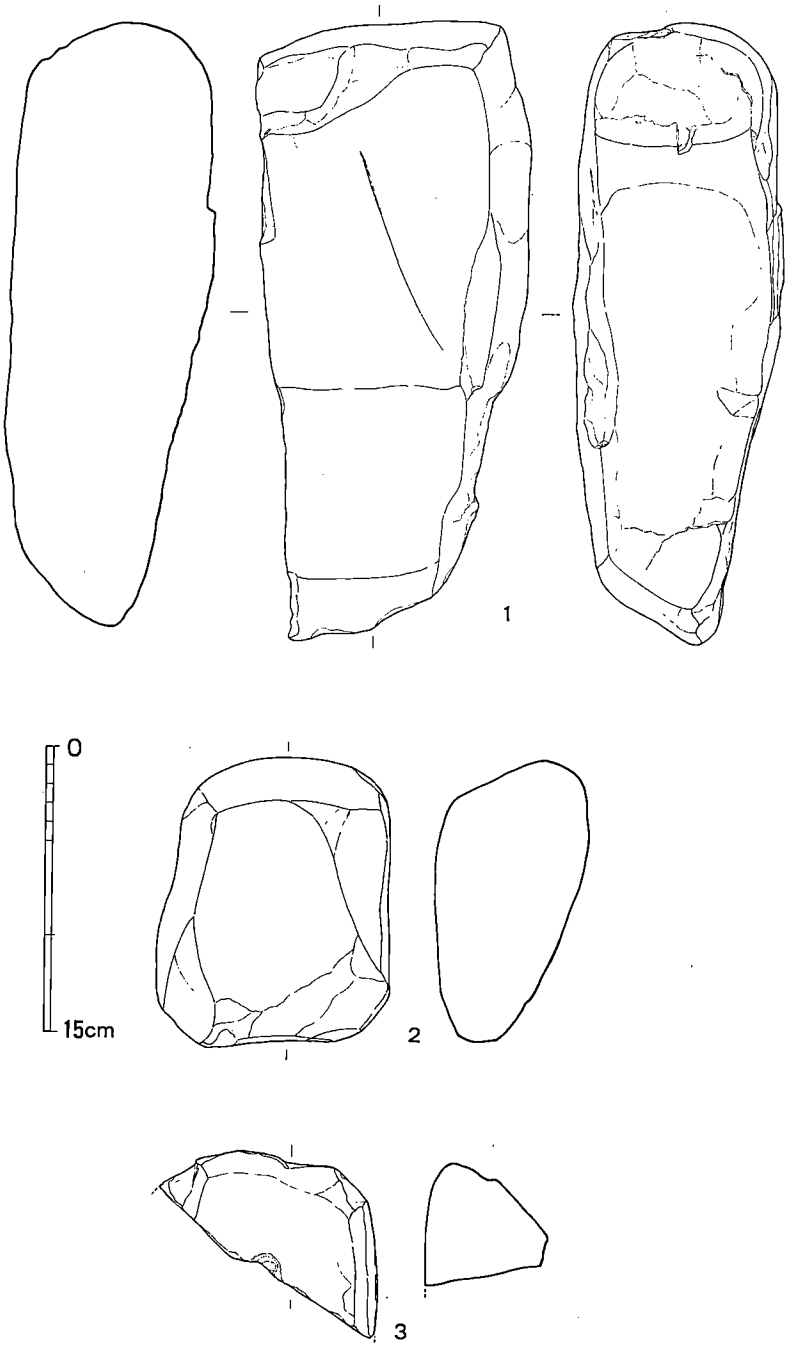
1は191号住居のカマドに使用されていた支脚で、天地32.4㎝で、そのうち13㎝ほどが埋まっており、その上は熱を受けて変色し煤が付着している。図の右側が焚き口に向いていた。本村落では、支脚に小型の甕を倒立させて使用する例が大半であり、石製支脚は使用例は少ない。石材は緑泥片岩の自然石で、適当に割って支脚としている。

2は199号住居のカマドの火床面から5㎝ほど浮いた状態で検出した。砂岩製の支脚片で、加熱され、非常にもろくなっている。本支脚が出土した199号住居の説明の中で、武田光正氏は、「支脚として使用された後に除去されたと考えられる。カマド祭祀行為の一つと考えらている。」(本報告86頁）とされる。

3は32号土坑埋土中から出土した砂岩製のものである。2と同様に加熱され、変色してもろくなっているので、支脚であろうと推測する。



第125図　砥石実測図（1/3-1～5・7・9・15、1/4-6・8・10・11・13・14、1/6-12）



第126図　石製支脚実測図(1/4)

11　鉄製品　（図版42・43、第127～129図）

刀　子　(1～20)　刀子であろうと考えて図示したものが20点で破片が多い。錆膨れしたもの（10・12・14・15)、形状が異質なもの(17)、茎が幅広いか厚いもの(16・18～20）などを含み、果たして刀子として良いか否か自信のないものも含まれるが、一応、刀子として一括して説明することとする。出土品を遺構別に記せば次のようである。

①114号住居－2　　⑦190号住居－4
②123号住居－10　　⑧191号住居－3・6・16・18・20
③125号住居－12　　⑨209号住居－15
④129号住居－14　　⑩211号住居－7
⑤161号住居－13　　⑪35号土坑－1・5・8・9・11
⑥165号住居－17・19

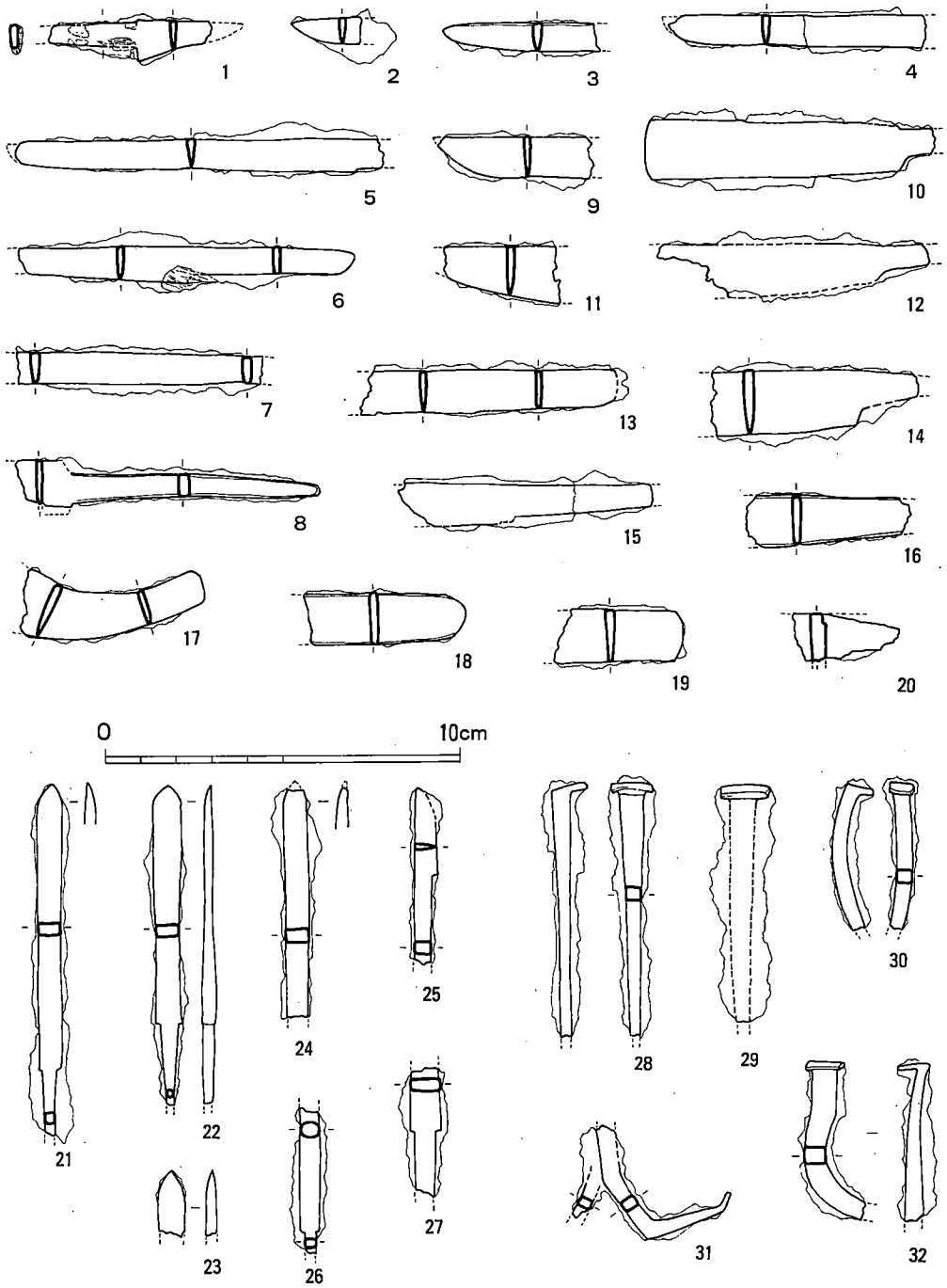
関の形状と身幅から、1～8は細身の刀子と考えられる資料である。1は研ぎべりしている。関部で身幅1.2cm、現存全長4.6cmである。2～5は身幅1cm未満で、各々現存長2；2cm、3；4.5cm、4；7.3cm、5は錆で不明ながら関があるように見え、現存長10.3cmである。6・8・9は身幅が1cmをやや超える。6は関部に藁が錆着している。長さ4.7cmの茎が完存し、現存長9.1cmである。8は両関で、長さ7cmの茎が完存し、現存長8.6cmである。7は錆のため不明だが、刃部を明瞭に認め難い。幅0.9cm、現存長7cmである。9は現存長4.2cmである。11は刃部の破片で、身幅・現存長は、1.6cm・3.1cmある。10・12・15は錆がひどく詳細が不明で、刀子だろうと推測して図示した。13・14も錆のため不正確だが、わずかな関がつくと思われ13は現存長7.4cm、14は5.8cmである。16・18～20は茎の破片である。17は湾曲しており、刀子とは別の道具かも知れない。関も認められず、錆で不明確ながら刃部を作っているように見受けられる。

鉄鏃及び釘　(21～50)　図示した中で鉄鏃の茎か釘か不明なものを含んでいる。明らかに釘と思われるもの（28～32）以外は鉄鏃とした。しかし、釘が何に使用されたか知れる遺構は、木棺墓（来年度報告）しかないのが現状である。

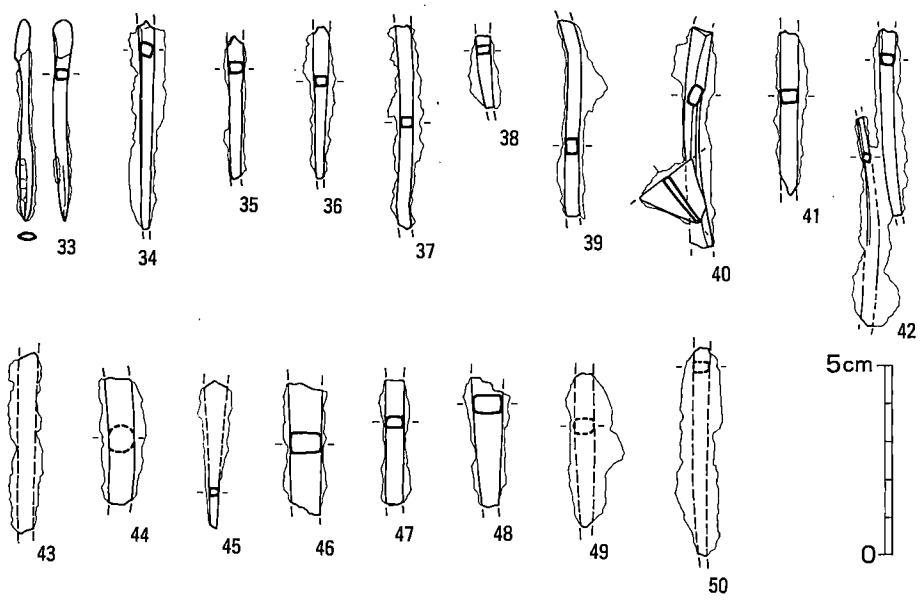
鉄鏃のうち22～24は同一形式のもので、身の長さは22；8.1cm、23；6.6cmである。25は錆のため不詳であるため、推定復原図である。

鎌　(40・51～55)　図上で完形品になるのは51～53であるが、54・55も鎌の破片で、柄を装着する折り返しが左側についている。40は鉄鏃かと思われる茎に錆着した刃部の小破片である。完形品のみ寸法（全長・身幅）を記すと、51；20.5cm・2cm、52；20cm・2.3cm、53；17.4cm・2cmで、51・52は刃部中央が研ぎべりしている。

馬銜？　(57)　189号住居の貼床面下層から出土した。図上で、馬銜であろうと推測する破片である。



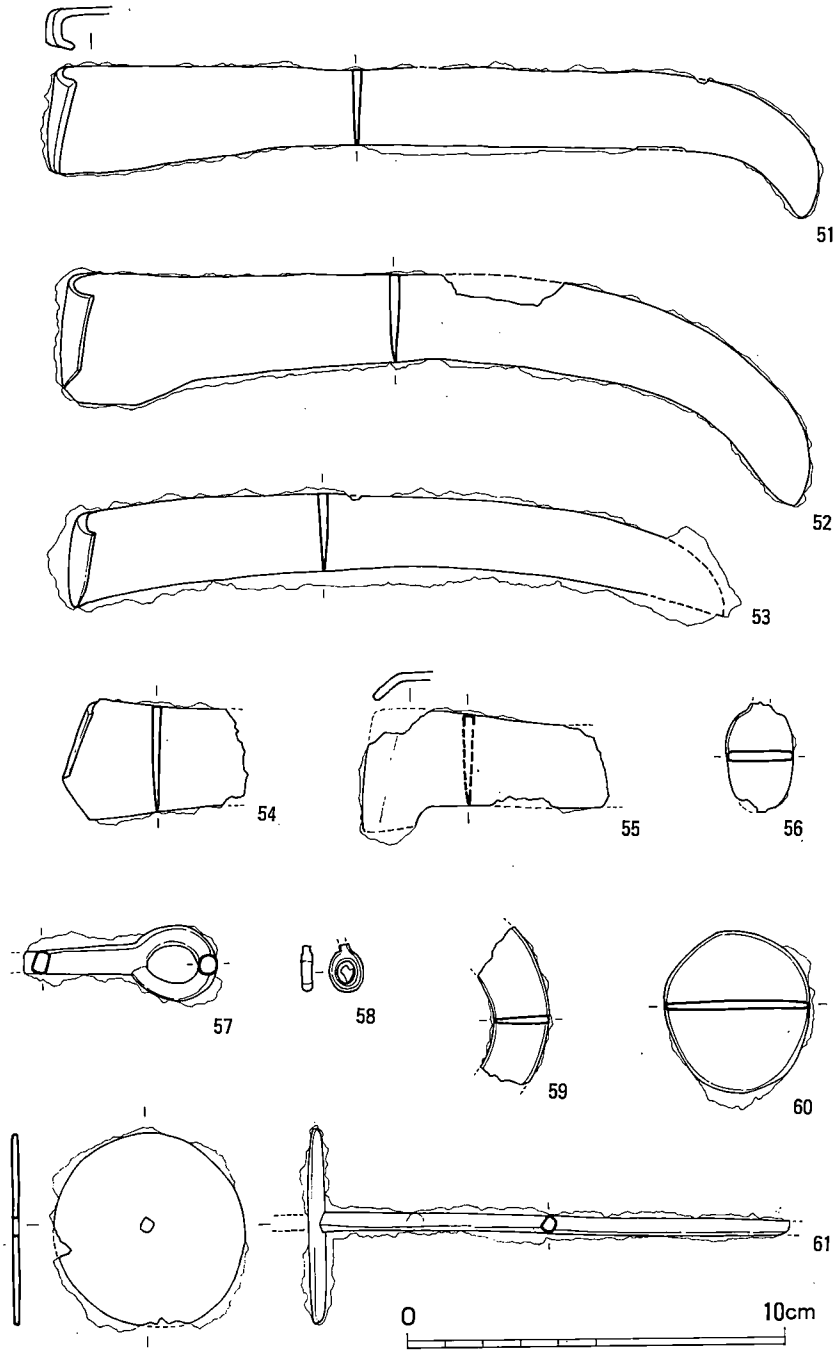
第127図　鉄製品実測図①(1/2)



第128図　鉄製品実測図②(1/2)

紡錘車　(61)　128号住居から出土したもので、直径5～5.5cm、厚さ2mmほどの不整円板状の中心に断面が3×4mmほどの方形の軸を通している。軸の一方を欠失するが、12.3cmほどが残存している。

不明鉄製品　(56・58～60)　191号住居から出土した56は長径2.9cm、短径1.3cm、厚さ2mmほどのもので、図の上端部に欠損部があり、さらに幅4mmほどの茎状のものがあったと思われる。58は126号住居から出土し、外径8～10mmの鉄鐶状の長径の外側に直径2mmほどの棒状のものがついている。用途不明である。59・60は35号土坑から出土した。59は厚さ2mmほどで、円弧を描く内側を薄く作る。60は長径4.3cm、短径3.4cm、厚さ2mmほどの円板状のものである。用途は不明である。



第129図　鉄製品実測図③(1/2)

第3章　おわりに

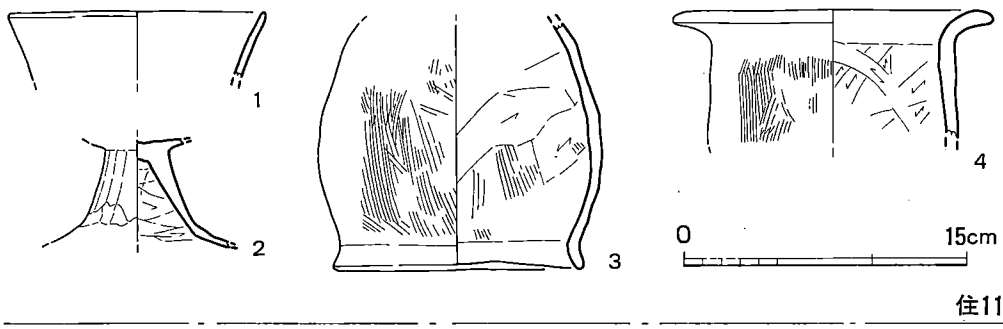
今回は、101軒の竪穴住居跡(113～213号)、52棟の掘立柱建物跡（60～111号)、１基の井戸、３基のおとし穴(１～３号)、25基の土坑(23～47号)、１基の方形溝状遺構、９基の土壙墓とした遺構(１～９号）と３条の溝(６～８号)、及び出土遺物を報告した。

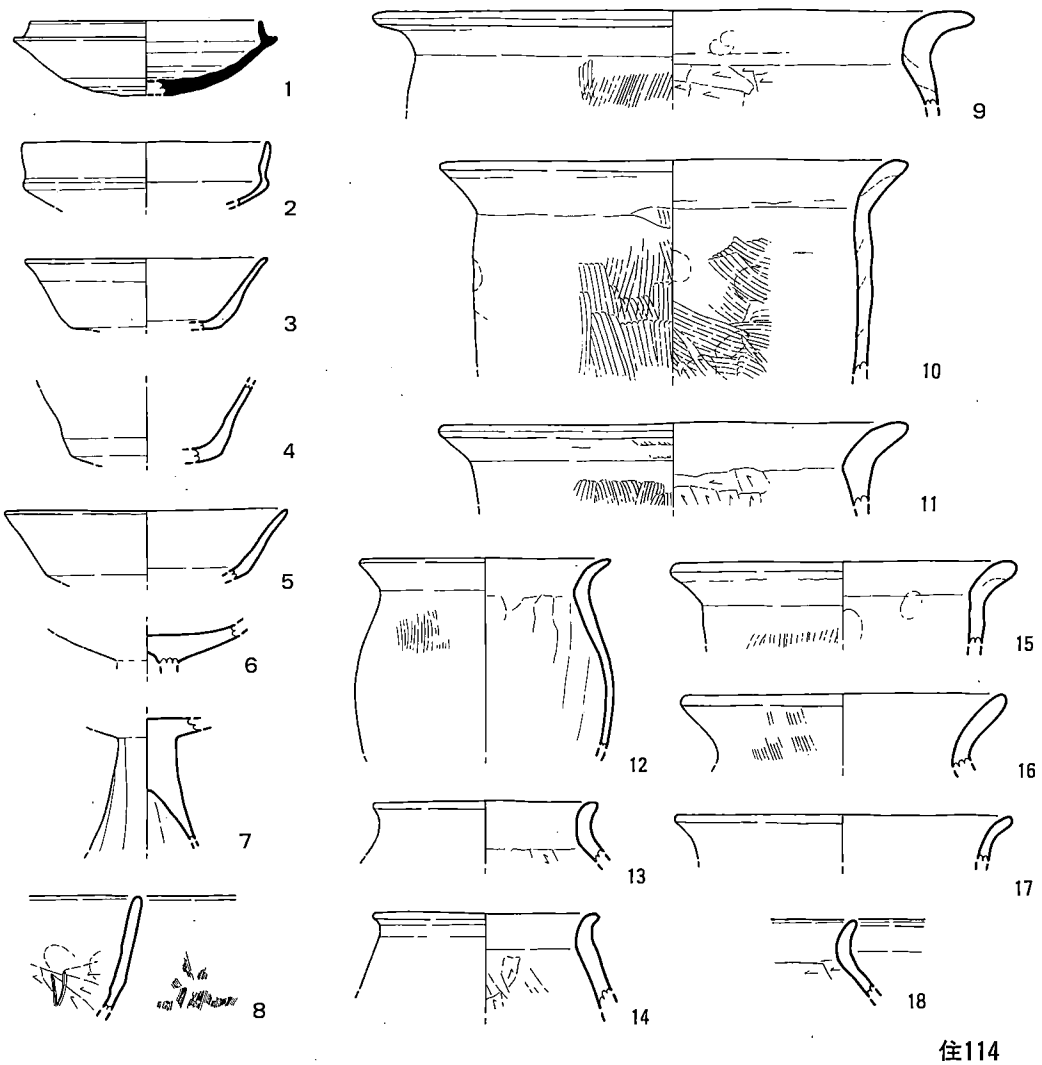
特に竪穴住居跡及び掘立柱建物跡は、各遺構の細部について多彩な問題点を含んでいる。たとえば、竪穴住居跡については、カマドの構造及び祭祀、床面上に検出される粘土、竪穴部内の柱配置や空間、貼床面下層遺構の由来、竪穴部と家屋の構造との関係等々がある。これらについては、武田光正氏が立野遺跡(『九州横断自動車道埋蔵文化財調査報告』－８－1986)や先の宮原遺跡遺跡の報告(『九州横断自動車道埋蔵文化財調査報告』－17－1990)でその都度まとめられているが、今回は事実報告のみにとどめざるを得ず、来年度に持ち越すこととした。掘立柱建物跡についても、細部の検討や統計的処理は行っておらず、同様に来年度に持ち越した。

出土遺物については、転用硯、墨書土器、刻印土器など奈良時代の通常の村落遺跡からはあまり出土しないものが、ある程度まとまった量で出土している。これについても事実報告のみにとどめた。

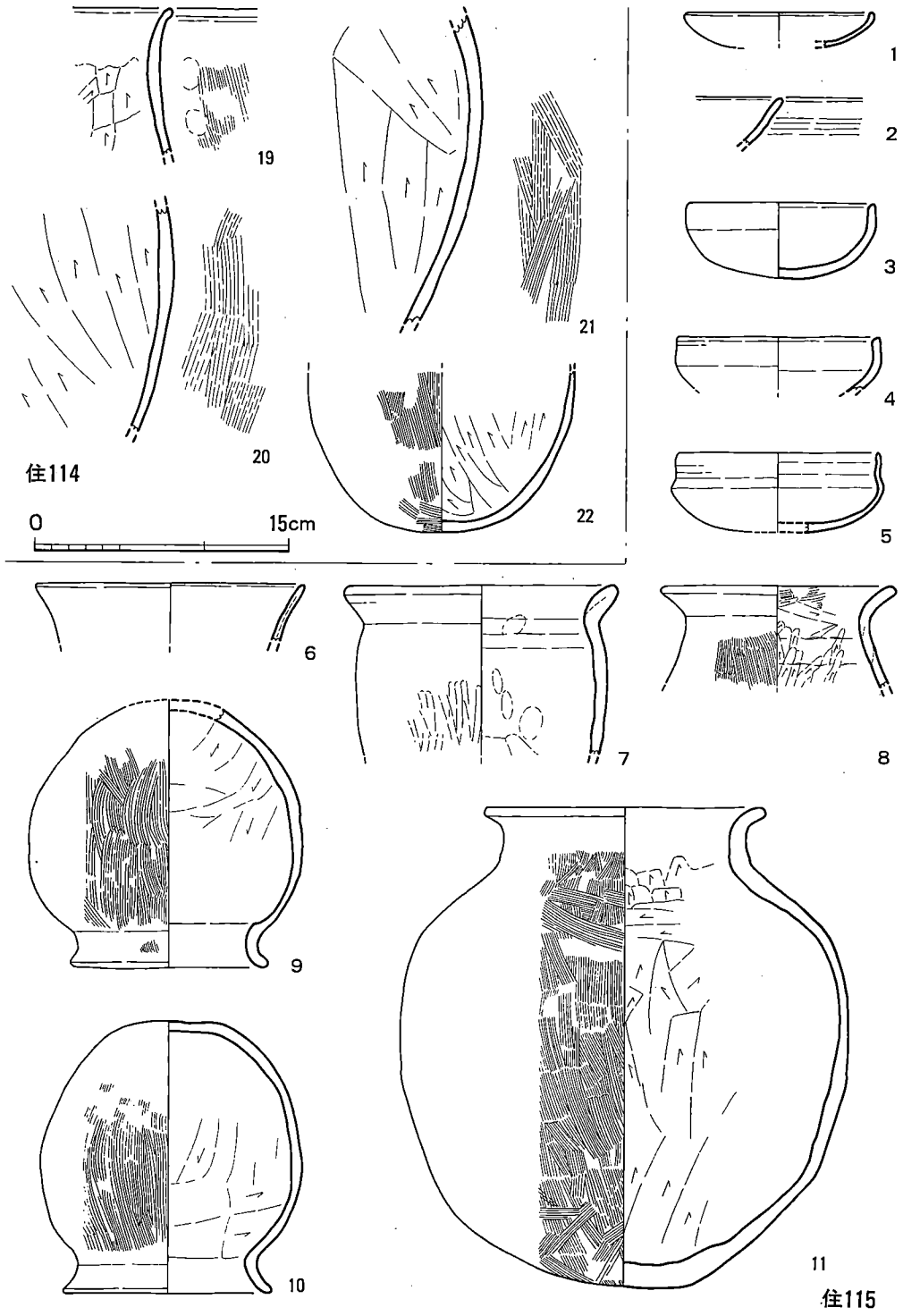
このように、事実報告のみにせざるを得なかったのは、ひとえに、編集者の責任であり、おわびするとともに、来年度の報告で、宮原遺跡のまとめをする予定である。

最後に、いつものことながら、この報告書も多くの方々の援助をいただいて刊行することができた。その方々に、心から御礼申し上げます。

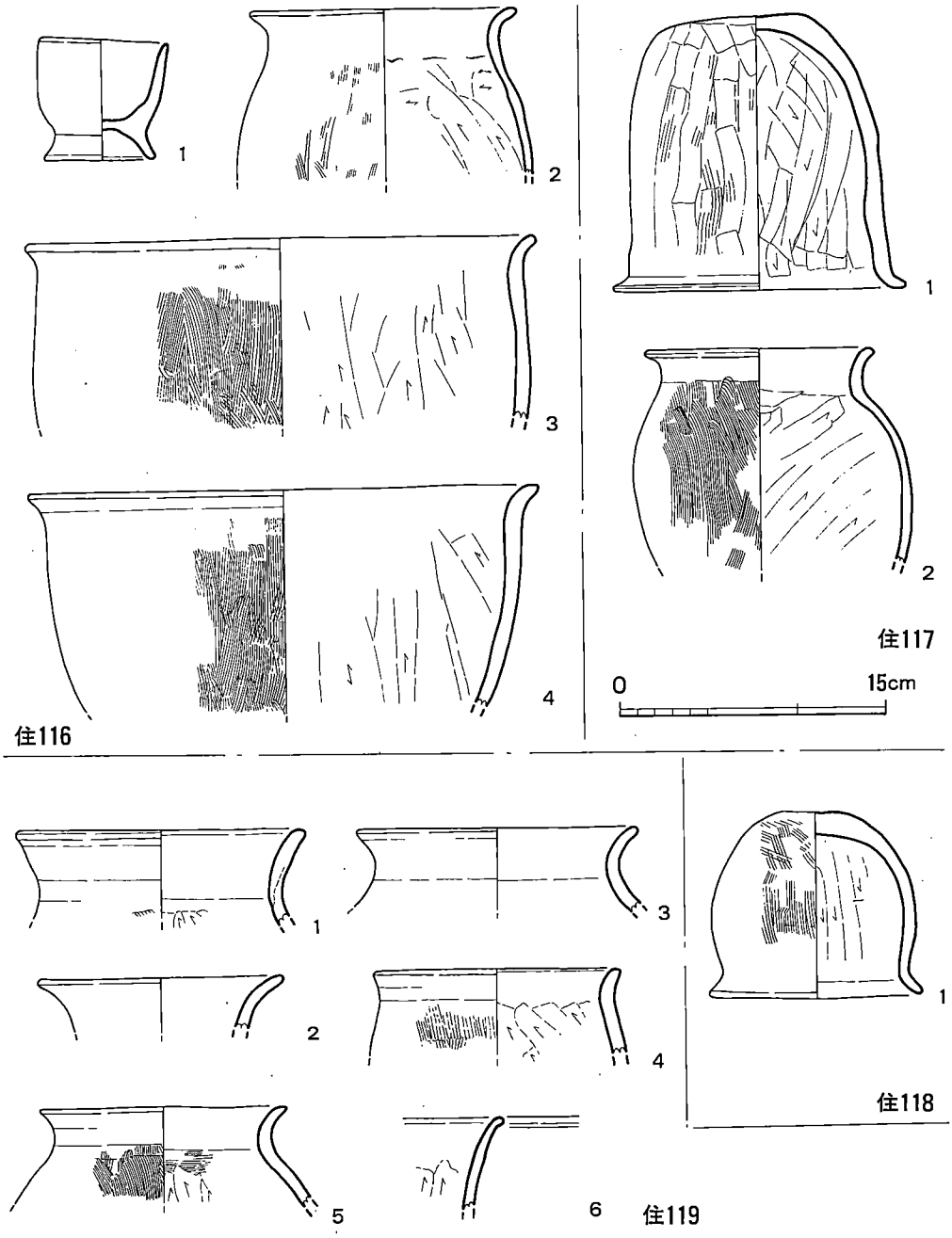




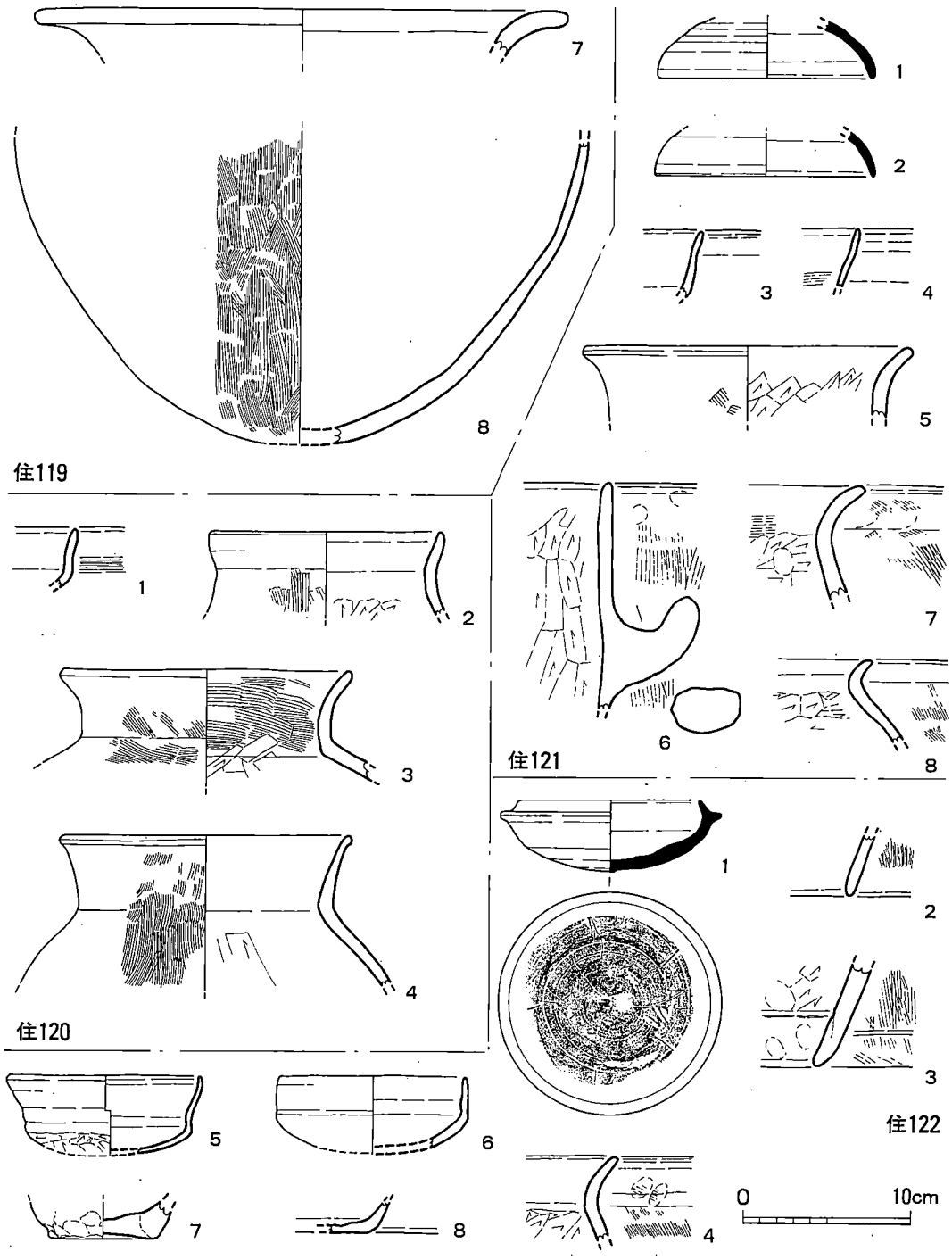
第130図　113・114号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



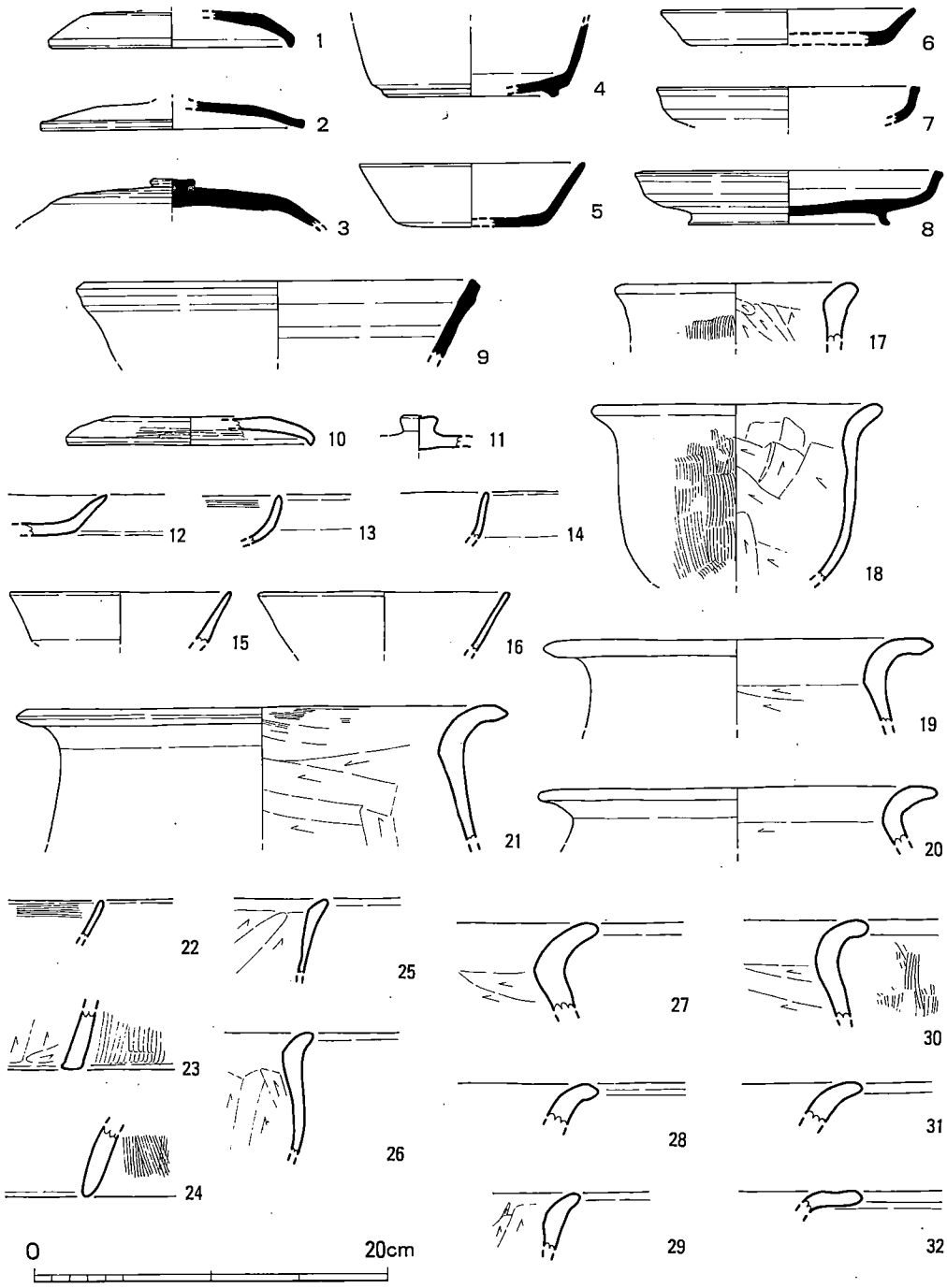
第131図　114・115号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



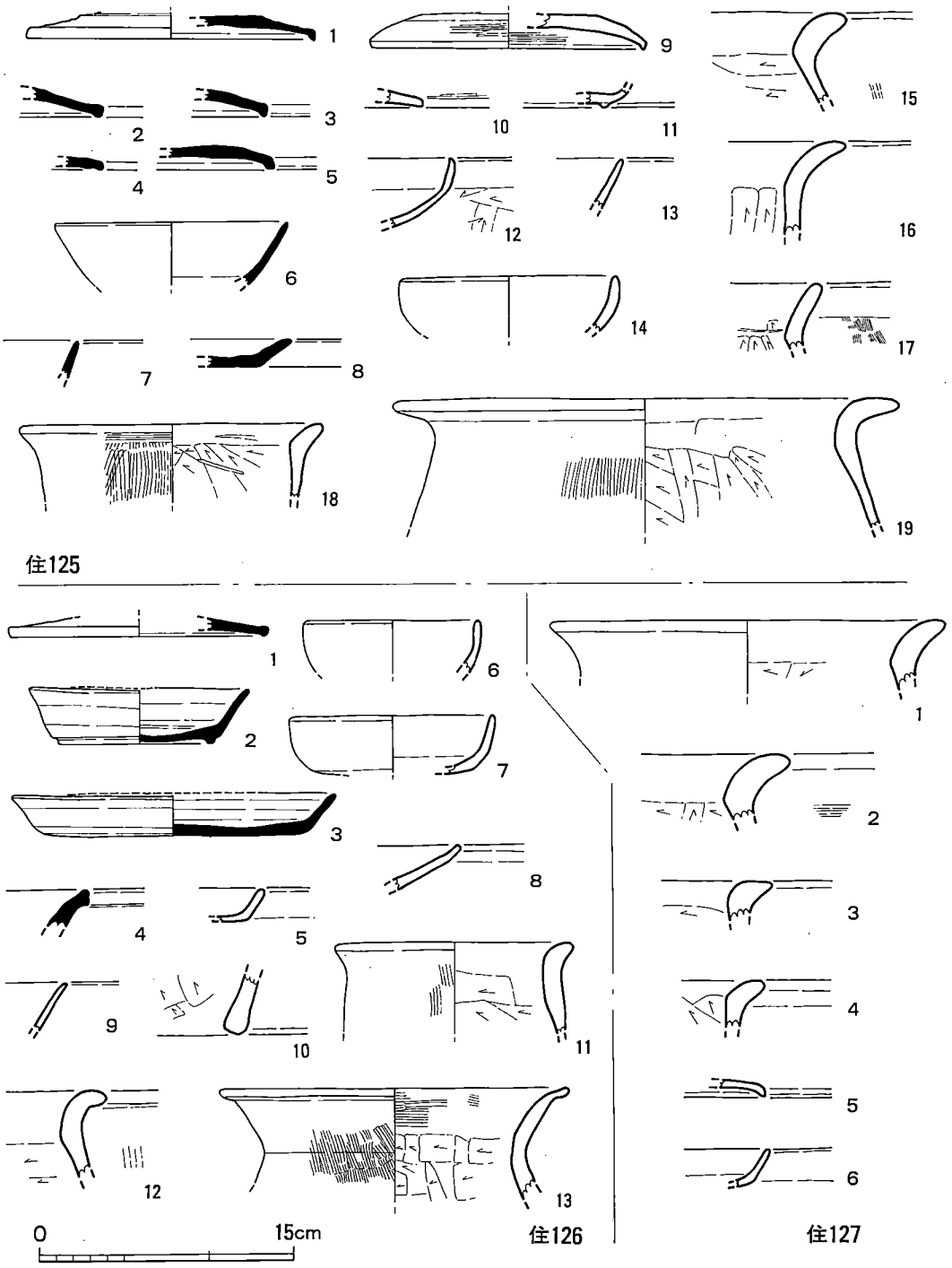
第132図　116～119号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



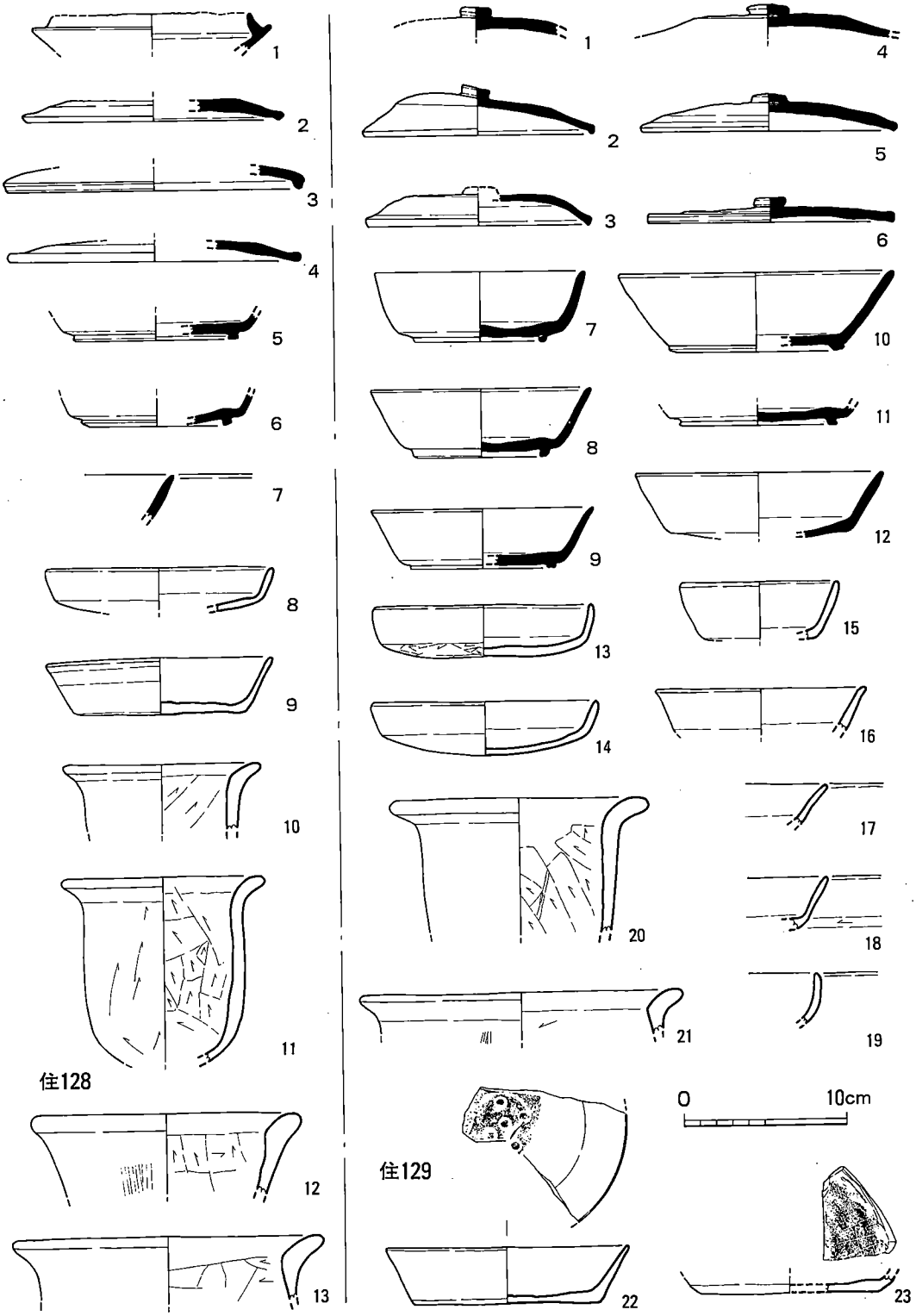
第133図　119～122号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



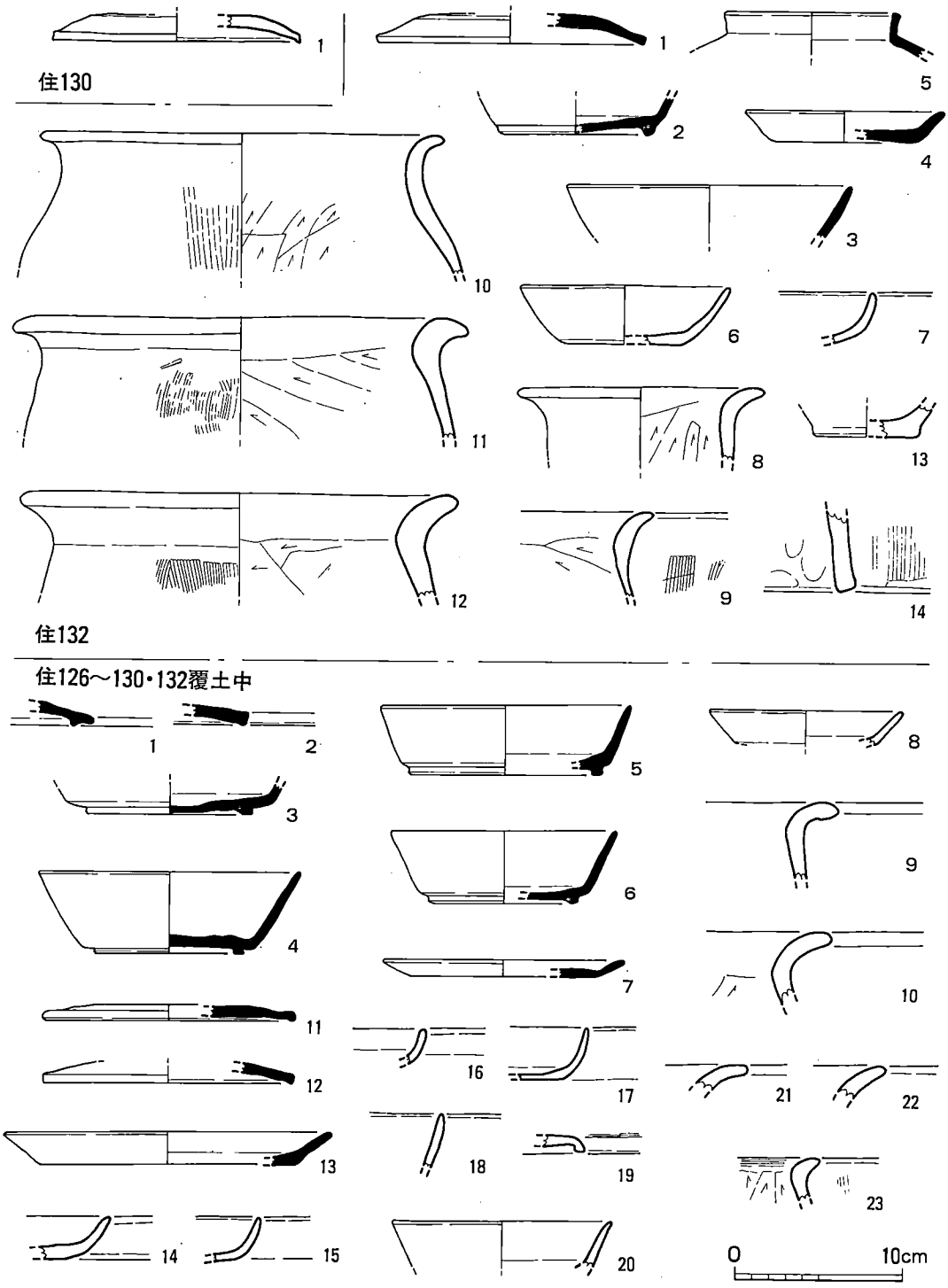
第134図　124号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



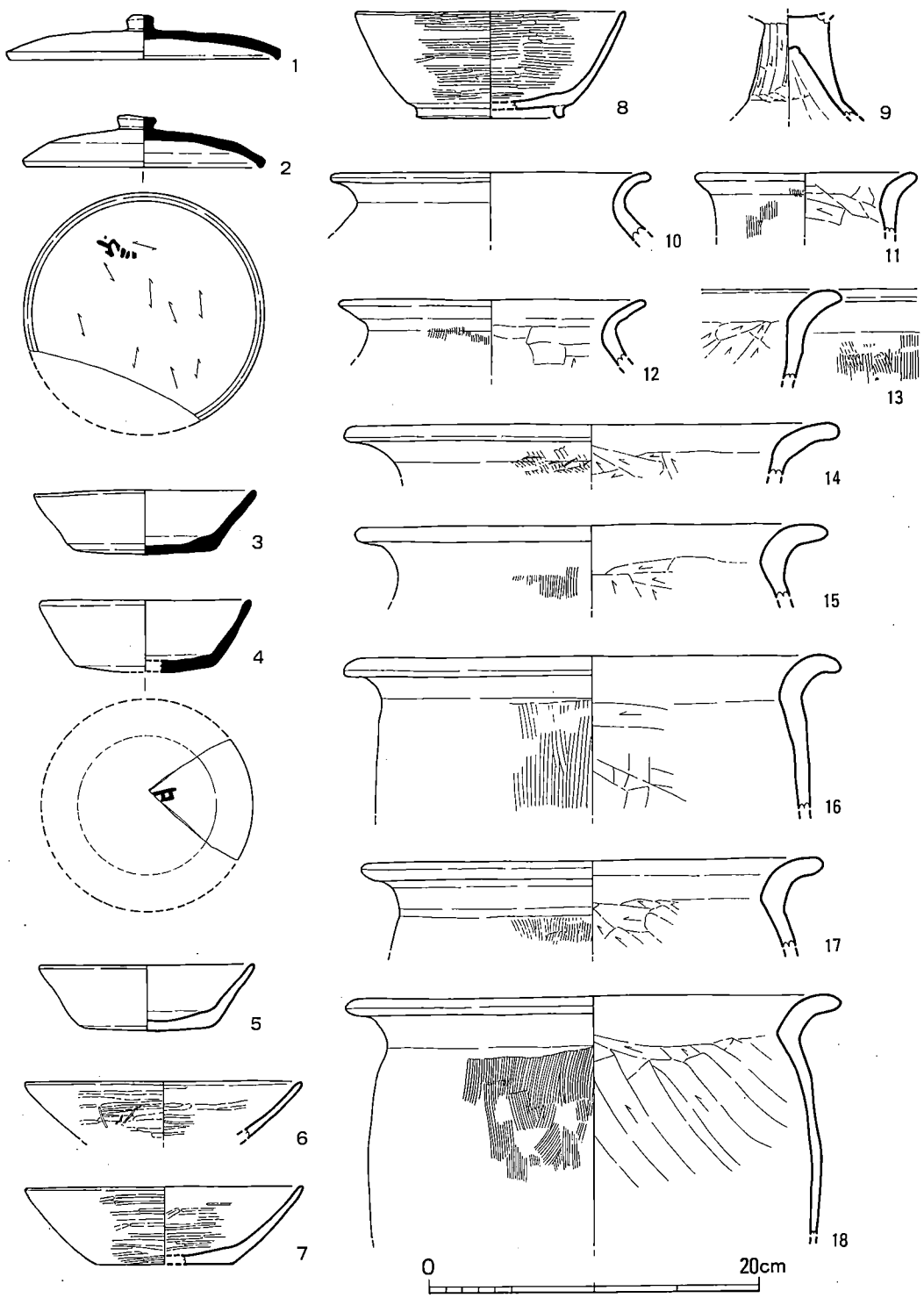
第135図　125～127号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



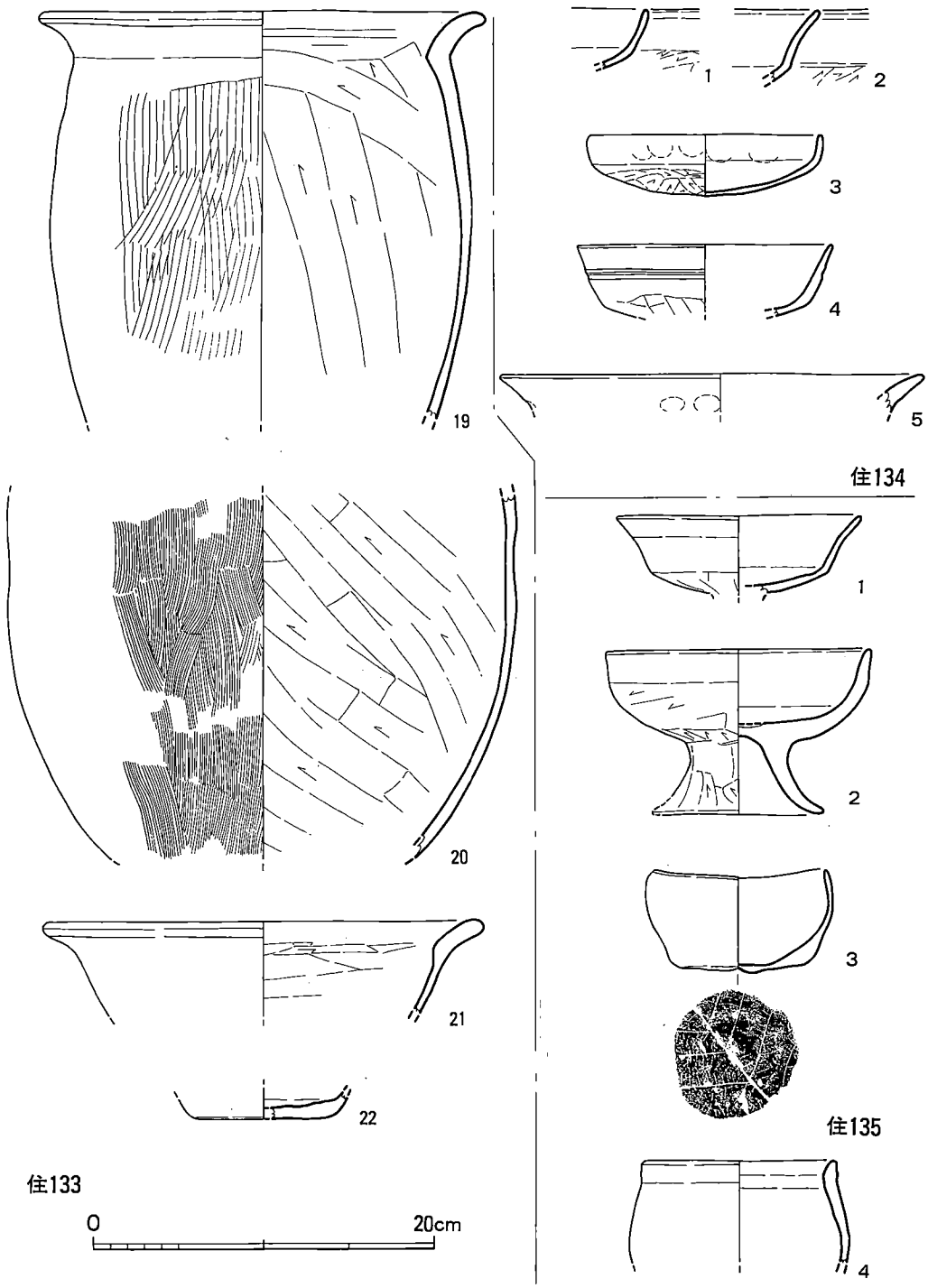
第136図　128・129号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



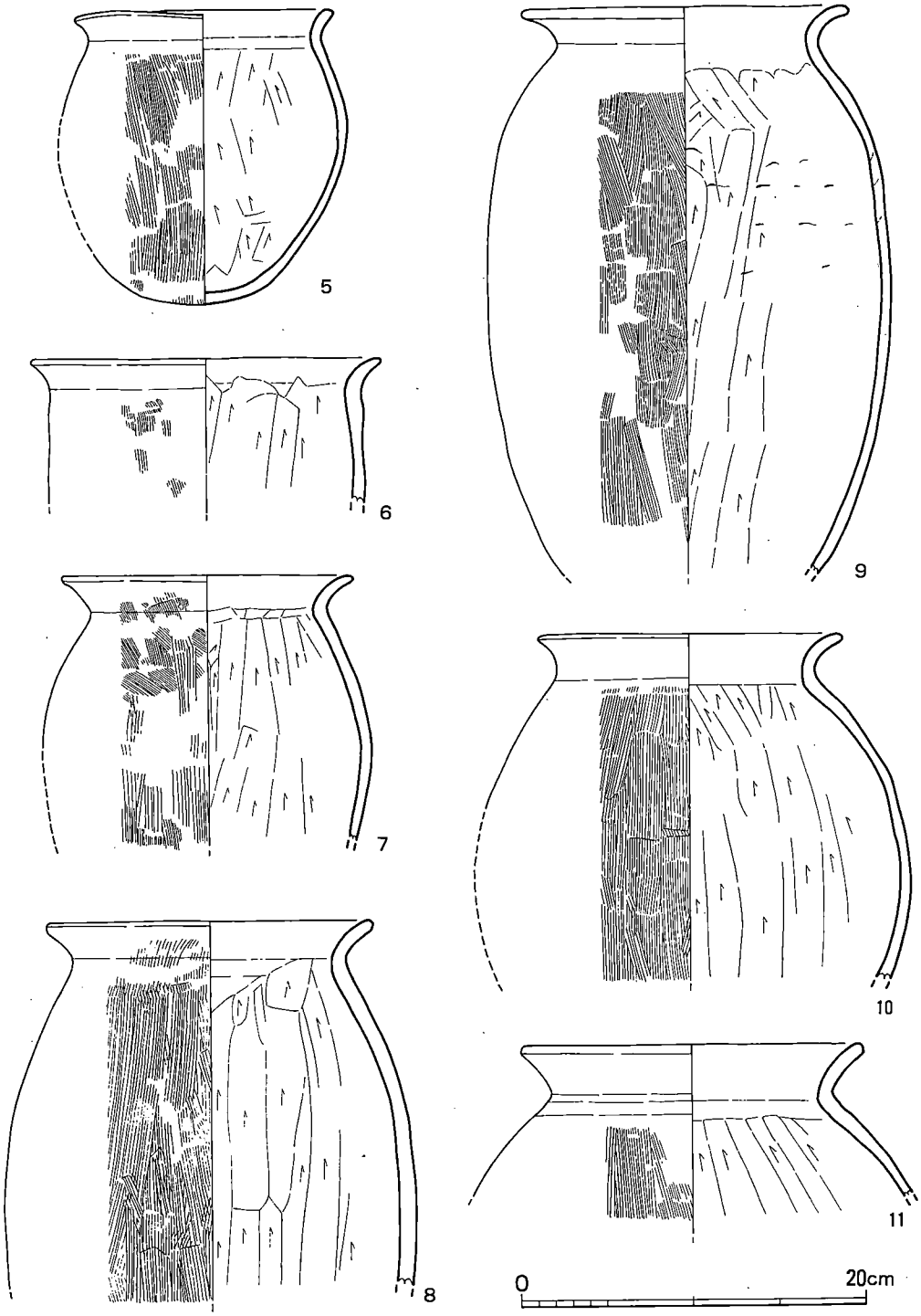
第137図　130・132、126～130・132 号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



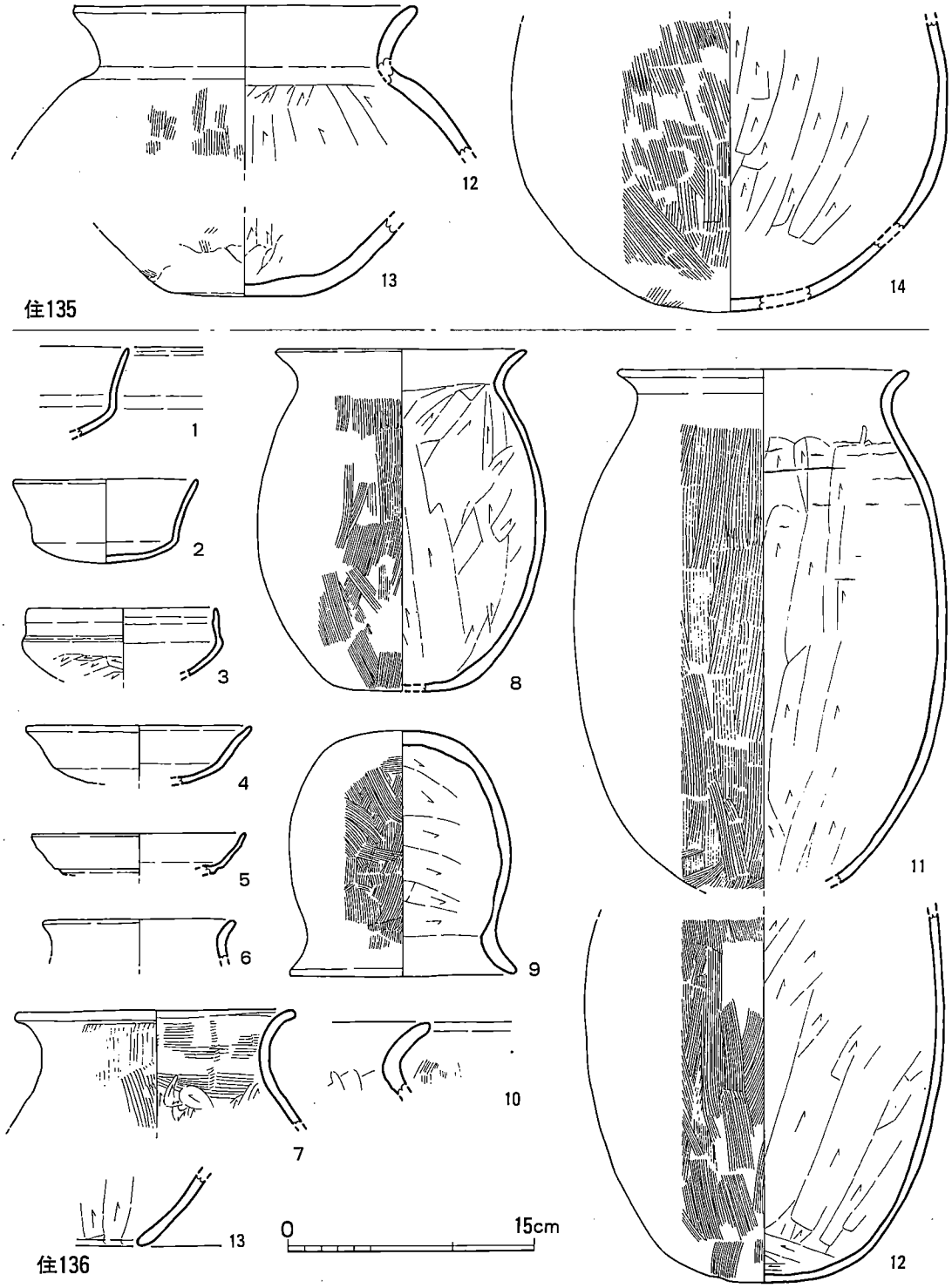
第138図　133号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



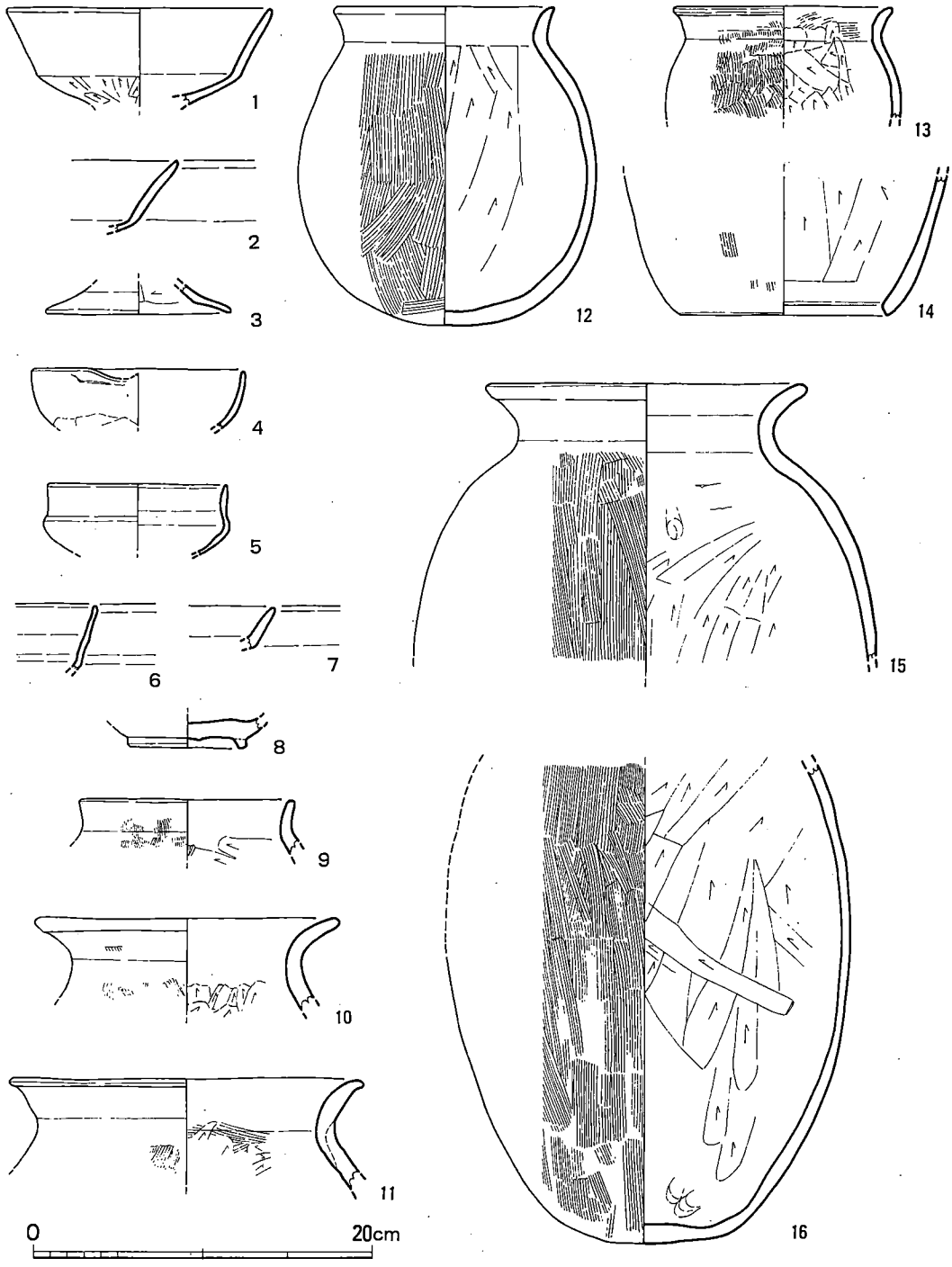
第139図　133～135号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



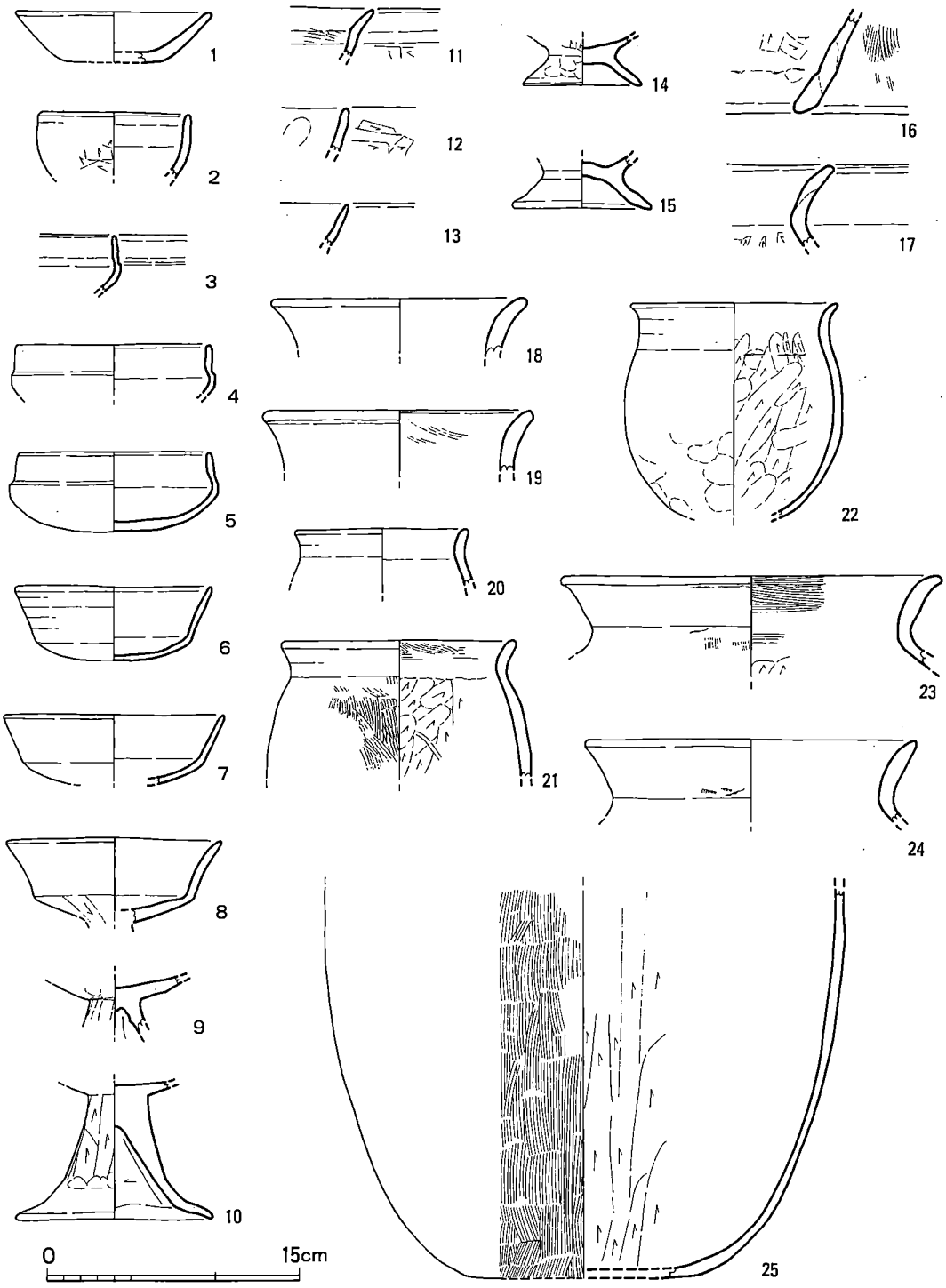
第140図　135号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



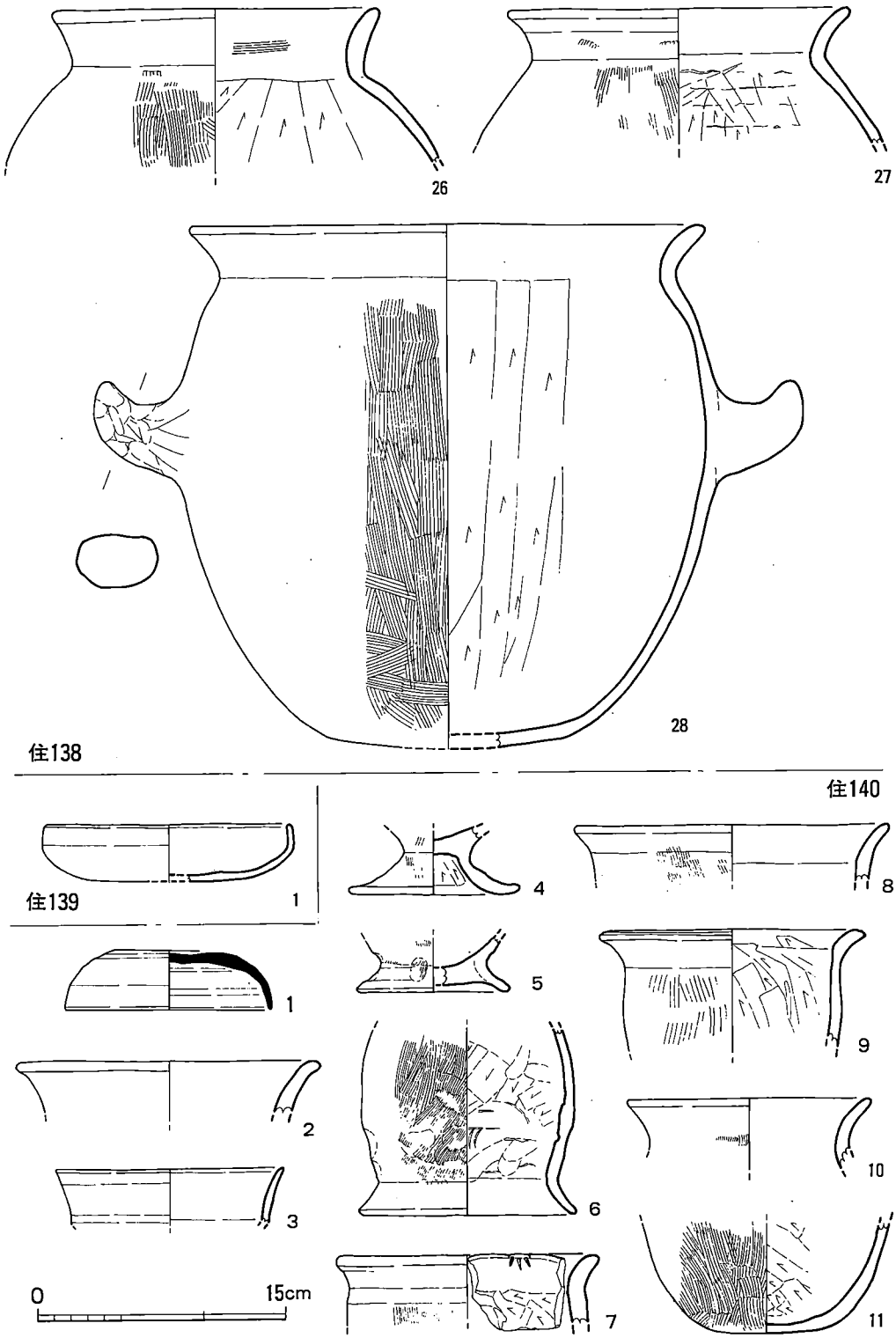
第141図　135・136号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



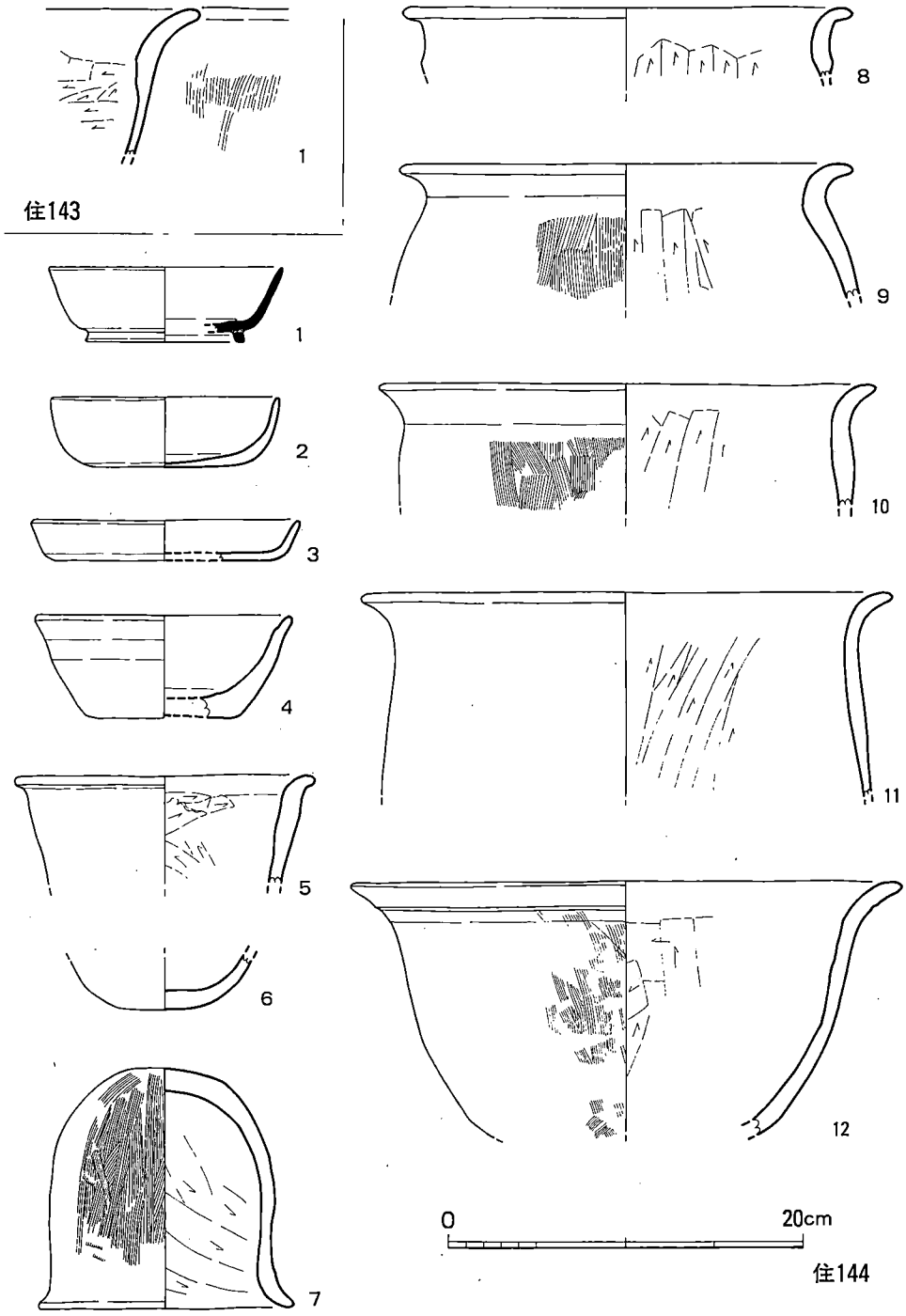
第142図　137号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



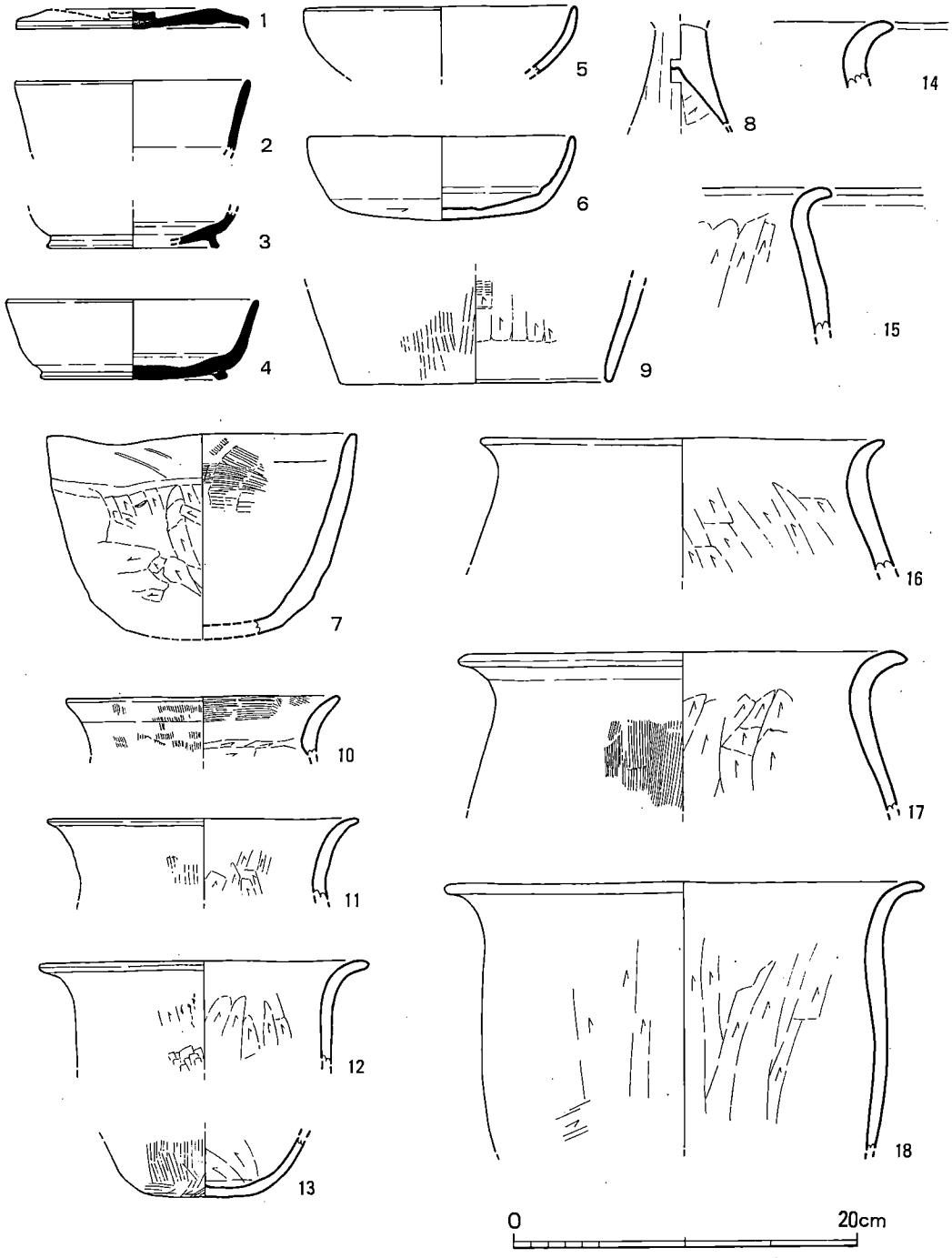
第143図　138号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



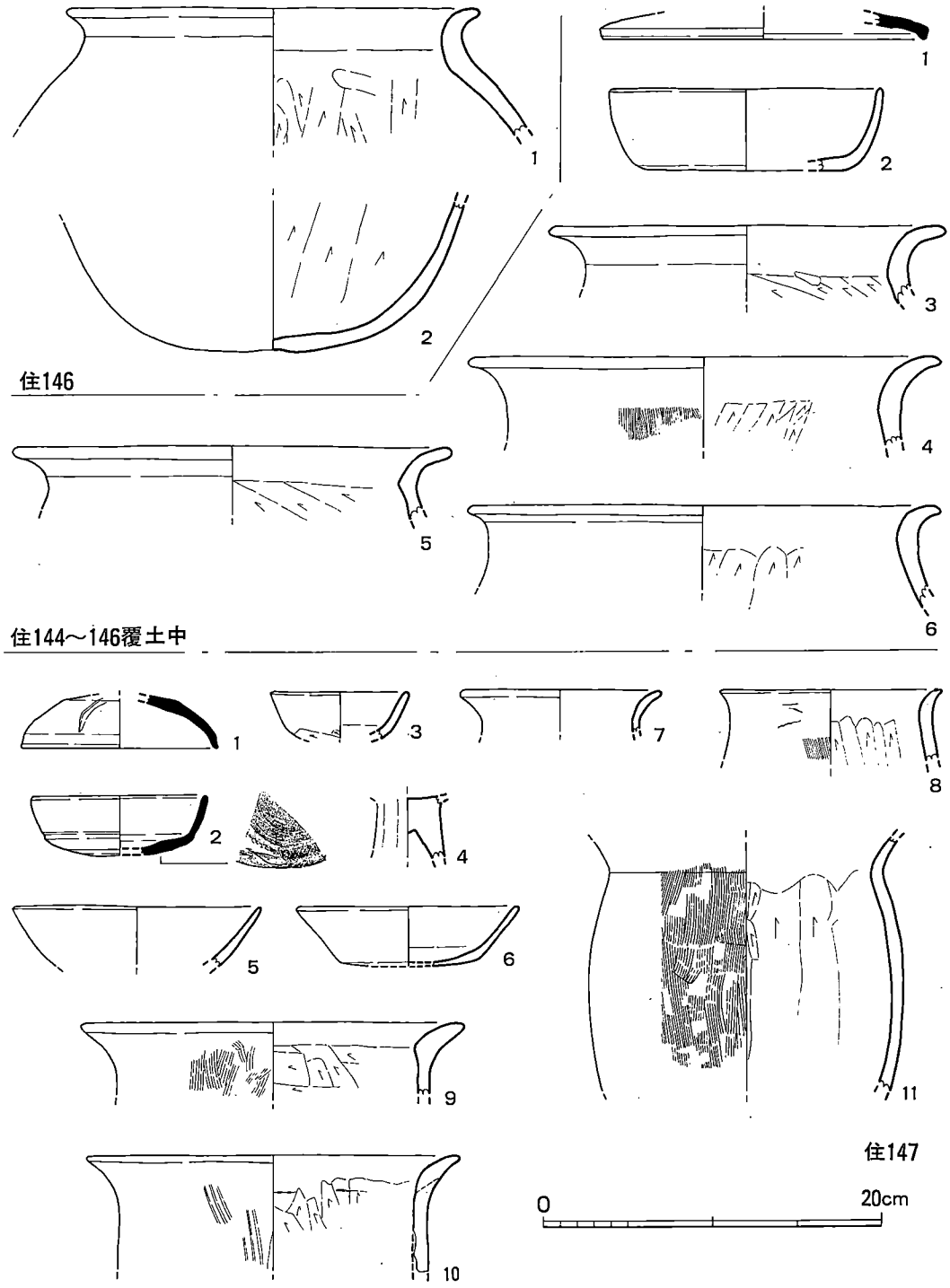
第144図　138～140号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



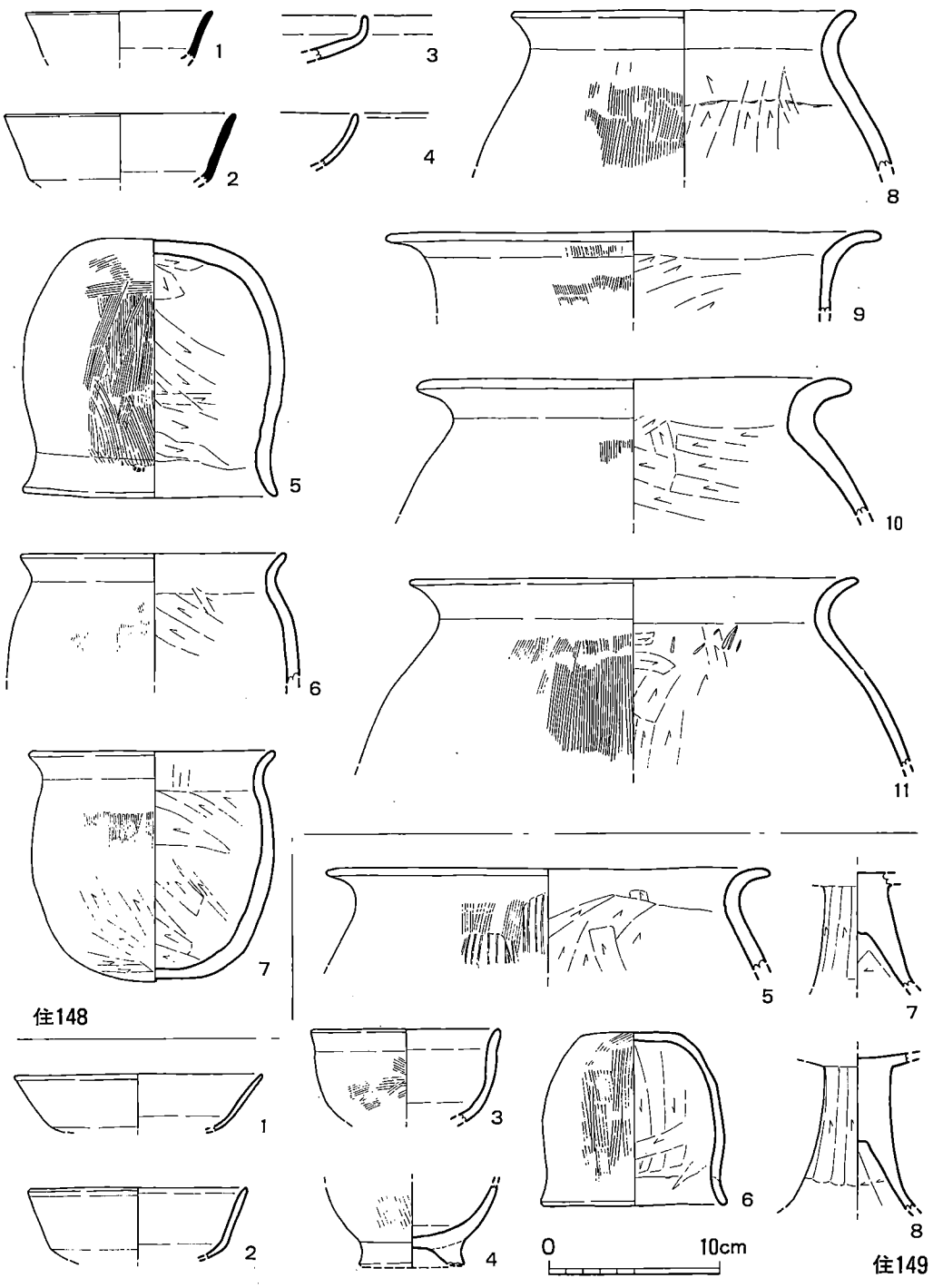
第145図　143・144号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



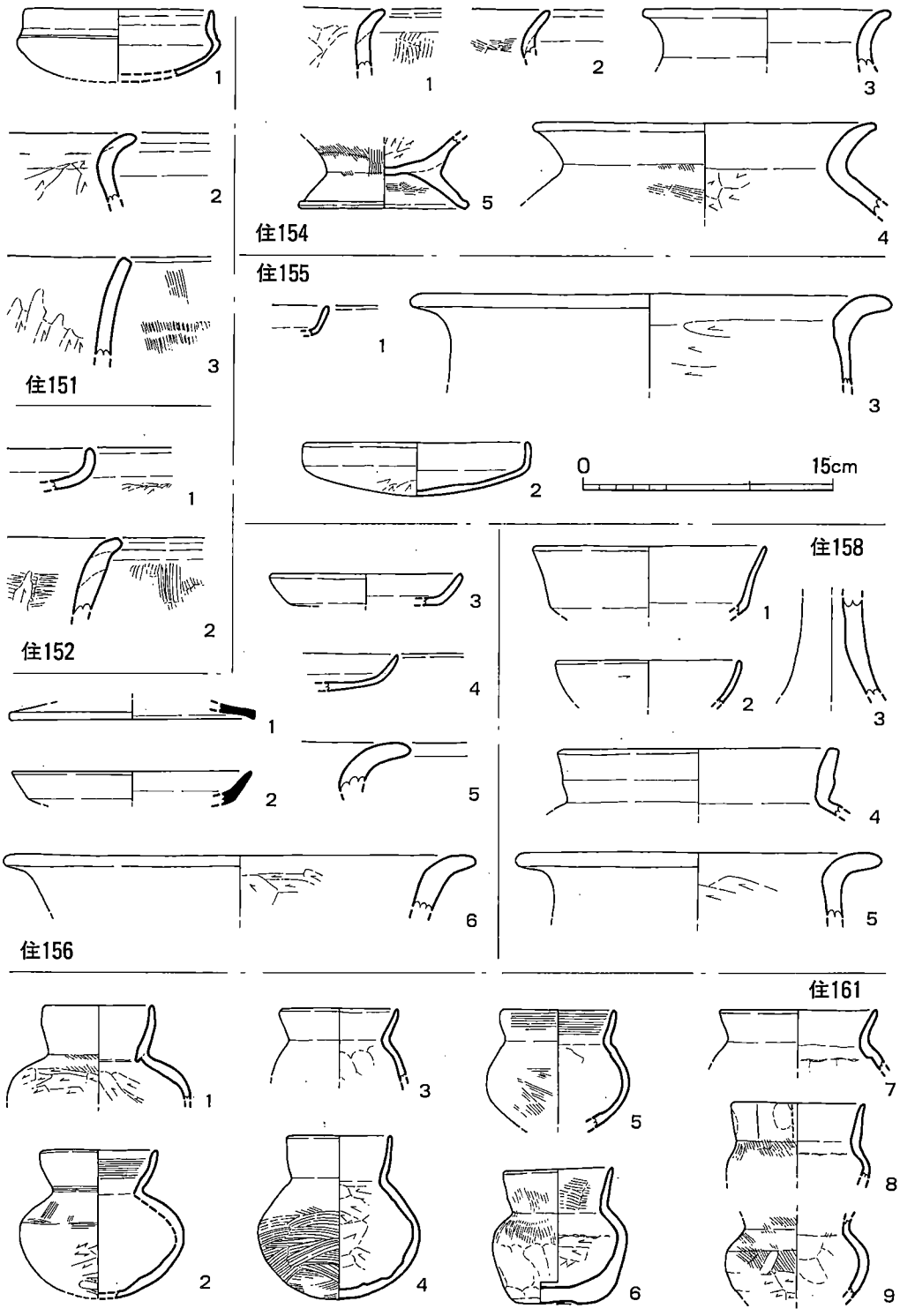
第146図　145号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



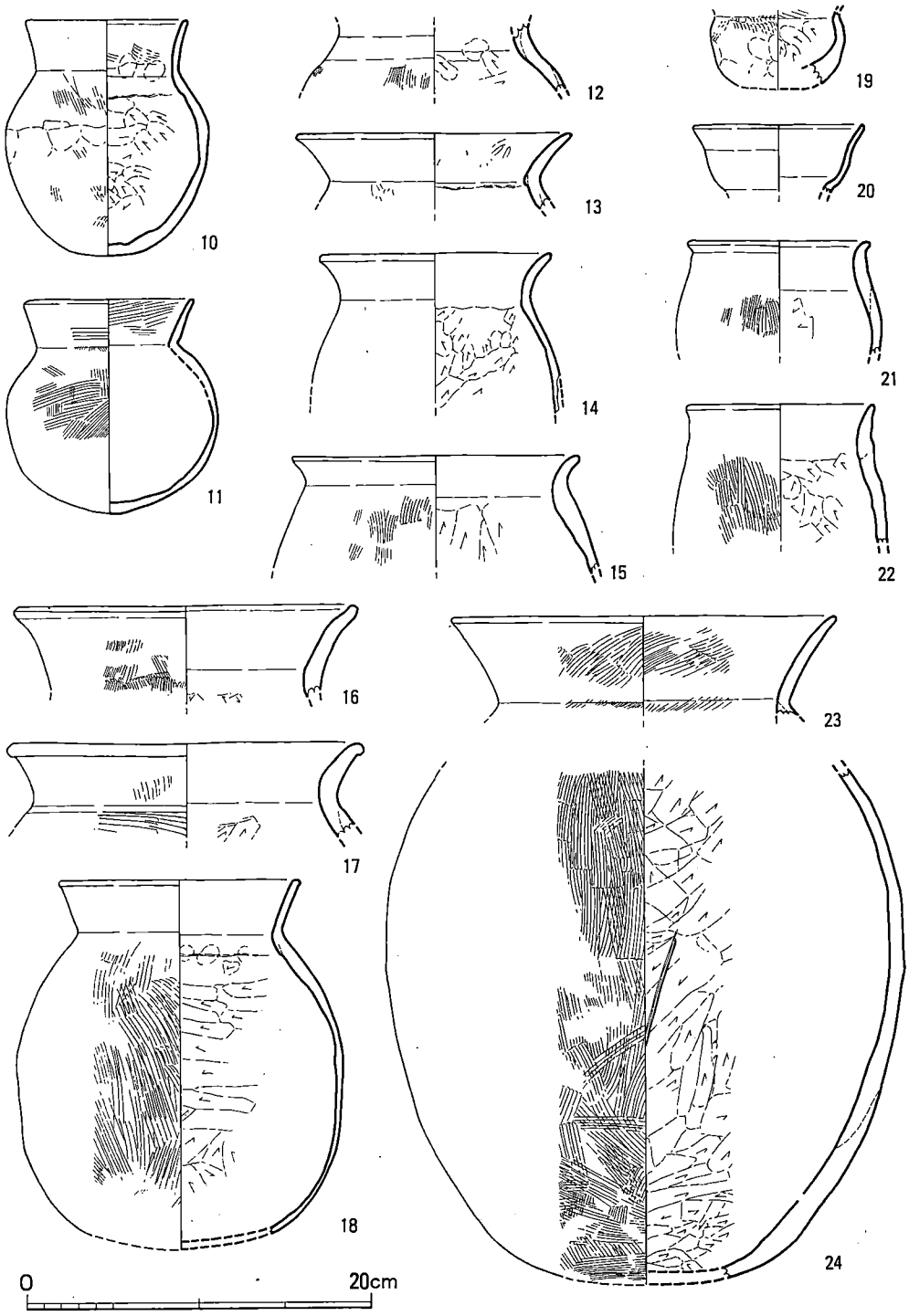
第147図　144～146・147号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



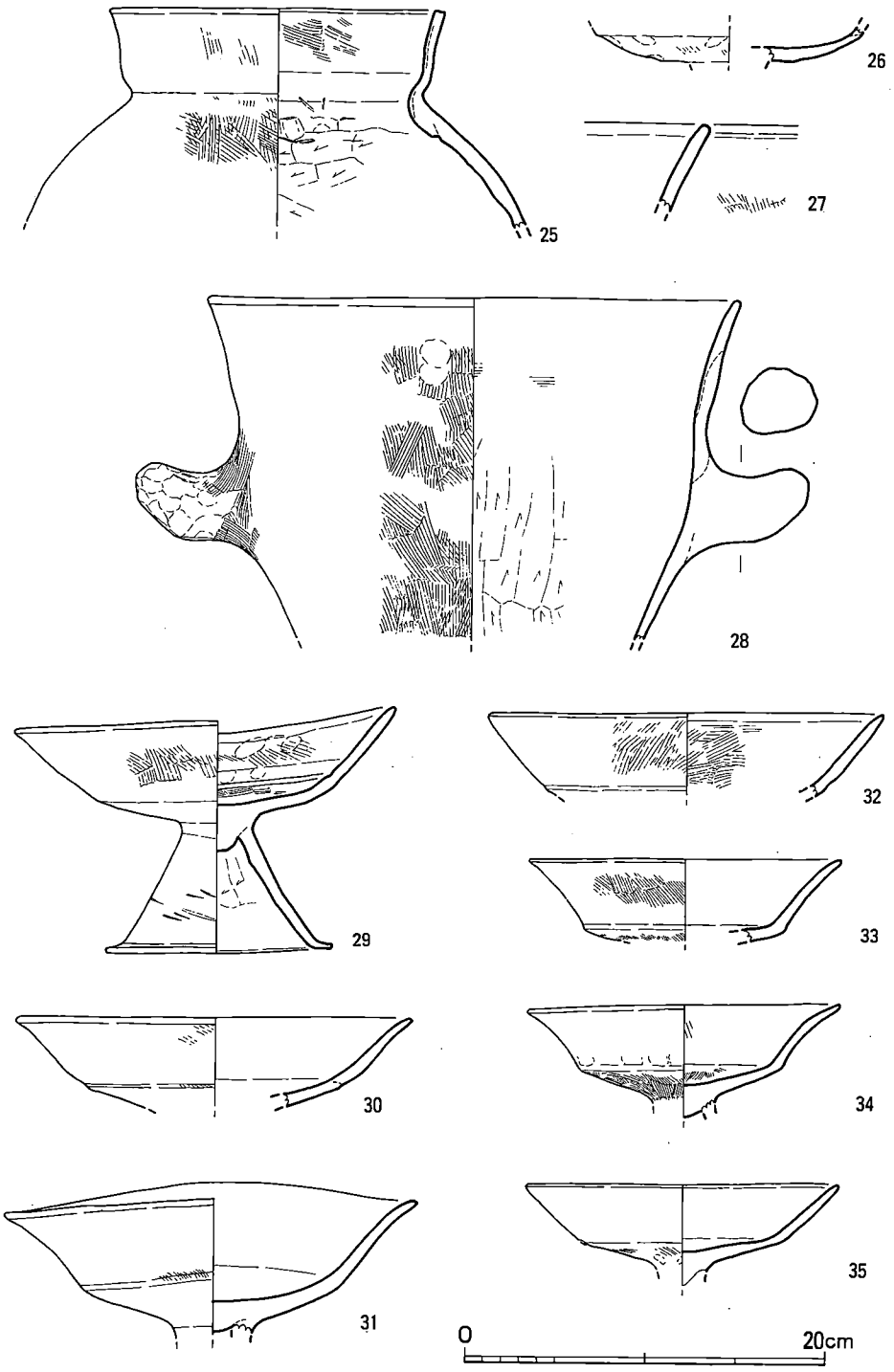
第148図　148・149号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



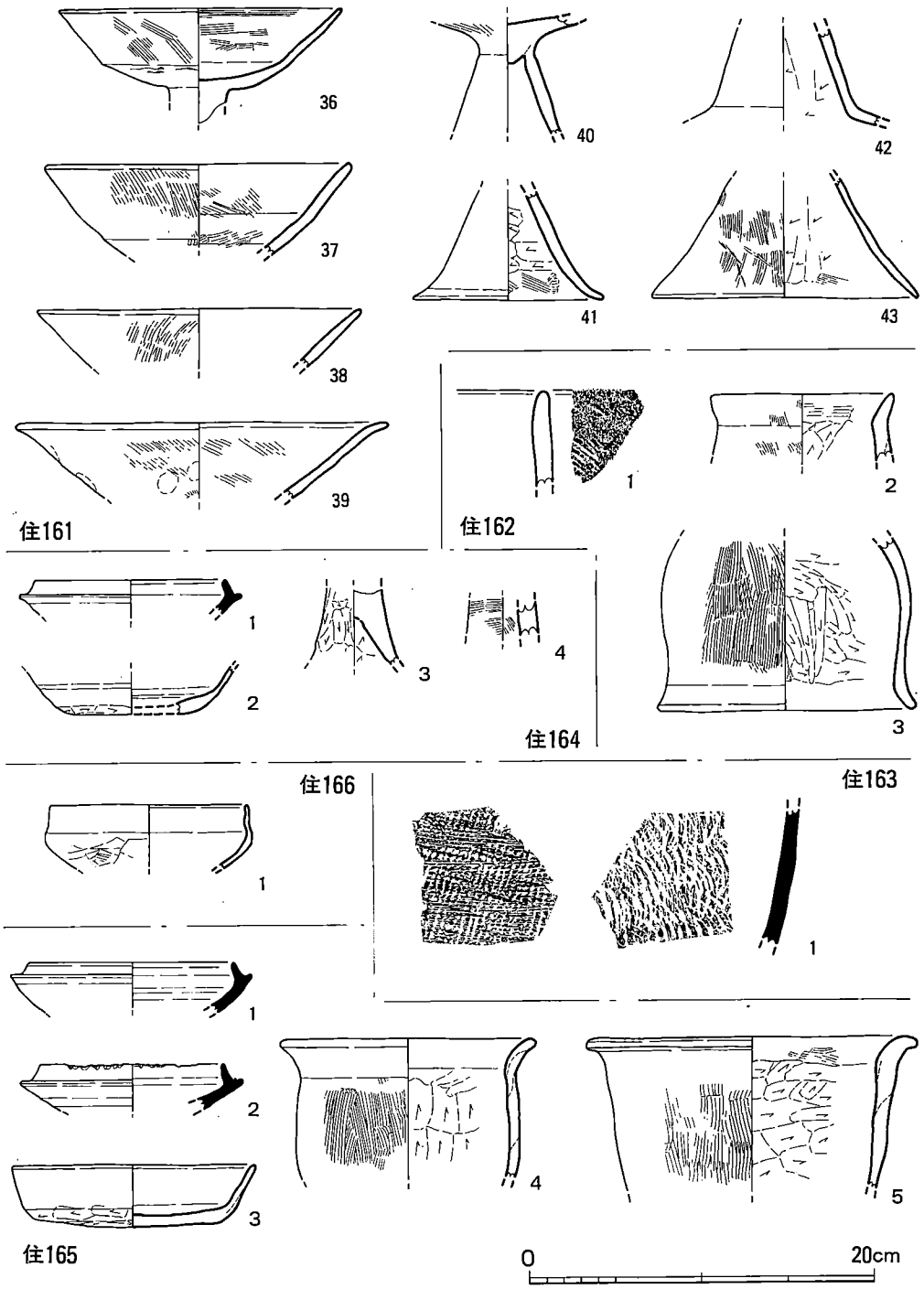
第149図　151・152・154・156・158・161号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



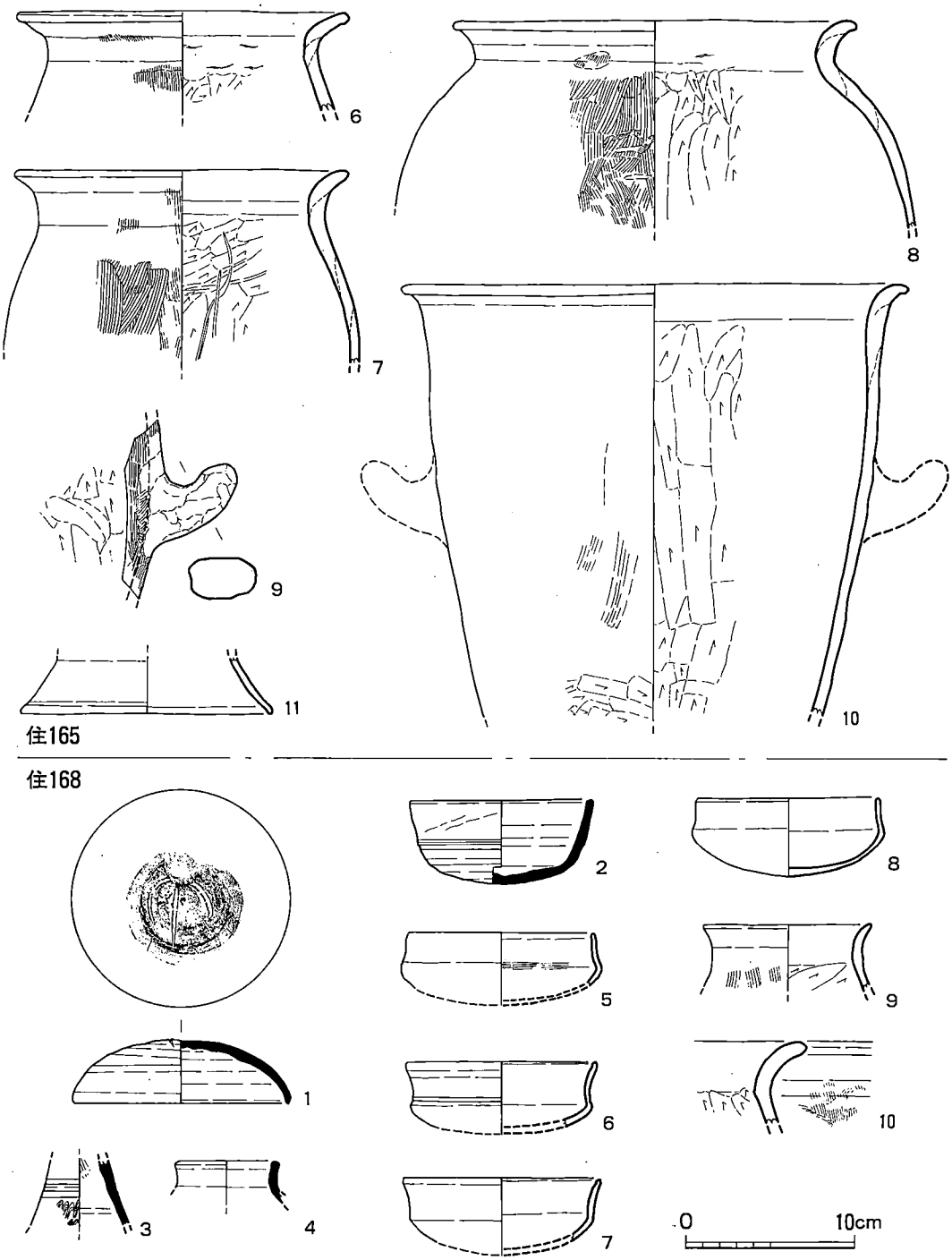
第150図　161号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



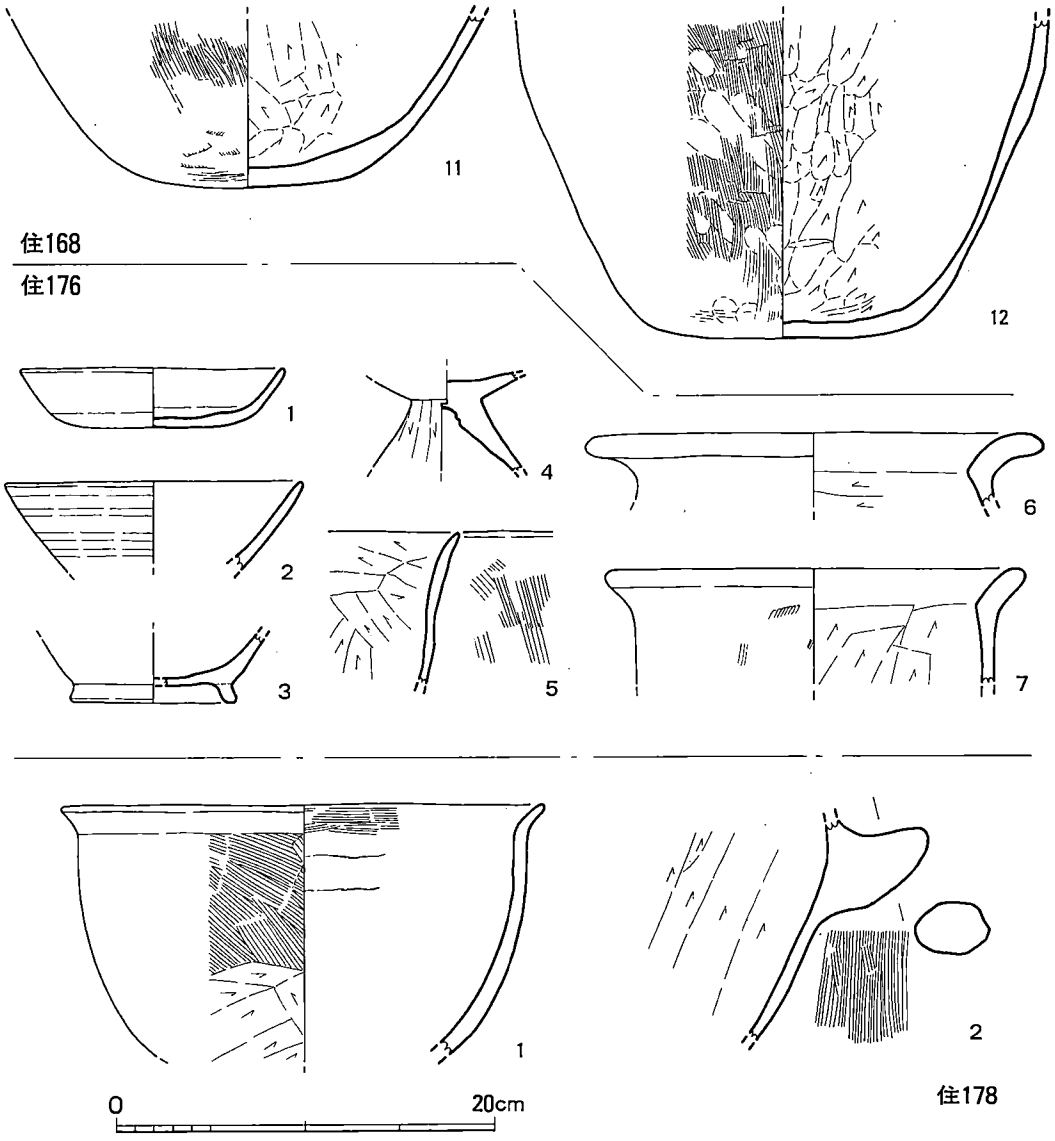
第151図　161号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



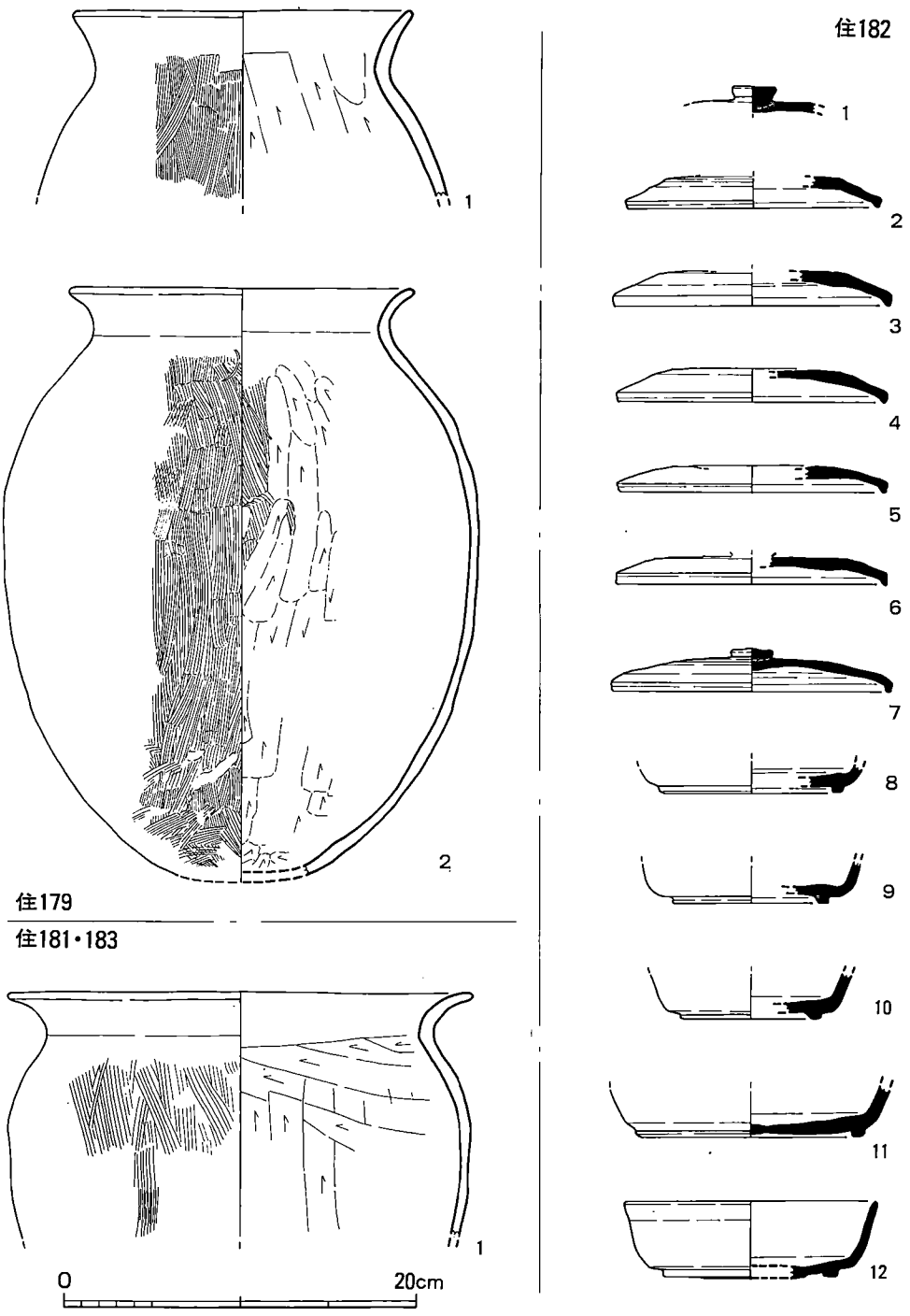
第152図　161～166号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



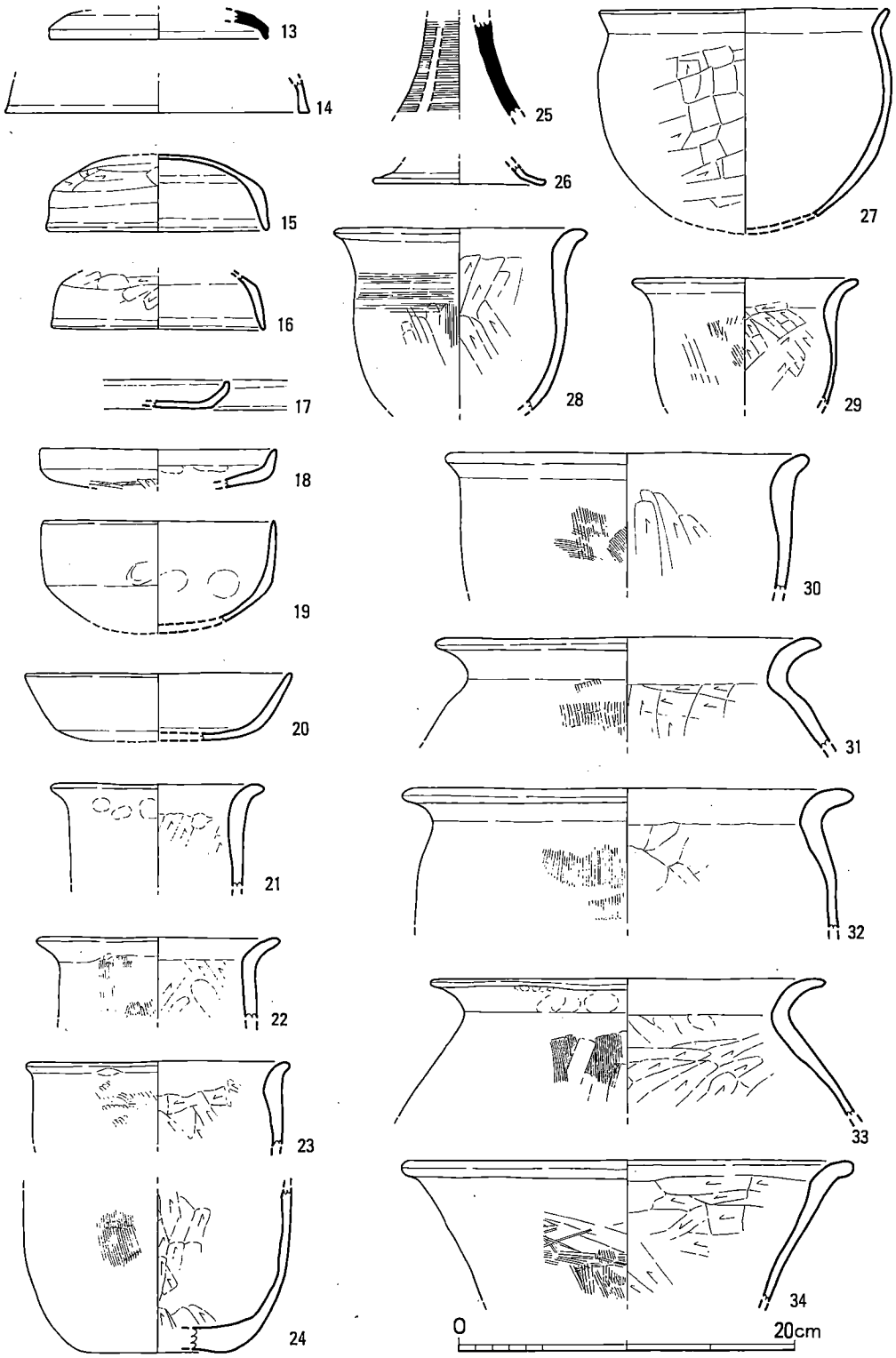
第153図　165・168号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



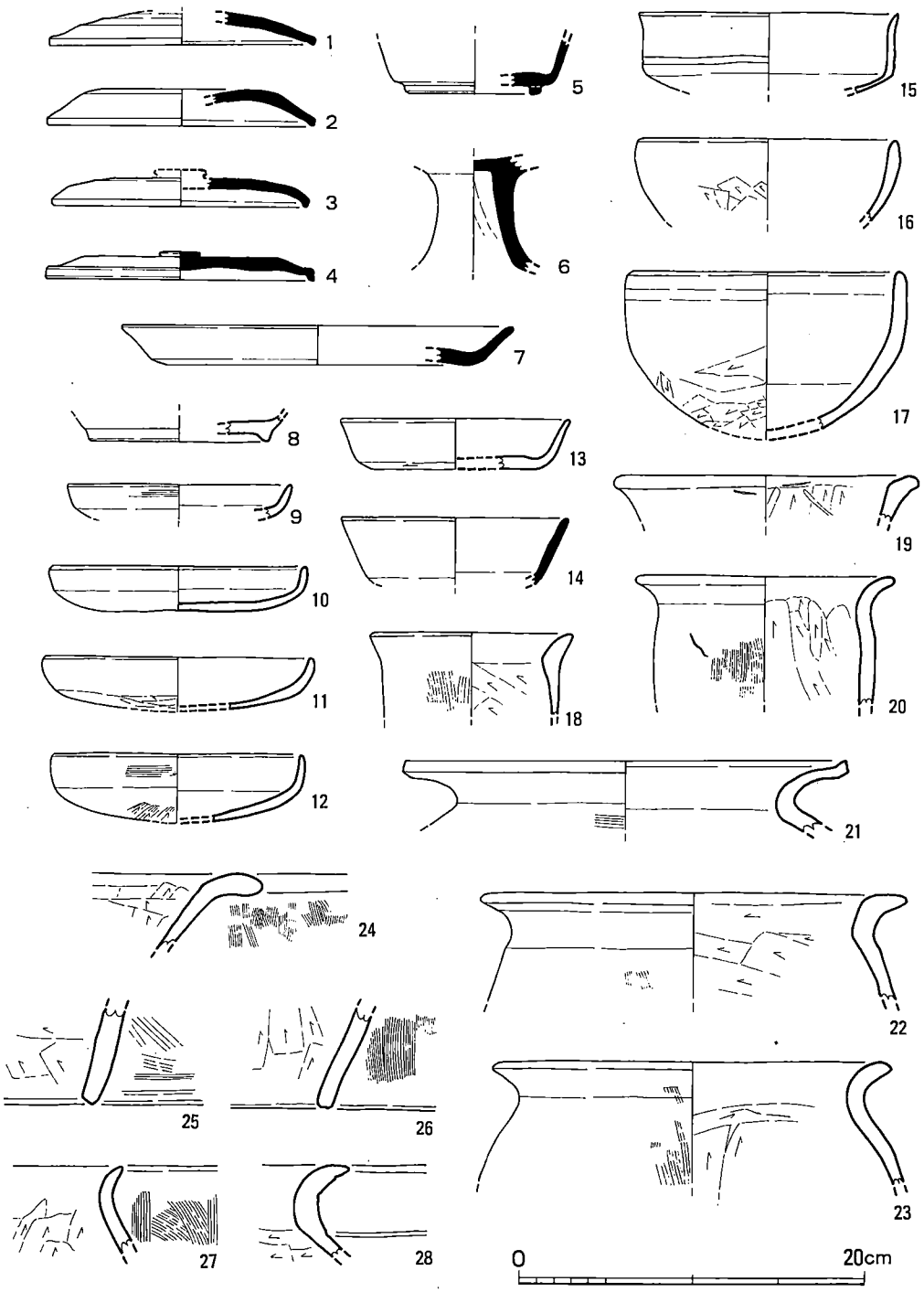
第154図　168・176・178号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



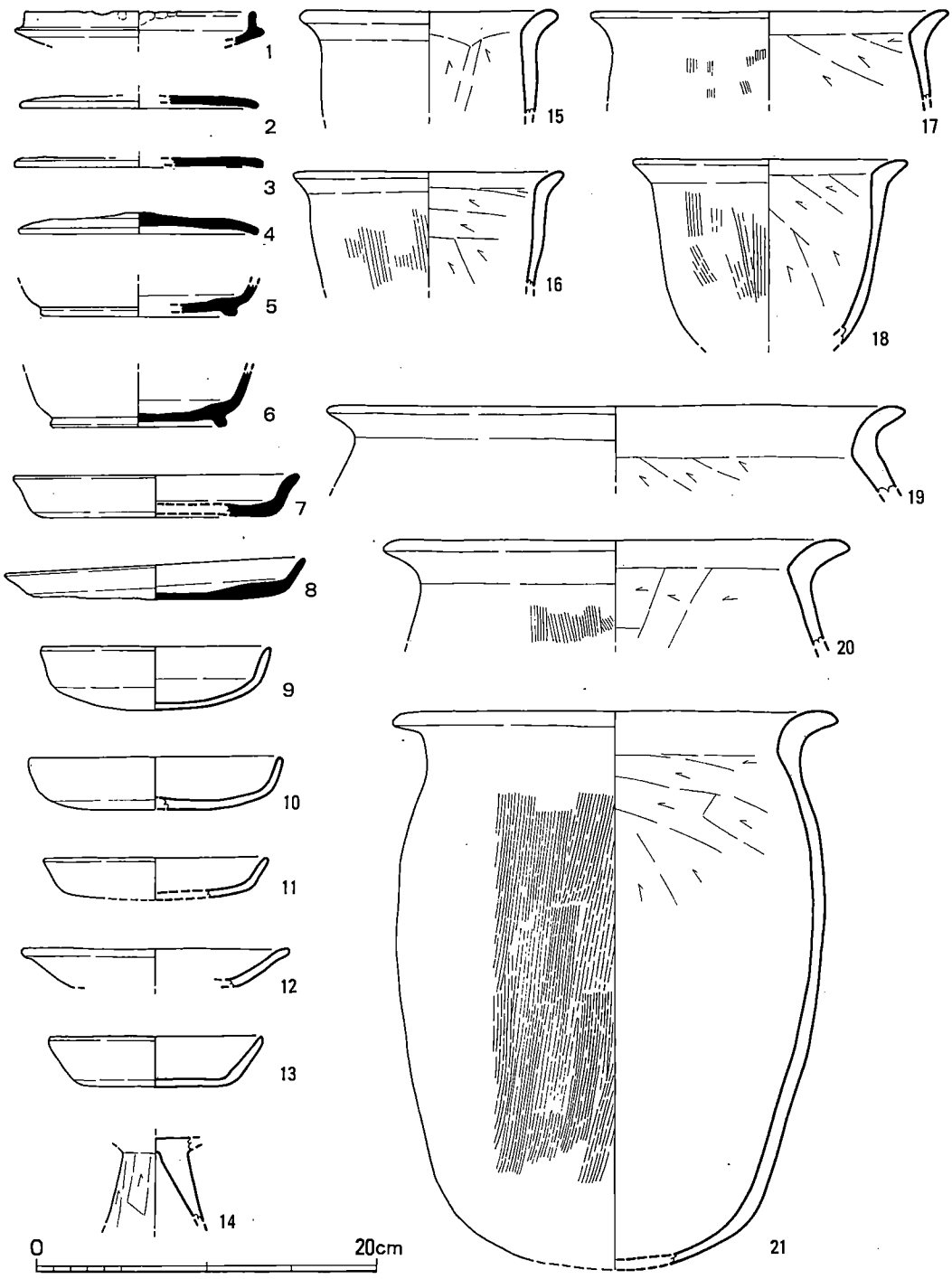
第155図　179・181～183号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



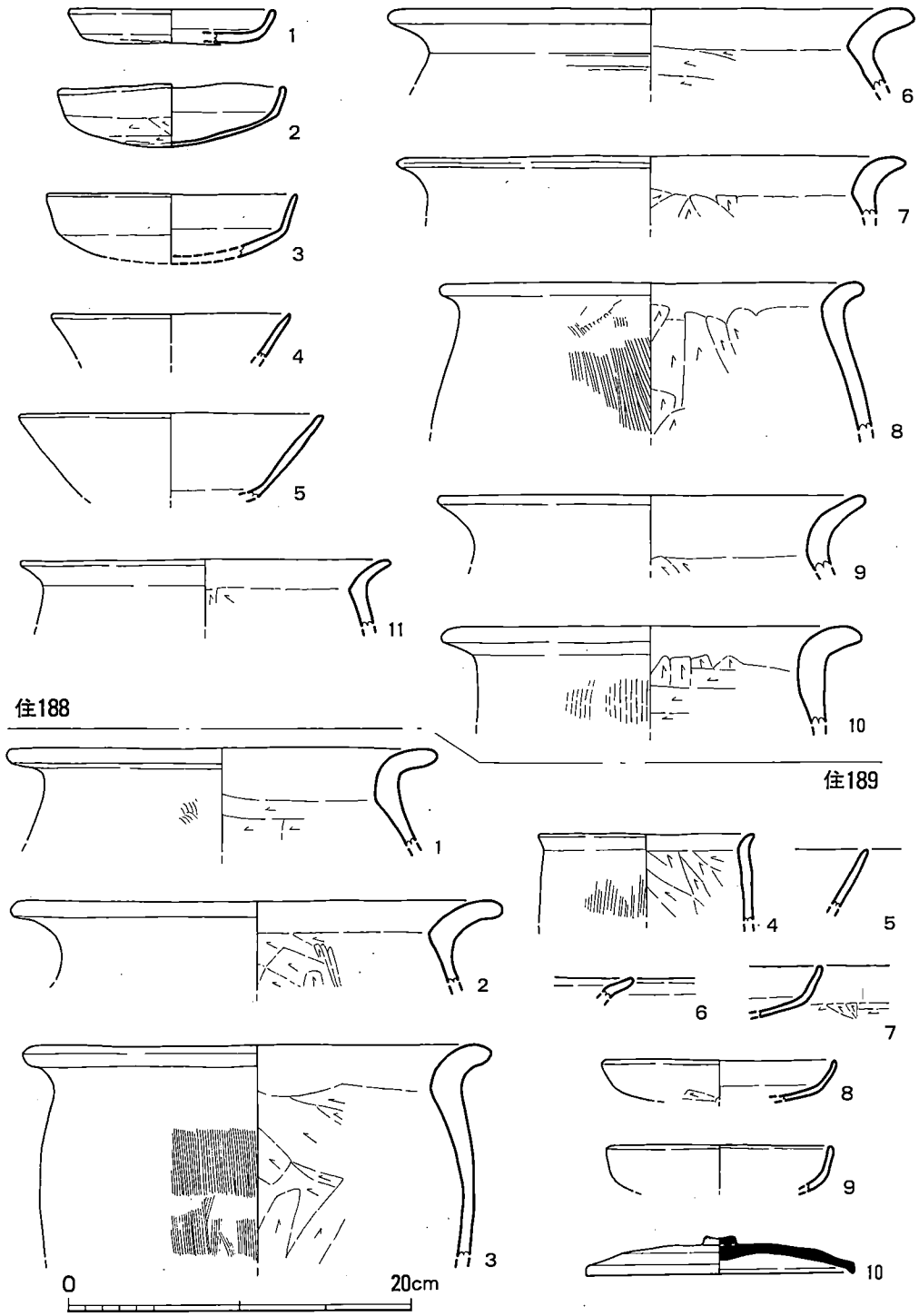
第156図　182号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



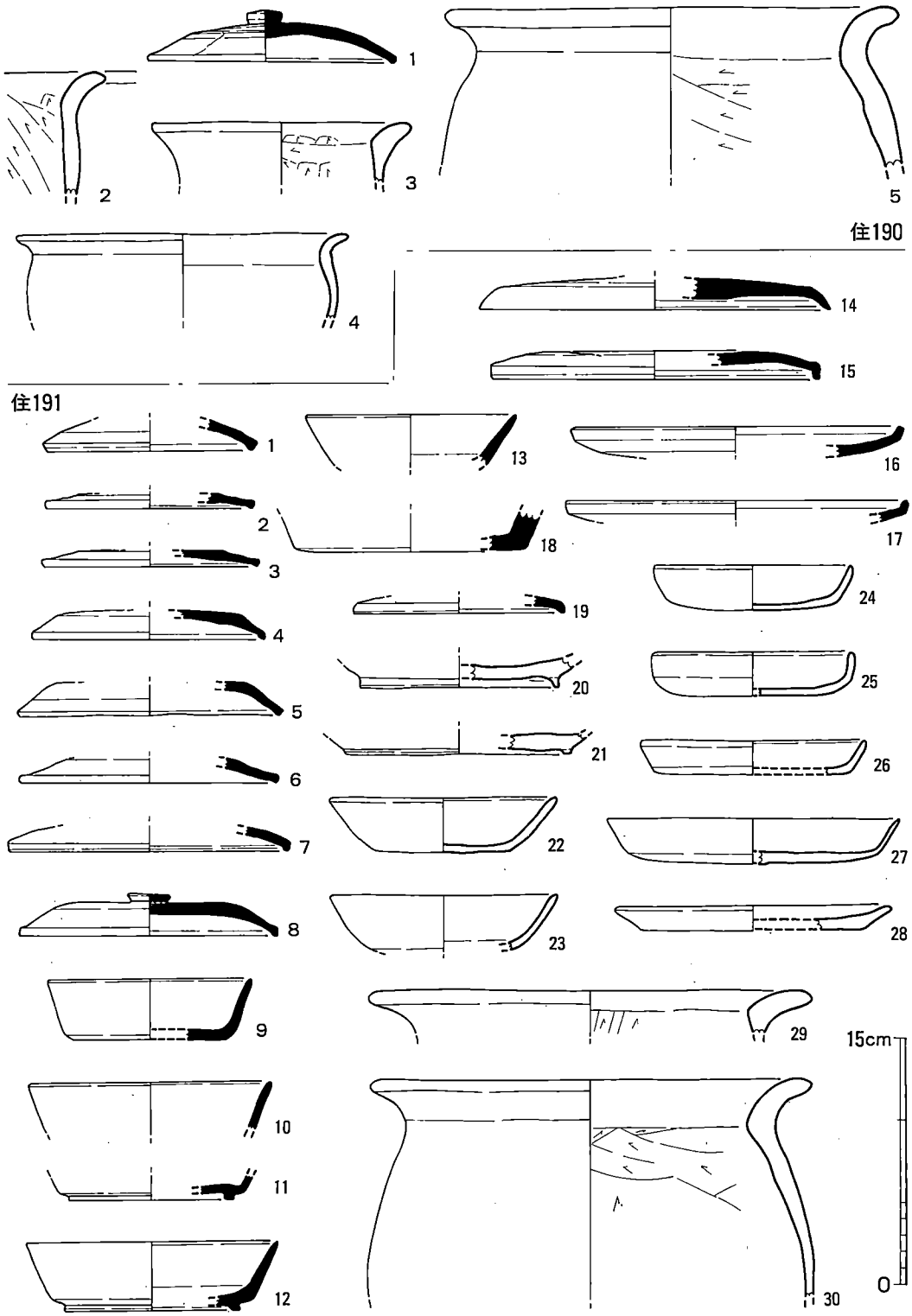
第157図　185号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



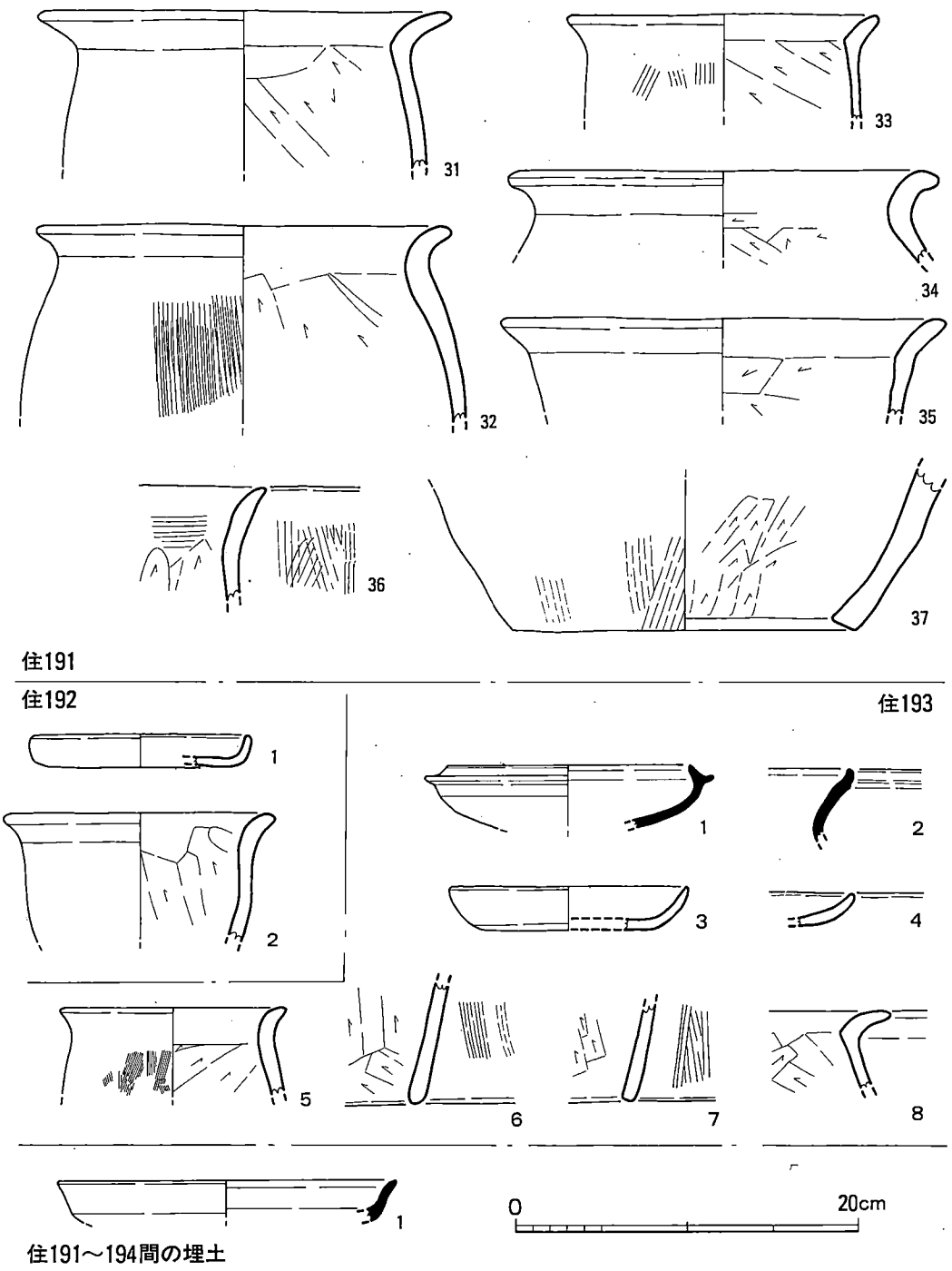
第158図　187号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



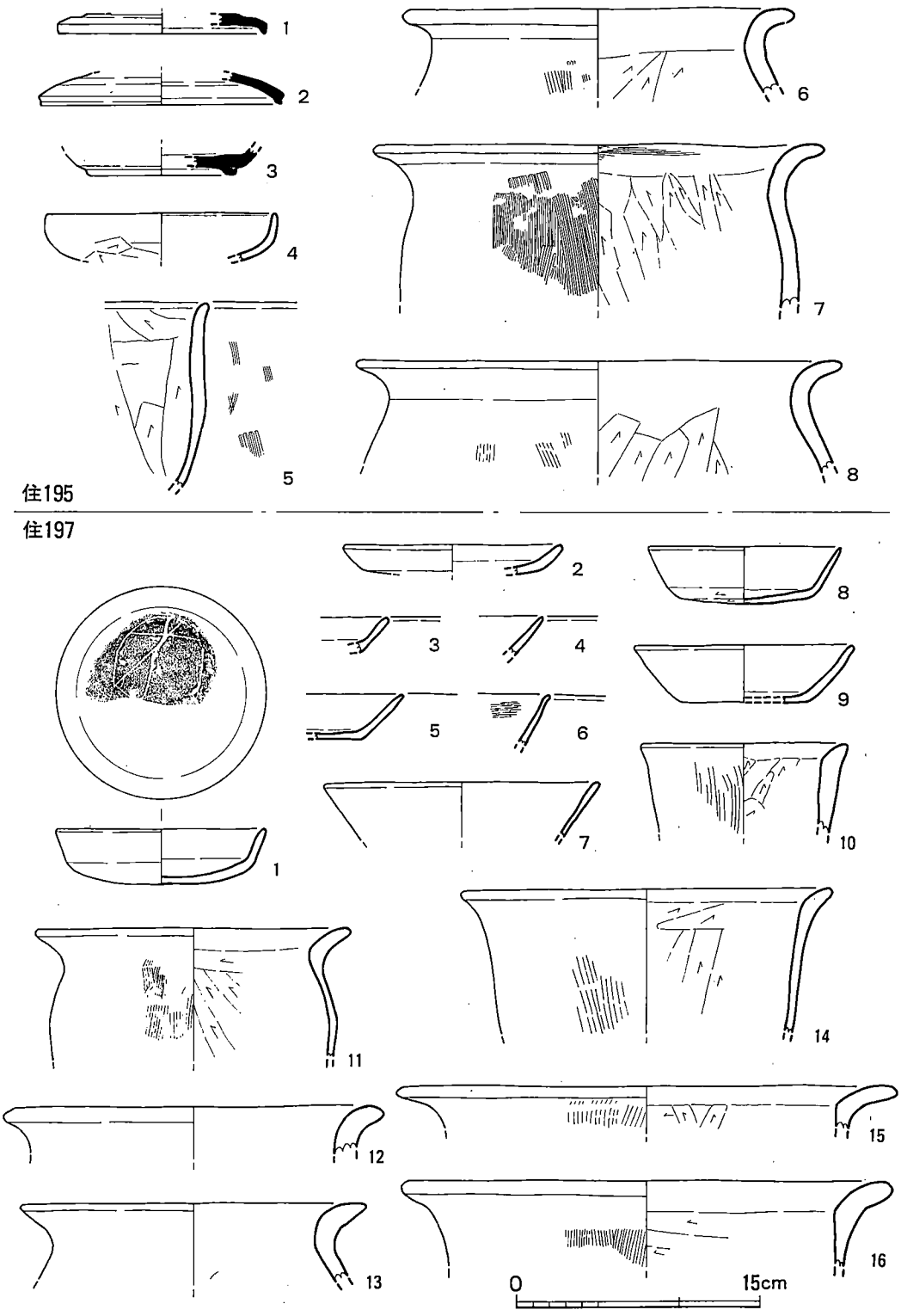
第159図　188・189号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



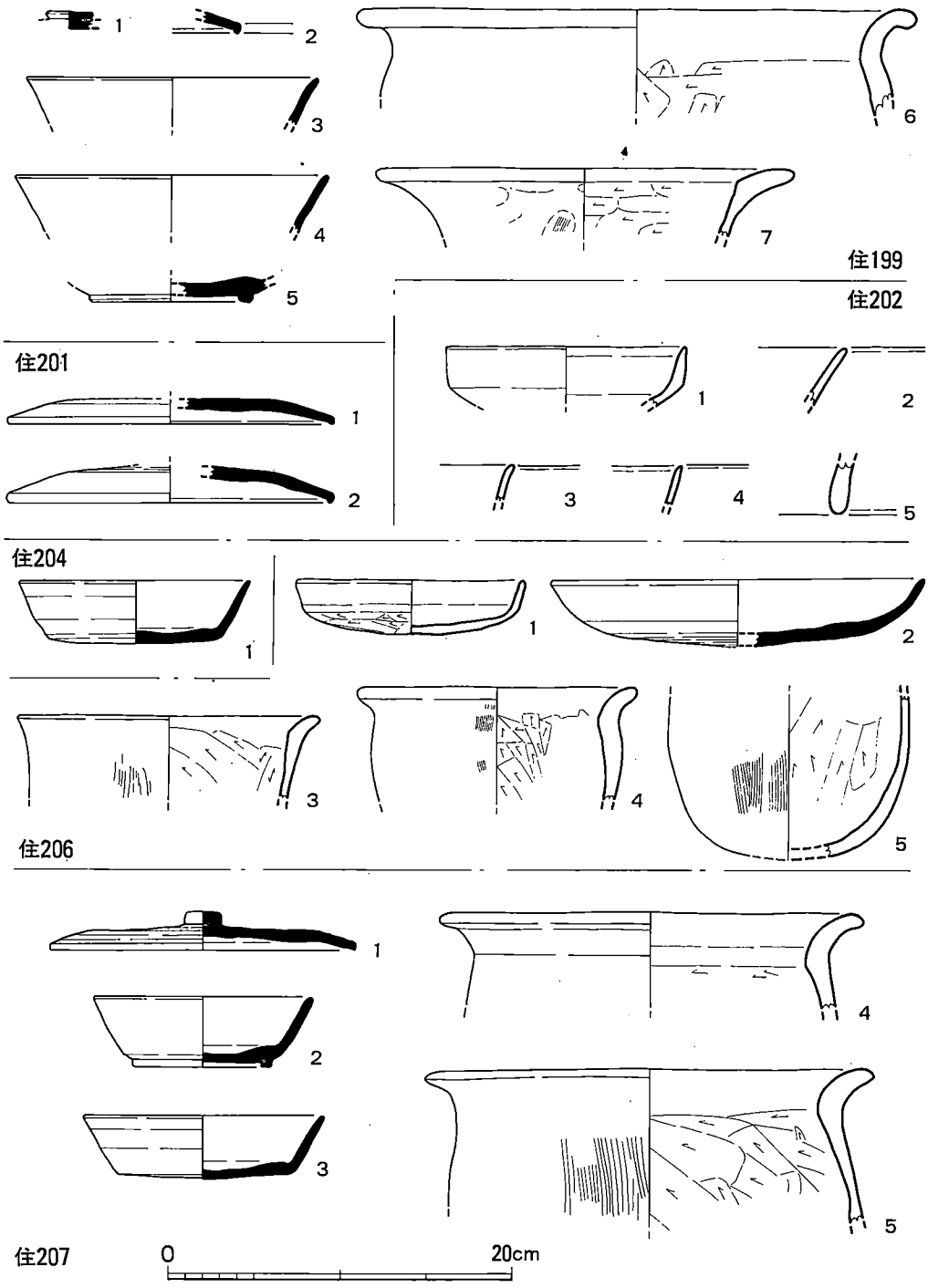
第160図　190・191号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



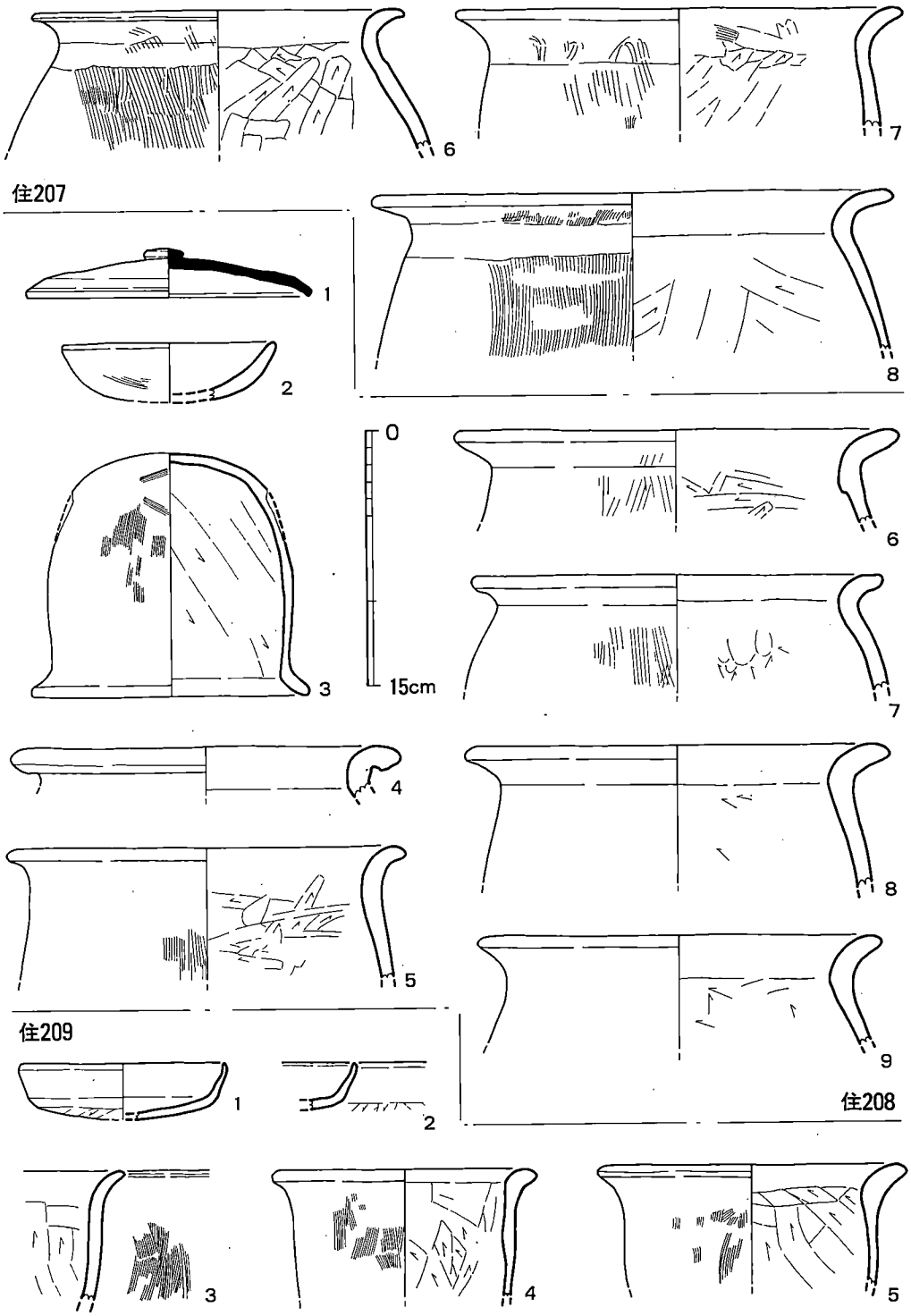
第161図　191～194号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



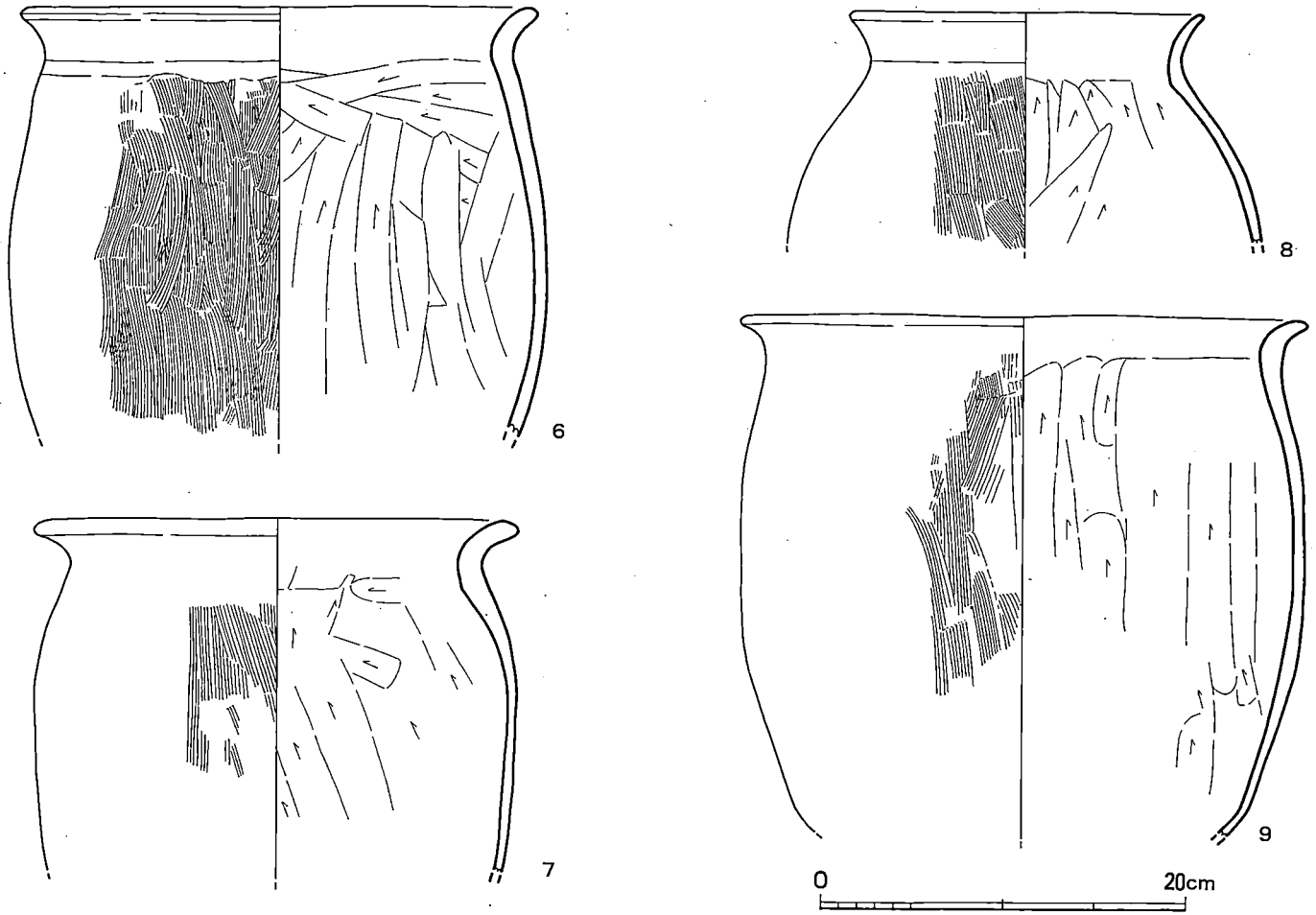
第162図　195・197号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



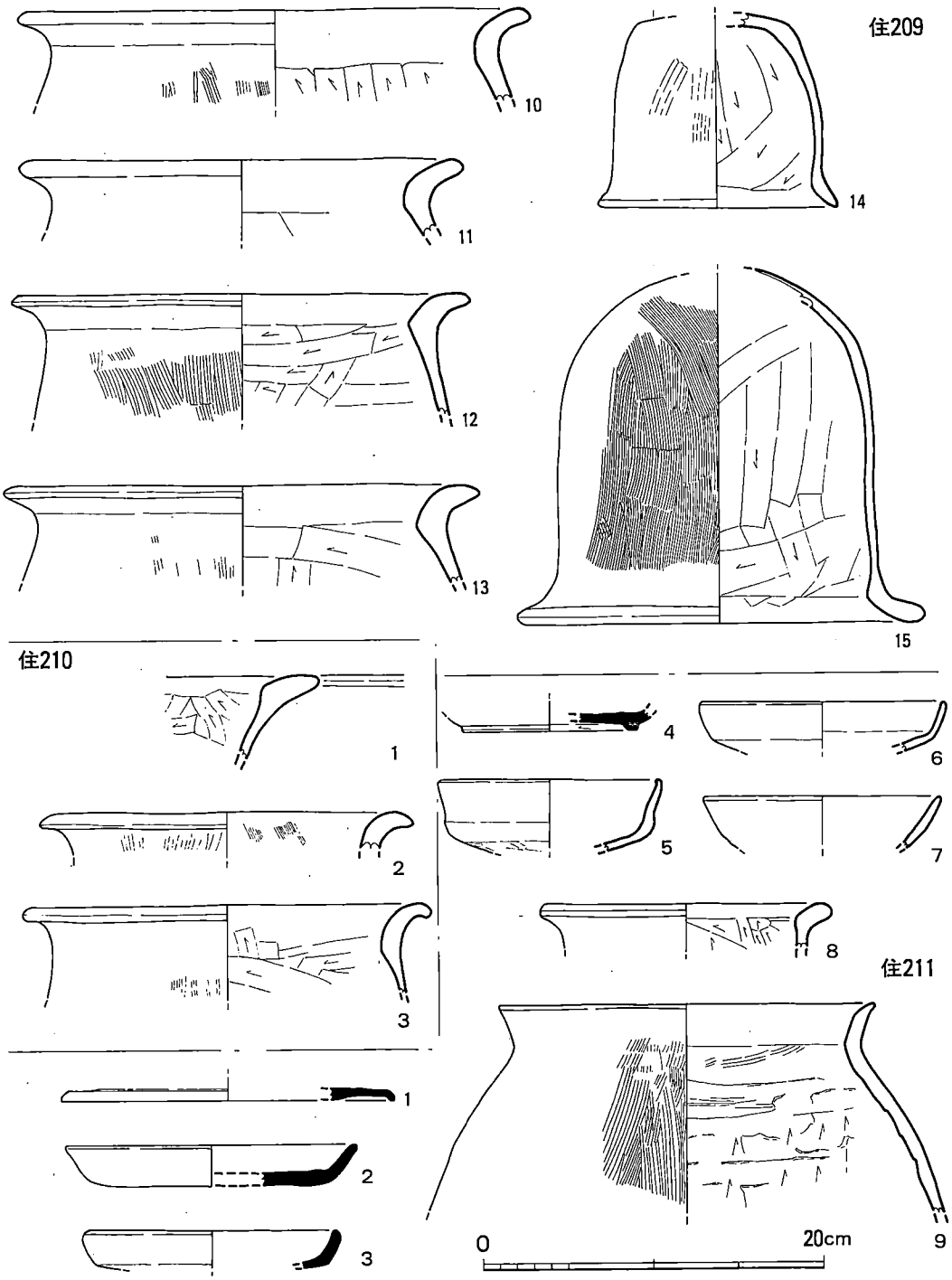
第163図　199・201・202・204・206・207号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



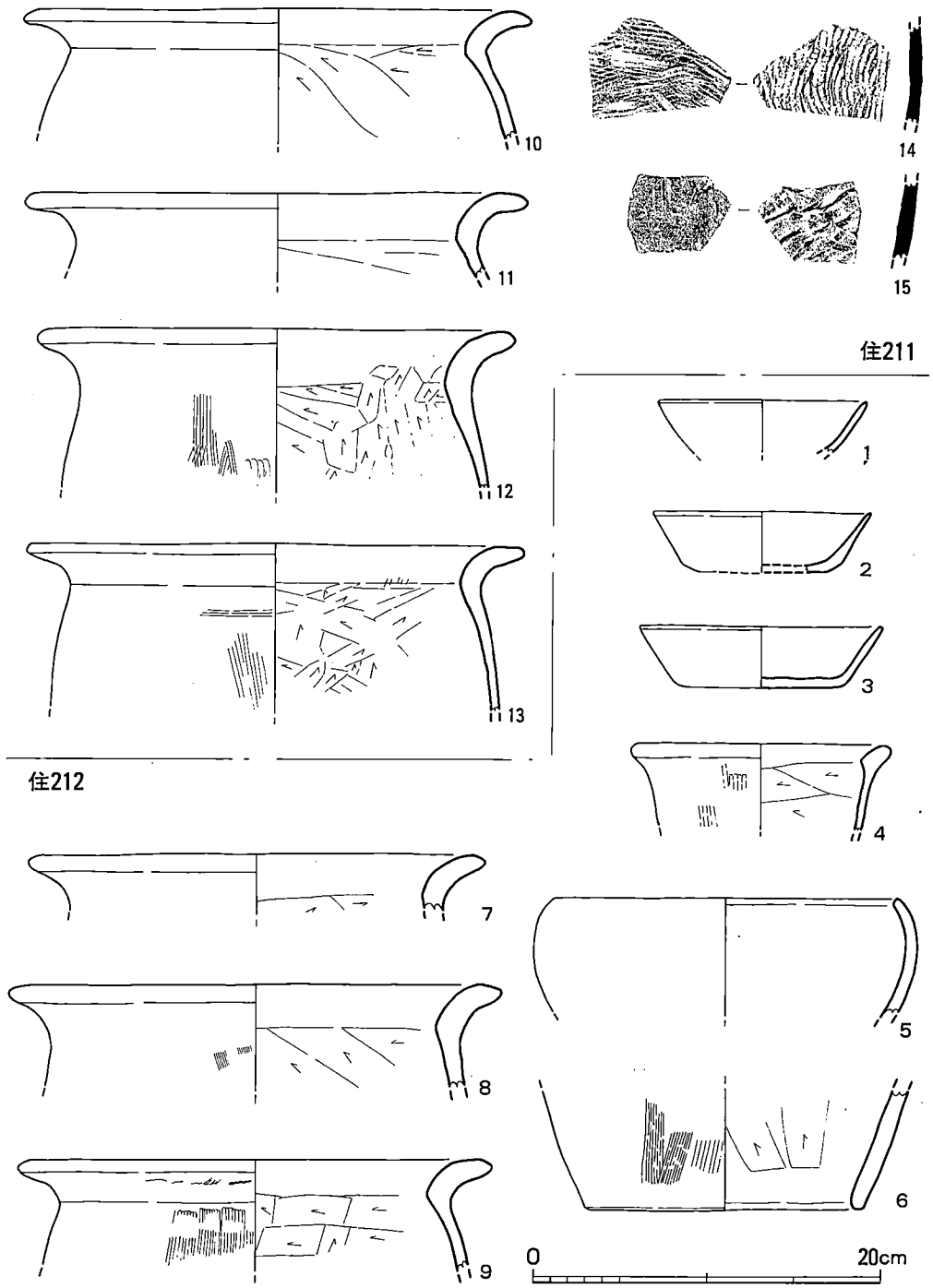
第164図　207～209号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



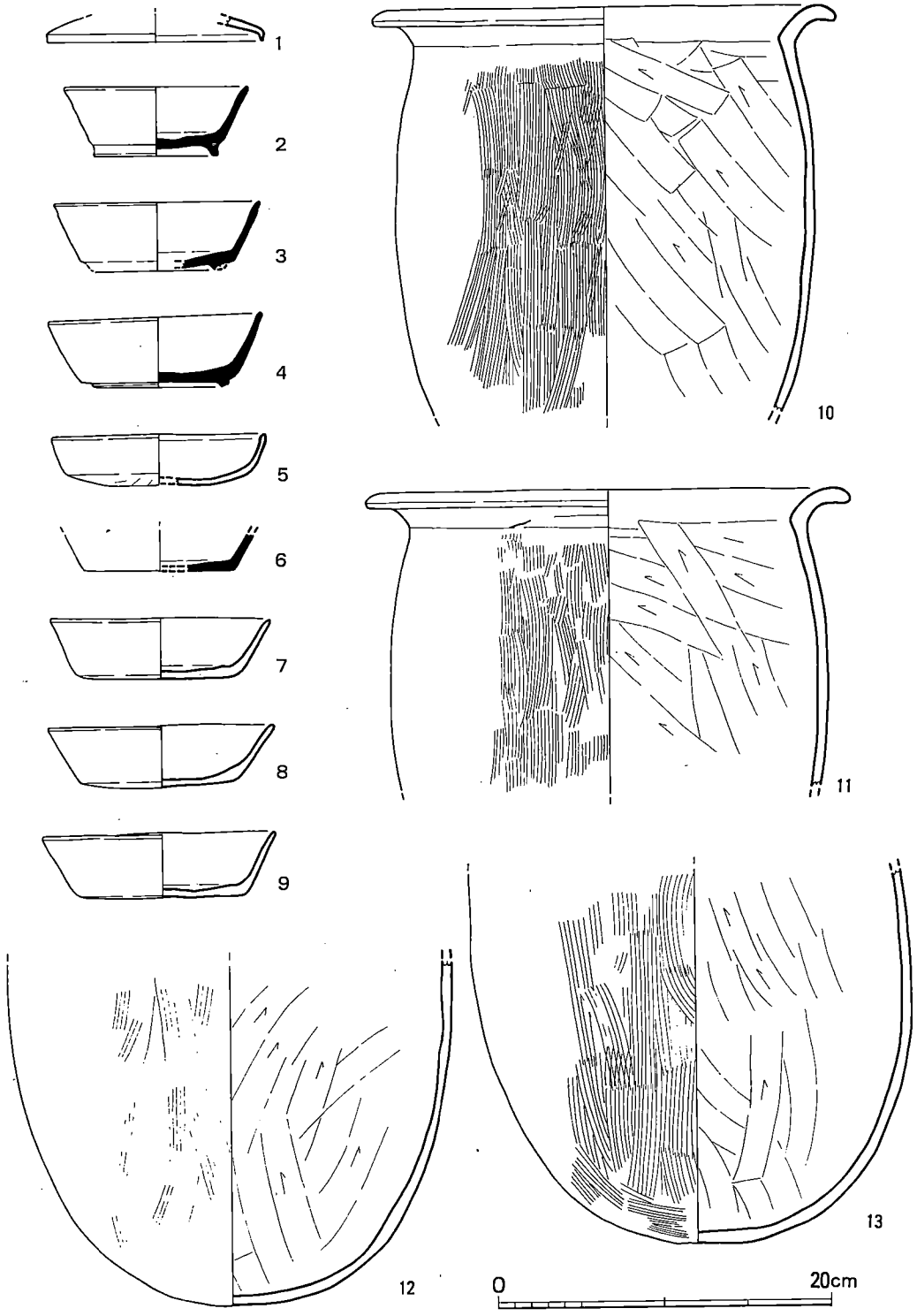
第165図　209号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



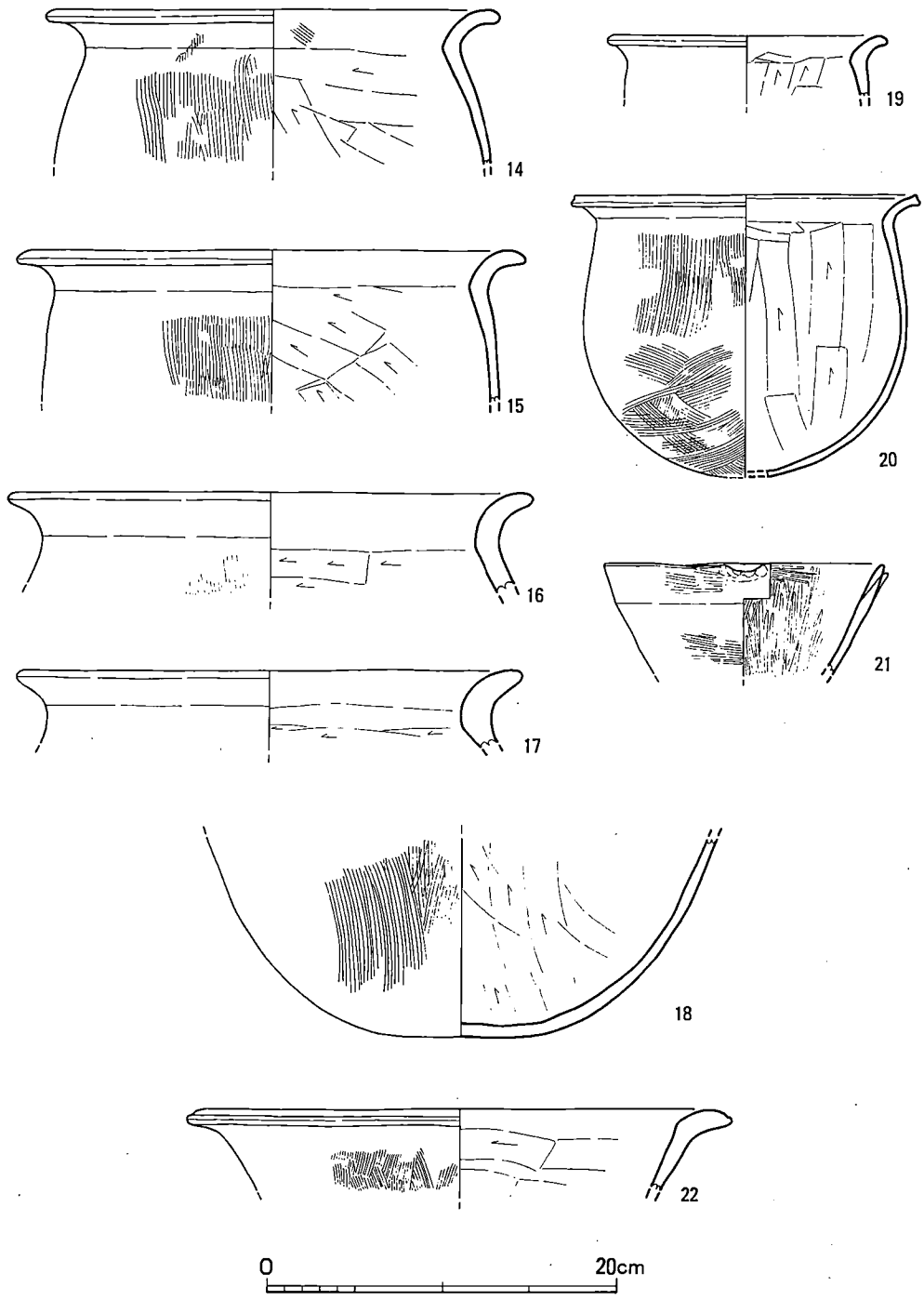
第166図　209～211号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



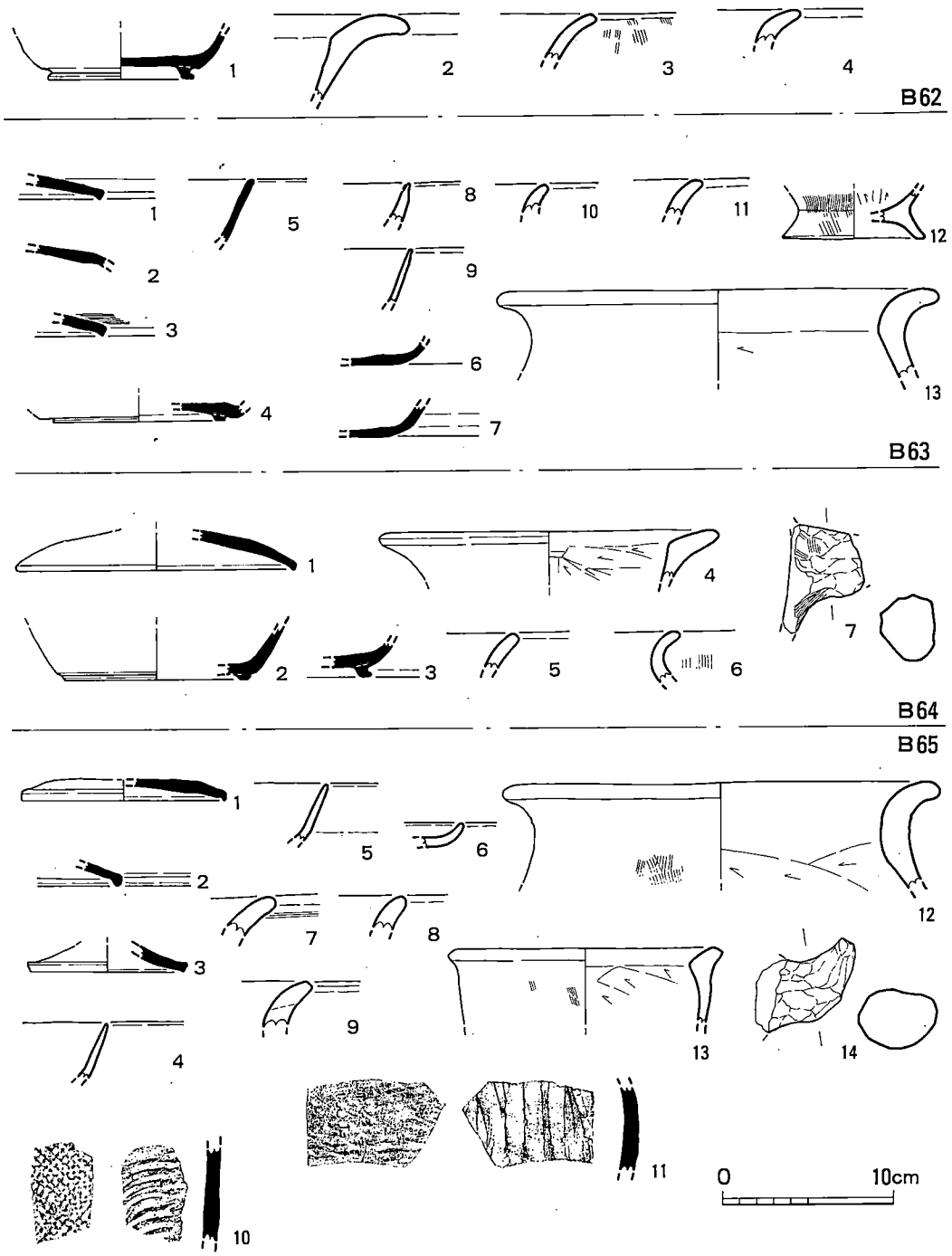
第167図　211・212号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



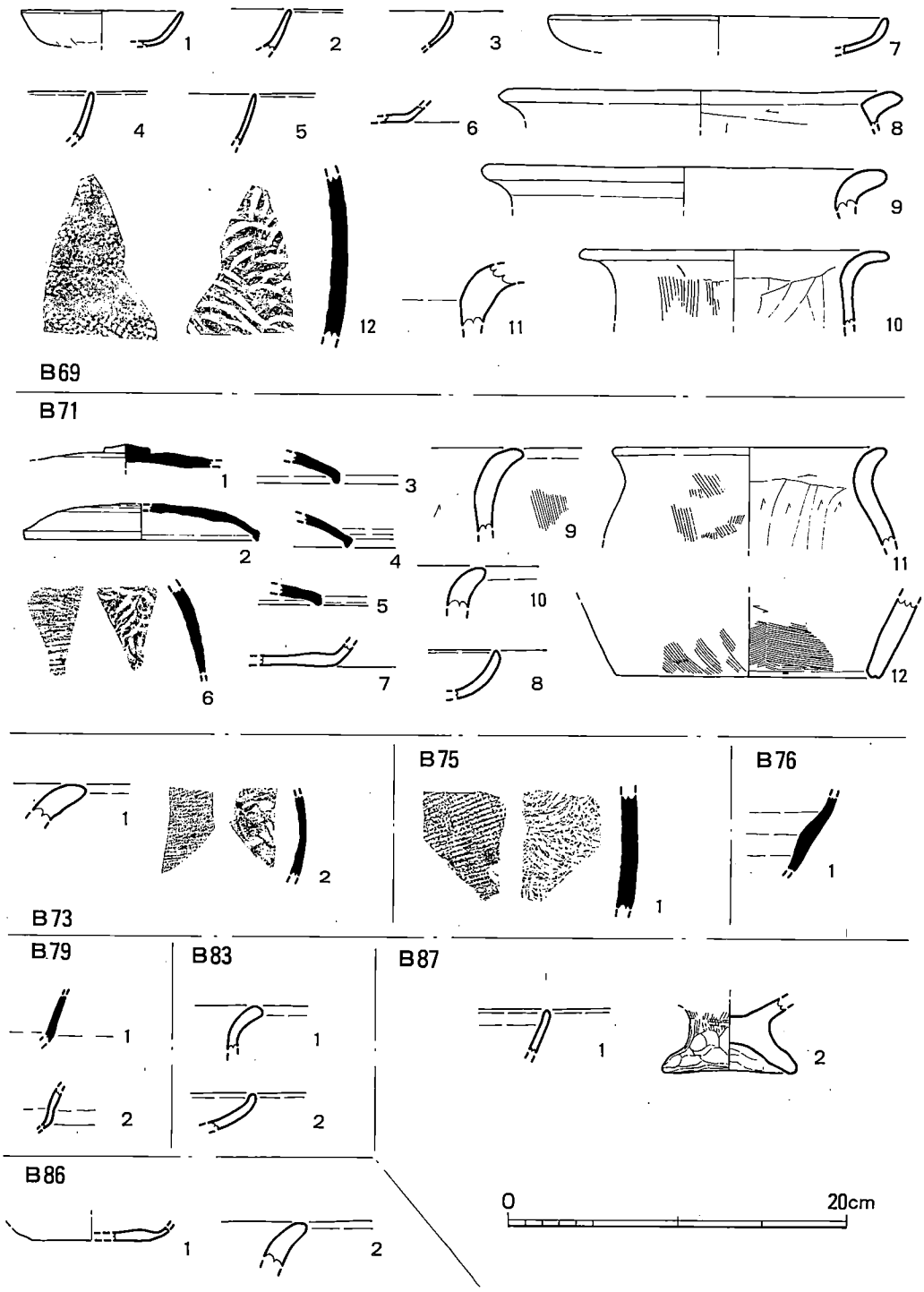
第168図　213号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/4)



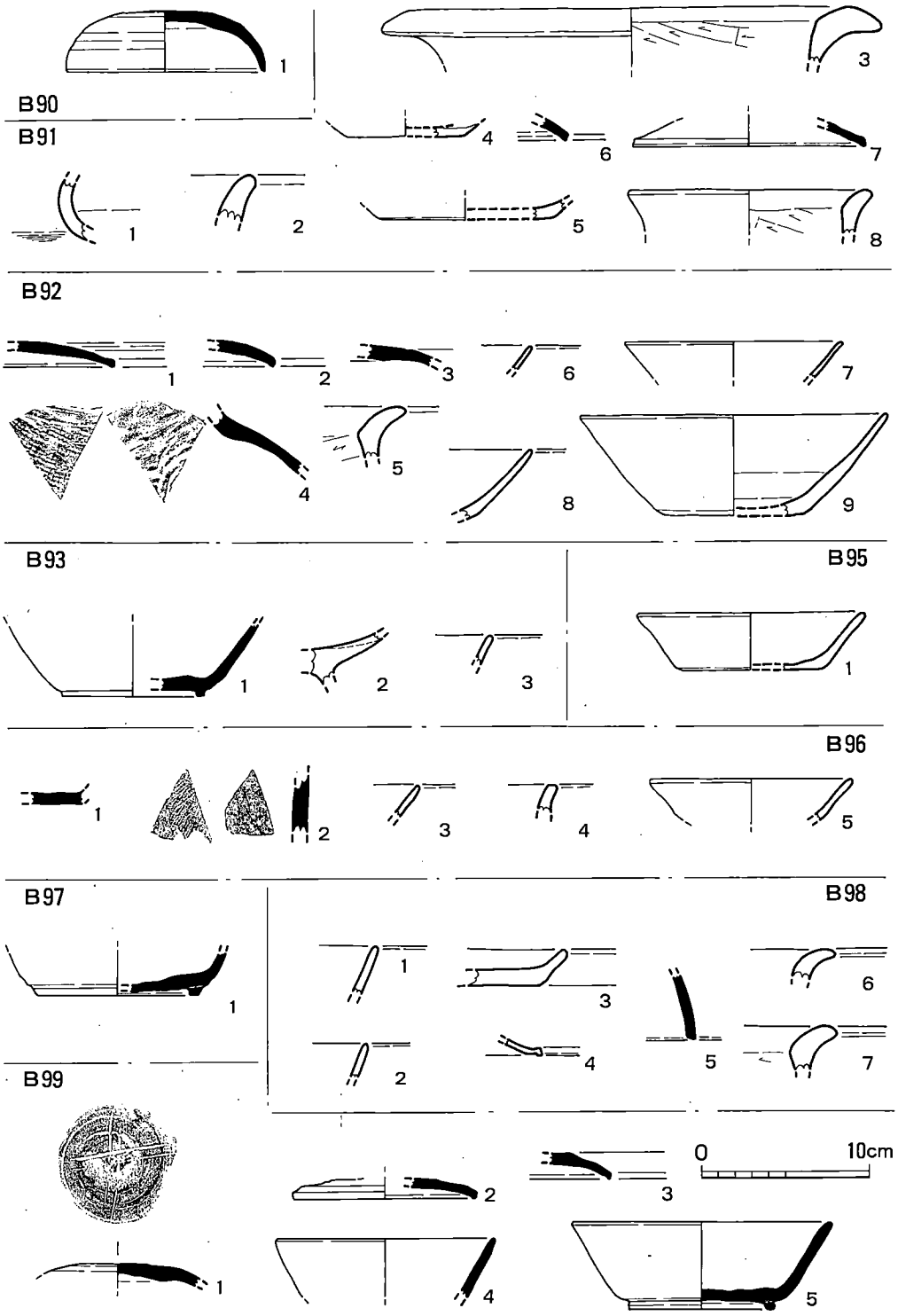
第169図　213号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/4)



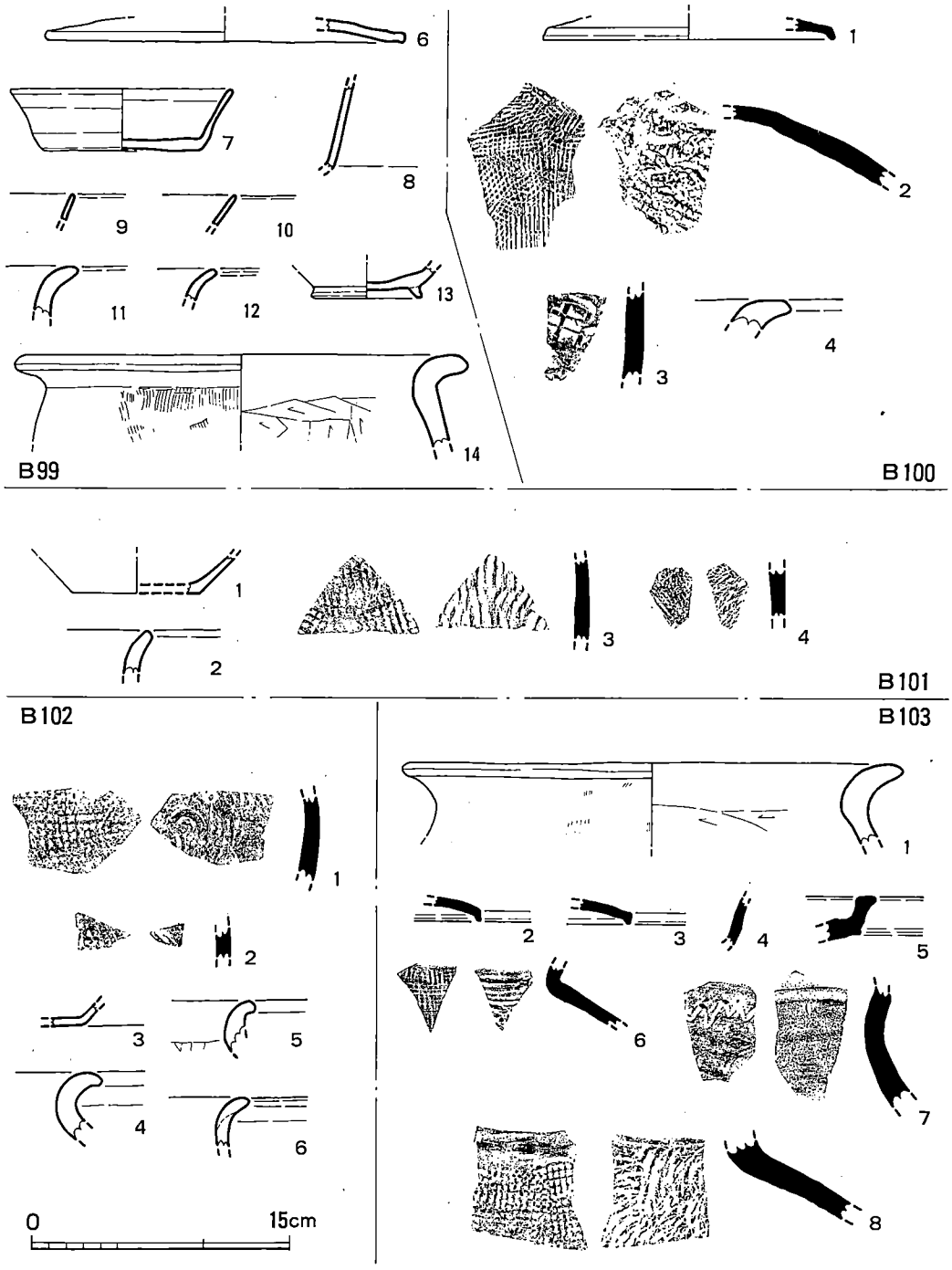
第170図　62～65号掘立柱建物跡出土土器実測図(1/4)



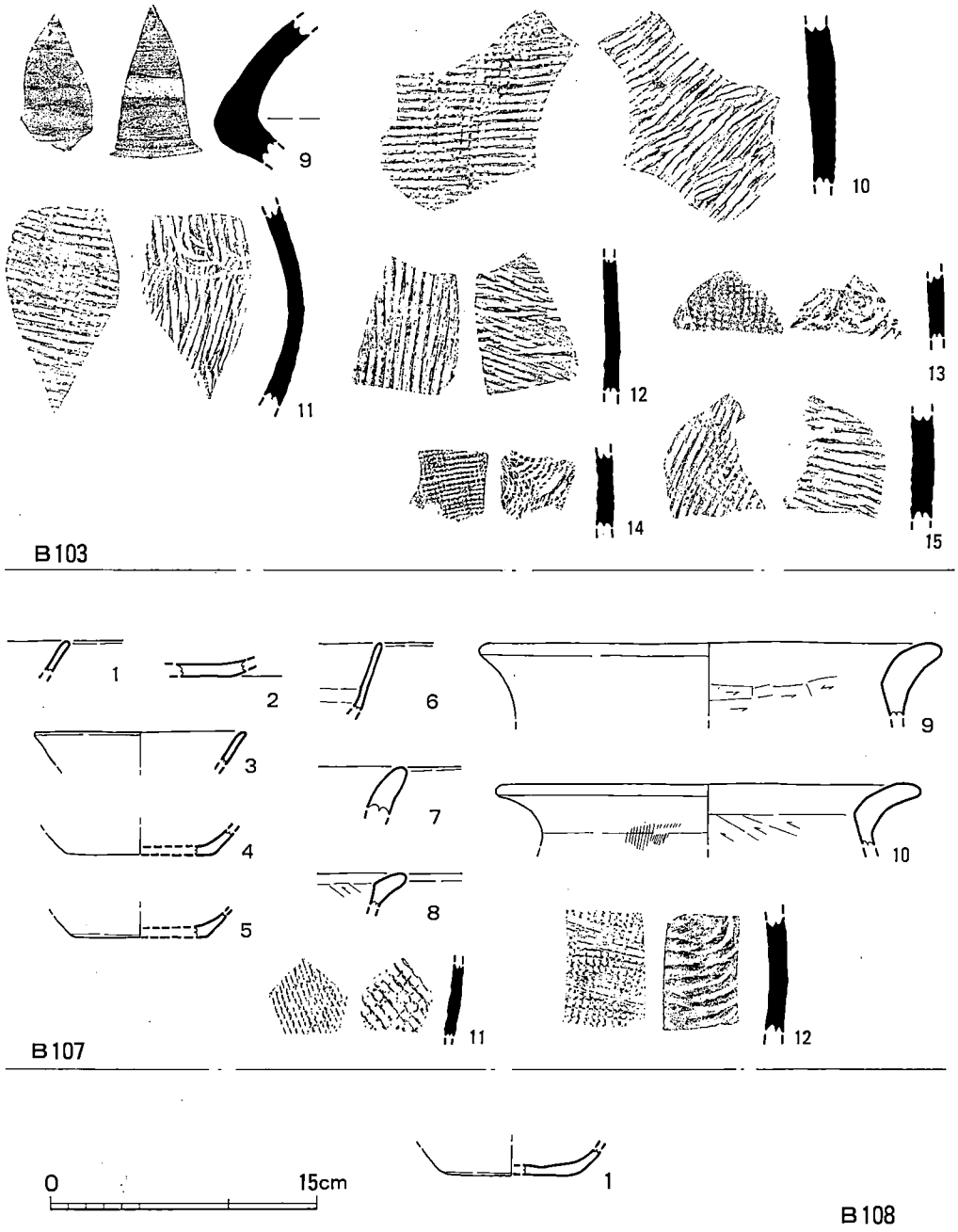
第171図　69・71・73・75・76・79・83・86・87号掘立柱建物跡出土土器実測図(1/4)



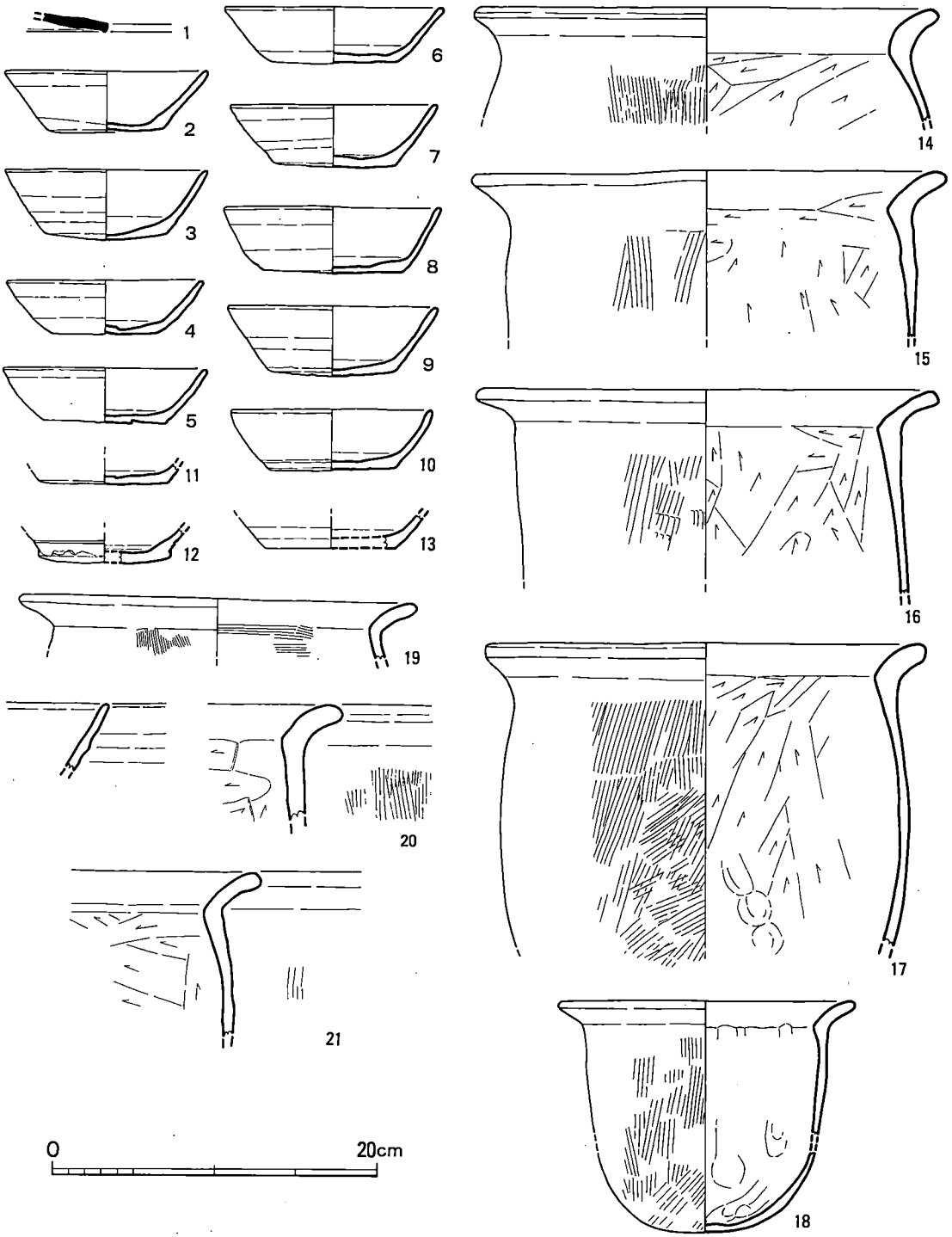
第172図　90～93・95～99号掘立柱建物跡出土土器実測図(1/4)



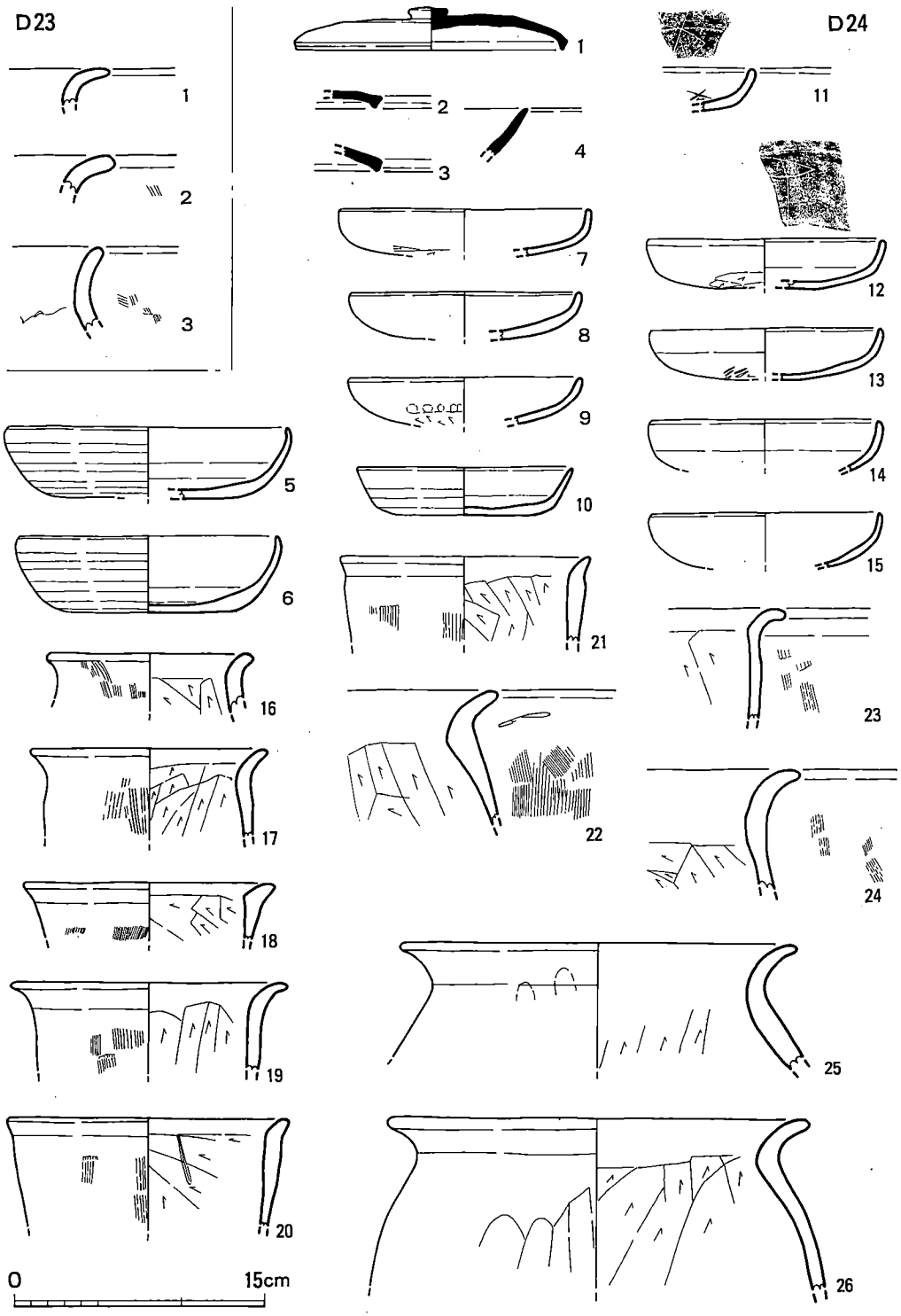
第173図　99～103号掘立柱建物跡出土土器実測図(1/4)



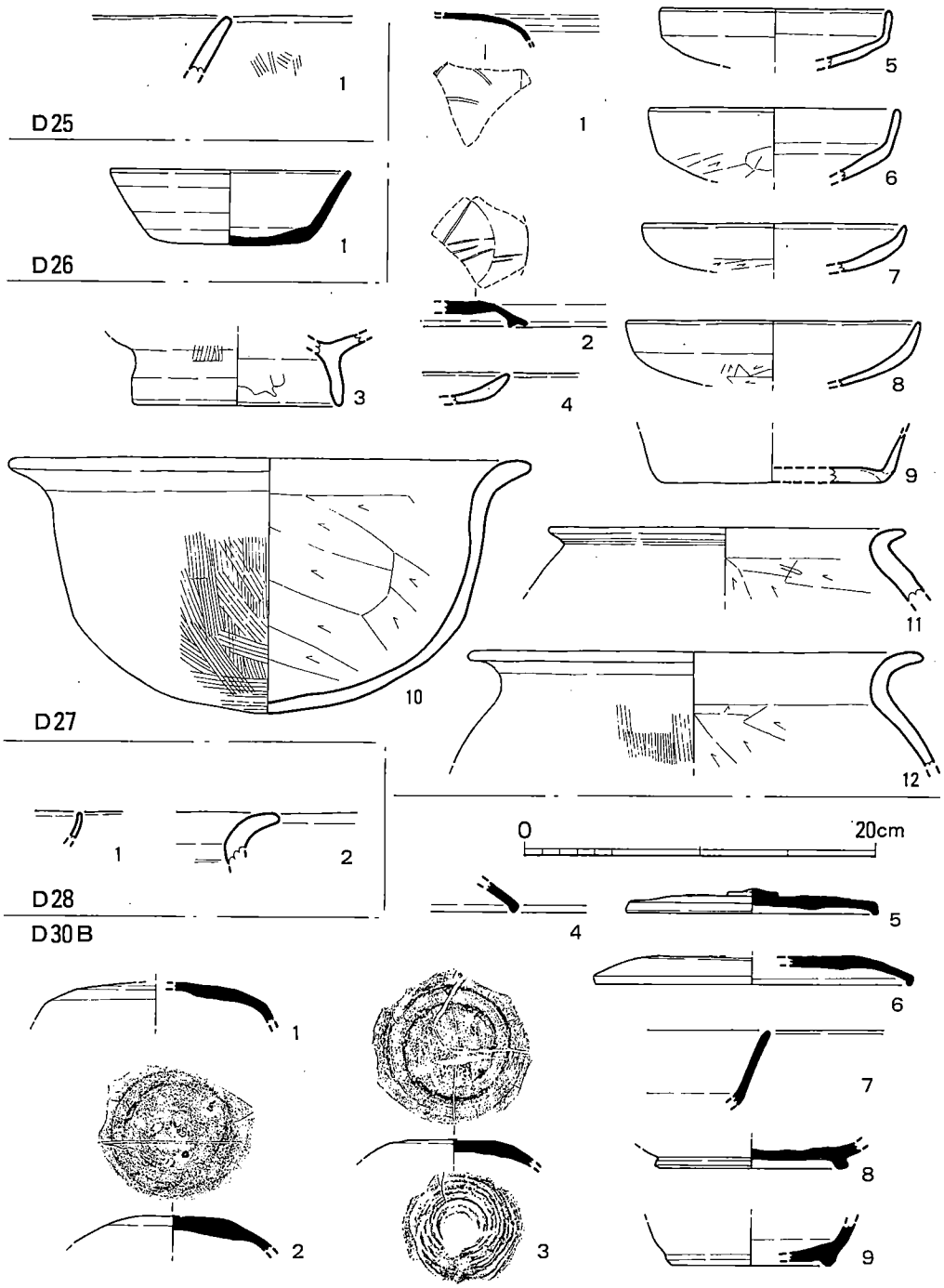
第174図　103・107・108号掘立柱建物跡出土土器実測図(1/4)



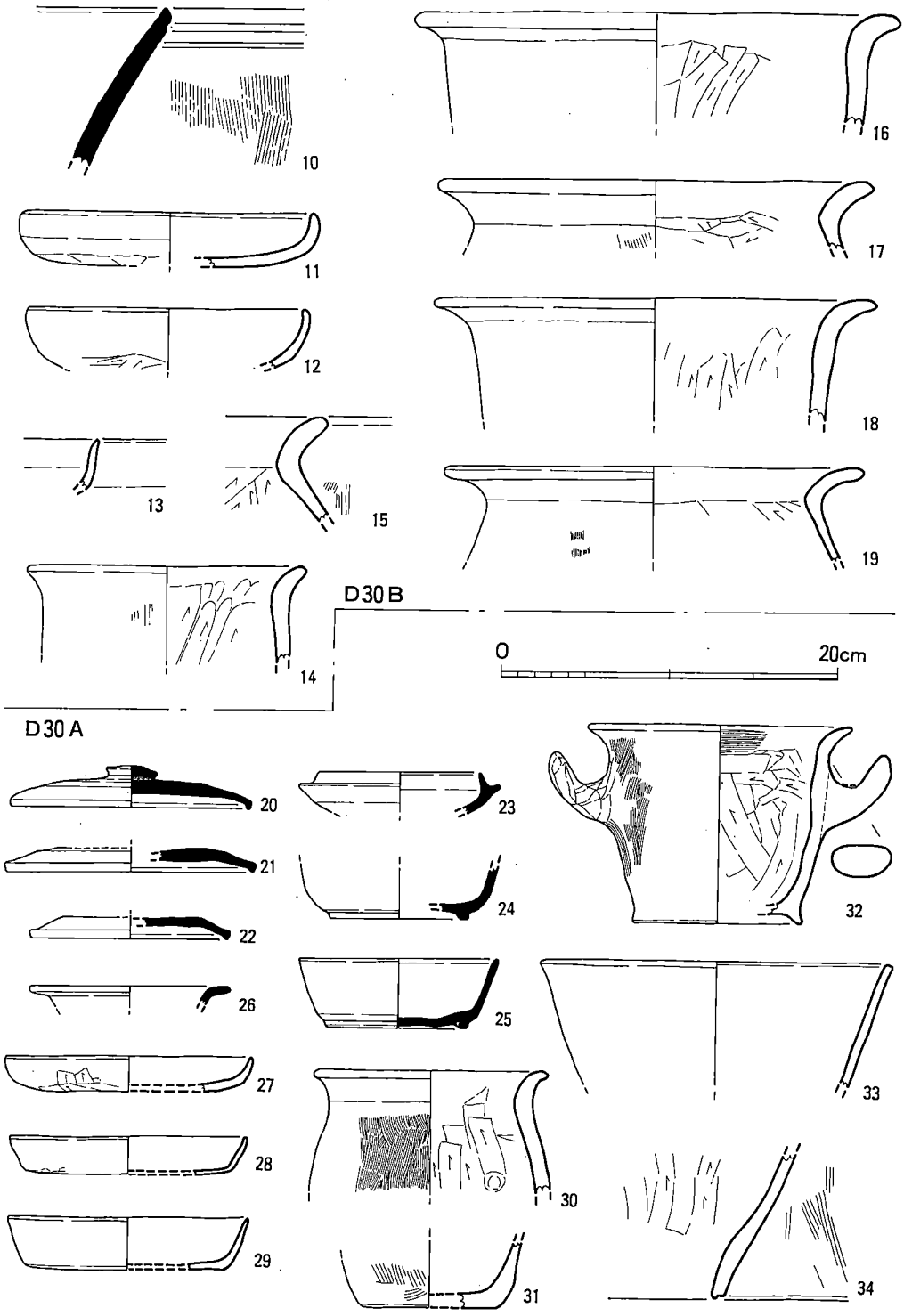
第175図　1号井戸出土土器実測図(1/4)



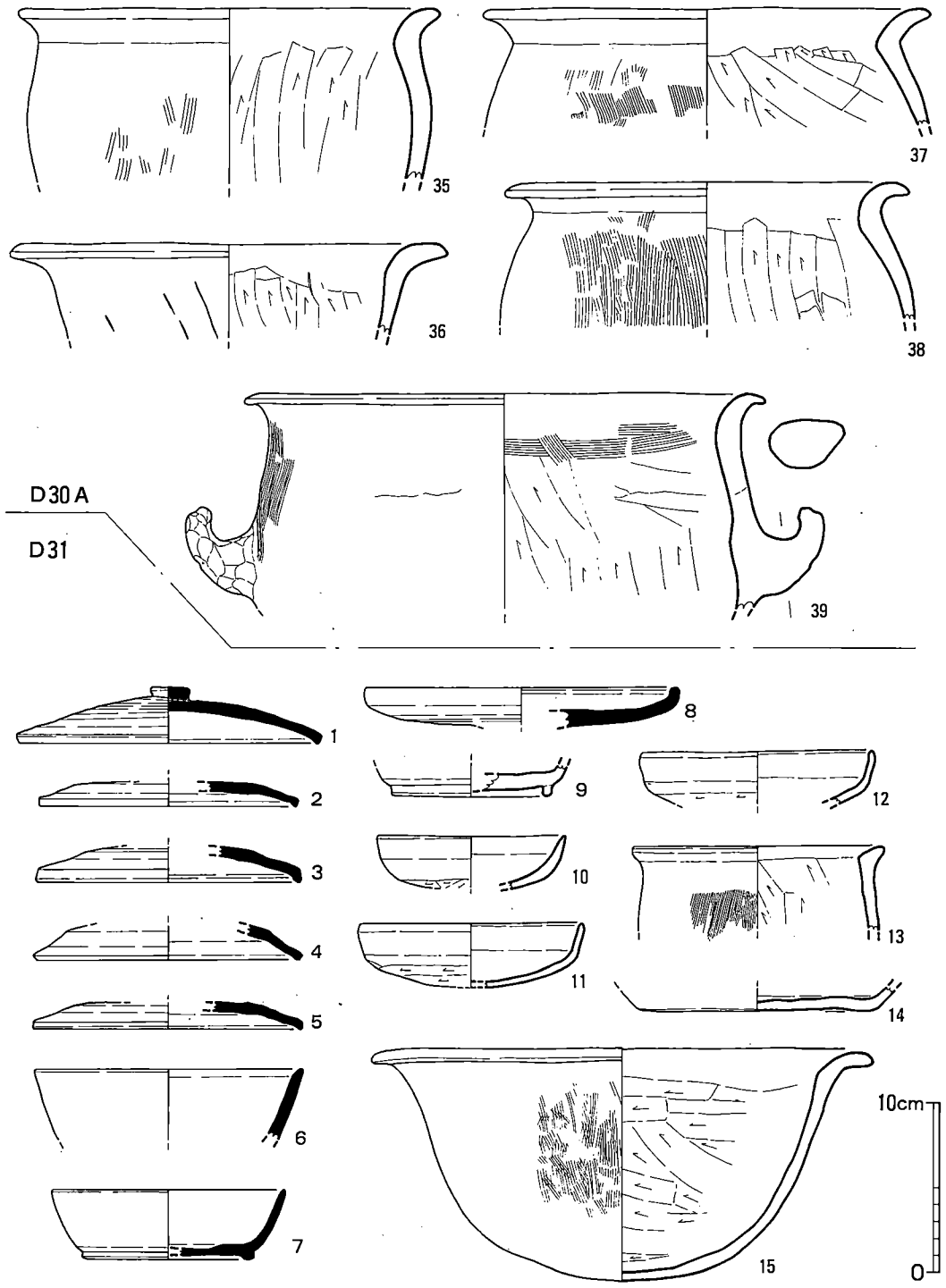
第176図　23・24号土坑出土土器実測図(1/4)



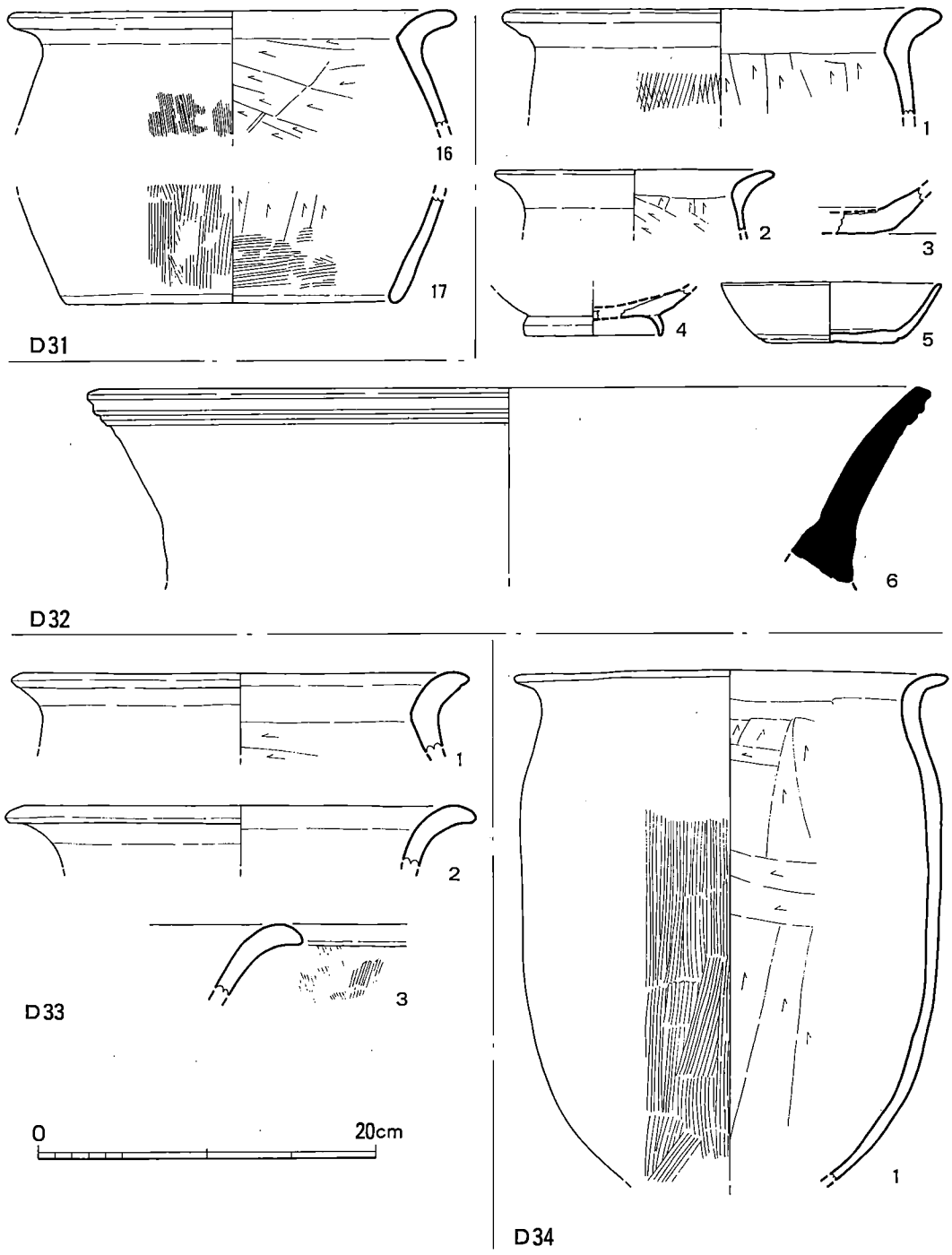
第177図　25～28・30B号土坑出土土器実測図(1/4)



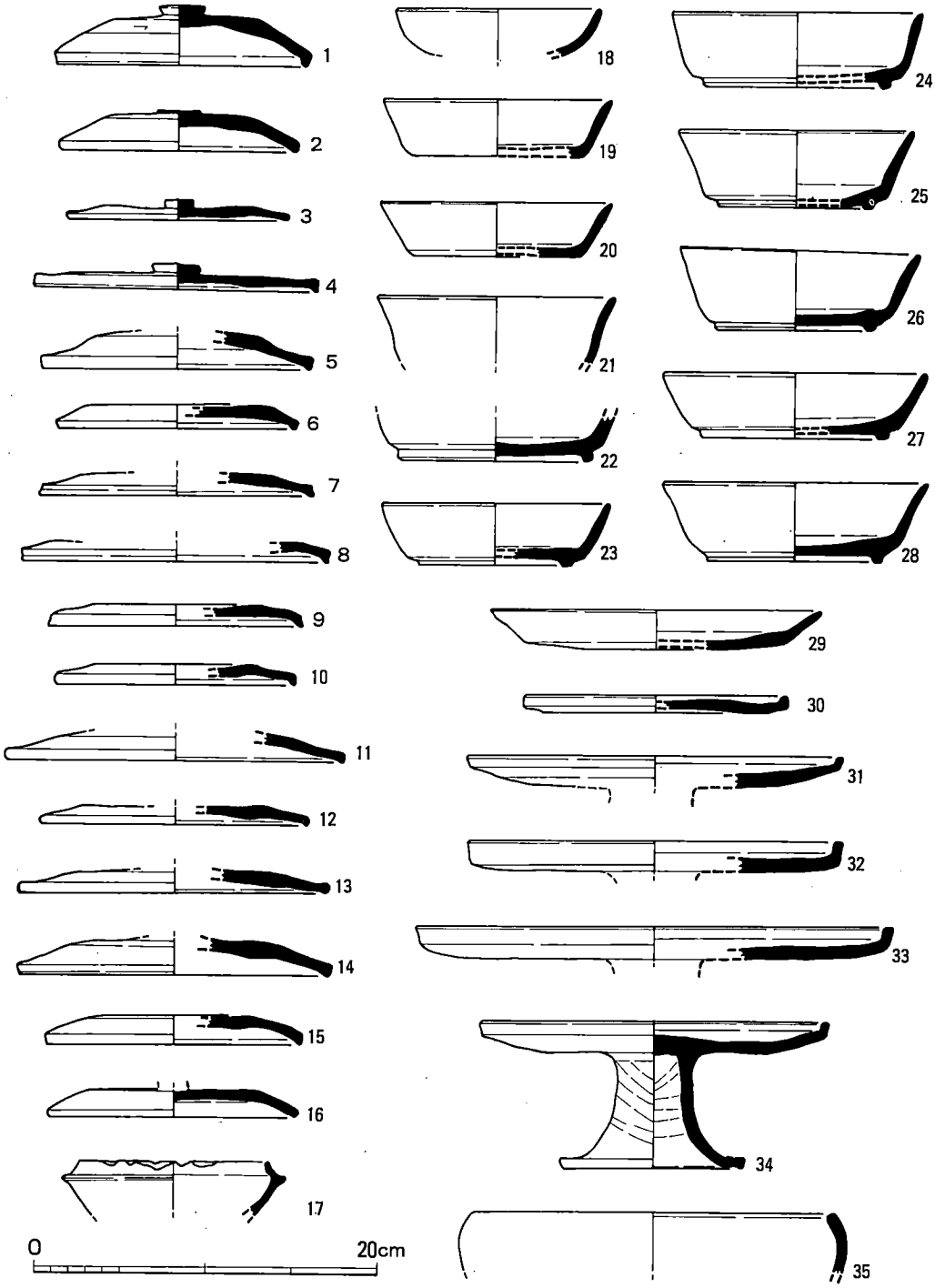
第178図　30B・30A号土坑出土土器実測図(1/4)



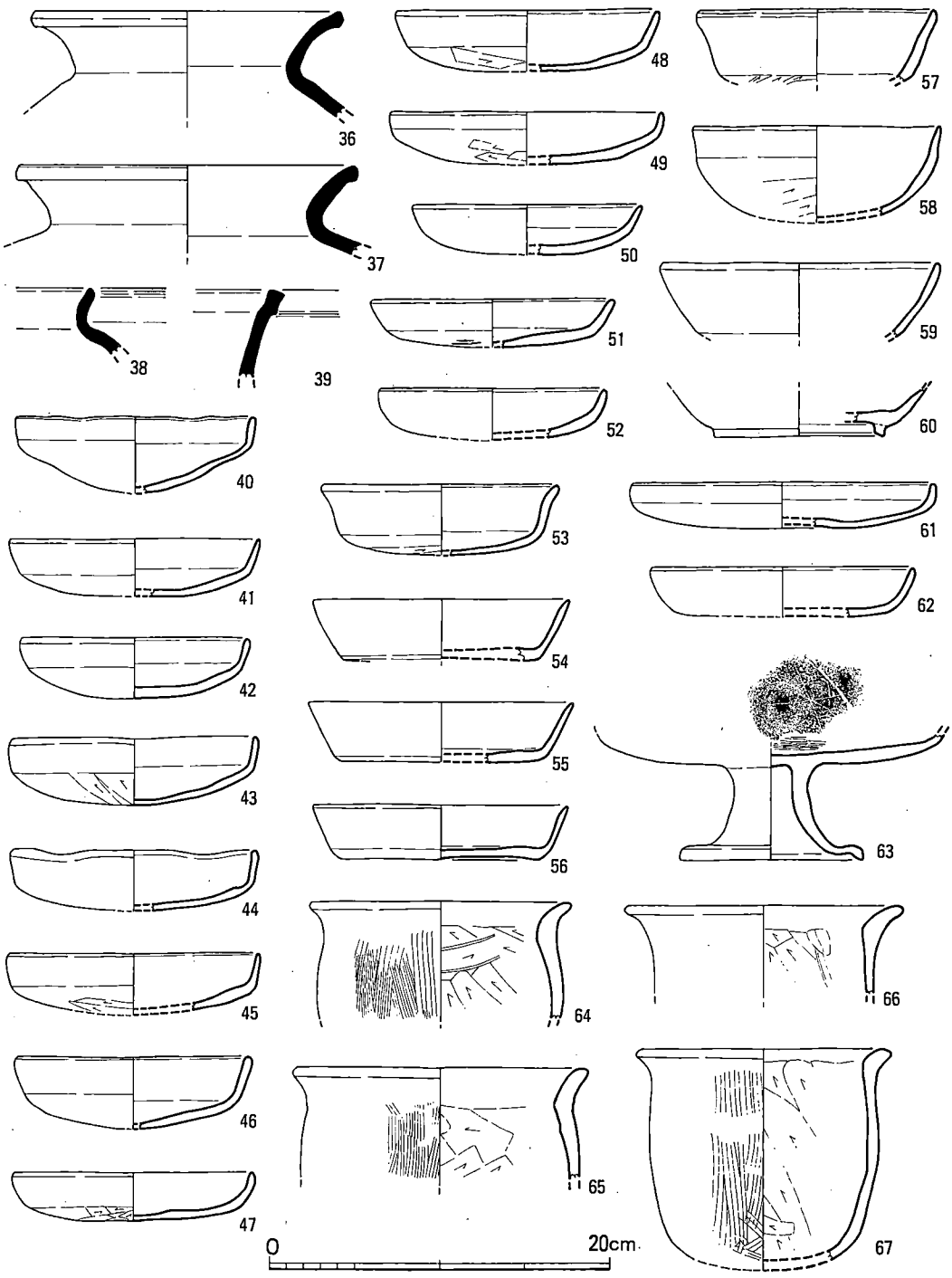
第179図　30A・31号土坑出土土器実測図(1/4)



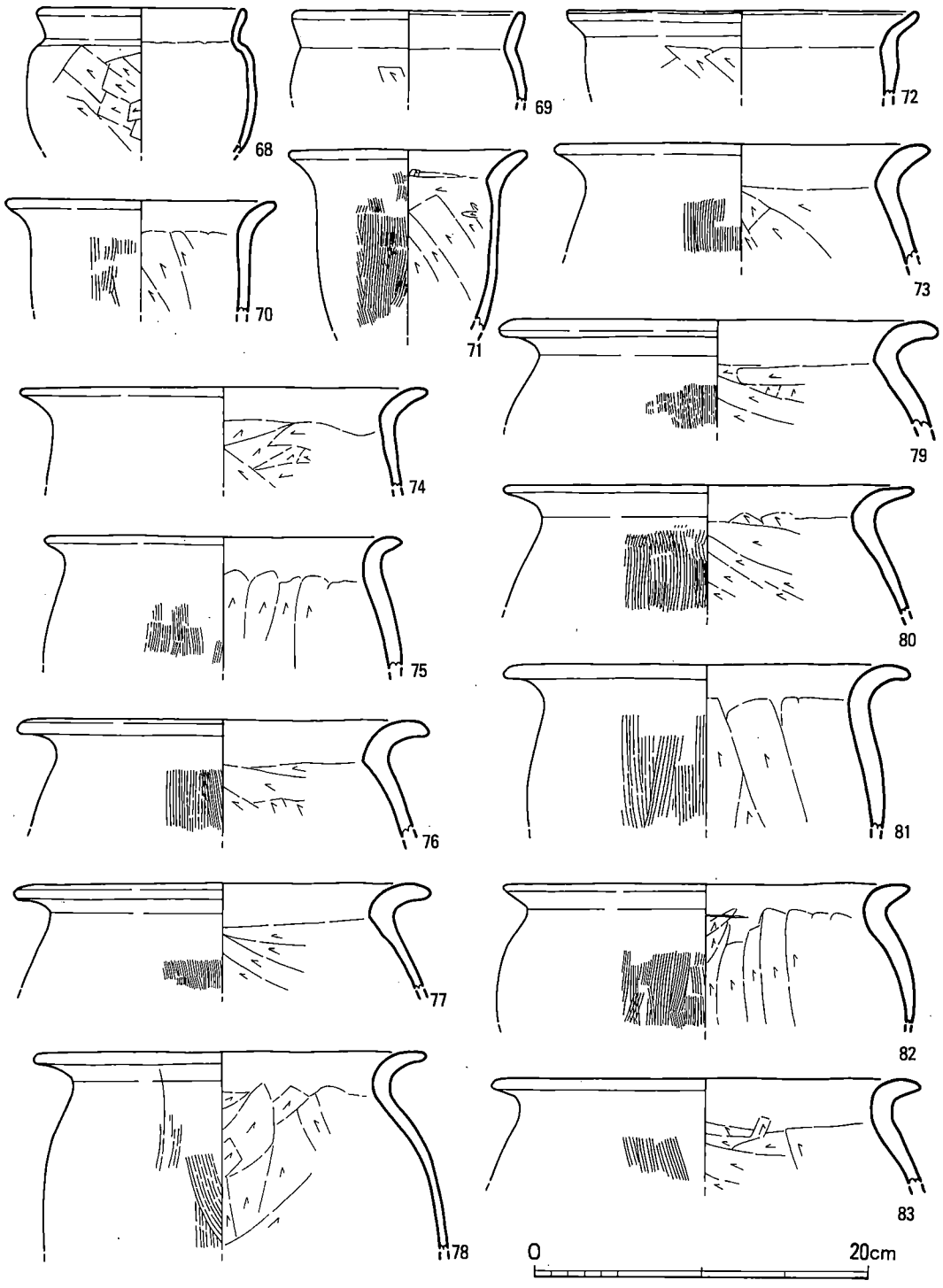
第180図　31～34号土坑出土土器実測図(1/4)



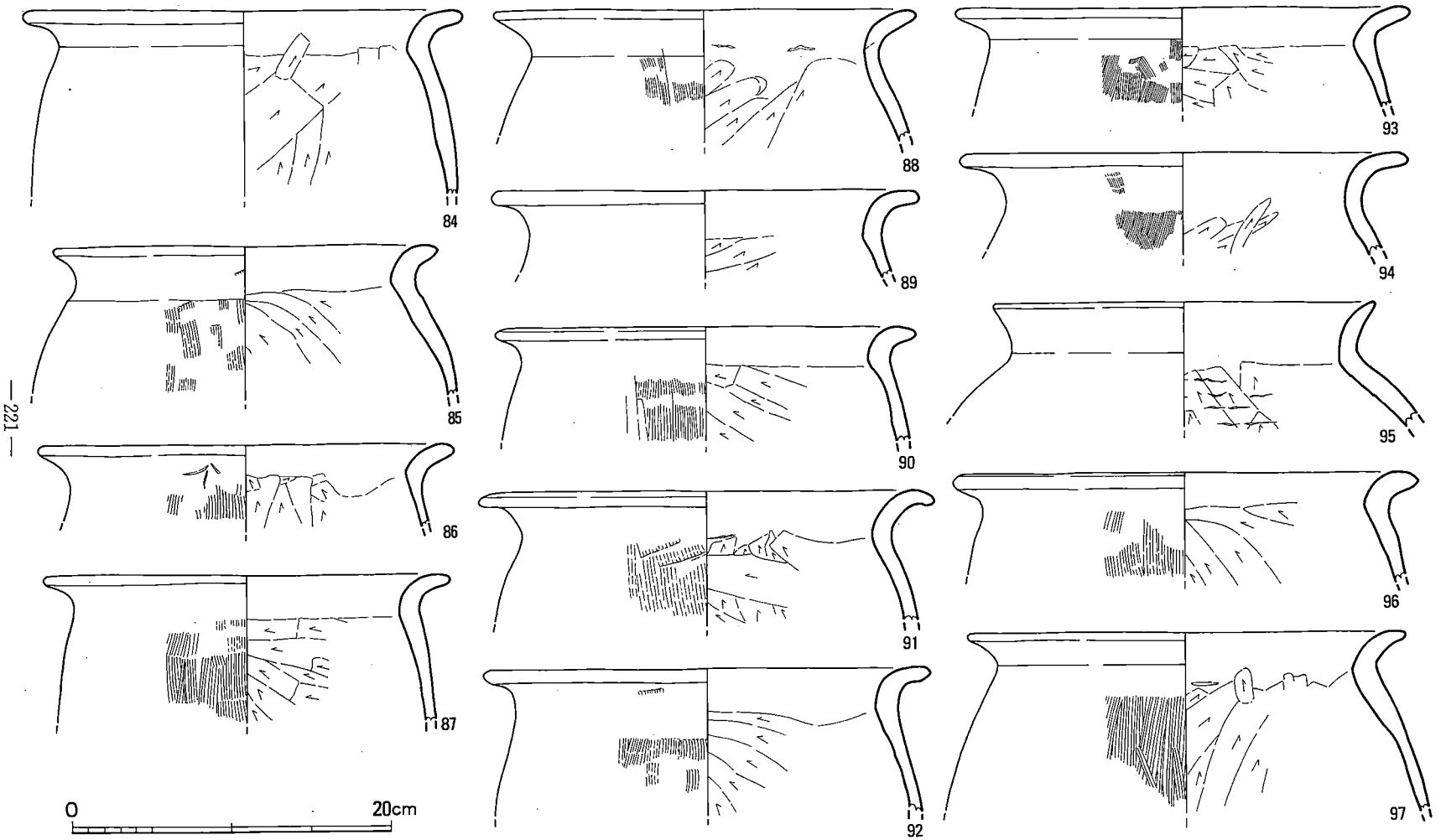
第181図　35号土坑出土土器実測図①(1/4)



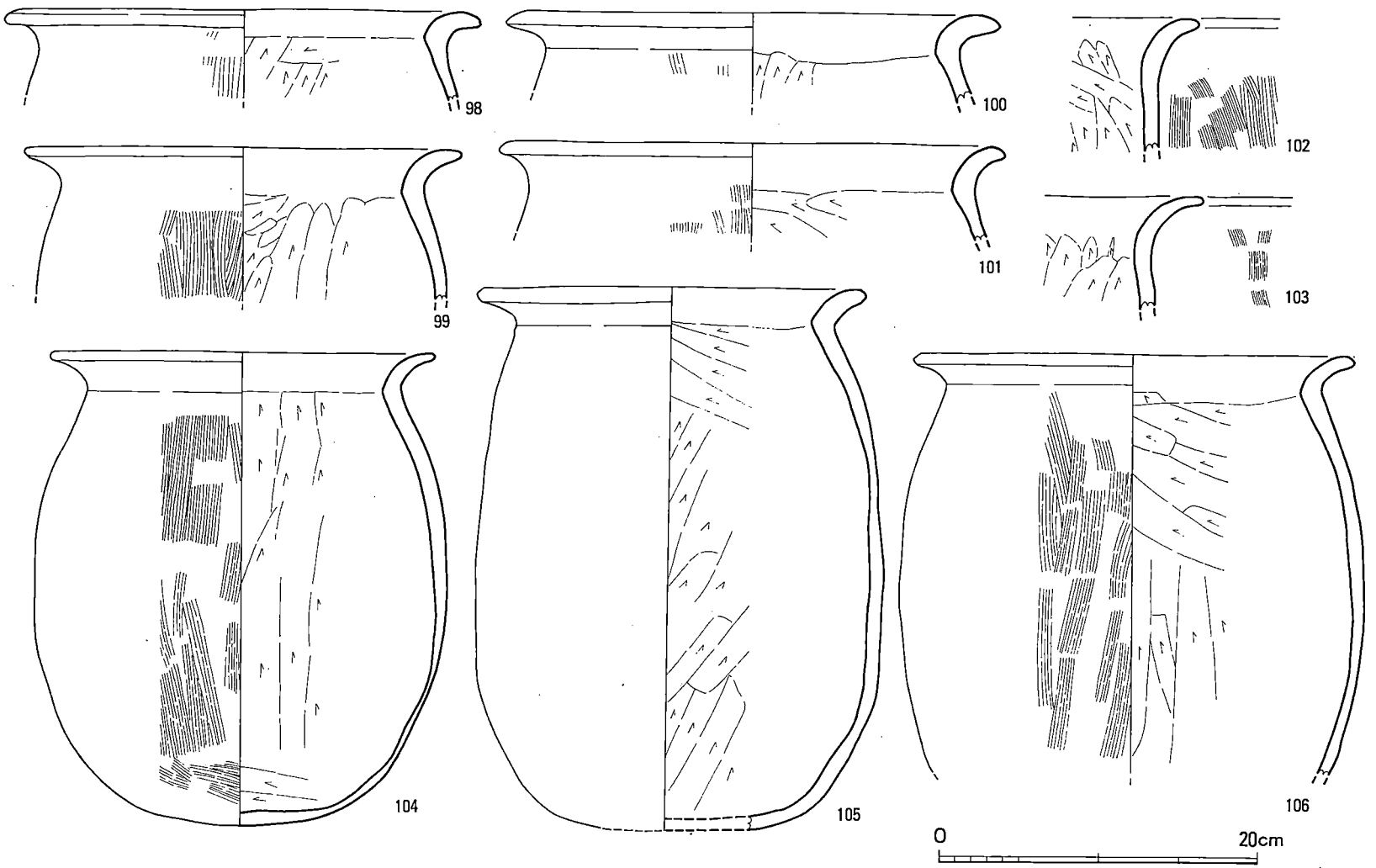
第182図　35号土坑出土土器実測図②(1/4)



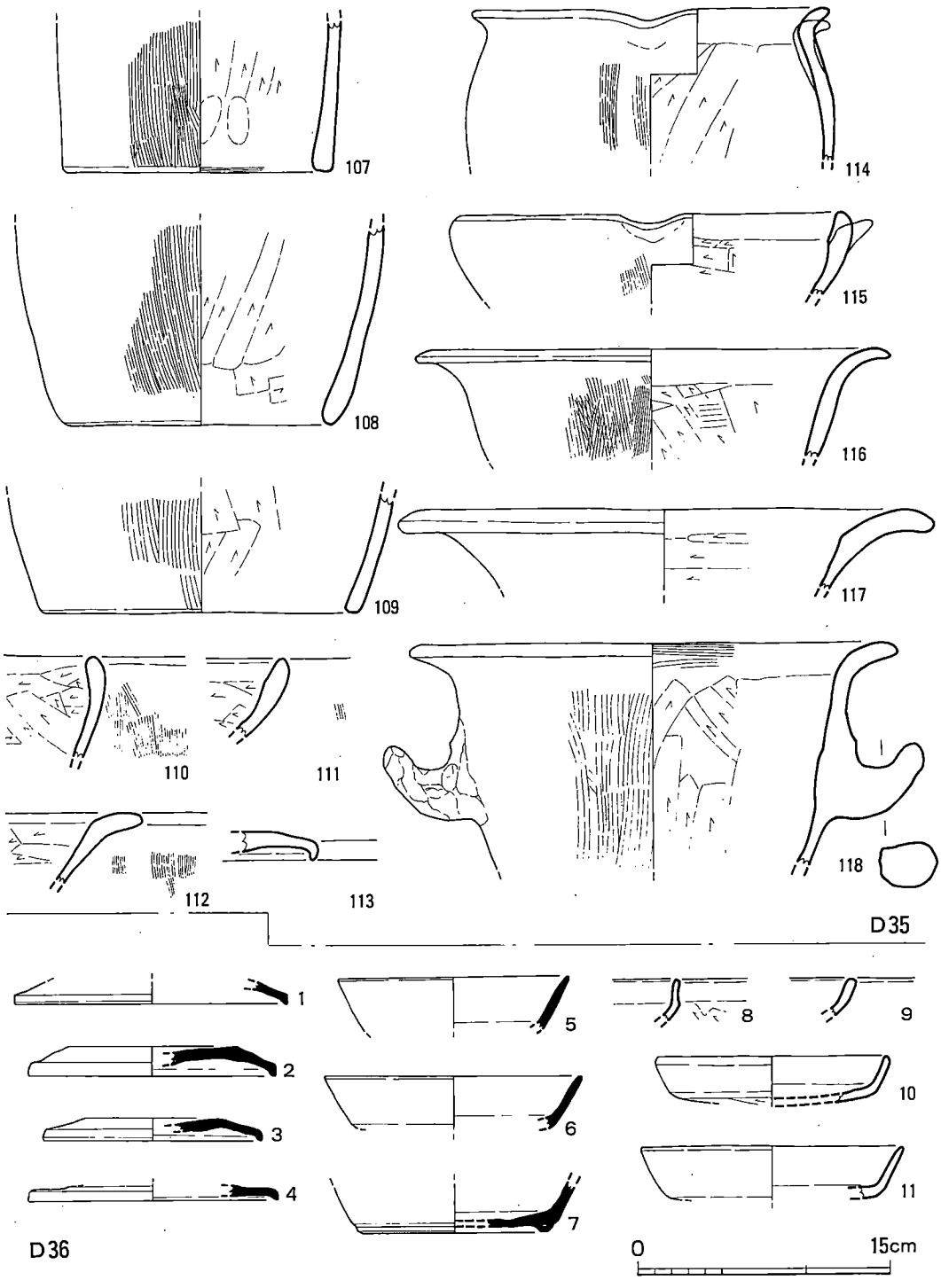
第183図　35号土坑出土土器実測図③(1/4)



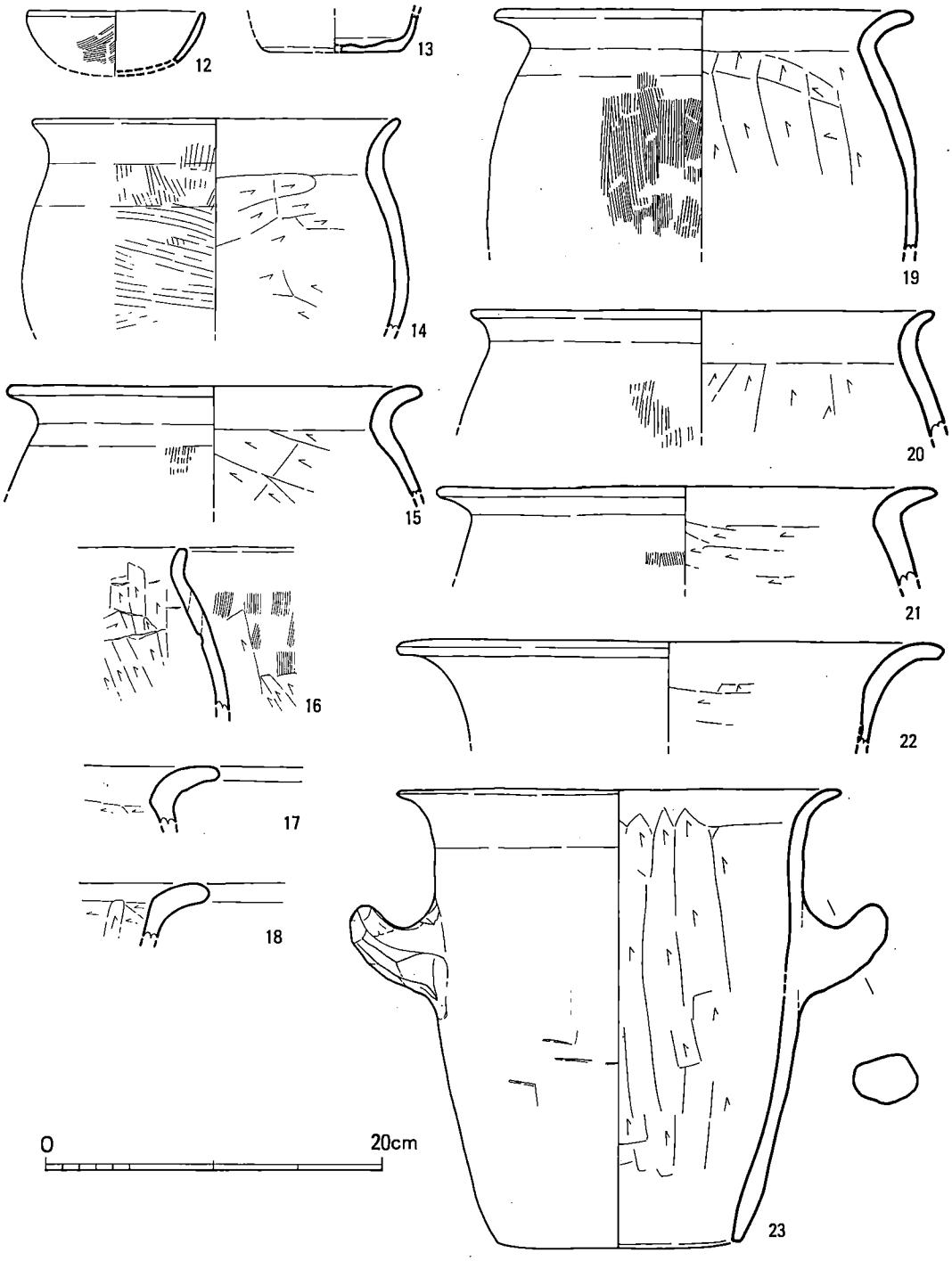
第184図　35号土坑出土土器実測図④(1/4)



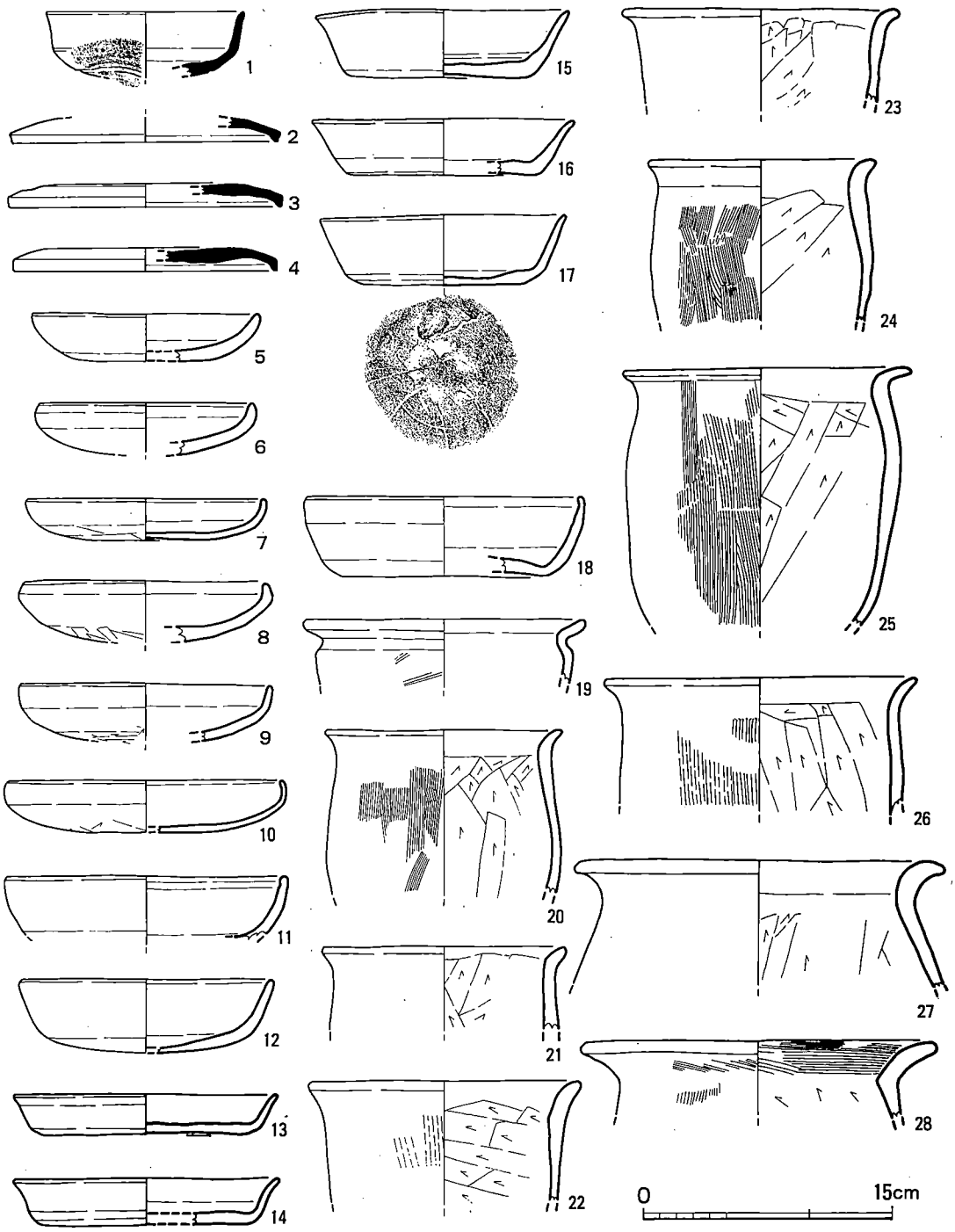
第185図　35号土坑出土土器実測図⑤(1/4)



第186図　35・36号土坑出土土器実測図(1/4)

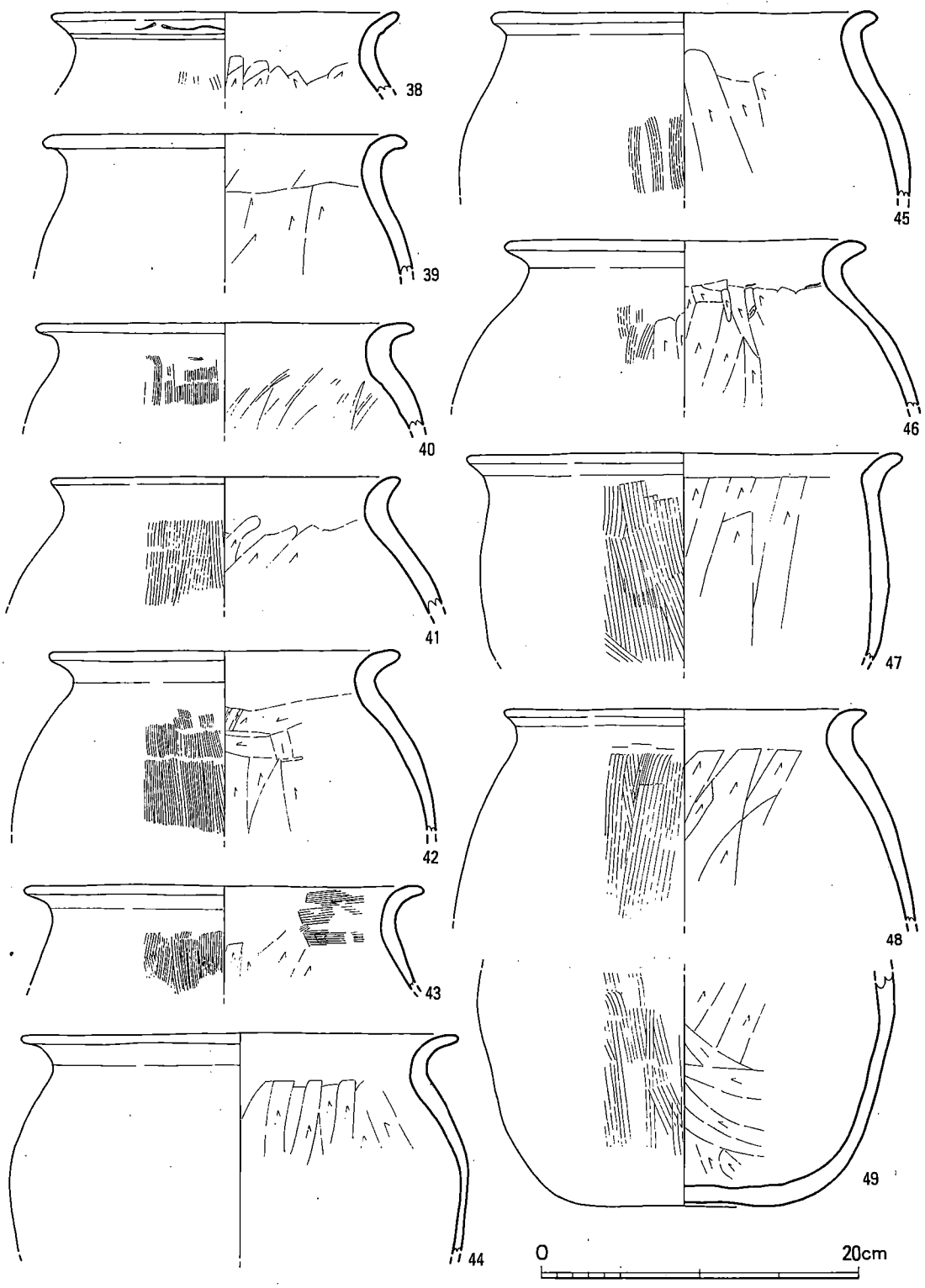


第187図　36号土坑出土土器実測図(1/4)

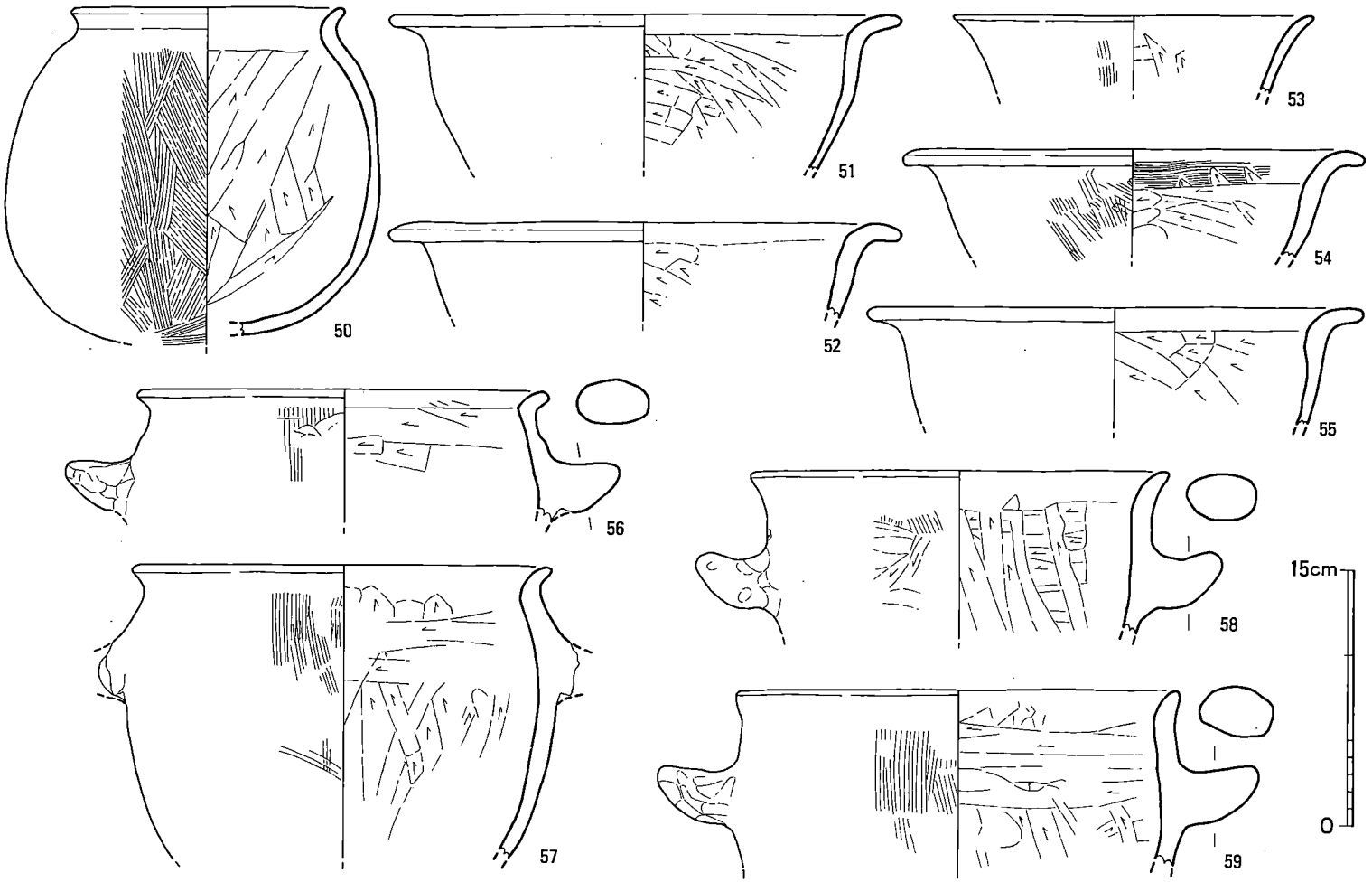


第188図　37号土坑出土土器実測図①(1/4)

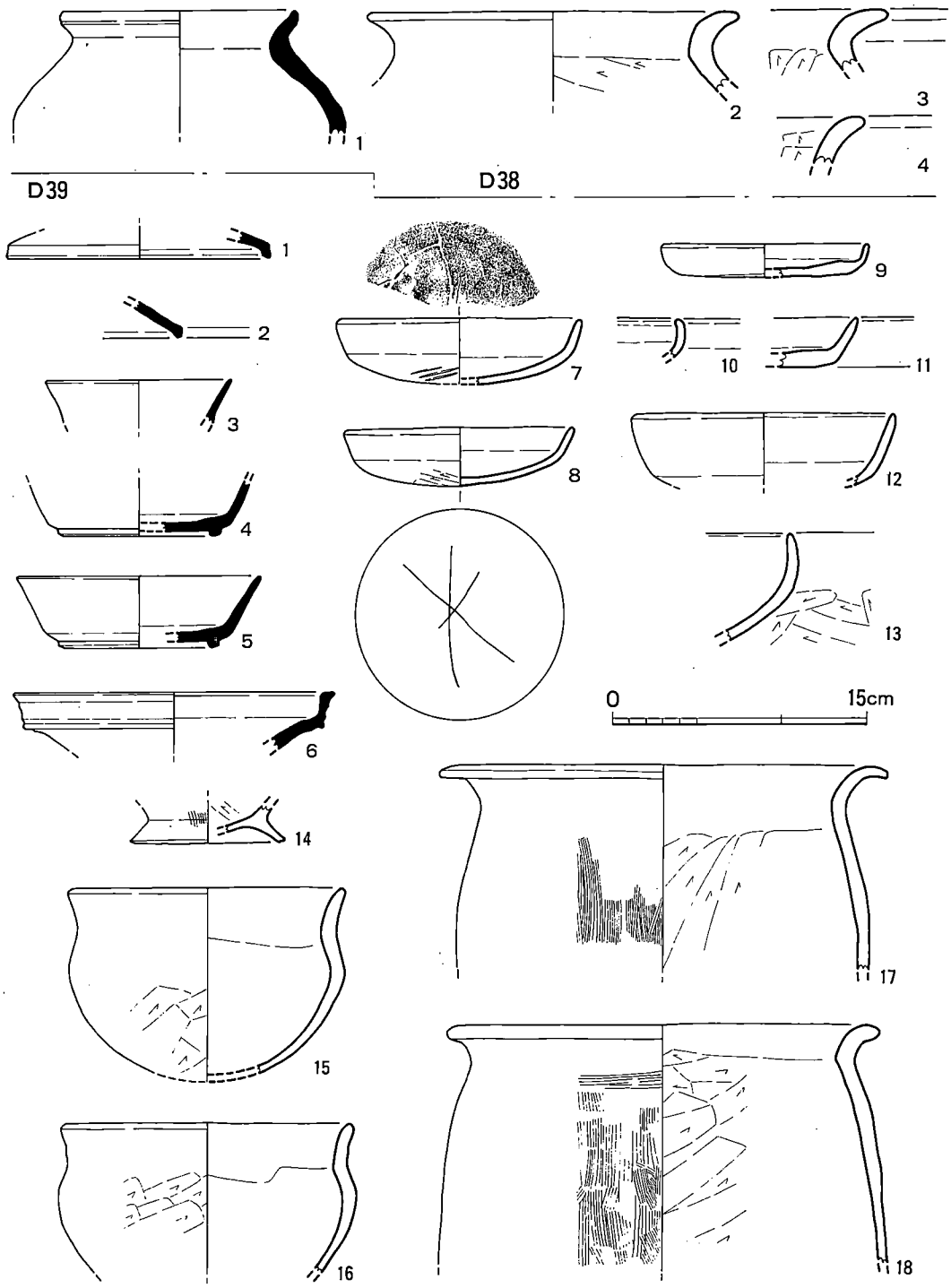
第189図　37号土坑出土土器実測図②(1/4)



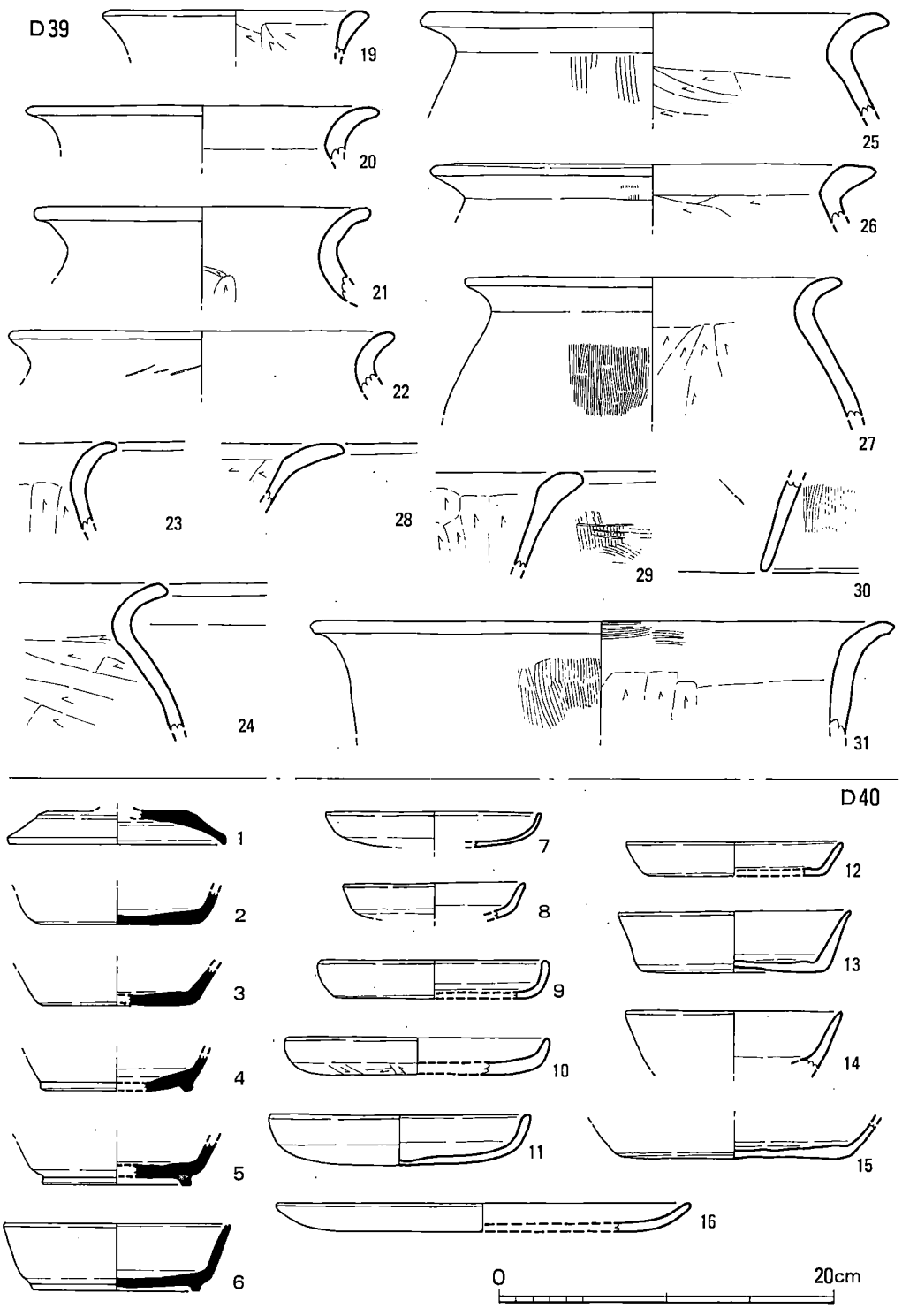
第190図　37号土坑出土土器実測図③(1/4)



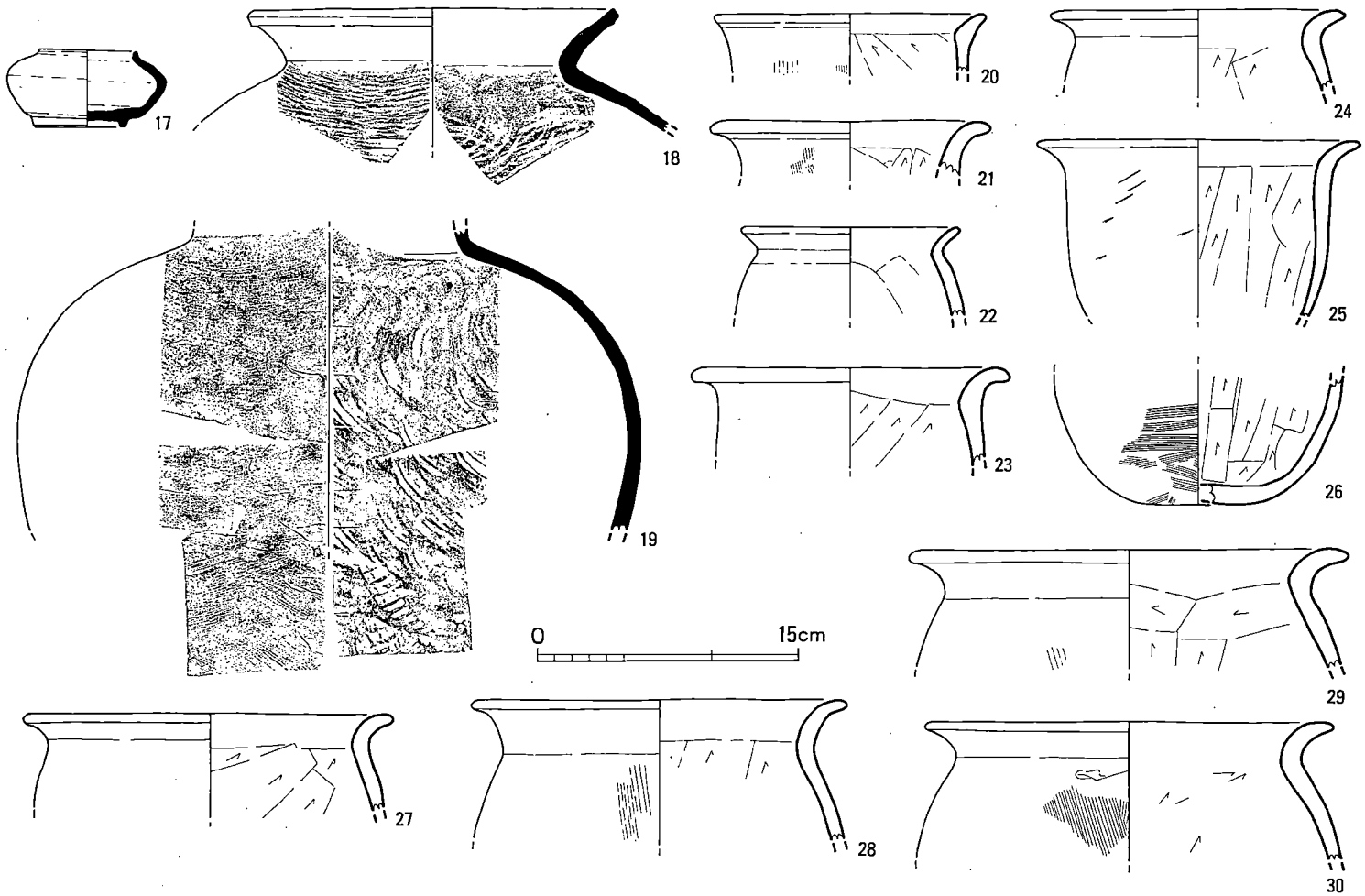
第191図　37号土坑出土土器実測図④(1/4)



第192図　38・39号土坑出土土器実測図(1/4)

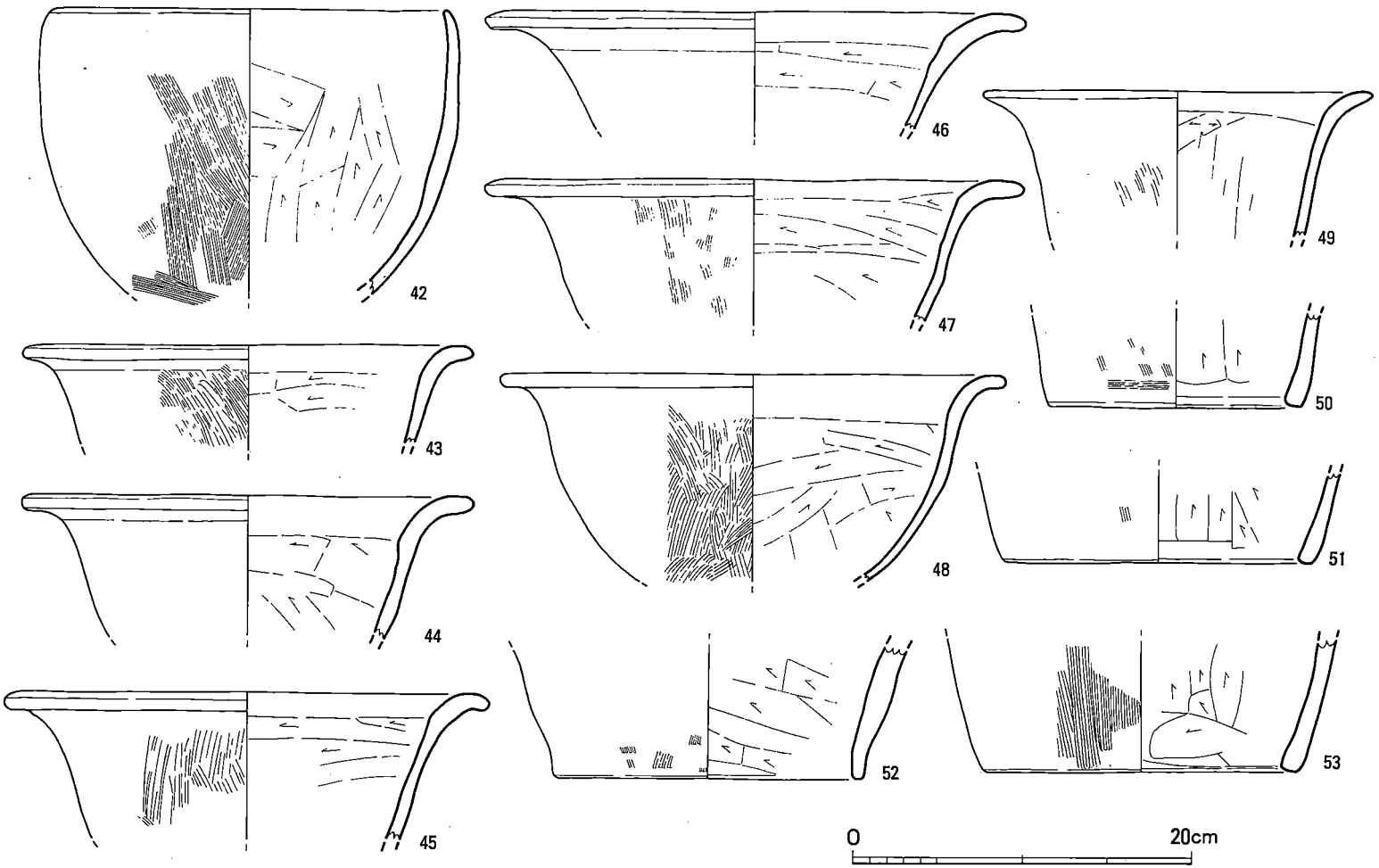


第193図　39・40号土坑出土土器実測図(1/4)

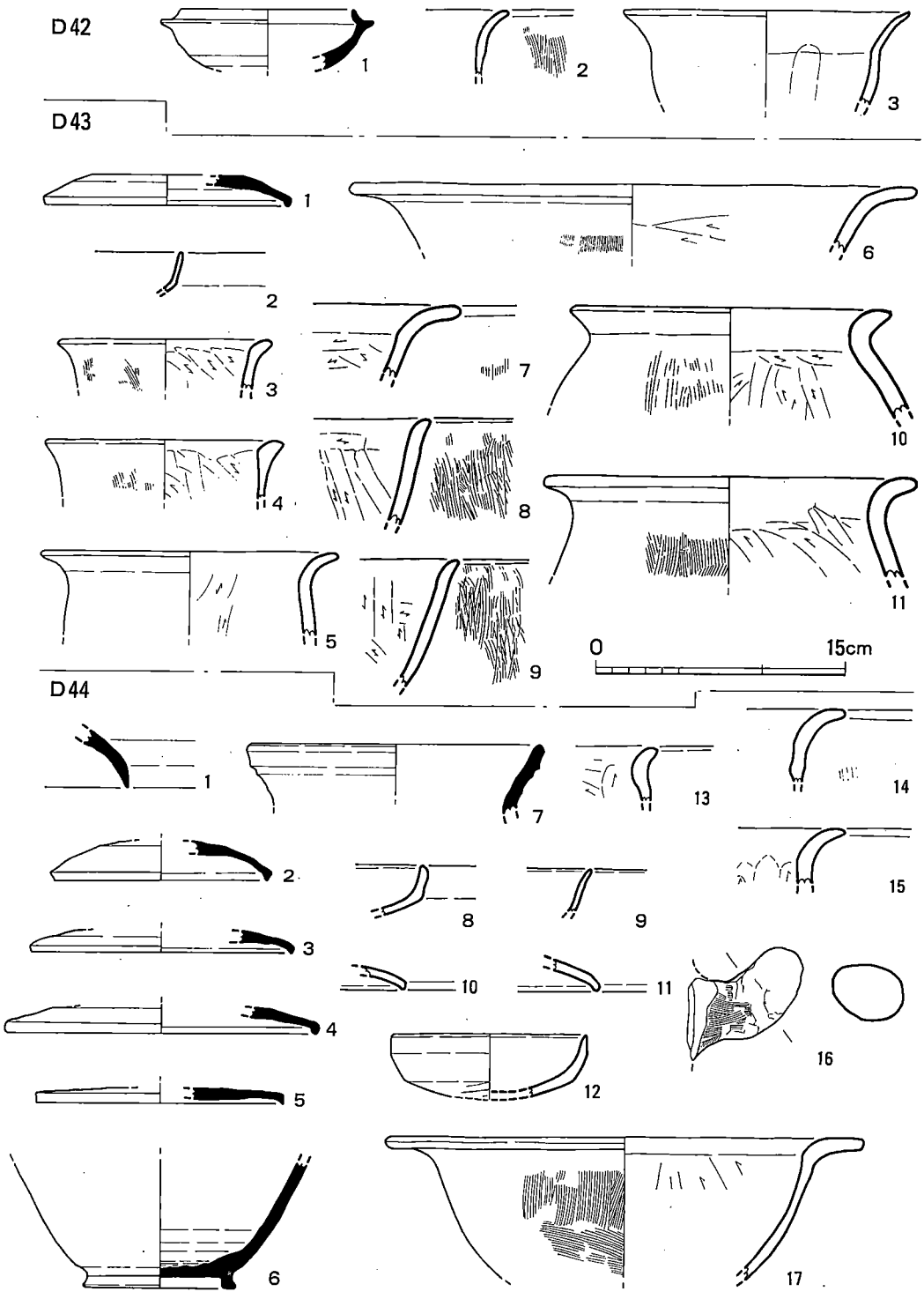


第194図　40号土坑出土土器実測図①(1/4)

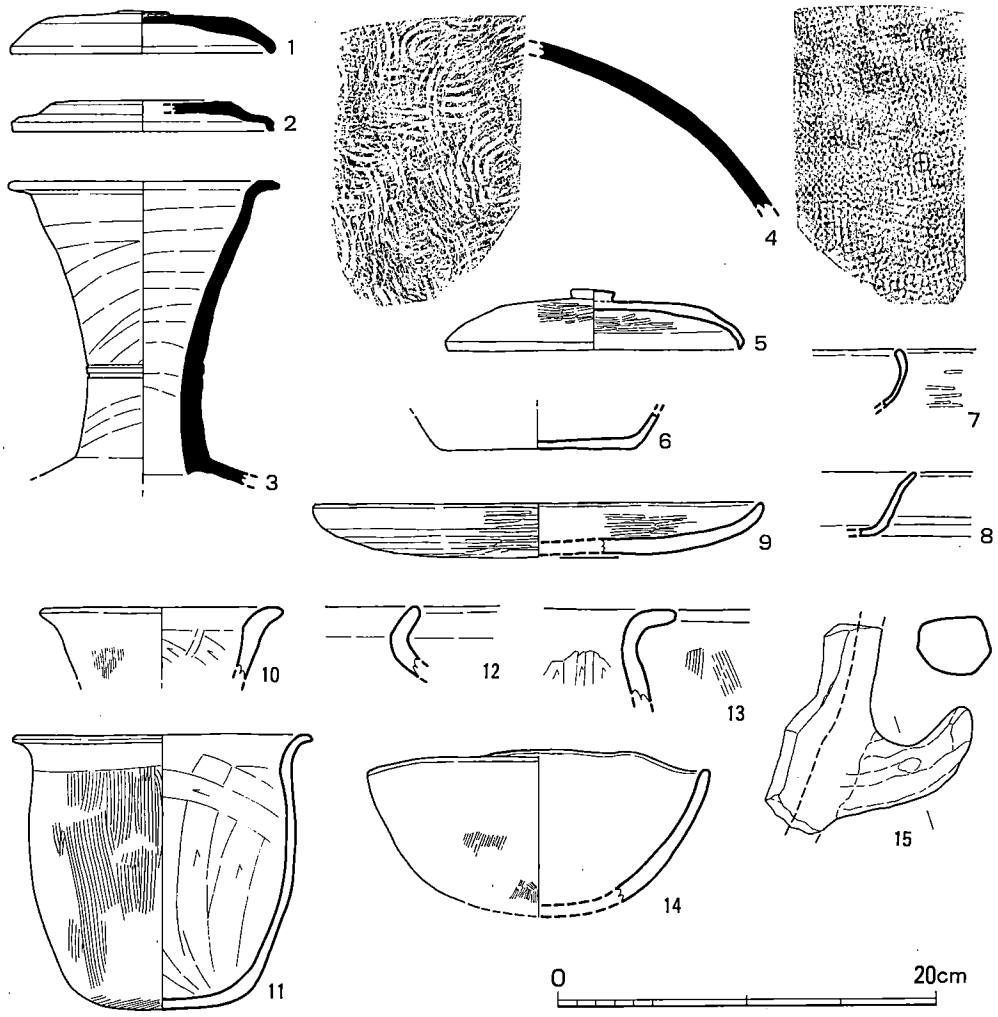
第195図　40号土坑出土土器実測図②(1/4)



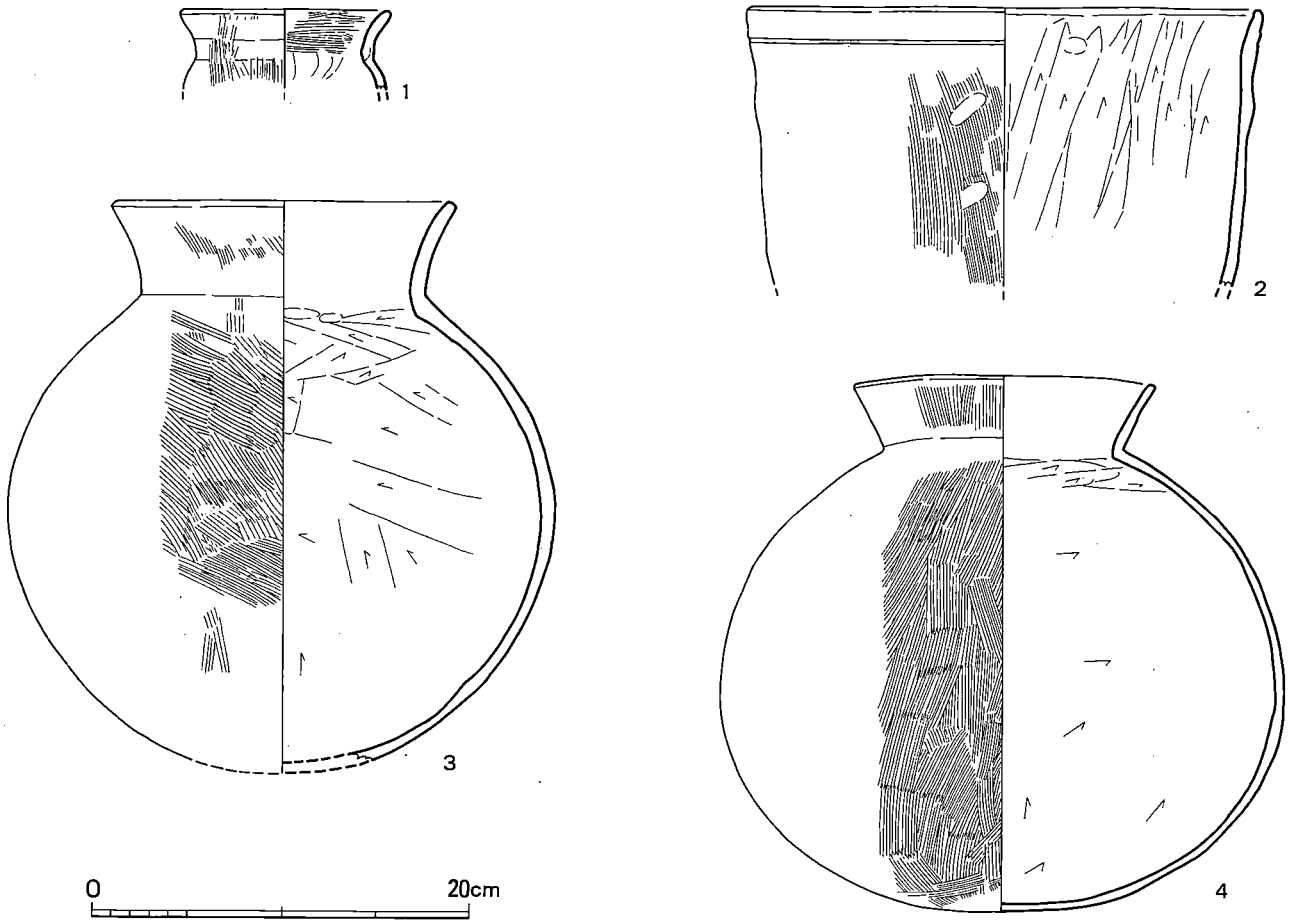
第196図　40号土坑出土土器実測図③(1/4)



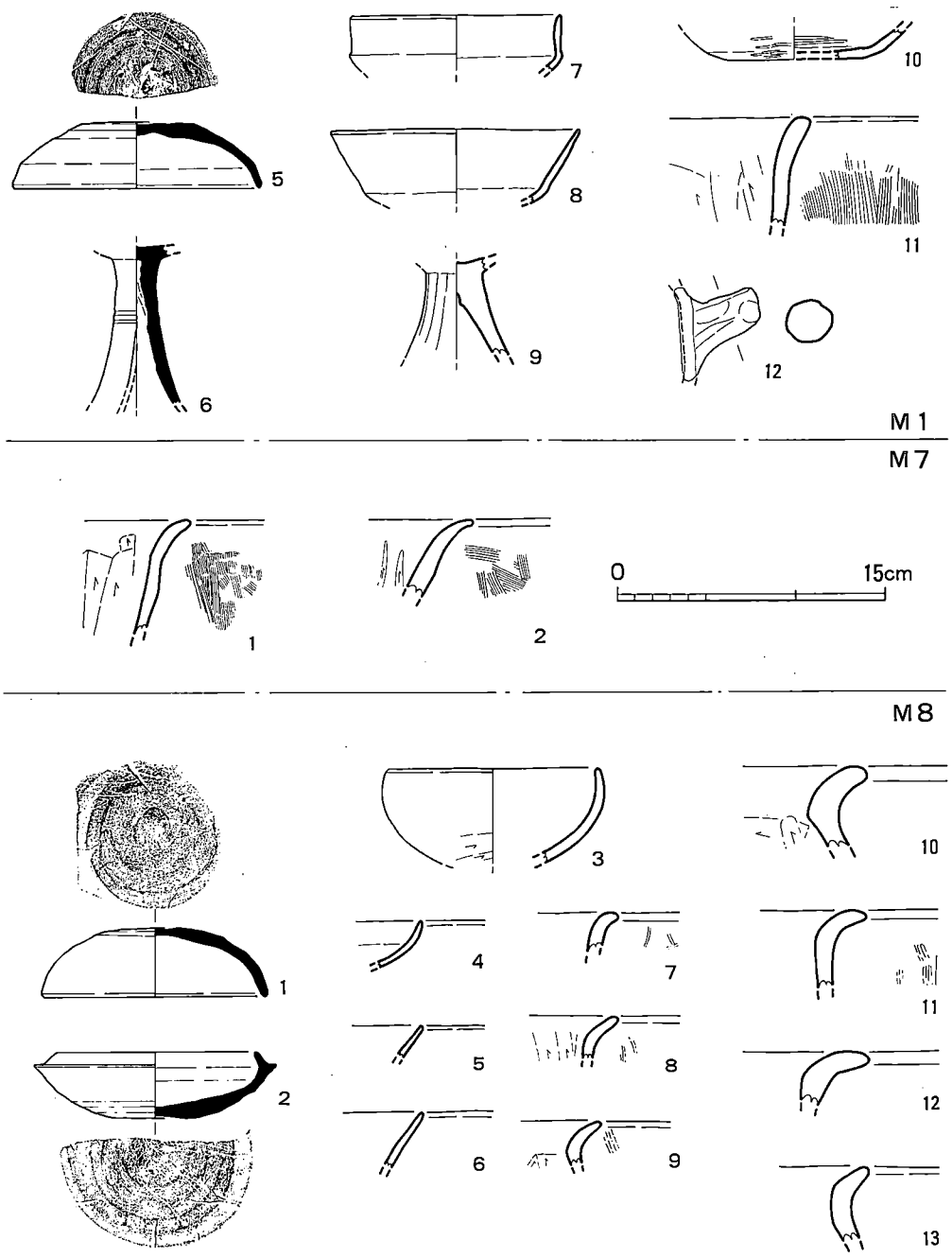
第197図　42～44号土坑出土土器実測図(1/4)



第198図　45号土坑出土土器実測図(1/4)



第199図　1号溝出土土器実測図(1/4)



第200図　1・7・8号溝出土土器実測図(1/4)

第Ⅰ表　宮原遺跡出土土器法量表　①

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
住113	(第130図) 1	土師器	高坏	1/10	①13.8	
〃	2	〃	〃			
〃	3	〃	支脚		①13.4 ④14.8	カマド内支脚部
〃	4	〃	甕	1/6	①17.0	
住114	1	須恵器	坏身	1/4	①12.4 ②3.9	カマド周辺
〃	2	土師器	坏	1/8	①13.2	覆土
〃	3	〃	高坏	1/10	①13.0	覆土
〃	4	〃	〃	1/4		下層
〃	5	〃	〃	1/4	①15.0	カマド内
〃	6	〃	〃			カマド内
〃	7	〃	〃			覆土
〃	8	〃	坏			覆土
〃	9	〃	甕	1/8	①32.0	覆土
〃	10	〃	〃	1/5	①25.0	床面
〃	11	〃	〃	1/5	①25.0	床面
〃	12	〃	〃		①13.5 ④14.0	カマド右袖内
〃	13	〃	〃	1/4	①12.0	
〃	14	〃	〃	1/8	①12.0	覆土、精製
〃	15	〃	〃	1/5	①18.4	床面
〃	16	〃	〃	1/7	①17.4	覆土
〃	17	〃	〃	1/8	①18.0	覆土
〃	18	〃	〃			下層
〃	(第131図) 19	〃	甑			覆土
〃	20	〃	甕			カマド右袖内
〃	21	〃	〃			カマド右袖内、柱穴内
〃	22	〃	〃	1/4	④16.0	カマド内
住115	1	〃	坏	1/8	①11.6	覆土
〃	2	〃	〃			下層、精製
〃	3	〃	〃		①11.1 ②4.5	床面
〃	4	〃	〃	1/4	①12.1	覆土、精製
〃	5	〃	〃	1/4	①12.0	下層、精製
〃	6	〃	高坏か	1/8	①16.0	覆土
〃	7	〃	甕	1/8	①16.4	
〃	8	〃	〃	1/6	①14.0	覆土
〃	9	〃	支脚		①11.7 ④16.6	カマド内支脚
〃	10	〃	〃	完形	①12.4 ②16.0 ④15.2	カマド内支脚

※備考欄の遺構番号等は旧番号である。

②

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
住115	11	土師器	壺		①16.7 ②28.3 ④26.6	カマド内
住116	(第132図) 1	〃	高台付埦	完形	①7.35 ②6.9 ③6.4	床面、P2
〃	2	〃	甕	1/4	①15.2	床面、P1
〃	3	〃	〃	1/4	①29.0 ④28.2	カマド
〃	4	〃	〃	3/8	①29.0	カマドA
住117	1	土師器	支脚		①16.6 ②15.4	カマド支脚
〃	2	〃	甕		①13.0	カマド傍
住118	1	〃	支脚	完形	①12.05 ②10.55	カマド支脚
住119	1	〃	甕	1/6	①16.4	床下層土坑
〃	2	〃	〃	1/8	①14.0	カマド下層
〃	3	〃	〃	1/4	①16.0	カマド付近A群
〃	4	〃	〃	1/5	①14.0	埋土中
〃	5	〃	〃	1/5	①14.0	覆土
〃	6	〃	—			床下層土坑
〃	(第133図) 7	〃	甕	1/8	①31.6	カマド付近
〃	8	〃	〃			カマド付近
住120	1	〃	坏			埋土中、精製
〃	2	〃	甕	1/8	①14.0	埋土中
〃	3	〃	〃	1/2	①17.4	埋土中
〃	4	〃	〃	1/4	①17.4	カマド付近下層
住121	1	須恵器	坏蓋	1/8	①13.0	埋土中
〃	2	〃	〃	1/10	①13.1	埋土中
〃	3	土師器	高坏?			埋土中
〃	4	〃	坏			埋土中
〃	5	〃	甕	1/6	①19.6	A群カマド周辺
〃	6	〃	甑			埋土中
〃	7	〃	甕			埋土中
〃	8	〃	〃			カマド周辺
住122	1	須恵器	坏身		①10.9 ②4.2cm	ヘラ記号、床面
〃	2	土師器	甑			埋土中
〃	3	〃	〃			埋土中
〃	4	〃	甕			カマド周辺
〃	5	〃	坏身	2/3	①11.7	カマド周辺床下層埋土　精製
〃	6	〃	坏身	1/4	①11.2	下層、精製
〃	7	〃	手担土器		③6.5	埋土中

③

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
住122	8	土師器	坏			埋土中、精製
住124	(第134図) 1	須恵器	坏蓋		①14.0	下層
〃	2	〃	〃	1/4	①15.0	
〃	3	〃	〃			
〃	4	〃	坏身	1/8	③10.0	
〃	5	〃	〃	1/4	①12.8 ②3.6 ③8.4	
〃	6	〃	〃	1/5	①14.4 ②2.0 ③11.0	
〃	7	〃	〃	1/10	①15.0	
〃	8	〃	〃	1/4	①17.4 ②3.0 ③11.4	
〃	9	〃	坏	1/10	①23.0	
〃	10	土師器	坏蓋		①14.0	
〃	11	〃	〃			住居付近上面
〃	12	〃	坏			住居付近上面
〃	13	〃	〃			
〃	14	〃	〃			住居付近上面
〃	15	〃	高坏		①12.6	
〃	16	〃	〃	1/8	①14.3	下層
〃	17	〃	甕		①13.8	住居付近上面
〃	18	〃	〃		①16.5	住居付近上面
〃	19	〃	〃		①22.0	
〃	20	〃	〃		①22.6	下層
〃	21	〃	〃	1/5	①26.8	
〃	22	〃	坏			
〃	23	〃	甑			
〃	24	〃	〃			
〃	25	〃	甕			
〃	26	〃	〃			
〃	27	〃	〃			
〃	28	〃	〃			
〃	29	〃	〃			
〃	30	〃	〃			
〃	31	〃	〃			
〃	32	〃	〃			下層
住125	(第135図) 1	須恵器	坏蓋	1/10	①17.0	下層埋土中
〃	2	〃	〃			下層埋土中
〃	3	〃	〃			下層埋土中

④

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
住125	4	須恵器	坏蓋			下層
〃	5	〃	〃			下層埋土中
〃	6	〃	坏		①13.8	下層埋土中
〃	7	〃	〃			埋土中
〃	8	〃	〃			下層埋土中
〃	9	土師器	坏蓋	1/8	①16.2	埋土中
〃	10	〃	〃			埋土中
〃	11	〃	坏身			P－1
〃	12	〃	〃			P－1
〃	13	〃	坏			埋土中
〃	14	〃	〃	1/8	①13.0	P－1
〃	15	〃	甕			下層
〃	16	〃	〃			P－1
〃	17	〃	〃			埋土中
〃	18	〃	〃	1/8	①18.1	埋土中
〃	19	〃	〃	1/7	①30.0	埋土中
住126	1	須恵器	坏蓋		①15.2	下層
〃	2	〃	坏身		①13.0 ②3.4 ③9.2	P－7
〃	3	〃	〃		①19.1 ②2.6 ③15.8	P－7
〃	4	〃	甕			下層
〃	5	土師器	坏			下層
〃	6	〃	〃		①10.6	下層
〃	7	〃	〃		①12.7	住居付近横断拡張土層断面
〃	8	〃	－			下層
〃	9	須恵器	坏			下層
〃	10	土師器	甑			下層
〃	11	〃	甕		①14.2	下層
〃	12	〃	〃			下層
〃	13	〃	〃		①20.8	P－3
住127	1	土師器	甕	1/9	①23.4	
〃	2	〃	〃			
〃	3	〃	〃			下層
〃	4	〃	〃			
〃	5	〃	坏蓋			
〃	6	〃	坏			
住128	(第136図) 1	須恵器	坏身	1/8	①12.3	

⑤

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
住128	2	須恵器	坏蓋	1/8	①16.2	
〃	3	〃	〃	1/10	①18.6	下層
〃	4	〃	〃	1/8	①18.1	上面
〃	5	〃	坏身	1/6	③10.1	P－3
〃	6	〃	〃		③9.3	上面
〃	7	〃	坏			上面
〃	8	土師器	坏身	1/6	①14.1	住126・128付近下層
〃	9	〃	〃		①13.95 ②3.5 ③10.7	カマド土層断面にかかる
〃	10	〃	甕	1/6	①12.2	上面
〃	11	〃	〃	1/6	①12.6	
〃	12	〃	〃	1/6	①16.7	
〃	13	〃	〃	1/6	①19.2	下層
住129	1	須恵器	坏蓋			埋土中
〃	2	〃	〃	1/2	①14.35 ②3.15	埋土中
〃	3	〃	〃	1/2	①14.0	埋土中
〃	4	〃	〃			下層
〃	5	〃	〃	1/4	①15.8 ②2.35	床
〃	6	〃	〃	完形	①15.2 ②1.6	
〃	7	〃	坏身	1/3	①13.0 ②4.3 ③8.1	
〃	8	〃	〃	1/2	①13.6 ②4.15 ③8.65	
〃	9	〃	〃	1/8	①13.8②3.65 ③8.9	埋土中
〃	10	〃	〃	1/3	①17.0 ②4.85 ③10.8	埋土中
〃	11	〃	〃	1/2	③9.6	床下
〃	12	〃	〃	1/10	①15.2	下層
〃	13	土師器	〃	1/3	①13.3 ②3.15	P－14
〃	14	〃	〃		①13.8 ②3.3	埋土中
〃	15	〃	坏	1/8	①9.8	床
〃	16	〃	〃	1/6	①13.0	床
〃	17	〃	〃			下層
〃	18	〃	〃			下層
〃	19	〃	〃			下層
〃	20	〃	甕	1/6	①16.0	下層
〃	21	〃	〃	1/8	①20.0	
〃	22	〃	坏身	1/6	①15.0 ②3.5 ③11.4	下層 内底部に竹管文あり
〃	23	〃	〃	1/6	③11.0	下層 内底部にヘラ描きあり
住130	(第137図) 1	土師器	坏蓋	1/4	①14.9	埋土中

⑥

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
住132	1	須恵器	坏蓋		①16.2	
〃	2	〃	坏身		①9.3	
〃	3	〃	坏	1/10	①17.1	
〃	4	〃	坏身	1/6	①12.0	
〃	5	〃	甕	1/6	①10.6	
〃	6	土師器	坏身	1/8	①12.6	
〃	7	〃	坏			
〃	8	〃	甕	1/8	①14.8	
〃	9	〃	〃			
〃	10	〃	〃	1/10	①24.2	
〃	11	〃	〃		①27.2	
〃	12	〃	〃	1/6	①26.2	
〃	13	〃	〃		③6.4	カマド付近
〃	14	〃	甑			カマド
住126・128 129・130 132	1	須恵器	坏蓋			住126・129間の土堤
〃	2	〃	〃			住128・129付近横断拡張区土層断面
〃	3	〃	坏身	1/4	①10.0	〃
〃	4	〃	〃		①15.7 ②5.0 ③8.9	住126・129間土堤中D群
〃	5	〃	〃	1/12	①15.0 ②4.15 ③11.6	住126・128間土堤
〃	6	〃	〃	1/5	①13.6 ②4.45 ③9.0	住128・129付近横断拡張区土層断面
〃	7	〃	皿		①14.5 ②1.0 ③11.0	住126・129間の土堤
〃	8	土師器	坏	1/9	①16.6	住126・128・130・132付近
〃	9	〃	甕			住126・129間の土堤
〃	10	〃	〃			住129・130付近横断拡張区上層断面
〃	11	須恵器	坏蓋		①15.2	住126～132下層
〃	12	〃	〃		①15.0	住126～132下層
〃	13	〃	皿	1/7	①19.6②1.9 ③15.2	住126・128付近下層
〃	14	土師器	坏			住126～132下層
〃	15	〃	〃			住126・128付近下層
〃	16	〃	〃			住126・132下層
〃	17	〃	〃			住128～132下層
〃	18	〃	〃			住126～132下層
〃	19	〃	蓋			住126～132下層
〃	20	〃	坏身	1/12	①13.2	住126～132下層
〃	21	〃	甕			住126・128付近床下層
〃	22	〃	〃			住128・129付近横断拡張区上層断面

⑦

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
住126・128 129・130 132	23	土師器	甕			
住133	(第138図) 1	須恵器	坏蓋	1/2	①16.6 ②2.7	カマド右側
〃	2	〃	〃	1/3	①14.7 ②3.1	埋土中、転用硯
〃	3	〃	坏身	完形	①13.5 ②3.85 ③8.5	カマド右側
〃	4	〃	〃	1/5	①12.8 ②4.3 ③8.4	下層主柱穴傍 曇害土器
〃	5	土師器	〃	1/4	①13.1 ②4.05 ③8.2	埋土中
〃	6	〃	坏	1/2	①16.8	カマド内突出部 カマド付近下層中央穴
〃	7	〃	坏身	1/10	①16.8 ②4.6 ③8.4	下層主柱穴傍
〃	8	〃	〃	1/7	①16.4 ②6.4 ③9.0	下層
〃	9	〃	高坏			カマド付近A群
〃	10	〃	甕	1/8	①19.4	埋土中
〃	11	〃	〃	1/5	①13.4	埋土中
〃	12	〃	〃	1/12	①18.6	埋土中
〃	13	〃	〃			カマド付近A群
〃	14	〃	〃	1/5	①30.0	カマド内突出部
〃	15	〃	〃	1/4	①28.7	住居付近A群
〃	16	〃	〃	1/5	①30.0	下層主柱穴傍
〃	17	〃	〃	1/7	①28.0	カマド内突出部
〃	18	〃	〃	1/5	①30.0	下層主柱穴傍
〃	(第139図) 19	〃	〃	3/8	②26.4 ④24.8	右袖B群
〃	20	〃	〃		④30.0	カマド右側
〃	21	〃	鉢	2/11	①26.0	下層
〃	22	〃	坏	1/4	③8.0	カマド付近、精製
住134	1	〃	〃			埋土中、精製
〃	2	〃	高坏			埋土中、精製
〃	3	〃	坏身	1/2	①14.0 ②3.5	カマド傍埋土 精製
〃	4	〃	高坏	1/2	①15.0	カマド付近
〃	5	〃	甕	1/10	①24.8	柱穴
住135	1	〃	高坏	1/6	①14.4	カマド周辺下層
〃	2	〃	〃		①15.7 ②9.6 ③10.2	カマド傍
〃	3	〃	鉢		①10.3 ②5.2 ③8.0	土器溜C群 外底面木葉痕
〃	4	〃	甕	1/4	①11.5	
〃	(第140図) 5	〃	〃		①15.2 ②16.9	カマド付近A群
〃	6	〃	〃	1/6	①20.5 ④18.4	埋土中
〃	7	〃	〃		①16.95 ④19.2	カマド付近A群
〃	8	〃	〃	1/6	①19.0 ④24.0	下層

⑧

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
住135	9	土師器	甕		①19.0 ④23.4	土器溜
〃	10	〃	〃		①17.7	カマド付近D群
〃	11	〃	〃	1/2	①19.8	土器溜A群
〃	(第141図) 12	〃	〃	1/4	①21.0	下層
〃	13	〃	〃		③8.7	カマド付近G群
〃	14	〃	〃		④26.5	カマド付近D群
住136	1	土師器	坏			精製
〃	2	〃	〃	1/2	①11.2 ②5.1	床面
〃	3	〃	〃	1/5	①11.6	精製
〃	4	〃	〃	1/4	①13.8	精製
〃	5	須恵器	甑	1/7	①13.0	カマド付近左袖 床面
〃	6	土師器	甕		①11.8	カマド付近下層
〃	7	〃	〃	1/2	①17.2	床面
〃	8	〃	〃		①15.4 ②20.7 ④17.6	カマドE群
〃	9	〃	支脚	完形	①13.9 ②15.0 ④13.5	
〃	10	〃	甕			カマド付近下層
〃	11	〃	〃		①17.6 ④22.6	カマド付近F群、B群、C群、G群
〃	12	〃	〃		④21.8	カマド付近D群
〃	13	〃	甑			覆土
住137	(第142図) 1	〃	高坏		①15.8	カマド周辺
〃	2	〃	〃			カマド周辺
〃	3	〃	〃		③11.0	床面下層
〃	4	〃	坏	1/4	①12.6	床面下層、精製
〃	5	〃	〃	1/6	①10.6	C群、精製
〃	6	〃	〃			埋土中、精製
〃	7	〃	〃			埋土中
〃	8	〃	〃	1/5	③7.0	須恵器模倣土器
〃	9	〃	甕	1/6	①12.8	埋土中
〃	10	〃	〃	1/6	①18.0	埋土中
〃	11	〃	〃	1/4	①21.0	埋土中
〃	12	〃	〃		①13.2 ②18.6 ④17.6	D群（下）
〃	13	〃	〃	1/4	①13.0 ④13.8	E群
〃	14	〃	甑	1/3	③12.4	埋土中
〃	15	〃	甕	1/3	①19.0 ④27.2	カマド周辺
〃	16	〃	〃			F群
住138	(第143図) 1	〃	〃		①11.8 ②3.0 ③6.4	N群

⑨

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
住138	2	土師器	甕	1/9		
〃	3	〃	〃			I群
〃	4	〃	〃	1/8	①11.6	床面下層（39号内）掘り込み
〃	5	〃	坏身		①11.7 ②4.7	床面上D群
〃	6	〃	〃	1/4	①11.8	F群
〃	7	〃	坏	1/8	①13.2	N群
〃	8	〃	高坏		①12.7	A群①
〃	9	〃	〃			精製
〃	10	〃	〃		③11.8	床面下層E群
〃	11	〃	坏			I群、精製
〃	12	〃	〃			H群
〃	13	〃	〃			東壁付近床面最下層掘り込み
〃	14	〃	高台付甕	3/4	③7.2	G群
〃	15	〃	〃		③8.4	B群
〃	16	〃	甑			
〃	17	〃	甕			床面下層A群
〃	18	〃	〃	1/4	①15.5	K群
〃	19	〃	〃	1/5	①16.2	床面下層A群
〃	20	〃	〃	1/3	①10.4	
〃	21	〃	〃	1/8	①14.2	カマド内
〃	22	〃	〃	1/2	①12.3 ④13.0	床面下中央土坑A
〃	23	〃	〃	1/5	①22.7	K群
〃	24	〃	〃		①19.9	
〃	25	〃	〃		④30.8	K群
〃	(第144図) 26	〃	〃		①19.85	J群
〃	27	〃	〃	1/2	①20.8	E群
〃	28	〃	甑	1/2	①31.2 ②31.3	I群
住139	1	〃	坏	1/2	①15.1 ②3.4	
住140	1	須恵器	坏蓋		①12.5 ②3.5	埋土中
〃	2	土師器	甕	1/10	①18.4	埋土中
〃	3	〃	坏	1/8	①13.8	床面下層西側
〃	4	〃	高台付甕		③10.35	
〃	5	〃	〃		③9.4	床面下層東側
〃	6	〃	支脚	1/2	①13.2	カマド
〃	7	〃	甕	1/8	①16.0	床面下層西側 口縁部にネズミの爪痕あり
〃	8	〃	〃	1/7	①19.0	床面下層東側

⑩

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
住140	9	土師器	甕	1/4	①16.0	埋土中
〃	10	〃	〃	1/10	①14.8	カマド内
〃	11	〃	〃		③6.0	床面B群
住143	(第145図) 1	〃	甕			表採
住144	1	須恵器	坏身		①13.2②4.2 ③9.0	
〃	2	土師器	〃	1/2	①12.9②3.9	床面下層掘り込み
〃	3	〃	〃	1/4	①15.2②2.3	床面下層掘り込み
〃	4	〃	〃		①14.6②5.7	床面下層掘り込み
〃	5	〃	甕	1/8	①17.0	
〃	6	〃	〃			床面下層掘り込み
〃	7	〃	支脚	完形	①14.4②13.5	カマド内
〃	8	〃	甕	1/8	①25.4	床面下層掘り込み
〃	9	〃	〃		①25.6	床面下層掘り込み
〃	10	〃	〃	1/10	①28.0	床面下層上層
〃	11	〃	〃		①30.0	カマド内
〃	12	〃	鉢		①31.2	カマド内
住145	(第146図) 1	須恵器	蓋	1/4	①13.6②1.1	埋土中
〃	2	〃	坏	1/8	①13.8	埋土中
〃	3	〃	〃	1/4	③10.0	埋土中
〃	4	〃	〃	完形	①14.6②4.6 ③11.0	埋土中
〃	5	土師器	〃	1/6	①16.0	埋土中
〃	6	〃	〃	1/4	①15.6②4.9	埋土中
〃	7	〃	鉢	1/5	①15.1	床面
〃	8	〃	高坏			埋土中
〃	9	〃	甑	1/7	③16.0	埋土中
〃	10	〃	甕		①16.0	埋土中
〃	11	〃	〃	1/4	①18.2	
〃	12	〃	〃	1/6	①19.2	床面B群
〃	13	〃	〃			床面C群
〃	14	〃	〃			埋土中
〃	15	〃	〃			埋土中
〃	16	〃	〃	1/6	①23.6	床面
〃	17	〃	〃	1/5	①26.2	床面A群
〃	18	〃	〃	1/8	①28.1	カマド内
住146	(第147図) 1	〃	〃	1/8	①24.4	床面A群
〃	2	〃	〃			床面A群

⑪

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
住144～146	1	須恵器	坏蓋		①19.2	覆土中
〃	2	土師器	坏	1/8	①16.2②4.8 ③11.6	覆土中
〃	3	〃	甕	1/4	①23.5	覆土中
〃	4	〃	〃	1/8	①28.0	覆土中
〃	5	〃	〃	1/4	①26.0	覆土中
〃	6	〃	〃		①28.0	覆土中
住147	1	須恵器	坏蓋	1/4	①11.6	
〃	2	〃	坏身	1/4	①10.4	
〃	3	土師器	椀	1/5	①8.2	
〃	4	〃	高坏			
〃	5	〃	坏身	1/4	①14.6	
〃	6	〃	〃		①13.4	P10、P11
〃	7	〃	甕	1/8	①12.0	
〃	8	〃	〃		①13.0	埋土中
〃	9	〃	〃		①22.6	
〃	10	〃	〃	1/8	①22.2	埋土中
〃	11	〃	〃			P10、P11
住148	(第148図) 1	須恵器	高坏	1/8	①11.0	埋土中
〃	2	〃	〃	1/6	①13.6	P－5
〃	3	土師器	坏			床面下層
〃	4	〃	〃			カマド内
〃	5	〃	支脚		①14.9②15.0 ④15.4	カマド内
〃	6	〃	甕		①15.6	カマド内
〃	7	〃	〃		①14.4②13.45 ④14.2	カマド内
〃	8	〃	〃		①20.2	カマド下層
〃	9	〃	〃		①29.0	埋土中
〃	10	〃	〃	1/3	①25.4	床面
〃	11	〃	〃	1/6	①26.3	P－5
住149	1	〃	坏	1/10	①14.6	No.3カマド
〃	2	〃	〃		①12.7	No.3カマド
〃	3	〃	坩		①10.8	埋土中
〃	4	〃	椀	1/4		埋土中
〃	5	〃	甕	1/4	①26.0	
〃	6	〃	支脚	完形	①10.9	カマド内
〃	7	〃	高坏			No.2カマド
〃	8	〃	〃			床面

⑫

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
住151	(第149図) 1	土師器	坏	1/5	①11.4	A群、精製
〃	2	〃	甕			A群
〃	3	〃	甑			A群
住152	1	〃	坏			下層埋土中、精製
〃	2	〃	甑			下層埋土中
住154	1	〃	〃			下層埋土中
〃	2	〃	甕			
〃	3	〃	〃	1/8	①15.0	A群
〃	4	〃	〃	1/8	①21.4	下層埋土中
〃	5	〃		1/2	③10.3	
住155	1	〃	坏			下層埋土中
〃	2	〃	〃		①13.7②3.2	下層埋土中
〃	3	〃	甕		①29.0	下層埋土中
住156	1	須恵器	坏蓋	1/10	①14.8	下層埋土中
〃	2	〃	坏		①14.4	下層埋土中
〃	3	土師器	〃		①11.6	下層埋土中
〃	4	〃	〃			北半下層
〃	5	〃	甕			下層埋土中
〃	6	〃	鉢	1/12	①28.4	北半下層
住158	1	〃	坏	1/12	①14.0	下層埋土中
〃	2	〃	坏		①11.3	下層埋土中
〃	3	〃	高坏			下層埋土中
〃	4	〃	壺	1/12	①17.0	下層埋土中
〃	5	〃	甕		①22.0	下層埋土中
住161	1	〃	坩	1/4	①6.8	No.4
〃	2	〃	〃		①7.1④9.8	
〃	3	〃	〃	1/4	①7.2	No.31
〃	4	〃	〃		①6.4②9.8 ④9.7	No.20
〃	5	〃	〃	1/6	①7.0④8.6	No.36
〃	6	〃	〃		①6.7②8.1 ④8.0	No.31
〃	7	〃	〃	1/6	①9.45	No.27
〃	8	〃	〃		①8.1④8.7	No.30
〃	9	〃	〃	1/6	④8.6	埋土中
〃	(第150図) 10	〃	甕	1/2	①9.5②13.55 ④11.8	
〃	11	〃	〃		①9.9②12.4 ④12.3	屋内土坑A
〃	12	〃	〃	1/9		

⑬

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
住161	13	土師器	甕	1/7	①16.0	No.4
〃	14	〃	〃	1/4	①13.4	No.10、16
〃	15	〃	〃	1/5	①16.8	No.12
〃	16	〃	〃	1/8	①20.0	No.9
〃	17	〃	〃	1/9	①20.8	
〃	18	〃	〃	1/2	①14.1④19.0	No.2
〃	19	〃	手捏土器	1/4		No.29
〃	20	〃	—	1/6	①10.0	No.19
〃	21	〃	甕	1/5	①10.6④12.0	
〃	22	〃	〃	1/5	①11.0	
〃	23	〃	〃	1/6	①22.35	No.39
〃	24	〃	〃		④30.2	No.6
〃	(第151図) 25	〃	壺	1/3	①18.6	No.32
〃	26	〃	高坏	1/3		No.21
〃	27	〃	—			
〃	28	〃	甑	1/6	①29.6	No.3
〃	29	〃	高坏	完形	①21.0～21.4 ②12.2～13.75 ③12.5	No.2
〃	30	〃	〃	1/5	①22.0	No.3
〃	31	〃	〃		①23.0	No.25・26・28 No.17・20
〃	32	〃	〃	1/10	①22.0	埋土中
〃	33	〃	〃	1/3	①17.3	No.27
〃	34	〃	〃		①17.4	No.18
〃	35	〃	〃	3/4	①17.35	No.19
〃	(第152図) 36	〃	〃		①16.5	No.33
〃	37	〃	〃	1/3	①17.9	No.18埋土中
〃	38	〃	〃	1/10	①19.0	埋土中
〃	39	〃	〃	1/7	①21.95	No.23
〃	40	〃	〃	1/2		No.24
〃	41	〃	〃		③11.1	埋土中
〃	42	〃	〃			埋土中
〃	43	〃	〃	1/2	③15.5	埋土中
住162	1	縄文	甕			押型文
〃	2	土師器	〃	1/8	①10.6	
〃	3	〃	支脚	2/3	①15.0④14.4	カマド内
住163	1	須恵器	甕			掘り込み 内外面タタキ
住164	1	須恵器	坏身	1/13	①11.2	埋土中

⑭

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
住164	2	土師器		1/8		埋土中
〃	3	〃	高坏	1/3		埋土中
〃	4	〃	〃	1/4		埋土中
住166	1	土師器	坏	1/8	①11.5	
住165	1	須恵器	坏身	1/8	①12.0	
〃	2	〃	〃	1/4	①10.8	口縁部打ち欠き
〃	3	土師器	〃		①14.2	No.1 精製
〃	4	〃	甕	1/8	①14.8④13.0	カマド周辺埋土中
〃	5	〃	〃	1/8	①19.3	
〃	(第153図) 6	〃	〃	1/10	①19.7	
〃	7	〃	〃	1/4	①19.1④20.0	中央土坑
〃	8	〃	〃	1/4	①24.1	No.2
〃	9	〃	甑	1/6		カマド焼土内
〃	10	〃	〃	1/6	①30.2	カマド①
〃	11	〃	高坏	1/7	①15.0	
住168	1	須恵器	坏蓋		①12.8②3.7	カマド全面右袖付近 ヘラ記号
〃	2	〃	坏身	1/2	①10.9②4.9	埋土中
〃	3	〃	高坏	1/6		
〃	4	〃	壺	1/7	①6.2	埋土中
〃	5	土師器	坏身	1/6	①11.1	カマド前面、精製
〃	6	〃	〃	1/4	①11.4	精製
〃	7	〃	〃	1/10	①11.8	埋土、精製
〃	8	〃	〃	3/8	①11.0②4.6	カマド右袖付近
〃	9	〃	甕	1/3	①10.0	
〃	10	〃	〃			埋土中
〃	(第154図) 11	〃	〃	1/2		No.3
〃	12	〃	〃	1/2	③14.4	カマド周辺
住176	1	〃	坏身	1/2	①14.1②3.2	下層
〃	2	〃	〃	1/10	①15.8	
〃	3	〃	〃	1/2	③8.8	下層
〃	4	〃	高坏			
〃	5	〃	甑			
〃	6	〃	甕	1/8	①24.3	
〃	7	〃	〃	1/4	①22.3	下層ピットA
住178	1	〃	鉢		①25.6	カマド周辺
〃	2	〃	甑			カマド周辺

⑮

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
住179	(第155図) 1	土師器	甕	1/4	①19.3	表層
〃	2	〃	〃	1/2	①19.5②33.2 ④27.0	
住181 住183	1	〃	〃	1/8	①26.4	
住182	1	須恵器	坏蓋			上層表採
〃	2	〃	〃	1/6	①14.15	下層
〃	3	〃	〃	1/2	①15.5	上層表採 カマド周辺床下層
〃	4	〃	〃	1/5	①15.0	
〃	5	〃	〃	1/8	①14.9	
〃	6	〃	〃	1/3	①15.2	カマド周辺床下層
〃	7	〃	〃	1/13	①15.6②2.5	カマド周辺床下層
〃	8	〃	坏身	1/7	③10.4	
〃	9	〃	〃	1/5	③8.8	
〃	10	〃	〃	1/4	③8.0	
〃	11	〃	〃		③13.0	Pit
〃	12	〃	〃	1/2	①14.2②4.4 ③9.9	マカド周辺床下層
〃	(第156図) 13	〃	坏蓋	1/11	①12.85	床下層
〃	14	土師器	脚裾	1/12	③18.2	
〃	15	〃	坏蓋		①13.2②4.55	床下層掘り込み
〃	16	〃	〃	1/4	①12.4	カマド周辺床下層
〃	17	〃	皿			
〃	18	〃	〃	1/6	①14.0	床下層
〃	19	〃	坏	1/5	①14.0	
〃	20	〃	〃	1/5	①15.8	
〃	21	〃	甕	1/7	①12.8	カマド周辺
〃	22	〃	〃	1/3	①14.6	床下層西北隅土坑
〃	23	〃	〃	1/6	①15.8	カマド
〃	24	〃	〃	1/2		上層表採
〃	25	須恵器	高坏	1/7		下層
〃	26	土師器	〃	1/6	③10.4	
〃	27	〃	甕	1/3	①17.3②15.2 ④17.5	カマド①
〃	28	〃	〃	1/5	①15.1④12.8	カマド周辺床下層 床下層西北隅土坑
〃	29	〃	〃	1/2	①13.25④10.8	上層表採、カマド
〃	30	〃	〃	1/9	①21.8	カマド周辺床下層
〃	31	〃	〃	1/5	①23.0	
〃	32	〃	〃	1/6	①26.9	カマド周辺
〃	33	〃	〃	1/9	①23.6	床下層西北端土坑

⑯

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
住182	34	土師器	鉢	1/2	①27.0	カマド
住185	(第157図) 1	須恵器	坏蓋		①15.25	
〃	2	〃	〃		①15.5②2.1	
〃	3	〃	〃		①14.8	
〃	4	〃	〃		①15.55	
〃	5	〃	坏身		①7.85	
〃	6	〃	高坏			
〃	7	〃	皿	1/7	①22.8②2.3	
〃	8	土師器	坏身		①10.8	
〃	9	〃	〃	1/7	①13.0	床面
〃	10	〃	〃	1/5	①14.6②2.58	
〃	11	〃	〃		①15.7	
〃	12	〃	〃	1/8	①14.6②3.8	
〃	13	〃	〃	1/8	①13.4	
〃	14	須恵器	坏	1/7	①13.2	
〃	15	土師器	高坏		①15.1	
〃	16	〃	埦		①15.1	
〃	17	〃	鉢	1/4	①15.6②9.0	床面カマド付近
〃	18	〃	甕		①11.8	
〃	19	〃	〃		①17.65	
〃	20	〃	〃		①14.7	
〃	21	〃	〃		①25.6	
〃	22	〃	〃	1/6	①24.7	下層
〃	23	〃	〃	1/4	①23.2	
〃	24	〃	鉢			
〃	25	〃	甑			
〃	26	〃	〃			
〃	27	〃	甕			
〃	28	〃	〃			
住187	(第158図) 1	須恵器	坏身	1/10	①13.6	貼床下 口縁部打欠き
〃	2	〃	坏蓋	1/4	①14.0	埋土中
〃	3	〃	〃	1/6	①14.6	床面A群
〃	4	〃	〃	1/2	①14.1②1.25	床面A群
〃	5	〃	坏身	1/6	③11.5	床面A群
〃	6	〃	〃	1/4	③10.3	床面A群
〃	7	〃	〃	1/8	①16.8②2.4 ③13.0	床面A群

⑰

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
住187	8	須恵器	皿	完形	①17.65 ②2.4 ③14.5	床面A群
〃	9	土師器	坏身	〃	①13.5 ②4.0	床面B群
〃	10	〃	〃	1/4	①15.0 ②3.1	床面A群
〃	11	〃	〃		①13.2	埋土中
〃	12	〃	〃		①15.9	貼床下
〃	13	〃	〃		①12.6 ②3.0	床面A群
〃	14	〃	高坏	1/4		埋土中
〃	15	〃	甕	1/4	①15.2	P－1
〃	16	〃	〃	1/5	①16.0	床面A群
〃	17	〃	〃	1/4	①21.0	床面A群
〃	18	〃	〃	1/2	①16.1	P－1
〃	19	〃	〃	1/10	①34.0	床面A群
〃	20	〃	〃	1/4	①27.4	床面A群
〃	21	〃	〃		①26.15 ②32.4 ④25.0	床面A群
住188	(第159図) 1	土師器	坏身	1/8	①12.2 ②2.0	下層
〃	2	〃	〃	完形	①13.35 ②3.65	カマド右④
〃	3	〃	〃	3/8	①14.6	下層
〃	4	〃	坏	1/7	①14.0	埋土中
〃	5	〃	〃		①17.8	下層
〃	6	〃	甕	1/8	①30.8	カマド周辺
〃	7	〃	〃	1/10	①29.8	下層
〃	8	〃	〃	1/5	①24.8	埋土中
〃	9	〃	〃	1/6	①25.0	カマド周辺
〃	10	〃	〃	1/7	①24.6	カマド左
〃	11	〃	〃	1/12	①21.6	埋土中
住189	1	〃	〃		①25.2	下層
〃	2	〃	〃	1/5	①28.8	土器C
〃	3	〃	〃		①27.4 ④25.4	カマド
〃	4	〃	〃	1/12	①12.6	土器B
〃	5	〃	坏			カマド下層
〃	6	〃				土器B
〃	7	〃	坏			カマド
〃	8	〃	〃		①13.7	下層
〃	9	〃	〃	1/8	①13.2	埋土中
〃	10	須恵器	坏蓋		①15.7 ②2.2	カマド掘り方
住190	(第160図) 1	〃	〃		①15.0 ②3.3	南壁より土器C

⑱

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
住190	2	土師器	甕			ピットA
〃	3	〃	〃		①16.0	下層ピットA
〃	4	〃	〃	1/8	①20.4	埋土中
〃	5	〃	〃		①27.9	埋土中
住191	1	須恵器	坏蓋	1/12	①12.5	床面付近
〃	2	〃	〃	1/6	①12.6	床面付近
〃	3	〃	〃		①13.0	床下埋土中
〃	4	〃	〃	1/8	①14.4	西部埋土中
〃	5	〃	〃	1/8	①14.8	床下埋土中
〃	6	〃	〃	1/10	①15.6	
〃	7	〃	〃	1/12	①16.8	西半部埋土中
〃	8	〃	〃		①15.9 ②2.5	床下埋土中
〃	9	〃	坏身	1/4	①12.6 ②3.8	床下埋土中
〃	10	〃	〃	1/10	①15.0	床下埋土中
〃	11	〃	〃		③10.1	西半部埋土中
〃	12	〃	〃	1/6	①15.5 ②4.2 ③11.7	床下埋土中
〃	13	〃	〃	1/8	①13.0	西半部埋土中
〃	14	〃	坏蓋	1/4	①21.35	東半部埋土中
〃	15	〃	〃		①19.8	埋土中
〃	16	〃	高坏		①20.5	床下埋土中
〃	17	〃	〃	1/6	①21.0	西半部埋土中
〃	18	〃	坏身		③14.4	床下埋土中
〃	19	〃	坏蓋	1/8	①12.8	床面付近
〃	20	土師器	坏身		③12.2	床面付近
〃	21	〃	〃		③13.8	床面付近
〃	22	〃	〃	1/4	①14.0 ②3.35	床下埋土中
〃	23	〃	〃	1/4	①14.0	
〃	24	〃	〃	1/4	①12.2 ②2.7	床下埋土中
〃	25	〃	〃	1/2	①12.5 ②2.7	床面付近
〃	26	〃	〃	1/10	①13.8	床面付近
〃	27	〃	皿	1/2	①18.0 ②2.8	カマド
〃	28	〃	〃	1/8	①17.0	
〃	29	〃	甕	1/12	①27.3	床面A群
〃	30	〃	〃	1/6	①27.2 ④27.4	A群
〃	(第161図) 31	〃	〃	1/8	①24.2	床下埋土中
〃	32	〃	〃	1/8	①24.3 ④26.0	床下埋土中

⑲

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
住191	33	土師器	甕	1/4	①18.3	東半部埋土中
〃	34	〃	〃		①25.2	床面付近
〃	35	〃	〃	−	①26.0	床下埋土中
〃	36	〃	甑			床面付近
〃	37	〃	〃		③20.2	床面付近
住192	1	〃	坏	1/8	①12.9 ②1.9	カマド
〃	2	〃	甕	1/4	①15.9	
住193	1	須恵器	坏身	1/10	①14.4	
〃	2	〃	甕			カマド
〃	3	土師器	坏	1/6	①9.0	
〃	4	〃	〃			カマド
〃	5	〃	甕	1/8	①13.2	
〃	6	〃	甑			
〃	7	〃	〃			埋土中
〃	8	〃	甕			
住191～194	1	須恵器	皿	1/8	①19.8	埋土中
住196	(第162図)1		坏蓋		①12.7	床面
〃	2	〃	〃		①14.8	床下
〃	3	〃	坏身		③9.2	埋土中
〃	4	土師器	〃	1/4	①14.4	床下
〃	5	〃	甑			床下
〃	6	〃	甕	1/10	①24.2	床面
〃	7	〃	〃		①28.0	床面
〃	8	〃	〃	1/12	①30.0	床面
住197	1	〃	坏身	1/8	①13.0	カマド内 内底部にヘラ記号
〃	2	〃	皿	1/10	①13.6	カマド東側
〃	3	〃	坏			下層B
〃	4	〃	〃			埋土中
〃	5	〃	〃			埋土中
〃	6	〃	〃			下層B
〃	7	〃	〃	1/10	①17.1	下層
〃	8	〃	坏身	1/8	①11.9	埋土中
〃	9	〃	〃		①13.6	カマド周辺下層
〃	10	〃	甕		①12.8	下層
〃	11	〃	〃		①19.6	カマド
〃	12	〃	〃	1/10	①23.6	カマド周辺

⑳

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
住197	13	土師器	甕		①21.4	床面下層
〃	14	〃	〃	1/10	①23.0	
〃	15	〃	〃		①31.0	下層
〃	16	〃	〃	1/6	①30.4	下層
住199	(第163図)1	須恵器	坏蓋			下層
〃	2	〃	〃			カマド内
〃	3	〃	坏身	1/12	①17.0	カマド④
〃	4	〃	〃		①18.2	下層
〃	5	〃	〃		③9.5	カマド①
〃	6	土師器	甕	1/10	①32.6	埋土中
〃	7	〃	〃	1/8	①24.4	下層ピットB
住201	1	須恵器	坏蓋	1/3	①18.8	カマド北接P
〃	2	〃	〃	1/3	①18.6	カマド北接P
住202	1	土師器	坏		①14.1	埋土中
〃	2	〃	〃			埋土中
〃	3	〃	〃			埋土中
〃	4	〃	〃			床面下層
〃	5	〃	甑			床面下層
住204	1	須恵器	坏身	完形	①13.5 ②3.6 ③10.0	床面下層
住206	1	土師器	坏身		①13.4 ②3.1	カマド北側
〃	2	須恵器	〃	1/6	①21.6 ②3:8	カマド北側
〃	3	土師器	甕		①17.7	中央土坑
〃	4	〃	〃		①16.4	
〃	5	〃	〃		④14.0	中央土坑
住207	1	須恵器	坏蓋		①17.8 ②2.3	P−3
〃	2	〃	坏身		①12.8 ②8.0 ③4.1	カマド
〃	3	〃	〃		①14.0 ②3.6 ③10.5	カマド②
〃	4	土師器	甕	1/6	①24.8	カマド3
〃	5	〃	〃		①26.2	カマド3
〃	(第164図)6	〃	〃	1/6	①22.0	
〃	7	〃	〃	1/9	①26.6	
〃	8	〃	〃	1/4	①31.0	床面E
住208	1	須恵器	坏蓋	1/2	①16.8 ②2.9	
〃	2	土師器	坏身		①12.8 ②3.4	埋土中
〃	3	〃	支脚		①16.6 ②14.4 ④14.6	
〃	4	〃	甕		①23.2	P−3

㉑

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
住208	5	土師器	甕		①23.8	
〃	6	〃	〃		①26.4	床面下層
〃	7	〃	〃		①24.4	埋土中
〃	8	〃	〃		①25.2	P－3
〃	9	〃	〃		①24.0	P－3
住209	1	〃	坏身		①12.4 ②3.4	D床＋5m
〃	2	〃	〃			埋土中
〃	3	〃	甕			C北壁密着
〃	4	〃	〃		①15.8	床面下層
〃	5	〃	〃	1/7	①18.4	
〃	(第165図) 6	〃	〃	1/4	①28.6 ④29.8	カマド
〃	7	〃	〃		①26.8 ④26.8	カマド内
〃	8	〃	〃	1/4	①19.4 ④26.0	
〃	9	〃	〃		①31.2 ④31.0	カマド
〃	(第166図) 10	〃	〃	1/8	①30.1	カマド③
〃	11	〃	〃	1/8	①26.1	P1
〃	12	〃	〃	1/4	①27.0	
〃	13	〃	〃	1/6	①28.0	床付近
〃	14	〃	支脚		①14.1	カマド7
〃	15	〃	〃		①24.0	カマド
住210	1	〃	鉢			床面下層
〃	2	〃	甕	1/6	①22.0	床面下層
〃	3	〃	〃	1/6	①24.0	
住211	1	須恵器	坏蓋	1/13	①19.6	カマド内
〃	2	〃	皿	1/6	①17.2	
〃	3	土師器	皿	1/7	①15.0	
〃	4	須恵器	坏身		①10.2	貼床下
〃	5	土師器	坏		①13.2	貼床下
〃	6	〃	〃	1/5	①14.4	
〃	7	〃	〃	1/8	①14.0	貼床下
〃	8	〃	甕		①17.2	床面下層
〃	9	〃	〃		①22.2	上層
〃	(第167図) 10	〃	〃	1/8	①29.4	カマド周辺
〃	11	〃	〃		①29.0	
〃	12	〃	〃		①27.6	
〃	13	〃	〃	3/7	①28.8	

㉒

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
住211	14	須恵器	甕			内外面タタキ
〃	15	〃	〃			内外面タタキ
住212	1	土師器	坏	1/8	①12.0	
〃	2	〃	〃	1/8	①12.6 ②3.45 ③7.2	
〃	3	〃	〃	1/2	①14.0 ②3.55 ③6.4	
〃	4	〃	甕	1/2	①15.0	
〃	5	〃	鉢		①19.6	
〃	6	〃	甑		③15.2	
〃	7	〃	〃	1/8	①26.3	
〃	8	〃	〃	1/6	①28.4	
〃	9	〃	〃	1/2	①27.4	
住213	(第168図) 1	〃	坏蓋	1/7	①13.1	カマド脇ピット
〃	2	須恵器	坏身	1/2	①11.2 ②4.2 ③7.4	
〃	3	〃	〃		①12.4	
〃	4	〃	〃		①12.9 ②4.5 ③7.6	カマド内
〃	5	土師器	〃		①13.0 ②3.0	
〃	6	須恵器	〃	1/4	③9.0	
〃	7	土師器	〃		①13.2 ②3.6 ③8.4	カマド内
〃	8	〃	〃		①13.7 ②3.9 ③9.4	カマド内
〃	9	〃	〃		①14.1 ②3.9 ③9.3	カマド内
〃	10	〃	甕	3/8	①28.0 ④25.2	カマド内
〃	11	〃	〃		①29.2 ④26.2	カマド内
〃	12	〃	〃			下層、カマド内 No.3
〃	13	〃	〃			カマド①、右袖の上
〃	(第169図) 14	〃	〃	1/12	①26.0	カマド内
〃	15	〃	〃	1/6	①29.2	
〃	16	〃	〃		①30.0	
〃	17	〃	〃	1/8	①29.0	
〃	18	〃	〃			
〃	19	〃	〃	1/5	①16.0	P－3
〃	20	〃	〃	/4	①19.4 ②16.0 ④18.4	
〃	21	〃	片口	1/4	①16.0	
〃	22	〃	鉢	1/8	①29.0	下層
掘立柱建物跡(B)						
B62	(第170図) 1	須恵器	坏身	1/4	①8.3	P410 (P5)
B63	4	〃	〃	1/6	③10.0	P398 (P9)

㉓

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
B63	12	土師器	甕	1/2	③8.4	P67 (P1)
〃	13	〃	〃		①26.0	P407 (P2)
B64	1	須恵器	坏蓋	1/4	①16.5	P387 (P9)
〃	2	〃	坏身	1/6	③11.0	P404 (P2)
〃	4	土師器	甕	1/9	①20.0	P404 (P2)
B65	1	須恵器	坏蓋	1/4	①12.0	P369 (P8)
〃	3	〃	坏	1/8	③9.0	P369 (P8)
〃	12	土師器	甕	1/5	①25.6	P254 (P1)
〃	13	〃	〃	1/8	①16.1	P378
B69	(第171図) 1	〃	坏	1/9	①9.6	P215 (P9)
〃	7	〃	〃	1/8	①20.2	P209 (P11)
〃	8	〃	甕	1/8	①24.0	P221 (P7)
〃	9	〃	〃	1/11	①24.0	P371 (P4)
〃	10	〃	〃	1/8	①18.4	P204 (P13)
B71	2	須恵器	坏蓋		①13.9	P328 (P5)
〃	11	土師器	甕	1/6	①16.3	P323 (P3)
〃	12	〃	甑		③15.8	P328 (P5)
B86	1	〃			③7.0	P5127 (P5)
B90	(第172図) 1	須恵器	坏蓋	1/4	①12.0 ②3.5	P5091 (P3)
B91	3	土師器	甕		①30.0	P5080 (P8)
〃	4	〃		1/3	③7.0	P5078 (P4)
〃	5	〃		1/9	①10.6	P5068 (P7)
〃	7	須恵器	高坏	1/7	③14.0	P5078 (P4)
〃	8	土師器	甕	1/8	①14.6	P5080 (P8)
B92	7	〃	坏	1/7	①13.0	P5022 (P10')
〃	9	〃	〃	1/8	①18.4 ②6.0 ③8.2	P5021 (P7')
B93	1	須恵器	坏身	1/6	③8.6	P5009 (P6)
B95	1	土師器	〃		①13.6 ②3.4 ③8.9	P5061 (P7)
B96	5	〃	坏		①12.2	P5202 (P5')
B97	1	須恵器	坏身		①9.8	P5194 (P7)
B99	2	〃	坏蓋		①11.0	P5201 (P9)
〃	4	〃	坏	1/10	①13.2	P5191 (P12)
〃	5	〃	坏身		①15.6 ②5.2 ③8.6	P5201 (P9)
〃	(第173図) 6	土師器	坏蓋		①21.0	P5204 (P7)
〃	7	〃	坏身		①13.0 ②3.6 ③9.4	P5197 (P8)

㉔

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
B99	13	土師器	坏身		③6.6	P5216 (P1)
〃	14	〃	甕	1/12	①26.4	P5191 (P12)
B100	1	須恵器	坏蓋		①16.8	P5185 (P2)
B101	1	土師器	坏	1/6	③7.2	P107 (P4)
B103	1	〃	甕		①29.2	P52 (P9)
B107	(第174図) 3	〃	坏		①12.0	P5269 (P5)
〃	4	〃	〃	1/8	③8.2	P5269 (P5)
〃	5	〃	〃		③8.0	P5272 (P3)
〃	9	〃	甕	1/12	①26.0	P5272 (P3)
〃	10	〃	〃	1/8	①24.0	P5269 (P5)
B108	1	〃	坏		③7.8	P5279
井戸(E)						
E1	(第175図) 1	須恵器	坏蓋			5層
〃	2	土師器	坏身		①12.6 ②3.8 ③7.2	1層
〃	3	〃	〃		①12.6 ②4.3 ③6.4	2層
〃	4	〃	〃		①12.2 ②3.2 ③6.4	2層
〃	5	〃	〃		①12.6 ②3.8 ③7.6	2層
〃	6	〃	〃		①13.6 ②3.5 ③8.0	3層
〃	7	〃	〃		①12.8 ②3.8 ③7.6	4層
〃	8	〃	〃		①13.6 ②4.0 ③8.6	4層
〃	9	〃	〃		①13.0 ②4.3 ③8.0	4層
〃	10	〃	〃		①12.4 ②3.7 ③7.9	3・4層
〃	11	〃	〃		③7.9	5層
〃	12	〃	〃		③8.2	5層
〃	13	〃	〃		③8.0	5層
〃	14	〃	甕	1/4	①28.8	2層
〃	15	〃	〃		①29.4	4層
〃	16	〃	〃		①28.7	4層
〃	17	〃	〃		①27.2 ④25.2	1・2層
〃	18	〃	〃	1/3	①18.4 ②14.2	2層
〃	19	〃	〃		①24.6	
〃	20	〃	〃			
〃	21	〃	〃			4層
〃	22	〃				5層
土坑(D)						
D23	(第176図) 1	土師器	甕			

㉕

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
D23	2	土師器	甕			
〃	3	〃	〃			
D24	1	須恵器	坏蓋		①16.1 ②2.5	
〃	2	〃	〃			
〃	3	〃	〃			
〃	4	〃	坏身			
〃	5	土師器	〃	1/4	①17.0	上層
〃	6	〃	〃	1/2	①15.6	下層
〃	7	〃	〃	1/4	①15.1	上層
〃	8	〃	〃		①14.0	上層
〃	9	〃	〃	1/4	①14.1	上層
〃	10	〃	〃	1/3	①13.0 ②2.8 ③8.2	上層
〃	11	〃	〃			上層 内面にヘラ記号
〃	12	〃	〃	1/4	①14.4	下層 底部内面にヘラ記号
〃	13	〃	〃	1/4	①14.0 ②3.0	上層
〃	14	〃	〃	1/4	①14.0	下層
〃	15	〃	〃	1/4	①14.0	下層
〃	16	〃	甕	1/4	①12.4	下層
〃	17	〃	〃	1/4	①14.2	下層
〃	18	〃	〃	1/4	①15.0	下層
〃	19	〃	〃	1/8	①16.6	上層
〃	20	〃	〃	1/8	①12.0	下層
〃	21	〃	〃	1/5	①15.0	上層
〃	22	〃	〃			上層
〃	23	〃	〃			上層
〃	24	〃	〃			下層
〃	25	〃	〃	1/5	①23.8	下層
〃	26	〃	〃	1/7	①25.4	下層
D25	(第177図) 1	土師器	坏			
D26	1	須恵器	坏身	2/3	①13.8 ②4.2 ③8.8	住133の下層の可能性
D27	1	〃	坏蓋			下層、ヘラ記号
〃	2	〃	〃			下層、ヘラ記号
〃	3	土師器		1/6	③12.0	上層
〃	4	〃	坏			上層
〃	5	〃	〃	1/4	①13.2	上層
〃	6	〃	〃	1/2	①14.4	上層

㉖

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
D27	7	土師器	坏	1/8	①15.0	上層
〃	8	〃	〃	1/4	①16.8	上層
〃	9	〃	〃	1/3	③12.4	下層
〃	10	〃	鉢	1/2	①30.0 ②14.4	上層
〃	11	〃	甕	1/8	①20.2	上層
〃	12	〃	〃	1/6	①26.0	上層
D28	1	〃	坏			
〃	2	〃	甕			
D30B	1	須恵器	坏蓋			下層
〃	2	〃	〃			下層、ヘラ記号
〃	3	〃	〃			上層、天井部外面ヘラ記号、内面タタキ
〃	4	〃	〃			
〃	5	〃	〃		①14.4 ②1.5	下層
〃	6	〃	〃	1/6	①17.8	上層
〃	7	〃	坏			上層
〃	8	〃	坏身		③10.0	下層
〃	9	〃	〃	1/3	③9.0	下層
〃	(第178図) 10	〃				下層
〃	11	土師器	坏身	1/8	①17.2 ②3.2	下層
〃	12	〃	〃	1/8	①16.6	下層
〃	13	〃	〃			下層
〃	14	〃	甕		①16.8	下層
〃	15	〃	〃			下層
〃	16	〃	〃	1/12	①29.0	下層
〃	17	〃	〃	1/6	①26.0	下層
〃	18	〃	〃	1/8	①26.4	上層
〃	19	〃	〃	1/5	①25.0	上層
D30A	20	須恵器	坏蓋		①14.2 ②2.5	下層焼土混黒色土
〃	21	〃	〃	3/8	①14.6	下層焼土混黒色土
〃	22	〃	〃	3/8	①11.8	下層焼土混黒色土
〃	23	〃	坏身	1/8	①9.8	下層焼土混黒色土
〃	24	〃	〃	3/8	③8.2	下層焼土混黒色土
〃	25	〃	〃		①11.9 ②4.2 ③8.2	下層焼土混黒色土
〃	26	〃	壺	1/8	①12.0	下層焼土混黒色土
〃	27	土師器	坏	1/6	①14.8 ②2.1	下層焼土混黒色土
〃	28	〃	〃	1/6	①14.2 ②2.3	下層焼土混黒色土

㉗

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
D30A	29	土師器	坏身	1/9	①14.4 ②3.1 ③11.8	下層焼土混黒色土
〃	30	〃	甕	1/6	①14.0	下層焼土混黒色土
〃	31	〃	〃		③7.6	下層焼土混黒色土
〃	32	〃	甑		①15.8 ②11.7 ③10.2	下層焼土混黒色土
〃	33	〃		1/3	①21.0	下層焼土混黒色土
〃	34	〃	甑			下層焼土混黒色土
〃	(第179図) 35	〃	甕	1/10	①25.0 ④24.0	下層焼土混黒色土
〃	36	〃	〃	1/5	①26.0	下層焼土混黒色土
〃	37	〃	〃	1/4	①26.6	下層焼土混黒色土
〃	38	〃	〃	1/6	①24.0 ④24.6	下層焼土混黒色土
〃	39	〃	甑	1/5	①31.0	下層焼土混黒色土
D31	1	須恵器	坏蓋	1/2	①17.6 ②3.3	上層㉘
〃	2	〃	〃		①15.2	上層
〃	3	〃	〃	1/4	①15.5	下層
〃	4	〃	〃	1/12	①15.6	上層
〃	5	〃	〃	1/6	①15.8	
〃	6	〃	坏身	1/10	①16.0	上層
〃	7	〃	〃	1/4	①14.0 ②4.1 ③10.2	下層
〃	8	〃	高坏		①13.8	上層
〃	9	土師器	坏身		③9.4	上層
〃	10	〃	〃		①11.2	上層
〃	11	〃	〃		①13.4 ②3.8	下層
〃	12	〃	坏	1/6	①13.8	上層
〃	13	〃	甕	1/8	①15.0 ④14.2	下層
〃	14	〃	〃		③14.0	上層
〃	15	〃	鉢		①29.9 ②13.7	
〃	(第180図) 16	〃	甕	1/5	①26.6	上層
〃	17	〃	甑	1/10	③30.0	3・4層
D32	1	〃	甕	1/5	①26.0	
〃	2	〃	〃	1/3	①16.6	南半部下層
〃	3	〃	〃			上層
〃	4	〃	坏		③8.0	最上層
〃	5	〃	坏		①13.0 ②3.5 ③7.5	
〃	6	須恵器	甕	1/8	①50.0	上層
D33	1	土師器	甕		①27.2	上層
〃	2	〃	〃	1/10	①28.0	上層

㉘

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
D33	3	土師器	甕			上層
D34	1	〃	〃	1/2	①25.6 ④24.8	
D35	(第181図) 1	須恵器	坏蓋		①14.6 ②3.4	下層
〃	2	〃	〃	1/4	①13.8 ②2.3	下層
〃	3	〃	〃		①12.6 ①1.1	下層
〃	4	〃	〃		①16.4 ①1.6	北半部下層
〃	5	〃	〃	1/4	①15.6	下層
〃	6	〃	〃	1/4	①13.8	北半部下層
〃	7	〃	〃	1/8	①16.0	北半部下層
〃	8	〃	〃	1/12	①12.8	北半部下層
〃	9	〃	〃	1/8	①14.8	下層
〃	10	〃	〃	1/10	①13.8	北半部下層
〃	11	〃	〃	1/6	①19.5	サブトレ
〃	12	〃	〃	1/5	①15.4	北半部下層
〃	13	〃	〃	1/8	①17.6	南半部下層
〃	14	〃	〃	1/4	①18.0	南半部上層
〃	15	〃	〃	1/2	①14.8	北半部下層
〃	16	〃	〃	1/4	①14.2	北半部下層
〃	17	〃	坏身	1/8	①11.0	上層 口縁部打欠き
〃	18	〃	〃	1/8	①12.0	下層
〃	19	〃	〃	1/4	①13.4 ②3.4 ③10.0	南半部下層
〃	20	〃	〃	1/4	①13.6 ②3.1 ③9.6	上層
〃	21	〃	〃		①14.0	北半部下層
〃	22	〃	〃	1/4	③11.4	下層
〃	23	〃	〃	1/4	①13.4 ②3.6 ③9.0	上層
〃	24	〃	〃	1/4	①14.6 ②4.4 ③11.0	上層
〃	25	〃	〃	1/4	①13.8 ②4.5 ③9.0	下層
〃	26	〃	〃		①14.0 ②4.75 ③9.4	上層
〃	27	〃	〃	1/4	①15.4 ②3.8 ③11.0	下層
〃	28	〃	〃	1/2	①15.5 ②4.6 ③10.2	上層
〃	29	〃	皿	1/8	①19.4 ②2.3	北半部下層
〃	30	〃	高坏	1/4	①15.5	北半部下層
〃	31	〃	〃	1/6	①22.0	
〃	32	〃	〃	1/4	①22.0	上層
〃	33	〃	〃	1/8	①28.0	サブトレ
〃	34	〃	〃		①20.5 ②8.5 ③10.3	北半部下層

㉙

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
D35	35	須恵器	坏	1/10	①21.2	南半部上層
〃	(第182図) 36	〃	甕	1/4	①18.0	南半部上層
〃	37	〃	〃	1/2	①20.0	No.5
〃	38	〃	壺			下層
〃	39	〃	甕			上層
〃	40	土師器	坏	1/4	①14.0 ②4.5	下層
〃	41	〃	〃	1/2	①14.8 ②3.4	南半部上層
〃	42	〃	〃	1/2	①13.6 ②3.5	南半部上層
〃	43	〃	〃		①14.7 ②4.0	北半部下層
〃	44	〃	〃		①14.6 ②3.5	北半部下層
〃	45	〃	〃	1/2	①15.0 ②3.6	上層
〃	46	〃	〃	1/4	①14.0 ②4.2	南半部上層
〃	47	〃	〃		①14.2 ②2.8	No.1
〃	48	〃	〃	1/3	①15.6 ②3.5	南半部下層
〃	49	〃	〃	1/4	①16.2 ②3.1	北半部
〃	50	〃	〃	1/4	①13.6 ②2.9	南半部下層
〃	51	〃	〃	1/3	①14.2 ②2.8	南半部下層
〃	52	〃	〃	1/4	①13.4	北半部下層
〃	53	〃	〃	1/3	①14.0 ②4.1	北半部下層
〃	54	〃	〃	1/8	①15.0 ②3.5 ③11.4	南半部上層
〃	55	〃	〃	1/8	①15.6 ②3.4 ③11.6	南半部上層
〃	56	〃	〃	1/4	①15.0 ②3.2 ③11.6	下層
〃	57	〃	埦	1/2	①14.2	上層
〃	58	〃	〃	1/6	①14.6 ②5.6	
〃	59	〃	〃	1/6	①16.5 ②4.3	下層
〃	60	〃	〃	1/4	③10.0	上層
〃	61	〃	皿	1/8	①17.8 ②2.7	最下層
〃	62	〃	〃	1/4	①15.6 ②2.9	下層
〃	63	〃	高坏		③10.5	下層 ヘラ記号
〃	64	〃	甕	1/4	①15.4 ④14.6	下層
〃	65	〃	〃	1/5	①17.4	南半部下層
〃	66	〃	〃	1/4	①16.4	南半部下層
〃	67	〃	〃		①15.0④13.4	
〃	(第183図) 68	〃	〃	1/4	①12.6 ④13.8	下層
〃	69	〃	〃	1/8	①14.0 ②5.4	南半部上層
〃	70	〃	甕	1/4	①16.2	南半部下層

㉚

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
D35	71	土師器	甕		①14.4④11.0	
〃	72	〃	〃		①21.2	下層
〃	73	〃	〃		①22.6	下層
〃	74	〃	〃	1/6	①24.4	南半部下層
〃	75	〃	〃		①21.4	下層
〃	76	〃	〃	1/6	①24.6	上層
〃	77	〃	〃		①25.0	下層
〃	78	〃	〃		①23.5	上層
〃	79	〃	〃	1/5	①26.3	サブトレ
〃	80	〃	〃		①24.6	下層
〃	81	〃	〃	1/5	①24.4 ④21.4	南半部上層
〃	82	〃	〃		①24.4 ④24.5	下層
〃	83	〃	〃	1/6	①25.8	
〃	(第184図) 84	〃	〃	1/5	①27.8	南半部下層
〃	85	〃	〃	1/3	①24.2	最下層
〃	86	〃	〃		①26.2	上層
〃	87	〃	〃	1/7	①25.5	上層
〃	88	〃	〃		①26.5	南半部上層
〃	89	〃	〃	1/5	①26.8	上層
〃	90	〃	〃		①26.4	上層
〃	91	〃	〃	1/6	①28.6	北半部下層
〃	92	〃	〃	3/8	①28.1	下層
〃	93	〃	〃	1/4	①28.5	下層
〃	94	〃	〃	1/4	①28.1	下層
〃	95	〃	〃	1/6	①24.0	上層
〃	96	〃	〃	1/8	①29.2	上層
〃	97	〃	〃		①27.4	南半部上層
〃	(第185図) 98	〃	〃		①30.0	南半部上層
〃	99	〃	〃	3/8	①27.6	南半部上層、下層
〃	100	〃	〃		①31.0	下層
〃	101	〃	〃		①31.8	上層
〃	102	〃	〃			南半部上層
〃	103	〃	〃			サブトレ
〃	104	〃	〃		①24.15②30.0 ④25.9	下層
〃	105	〃	〃		①24.4②34.4 ④25.6	南半部上層
〃	106	〃	〃		①27.6④29.0	上層

㉛

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
D35	(第186図) 107	土師器	甑		③15.8	下層
〃	108	〃	〃		③15.8	下層
〃	109	〃	〃		③18.6	下層
〃	110	〃	鉢			南半部上層
〃	111	〃	〃			南半部上層
〃	112	〃	〃			下層
〃	113	〃	坏蓋			下層
〃	114	〃	甕		①21.4	片口
〃	115	〃	鉢		①23.6	南半部上層 片口
〃	116	〃	〃	1/6	①28.4	上層
〃	117	〃	〃	1/7	①32.0	最下層
〃	118	〃	甑		①29.2	南半上層
D36	1	須恵器	坏蓋	1/6	①16.4	埋土中
〃	2	〃	〃		①14.8	埋土中
〃	3	〃	〃	1/8	①13.2	埋土中
〃	4	〃	〃	1/8	①15.0	埋土中
〃	5	〃	坏身		①13.8	埋土中
〃	6	〃	〃	1/10	①15.4	埋土中
〃	7	〃	〃	1/3	①11.4	埋土中
〃	8	土師器	〃			上層
〃	9	瓦器	〃			埋土中
〃	10	土師器	〃	1/4	①14.0	上層
〃	11	〃	〃	1/6	①15.6	上層
〃	(第187図) 12	〃	坏身	1/8	①10.6	埋土中
〃	13	〃	〃		③7.8	上層
〃	14	〃	甕		①22.0 ④23.0	上層
〃	15	〃	〃		①24.6	上層②
〃	16	〃	〃			埋土中
〃	17	〃	〃			上層
〃	18	〃	〃			上層
〃	19	〃	〃	1/8	①25.0 ④25.8	
〃	20	〃	〃		①27.6	埋土中
〃	21	〃	〃	1/6	①29.8	上層
〃	22	〃	〃	1/10	①32.6	上層
〃	23	〃	甑	1/10	①26.6 ②27.35 ③14.5	
D37	(第188図) 1	須恵器	坏		①12.0	上層

㉜

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
D37	2	須恵器	坏蓋		①16.0	上層
〃	3	〃	〃		①16.5	上層
〃	4	〃	〃		①16.0	埋土中
〃	5	土師器	坏身		①13.8	上層
〃	6	〃	〃		①13.0	上層
〃	7	〃	〃		①14.6 ②2.5	下層
〃	8	〃	〃		①14.8	下層
〃	9	〃	〃		①15.4	下層、上層
〃	10	〃	〃		①16.5 ②3.0	下層
〃	11	〃	〃		①17.2	
〃	12	〃	〃	1/3	①15.4 ②4.5	下層
〃	13	〃	〃		①16.0 ②2.5 ③12.4	下層、上層区① ～⑥
〃	14	〃	〃		①16.2 ②2.8 ③13.0	埋土中
〃	15	〃	〃		①15.4 ②4.0 ③10.4	上層、下層
〃	16	〃	〃		①15.0 ②3.2 ③11.8	下層
〃	17	〃	〃		①14.9 ②4.2 ③9.2	下層
〃	18	〃	〃		①16.8 ②4.8 ③12.0	下層、上層
〃	19	〃	甕		①17.1	上層
〃	20	〃	〃		①14.4 ④14.2	下層
〃	21	〃	〃	1/4	①14.4	上層
〃	22	〃	〃	1/2	①16.5	下層
〃	23	〃	〃		①16.7	上層、下層
〃	24	〃	〃	1/3	①13.8 ④13.4	下層
〃	25	〃	〃		①17.5 ④16.5	
〃	26	〃	〃		①18.9	下層
〃	27	〃	〃		①22.4	下層
〃	28	〃	〃	1/5	①21.6	
〃	(第189図) 29	〃	〃	1/4	①23.6	上層
〃	30	〃	〃		①19.4	下層
〃	31	〃	〃		①22.8 ④25.4	下層
〃	32	〃	〃		①22.2 ④24.4	下層
〃	33	〃	〃	1/5	①20.2	下層
〃	34	〃	〃		①23.1	上層、下層
〃	35	〃	〃	1/2	①23.2 ④25.6	下層
〃	36	〃	〃	2/3	①26.2 ④27.4	下層
〃	37	〃	〃	1/4	①24.8 ④24.8	下層

㉝

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
D37	(第190図) 38	土師器	甕		①22.0	下層
〃	39	〃	〃		①23.0	上層
〃	40	〃	〃		①23.8	
〃	41	〃	〃		①22.05	下層
〃	42	〃	〃		①22.2	
〃	43	〃	〃	1/4	①25.3	上層
〃	44	〃	〃		①27.7	下層
〃	45	〃	〃		①24.2	上層、下層
〃	46	〃	〃	3/8	①22.7	上層
〃	47	〃	〃	1/8	①27.4	
〃	48	〃	〃		①22.9	上層
〃	49	〃	〃		③11.9	下層
〃	(第191図) 50	〃	〃		①16.0	上層
〃	51	〃	鉢		①30.0	上層
〃	52	〃	〃		①30.1	上層
〃	53	〃	〃		①21.0	上層
〃	54	〃	〃		①27.0	下層
〃	55	〃	〃		①29.0	下層
〃	56	〃	甑		①24.2	下層
〃	57	〃	〃		①24.6	上層
〃	58	〃	〃		①24.4	上層
〃	59	〃	〃		①26.0	下層
D38	(第192図) 1	須恵器	甕		①14.2	
〃	2	土師器	〃	1/8	①22.1	
〃	3	〃	〃			
〃	4	〃	〃			
D39	1	須恵器	坏蓋	1/10	①15.6	
〃	2	〃	〃			埋土中
〃	3	〃	坏	1/8	①11.0	
〃	4	〃	坏身		③8.8	
〃	5	〃	〃	1/3	①14.6 ②4.2 ③8.4	埋土中
〃	6	〃	壺	1/8	①19.0	
〃	7	土師器	坏身		①14.6 ②3.9	外面タタキ
〃	8	〃	〃		①13.8	ヘラ記号
〃	9	〃	Ⅲ	1/2	①12.3②1.95	埋土中
〃	10	〃	坏			

㉞

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
D39	11	土師器	Ⅲ			埋土中
〃	12	〃	坏	1/8	①15.6	埋土中
〃	13	〃	鉢			埋土中
〃	14	〃	〃		③9.2	
〃	15	〃	〃	1/3	①16.6 ②11.5 ④16.4	
〃	16	〃	〃	1/3	①17.4 ④12.8	
〃	17	〃	甕		①26.6 ④24.5	
〃	18	〃	〃		①25.6	
〃	(第193図) 19	〃	〃	1/7	①16.0	埋土中
〃	20	〃	〃		①21.2	埋土中
〃	21	〃	〃	1/6	①20.2	
〃	22	〃	〃	1/6	①23.2	
〃	23	〃	〃			
〃	24	〃	〃			埋土中
〃	25	〃	〃	1/4	①28.1	南半部下層
〃	26	〃	〃		①26.8	
〃	27	〃	〃	1/8	①22.6	
〃	28	〃	鉢			埋土中
〃	29	〃	〃			
〃	30	〃	甑			
〃	31	〃	〃		①35.0	埋土中
D40	1	須恵器	坏蓋	1/4	①13.0	下層
〃	2	〃	坏身	1/8	③9.0	下層
〃	3	〃	〃	1/4	③8.0	下層
〃	4	〃	〃	3/8	③8.2	下層
〃	5	〃	〃	3/8	③9.0	下層
〃	6	〃	〃	1/4	①13.6 ②4.0 ③10.0	焼土層
〃	7	土師器	〃		①13.0	上層
〃	8	〃	〃	1/12	①11.0	上層
〃	9	〃	〃	1/8	①14.0 ②2.3	
〃	10	〃	〃	1/6	①16.0 ②2.2	下層
〃	11	〃	〃		①15.8 ②3.0	最下層
〃	12	〃	〃	1/7	①13.0 ②2.0 ③10.0	上層
〃	13	〃	〃		①14.0②3.6	
〃	14	〃	〃	1/5	①13.0	下層
〃	15	〃	〃	1/4	③13.4	下層

㉟

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
D40	16	土師器	皿	1/8	①25.0 ②1.7	
〃	(第194図) 17	須恵器	壺		①5.7 ②4.5 ③4.8 ④9.1	
〃	18	〃	甕		①21.5	内外タタキ
〃	19	〃	〃	1/4	④36.0	下層 内外タタキ
〃	20	土師器	〃	1/6	①15.8	焼土層
〃	21	〃	〃	1/8	①16.2	上層
〃	22	〃	〃	1/4	①12.6	上層
〃	23	〃	〃	1/4	①18.4	上層
〃	24	〃	〃	1/8	①17.0	上層
〃	25	〃	〃	1/5	①18.6 ④15.2	上層
〃	26	〃	〃		④16.6	下層
〃	27	〃	〃	1/8	①21.4	焼土層
〃	28	〃	〃	1/4	①21.6	焼土層、下層
〃	29	〃	〃	1/4	①25.3	
〃	30	〃	〃		①23.5	上層
〃	(第195図) 31	〃	〃	1/6	①19.4	上層
〃	32	〃	〃		①21.0	上層
〃	33	〃	〃	1/12	①26.8	
〃	34	〃	〃	1/8	①26.1	焼土層
〃	35	〃	〃		①26.4	上層
〃	36	〃	〃		①22.8	下層
〃	37	〃	〃		①24.8	焼土層
〃	38	〃	〃	1/4	①27.1	下層
〃	39	〃	〃		①24.8 ④25.0	下層
〃	40	〃	〃		①25.3 ④27.2	下層
〃	41	〃	〃		①21.2 ④25.6	下層
〃	(第196図) 42	〃	鉢	1/2	①23.4	焼土層
〃	43	〃	〃	1/4	①27.0	
〃	44	〃	〃	1/8	①27.0	焼土層
〃	45	〃	〃	3/8	①29.0	下層
〃	46	〃	〃	1/4	①32.0	焼土層
〃	47	〃	〃	1/4	①32.0	下層
〃	48	〃	〃	1/2	①30.0	最下層
〃	49	〃	甑？	1/11	①23.0	焼土層
〃	50	〃	甑	1/12	③15.0	上層
〃	51	〃	〃	1/8	③18.0	上層

㊱

遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
D40	52	土師器	甑	1/8	③17.8	下層
〃	53	〃	〃	1/8	③18.4	焼土層
D42	(第197図) 1	須恵器	坏身		①10.6	
〃	2	土師器	甕			
〃	3	〃	鉢			
D43	1	須恵器	坏蓋	1/8	①14.6	
〃	2	土師器	坏			
〃	3	〃	甕	1/7	①13.0	
〃	4	〃	〃	1/6	①14.4	
〃	5	〃	〃	1/10	①18.0	
〃	6	〃	鉢		①34.2	
〃	7	〃	〃			
〃	8	〃	〃			
〃	9	〃	〃			
〃	10	〃	甕	1/7	①19.2	
〃	11	〃	〃	1/5	①22.4	
D44	1	須恵器	坏蓋			
〃	2	〃	〃	1/5	①12.8	
〃	3	〃	〃	1/8	①15.8	
〃	4	〃	〃	3/8	①13.4	
〃	5	〃	〃	1/6	①15.0	
〃	6	〃	壺	1/2	③9.4	
〃	7	〃	〃	1/8	①17.8	
〃	8	土師器	坏			
〃	9	〃	〃			
〃	10	〃	坏蓋			
〃	11	〃	〃			
〃	12	〃	坏身	1/7	①12.0②3.9	
〃	13	〃	甕			
〃	14	〃	〃			
〃	15	〃	〃			
〃	16	〃	甑			
〃	17	〃	鉢	1/7	①29.0	
D45	(第198図) 1	須恵器	坏蓋		①13.8	
〃	2	〃	〃	1/8	①14.0	
〃	3	〃	壺		①14.5	

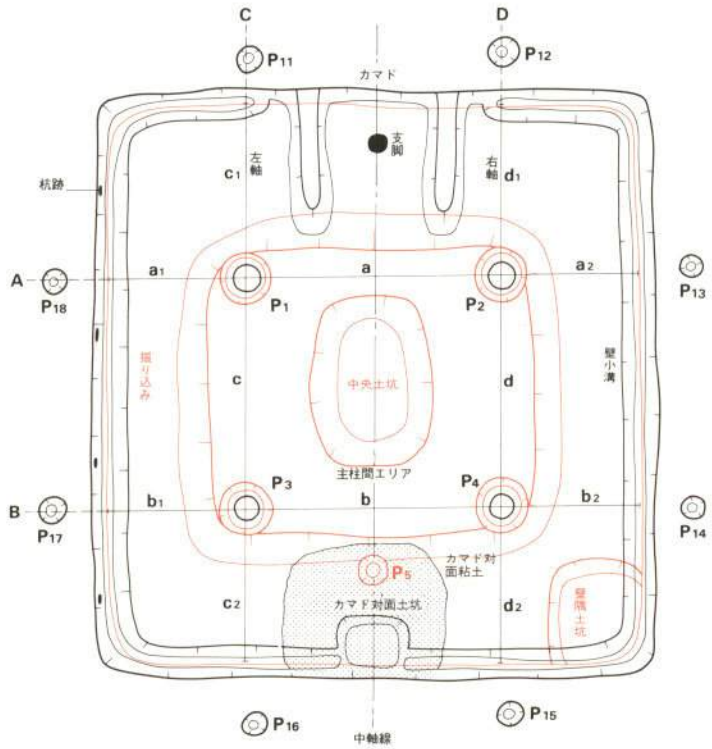
遺構	挿図NO	種別	器種	残	①口径 ②器高 ③底径 ④胴径	備考
D45	4	須恵器	甕			内外タタキ
〃	5	土師器	坏蓋		①15.6	
〃	6	〃	坏身	1/3	③10.2	
〃	7	〃	〃			
〃	8	〃	〃			
〃	9	〃	皿	1/3	①24.0 ②2.8	精製
〃	10	〃	甕	1/9	①13.0	
〃	11	〃	〃	1/2	①16.0 ②14.5 ④14.2	
〃	12	〃	〃			
〃	13	〃	〃			
〃	14	〃	鉢		①18.2	埋土中
〃	15	〃	甑			
溝(M)						
M1	(第199図) 1	土師器	甕	1/4	①11.2	上層 内外面ハケ
〃	2	〃	甑		①27.2	上層 内面ケズリ,外面ハケ
〃	3	〃	壺	1/2	①18.4 ②24.7+④29.0	中層 内面ケズリ,外面ハケ
〃	4	〃	壺	1/2	①16.0 ②28.5 ④29	中層 内面ケズリ,外面ハケ
〃	(第200図) 5	須恵器	坏身	1/3	①14 ②3.7	上層 外面にヘラ記号
〃	6	〃	高坏			上層
〃	7	土師器	坏身	1/5	①12	上層
〃	8	〃	高坏	1/8	①14	上層
〃	9	〃	高坏			上層
M8	1	須恵器	坏蓋	1/2	①12.8 ②3.8	外面にヘラ記号 溝2
〃	2	〃	坏身	1/2	①11.4 ②3.8	外面にヘラ記号 溝2
〃	3	土師器	埦	1/8	①12.1	溝2

宮原遺跡竪穴住居跡竪穴部及び竪穴住居跡一覧表についての説明

遺構の主体を占める竪穴住居跡については、下図により説明をしている。この模式図は、九州横断自動車道の調査では、第11地点（立野遺跡・宮原遺跡）の最初の報告（『九州横断自動車道埋蔵文化財調査報告』－２－1983)に図示したものに、随時名称を変え加筆したものである。下図に示した竪穴部の細部の遺構をすべて備えるものはなく、上記両遺跡で検出した竪穴部の周囲、床面、床面下層の遺構を一枚の図に集約したものである。

第11地点の竪穴住居の床はすべて貼床である。黒線は貼床面上の、赤線は貼床をはがした下層に検出される遺構の集合図である。赤線の主柱穴P_1～P_4は、主柱を抜き取った場合は床面が荒らされており、床面に検出できるので黒線で図示している。また、貼床が遺存しない場合も、貼床下層遺構を黒線で表現している。以下、語句やアルファベット表示等のうち、説明が必要と思われるものについて記す。

総面積：竪穴部の壁下端をプラニメーターで３回計測した平均値を㎡単位で示している。



第201図　竪穴住居跡竪穴部模式図と各部の名称

主柱間エリア：貼床上の4本の主柱に囲まれた方形の空間。表では面積で表示している。

壁小溝：貼床面上に検出される。竪穴部の壁を巡る周溝状のもので、板材を土壁際に埋め込んだ痕跡であろうと考えている。杭で板材を固定したであろう痕跡が、溝底に小ピットとして検出される場合がある。

カマド対面土坑：カマド対面の壁のほぼ中央にある。弥生時代の屋内土坑に連なるものか。

中央土坑：竪穴部のほぼ中央の貼床下層に、地山を掘り込んだ不整円形の浅い土坑である。弥生時代以来の炉が遺制として、床面下に遺ったものであろうか。

壁隅土坑：竪穴部隅角部の貼床下層に掘られるものである。弥生時代後期以降～古墳時代前期の竪穴部貼床面上において、通常の屋内土坑（A）とは別に、隅角部にさらにひとつの屋内土坑（B）を検出する場合があり、後者に連なるものが遺制として、床面下に遺ったものであろうか。

掘り込み：竪穴部の貼床下層で、主柱間エリアと壁の間の地山面が一段深く掘り込まれている。この部分を掘り込みと呼ぶ。弥生時代終末～古墳時代初期の竪穴住居跡の竪穴部において、屋内土壙（A）を除き、壁に沿っていわゆるベッド状遺構が一巡する。ベッド状遺構の多くは造設されたもので、その下層は床面よりも低く掘り込まれていることが多い。このような竪穴部の造りかたが遺制として床面下に遺ったものであろう。

P_1～P_4：主柱穴を示す。カマドに対してP_1～P_4の順に番号を付す。a～dは各主柱穴の中心間、または、柱痕の中心間の距離を示す。また、a_1・a_2～d_1・d_2は各主柱穴の中心、または、柱痕の中心から壁下端までの距離を示す。

P_{11}～P_{16}：支柱穴的なものである。上部構造を想定する時、各柱穴の役割は等質的なものではないと思われる。住居空間は竪穴部の外まで広がると考えており、壁体の存否、あるいは構造を推測する資料になると思われる。

竪穴住居跡の竪穴部、特に貼床下層には弥生時代以来の竪穴部の各遺構が遺制として取り込まれているように見受けられ、それらを本文では、先述のように記述している。

このことについては、来年度の報告でまとめて説明する予定である。

第2表　宮原遺跡竪穴住居跡一覧表

No.	図版	挿図	主軸方位	総面積 (S) m²	主柱間エリア (S_1)	S1/S %	たて (cm) C	たて (cm) D	よこ (cm) A	よこ (cm) B	a (cm) (P_1-P_2)	b (cm) (P_3-P_4)	c (cm) (P_1-P_3)	d (cm) (P_2-P_4)	P_1 (cm) c_1	P_1 (cm) a_1	P_2 (cm) d_1	P_2 (cm) a_2	P_3 (cm) c_2	P_3 (cm) b_1	P_4 (cm) d_2	P_4 (cm) b_2	カマド 位置	カマド 支脚	カマド対面 粘土	カマド対面 土坑	P_5	下層 土坑	土器 須	土器 土	手捏	土錘	鉄器	石器	備考	HNo.
113	5	3	—																				北	○						4			1			D45・D60
114	5	3	N-1°30′-W	22.462	3.807	16.9	462	449	485	503	193	192	210	196	121	143	121	149	131	158	132	153	北					○	1	21			2			D61
115	5	6	N-97°-W	(16.565)	2.599	(15.6)	385	385			162	164	162	157	117	134	118		106	124	110		西南	○				○		11						D59
116		8	—	(8.632)					360		205					68		87					北西					○	1	4						D63
117	6	10	N-31°30′-W	(13.078)	3.327	(25.4)			414		186	183	184	175	109	125	130	103		113			東	○						2						D57
118	6	10	—																					○						1						D62
119	6	12	N-41°-W	(9.442)	3.562	(37.7)			458		198	190	182	190	130	124	121	136										○		8						D58
120	6・7	14	—	(3.04)							132												北西							4						D55
121	6・7	14	N-34°-W	13.72+	2.424	(17.6)			415	(435)	162	158	127	124	104	98	93	155		(113)		164	北西					○		8						D54
122	6・7	14	—	8.45+					420		164					139		117					北西					○	1	7	1					D53
123	26	18	—	(7.576)							225								113	(108)												1	1			AII77
124	26	18	—	1.443+																								9	23			1				AII75
125	26	18	N-9°-W	(37.893)	12.903	(34.0)					382	392	324	337					114	134																	AII79
126	26	18	N-7°30′-W	25.75+	9.074	(35.2)				560	331	328	276	265				105	111	140	106	92							5	8			1	1		AII78
127	26	18	N-7°-W	16.755+	5.054	(30.1)	451				235	229	220	213	131		103		100		102									8					焼塩土器2	AII76
128	26	18	—	6.568+																								7	6				1			AII73
129	26	18	—	0.606+																								12	11			1				AII74
130	26	18	—	3.648+																										1						AII72
131	26	18	—	(17.644)																																	AII71
132	26	18	—	2.456+																									5	9							AII70
133	8・10	19	N-2°-E	13.113																			北					○	4	18					墨書土器2	D52
134	10	21	N-29°-W	(13.24)	2.944	(22.2)	341	322	386		196	176	169	150	99	90	87	100	73		85	113	西					○		5						D56
135	9・10	22	N-55°-W	(16.953)	2.77	(16.3)	375	354		457	200	202	132	149	129	112	97		114	112	108	(143)	西		○			○		14		3				D51
136	10	24	N-17°-W	15.472	2.806	18.1	373	381	406	429	184	184	151	158	110	120	109	102	112	119	114	126	北西	○	○			○	1	12				1		D50
137	11・12	26	N-28°-W	19.487	5.372	27.5	418	398	470	483	236	260	204	231	101	114	110	87	113	120	80	113	北西					○		16						D32
138	11・12	27	N-38°-W	40.546	13.0	32.0	627	645	629	657	383	363	346	354	134	121	143	125	147	140	148	154	北西					○		28		1				D37

※土器の個体数には、別掲の墨書土器、転用硯、刻印土器、焼塩土器を含む。

第２表　宮原遺跡竪穴住居跡一覧表

No.	図版	挿図	主軸方位	総面積 (S) m²	主柱間 エリア(S_1)	S1/S %	たて(cm) C	たて(cm) D	よこ(cm) A	よこ(cm) B	a(cm) (P_1・P_2)	b(cm) (P_3・P_4)	c(cm) (P_1・P_3)	d(cm) (P_2・P_4)	P_1(cm) c_1	P_1(cm) a_1	P_2(cm) d_1	P_2(cm) a_2	P_3(cm) c_2	P_3(cm) b_1	P_4(cm) d_2	P_4(cm) b_2	カマド 位置	カマド 支脚	カマド対面 粘土	カマド対面 土坑	P_5	下層 土坑	土器 須	土器 土	手捏	土錘	鉄器	石器	備考	旧No.
139	12・13	28	—	37.489	(8.60)	(22.9)					310			321				134			160									1						D39
140	12・13	28	N-42°30′-W	32.700	9.72	29.7	599	620	561	515	340	322	287	303	146	108	153	113	166	110	164	83	北西	○					1	10						D38
141	12・13	28	N-42°-W	32.157	9.89	30.8	626				338	302	307	315	112	127	123		207	149																D40
142	12・13	28	N-38°-W		6.85						290	289	270	274																						D区
143	12・13	28	—						582		344					133		105											1						D41
144	13	30	N-60°30′-E	18.640	3.77	20.2	(413)	(443)	(439)	(447)	208	186	201	184	(116)	116	(134)	(115)	(96)	(143)	(125)	(118)	東						1	11						A II 61
145	13	30	N-88°-E	20.355																			東		○				4	14		1		2		A II 60
146	13	30	—																											2				1		A II 62
147	14	31	N-57°-W	17.920	4.176	23.3	442	433	412	438	205	205	202	206	112	103	112	104	128	106	115	127	北西						2	9						A II 57
148	14	32	N-52°-W	19.478	2.808	14.4	451	439			176	174	161	166	130		132	134	160	137	141		北西	○					2	9				1		A II 59
149	14	33	N-30°-W	16.087	2.95	18.3	377	384	427	421	185	176	157	174	113	116	104	126	107	118	106	127	北西	○				○		8						A II 58
150		34	N-56°30′-E N-45°30′-E	15,677	A5.346 B3.493	34.1 22.3					246 198	226 184	224 181	228 187	81	 97	73 79	109 109					北東					○								D36
151		35	N-30°-W	(20.536)	5.472	(26.6)					242	226	220	252				130		104		118								3						D34
152		35	N-33°-W	(29.398)	7.801	(26.5)					272	282	295	268					167		153	150								2						D35
153		35	N-32°-W	(13.770)	3.975	(28.9)					196	170	208	226					(98)		83															D区
154		35	N-32°-W	(14.661)	3.738	(25.5)					170	180	204	200							123		北西							5						D33
155		35	N-10°-W	(13.287)	3.348	(25.2)					216	160	172	186			98	61												3						D42
156		36	N-3°-W	28.599	6.012	21.0		548		514	274	258	224	220	135		203	118		118	125	138							2	5					刻印土器１	D43
157		36	N-2°30′-W		4.586						205	218	205	223					116		120			○	○											D区
158		37	N-8°-E	16.952	3.927	23.1			413		206	204	224	190		111		96												5						D44
159		38	N-6°30′-E	(21.15)	3.564						200	196	176	180																						D11
160		39	N-8°-W	(20.207)	5.79	(28.6)					211	202	208	220																					焼塩土器１	D区
161	15・16	40	—	24.38＋																										43	1		2	2		市道 D9
162	16	41	—	10.87＋							251			233			94	98												2					縄文土器１	市道 D8
163	17	43	—	10.94＋																								1				2			市道 D6
164	17	43	—	3.084＋																								1	3						市道 D7

第２表　　宮原遺跡竪穴住居跡一覧表

No.	図版	挿図	主軸方位	総面積 (S) ㎡	主柱間エリア (S_1)	S1/S %	たて (cm) C	たて (cm) D	よこ (cm) A	よこ (cm) B	a (cm) (P_1-P_2)	b (cm) (P_3-P_4)	c (cm) (P_1-P_3)	d (cm) (P_2-P_4)	P_1 (cm) c_1	P_1 (cm) a_1	P_2 (cm) d_1	P_2 (cm) a_2	P_3 (cm) c_2	P_3 (cm) b_1	P_4 (cm) d_2	P_4 (cm) b_2	カマド 位置	カマド 支脚	カマド対面 粘土	カマド対面 土坑	P_5	下層 土坑	土器 須	土器 土	手捏	土錘	鉄器	石器	備　　考	旧No.
165	17	44	N-70°-W	21.226	4.47	21.0	442	508	508	495	203	224	200	208	112	171	185	134	130	136	115	135	西	○				○	2	9			2			市道 D3･4
166	17	44	—																									○		2					鞴羽口１、焼塩土器１	市道 D5
167	17	44	—																														1		市道 D2
168	17	46	—	17.074＋							220		218		129	155							北西					○	4	8						市道 D1
169		48	N-36°-W N-44°30′-W		A4.613 B5.478						212 234	225 232	224 202	235 237																						D区
170		49	N-5°-E		6.954						287	282	233	259																						D区
171		49	N-2°30′-E	(24.036)	4.77	(19.8)	(488)	(495)	(511)	(477)	205	(194)	245	235	(142)	(127)	(155)	(179)	(101)	97	(105)	(186)														D区
172		50	—		13.628＋				(456)		249		237		(116)	108		(99)		161			北	○				○								D区
173		51	N-3°-E	(23.660)	4.033	(17.0)	(526)	(536)	(453)	(438)	198	198	204	206	(174)	(138)	(188)	(117)	(148)	(128)	(142)	(112)														D区
174		52	N-2°30′-E	(26.324)	3.808	(14.5)		(510)	(522)	(515)	202	193	184	200	(106)	158	(124)	(162)		137	(186)	(185)														D区
175		52	—	2.359＋	(3.484)						207		176																							D区
176		53	—	12.492＋	3.404	(272)					175			185																7						D116
177		53	—								207																									D区
178	18	54	N-42°-W	(25.728)	5.742	(223)	536	515			227	254	254	226	143		145	112	139	120	144		北西							2						A II 80
179	18	55	—	10.463＋				418						206			98				114		北西					○		2				1		市A II 1
180		56	—	1.436＋																																市A II 2
181	19	58	N-75°30′-W	19.135＋	2.951	(15.4)	424	425		440	182	160	160	181	130		129	134	134	127	115	153	西												白玉13	市A II 3
182	19	58	N-3°-W	18.348＋	3.564	(19.4)		456	427	406	202	177	197	209	130	107	138	(118)		113	109	(116)	北					○	14	20						市A II 5
183		57	—	1.427＋																			北													市A II 4
184		58	N-8°30′-W	23.358	3.864	165		520	442		171	172	222	200	157	139	156	132			164	138	北													市A II 6
185	20	60	N-84°-E	23.635＋	4.374	(18.5)	510	515	468		216	184	226	211	127	128	162	124	157		142	151	東						8	20			2			A II 47
186		60	—																																	A II 区
187	20	61	N-8°-W	10.695																				○					8	13			2			A II 64
188	3	63	N-6°-W	10.237					314		225				40	60	30	31					北					○		11		1	1			D107
189	3	63	N-3°-W	(13.626)	5.244	(38.5)	397				241	234	222	220	37	46			138	46			北						1	9		1	1	1		D17･D108
190	3・21	64	N-10°-W	(21.028)	4.825	(22.9)	416	420	502		237	227	192	223	127	125	115	140	97	116	82		北					○	3	6		6	4	1	転用硯２、焼塩土器２	D110･D109

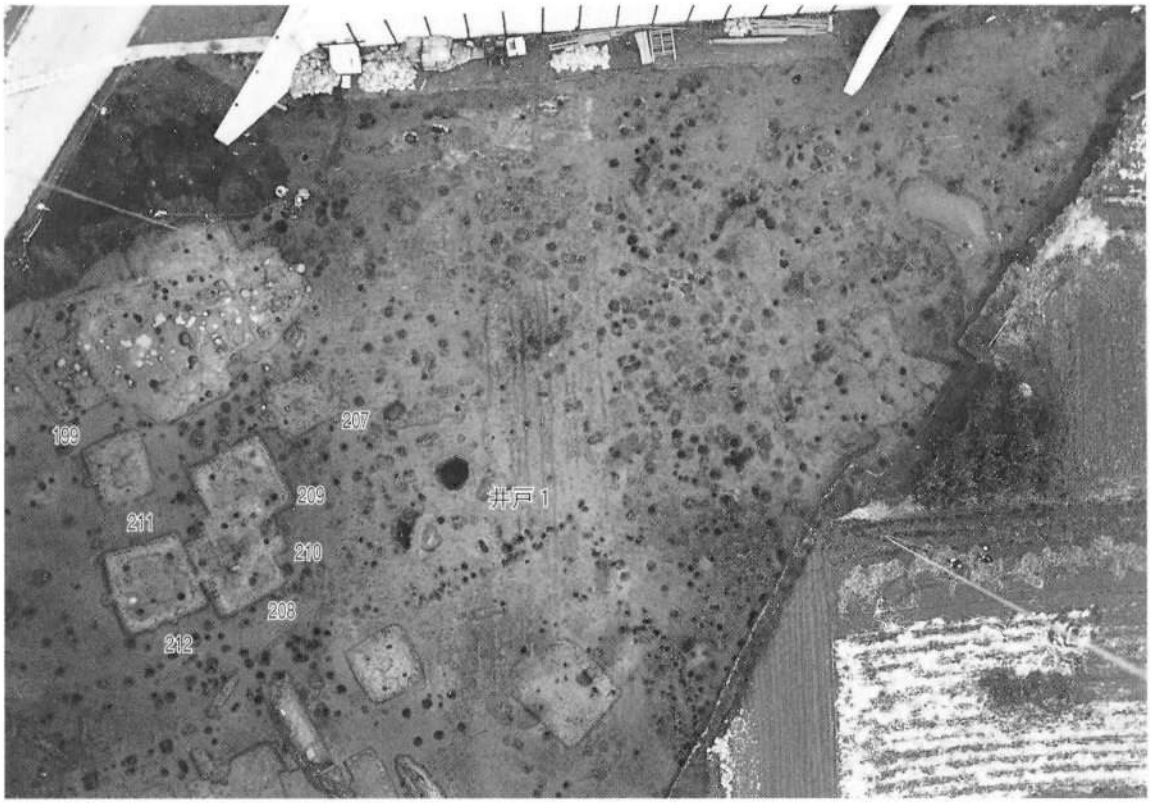
第２表　宮原遺跡竪穴住居跡一覧表

No.	図版	挿図	主軸方位	総面積 (S) m²	主柱間エリア (S_1)	S1/S %	たて (cm) C	たて (cm) D	よこ (cm) A	よこ (cm) B	a (cm) (P_1・P_2)	b (cm) (P_3・P_4)	c (cm) (P_1・P_3)	d (cm) (P_2・P_4)	P_1 (cm) c_1	P_1 (cm) a_1	P_2 (cm) d_1	P_2 (cm) a_2	P_3 (cm) c_2	P_3 (cm) b_1	P_4 (cm) d_2	P_4 (cm) b_2	カマド 位置	カマド 支脚	カマド対面 粘土	カマド対面 土坑	P_5	下層土坑	土器 須	土器 土	手捏	土錘	鉄器	石器	備考	旧No.
191	3 20・21	68	N-8°-W	(25.632)	4.621	(18.0)			514		200	221	225	219	106	168	128	146					北	○				○	20	18	1		12		墨書土器１	AII63・D115
192	3・20	61	N-1°-E	17.525＋	6.16	(35.1)					247	230	254	263			136													2						AII 66
193	3・20	61	—	2.457＋																			北						2	6						AII 67
194	3・20	61	—	1.229＋	3.725						238		176					140																		AII 68
195	3	68	—	19.257＋	2.944				373		150			160	79	100	66	123				81？	西？					○		1				焼塩土器１	AII69・D126
196	3	68	—	(0.534)																									3	5						D区
197	3	69	—	(13.226)	(5.215)							226		234				98				(118)	北							16		3	2			D104・D105
198	3	69		(3.84)	(4.62)							226		200					76	156	67														AII18・D106
199	2・3 21	71	N-10°-W	(17.410)	3.591	(20.6)	399	406			180	163	206	195	103	102	97		90	116	107		北					○	5	2						D111
200	3	64	—																										2	3					刻印土器２、焼塩土器１	D131
201	3	64	—																																	D130
202	3	74	N-8°30′-W	(2.499)	4.06						199	210	224	179																5			1	1		D117
203	3	74	N-8°-W	(3.266)	6.48						255	247	260	255																						D19
204	3	74	N-6°30′-W	(4.755)	5.85						244	224	249	250															1							D20・D128
205	3	74	N-13°-W	(0.507)	4.59						234	250																								D区
206	3	75	N-76°-W	(13.222)	2.184	(16.5)	367	410	349	355	141	164	148	144	115	98	123	110	104	102	143	89	西						1	4						D112
207	2・3 22	76	N-93°30′-W	9.149	4.897	53.5	296	298	313	295	213	217	242	213	28	51	30	45	26	43	55	38	西					○	3	5						D9
208	2・3 22・23	77	N-96°30′-W	18.533	2.434	13.1	399	410	463	463	212	188	119	130	155	128	128	123	125	119	152	156	西						1	8						D5
209	2・3 22・23	79	N-6°30′-W	(18.473)	6.123	(33.1)		426	431	435	247	237	245	258	84	97	87	87		108	81	90	北					○		15			1			D7
210	2・3 23	77									170	168	165	163					97	93			西？							3						D8
211	2・3 23	82	N-89°-W	11.351																			西				○	○	5	10			2			D2
212	2・3 23	84	N-85°30′-W	19.977	5.843	29.2	469	441	453	439	248	238	241	238	118	105	109	100	110	94	94	107	西							9			1			D4
213	24・25	86	N-79°-W	15.732	3.699	23.5	404	395	408	396	190	212	186	191	100	114	92	104	119	97	112	87	西						4	18			1			D1

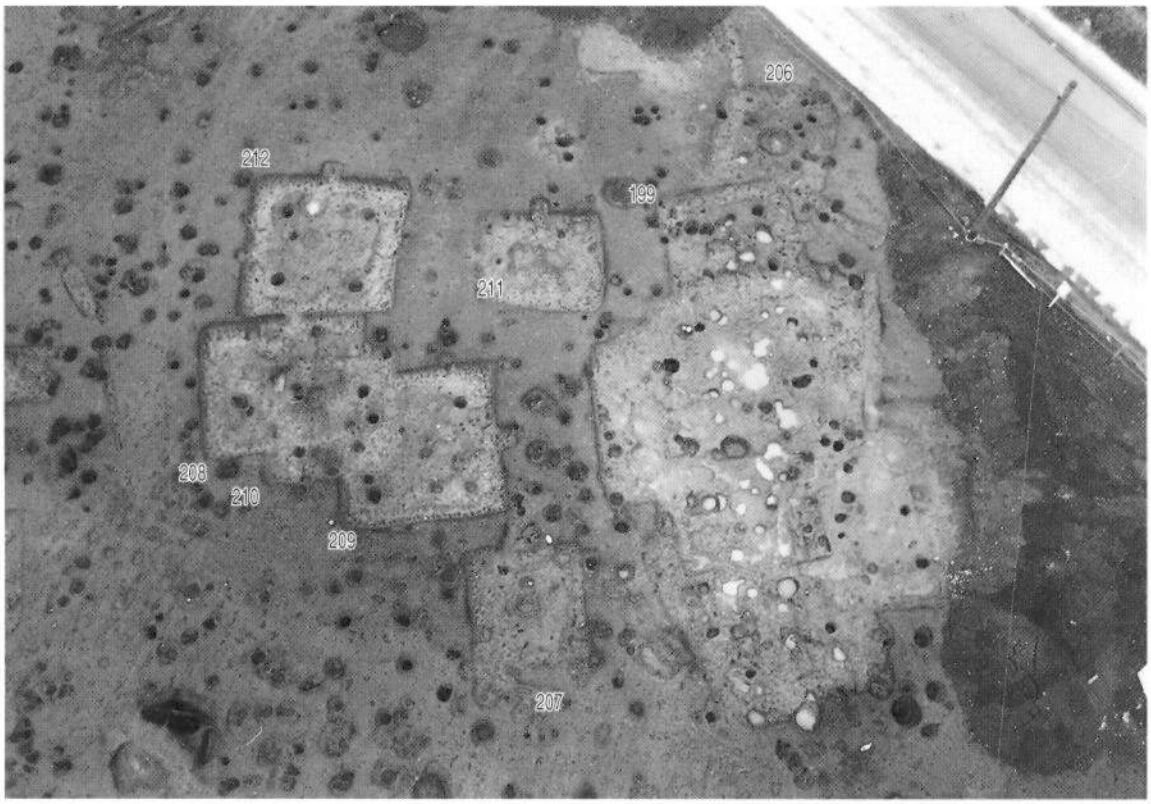
図　版

立野・宮原遺跡全体空中写真（北上空から）

AⅡ区・D区（調査前）空中写真（南上空から）

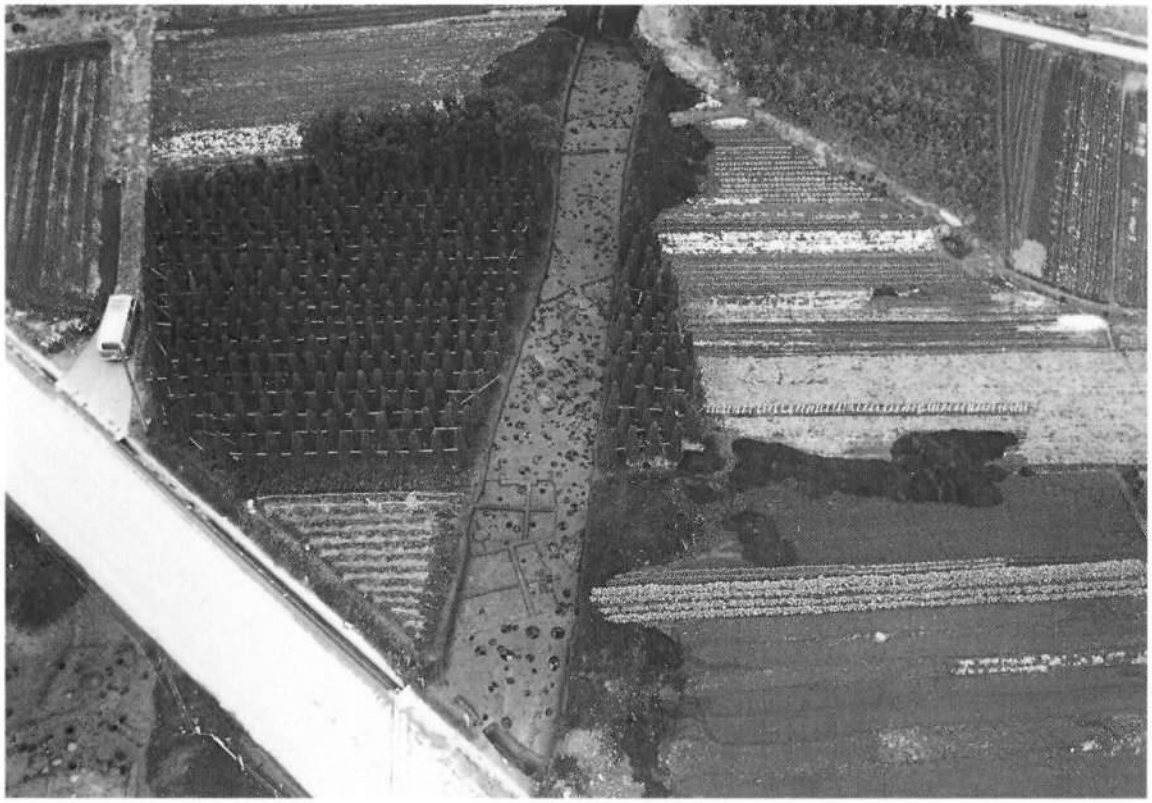


D区（調査後）空中写真（南上空から）

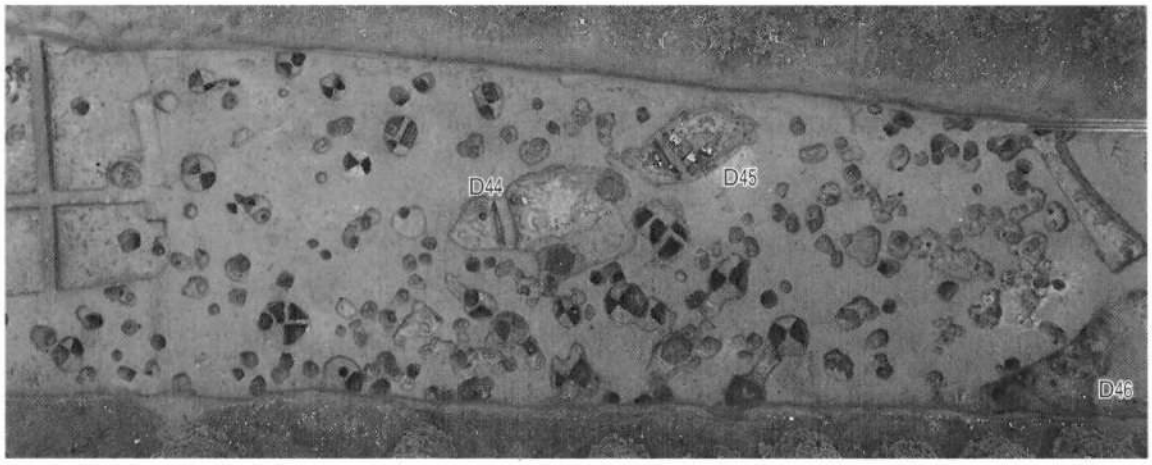


188～212号竪穴住居跡空中写真（東上空から）

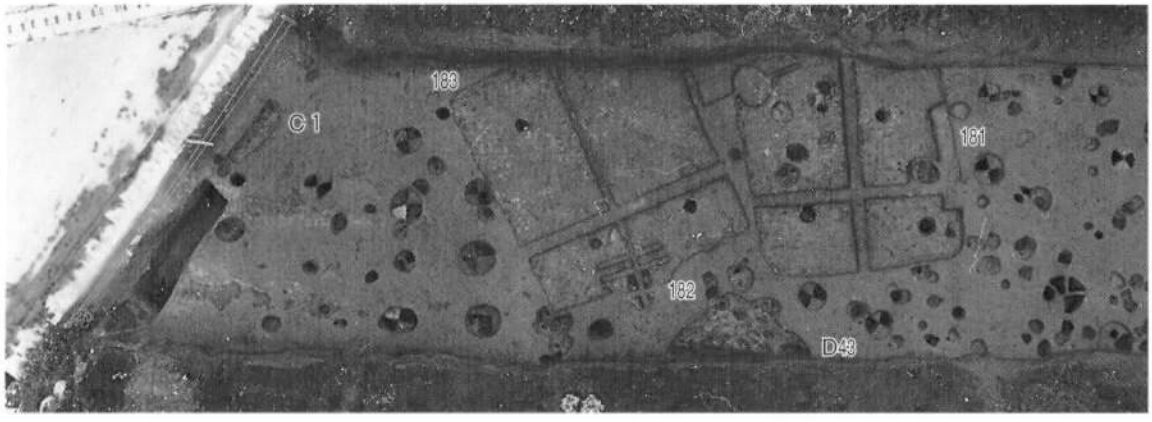
188～211号竪穴住居跡空中写真（南上空から）



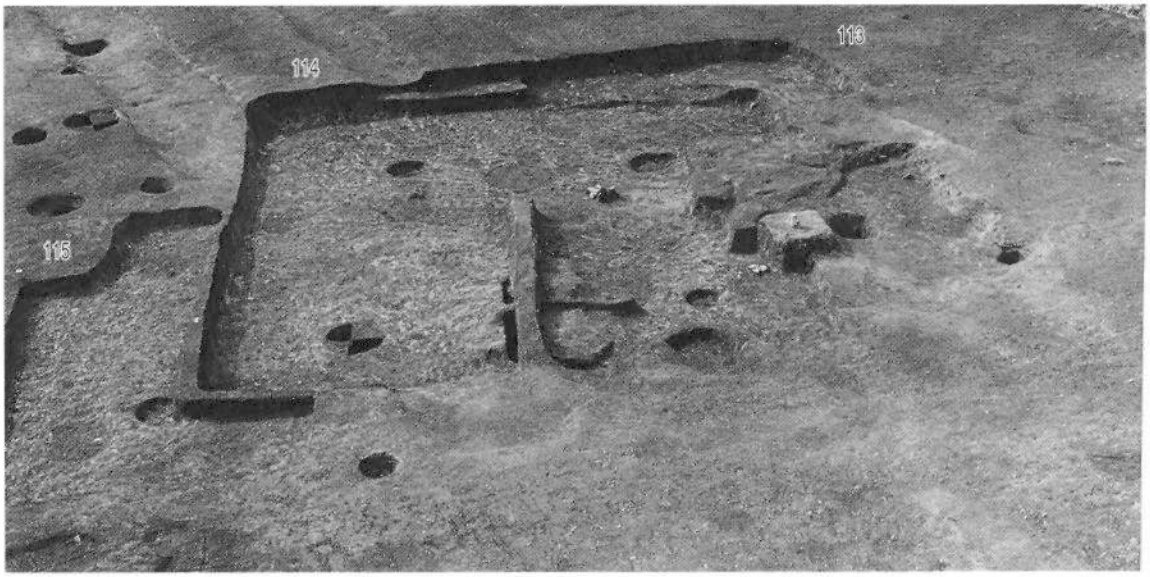
AⅡ区市道全景（南西上空から）



AⅡ区市道中央部（北東上空から）



AⅡ区市道東部（北東上空から）



113・114号竪穴住居跡床面の遺構出土状態

115号竪穴住居跡床面の遺構出土状態

114号竪穴住居跡カマド

117～122号竪穴住居跡床面の遺構出土状態

117号竪穴住居跡カマド

120～122号竪穴住居跡床面の遺構出土状態

120～122号竪穴住居跡カマド

133号竪穴住居跡カマド

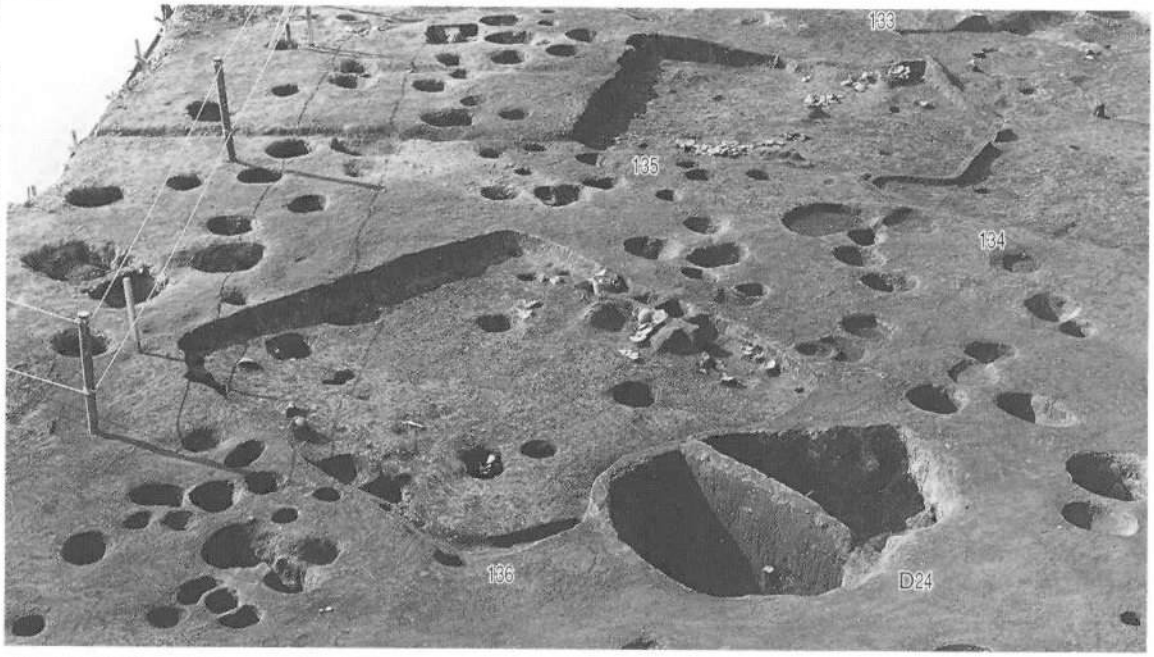
133号竪穴住居跡カマド（調査後）

135号竪穴住居跡カマド

135号竪穴住居跡粘土及び土器出土状態

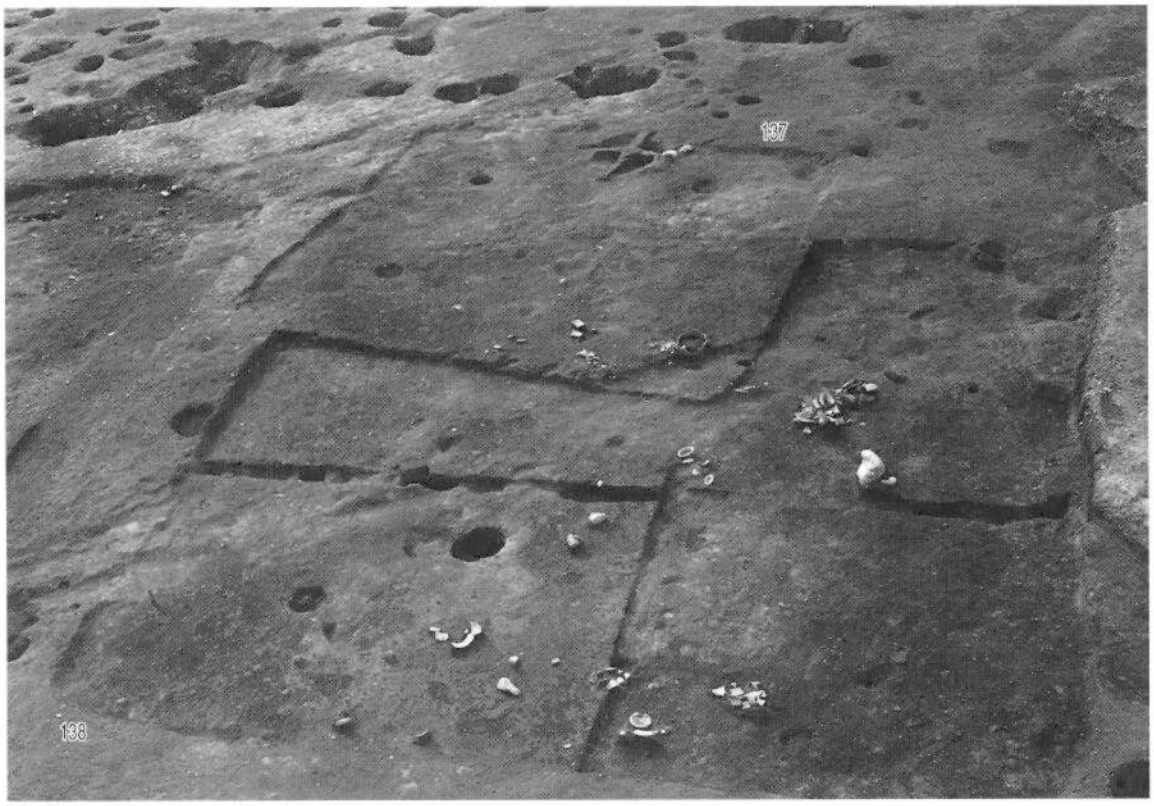
図版 10

135・136号竪穴住居跡床面の遺構出土状態と24号土坑



136号竪穴住居跡床面の遺構出土状態

136号竪穴住居跡カマド



137 ・ 138号竪穴住居跡床面の遺構出土状態

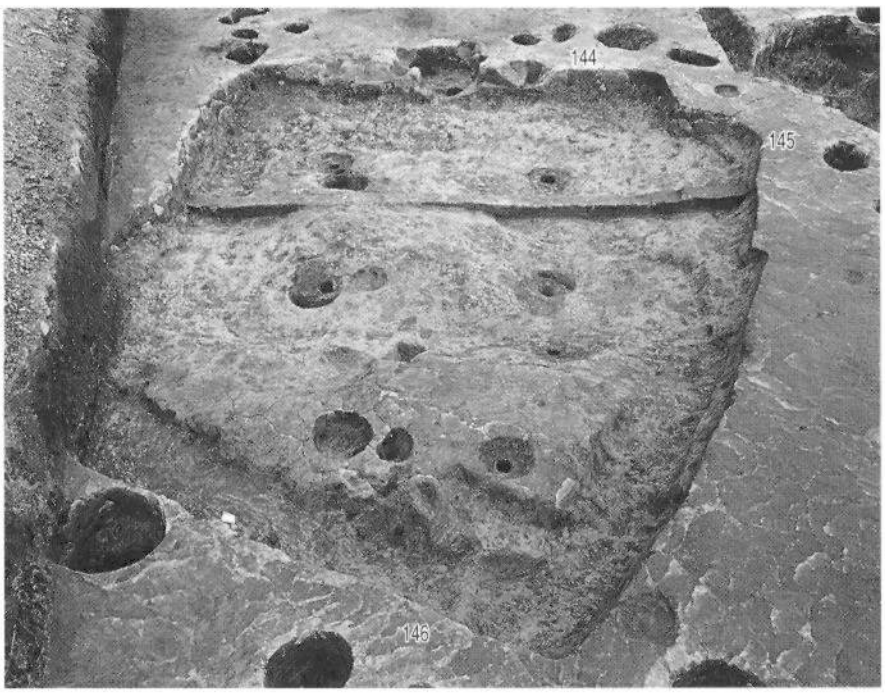
137・138号竪穴住居跡床面下層遺構検出中の状況

137 ・138号竪穴住居跡床面下層の遺構出土状態

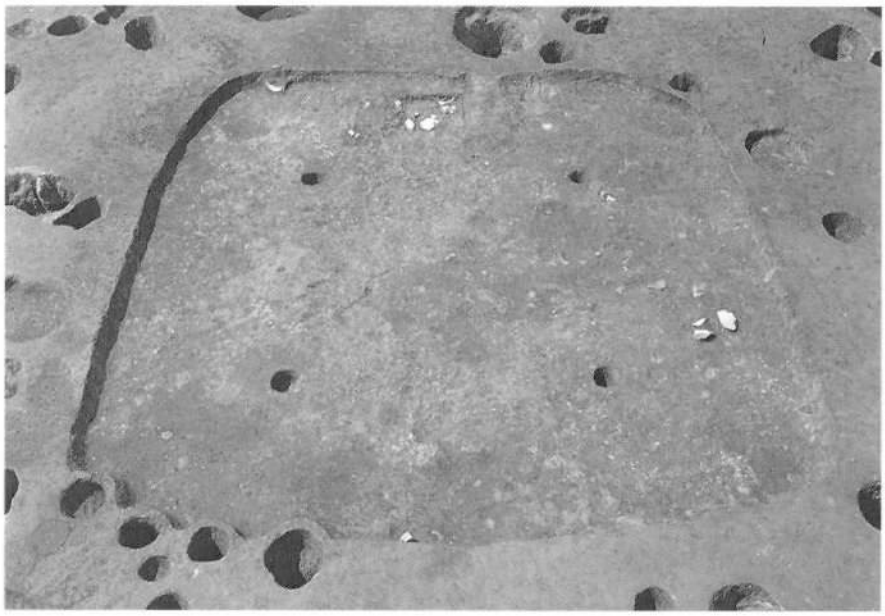
137・138号竪穴住居跡床面の遺構出土状態

139～143号竪穴住居跡床面下層の遺構出土状態

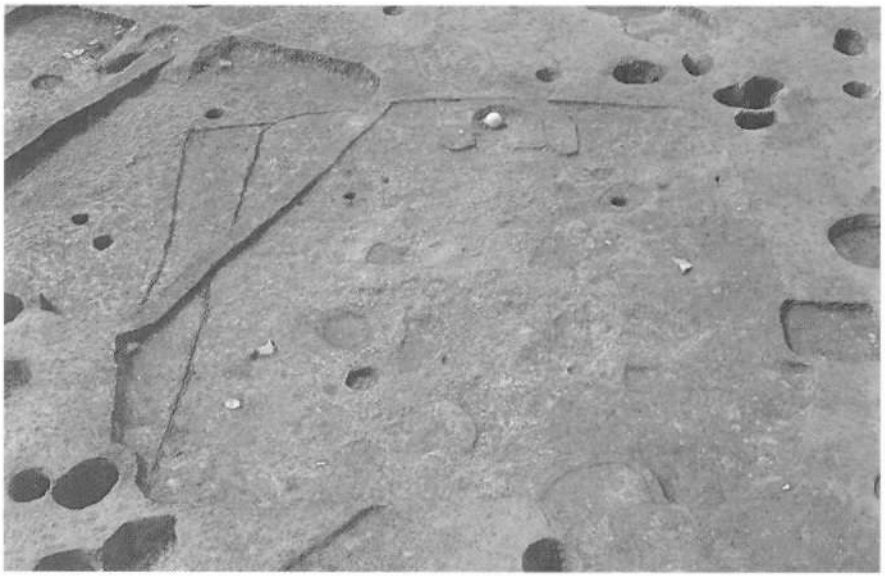
144～146号竪穴住居跡床面の遺構出土状態



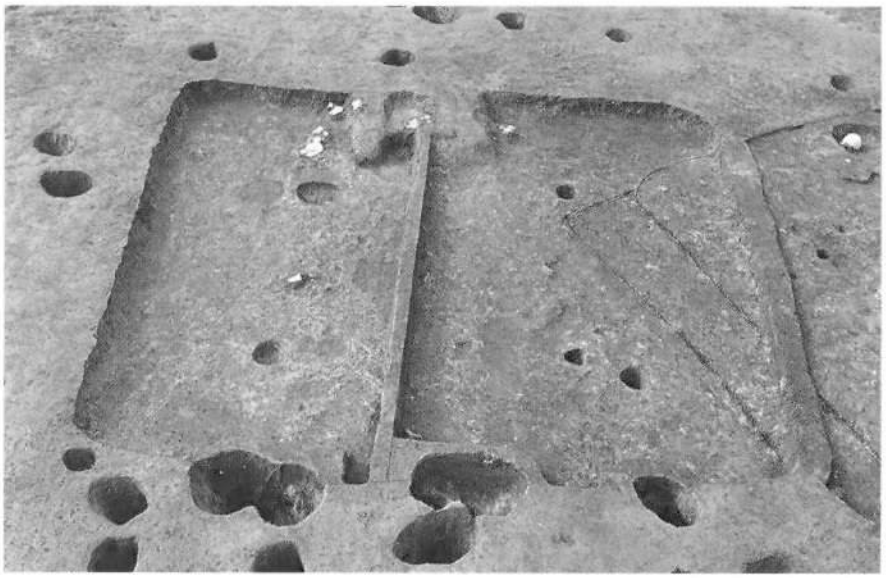
144～146号竪穴住居跡床面下層の遺構出土状態



147号竪穴住居跡床面の遺構出土状態

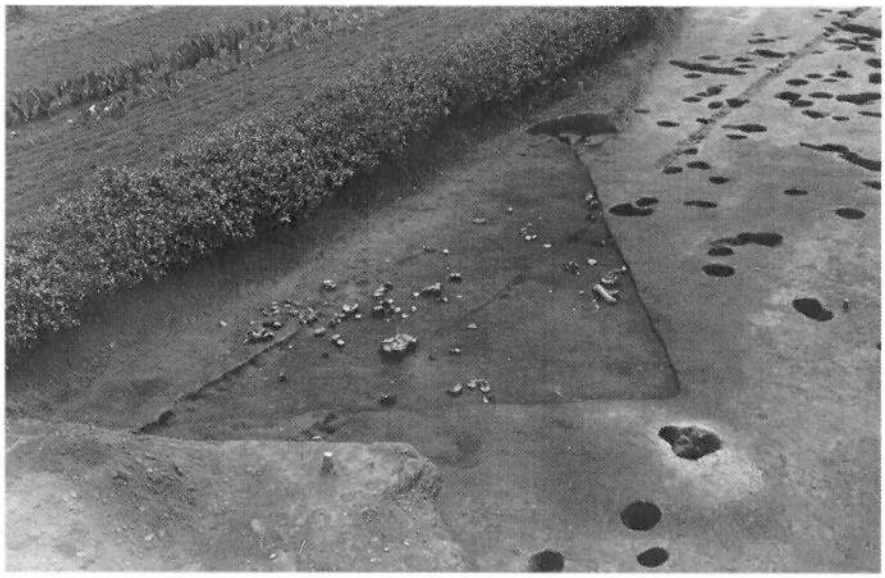


148号竪穴住居跡床面の遺構出土状態

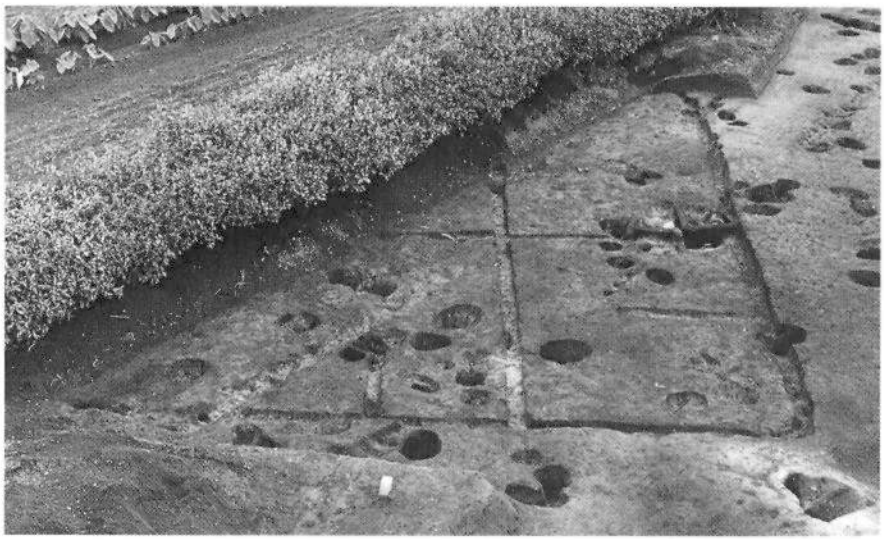


149号竪穴住居跡床面の遺構出土状態

161号竪穴住居跡床面の遺構出土状態



161号竪穴住居跡床面下層遺構検出中の状況

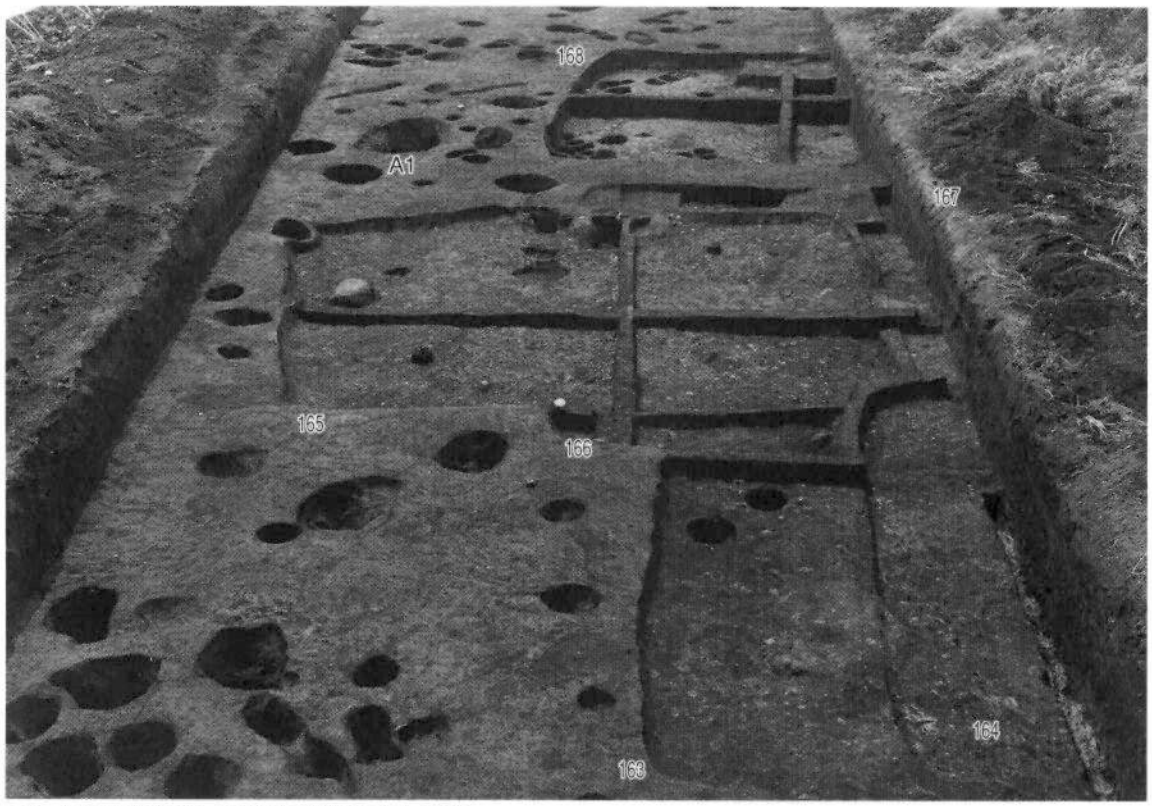


同上

161号竪穴住居跡屋内土坑検出状態

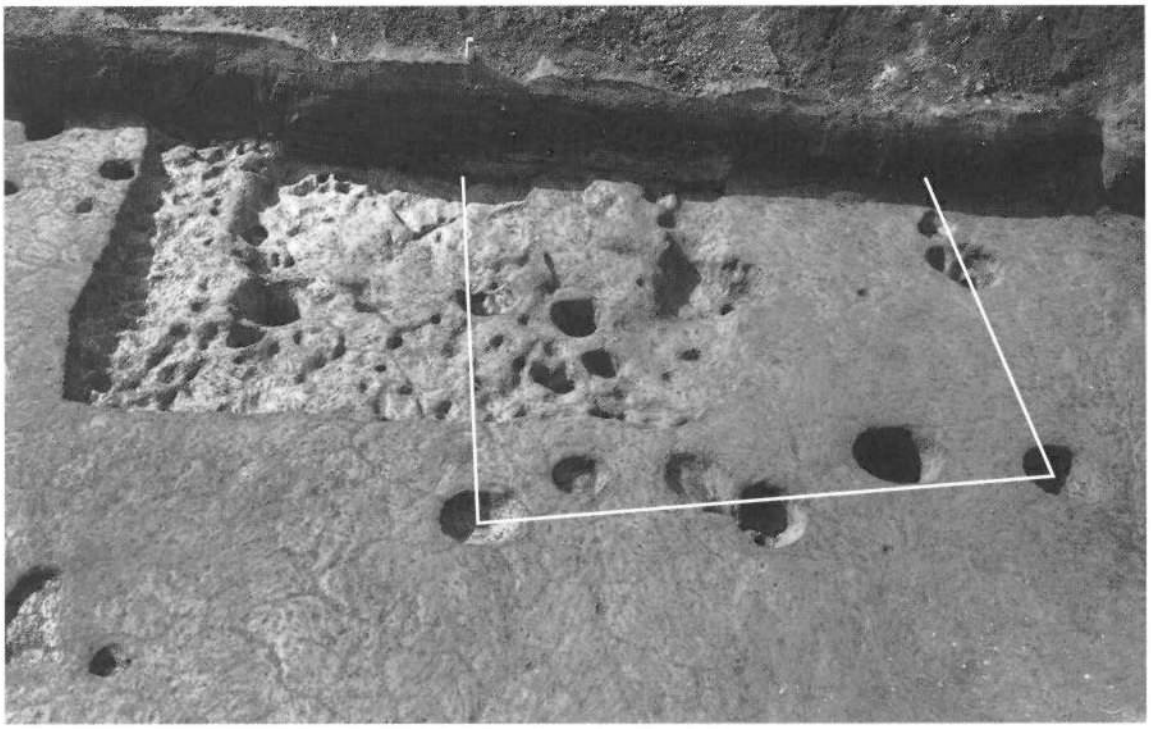
161号竪穴住居跡屋内土坑

162号竪穴住居跡床面の遺構出土状態

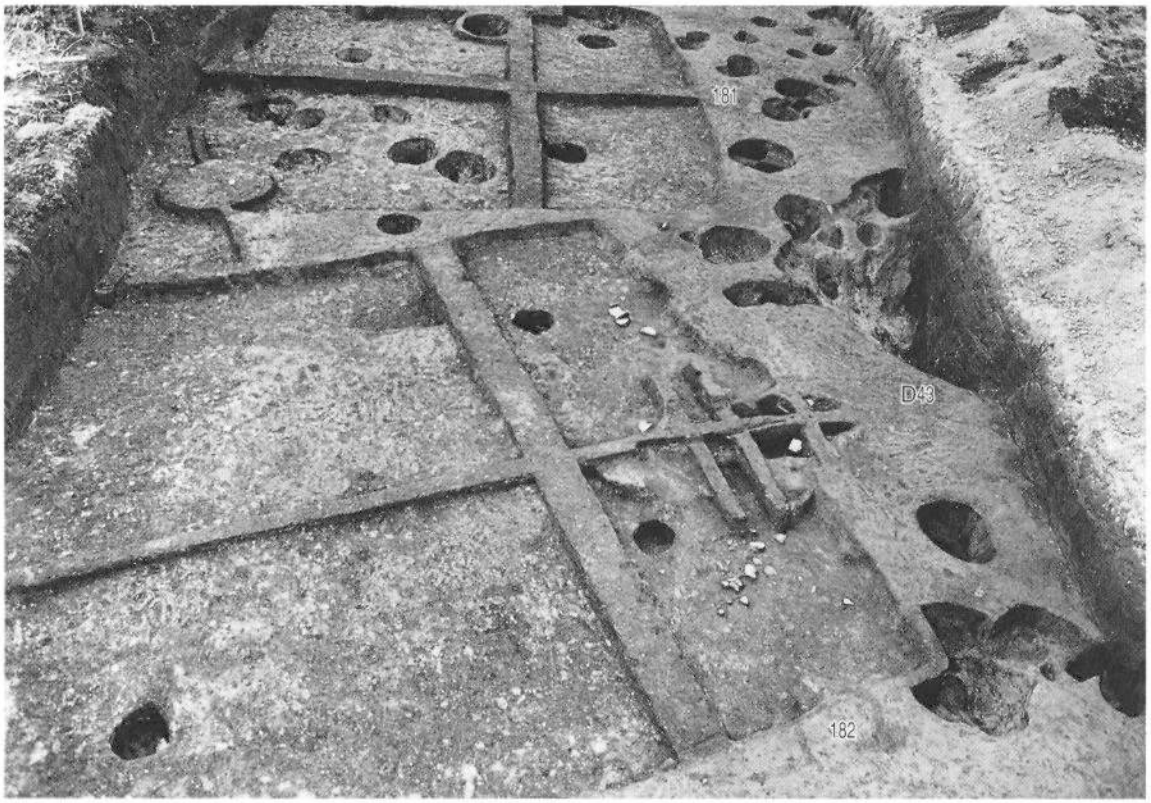


163～168号竪穴住居跡床面の遺構出土状態

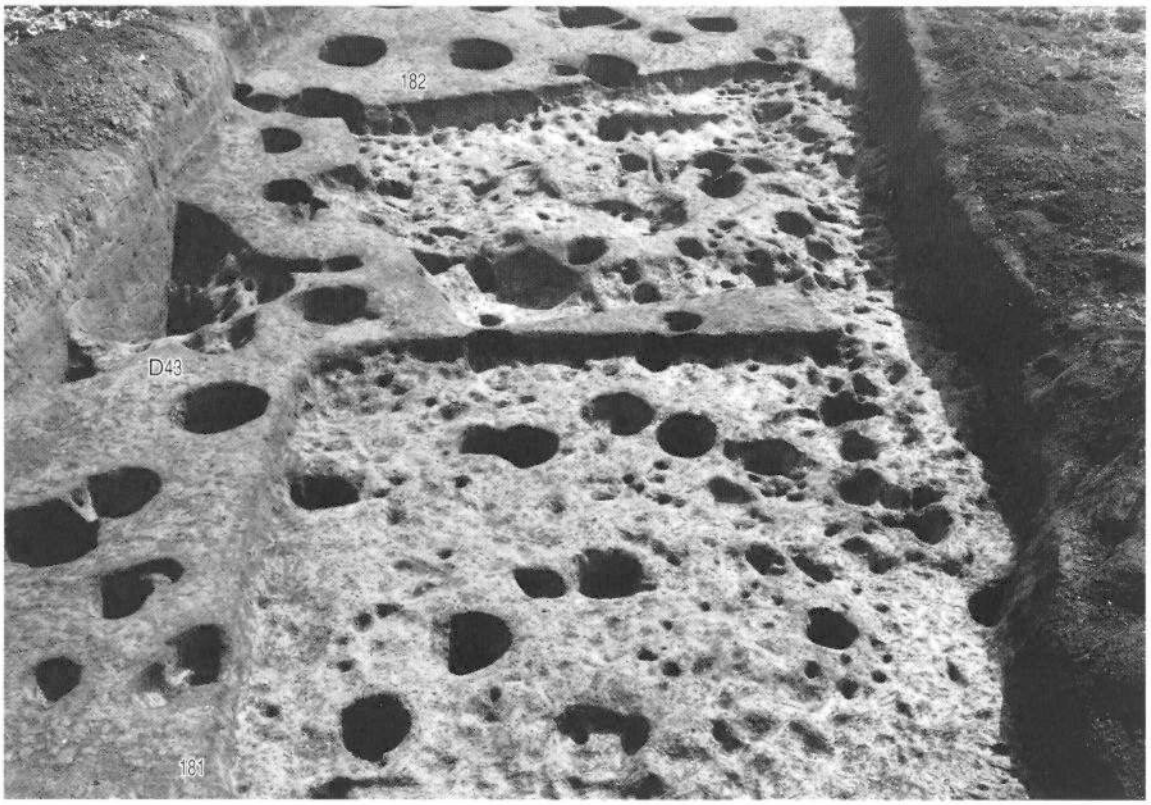
163・168号竪穴住居跡床面下層の遺構出土状態



上：178号竪穴住居跡床面の遺構出土状態と35・36・39～42号土坑
下：179号竪穴住居跡と73号建物



181・182号竪穴住居跡床面の遺構出土状態と43号土坑



181・182号竪穴住居跡床面下層の遺構出土状態

185号竪穴住居跡床面の遺構出土状態

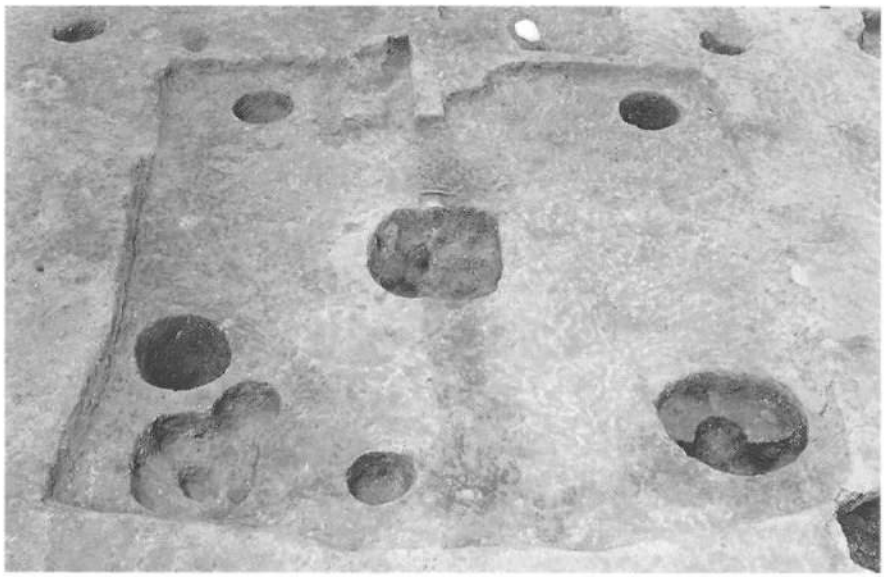
187・191～194号竪穴住居跡床面の遺構出土状態と37号土壙

187・191～194号竪穴住居跡床面の遺構出土状態

190号カマド

191号カマド

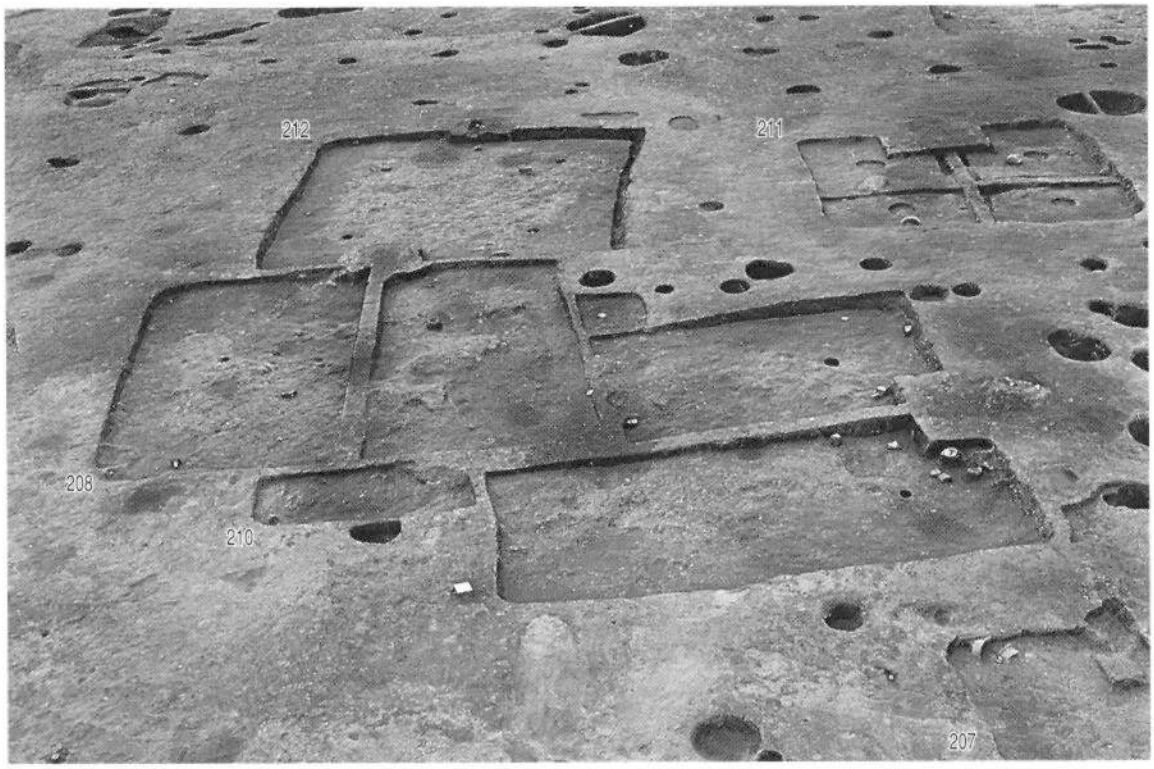
199号カマド



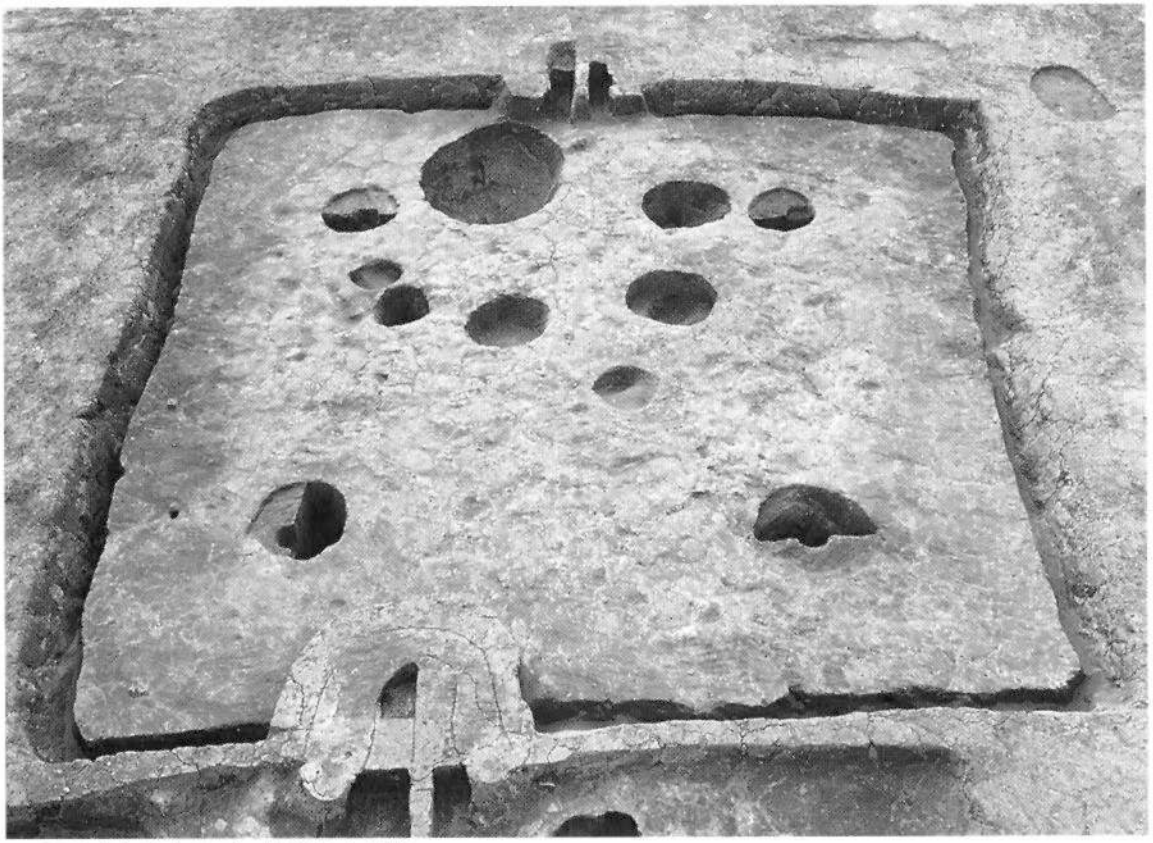
207号竪穴住居跡床面の遺構出土状態

208号竪穴住居跡床面の遺構出土状態

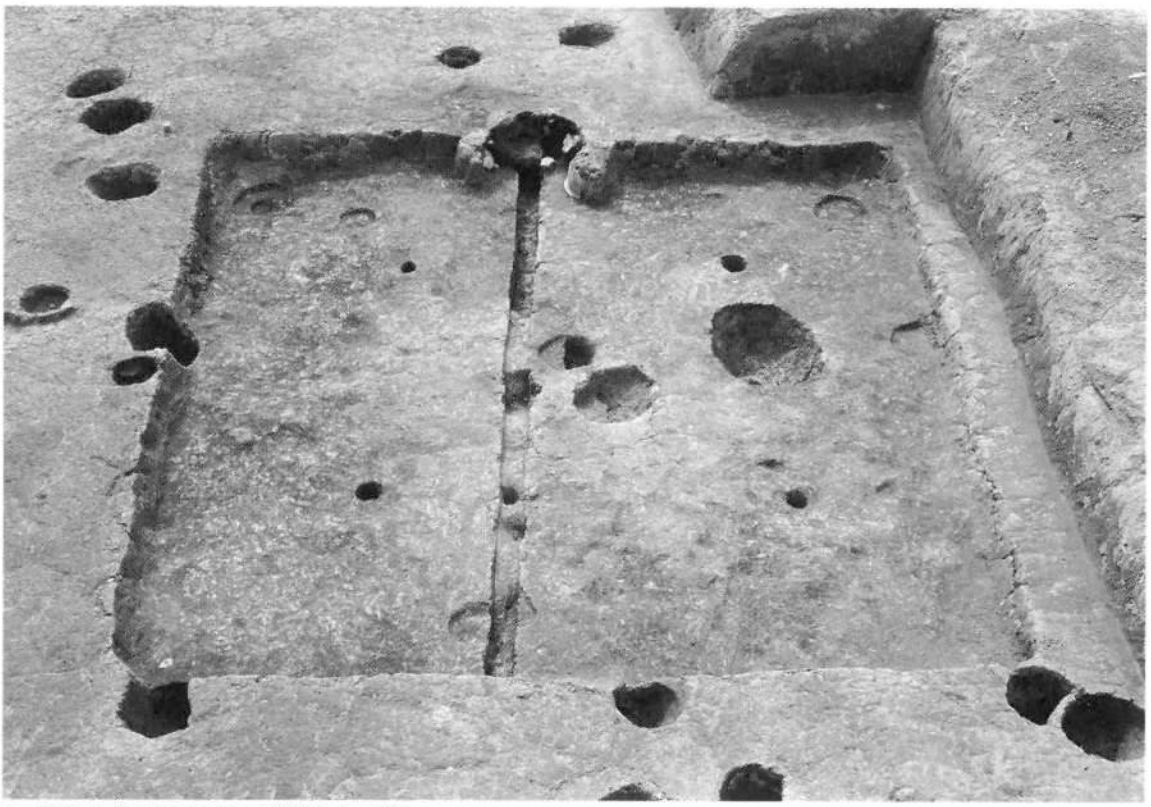
209号竪穴住居跡床面の遺構出土状態



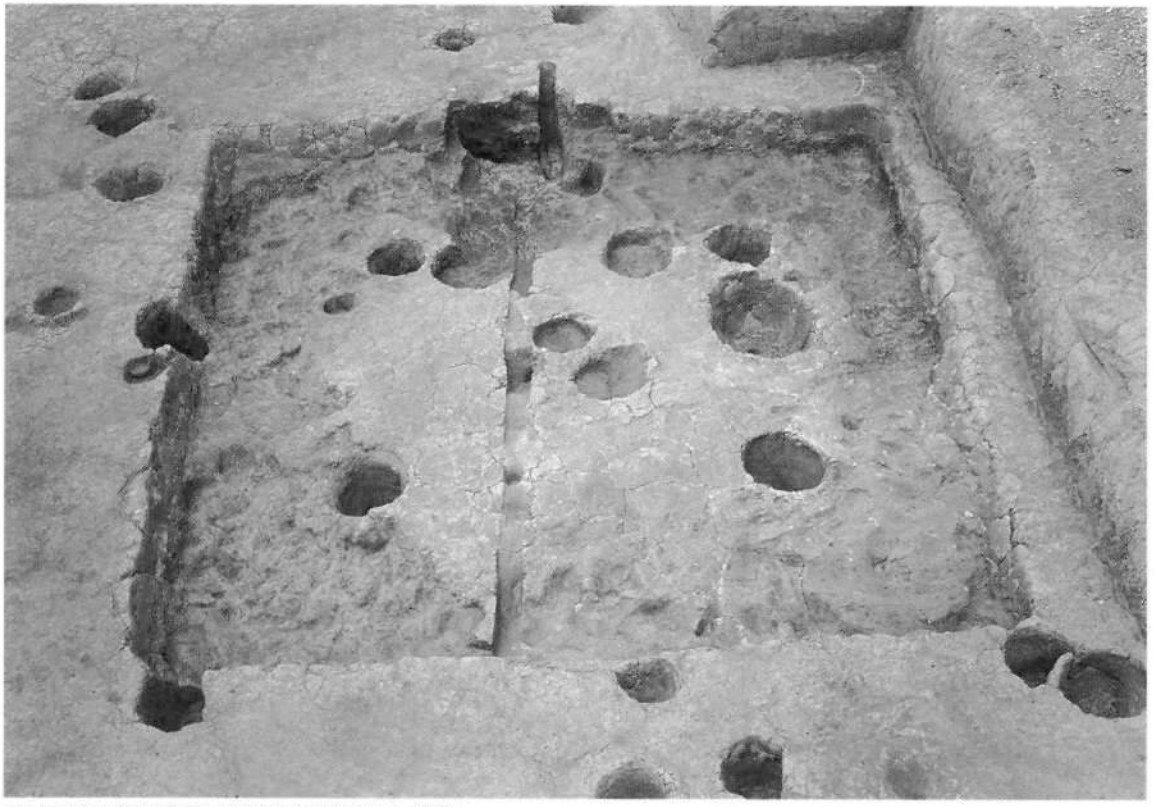
208～212号竪穴住居跡



182号竪穴住居跡床面の遺構出土状態



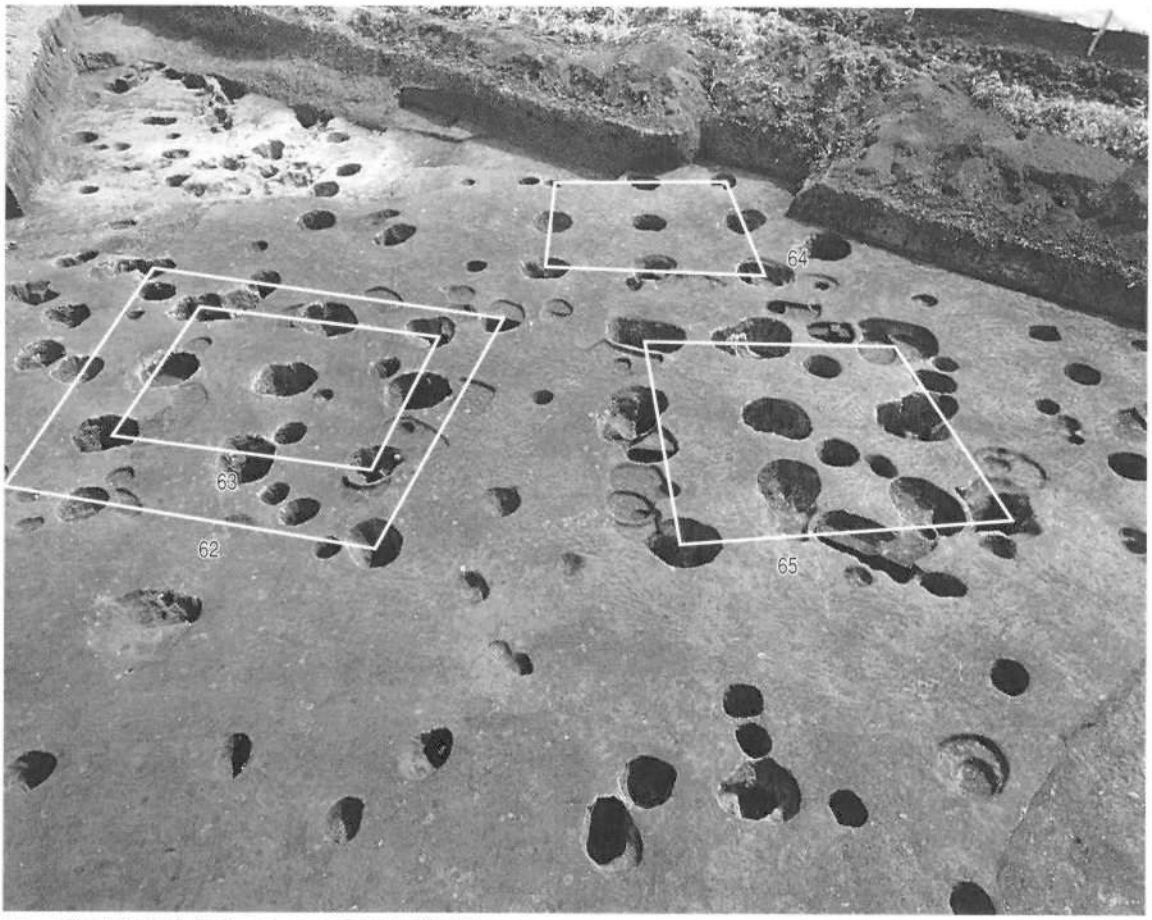
213号竪穴住居跡床面の遺構出土状態



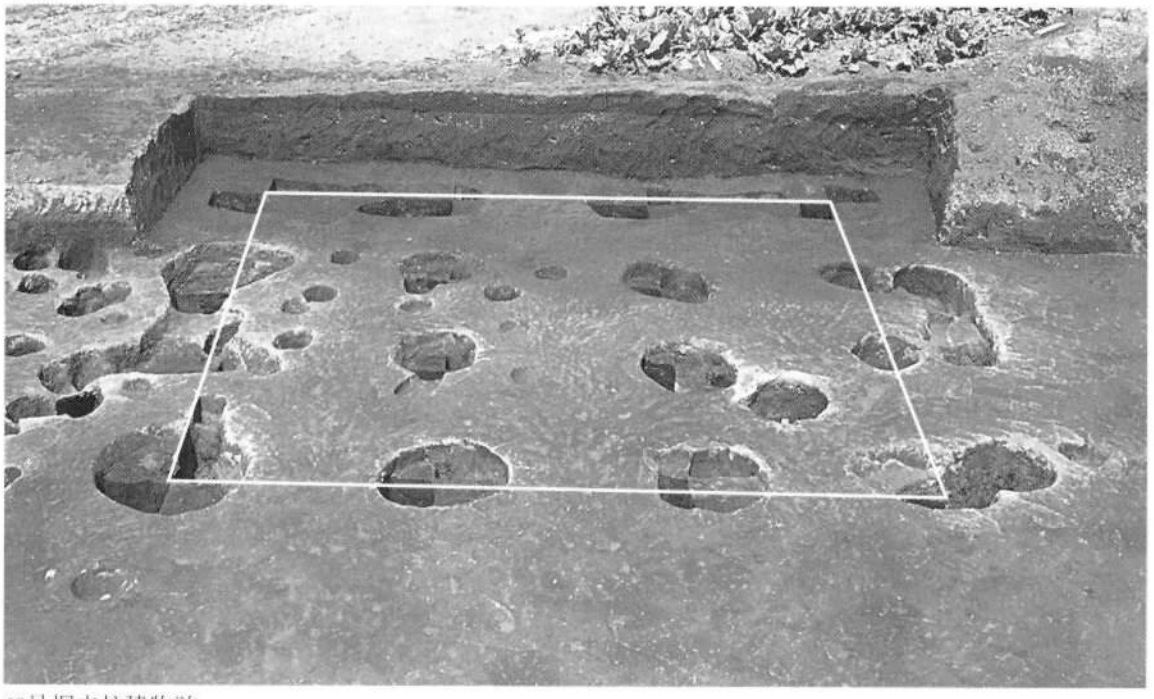
213号竪穴住居跡床面下層の遺構出土状態

213号竪穴住居跡カマド

213号竪穴住居跡カマド

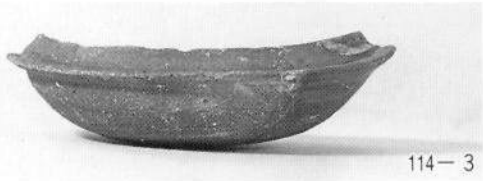


62～65掘立柱建物跡と123～132号竪穴住居跡



68号掘立柱建物跡

113－3


114－3

114－12

115－3

115－9

115－10

116－1

117－1

117－2

113～117号竪穴住居跡出土土器

115－11

118－1

122－1

128－9

129－6

129－8

129－22

129－23

133－1

133－3

135－2

135－3

135－5

115・118・122・128・129・133・135号竪穴住居跡出土土器

135－ 9

136－12

136－ 8

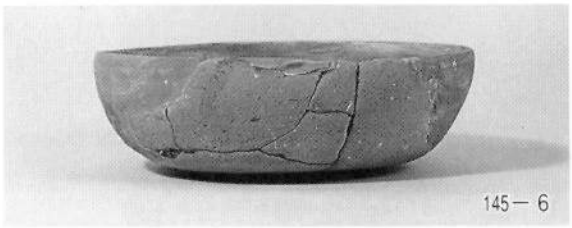
137－16

138－28

136－ 9

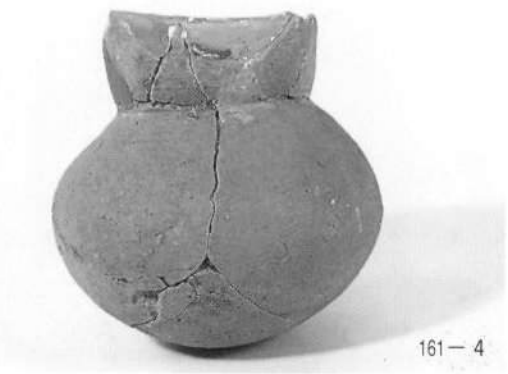
144－ 7

136－11


145－ 6

135～138・144・145号竪穴住居跡出土土器

145－7


161－4

148－5

161－6

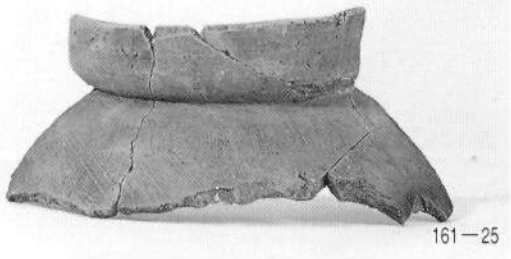
149－6

161－10

161－2

161－11

145・148・149・161号竪穴住居跡出土土器


161－25

161－29

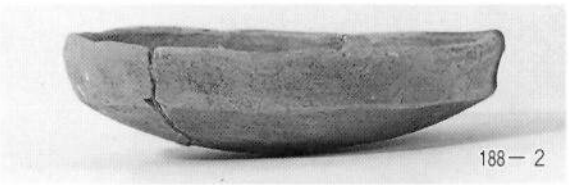
161－18

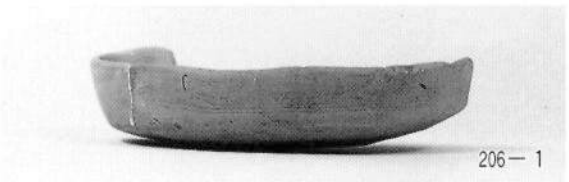
168－1

168－2

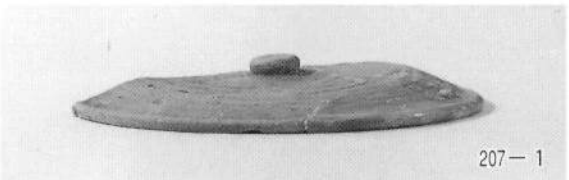
187－8

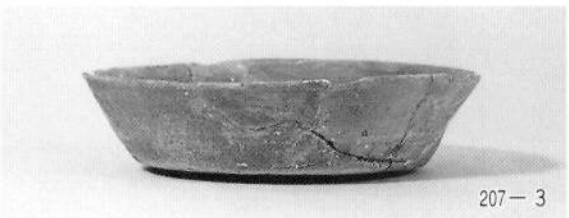
179－2


188－2

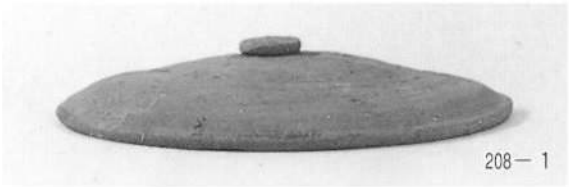

206－1

206－3


207－1


207－3

161・168・179・187・188・206・207号竪穴住居跡出土土器


208－1

208－3

209－14

209－15

209－7

212－3

213－2

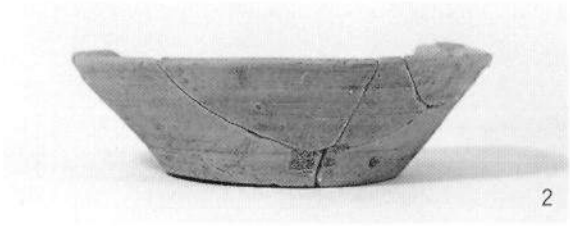
213－3

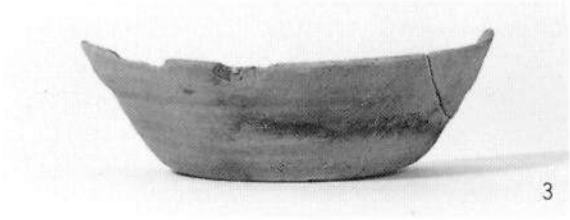
213－4

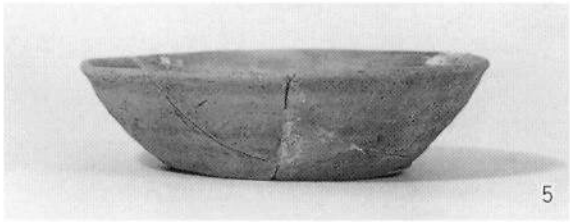
213－12

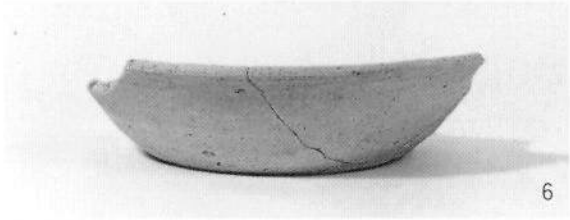
213－13

208・209・212・213号竪穴住居跡出土土器

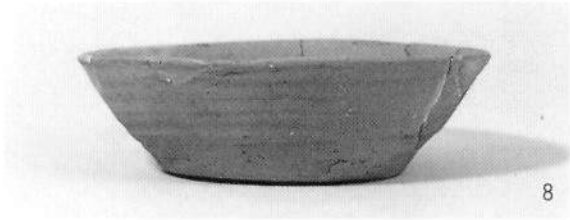

2

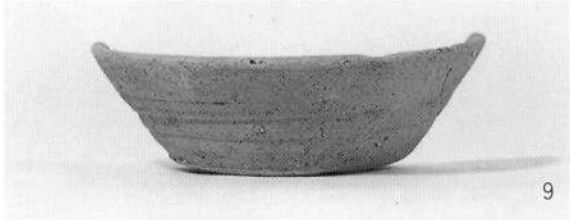

3


5


6

7


8


9

10

15

16

17

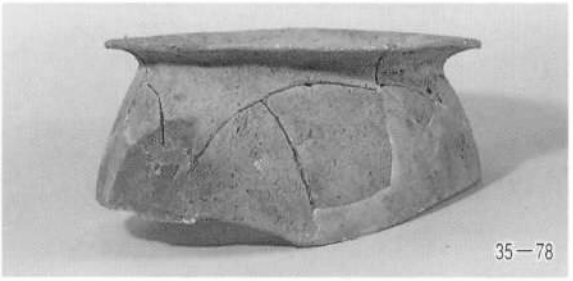
18

1号井戸出土土器

24－1

35－47

27－10


35－78

34－1

35－104

35－1

35－15

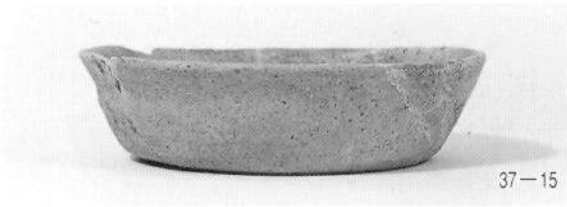
35－26

35－105

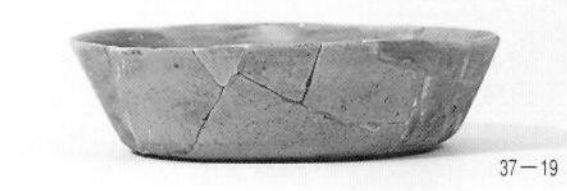
35－63

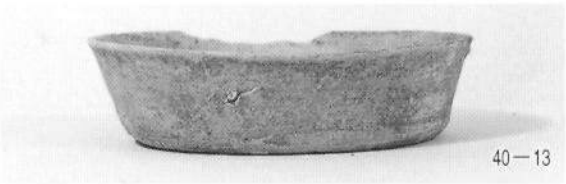
40－36

24・27・35・40号土坑出土土器


37－15

37－39

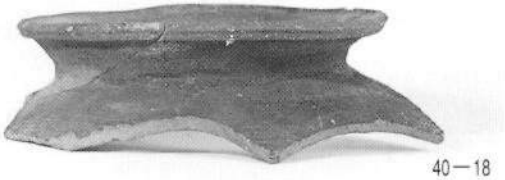

37－19


40－13

37－50

40－17

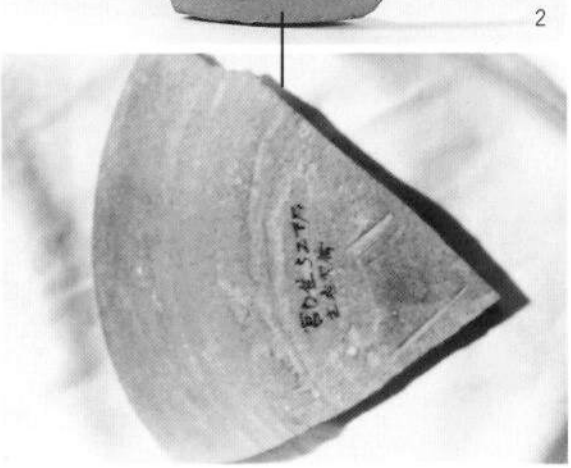
39－ 8


40－18

37・39・40号土坑出土土器

1

2



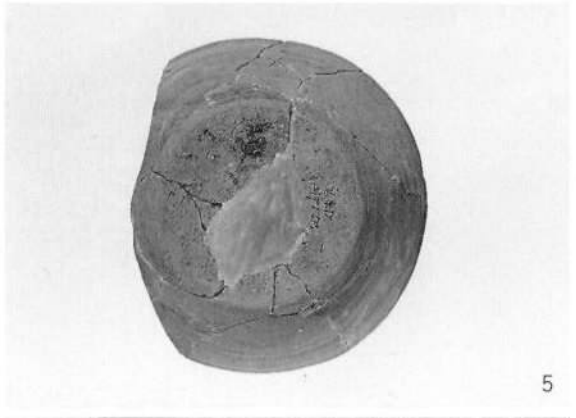
墨書文字

3

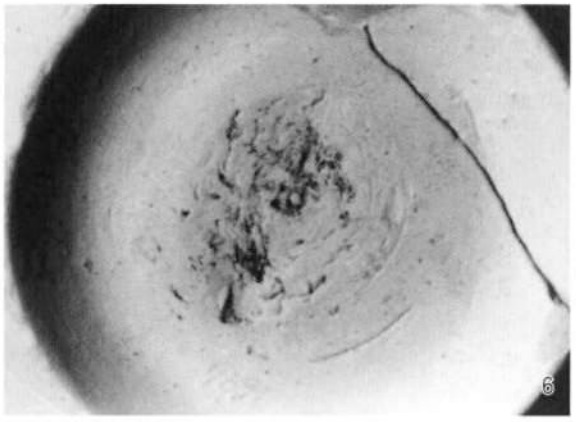
3

4

4

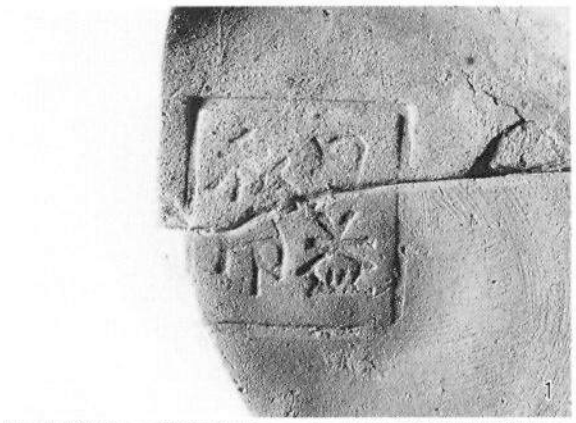

5

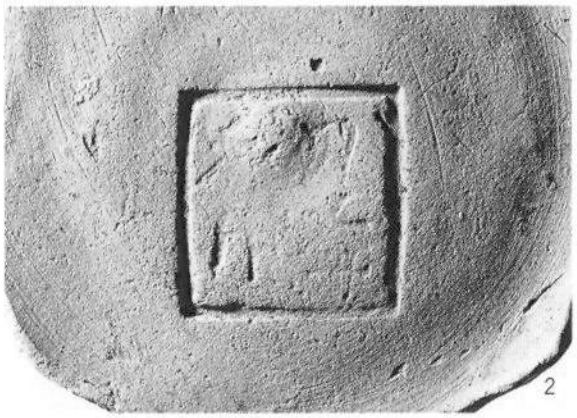
5

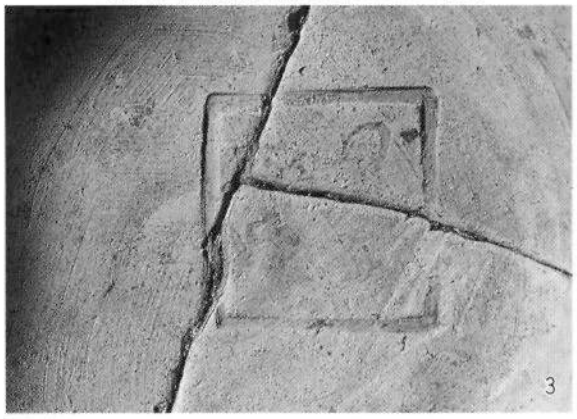

6

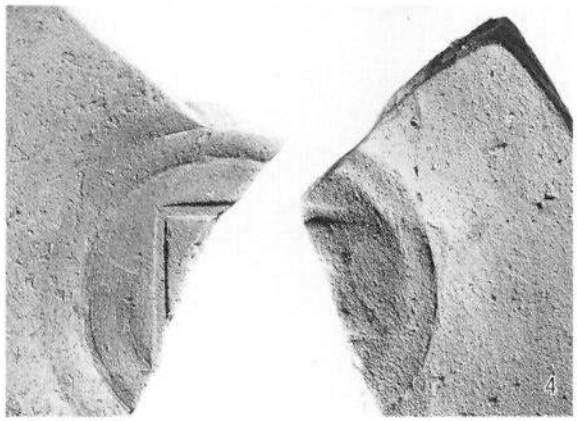
6

墨書土器


1


2


3


4

5

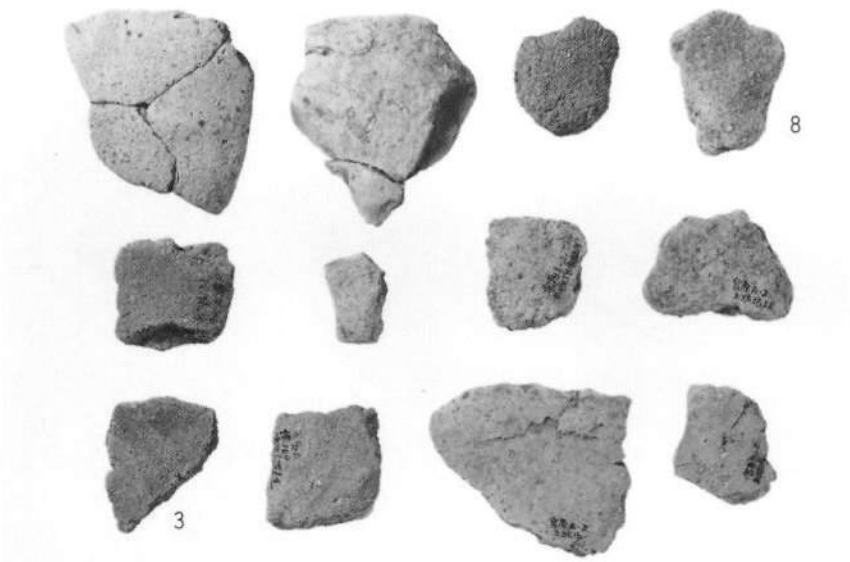
6

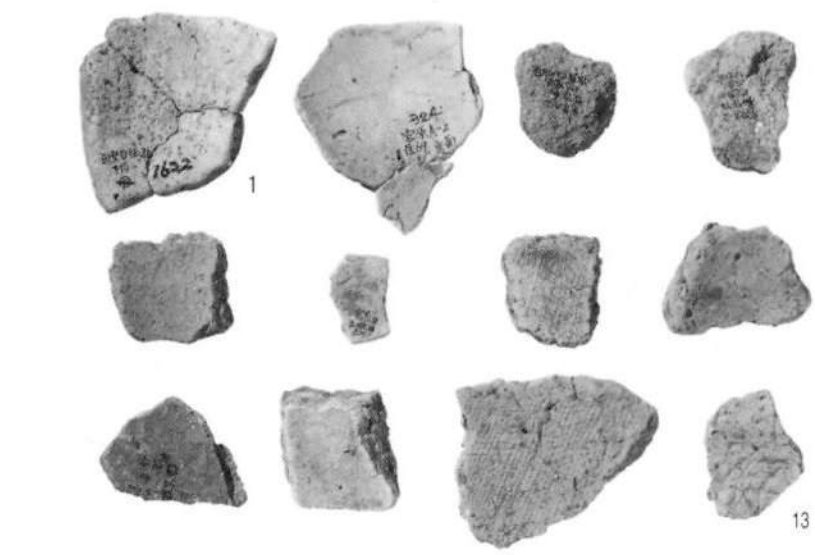
7

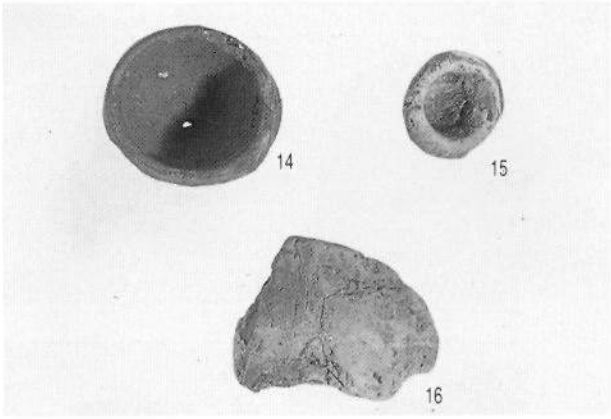
8

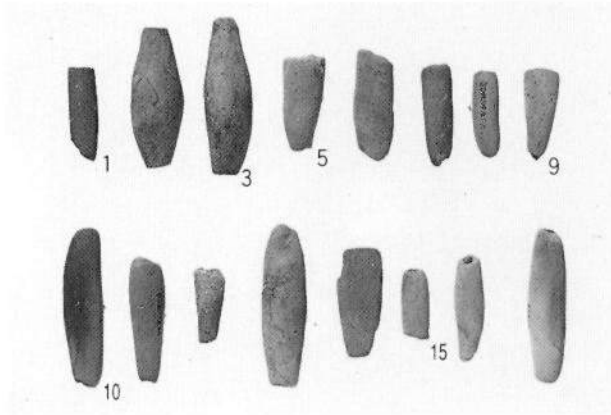
刻印等土器

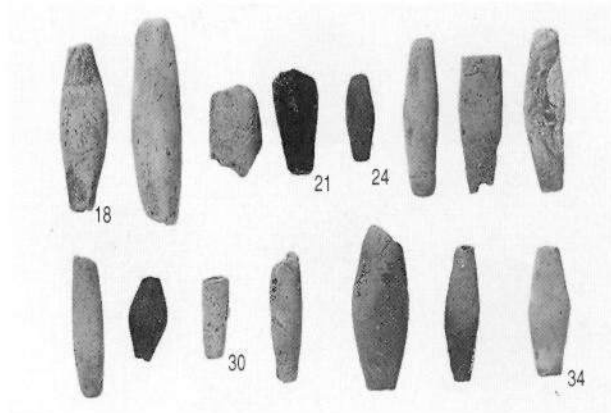
2


8
3

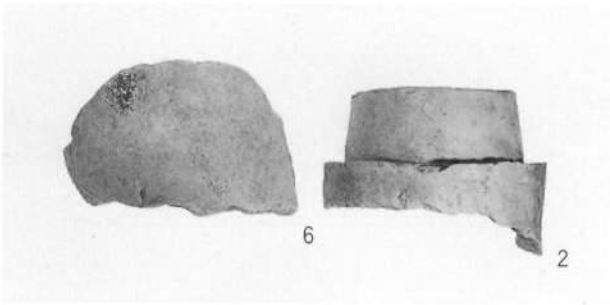

1
13



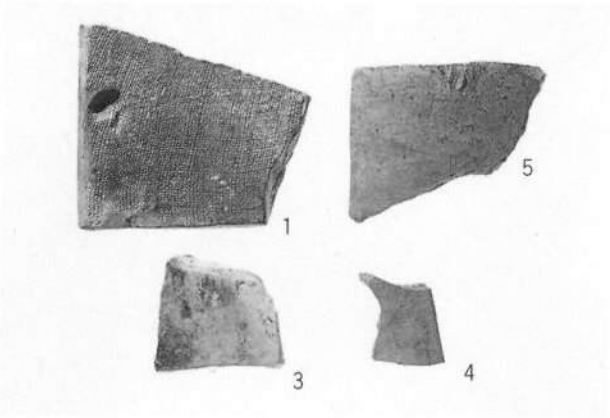




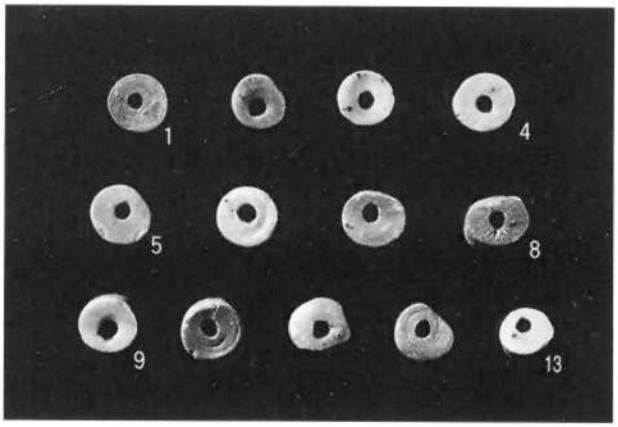
土製品・土錘



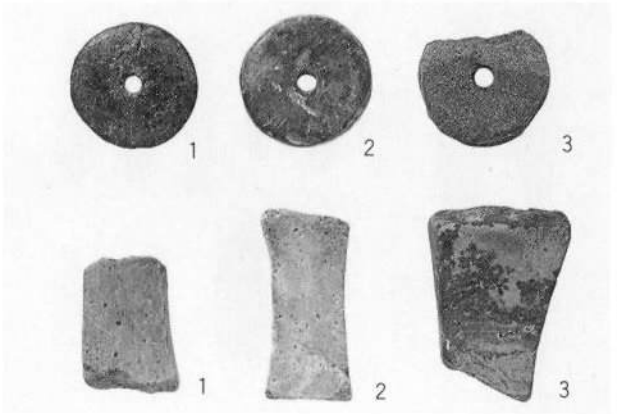
瓦



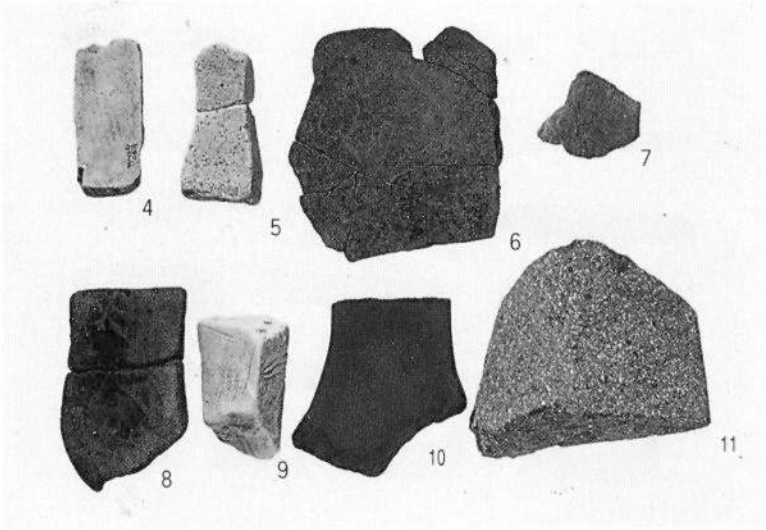
丸瓦と平瓦



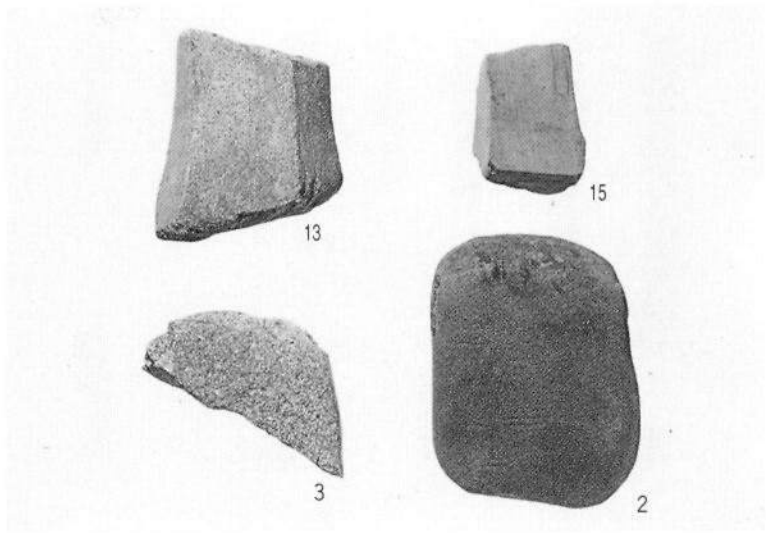
臼玉



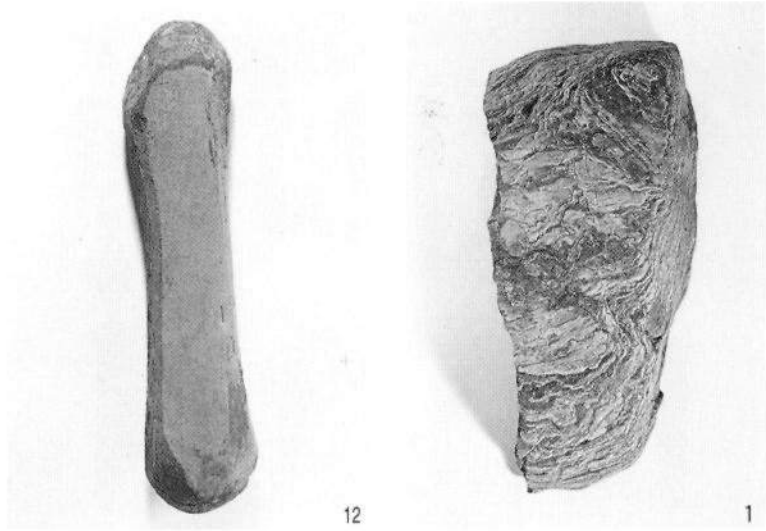
紡錘車と砥石



砥石

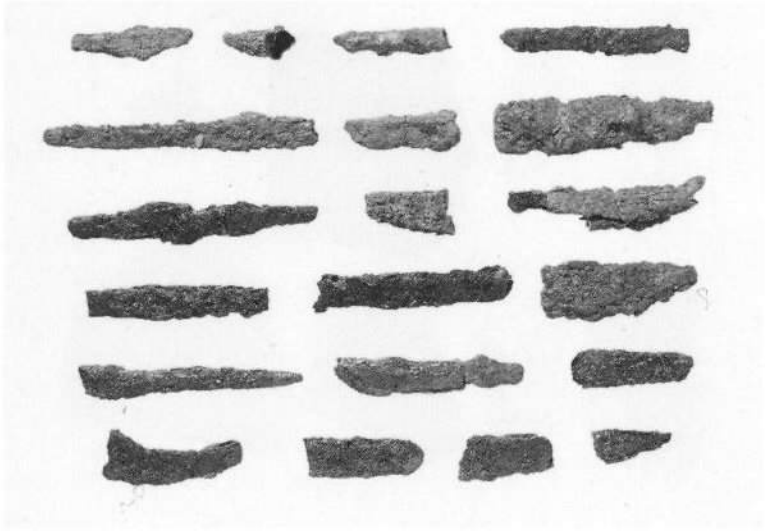


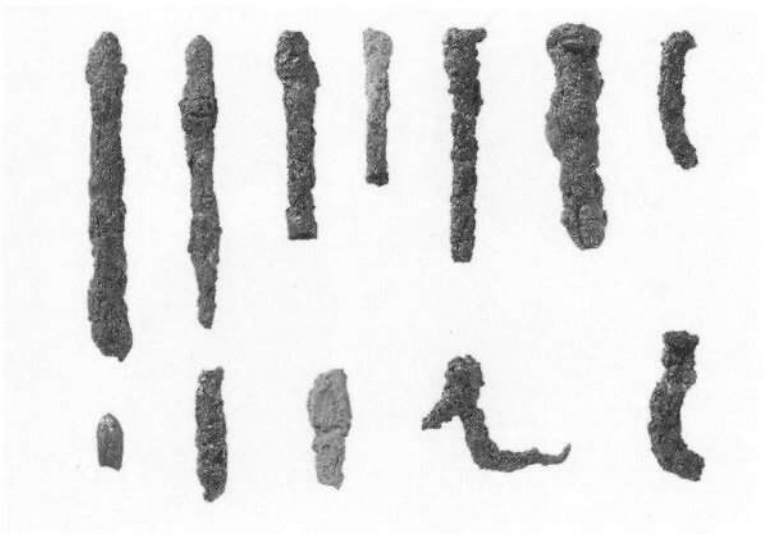
砥石・石製支脚

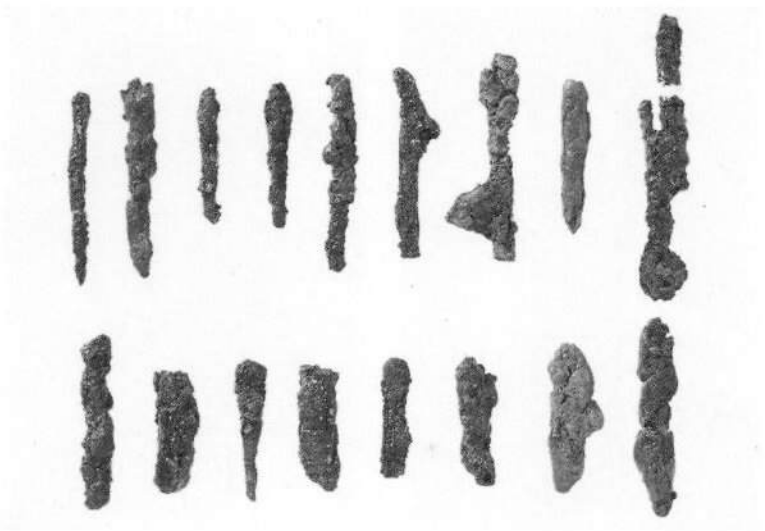


砥石

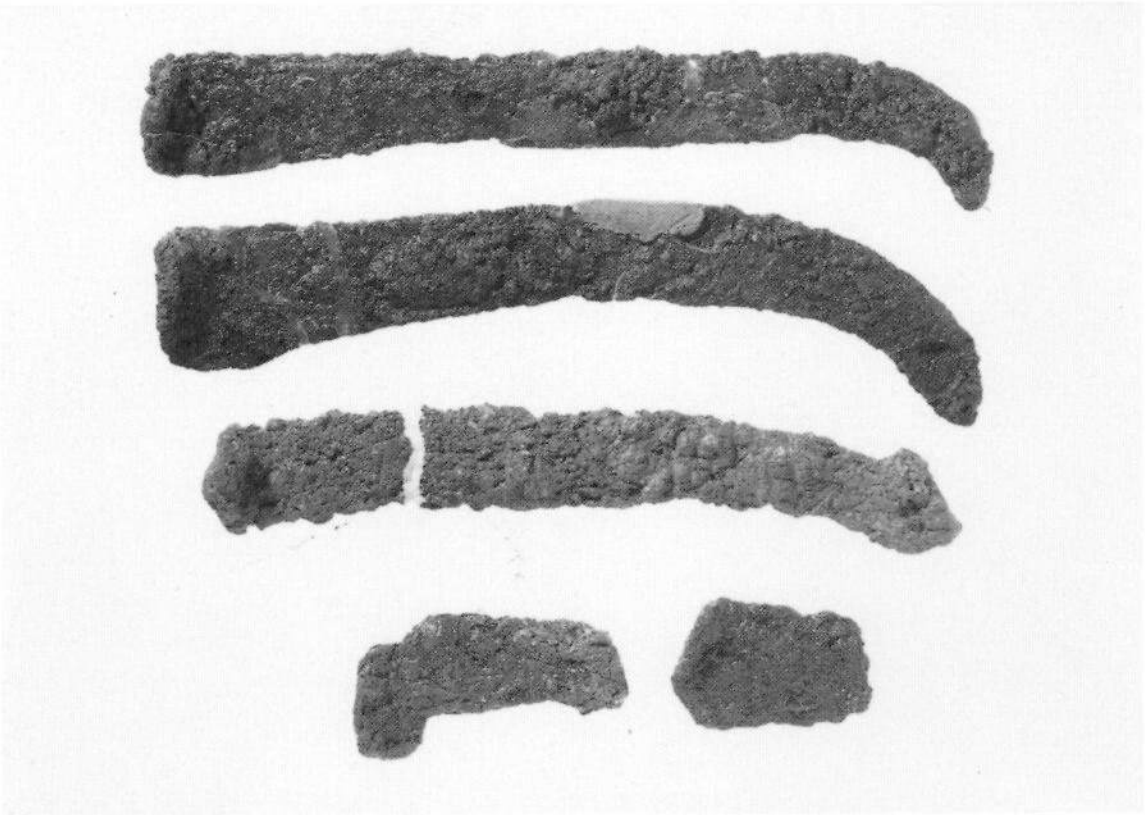
石製支脚

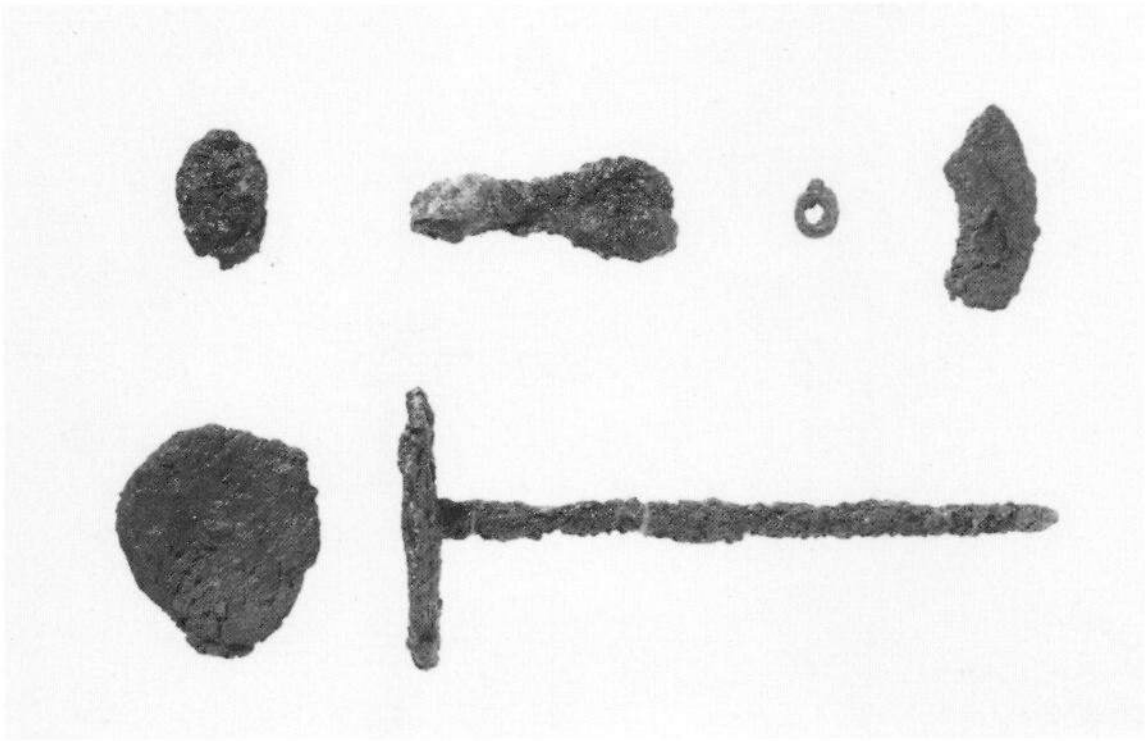






鉄製品





鉄製品

報告書抄録

ふりがな	きゅうしゅうおうだんじどうしゃどうかんけいまいぞうぶんかざいちょうさほうこく
書名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告
副書名	甘木市所在宮原遺跡の調査Ⅲ（AII・D地区）
巻次	—46—
シリーズ名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	—46—
編著者名	武田光正・伊崎俊秋・児玉真一
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812　福岡市博多区東公園7番7号
発行年月日	西暦　1997年　3月　31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
みやばるいせき 宮原遺跡	ふくおかけんあまぎし 福岡県甘木市 おおあざしもうらあざ 大字下浦字 みやばる 宮原	402095	100370	33° 23° 41°	130° 37° 45°	S56～59	約20,000m²	高速道路建設のため

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮原遺跡	集落	7～8世紀	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 井戸 おとし穴 土坑 土壙墓 溝	土師器・須恵器・瓦・鉄製品・石製品 ※墨書土器・刻印土器・焼塩土器・転用硯・土錘	

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード ２１３３０５１
登録年度 Ｈ８	登録番号 ８

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 —46—

平成９年３月31日

発行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園７番７号

印刷　赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門１丁目８－34

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 —46—

付図1　宮原遺跡遺構配置図，立野・宮原遺跡路線図
(上－1/1,250,下-1/2,000)

付図2　宮原遺跡AII・D地区遺構全体図(1/200)

付図1　立野・宮原遺跡路線・宮原遺跡遺構配置図(上1/1,250,下1/2,000)

付図2　實原遺跡A II・D地区遺構全体図(1/200)